

萬國史

三

三

三

澄賓縣尋常
中學校藏書

部類

冊号

記号

冊數

一

二

201
L.K.3
1

今井恒郎編

萬國史



吉川半七壘版

今井恒郎編

萬國史

吉川半七壘版



序

千乘之國攝乎大國之間加以師旅因之以饑饉由也為之比及三年可使有勇且知方也是豈非子路之志乎方今萬國對峙內外多事文治並鑣而進武剋爭衡而馳則審彼我之情勢原治忽之所由可謂時務之最急者矣於是見講明歷史之



亦不可已也。吾友洞津項者有萬國歷史之著洞津學通古今内外加以才思與膽識其以修史自任亦宜矣。雖然洞津之業豈止於此哉。洞津既有三長又富春秋而生於各國爭衡之時其他日演活歷史使民有勇且知方可庶幾也。於是乎言
明治癸巳七月 天台道士杉浦重剛

凡 例

一 本書は尋常中學校及中等諸學校の教科書に適用するの目的を以て編述せり。故に事實の繁簡、編述の體裁は、勉めて教科程度に適合せしめんことを期したり。

一 歴史の事實は同一なりといへども記述の何如によりては讀者の誤解を招くこと鮮からず。殊に歐米人の記述に在りては當に然るへきも我國々民の教科書としては然かすべからざるものあり。君臣の關係、異人種の關係等に於ける記載の如きは其著さみのなり。然れども事實は決して曲筆すべきにあらず。但書法上よ於て微に意を致しよのみ。

一 政治史の主要なること固より論なし。然れども大勢の變遷、人文の進否を知らんには亦社會内部の狀態に通せざるべからず。是故に編者は一時期に於ける政治史の終に於て開化の略史を記述せり。

一 本書は事實を精覈し且其聯絡に意を用ひたるを以て編述の體裁亦自他と異なる所あり。

一 書中一般の年月は勉めて之を吟味し、其古代に屬して明確ならざるものは多數史家

の説に従へり。

一原語の發音には最注意し、皆片假字にて之を書し、人名は縦線を右傍に、地名及其他の固有名詞は縦線を左傍に引き、無形名詞は括弧「」を附し、以て之を區別せり。但國名の人口に膾炙せるものは漢字を以て記せり。

一沿革地圖及技藝沿革圖は、別に一冊子となし以て觀覽に便せり。

一書中本邦及支那を記載せざるは、現今中等教科に於て別に一科として攷究せらるゝを以てなり。編者常に謂へらく、從來の萬國史中、未、眞誠の萬國史(世界史)と稱すべきものあらずと、抑、萬國史は世界の人類(蒙昧未開の人類は例外)を打團し其發達進歩を叙するものに非ずや、然らば則、縱令東西洋を殊にし、人類、種を別にし、開化、質を異にし、而して近時に至るまで直接の關係なく、全般の影響なきも、而も地球を兩分し各特殊の發達をなし來りたるものなれば、單に同一の人種、同質の開化より成れるもののみを取りて萬國史の材料となすは、蓋公平の眼識、適實の記述と謂ふを得ざるべし、而るに泰西史家の手に成れるものは大抵此轍を踏まざるはなし、故に編者は本書に冠するに萬國史を以てすといへども、唯通用の便に従ひしのみにして彼偏見者流の所謂萬國史の

例

義を取りたるに非ず、讀者請ふ寧、歐米史として本書と看んことを。

一本書を編述するに當りて參考に供せし主なる諸書は左の如し

Weber, Lehrbuch der Weltgeschichte. Weber, Weltgeschichte. Schlosser, Weltgeschichte. Kolb, Culturgeschichte. Hellward, Kulturgeschichte in ihrer natürlichen Entwicklung bis zur Gegenwart. Andri, Grundriss der Weltgeschichte. Barnes' General history. Fischer's Outlines of universal history. Rhode, Historischer Schul-Atlas.

凡

明治二十六年七月

編者識す

例

萬國史目次

緒論

第一編 上世史

第一章 古代東洋諸國

總論 第一節 埃及 第二節 バビロニア及アスシリア 第三節
シニディア 第四節 フイニシア 第五節 メディア及波斯 第六節 印度

第二章 古代東洋諸國の開化

第一節 宗教 第二節 政治 第三節 學術 第四節 文學
第五節 技藝 第六節 産業 第七節 社會の狀態

第三章 希臘

總論 第一期 第一節 スパルタの興起 第二節 アスエゾの興起 第二期
第一節の波斯戰爭 第二節 アスエゾの崩 第三節 ペロポネネーナス戰爭 第四節 ス
パータ及スローブズの崩 第三期 第一節 フイリッポ王 第二節 アレキサンダー大王の雄
圖 第三節 アレキサンダー帝國の分裂

第四章 希臘の開化

第一節 政治の發達 第二節 宗教 第三節 文學 第四節 哲學
及科學 第五節 技藝 第六節 社會の狀態

第五章 羅馬

總論 第一期 王政時代 第一節 羅馬府の創建 第二節 王政 第二期
共和時代 第一節 貴族及平民の争 第二節 伊太利統一 第三節 外國征服 第四節 内



第二編 中世史

總論

第一章 シーレメーン帝以前の諸國 第一節 テートン人種の新建國 第二節 東

羅馬帝國 第三節 サラセン帝國

第二章 シーレメーン帝國 第一節 シーレメーン帝 第二節 シーレメーン帝國の

分裂

第三章 ノースメン人 第四章 神聖羅馬帝國 第一節 サクソン王家 第二節

フランコニア王家

第五章 法王權の振起 第六章 十字軍 第一節 東洋の形勢及十字軍の起因 第二

節 第一、二、三、十字軍 第三節 第四以下の十字軍及十字軍の結果

第七章 中世紀に於ける歐羅巴及東洋諸國 第一節 日耳曼、瑞西 第二節 佛蘭西

第三節 英吉利 第四節 伊太利 第五節 西班牙及葡萄牙 第六節 スカンディネヴィア

第三編 近世史

總論

第一期 コンスタンティノープルの滅亡よりウストフリアの條約に至る

第一章 近世史の前驅 第一節 發明及發見 第二節 學藝の復興

第二章 宗教改革時代 第一節 宗教改革及チャーレス五世 第二節 瑞西、丁抹及瑞典に

於ける宗教改革 第三節 ネズァーランドの獨立戰爭 第四節 佛國政教上の爭亂 第五節

テニードル家の英吉利 第六節 三十年戰爭 第七節 宗教改革時代の開化

第二期 ウィンストフリアの條約より佛國革命に至る

第一章 ルイ十四世時代 第一節 ルイ十四世の治世 第二節 ステアート家の英吉利

及革命 第三節 露西亞の興起及北方戰爭

第二章 フレデリク大王時代 第一節 フレデリク大王 第二節 露國女帝カスリーン

二世及波蘭の分割 第三節 ハノーヴァー家の英吉利 第四節 北米合衆國の獨立

第三章 第二期の開化 第一節 文學及哲學 第二節 自然科學(發明及發見) 第三節 宗教及神學

第三期 佛國革命より最近時に至る

第一章 佛國革命 第一節 革命の原因 第二節 ルイ十六世及國民議會 第三節 立法議會及王政の廢滅 第四節 恐怖政期 第五節 監督政治

第二章 ナポレオンの統治 第一節 執政政治 第二節 ナポレオン一世

第三章 最近世史 第一節 ナポレオン一世以後の佛國及其革命 第二節 西班牙及葡萄牙の内亂 第三節 希臘の獨立 第四節 露西亞及土耳其 第五節 伊太利の内亂及其統一

第六節 英吉利 第七節 北米合衆國 第八節 墨西哥及南亞米利加 第九節 日耳曼帝國の再興

第四章 第三期の開化 前期 (佛國革命及ナポレオン時代) 第一節 文學及哲學 第二節 美術 第三節 自然科學 後期 (最近時) 第一節 發見及發明 第二節 科學 第三節 哲學文學及法政學 第四節 美術 第五節 社會制度の進歩

萬國史目次終

萬國史

今井恒郎編

緒論

歴史の定義 歴史の定義に就きては、古來の史家皆多少其見解を異にせざるはなし。然れども現時に至りては、其議論略歸一せるものゝ如し。蓋歴史に記述する所の物體は人間なり、人間の事業及經驗なり。然れども歴史は固より一箇人の行爲をのみ記せず。又人間の起原及本質を論ずるものにあらず。歴史に於て論ずる所は、社會を組織し國家を形成せる人間なり。人間は本是進歩の動物にして、或は村邑を成し、或は市府を成し、以て相須ち相扶くるの團體即社會を成す。而して之が政治組織成るに及びて國家生ず。國家既に生ずれば、則歴史起る。故に既に國家ありて而して歴史なきものは未之あらず。歴史は實に社會の傳記と稱すべし。而して社會一般の經驗を序し、其發達の由る所を詳にするは、亦歴史記述の要務なり。蓋萬物法なきはなく、則あらざるはなし。春往き夏來るも、蟲鳴き風號ふも、皆是一定の因なくんばあらず。社會の事亦然り。單に其皮想を

目観せば、錯雜紛亂せるが如きも、之を熟察せば、則其間自秩然たる法則の存するあるを見るべし。歴史は即其因果の關する所、大勢の趨く所を明かにす。故に吾人は此に約言以て歴史の定義を掲げん。曰く歴史は人間（社會、國家）の變遷進歩を序する所の記録なりと。

歴史の範圍 博く人文の變遷發達を序するは、固より歴史の綱要なりと雖、政府及主權者の公業即外國交戦の如き、又社會に影響を及ぼし、箇人の行爲の如きも、亦歴史上重要な位置を占むるものといはざるべからず。加之社會内部の情態即國民の生活、感情、理想、技藝、發明、産業等の情況に至りては、亦最注目すべき要件たり。而して歴史に二様あり。一を各國史と曰ひ、一を萬國史と曰ふ。各國史は其國の特質を發揮し、之が内治の情態、外國の關係等を詳にす、然れども萬國史にありては、其旨趣大に之と異れり。蓋萬國史は列國を打して一團となし、文明に關する全人類を總括し、以て其進歩、存在及交互の關係を叙す。故に幾多の人民、諸方に存在すと雖、一般社會の開明上に毫も關係を有せざるものは之を記載せず。是萬國史の各國史と異なる要點なり。

史體の變遷 歴史の記述は、今日に至るまで數多の時期を經由し、其體裁亦數、變遷せ

り。其初に當りては、多くは思惟斷定を待たず、小説詩歌の如き考證を闕きたる物語を以て材料となせり。故に其説く所、奇々怪々、小説の體裁を脱せるもの鮮し。之に次きて來るものは、記臆的歴史にして、時代年月より君主の名等に至るまで、記臆に存したるものを蒐集羅列す。而して其記する所は、概王朝の系譜、戦争の事項、或は一二豪傑の事業行爲等に過ぎず。日本、支那舊來の歴史、西洋中古以前の歴史は其適例たり。近世に至りて歴史記述の方法大に進歩し、彼此觀察の要點を異にするに至れり。即彼にありては帝王及戦争を以て主眼となせども、此にありては人文の發達、社會の進歩を以て基礎となせり。

歴史の補助學科 歴史上に記載すべきものは、固より確實なる證據に據らざるべからずと雖、彼太古の事跡の如きは、漠として稽ふべからざるもの多し。是を以て已むを得ず、古代の口碑及詩歌の如きものを取て之が材料となし、礫中玉を探るの困難ありしが、近世に至りては、人種學、博言學、古物學等盛に起るあり、之が爲に矇昧に蔽はれたる古代史、忽ち晴明の觀を呈せしもの少からず。例へば彼埃及、ニノウ、バビロン等より發見したる古物研究の結果は、大に史學の進歩を促したるが如し。而して又歴史の研究上

離るべからざるものあり、政治地理學の如き是なり、或は外國の侵略に於て、或は各國競立の時に當て、之が範圍及其沿革等に通曉せずんば、決して精密に歴史の研究を遂ぐることを能はざるべし、歴史は又天然地理學に於て其關係の密なるを見る、蓋世界の各州にありては氣候及地勢に大差ありて、人民の性質、開化の發達に大關係を有すればなり、例へば極寒極暑の地に在りては、富有及永久の開化を見ること能はざるが如く、或は河畔海濱の人民の夙に商業に従事し、平原の人民の常に能く國家を定立せしが如きは、歴史の研究上注目すべき要點なり。

人間の起原及種族の區分　世界の開闢、人間の起原に就きては、古來唯太古の傳説即聖經の記する所を信憑せしに過ぎざりしが、近世科學の進歩するに従ひて、大に舊來の迷霧を掃蕩せり、然れども人間は果して何れの時に發生せしやは、未之を知ることを得ずといへども、而も人種の起原に就きては、概二論あるが如し、一を一族論として、一を多族論とす、前者は人間の起原を男女一對に歸し、後者は之に反して幾多の異族、各地に發生せりとなす、近年ダーウ・ン (Darwin) 出でしより、一族論大に勢力を逞ふせり、其説に曰く、世界の人間は、黒人たると白人たると、或は開化せると野蠻なるとに關せず、身

體の構造及心方の作用は概して一致せり、加之凡ての人種は、體軀容色の異なるにも關せず、其結婚するに當りては、混合の種族を生ずることを得、是各人種其祖を一にする所以なりと、夫或は然らん、然れども兩論の是非は茲に之を決するの要なきなり、人種の區別に關しては、亦人間の起原と同じく、學者各其見を異にせり、フリチ・ート (Pritchard) は之を分ちて七となし、キ・ーヴ・エ (Carian) は二となし、ブル・ーメン・バ・ハ (Blumenbach) は五となし、ヒ・ケリング (Pickering) は十一となす、然れども世界の二大人種と稱すべきものは、コーケン・ア・ン (Caucasian) 則白色人種、モンゴリアン (Mongolian) 即黄色人種、エス・オ・ヒ・ア・ン (Ethiopian) 即黒色人種にして、其他馬來人種及亞米利加人種等の中間人種あり、コーケン・ア・ン 人種を分ちて三族となす、一をアーリアン (Aryan) 族、即インド・ユーロ・ヒ・ア・ン (Indo-European) 族と曰ふ、印度人、波斯人、希臘人、羅甸人、ケルト人、日耳曼人(或はテ・ート・ニ・ック人)と云ふ、スラヴ・ニ・ア・ン 人等之に屬す、一をセミテ・ック (Semitic) 族と曰ふ、ヘ・ア・リ・ア・ン (Hebrew) シア人、アスシリア人、バビロニア人、シリア人及亞刺比亞人等之に屬す、一をハミテ・ック (Hamitic) 族と曰ふ、埃及人及亞非利加北岸の人民之に屬す、モンゴリアン 人種は、日本人、支那人、土耳其人、匈牙利人、フィン・ス・人、ラップ・ス・人、エスキモー人等なり、エス・イ・オ・ヒ・ア・ン 人種は、亞非利

加人及亞米利加、西印度等の黒人なり。而して歴史上に於て重要な部分を占むるものをコーケシアン人種とし、モンゴリアン人種とす。彼黒人種以下の如きに至りては、史上殆ど之を記するの價值なし。我邦及支那の如きも、近年西洋諸國と關係を生ずるに至るまでは、歐洲學者の所謂萬國史上の國民たらざりしなり。然れどもモンゴリアン人種は、古代に當りて世界の各地に散在せるを見れば、其勢力の甚盛なりしを想察するを得べし。加之支那の如きは、其開化歐洲諸國に比し、早きこと幾千年の以前にあり。而して我帝國の如きも、其開明又決して後れたるにあらず、東天自一種の文華を揚げ、以て今日に至り、自今以後、萬國史上重要な位置を占むるに至るや、蓋測るべからざるものあらん。

歴史以前の時代 歴史は國家を組織せる人民の記録なれば、歴史以前の時代は、固より其研究すべき所にあらずと雖、而も人間は如何にして社會を成し國家をなすに至りたるやを知ること、亦要なしといふべからず。近來學者の唱ふる所に據れば、人間の經驗進歩は、歴史時代に至るまで二期を経たり。曰く石器時代、曰く青銅器時代、曰く鐵器時代是なり。石器時代の始にありては、武器家具等の製作甚粗にして、人は洞穴に住

み獸皮を着たりしが、漸く進んで骨角等の彫刻も、稍精良に趣き、家畜を養ひ、麻布を織り、陶器を製し、又耕作の道を知るに至り、青銅器時代に至りては、銅錫の混合物を用ひ、切斷器、裝飾品等を製造し、萬般の事物大に進歩せり。鐵器時代に至りては、其進歩最著る也。此の如く二期の區劃ありと雖、決して精密に分界せられしにあらず、青銅器時代の後に至りても、猶石器の用ひられたるものありと知るべし。

上古人民生活の状態 上古にありては、人民は其住居の殊なるに従ひ、生活の情態即業務を異にせり。豐饒なる牧場を有する荒野の住民は、牧畜を以て業務となし、ノーマド (Nomad) と稱する遊牧の種族となり、其張幕及羊群を率ゐて轉々推移せり。山地に住する人民は、身を獵業に委するを以て、不識不知の間、其性情粗暴となり、常に爭鬪をなすを以て樂となすに至り、之に反して平地に住する人民は、農業及工業を以て其業務となす。而して農業を營む人民は、又併せて牧畜をも營み、漸々己の土地を共同の土地より區別し、規約を設けて其所有の土地、小屋及羊群等を安全にし、以て社會の基礎を成せり。又便利なる海岸に住む人民は、其愈々發達繁殖するに従ひ、航海及貿易に従事し、富財を殖し、以て漸く市府を成すに至る。而して平地及水利の便ある土地の人民は、

陸地貿易を営めり。陸地貿易の擴張せるものは、亞細亞及亞非利加の内地に於ける商隊貿易なりとす。其始貿易を爲すや、貨物を交換せしが、漸々其不便を感じ、高貴なる礦物に一定の價值を印記し、以て交換の媒介となすこと思想を起せり。蓋人間の發達に最必要にして且有力なる槓杆は貿易なり。貿易は人間相互の交通を媒し、其見聞を博むること甚大なればなり。

歴史時代の區分 人間の進歩は幾千年の古代よりして今日に至るまで、連綿として間斷あることなし。而して歴史は其發達進歩を序するものなれば、又間斷あるべからざるや言を俟にす。然れども人文の進歩、亦自段落の存するあり。是歴史の記述に於て、之を區分するの便なる所以なり。其區分に就きては、史家或は二となし三となす、皆別に深き理由の存するあるにあらず。然れども萬國史は遠く其源を上古に發し、滔々流れて羅馬帝國に至り、古代人民の動機此に歸し、而して日耳曼民族新に勢力を得て、以て現時歐洲諸國の基を爲す。是社會大勢の一段落にして、古代史近世史兩分の説、實に此に基く。而して羅馬帝國の滅亡以後、之と比するの大段落なしと雖、十五世紀の終よりして十六世紀の始に至り、歐洲の開明は一躍長足の進歩をなしたれば、又此に一段落を設くるを

以て便なりとす。故に吾人は二分説に従ひ、本史を區分すること左の如し。

第一編 上世史 上古より西羅馬帝國の滅亡に至る(紀元四百七十六年迄)

第二編 中世史 西羅馬帝國の滅亡より コンスタンテノブルの滅落に至る(紀元千四百五十二年迄)

第三編 近世史 コンスタンテノブルの滅落より現時に至る

第一編 上世史

第一章 古代東洋諸國

總論

東洋諸國の地理 亞細亞は西、烏拉爾山 (Ural) 裏海 (Caspian Sea) 及黒海 (Black Sea) を以て天然歐羅巴と限り、東、太平洋に臨み、北、北氷洋より南、印度洋に達する廣漠なる地を包括せり。其間ヒンドーク・シュ (Hindookusch) 山脈に因り、東西二部に分れ、東部には日本、支那の開明國ありて、自特殊の發達を爲せり。西部及南部には、印度 (India) 彼斯 (Persia) バビロニア (Babylonia) アシリア (Assyria) ジャーデア (Judaea) フェニシア (Phoenicia) 及埃及 (Egypt) の諸開明國あり、即本編に於て記する所の古代東洋諸國是なり。埃及は其地亞非利加に屬すといへとも、其開化の他の東洋諸國と類似せるを以て、古代に於ては之を東洋に編入するを常とせり。

天然の關係 西南亞細亞の地たる、氣候温暖にして土壤膏腴、加之河海の便に富めるを以て、最人類の發達に適し、社會の結合をして容易ならしむ。是其夙に開明國の興起

せし所以なり。彼メソポタミア (Mesopotamia) 諸國のユーフラテス (Euphrates) 及タイグリス (Tigris) 河畔に於ける、印度のインダス (Indus) 及ガンヂス (Ganges) 河畔に於ける、埃及のナイル (Nile) 河畔に於けるが如きはなり。蓋世界最古の開化は、常に天然利便の地に起ればなり。且當今の歐羅巴人民の祖先は、此地方より移住せしと、其古代開化の此地方より傳播せしもの多きとによりて觀れば、歐羅巴の開化は、遠く亞細亞に濫觴せしものと云ふべし。

開化の性質 此の如く古代東洋諸國の開化は、本、天然の關係によりて發達せるを以て、其開化の性質も、亦天然に傾き、粗大彪雜かるを免れず。且宗教の觀念は、東洋諸國民に最早く發せし所にして、宗教は實に東洋開化の啓發者たり。埃及の建築術、バビロニアの天文学、アッシリアの彫刻術、印度の文學等、皆其影響を受けて發達せしにあらざるはなし。加之世界有力の宗教は、皆其源を亞細亞に發せり。佛教の印度に於けるが如き、又後世基督教のヒールに於ける、回々教の亞刺比亞 (Arabia) に於けるが如きはなり。而して古代東洋に於て宗教の影響を受け、害悪なる結果を讓せしものは政治なり。僧侶の專權、君主の獨裁、皆之によりて起り、人民は殆ど二者の奴隸となりて抑壓の下に

呻吟せり。東洋開化の永續せずして、或は内部より衰頹し、或は外國有力者の爲に破壊せられ、盛衰興亡の相仍りしもの、職として之に由るなり。

第一節 埃及 (Egypt)

土地 埃及は古代に於て亞細亞の一國に算入せられ、ナイル谷中の一狹小國にして、其中は僅に二哩乃至十哩(地理上の)に過ぎず。此國富饒の原因は、一にナイル河に在り。ナイル河なかりせば、近傍の沙漠と同しく、磽确なる瘠土にして止まんのみ。故に希臘のヘロドタス (Herodotus) は此國を自して「ナイルの賚」(The gift of the Nile) といへり。

ナイル河は白ナイル(幹流)青ナイルと稱する二流の湊合より成る。白ナイルは遠く其源を赤道下の高原の大湖より發し、ヌビア (Nubia) に至り、東方アビシニア (Abyssinia) の高原より發する所の青ナイルと合し、諸溪流を匯集し、或は沙漠を過ぎ、或は連山の間を經、數多の瀑布となり、埃及の國境サイイ子 (Sennaar) に達し、流勢平大となり、溶々として北流し、メムフィス (Memphis) を過ぎ、二大派數小流に分れて地中海に注ぐ。此二大派の間、沃野相彌り、其形三角狀をなすを以て、希臘人は之をデルタ (Delta) と稱せり。蓋其地形希臘の文字 Δ に似たるが故なり。此河は年々霖潦の爲に汎溢し、兩岸の地を浸すこと六月中旬より九月中旬に至る。水量の最増加

せしときは、平水より凡二十尺に上ることあり、水退けバ膏土堆積して地味を一變するを以て、唯播種するのみにして穀粟豊熟す、埃及の「古代世界の穀倉」の名を得たる、豈偶然ならんや。

埃及國はナイル河の流域に沿ひ、之を三部に區分す。上埃及(エトロープス *Upper Egypt*)を以て首都となす。中埃及(メムフィス)を以て首都となす。下埃及(希臘人の所謂デルタにしてセイヌスのベリ・シナム *Pelusium* アレキサンドリア *Alexandria* 等の府あり)是なり。

人民 此國の人民は三箇の種族より成る。深紅を帯ひたる白人、黑人及褐色人は是なり。褐色人は固有の人民にして、東方亞細亞人種の移住するに先ち、此地に占居し、耕作及牧畜を以て業となせり。黑人は南境エス・オビア *(Ethiopia)* の人民にして奴隸の役に從へり。帶紅白人は即、東の方亞細亞より移住せし所の人種にして、土民と混合し埃及人と稱せり。史家之をハミテ *(Hamite)* ク族と稱し、コーケシアン人種の變體に屬す。最高の階級にありて埃及の國性を代表せり。

史原 古代の史家は、埃及の開化を以て南境エス・オビア國より起りしものとせども、近代に至りて、其開化は南方よりナイル河を下りしにあらすして、北方より之に遡りしものなること判然たるに至れり。現世紀に至る迄、吾人の埃及事情を知るを得しは、主

として歴史の祖たる希臘のヘロドタス、シシリ *(Sicily)* のディオドーラス *(Diodorus)* 及埃及の僧マチソー *(Manetho)* の記述に因りしが、近世に至り、古代埃及の建築物及石碑等に彫刻せる象文 *(Hieroglyphics)* の解釋せらるゝに及びて、此最古開明國民の歴史は益明瞭となり。

ヘロドタスは紀元前第五世紀の中葉埃及に入り、精密なる考察をなし、且其僧侶につき穿鑿せしが、僧侶往々妄誕を以て之に答へしと云ふ。ディオドーラスはヘロドタスの後凡五百年を経て埃及に遊び、又現今既よじ逸せる希臘の諸書に因りて、埃及の事情を記せり。埃及の僧マチソーの紀元前三世紀に記述せし篇、今尙存するものあり、埃及諸王の名を探究せしは、實に此史家なり。往時は人皆マチソーの記する所を以て、信を置くに足らずとせしが、近時の發見は、其言ふ所と多く符合せり。

建築物及石碑等に彫刻せられたる象文の一たひ世人の目に觸れしより、學者競ひて之が解釋に努力せり。千七百九十九年ナポレオン *(Napoleon)* の埃及を征せしとき、其工兵偶、ナイル河口に近きロセ・タ *(Rosetta)* の堡塞より一石机を發掘し、説明に好便なる據點を得たり。此石は三種の文字を刻し、其最下なるは希臘文字なり、之に由りて他の二種、即象文及通俗文字 *(Demotic)* の發見以來名く之を解釋せんとし、久しき研究の後、遂に千八百二十二年に至り、布臘語と同意義にしてトラー *(Ptolemy)* 王の頌德碑なることを讀み得るに至れり。是實に

シヤムホリオン(Shamoullion)の功なり。次で象文は唯書文字たるのみならず、一種の音文字なることを決定するに至れり。

吾人は前陳したる數多の考究に由り、埃及開化の起源甚古きことを知る。史家ヘロドタスは措て論せず、夫シテア人の到着せし時も、埃及は既に全く開化し、凡ての状態殊に技藝の如きも大に發達せしを見る。故に埃及古代開化の起源は、聖書に所謂世界の最古より遙に古きものといふべし。

史期の區分 埃及王朝の起原は、未明瞭ならず、或は紀元前三千八百九十二年とし、或は四千一百五十七年とし、或は五千七百二年となせり。然れども今第四王朝の時、數多の尖塔(Pyramid)の建築せられたるより見れば、埃及の開化は、遅くとも今より五千年以前に存在せりと考へて大差なかるべし。古代埃及の歴史は、通常之を分ちて三期となす、其間王朝の興廢凡二十六次ありしと云ふ。第一期は上古より紀元前二千八十年に至り、第二期は紀元前二千八十年より千五百二十七年に至り、第三期は千五百二十七年より千二百二十五年彼斯人の征服に至る。

第一期 或は之を舊王國時代と云ふ。埃及最始の建國は、デルタの近傍にありて、メムフィスを以て首都となす。ミーネズ(Menes)王の創建する所なり。(紀元前二千七百年頃)是實にメムフィス王朝の始祖なり。此王朝中最有名なるを第四王朝キーフィー(Kheops)希臘人はキーオプス(Cheops)云ふ)王及カイフラ(Khafra)王となす。ギーツイー(Cheops)に於ける高大なる尖塔の建築は多く此時代にあり。第六朝の王ペピ(Pepi)に至り、始めて兵を南方に出し、ヌビアを征服せり。メムフィス王朝は六朝にして終を告ぐ。メムフィス王朝の衰ふる時に際し、上埃及に於て一國起り、ヌーアスを以て首都となす。ヌーアス王朝の盛なるに及び、遂に兩國を合一せり。方尖石碑(Obelisk)は多く此王朝の時に建築せられたり。アメリムハト(Amenemhat)三世はミリス(Moeris)湖を穿ち、ナイル河の水を引き以て灌漑に使せり。

第二期 ヌーアス王朝の末に當り、國家の分裂せるに乗じ、セミテック族の遊牧人民、北方シリア(Syria)及北亞刺比亞の地方より侵入し、下埃及を征服し、上埃及を朝貢せしむ。即中王國にしてヒクリス(Hyksos)牧王の年期とす。而して凡五百年間繼續せり。ジテア人の埃及に來りしは、此牧王の朝なりといふ。ヌーアス人は多年戰爭の後、遂に牧王を驅逐して國の獨立を維持せり。

第三期 牧王驅逐の後は、之を新王國と稱す。此よりしてヌーアスは再埃及の首都とな

り全國を管治せり。第十八、十九王朝の時は實に光榮の極に達せり。トトミニス(Thothmes)一世は始て亞細亞遠征の端を發し、トトミニス二世(埃及のアレキサンダー大王)に至り、其版圖益大となり、西南亞細亞の主權を握れり。セテ(セト)一世、ラムシニス(Tamnos) 紀元前千三百八十八年より千三百二十二年、希臘史家の所謂セソストリスの大王(大王)二世父子相續き王位に登り、メリホタミア、アスシリア及カルデア(Chaldaea)等を侵略し、又南エシ、オヒアを朝貢せしむ。此等の諸王は、唯外戦に於て其功を著はし、のふならず、又多く宮殿堂宇を建築し、其宏壯美麗を極めしことは、今日猶存せる碑像等の遺物によりて知るを得べし。ラムシニス二世の死後、埃及は又漸く衰頹の兆を顯はし、第二十王朝以後に至りては、外寇内亂相繼ぎ、國勢日に縮れり。紀元前七百三十年の頃、エシ、オヒア人は埃及を侵略し、其王シヤバク(Shebak)凡五十年間之を支配せり。アスシリアの起るに及びて、其王アスサーバニバル(Assurbanipal)埃及に侵入し、エシ、オヒア王朝(第二十五王朝)を滅し、(紀元前六百七十二年)十二の方伯を置きて全國を管治せしむ。方伯の一人セイスのサムメテ、カス(Pannuchus)アイオニア(Ionia)及カリヤ(Karia)等の兵力を假り、アスシリアの羈絆を脱し、又他の方伯を攻て之を滅し、遂に埃及の主權を掌握せり。第二十六王朝、紀元前六百五十五年)王は希臘人及フ、ニシア人の下埃

及に植民することを許し以て相連合せり。其子ネコ(Necho)繼ぎて位に即き、侵略してユフレイテ、エズ河の近傍に至り、バビロニア王子フカド子、ツ、(Nebuchadnezzar)の戦ひ敗績して還れり。王は商業を奨励せんが爲に大に運河を開鑿し、地中海(Mediterranean Sea)と紅海(Red Sea)とを連結せんことを企て、又フ、ニシアの舟夫をして亞非利加の南端を廻航せしめたり。紀元前五百二十五年サムメテ、カス王の時、波斯王カムビセス(Cambyses)の征服する所となり、波斯の一屬邦となれり。紀元前三百三十二年に至り、アレキサンター大王(Alexander the Great)の版圖に歸す。王海濱に新都を建て、アレキサンドリアと稱し、以て文學商業の中心となせり。王の死後凡三百年にして、又羅馬の郡縣となれり。

第二節 バビロニア及アスシリア (Babylonia and Assyria)

土地及人種 西南亞細亞の二大河ユフレイテ、エズ及タイグリスの流域に沿ひ、相繼ぎて國を建て、古代西亞細亞の歴史に於て著るべき影響を及ぼせる國あり。バビロニア及アスシリアと云ふ。蓋此兩河の間は、土地肥沃にして五穀豐熟し、且兩河の便により波斯灣に臨めるを以て、從ひて外國との交通も夙に開けたり。是此地方に游牧せる人民の中央亞

細亞の人民より夙に開化せし所以なり

兩河の地方を大分して六部となす。第一、アーメニア (Armenia) は小亞細亞 (Asia Minor) と裏海との間にある山國にして、兩大河の發源する所なり。第二、メソポタミア はアーメニアの南方、兩大河間の高地なり。第三、バビロニア はメソポタミアの南方、兩大河の下流に狹される肥沃なる低地なり。第四、カルデア はメソポタミアの南方、ユーフレイテ、ユーフラテの河の下流より西方沙漠に亘れる地方なり。第五、アスシリア 本部は中部タイグリス河より東ツ、トグロス (Taurus) 山に至るの間の地なり。

中部メソポタミアの豊饒なる地方に於て、往古は種族の分明ならざる游牧人民住せり。今日此人民を呼ひてアカド (Akkad) 或はスメル (Sumer) と云ふ。然れどもカルデア人 (バビロニア人) の東方エラム (Elam) の高原に起り、ユーフレイテ、ユーフラテの下流を経て、此地に移住せしより、遂にセミテ、ク族民の住する所となれり。

史原 バビロニア及アスシリアの歴史は、近世に至るまで十分に確知することを得ざりしが、近世ニネツ、ニ (Ninoveh) 及バビロン (Babylon) 等の墟趾の發掘せられしより、吾人は略バビロニア及アスシリアの歴史を考ふることを得たり。

此二國を圖して聖書の記せる所は、未其歴史及内部の状態を知悉するに足らず、希臘の史家ヘロドタスのアスシリア史及バビロンの僧ベローサス (Herodotus Alexandria) 大王の時代のバビロン史も、今の既に亡逸して、僅に断簡片章を存するのみ、然れども近世ボタ (Botta) 及レーアード (Le Clercq) のニネツ、ニ及バビロン等の墟趾を發見せしより、其宮殿堂塔も世界の耳目に觸るゝに至れり、且之を發掘するに際し、多くの塔壁に刻せる楔狀文字 (Cuneiform letters) を發見せり。此發見は埃及の發見に於けるが如く、歴史探究上必要なる泉源となれり。

史期の區分 セミテ、ク族民は此地に移住してより、相更代して三王國を建てたり。其初めて起りしものをカルデア (Chaldeae) 國と云ひ、次に起りしものをアスシリア國と云ひ、最後のものを新バビロニア國と云ふ。

カルデア國 カルデア王國 (舊バビロニア國) の歴史は、甚曖昧にして之を詳知することを得ずといへども、其開始は凡紀元前二千年頃 (ベローサスの記する所によれば) なりしと云ふ。開國後數百年間繼續せしが、紀元前第十三世紀の中葉に至り、國運衰頹し、アスシリア國起りてメソポタミアの主權を握るに至れり。

アスシリア國 アスシリア王國の歴史は、紀元前凡千二百五十年の頃より始る。アスシリア人はタイグリス河の上流にある古代バビロニアの植民なりしと云ふ。蓋其文字及宗教の相同

しきを以てなり。都城ニネツ、一を建設してより、國運次第に進み、遂にバビロニア國を凌駕し、獨立して一大國となれり。アスシリアの歴史は之を二期に區分す。前期は其獨立よりテ、グラスヒリサー (Tiglathpileser) 二世の帝國建立(紀元前七百四十五年)に至り、後期はテ、グラスヒリサー 二世よりニネツ、一の滅落(紀元前六百六年)に至る。前期に於てはテ、グラスヒリサー 一世(紀元前千百三十年頃)の時、大に四方を征服せしが、其後に至り國勢衰へバビロン獨立せり。テ、グラスヒリサー 二世(紀元前七百四十五年)立つに及びて、其版圖を恢復し、又大に四方を征し、シリアの海岸より埃及に及へり。後期此に始る。其子シャルマニサー (Sardanapal) 四世に至り、フ、ニシアの大半を略し、イスラエル (Israel) を蹂躙せり、(紀元前七百二十年) サーゴン (Sargon) セムナキリフ (Sennacherib) 相繼ぎ四方を經營し、其嗣アサーハドム (Assurbanipal) 一年)に至り、全く埃及を征服せり。(紀元前六百七十二年) アサーバニバル (Assurbanipal) (紀元前六百六十八年)の世はアスシリア帝國極盛の時代なり。其盛時に當りては、バビロニア、メデア (Media) フ、ニシア、パレスタイン (Palestine) 亞刺比亞、埃及の大半、皆朝貢し、西亞細亞の大帝國となれり。版圖此の如く廣大なりしと雖、本、小邦の聯合なるを以て、國力固より微弱なるを免れず。是を以て其統御の間、反亂相繼ぎ、遂に紀元前六百〇六年

メデア及バビロニア人の爲に襲撃せられ、壯麗なるニネツ、一の都城も破壊せられて、今は空しく其墟趾を存するのみ。

新バビロニア國 新バビロニア王國はナボホラ、サー (Nabopolassar) 王の時に當りて、メデア

王 シャキサリス (Cyaxares) と共にアスシリア國を滅し、再獨立國となれり。ナボホラ、サーに次ぎ、

王位に登りしものをネフカドチ、ツ (Nebuchadnezzar) とす。ネフカドチ、ツ (紀元前六百四年より

五百六十一年まで)

は埃及王子 コと戦ひ之を破り、又フ、ニシアを征服し、ジュデアを滅し、其人民を虜にしバビロンに送れり。(紀元前五百八十六年) 王は嘗に征戰に於て著名なるのみならず、土木の事業に於ても、亦大に名聲あり。水道溝渠を作り、バビロン城を増築し、其規模を擴張し、廻すに胸壁を以てし、其中に宮殿、懸園 (Hanging garden) を築き、橋梁をユーフレ、テイ、ニス河に架む。大にバビロンの光榮を増せり。其後四王相繼ぎしか、國力日に衰へ、紀元前五百三十八年ナボネ、テイ、アス (Nabonidus) の時、遂に波斯王 サイラス (Cyrus) の爲に滅されたり。ニネツ、一の落城を距る、僅に六十八年なり。是に於てメソポタミアの王國、全く跡を史上に絶つに至れり。其後凡二百年を経て、此地方はアレキサンダー 大王の版圖に歸せり。

第三節 ジュディア (Judaea)

土地及人民 小國を以て普及著名なる歴史を有する。未ジュディア國の如きはあらざるなり。ジュディアは初カナーン (Canaan) と稱せられしが、後パレスタイン (Palestine) と名けられたり。西は地中海に瀕し、北はレバノン (Lebanon) 山を限り、東及南はシリア及亞刺比亞に接せる一小國なり。ジュディア人は又ヒーフルー (Hebrew) 人或はイスラエル (Israel) 人と云ふ。セミテック族民なり。アブラハム (Abraham) といへるもの、紀元前二千年の頃、カルディアの故居を捨て、カナーン (パレスタイン) の地に移り、遊牧を業とし、以て漸くジュディア國の基を開けり。

總説 ジュディア人の營爲せる事蹟の多くは、信仰上に關するを以て、其詳細なることは聖書に譲り、此處には唯歴史の大體に係る二三の事項を掲げんとす。ジュディア人の歴史上に於ける要件は、他の人民と全く其趣を異にせり。此人民は希臘人の如く智力の人類を開發するなく、羅馬人の如く武力の世界を風靡するなら、其他文學技藝に至るまで、一として他國民の右に出つるものなし。然れどもジュディア人は古代の終より、宗教(唯一神教)の力に因りて、文明諸國民に直接或は間接に及ぼしたる影響は實に莫大なりとす。

史期の區分

ジュディアの歴史はアブラハムの子孫、埃及に移りしもの、其王(第十九王朝ラムシーズ王の時)の虐政に苦み、埃及を脱出して再國をカナーンに定めし時を以て始とす。紀元前千三百二十年頃、蓋此時ジュディア民族の結合鞏固となり、國民の體形をなしたればなり。今かりにジュディア國の滅亡に至るまでの間を分ちて四期とす。第一期は紀元前千三百二十年頃より千九十五年に至る。第二期は千九十五年より九百七十五年に至る。第三期は九百七十五年より五百八十六年に至る。第四期は五百八十六年より六十二年に至る。

第一期 モーゼス (Moses) の其族を率ゐて埃及を脱するや、道途に漂泊すること四十年、カナーンの境に達せしとき、モーゼスは死してジュシニア (Joshua) 之に代り其衆を領し、而してパレスタインの大半を征服し、之を十二族に分てり。當時の政治は所謂神治政體 (Theocracy) にして天神(上帝)シホワーの託宣を受け、僧正之を執行せり。ジュシニアの死後、十二族の聯合強固ならざるに乘じ、カナーン人民の未全く服従せざるもの蜂起し、且近隣の強梁なるフィリスタイン (Philistines) 人入寇せしを以て、國情甚危殆に陥りしが、士師 (Judges) と

稱する數多の英傑出で、之を救助せり。就中有名なるは預言者サミエル(Samuel)なり。

第二期 然れども外敵の侵寇猶未止まざるは、各種族の統一せざるに由るを以て、人民は一王を戴き、以て之に當らんとし、サミエルに逼り國王を立てしむ。紀元前一千九十五年ベンジャミン族の勇者ソール(Saul)遂にジディア國王の位に即けり。王在位四十年、其間争亂常に絶ゆることなし。王死してダウイド(David)位に即く。此王治世の間(紀元前千五十五年より千十五年まで)はジディアの國勢最盛なる時代なり。王鄰邦を征服し、其境土を擴め、南は紅海より、東北はダマスカス(Damascus)に至る、ジェルサレム(Jerusalem)に首都を築き、以て政教の出づる所とせり。王死して其子ソロモン(Solomon)位を繼ぐ。王治世の間(紀元前千五十五年より九百七十五年まで)軍制を擴張し、華麗なる宮殿堂塔を建築し、又フィニシア人及埃及人と通商を約し、國勢駁々として進めり。然れども王の死後國內忽分裂せり。

第三期 ソロモンの子レホボーム(Rehoboam)位を繼ぎしが、國民重税に堪えずして背叛せり。是より國分れて二となる。一をイスラエル國と云ひ、一をジディア國と云ふ。イスラエル王國は國中の十族より成り、サマリア(Samaria)を以て首都となす。凡二百五十年間繼續し紀元前七百十九年アスシリア王サーゴンの爲に滅され、十族盡く俘虜となりアスシリアに送

らる。ジディア王國は他の二族より成り、ジェルサレムに都し、イスラエル國滅亡後、百三十餘年を経て、紀元前五百八十六年バビロニア王ネブカドネツールの爲に滅され、都城ジェルサレムは破壊せられ、其人民はバビロンに移されて奴隸の役に就けり。

第四期 其後凡五十年を経て、バビロニア國は波斯王サイラスの爲に滅され、ジディア人は放たれて國に歸ることを得たり。是よりジディアは波斯の屬國となりしが、紀元前三百三十二年アレキサンダー大王の版圖に歸し、後紀元前百六十六年に至り、外國の羈絆を脱することを得たりといへども、紀元前六十二年又羅馬の爲に征服せられ、紀元七十年に至り、都城ジェルサレムは羅馬帝タイタスの爲に全く破壊せらる。是に於て國民離散して四方に行けり。

第四節 フィニシア (Phœnicia)

人民及土地 フィニシア人はジディア人と同族にしてセミテリク族に屬す。本メソポタミアに住せしが、ジディア人と同しくフィニシアに移住せり。其地レバノン山の西に横りて、地中海に望める一小帯の國なり。長さは百五十哩に過ぎず、廣さは五哩より十四哩の間に出入

せり、其土地は瘠薄にして農業に適せずといへども、天然に航海通商の便を具へたり。

總説 フニシア人はシディア人と相異りて、甚有爲の精神に富み、古代にありて航海通

商の業を擴張せし最初の人民なり。蓋國土の瘠薄なるは、自其人民を驅りて航海の念を起さしむるの一要因なり。加之レバノン山の船材に富み、海濱の津港を設くるに適當なる、皆以て人民の企圖を助くるに足る。然れどもフニシア人の始めて海に航せしは、海賊をなすが爲なりしが如きも、航海を爲すの久しき、遂に商人となりて外國と通商せんとの感情を起せり。是よりして國の情態齊備し、平和なる交通をなし、商業制度漸く發達するに至れり。是故にフニシア人の事業は、古代侵伐者の事業と異りて、甚安寧豊富なりき。而して實地の勢力も、社會上の制度の爲に強盛となり、其國土は狹隘なるも、屢外國侵伐者に對して有力なる抗敵をなせしことあり。又フニシア人の交通によりて、古代文明の發達に及ぼしたる影響は甚較著なり。然れどもフニシア人は文明の先鞭者と云ふを得ず。蓋其先既に埃及の夙に開化の高度に達するあればなり。フニシア人は即此文明を遠く四方に傳播したるものなり。殊に歐洲に輸送せしものなり。

國狀 フニシア國は數多の小都府に分裂し、シドン (Sidon) タイル (Tyro) 最著る。皆世襲の

王家ありて之を統治せり。此等の都府は各其内部に於ける特殊の狀態に従ひて自由に發達せり。然れども其言語宗教風俗の同一なるよりして、商業の保護及外敵の侵寇を防かんか爲に同盟連合せり。而してシドン及タイル久しく同盟の中心となれり。

植民地 フニシア人の植民地は甚多し。而してシドン人より希臘の海岸に設けしものを以て最早しとす。爾後西方地中海の諸島、シリ マルタ (Malta) サデーニア (Sardinia) コーシカ (Corsica) 等より、西班牙 カヂ ツ Ordin 最著る。及亞非利加の諸海岸に植民せり。北亞非利加植民地の最有名なるものをカース ーチ (Carthage) とす。紀元前八百五十年頃タイル人民の内亂を避けて建設せし所なりしが、幾もなくして軍事商業航海等に於て本國を凌駕するに至れり。紀元前二百二十年頃漢ニバル (Hannibal) 出て、大に羅馬人を苦めたり (羅馬の條下を見よ)。

史要 紀元前千三百年頃にはシドン最盛なりしが千百年頃より其權力タイルに移れり。紀元前六百〇六年以後に至りては、フニシアは大抵バビロニアの屬地となり、唯新タイルのみ、十三年の久しきバビロニアに抵抗せしが、紀元前五百七十三年遂にネブカドネツ 一王の爲に征服せられたり。其後又ペルの屬國となり、紀元前三百三十二年に至りてはアレキ

サンダー大王に服従し、紀元前六十二年遂に羅馬の版圖に歸せり。

タルイは二部に分れ、該地にあるものは舊タイルにして、其近傍の島中にあるものを新タイルと稱す。紀元前千年頃タイルの王ヒラム (Hiram) 兩都間橋梁を架せしことありと云ふ。

第五節 メディア及波斯 (Media and Persia)

土地及人民 メディアは裏海の南方ツ、トロス山の東にある曠遠なる高原なり。波斯は其南方の山間にありて地方頗る富めり。蓋此地方は往古多くのアーリアン族の人民住してアイラン (Iran) 人と稱せり。アーリアン族民は、太古に於てオクサス (Oxus) 及ジクサーティース (Jaxartes) 河邊 (ソグデア、アナソグディム、バクトリア、バクトリア、バクトリア 地方) に遊牧せしが、一部の人民は漸々南下してインダス河邊に移れり。而して其西行するものはゾント (Zont) 人即アイラン 人となれり。希臘人は之を波斯人と呼へり。是希臘人と相衝突せしとき、波斯州其首位にありしを以てなり。メディア人及波斯人は共にアーリアン族に屬すと雖、其故居を去り西南の地に來りしより、セミティク族のリディア (Lydia) 人、アスシリア人、バビロニア人と合し、混浴の種族となれり。

メディア國 此地方は久しくアスシリア人の管轄する所なりしが、紀元前八世紀の頃よりメディア人の權力漸く盛となり、遂にエクバタナ (Ecbatana) 都の建設を以て有名なるデジ、イセス (Dejes) を推して王位に即かしめたり。其孫シャクサリーズ (Saxares) 王のとき、シス、ア (Soythian) 人北方より起り、亞細亞諸國を蹂躪し、埃及の境に及び、又メディアに侵入せしが、王撃て大に之を破り、次モア、ア (Armenia) を略し、紀元前六百六年バビロニア人と連合し、ア (Assyria) を攻め、其都城ニニヴ、ニを破壊し、タイグリス河東の地を併せ、又北東アイランの同族民を征服せり。是に於て其版圖西はヘリス (Helis) 小亞細亞にあり、河より東はオクサス河に及び、亞細亞の最大國となれり。然れども其子アステイアチス (Astages) の時に至り、波斯王サイラス (Cyrus) の爲に滅されたり。

波斯國 メディアの盛なる時、波斯も亦其屬國たりしがカムビセス (Cambyses) 一世の子サイラス (Cyrus) (紀元前五百五十九年より五百二十九年まで) の時に至り、國力盛大に趣き、一戦してメディアを滅せり。サイラス王の傳紀は、稗史小説に類して、信するに足らざるもの多し。然れとも王の豪邁なる侵伐者たりしことは明かなり。王はクリーサス (Croesus) 王下のリディアを征服し、進んで小亞細亞の海岸及諸島にある希臘の植民地を侵略し、遂にフィニシア、パレスタイン及バビロニア (Babylon)

城を攻むること二一年の後、ユーフレーテイス河の水を漑き之を抜く、紀元前五百三十八年なり。を征服せり。其後王は九年間東方を經略せしが、オクサス河邊の蠻民との戦に於て、重傷を蒙りて死せり。王は彼斯王中無雙の英傑にして、亞細亞の一大帝國を建立し、其版圖は東インダス河より西、ヘレスポント(Hellaspont)に至り、東北シクサーテイス(Sakastan)河より西南、シリアに達せり。

カムビセス二世 サイラス王死し、其子カムビセス二世(紀元前五百二十九年より五百二十二年まで)位を繼ぐ。王も亦攻戰を事とし、埃及を攻めて之を征服せり。王の埃及にあるや、本國の首府に於て、デアアの僧侶亂を起し、王位を奪はんことを圖る、王之を聞き、急に兵を引きて國に還り、途にして死せり。彼斯の七族(宗室)兵を起し、僧侶の亂を平け、**ダライアス(Darius)**を推して王位に即かしむ。ダライアスは正統なる彼斯王統の繼承者たり。

ダライアス一世 **ダライアス**(紀元前五百二十一年より四百八十五年まで)は善くサイラス王の遺業を繼ぎ、國內諸所に蜂起せる叛亂を平け、東はインダス河に至り、西はボスポラス(Bosphorus)を踰え、スレイス(Thrace)及マセドニア(Macedonia)を朝貢せしめ、又亞非利加の海岸シリチ(Cyrene)を征服せり。是より彼斯と希臘との間に大戦争起れり(其詳細なることは希臘史に於て記すべし)。

王は全版圖を分ちて二十州となし、各太守を置き之を治めしめ、軍道を開き、驛傳を通じ、各所の要害に城砦を築き、常備兵を設けたり。而してシリチ(Syria)を以て首都となし、**エクバタナ**及**バビロン**を以て離宮となせり。

彼斯の末世 **ダライアス一世**の後**サーキシズ(Xerxes)**(紀元前四百八十五年より四百六十五年まで)一世、**アータクサー****ーキシズ(Artaxerxes)**(紀元前四百六十五年より四百二十四年まで)一世相繼ぎて希臘と戦ひしが、數敗屢して國力漸く衰へ、加之叛亂踵き起り、遂に**ダライアス三世**の時、**マセドニア王アレキサンダー**の爲に滅はされたり(紀元前三百三十年)。

第六節 印度 (India)

土地及人民 **ヒマレヤ(Himalaya)**山の南方に當り、土地豊饒、穀物繁茂せる國あり。**インダスガンチス**等の諸川、此國を通して海に注けり。此國は古代**インディアン(Indian)**或は**ヒンドース(Hindoo)**と稱する人民之に住居せり。古代印度人は**アーリアン**族に屬す。太古**アーリアン**族の一部、其故居を去り、漸々南下して**インダス**河邊の豊饒なる地に移り、遂に印度に入り、大に發達せる宗教國を創建せり。而して**インダス**河の名に因りて、**インディアン**或は

ヒンド。イス人と稱せられたり。

史要　アリアン人は紀元前凡三千年頃には於てインダス域内に侵入し、土着の人民を征服せしより、數多の部屬に分れ、各酋長或は王ありて之を統御し、而して人民は一般に牧畜或は農業に従事せり。其後アリアン人は漸々南方に蔓延し、紀元前千四百年頃にはインダス河口に達し、埃及人及フニシア人と貿易をなせり。又此時代に於てアリアン人はガンヂス河の域内に侵入し、多年戦争の後、遂に其土人を征服せり。土人は或は降り、或は遁れ、或は其故居を棄て、東方に移轉せり。此酷烈なる掠奪戦争よりして、社會の状態全く變化し、峻嚴なる階級制度(Caste System)行はるゝに至れり。而してアリアンの部族は國內の各所に於て數多の小國を建立せり。其最著はるゝものをガンヂス河口にあるハリホスラ(Hariputra)となす。然れども此戦争後は印度人民の氣力大に沮喪せり。蓋國土の豊穰なる、氣候の炎熱なる、皆其人民の妄想夢幻の生活を助成するに足るものあり、是を以て僧族大に勢を得、婆羅門の教儀を以て人民の生活を束縛し、其自由なる思想の發達を阻絶せり。紀元前第五世紀に及び佛教と稱する新教起り、其弊を矯正せんとせしも遂に其効なかりき。然れども佛教は其後東洋諸國に波及し、數億萬の信徒を得るに至れり。紀

元前三百二十六年に至りアレキサンダー大王前印度に侵入せり。印度歴史の歐羅巴と關係を聞きしは此時を以て始となす。然れども其古代に當りて大に開化せしことは(假令全印度人の一部分にもせよ)今日に存在せる文物藝術の明示する所なり。豈俄に之を東洋歴史より除去することを得ん哉。

第二章　古代東洋諸國の開化

總説　既に第一章の總論に於て述べしか如く、古代東洋諸國の開化は、多く天然の關係に胚胎し、宗教の制裁に發達し、而して自由の精神に出づるもの少し。故に其開化は一定の度に達して、復進む能はず。然れども世界開化の源は實に此に存し、フニシア商業人民によりて希臘羅馬に及ぼせる影響は、實に大なりとす。左に其開化の一斑を示さん

第一節　宗教

概説　宗教は東洋諸國の政治及社會を網羅する所の一大勢力にして、東洋開化の發達一に此に因り、而して其衰退も亦此に因る。讀者は本章を讀みて當に其然るを知るべし。

而して其宗教たるや、多くは天體崇拜主義より起る。蓋古代人智の未進歩せざるに當りて、最憐むべく且最畏るべきものは自然の勢力に在ればなり。然れども印度及ジデアに於ては他の東洋諸國と異りて宗教の精神大に發達し、一は佛教となり、一は基督教となり、世界を兩分して之を支配するに至れり。

埃及 埃及の宗教は拜星教より起り、太陽を以て諸神の本源となし、而して大抵三神を一系となせり。其神の威靈は全國に行はるべきものあり。一地方に限るものあり。オサイリス (Osiris)、アイシス (Isis) 及ホーラス (Horus) の三神は、國民の一般に尊ぶ所にして國神なり。メムフィスの「プター (Ptah) 神、スーファスの「アムモン (Ammon) 神等の如きは、地方神の最有名なるものなり、此國宗教上に於ける僧侶の智識は、秘して之を一般人民に告知せき。而して人民の爲には實體的の宗教を作れり。是故に衆民は宇宙間の萬物、悉く神靈の寓する所となして之を禮拜せり。夫の動物禮拜の如きも、亦此に原けるが如し。埃及の人民は一般に牛、猫、鶴、鷹、犬、鱈魚等の動物を禮拜せり。就中牡牛「エーピス (Apis) の「メムフィスに於ける、犢牛「ニーウス (Mnevis) の「ヘリオポリス (Heliopolis) に於けるが如きは、最尊敬せられて、殿内に安置し奉養至らざるなし。又埃及人は身死するの後と雖、其靈魂は

不滅のものと思はるを以て、死後審判の後、身體なきときは靈魂復歸するに處なしとし、其屍を木乃伊 (屍中の臟腑を去り、腹内に藥を充て腐敗を防ぐの法) となして永く之を保存せり。其石棺の中は美麗に裝飾して生前に異る所なしといふ。

印度 印度の古代にありては、人民は萬有の活動を支配する所の勢力を尊敬し、「インドラ (Indra) 雷雨の神」「アグニ (Agni) 光明の神」「ヴァルナ (Varuna) 地及海の神」等を祭れり。而るに婆羅門教の起りて「ガンヂス域内に移住してより」世界の萬物は、皆唯一の神靈より作り出され、而して又此神靈に歸入すとの説を唱へしより、「インドラ」等の諸神は、皆其下列に立つに至れり。其説毗陀 (Veda) に曰く、視聽の及ばざる一の眞神あり、「ブラーマ (Brahma) 梵天」といふ。適く所として在らざるなく、爲す所として能はざるなし。萬物を創造し保存し又破壊するの力ありと。此神は三體に於て現出せり。一を「ブラーマ」と云ひ、萬物を創造し、一を「ヴィシヌ (Vishnu) 保存者」と云ひ、萬物を保存し、一を「シヴァ (Siva) 大自在」と云ひ、萬物を破壊することを掌る。而して其教旨の主眼とする所は靈魂輪廻説なり。此説によれば人間の靈魂は、前世に於て犯したる罪過を此世此身に於て受るなりと。故に印度人の目的として勉勵する所は、再萬有の神靈即「ブラーマ」と一致せんとするにあり、彼

巡禮、祈禱、懺悔、清淨等の行は、即其方法たるなり。若し其方法を怠れば永劫苦界を脱する能はずして、輪廻轉々已むの期なしとせり。紀元前第五世紀に至りて佛教と稱する新教起り、教祖は釋迦牟尼なり、其傳記に關しては、今日より之を確知すること能はずといへども、釋迦(Ciska)王統に屬するゴータマ(Gautama)の一族なりといふ、年二十有九にして兩親妻子に別れ、飄然として寂寥の地に退き、以て人生の苦界を解脱せんとし、苦心七年、歸りて後四十年の間、門徒を集めて教理を講せり。教理固より神學に基くと雖、其主旨とする所は、實行にありて、人間の精神を苦壓する所の荷擔物を解脱し、以て涅槃(Nirvana)に入るを教ふ。釋迦説て曰く、人生常に煩惱に苦む。煩惱本欲情を充たす能はざるに起る。欲情は勉めて之を鎮靜せざるべからず。人生涅槃の果を得んと欲せば、先邪讎の感を去り、非望を消し、暗愚、疑惑、邪教、不親切、醉狂の迷を破れど、蓋涅槃とは世間の妄想を離れて、清淨圓滿の域に入るを云ふ。故に又曰く、人間一たび自覺すれば萬物一切空となると。是によりて觀れば、佛教の前には神なく鬼なく、唯一の不可思議なる涅槃の本體あるのみ。此新教は只一婆羅門教の改革に止らず、世界史上に於て第一着は國民の區劃を破壊せしものなり。蓋其教旨たるや、人類を同一視し、慈悲忍辱

以て之を度せんとするにあればなり。釋迦の死後二百年にして、佛法大に北方印度より錫蘭、緬甸、暹羅の諸國に擴布し、又紀元前二世紀の頃、中央亞細亞を横絶し支那に入り、次て日本に來り、然れども印度にありては、佛教徒婆羅門教徒を厭すること能はず。婆羅門教徒大に其教儀を改良して、數世紀の間佛教と相併立せしが、佛教次第に衰微し、遂に婆羅門に溶化せられ、以て近代印度宗教の起源をなせり。佛教は此の如く本國にありては勢力を失ひしと雖、却て支那及我國に於て大に傳播せり。

バビロニア及アスシリア　バビロニア人及アスシリア人は共に宗教的人民にして、偶像教の信者なり。日月星辰の如きは其最尊崇する所たり。然れども其根原たる一神に就きての理想は、埃及人に比して曖昧模糊たるを免れず。唯、イル(El)即、ライ(Lai) (アスシリアに於てはアスサー、Assur)を以て諸神の首位に置けり、而して之に次きて三位一體の神一對あり。一をエーナ(Anu)天神、メル(Mel)地神、ホーア(Hoa)水神の諸神とし、一をシン(Sin)月神、サン(Sun)日神、ウル(Ur)空氣の神の諸神とす。諸神皆之に配する女神あり。女神にして最著る、ものをベルテス(Beltes)ベルの配にして著名なる諸神の母(イシター)及イシター(Ishtar)諸神の女王なりとす。共に戦争耕作及狩獵の神たり。

ヒーフルー及フィニシア ヒーフルー人は獨東洋諸國の人民と殊なり、其宗教は日月星辰等を祭らずして、萬有の主宰たる唯一の神即「ジ・ホーウ」(Jehoweh)を尊崇せり。猶太教實に此に起る。ヒーフルー人の此の如く宗教に卓越せるに反して、フィニシア人の宗教は殘忍を極む「ベール」(Baalモロク)(Moloch)と稱する火神あり、之を祭るに當り、タイル府に於ては幾多の童男童女を火中に投じ犠牲に供せりと云ふ。

彼斯 彼斯人の宗教は「マツタイズム」(Mastaiism)と云ひ、又「ゾ・ロアストリアニズム」と云ふ。「ゾ・ロアスター」(Zoroaster)之が教祖たるを以てなり、其經典を「ゾ・ラントアツスタ」(Zendavesta)と稱す、其教義によれば、宇宙に善惡の二神あり、一を「オーマツド」(Ormuzd)と稱す、萬物を創造せし光明の神なり、一を「アリーム」(Ahriman)と稱す、惡魔の首にして闇黒の神なり、一は善福を施し、一は罪禍を與ふ、而して兩神常に相争へり、人民は概善神を崇ひ、之を援けて惡神を拂はんとせり、然れども「ゾ・ロアスター」教は「メーヂイ」(Mazd)教の出づるに及びて大に混亂せり、「メーヂイ」教は本「メーヂイ」に行はれ、五行を禮拜せり、就中火を尊敬し、高丘の巔に於て火を焚き、天火と稱し以て魔術を脩せり。

第二節 政治

概説 古代東洋諸國の政治は専君主獨裁にして、人民の生殺、與奪の權は、一に國王の意志如何にあり、貴族僧侶は常に王の左右にありて暴横恣睢を極め、自由の精神は全く地を拂ひ、人民は唯抑壓の下に呻吟せるのみ、事態此の如きを以て、一國の興亡は、唯一人の君主に繫り、一人の智愚賢不肖は、即一國の興亡盛衰の分るゝ所たり、是古代東洋諸國王朝の世を永くし、化を恢にする能はざりし所以なり、左に其政治法制の主なるものを概説せん。

埃及 埃及は世襲君主國なり、然れども他の東洋諸國と異りて、國王の公私の事件は凡て宗教の法規によりて支配せられたり、又國王は立法の權を有せりと雖、法律の範圍を踰えて、恣に人民の性命財産を處理することを得ざりしなり。

印度 印度の政治法律は悉く婆羅門教の法規によりて支配せられたり、後代に至りて「マヌ」(Manu)の制定せる法典は、全國に効力を有し、苛酷なる獨裁政治によりて人民を抑壓せり、此法典に従へば、國王は實に無限無上の權力を有し、國王なきときは印度の世界は暗黒たるに至ると云ふ、然れども國王の權力は宗教及貴族の爲に幾分か制限せら

れたるが如し。

ヒーフルー ヒーフルー最始の政治は神宣政治にして、國王なく階級なく、多小共和の元素を有せしが幾くもなくして王國となり、ソロモン王の時に至り頗る壓制を極めたり。

バビロニア及アスシリア バビロニア及アスシリアも亦專制政治にして、國王は神聖犯すべからざるの權を有し、朝官其左右にありて政を擅にす、然れども人民は公衆の危害に關する事件あれば、直に王に愁訴するの特權を有せり。二國の相代りて西亞細亞の大帝國を創建するや、宗教及政治上より他國民を屠戮捕囚せしこと枚擧に遑あらず、然れども其大版圖は各小國を器械的に連合せしに過ぎざりしを以て、反亂相繼ぎ、須臾にして瓦解するに至れり。







彼斯 斯彼の國王は神の化身にして、其權力は實に無限なり、普天率土、悉く王の土地人民に非ざるはなく、貴族太守の如きも、皆王の奴と稱するに至る。サイラス王四方を征服し、至大の版圖を擴張せしが、ダライアス一世に至り、バビロニア及アスシリアの覆轍に鑑み一統の治をなさんと欲し、各州にサトラップ(Satrap)と稱する太守を置き、多くは國王の親戚を以て之に充て、自其州内を管領せしむ、而して廢置の權は一に王の手に在り、太守

は毎年定額の租税を國王に貢せしが、後民事軍務の權力を併有するに及びて、人民を抑壓すること甚しく、時としては王命に背き、兵力を以て之に抗することあり、國勢漸々分離するに至れり、之を要するに彼斯帝國の統一も、猶外形上に止りて、内部の結合甚弱く、唯一の恐嚇手段によりて之を統御せしに過ぎざりしなり、眼を轉じて彼斯の強盛なりし所以を繹ぬるに、主として其軍制の効による、人民の兵器を携ふるに堪ゆるものは、二十歳にして一定の軍隊に屬し、三十年間其役に服す、危急の時に際すれば、全國を擧て皆兵となり、國王之が元帥たり、而して騎兵隊最強し、騎兵は人馬共に鐵板を以て蓋へり、軍隊の中堅は「不死」(Immortal)と稱する一萬の歩兵より成り、國員あれば直に之を補充す、兵士の服裝及武器は種々にして一様ならず、是數多の民族より成立せる軍隊なるを以てなり。









フニシア フニシアの政治は他の東洋諸國と異りて、初は國王なく、又族制なし、各都府は貴族政治なりしが、後世に至りては、貴族及僧侶より出てたる世襲の王ありて之を治む、然れども王の權力は甚制限せられたり、植民地の都府に於ては、名族より出てたる評議官ありて政務を指揮せり。

第三節 學術

概説 古代東洋の學術に於て最夙に發達せしものは天文学なり。是蓋宗教と密接の關係を有するを以てなり。而してカルデア及埃及其最たり。其他カルデアの諸學術、埃及の幾何學、フニシアの文字、印度の代數學の如き、歐州學術の進歩を裨益せし功亦没すべからざるものあり。

埃及 埃及の學術は古代にありて大に進歩せるものあり。埃及の象文には三種あり。第一は「ハイログラフイク」と名け、純然たる像字なり。第二は僧侶の用ひしものにして「ハイラテイク」(Hieratic)と名け、第一を省約せるものなり。第三は「デモテイク」(Demotic)と稱し、通俗文字にして第二を再省略せるものなり。第二第三は發見以來名けし稱號あり。而して四種の使用法あり。第一は像字にして、例へば「食す」との意義を顯はすには  を以てし、「種を蒔く」には  を以てし、太陽には  を以てし、鷺鳥には  を以てするが如し。第二は譬喩に用ふる像字にして、 は太陽を表すものなれども、又日(時の)に用ひ、 は獅子を表するものなれども、又強猛なることを表すが如し。第三は音字にして、實物を假りて其名の首音を取り、當に表すべき文字の發音を綴り表すなり。例へば Cleopatra

學

Pho と云へる王名を書するには、 の代りに  を書くが如し。蓋埃及語に  を  と云へるを以て、其首音の  を取るが爲に  を書くが如し。又  は獅子(Lion)により、 は手(Tot)によりて表さるゝが如し。第四は斷證に用ふるものにして、第三の方法を以て記したる音字に、實物(第一の方法)を附記し、以て其意を明晰ならしむるなり。埃及人は幾何學算數學醫學にも達し、殊に天文学の如きは大に發達し、一年を三期十二ヶ月に分ち、一月を三旬に別ち、三十六旬二分の一を以て一年となせり。又正確なる度量衡を制作せり。

印度 印度の古語は「サンスクリト」(Sanskrit 梵語)と稱し、其語辭文法は希臘、羅甸、日耳曼等の諸語と酷似たる所あり。近世學者の説によれば、「サンスクリト」は「アーリアン」族民分離以前の言語に近きものとなせるが如し。文法學は大に開け、婆羅門教育の重要な科目となれり。天文学はカルデア人及希臘人の獸園の智識を輸入せしより大に開けたり。代數學及十進法は印度に起り、カルデアを経て、歐羅巴に傳播せしが如し。

バビロニア及アスシリア バビロニア及アスシリア國の文學は楔狀文字と稱し像字と音字との間にあり、其形の模に似たるを以て此名あり。此文字は「テールニアン」(Turanian)人の

術

發明せし所にして、カルデア(ハビロニア)及アスシリアの時代に至りて完全せり。例へば(水) (野) (河)の如し、ハビロニア國僧侶の有する智識は天文学に於て最發達せるが如し。此國の天文学は埃及の星學より更に超絶し、十二の默圖及七曜は其創始せし所なり。又一年を四期十二月と、一日を十二時に、一時を六十分に分てり。ピラミッドの高塔は天象觀測の用に供せられたるなり。アスシリア王アサハニハルは大に文學を奨励し、ニニツエーの宮中に地理、歴史、法律、數學、天文、動植物學の諸書を蒐集し、動植及礦物等の目錄をも製せり。動物の如きは其分類甚精密にして、後世の人をして驚嘆せしむ。又文法書の如きは二千五百年前アスシリア人の用に供せしものなれども、今日尙アスシリア語を研究するにも極めて貴重なり。

フィニシア フィニシア人は商業の人民にして精神上の發達には乏しきも、而も實地の勉勵は亦多く學術の進歩を促すことあり。蓋航海は發明發見の媒介となり、他國民との貿易は種々なる智識を擴むればなり。歐洲近世の意義に於ける文字を發明せし最初の人民は實にフィニシア人なり。フィニシア人は言語の原音を定め、一字を以て一音を表すの工夫をなせり。其工夫たる簡短なるが如くかれども、反て巧妙自在なり。然れども其原を

尋ねれば、蓋埃及の象文より脱化し來れるものなり。希臘の文字は、實にフィニシア人より傳習摸擬し、又之を羅馬人に傳へ、以て近代文字の基を開けり。要するにフィニシアの學術技藝は多く外國より傳受(又之を外國に傳播せり)せしなり。例へば天文学をカルデアより、度量衡をバビロニアより、紫色染料をアスシリアより、玻璃を埃及より傳受せしが如き是なり。

第四節 文學

概説 古代東洋文學の一たひ研究せられしより、數千年間埋没せる東洋の文學始めて世界に光輝を發し、歐洲諸國の語に翻譯せられしもの鮮からず。印度の毗陀文學、埃及の象文文學の如き其尤なり。今少しく其概況を觀察せん。

埃及 埃及文學の著名なるものは照闇記(Book of the Dead)、道義訓及ヘントール(Henotaur)の詩等なり。照闇記は死後之を墓中に藏し、以て露魂旅行の指針となししものなり。道義訓は第五王朝の時、王子フタホーテフ(Phthahotep)の少年訓戒の爲に作りしものにして、今より四千年以前の作に係る。ヘントールの詩はラムシース二世の功績を頌歌せるものな

して、埃及の「イリアッド」と稱すと云ふ。

印度 印度の文學は夙に其美を極めたり。之を分ちて二期となす。毗陀時代(純正なる「サンスクリット」語通用せる時代)及「サンスクリット」時代(「サンスクリット」語は唯學者間に用ひられ一般に通用せざる時代)是なり。毗陀時代の書籍の最古きものを毗陀經とす。婆羅門教中貴重の經典にして、幾と四千年前の著述に係ると云ふ。毗陀經は四部より成る。一を「リグヰタ」(Rig-Veda)と云ひ、毗陀經の最古きものにして神歌を載せ、二を「サマヰタ」(Sama-Veda)と云ひ、三を「ヤジュルヰタ」(Yajur-Veda)と云ひ、詩歌祭儀の事を載せ、四を「アトハルヰタ」(Atharva-Veda)と云ひ最後の作にして、「リグヰタ」の補遺なり。此經中に記載せる詩歌の如きは、高尚典雅、古今に絶するもの少からずと云ふ。「サンスクリット」時代には戯曲、叙情詩等大に發達し、舞踏音樂と共に盛に行はれたり。詩家「カリダサ」(Kalidasa)の作に係る戯曲「サクンタラ」(Sakuntala)の如きは、其名世に高し。其他寓言小説の喜ぶべきもの數多ありと云ふ。

ヒール ヒール人の歴史國制及生活は悉く「ジホーウ」の神事に關するが如く、其文學も亦此神事に關せり。歴史上の書は神政國の創立及其精密なる立法の歴史を叙し、韻直を讚美するに用ひしものなり。

バビロニア及アスシリア バビロニア及アスシリアの書籍とも稱すべきは、粘土を以て製したるの方形板の両面に文字を彫記し、之を順次に編列したるものなり。アスサーパニバル王の時、バビロンの古書に據りて編輯したるものの中に、洪水記及世界創造記等あり、實にモーゼスの生前數百年の著に係る。而して舊約全書中の創世記、洪水記に符合する所多し。又宗教上の著書中、諸神の威力を頌したるものにして「タビ」の神詩に伯仲せる文字少からずと云ふ。

彼斯 彼斯古代の文學は之を「ツ・ンド」(Vand)と稱し、バビロニア及アスシリアの文字と類似し、其構造稍簡略なり。彼斯人は概して想像力に富み詩文に巧なりしも、稟性物理を推究するを悦ばず。故に理學上の裨益を爲ししもの絶わてなかりき。是バビロニア人と大に其性情を異にせる所なり。彼斯の古文章中「ツ・ンド」語を用ひ「バクトリア」古體を備へて後世に備はりしものは、僅に「ツ・ロアスター」の編纂せる「アヰ・スタ」と稱する一神學書あるのみ。

第五節 技藝

概説 枝藝も亦大抵宗教と關係し、美麗の點に於ては大に關する所あるも巨大を以て勝れり。就中建築術に於て然りとす。埃及の尖塔の如きは是なり。然れともバビロニア人の機械的技藝の能力に富み、アッシリア人の作像術に巧なるか如きは、亦多とするに足るものあり。

埃及 技及技藝の中最進歩せるは建築術なり。而して埃及人は巨大を以て主とし、美麗高尚に意を用ひさりしものゝ如し。夫の大尖塔の如き以て見るべし。尖塔は皆諸王の墳墓にして、今日現存するもの猶四十個ありと云ふ。其最大なるものをギーズーの三尖塔となす。就中大なるはキーフー王の尖塔にして、高さ四百五十呎、底基、方七百六十四呎あり。之を築くに四十年間十萬の工夫を役せりと云ふ。其他誌銘を刻せる方尖石碑及宏壯なる殿堂の數千年間風雨中に屹立し、依然其形狀を變せざるもの多し。彫刻繪畫の術は未眞誠の技術に達せず。殊に繪畫の如きは管に遠近法に適せざるのみならず、單一の瞻視法にも合せざるものあり。而して埃及人は六種の色の外、之を混和するの術を知ら

ざりしが如し。然れども其彩色の如きは、今日猶鮮明にして腐蝕せる所なきは驚くに堪えたり。

バビロニア及アッシリア人 バビロニア及アッシリア人は機械的技藝の能力に富み、能く穹形の理を知りて、堤防、溝渠、水道、橋梁等を建築せり。ユーフレイテ、イス河に架せし橋梁及飲用の爲に府内に導ける水道の如きは、最有名なり。此國は石材の欠乏せるか故に、通常建築に用ふるは、磚石焼土の類なり。然れども能く高堂壯殿を造るに巧なり。近世子アカド子、ツー王の修築せしピラス塔（所謂バビロンの高塔）の墟趾を發見せしが、其形圭頭にして八層より成り、基礎の高さ七十五呎ありて、餘の七層は各二十五呎ありと云ふ。又彼ニツツー及バビロンの都府は甚廣大にして、バビロンの如きはユーフレイテ、イス河に跨り、繞すに高さ二百二十八呎、厚さ八十五呎の城壁を以てす、其狀恰今日の堡塞を構へる陳營の如しと云ふ。

オ、ヘルト氏の算する所に據れば、バビロン城の内部は二百九十平方、キロメートル（二キロメートルは我國の九丁八間五尺懸）にして、外部は五百十三、キロメートルあり、即地理學上の五、二七及九、三二平方哩の面積を有せりと、氏は又之をパリ及ロンドンに比較して云へり。パリは一、二九平方哩、ロndonは五、七五平方

アスシリア人は學術上の智識に於ては、バビロニア人に譲るといへども、作像術に至りては遙に之に超越せり。又巨大なる像を作ることとは、埃及の後に立つと雖、作像の活潑生動せるが如きは、埃及人の及ぶ所にならず。他日希臘人の彫刻の模範となりしは、亦宜なりといふべし。

印度 印度の技藝は多く宗教と結合せり。就中有名なるは殿堂を岩窟中に建つるにあり。其最著明なるは前印度の中央なるエルラ(Elora)及今日のボムベ(Bombay)近傍のサルセタ(Saletpore)及エレフンタ(Elphanta)嶋上にあるものとす。其彫刻誌銘頗る精巧にして、恐くは多年間數千人の勞力を以て成りしものならん。

彼斯 彼斯の建築術及彫刻術はアスシリア人及バビロニア人と交通せしより大に發達せり。シーサの都はバビロンの如く煉化石より造れるを以て、現今は唯至大の墟趾を存するのみ。パーセポリスの宮殿は、灰色の大理石を以て建築せるが故に、今日に至りても尙舊時の美を存するものあり。其他國王の墳墓及偶像彫刻の今に存するもの甚多し。然れども彼斯人の技藝は、唯國王の用を供せしのみなるを以て、獨立せし事業の後世に傳はれるものなし。

フィニシア フィニシア人は一般の技藝に於て甚長せきりしが如し。然れども造船術に至りては非常に進歩せり。又建築術に於ては、其堅固なるが爲にシリア全土に冠たりしが如くなれども、建築物の遺存せるものなきを以て、今日より其風致の如何を知るに由なし。

第六節 産業

概説 東洋古代に在りては、産業は一般に輕蔑せられ、奴隸或は下等人民の營むべきものとなして顧みず。是を以て農業工業の如きは著しき進歩を見ず。特り商業に至りては、有爲なるフィニシア人に由りて、大に其範圍を擴張せられ、之に次きてバビロニア人亦頗る勉勵せしが如し。

埃及 埃及は天然の状態、甚農業に適せり。ナイル河潤す所の地は、耕耘を要せずして、四ヶ月乃至六ヶ月間夥多の收穫あり。然れども人爲の状態は之に反して、農業は實に下等の地位にあり。而して耕具は殆ど木を以て造り、間々銅器を用ゆるあるのみ。農夫は

一も土地を有せず、收穫の五分の一を出して、國王或は貴族の所有地を耕せり。工業の階級と云へは既に下等の意義を表せり。此階級に在るものは同時に二種の工業を爲すこと及其世襲の職業を變換する事を禁せられたり。然れども業務の専一なるが爲に、著しき進歩をなせり。麻布及木綿の製造最著る、其他紙(パピラス樹葉より造る)漆器、飾具等の製造も亦盛かり。又玻璃の發明者と稱するフ、ニシア人より以前、既に玻璃を製造せりと云ふ。外國人民との商業は、南はエス、オヒア北はシリアより遠く擴張せざりしが如し蓋僧族の人民の交通を恐るゝと、埃及禮式の嚴酷かるとは、商業の擴張を阻遏せるなり、加之船舶を造るの良材なきと、適當なる運搬の方法に乏しきとは、亦商業阻礙の一要因となれり。

ジ、ヂ、ヤ モーセスの法規に據れば、國民の務むべきは唯農業のみなり。是故にジ、ヂ、ヤ人の古代に在りて工業を營みし根跡毫もあるなし。其製造の必要欠くべからざる者は之を奴隷に委せり。バビロンの俘囚以後、工業の制始めて成立せるを見る。之に反して農業は甚尊敬せられ、一般人民は土地の耕作に従事せり。然れども壓制なる法律ありて全國の土地は七年毎に耕作を休めざるべからず、又同時に二種の穀菓を播種すること

を得ず。而して農夫は其收穫の十分の三以上を國王僧侶以下に納めざるべからず。モーセスの最初の法律に從へば、國民は外國人と交通することを得ざりしを以て、概して商業の民にあらざりしが、ソロモン王の時に至りて、此制を廢し、盛に外國と交通を爲すに至れり。

フ、ニシア フ、ニシア人は其土地農業に適せざるを以て、商業に於て大に其範圍を擴張せり。蓋シドン及タイルの布帛は當時大に聲價を博せしといへども、フ、ニシア人の商業は主として外國の物産を媒介貿易するにありしなり。即西方は地中海より北亞非利加及西班牙の海岸に至り、猶進んでチラルタル(Citharlar)を越え大西洋に出で、フリテ、ス(Phoenicia)諸島(錫を産する島、今の英國なりと云ふ)及バルテ、ク(Baltes)海の濱に至り、東方は亞刺比亞及彼斯灣を経て印度海に達せり。又商隊によりて盛に陸地商業を營めり。即パレスタイン、シリア亞刺比亞、埃及、彼斯及バビロニア等に通商せり。

バビロニア バビロニアの工業は甚進歩せり。殊に毛及麻の織物は最有名かり、毛氈は彩色の活動美麗なるが爲に、當時にありて大に重せられたり。又バビロニアは其地勢の便なるが爲に、古代商業の要地となれり。然れども其貿易の一部は自國製造品の交換より、

一部は東方物産購入より成れり。即バビロニア人は東方彼斯及北印度よりカンダハル(Candahar)バクトリア砂漠(近時のゴビ沙漠)に及び海上にては又タイグリスユーフレーテールズ兩河口より印度錫蘭に達せり。

印度 印度は眞珠、寶石、象牙、香具、香料、織物等の天産物及人造物豊富なりしを以て古代よりして既に海陸商業の中心となれり。

彼斯 彼斯に於ては農業は多少重んぜられたるが如くなれども、工業商業に至りては、一も其進歩を見ざるのみならず、下等人民の業務として之を輕蔑せり。故に彼斯人民常に誇りて曰く、我は武士なり、當に劍戟を以て外國の物産を左右すべきのみと。

第七節 社會の狀態

概説 古代東洋諸國には多く族制(Caste)ありて、社會上及政治上の秩序を維持せり。而して僧侶貴族は最上の階級に在りて權力を專にし、其他の人民は常に抑壓を蒙れり。加之家族生活の敗壞、奴隸の虐役等を以てし、一般社會の狀態は沈滯腐敗せり、國家の永續せざる亦怪むに足らざるなり。左に少しく其狀態を觀察せん。

印度 印度の社會は人民血族の差違によりて族制を定め、而して異族相互の關係は極めて嚴峻にして、各其家格を世襲し相交雜することを得ず。印度の族制は四に分れたり。第一を婆羅門(Brahmin)とす。即僧侶にして宗教、政治、文學皆其掌る所なり、而して非常の榮譽特權を有し、神聖犯すべからざるものとし、肉刑を受けず租税を免る。第二をクシャトリア(Kshatriya)とす。即軍人にして國王に直隸し、廣大の土地を有す。諸侯は大抵此族より出づ。第三をヴァイシヤ(Vaisya)とす。農業商業及工業に従事するものなり。第四をスートラ(Sudra)とす。勞役に服するものなり。第二以上はアーリアン種族にして、第四は印度土人の子孫なり。此人種の殊異は即族制の因て起る要素にして、族制は畢竟アーリアン人の印度征服の結果より生ぜしなり。而して家族の狀態はマヌの法律によりて規定せられ、夫長の權、甚重く、婦、幼は唯其命に従はざるべからず。

埃及 埃及社會の狀態は、酷印度に似たるものあり。一般社會制度の基礎たるものは即宗教の儀式なり。僧侶は權力及文化の中心にして、王家も亦此中より出づることあり。埃及族制の區分に就きては、或は七となし、六となし、五となし、三となし、未一定の説あり。然れども大要之を分ちて三となすを得べし。第一は僧族にして國家の官職及高等

の智識を壟斷し、或は法官となり、或は醫師となり、或は建築家となる。其采地は全國の三分の一に跨り、租税を出すことなし。第二は武族なり。僧侶に次ぎて權力を有し、其數凡四十萬あり。又大なる土地を領し、租税を免せらる。而して僧族と共に貴族を組成せり。第三を賤族となす。農夫、工匠、商賈、牧者、船手、通辨人等之に屬し、而して飼豕人最賤る。此族にあるものは凡て土地政權を有することを得ず。族制と共に奴隸あり。又埃及の家族制は他の東洋諸國に於けるが如く一夫衆妻なり。然れどく僧族は一夫一妻の道を恪守せり。

ジ・ディア ジ・ディアには族制なし、唯僧侶の一顯著なる階級をなすあるのみ、僧侶は一般の學術を掌り、又重要な國事を指畫す。而して租税に衣食して富有なる生活をなせり。奴隸制度ありて外國人のみならず、自國の人民と雖、奴隸となることあり、奴隸の子は其父と同じく奴隸たらざるを得ず。奴隸を役する主人は之を賣買し、且毆打することを得。然れどももし他人の奴隸を毆打して、死に致したるときは、所有主に其代價を償はざるべからず。又衆妻を娶るの習慣行はれ、父及夫の權力は甚熾にして、恣に其婦女を賣買せり。然れどもバビロンの俘囚以後は、一夫衆妻の風漸く廢れたるが如し。

バビロニア及アスシリア 此國の僧侶は非常の權力を有し、而して之を世襲し、日月の祭祀、天文、學術の事は、皆其專有に歸せり。然れども埃及及印度の如き族制の有無は判然たらざるが如し。又此國奴隸の數は甚多く、概外國の捕虜を以て之に充つ。其待遇は稍寛なりしに似たり。婦女の位置は甚卑くしてヘロドタスの記する所によれば、男子は衆妻を娶るを得るのみならず、其生む所の女兒の成長したる時は、之を市場に出し以て男子の求むるに委せしと云ふ。

彼斯 彼斯は王に繼ぎて七諸侯あり、其一是王族にして他は六大族の長たり。而して王の左右にありて公私の事件を補助せり。朝廷は重に「メーカイ」と稱する僧侶より組織せらる。僧侶は道德及民事に關する一般の犯罪を判定することを掌り。而して國王の專横を制するの力ありしが如し。彼斯の社會は印度と同じく四階級に分れたり。僧侶、軍人、農夫及工人是なり。而して軍人及農夫の稱は印度に類せり。クシトラ (Kshatriya) 即軍人、ヴストリア (Vishva) 即農夫に於ける如し。亦以て其同族なることを證するに足れり。彼斯に於ても亦衆妻主義盛行し、婦は一室に閉居し、他人と接するを許さず。甚しきは終生其父母にも面するを得ざることありと云ふ。又幼兒の教育は國家に於て之を掌り。

第三章 希臘 (Greece)

總論

概説 前章に於て既に古代東洋諸國民の歴史を記述したれば、是よりして古代西洋諸國民の歴史に移らん。而して其最夙に開化せる希臘人より始むへし。希臘人民の歴史は東洋諸國民の歴史と全く其觀を異にし、彼は則王家の歴史にして、此は則人民の歴史なり。君權の專横と自由の發達とは、全く其比を倒にせり。而して希臘人の歐洲に現はれしより、世界事物の中心は亞細亞より歐羅巴に移れり。蓋亞細亞人の精神は宗教制となりて顯れ、希臘人より發達せる歐洲人の精神は自由制となりて現はれたり。是故に亞細亞に於ては、宗教の制、人民の全生活を支配し、從ひて無限專治を誘ひ起せしと雖歐洲に於ては學藝自由の進歩を促すに至り、其作爲せし所の事業は、後世二千年後の今日に至るまで、尙模範として尊崇すべきものあり。

土地 希臘本土は歐洲の東南端にある半島にして、東はイチーアン (Ithacan) 海を以て亞細亞に連り、南は地中海を繞らし、西はアイオーニアン (Ionian) 海に臨み、北はオリムパス (Olympus) 及カムフニアン (Cambunian) の連山を以てマセドニア及イルリリア (Illyria) と境せり。其廣袤

總

は南北凡二百五十哩(地理上の)にして、東西の最廣き所百八十哩に過ぎず。之を分ちて北、中、南の三部とす。北部は北境より東、マリアン (Malian) 灣西、アムブレニアン (Ambracian) 灣の深入する所に至り、中部(ヘルラス本部)は兩灣深入の地よりコリンス (Corinth) の地頭に達し、南部は即ペロポネーサス (Peloponnesus) なり。北部にはエパイラス (Epirus) 及ス・スサリー (Thesaly) の二州あり。ス・スサリーは希臘國中最豐饒の地なり。中部には八州あり。就中著名なるをアッテ、カ (Attica) とす。首府アス・ンズ (Athens) は希臘全國の大都會なり。南部にも亦八州あり。ラコニア (Laconia) 最著る。首府スパルター (Sparta) はアス・ンズに次ける大都會なり。又近海には數多の島嶼あり。アイオーニアン海にはコーサイラ (Corcyra) リューカス (Lecucas) セブルリニア (Cephalonia) ツ・ンサス (Naucratus) 等あり。イチーアン海にはサリス (Saris) サモスレース (Samos) レムノス (Lemnos) イムフロス (Imbros) 以上北部) レスポス (Lesbos) キオス (Chios) サモス (Samos) コス (Cos) ロータス (Rhodus) 以上東部) クリータ (Crete) シクラデーズ (Cyclades) 群島) シス・ラ (Sythra) 以上南部) サラミス (Salamis) イジイナ (Egina) 以上サロニカス Salonicus 灣) ヌーピア (Naevia) (大陸東岸の大島) 等あり。

論

土地と開化の關係　希臘の地たるや、島嶼の多きこと彼か如く、而して本土の沿岸は地形出入し交通貿易に便なり、是を以て希臘人は埃及フニシア等と交通し、其文明を輸入せしこと鮮少ならず、又内地は到る處山岳基峙し、自土地を區劃せるを以て、一溪一地、各都邑ありて皆獨立の政府を設け、和戰の權を有すること猶他の大國の如し、是其政治自由の夙に進歩せし所以なり。

人民　希臘人と羅馬人とは言語の類似せるを以て見れば、甚親密の關係ありしか如し、而して其先同じく亞細亞の高原に遊牧せしアリアン人種にして、夙に其故居を去り（紀元前二千年頃）歐羅巴に移り、分れて二となり、一は希臘に入り、一は伊太利に入りたるか如し、希臘古代の人民は粗暴悍悍にして、未國民と稱すへき團體をなさざりき、後世に至りて此時代の人民をヘラスチー(Hellas)と名けたり、其後驍武なるヘルリニース(Hellios)希臘人の自稱と稱する人民、北方スエスサリーの地より侵入し、ヘラスチー族を征服し、兩民族相混同し、希臘全土をヘルラス(Hellas)と稱せり、蓋此兩族本同一のアリアン族より出て、相似たる言語風俗を有せるを以て、容易に混同することを得しなり、而るに羅馬人は最初ヘルリニースの一族なる希臘人を知りしより、遂に全人民を希臘人と稱し、今に至るまで此稱を用ふるに至れり。

ヘルリニースの四族　ヘルリニース人民はヘラスチー族を征服せし後、四部に分れたり、イオリアン(Ionian)族(ヘロホンニサスの西岸)ドーリアン(Dorian)族(イータ(Eta)山の南部)アイオーニアン(Ionian)族(アツテ、カ及ヘロホンニサスの北岸)エキアン(Achaean)族(ヘロホンニ

サスの南部及東部)是なり、希臘草創の歴史に於ては、エキアン族及イオリアン族最勢力ありしか、正史時代に至りては、ドーリアン族及アイオーニアン族最強盛となれり、ドーリアン族の代表者はスパルタにして、アイオーニアン族の代表者はアエンスなり、此兩族は其性質を殊にせるを以て、互に相仇視し、希臘歴史の大半は、此兩族の軋轢を以て充されたり、蓋アイオーニアン族は天性爽快輕佻にして、共和の氣象に富み、商業を勵み、且美術を愛せり、ドーリアン族は之に反して風俗純樸、能く舊慣を守り、貴族政治を好み、武を貴ひ文學商業を賤むの風あり。

草創の歴史　希臘草創の歴史は之を英雄時代(Heroic age)と稱す、此時代の事蹟は詩歌小説に類して荒唐信するに足らざるもの多し、此等の英雄は神の威力を備へ、其事業は人力の企て及ふへからざるものとせり、ヘルクリース(Heracles)の偉業、アーゴノウツ(Argon

aula)の遠征、スーファス(Thebes)の戦争、トロイ(Troy)の攻圍の如き美談好話、今に遺れるもの甚多し。就中トロイの攻圍は詩聖ホーマー(Homer)の作に係るイリアド(Iliad)篇に詳述せられたり。

トロイの攻圍 小亞細亞なるトロイ國王プライアム(Priam)の子ヘーリス(Hector)とシヘンもの伴て希臘諸國を歴遊し、スパータに到りしこと、スパータ王メネレアス(Menelaus)の妃ヘレン(Helen)の艶麗なるを見、竊に之を奪ひ國に歸れり、是に於てスパータ王大に怒り、希臘諸國の兵を徵集し、其弟ミシネ(Meneas)王アガメムノン(Agamemnon)を以て將となし、船艦千二百艘を率ひ、ビオーシア(Beotia)よりイチーアーン海を渡り直よトロイ城を圍り、小亞細亞の諸國は盡くトロイを援け、プライアムの子ヘクトール(Hector)を將となし、希臘の兵を逐撃せり、ヘクトール勇悍善く戦ひ、將に火を希臘の船に放たんとす、希臘のミルニドン(Miridon)王アキルリーズ(Achilles)とシヘンもの亦勇武なり、希臘人の危きを見、己か甲冑を脱し、其友パトロクラス(Patrolus)に與へ、其衆を率ひて敵を撃たしむ、パトロクラス、トロイ人を船艦より驅逐せしか、遂にヘクトールに刺れて死せ、アキルリーズ單進してヘクトールと闘ひ之を殺せり、然れども城堅にして十年の間之を抜くこと能はざりしか、終にイスカ(Hellas)王ユリスシイズ(Ulysses)の木馬の計により、之を陥ることを得たり(紀元前千九百九十四年より千八百八十四年まで)

英雄時代の状態 ホーマーの記せる所のイリアド及オデーシイ(Odyssey)により英雄時代の情態を概説せん。

政治 ホーマー時代の希臘に於ては、數多の小獨立國あり、各王ありて之を治む、王の判官僧正を兼ね、戦時には元帥たり、人民之を尊敬し神人となせり、然れども東方君主の如く專制ならず、貴族及人民の會議ありて國事を圖議し、王の裁可を仰ぐの制なりき。

風俗 人民は高燥の地をトして都府を建て、之を繞らすに城壁を以てし、街路甚整理せり、家族生活の状態は、族長制にして一家の權力は族長にあり、風俗は淳朴にして農業牧畜風に開け、婦人の位置は甚高くして東の風なし、然れども奴隸の制は公行せり。

工藝 戦争には戦車を用ひ、騎兵を用ふることをしらも、日要の工藝は猶幼稚にして、紡績等は婦女の常業たり、衣服は凡て手製にして貴女といへども奴婢と共に職業を取りて愧ぢざりしか如し、銅鐵等の如き主要なる鐵物は已に用ひられ、又之か鑄造の術も行はれしかども、未貨幣の發明あらず、牛を以て賣買の媒介となせり。

民族の移轉 トロイ戦争を距ること數十年、希臘北部の住民移轉を企て、スッスサリ人の移轉となり、ビオーシア人の移轉となり、ドリアン族の移轉となれり、ドリアン族は其故

居を去り、南部へロポンニサス地方に襲來し、其住民エキアン族を驅逐せるを以て、エキアン族は又北岸せるアイオーニアン族を驅逐して之に代れり。アイオーニアン族は中部アテカに奔り、其同族に合し、又近海の諸島を占領せり、此移轉は紀元前一千百年より八百年頃に至るまで凡二百年間繼續せり。

植民の成立 是よりして植民の制大に行はれ、希臘の形勢一變せり。從來希臘の諸海岸はセミテ、ク族の商業人民フィニシア人より植民せられたりしか、希臘人の興隆と共に其跡を歛めたり。希臘人はフィニシア人より文字度量衡及貨幣を傳習し、又幾何ならずして遼遠なる地方に數多の植民を有するに至れり。蓋人民の動搖は航海通商の心を引き起せしを以て、希臘人は他の人民と交通し、他の事態を目撃し、之か爲に刺衝せられて、銳意其政治風俗の改善に努力せり。是を以て紀元前八百年頃には文明の進歩頗著しかりき。

イチーアン海の諸島并に北はマセドニア及スレス、東は小亞細亞黒海の濱及其西方コーサイラより其他今日アイオーニアン諸島と名くるものに至るまで、皆希臘人の植民あらざるはなし。シンリ島より下伊太利地中海の諸島亦其植民する所となり、就中下伊太利に於ける植民地は其富裕なること本國に超越せり、西方に當

りてはマスシリア (Macedonia) 今の佛國マルセイユ (Marseilles) サグインタム (Saguntum) 西班牙の植民地あり、其他亞弗利加之北岸シリヤ (Syria) バルカ (Barce) 等の有名なる植民地あり、此等の植民地は皆別に共和政府を建て、其植民地より又更に植民を派遣することあり、而して本國に對しては唯恭禮を取るのみ。

霸主及國民の結合 既に述べたるか如く、希臘國は種々の民族より成立せるを以て數多の小獨立國に分裂せり、而して時を経るに従ひ、卓越せる權力を有するもの此中より出づ。是を霸主と云ふ、スパルタ、アテナス、シアラスの如きは是なり。然れども其血屬言語、風俗、宗教、國祭の相同しきか爲に、此數多の民族を結合して一國民とならしむ。宗教と結合せる制度儀式の最重なるものをアムフクシオニク (Amphictionic) 同盟會議とし、オリムピア (Olympia) 祭となす。アムフクシオニク 同盟會議はデルファイ (Delphi) なる國民の靈場を保護し、且諸國の私闘をなすを制するか爲、希臘の諸國より使節を派遣せり。オリムピア祭は希臘四所の國祭の最大なるものにして、四年毎にイリス (Iris) に於て舉行せらる。此時に當りては、希臘國の人民四方より集り、熱心に祭儀を營み遊戯を演ぜり、而して他國人は決して此祭儀に與ることを得ざるなり。希臘の年曆は此祭祀の執行によりて定められ、第一オリムピア祭は紀元前七百七十六年に在り、是を希臘年曆の始となす。

以上の制度祭典は、凡ての希臘人をして結合の感情、共同の知覺を保たしむるに於て、大に力ありしなり。

史期の区分　　クリースの正史は紀元前七百七十六年（第一オリムピア祭）に始り、之を分ちて三期となす。第一期は紀元前七百七十六年より五百年彼斯戦争の始に至る。第二期は彼斯戦争の始より三百三十八年マセドニアの統治に至る。第三期はマセドニアの統治より百四十六年羅馬人に征服せらるゝに至る。

第一期

第一節　　スパルタ(Sparta)の興起

ドーリアン族の建國　　ドーリアン族はペロポネーサスに移住せしよりアーゴス(Argos)メッシニア(Messenia)ラコニア(或はラセデーモン Laedaeamonと云ふ)の二國を創建せしか、就中ラコニア人即スパルタ人最強盛にして他國を凌駕するに至れり。スパルタ人の斯くペロポネーサスの諸州に冠絶するに至りしは、主として大立法者ライカーガス(Lycurgus 紀元前八百八十年頃)の制定せし制度の効なり。

ライカーガス　　ドーリアン族のスパルタを創建せしより、常に多難にして少時も安息することを得ず。凡二百年の間、外はアーゴス人の侵寇を被り、内は貴族の専權と奴隸の跋扈とに由り騷擾を極めたり。是に於て王族ライカーガス出で古代ドーリアン族の威權を恢復し、而して内は國內の平和を謀り、外は他國を壓伏せんとの目的を以て、古代ドーリアン族の風俗習慣を因襲せるクリータ島に渡り、其情態を観察し、國に歸るに及びて有名なる制度を制定せり。

憲法　　ライカーガスの制定せし憲法によれば、二人の國王併ひ立ち、其下に元老院あり衆議院あり。元老議員は二十八人ありて行政及司法の事を掌る。而して六十歳以上の長老を以て之に補す。又毎年エフォル(Ephors)と稱する五人の監督官を衆議院より推撰して國事を分任せしむ。エフォルは初市府の秩序を維持し、官吏の行狀を監督するに過ぎざりしか。漸次に其權力を擴張し、終に國家の大權を掌握するに至れり。衆議院は三十歳以上の公民より成り、法律の制定、宣戰講和の權を有せり。此によりて見れば、スパルタの政治は寡人政治と共和政治とを混淆せるものにして、國王は實權を有せず、唯軍事と祭禮とを指揮するに過ぎず。又スパルタの憲法は土地分配の制を立て、ラコニアの全土は九

千人のスパルティアテール(Spartiates)を、三萬のペリシー(Perioeci)に分與せり(第四章第六節)を參看せよ

教育法 ライカーガス立法の主眼は、スパルタ公民の勇武を養成保持せんとするに在り。故に一國の政治に關するよりは、人民の家事に關すること多し。是を以て男兒生れて庭弱なれば、之を山谷に捨て、強健なるものは六歳に至れば兩親の手を離れ、政府の教育を受けしむ。教育の目的は軀軀を強固にし、スパルタ固有の生活法及感情を發達せしむるにあり。故に國法及嚴正なる訓言を學ぶと共に、演武所に於て兵式體操術を練習せり。又男子は六十歳に至るまで十五人を以て一保となし、公共の食卓に會食せしめ、而して戰時に在りては其進退生死を共にせしむ。其他人民の商業を爲し且奢侈に陥るるを防ぐか爲に、貴金屬を以て作りたる貨幣を禁し、粗糲なる鐵錢を通用せしむ。之を要するにライカーガスの制度は専ら體氣の養成を努め、心智の開發を忽にせしを以て、人民は木強頑愚に陥るの弊を免れさりき。

スパルタの強盛 ライカーガスの制度によりて養成せられたる勇武の氣象は先、發してメスシーニアの攻伐となれり。第一戰爭(紀元前七百四十二年より七百二十四年まで)に於て、メスシーニアの勇將

アリストテイルマス(Aristodemus)戰死し、メスシーニアはスパルタの屬國となれり。紀元前六百八

十五年に至りて第二戰爭起り、メスシーニア人はアリストメニス(Aristomenes)を將としスパルタに叛し、其勢一時熾なりしか。紀元前六百六十八年再スパルタの爲に征服られ、國全く亡ひたり。其後又アゴスを征服し(紀元前五百四十七年)遂にペロポネーサス全土の覇權を掌握し、希臘最初の雄國となれり。スパルタ人は是より進んで中部希臘の諸族を侵略せんとせしか、彼斯王の入寇に會し事遂に已みき。

第二節 アスエンス (Athens) の興起

アスエンス スパルタ人のライカーガスの憲法により、國力を強盛にせるときに當り、活潑なるアスエンス人も亦其政治の自由を擴張せしのみならず、才智の卓絶を以て將にクリース全に冠たらんとす。

王政の廢絶 アスエンスはアテカ (Athina) に在り、アスエンス人も亦他の希臘人と同しく嘗て王政の下に立ちしか、ドーリアン族侵入の時、コトラス (Cottoras) 王之を防きて命を殞せし(紀元前千六十八年)以來王位を廢し、王族より「アーコン」(Archon)と名くる終身行政官を撰ひ王權を擡行せしめ、貴族は顧問官を組織せり。紀元前七百五十四年「アーコン」の任

期を十年となし、猶王族を以て之に任せしか、幾何ならずして貴族より之を撰任することとなし、紀元前六百八十三年遂に其人員を増して九人となし、毎年之を改撰することとなせり、是に於てか國家の全權は少數貴族の手に歸し、其他の國民は一も參政の權を有せざるに至れり。

ドレコーの法律 貴族の壓制愈甚しきを以て人民は大に不滿の念を起し、明文の法律を制定せんことを要求せり、貴族久しく之を拒みしか、遂に其要求を容れ「アアイコン」ドレコー(Dreko)をして法律を記定せしむ、(紀元前六百二十年)此法律は甚峻酷にして犯罪の輕重を論せず、一に之を死刑に處せり、蓋ドレコーは人民を畏喝服従せしむるを以て、最上の手段となせしなり、而るに其の法律は民心を服すること能はざりしのみならず、貴族は益貪婪を逞くし、人民を抑壓せしを以て、爭亂絶ゆるときなく、國家殆ど泯亡に瀕せり。

ソローンの法律 此時に當りソロン(Solon)出て「アス」ンスの憲法を釐革し、以て國難を匡救せり、是紀元前五百九十四年なり、ソローンの法律によれば、人民は財産所得の額によりて四等に別れ、而して其一級に在るもの「ムミアアイコン」の職に就くことを得、「アアイコン」

ンは九人を以て定員とし毎年更任す、又其職務に堪ゆるものは「エレオバガス」(Areopagus)會議員の榮職に登ることを得、「エレオバガス」は主として退職「アアイコン」より成立せる法院にして、最上の榮譽を有し、法律、風俗、習慣、教育等を監察することを掌る、「エクリシア」(Ecclesia)即衆議院の權力は大に擴張せられ、法律の議定、宣戰講和より高等官吏の任命に至るまで、皆之を執行す、又四百人元老院を興し、第二級以上に屬する「アス」ンス四族(第四章第六節を參看せよ)より各百人(三十歳以上)を撰舉して議員となし、國家經濟及行政事務を監督せしめ、又衆議院の顧問となり、他國との交際を掌らしむ、又司法院を置き、訴訟を聽斷せしむ、其職員は衆議院より撰舉す、ソロンは同時に負債償却法を定め、貧民の負債の一部を免除し、奴隸を自由にし、抵當地を返却せしむる等、務めて人民の困難を排除せり、之を要するにソロンの憲法は貴族共和の主義を混同せりといへども、而も人民をして一般に參政の權を得せしめ、能く民政の基礎を確立し、國家昌盛の端を啓けり。

ソロンはコドラス王族にして希臘七賢の一人なり、幼にして詩才に富み、并て商業の爲に外國に旅行し、其國政人情に通じ、國に還るに及びて「サラミス」を恢復し、大に人望を得「アアイコン」の聽に登り、貴族平民の間に立

ちて平和なる良法を制定せり。其後はソロンはアスキニズ人に十年間其法律を變更せざるべきことを約し、埃及小亞細亞等に旅行し、國を歸りしとき、アスキニズは政黨蜂起し、辯難攻撃せり、ソロンは年老たるも猶其智力勇氣を鼓舞して國に歸し、遂に如何ともする能はざりき。

僭主 其後アスキニズには三黨あり。相軋轢して已まず。紀元前五百六十年細民黨の首領、貴族ハイシストラタス (Hippias) 機智辯巧を以て人民を籠絡し、アスキニズ城を攻め之を陥るれ、遂に僭主 (Tyrant) となれり。ハイシストラタスは民心を收攬せんとし、ソロンの法律を變更せざりしを以て、アスキニズ人は僭主の治下にありといへとも、依然として民政の澤に浴せり。ハイシストラタスは農業工業商業を奨励し、又美術文學をも振興し、從來口碑に傳へ來りしホーマーの詩什を編輯して卷冊に上ほせり。ハイシストラタス死し、其子ヒツピアス (Hippias) 其後を授け始寛和の政を施せしか、其弟の殺害せらるゝに及びて、苛酷となりしを以て、紀元前五百十年國人の爲に逐はれ彼斯に奔れり。

共和政治 アスキニズに於ては細民黨の首領、貴族クリスチニス (Cleisthenes) 出で、大に民權を擴張し、從來の制度を變更し、地理及政治上に於て人民を十族に區分し、而して各族より毎年五十人の議員を撰擧し、五百人會議を開き、以てソロンの百人會議に代へ

後 たり。衆議院の權力も亦大に擴張せられ、アコン職及エレオバガス會議員の權力は非常に削減せられたり。其他各族區より毎年抽籤法により五千人を撰擧し、之を十部に分ちて訴訟を聽決せしむ。又オストラシズム (Ostracism) の法を設け、個人の公安を害すべき行爲ありと認むるときは、秘密投票の結果により、十年間之を國外に放逐せり。又各族より將軍一人を推撰し、相代りて軍務を都督せしむ。是に於て人民は皆平等自由の權を得。アスキニズ國は純然たる共和國となり國勢駁々として日に月に進み、遂に 그리스 中部の牛耳を執るに至れり。此時に當り、スパルタも亦強大に赴き、兩雄將に衡を争はんとするの際、突然亞細亞の代表者たる彼斯人の入寇に會ひ、希臘全土將に力を戮して之に當らんとす。

第二期

第一節 彼斯戰爭

戰爭の起因 彼斯王タライアス一世位に即くに及びて、小亞細亞なる希臘の諸都府亦其并吞する所となる。然れども希臘人は常に其束縛を脱せんことを圖る。會ミリータス (Miletus)

Letus)のアリスタコラス(Aristagoras)彼斯人を勸めてナキロス(Naxos)島を伐ち勝たす。アリスタコラス小亞細亞太守の譴怒に逢はんことを恐れ、反て其部下の人民を喚して彼斯に反せしめ、又援を本國に乞ふ、アスキュス及ユーピア島のエレクトリア(Electria)戦船二十五艘を送り之を援け、リディアの首府サデーニス(Sardis)を焚く、(紀元前四百九十九年)然れども其後幾何もなくして再討平せられ、ミリータスの人民は或は殺され或は奴隸に賣られたり、(紀元前四百九十四年)是に於てダライアス大に怒り、アスキュス及エレクトリアを屠り、以て其讎を復せんことを誓へり。

第一遠征(マードニアスの入寇) 紀元前四百九十二年ダライアスは女婿マードニアス(Mardonius)を以て將となし、海陸の大軍を起してアスキュスを伐たしむ。マードニアス陸軍を率ゐ、行、スレイスにある希臘の都府を陥れ、マセドニアに侵入せんとせしか、慄悍なる土民の襲撃に遭ひ、遂に進む能はず、又別に派遣せられたる海軍はエロス(Atlios)岬に於て颶風の爲に破壊せられ、海陸共に効なくして軍を班せり。

第二遠征(マラソンの戦争) 是に於て彼斯王益憤激し、兵を集め糧を蓄へ、大舉してアスキュスを攻めんとす。紀元前四百九十年デーニス(Denis)及アータフ、アーニニス(Artaphanes)

His トラライアスの姪)を以て將となし、軍艦數百艘(歩兵十萬騎兵一萬を載せ)を發し、イヂーアン海(サモスよりナキリス及デーロスを征服し)を横絶し、エレクトリアを略し其人民を彼斯に移し、遂にヒビアス(前節を參看せよ)を嚮導とかし、アッティカの東岸なるマリッパ(Marathon)の平野に上陸せり。今や歐洲の文明、將に東洋未開人種の爲に蹂躪せられんとする、瞬間にあり、此時に當りて、アスキュスは急使を發して援をスパルタに乞ひしか、スパルタは貧國祭ありて遂に期に及はさりき、是に於てアスキュス人はミルタイアデーニス(Miltiades)スキュストクリス(Themistocles)アリスタイデーニス(Aristides)等十人を擧げて將となし、九千のアスキュス人と一千のプラチーア人(Platians)を合せ、進んで彼斯の大軍に當り、奮撃して大に之を破る。此役を紀元前四百九十年九月十二日にして、彼斯人の死するもの六千四百人、アスキュス人の死するもの僅に百九十二人なり。此戦捷は獨りアスキュス人を救濟せしのみならず、希臘一國を救濟せしものなり。獨り希臘一國を救濟せしのみならず、實に歐洲の文明を救濟せしものなり。マラソン戦争の古世界大戦の一に數へらるゝも亦以あるなり。

アスキュスの準備 然れども此大捷利はヘルリニズ人をして全く安穩ならしむること

と能はず、却て彼斯王の暴怒を激發し、再大軍の攻撃を招くに至れり。然れども幸に埃及國蜂起し彼斯に抗するあり、尋てタライアス王の死去せしを以て、アス人は此間に軍備の整頓に必要な時月を得たり。此時に當りてアスはアリスタイデ、スエミス、トクリの二名士あり、俱にマラソの役に功あり、而して熱心に國威を擴張するを以て務となせり。然れども各其方法を異にし、アリスタイデは人となり正直、陸軍によりて國家の安泰を圖らんと欲し、スエミスは資性伶俐、海軍を盛にし以て外侮を禦かんとす。而して大にアス人の心を得たり。是に於て兩雄久しく相争ひしか、アリスタイデは遂にオストラシズム法によりて放逐せらる、是よりスエミス獨りアスの指揮者となり、專艦隊を増し、水師を訓練して彼斯人の入寇に備へたり。

第三遠征(サーキシーズ王の親征) 彼斯に於てはタライアス王の死後其子サーキシーズ位を嗣ぎ、埃及の反亂を平け、而して父王の志を果さんと欲し、大兵を徵集し、サーデに會合せしめ、自將として歐羅巴に侵入せり。マラソの役を距ること十年、陸軍はヘルレスの海峡を渡り、スレースを越ゆ、マセドニア、スエスに向ひて進み、海軍は常に海岸を進行して、以て陸軍の聲援をなす。希臘の諸小邦風を望み欺を通するもの多し。アス

アス及スパルタは諸邦の代議士をコリンスに會し、同盟防禦の策を講じ、スパルタを以て盟主となせり

ヘロドタスの算する所によれば、陸軍は歩兵百七十萬、騎兵八萬(他の史家の説によれば八十萬人なり)なりしと云ふ、又海軍は千二百七の戦艦と三千の運送船とより成れりと云ふ。

サーモビリーの戦 紀元前四百八十年七月正にオリムピア祭典に會す。時にサーキシーズはサーモビリー(Thermopylae)の嶮に顯出せり。是より先、北境の守兵は皆敗れ還りしを以て、スパルタ王レオニダス(Leonidas)は二百のスパルタ精兵と數千の同盟兵とを以て之を扼守せり。サーモビリーはイータ山とメリリス(Melia)灣の沼澤との間にありて、スエスよりヘルラス本部に通する唯一の險路なり。彼斯の兵進んで之を抜かんとす。守兵勇敢善く拒さしか、希臘兵中反するものあり、彼斯の兵を導きイータ山の間道を越ゆて、スパルタ兵の後に出づ。レオニダス此報を得て、同盟軍をして去就を決せしめ、自部下二百のスパルタ兵と死を決する所の七百のスエス人などを率ひ、勇を鼓して奮戦せり。然れども衆寡敵せず、前後圍を受け、レオニダス遂に亂軍の中に斃れ、戦士一人の生存せるものなし。

希

海戰 此間海上に於ても亦屢戰爭あり、スパルタの將ユーリビアデーニス (Eurycles) 希臘の艦隊を帥る、ユーピアの北岸なるアーテミシウム (Artemisium) 岬に於て彼斯の艦隊と激戦し、勝敗未決せざりしか、スパーモビリーの敗報を得、直に艦隊を引きて南方サラミス (Salamis) はアスエンスの西に當る小島なり) の灣に退けり。

サラミスの戰爭 サーキシース王は既にフーニス (Phoenicia) ビオシアを陥れ、アテカに進入せり。アスエンス人大に震撼し、皆都城を棄て船艦に投せり。其未サラミスに達せざるに、アスエンス城は已に彼斯人の爲に焚かる。彼斯の海軍も亦進んでサラミス灣に接近せり。今や兩國の艦隊サラミス灣に湊り、希臘國の存亡將に此一戦に決せんとす。而るに希臘の各國皆自國の利害を計較し、議論紛出し歸一する所を知らず。スミストクリーズ一計を出し、彼斯の艦隊をしてサラミス灣を封鎖せしめ、希臘の兵をして自死地に陥らしめたり。是に於て希臘の兵は紛議を止め、戮力協心、彼斯の大軍と灣内に激戦す。彼斯の艦隊大に破れて退き去る。サーキシース惶懼出づる所を知らず。亦蒼皇軍を引きて國に歸れり。是實に紀元前四百八十年九月二十日なり。

此役やスミストクリーズは一戦して雌雄を決せんとせしか、コリンス人スパルタ人はコリンス地頭に退き

臘

彼

陸軍に合し、以て敵を擧ぐんことを主張し、議一決せず。是に於てスミストクリーズは一計を案出し、腹心の謀者を遣し、彼斯王に説かしむるに希臘の軍衆心一致せず。遂に伐つゝの利あるを以てす。彼斯王すなはち命を下し、大舉してサラミス灣を扼せしむ。此時に當り、希臘の艦隊は三百七十八艘にして、彼斯の艦隊は凡九百艘あり。然れども謀略なく秩序なく、忽混亂を生し遂に大敗し、二百艘を失へり。希臘は僅に四十艘を失ひしに過ぎず。彼斯王サーキシースは初海岸の高丘より戦狀を眺視せしか、其艦隊の破るゝを見るや、急に軍を抜きて遁れ去れり。

彼斯人の驅逐及戰爭の終結 サーキシース王の軍を班すや、尙三十萬の兵を駐め、マ

ドニアスを以て將となしスエスサリーに屯せしむ。サラミス大捷の翌年マードニアスは再アテカに侵入せしかは、スパルタの大將ホーセニアス (Hermias) アスエンスの將アリスタイテ、ーズ兵十一萬を合せ、彼斯の兵とプラテア (Plataea) に會戦し、撃て大に之を破り、マードニアスを殺す。紀元前四百七十九年九月二十五日。是に由りて希臘國に於ける彼斯の勢威全く消滅せり。又此日小亞細亞の海岸なるミカレ (Mycale) に於てもスパルタ人及アスエンス人大に彼斯の海軍を撃破せり。是より彼斯人は敢て復希臘本土を窺はず。時々イチアーン海の北部に於て小闘ありしと雖、紀元前四百六十六年に至り彼斯人は遂に全く歐洲以外に

爭

戰

斯

驅逐せられたり。次て紀元四百四十九年サイプラス(Cyprus)島の一戦よりして兩國の間に和を講し、小亞細亞なる希臘植民地の自由を恢復せり。是に於て彼斯戰爭全く終る(紀元前四百四十五年)

第二節 アスエンズの覇

覇の原由 從來希臘に於て政治上の首に立ちしものはスパータ國なりしか、サラミス戰爭後其權力漸くアスエンズに移れり。蓋文明の狂瀾を將に倒れんとするに回らしたるは、アスエンズ人の功多きに居ればなり。加之其後スパータの大將ホーセーニアスの歎を彼斯に通せしも、亦アスエンズをして希臘諸邦に覇たらしむるの一原因となれり。

スミストクリーズ及アリストタイデイス 此時に當り、アスエンズに於てはスミストクリーズ及アリストタイデイス先に追放せられしがサラミス戰爭の時召還せられたり(の一人力を戮せて國威を盛にせんことを勉め、スパータ人の抗論ありしに關せず、アスエンズの城壁を再築し、且其規模を増大にし、又海軍を振起せり。然れどもスミストクリーズはホーセーニアスと同じく彼斯に内應せしとの嫌疑を受け、「オストラシム」の法によりて放たれたり。

スミストクリーズは彼斯に走り、王の寵遇

を蒙りしか、後自毒を仰きて死せりと云ふ是に於てアリストタイデイス獨り權力を掌握し、專正義公直を以て事を處し、大に衆望を得、イチーア海の諸島及海岸の諸府をして、アスエンズに聯合せしめ、又彼斯に對する海軍を整備せんか爲に、聯合諸國より船舶或は貨幣をアスエンズに供給せしむ。而して同盟諸國の集議所をデーロス嶋に設け、又同盟庫を置き諸國より供給せる貨財を貯ふ。而してアスエンズを以て此倉庫の管理者且同盟艦隊の指揮者となせり。是に於てか、アスエンズは希臘海上の覇權を握るに至れり。

サイモン アリストタイデイスの死後、アスエンズに出でし英雄をサイモン(Cimon)及ペリクラーズ(Pericles)となす。二人亦力を盡して國事を斡旋せり。サイモンはミルタイアデイスの子にして、寛仁を以て人心を得、屢同盟艦隊を率ゐ、小亞細亞の海岸に於て大に彼斯の兵を破り、(紀元前四百六十六年ユーリメドニ Eurimedon)に於て希臘の島嶼及都府をして獨立を得せしめたり。當時スパータ地大に震ひ、全都殆ど破壊せり。メスシーニア人及びヘロト(Herod)第四章第六節を看よ。其機に乗じ獨立を回復せんと欲す。(所謂第三メスシーニア戰爭)是に於てスパータ人は援をアスエンズに求む。サイモンは元來貴族の首領にして、貴族政治のスパータ國に親しきを以て、國人に説き援軍を派遣せり。而るにスパータ人中、心を變

し、アスキニズの援軍を辞し還らしむ。アスキニズ人大に怒り、咎をサイモンに歸し、紀元前四百六十二年遂に之を放逐せり。其後サイモンは再召還せられ、紀元前四百四十九年艦隊を率ひサイブラスに進撃せしか、幾ならずして軍中死せり。

ペリクリーズ　ペリクリーズは一平民より起り、才能、氣力、辯論、卓越せる有名の政治家且兵家として、其生存中(三十年以上)アスキニズに至大の影響を及ぼせるを以て、其時代を稱してペリクリーズ時代と云ふ。アスキニズの光榮權力實に其極に達せり。ペリクリーズは美術を奨励し、學問を振興せしを以て、文學技藝燦然たる美觀を呈し、學者技藝家彬々として輩出せり。殊に文明國の利器たる演説法の如きも、當時大に發達し、從ひて愛國の精神を鼓舞せしこと亦鮮少ならず。是に於てか、アスキニズは開化の最高度に達し、國府の人民官職に就き事業を執るに適せざるもの稀なるに至れり。而してアスキニズは純然なる共和政體となり、衆議院は最高の權力を有し、「エレオバガス」「アアイコン」等の職權は殆無有に歸し、立法行政共に衆民の手に在りて、公共の官職は抽籤法によりて之を撰任せり。

アスキニズの衰兆　然れどもアスキニズの衰運は實に此極盛の中は倚伏せり。蓋アス

キニズ人は其富盛の威に乘し、恣に威權を弄し、夫「テイロス」同盟諸國を輕侮し、彼斯軍に備ふるか爲に醜集したる艦船、貨幣を自國の用に充て、反て同盟諸國を壓伏するの手段に供せり。是に於て希臘の諸國怨望を抱くもの多く、遂にスパルタをして其機會を投せしめ、一發して「コリンス」の戦争となり、再發して「ペロポネーサス」の戦争となり、兵亂結んで解けず、サラミスの勝後、僅々五十年間は得たるヘルラスの開化を顛覆し、後世をして復當時の隆盛を冀ふ能はざらしむるに至れり。

第三節　ペロポネーサス戦争

戦争の原因　ペロポネーサスの戦争は固より希臘の諸國アスキニズの隆盛を妬むと、且其壓制に不平を抱けると起りしと雖、亦遠因の存するあり。蓋アイオーニアン族とドーリアン族とは、其政治、風俗自相異なるより、希臘國內の都府隱然分れて二となり、互に相仇視せり。一はアスキニズを以て同盟の首領となり、其政治は専共和により、其兵力は海軍に資れり。一はスパルタを以て盟主となし、政治は多く貴族政治にして、其長する所は陸軍にあり。此の如く兩雄常に相睥睨せしか、遂に一の機會に遭ひて潰裂し、紀元前

四百三十一年より始まりて、二十七年間繼續せるペロポネネーサス戦争となれり。初希臘の一國コリンス人其植民地なるコーサイラ嶋と争鬪を開きしか、アスニズはコーサイラを助け、マセドニアに於けるコリンスの植民地なるポテデーア (Potidaea) を征服し、加之ドーリアン族の一小都メガラ (Megara) は從來殆アスニズとの交易を以て生活せしか、アスニズ人は之をアテカ諸港及市場より驅逐せり。此に於てペロポネネーサス同盟の諸國(ピオーシャ、ホーシス、ロクリス等)殊にドーリアン族の諸國大に之を怒り、遂にアスニズと戦端を開くに至れり。

戦争の開始及ニシアス條約 紀元前四百三十一年 スパルタ王アーキデーマス (Archidamus) (アテカ) 侵入し暴掠を恣ます。アスニズ人皆其城壁中に遁る。此間アスニズ人は艦隊を以てペロポネネーサスに上陸し之を侵略せり。紀元前四百二十九年 悪疫アスニズ城中に暴發し、勢猖獗を極め、人民の死するもの甚多く、ペリクリーズも亦之に斃る。クリオン (Clion) 之に代りて政權を執れり。爾後七年間はアスニズスパルタ互に勝敗ありしが、アムフィポリス (Amphipolis) の戦に於てクリオンはスパルタの將フラシダス (Pericles) の爲に殺さるゝに及びアスニズ貴族黨のニシアス (Nicias) 出でてスパルタと五十年間の平和を約し、其侵地俘虜を交還せり。之をニシアスの條約と云ふ。(紀元前四百二十一年) 然れども此條

約は同盟諸國の不滿を抱くもの多きか爲し、幾何ならずして再破裂し希臘諸國の關係反て錯雜となれり。

アルシバイアデーイズ及シシリイ戦争 ニシアス條約は本スパルタの専斷を締結せしものなるを以て、コリンス、アエゴス、イリス、及マンティニア (Mantinea) の諸都は相結合してスパルタのペロポネネーサス盟主の權を褫かんとす。アスニズの首領アルシバイアデーイズ (Alcibiades) 之を援く。然れども事皆徒勞に屬し、マンティニアの一戦(紀元前四百十八年)は反てスパルタの權勢を増さしむるは過ぎざりき。アルシバイアデーイズは俊才機辨の壯年にして、姿容美し家甚富み、アスニズ人民の愛慕する所たり。偶シシリイ嶋にあるアイオーニアン族の都民、ドーリアン族の都民の攻むる所となり、援をアスニズに乞ふ。アルシバイアデーイズはペリクリーズの遺業を紹き、聲譽を博せんと欲するの念常に熾なりしを以て、アスニズ人に説き、ニシアス、ラマカス (Lamachus) と共に艦隊を率ゐ、シシリイに航してシラクユース (Syracuse) を攻む。(紀元前四百十五年) 是に於てかペロポネネーサス戦争再起る。而るにアルシバイアデーイズは反對黨の爲に渣神の彈劾を遭ひ、本國に召還せられしか、遂にして遁れスパルタに奔り其力を藉りて本國に復仇せんことを圖る。スパルタ人其謀を用ひ、デセリア (Decelea)

アスキネスを距る二哩を占領し以てアスキネスに迫り、而して後名將チリハス(Gilippus)を遣しシラクシースを援けしむ。アスキネスも亦デモスス・ニーズ(Demosthenes)を以て將となし、新艦隊を派し急よ之を攻めしめ、兩軍大に海上に戦ひ、アスキネスの軍遂に敗れ、ラマカスは戦死し、ニシアス及デモスス・ニーズは擒にせられて死せり、(紀元前四百十二年)是よりアスキネス海軍の勢力大に損せり。

ヘロホンニース 戦争の終結及アスキネスの衰微 シラクシース戦争後はスパルタの兵威益振ひ、又小亞細亞海岸なる彼斯太守より錢穀等を供給せられ、其勢日よ盛となり、アスキネスを頼みれば、外は同盟諸國離叛し、内は貴族等の欺を敵に通するありて國狀日よ非なり。スパルタはデセリアに城砦を築き、且海軍を擴張しイチーアン海諸嶋のアスキネスに屬するものを侵略せり。是に於てアスキネスは再アルシバイアティーズを召還し(アルシバイアティーズは是より先スパルタを逃れて彼斯の太守テサフーニーズ Thasphanes)に依れり。海軍を都督しスパルタ人は侵略せられたる諸島を回復せしめたり。是より以後の戦争は多く小亞細亞の近海ありて、一勝一敗未決せざりしか、遂に紀元前四百五年に至り、アスキネスの艦隊はヘルレスポントのイーコスホタミ(Thospatami)に於てスパルタ海軍の大將リサ

ンター(Tyrant)の爲に撃破せられ、盡く其船艦を奪はれたり、其翌年リサンターは兵艦を率ひ、アスキネスの西岸ヒリアス(Hierax)を陥れ、スパルタの陸軍は陸路よりアスキネスを圍む。アスキネスは海陸共に通路を絶たれ、城中飢餓に迫り、遂に出で降を乞へり。是に於てスパルタ人は其船艦を交附し(十二艘を除きて)同盟諸國を獨立せしめ、又ヒリアスの城壁及其アスキネスに連續せる長城を毀ち、而して共和政治を廢し、スパルタに善き貴族三十人を以て寡人政治を組織せしむ。是實に紀元前四百四年なり。是よりしてアスキネスはスパルタ同盟の一邦となれり。其翌年に至りアスキネスは寡人政府を廢し、稍自由の政體を復することを得しといへども、復舊時の如く盛なること能はず。然れども文學哲學等も於ては依然として希臘の牛耳を執れり。

第四節 スパルタ及スィーブズの朝

スパルタの状態 ヘロホンニースの戦争後、スパルタは希臘全國の主權を掌握し、各部の自由制度を廢し壓制なる統御を行へり。是に至りてヘロホンニース戦争に於て、希臘諸國のスパルタを援けアスキネスの暴威を挫きし所以のものは、適以て第二の壓制者に資した

るか如し。蓋スパーテス、コリンス等の如きヘロポンニサスの捷利に與りて大功ありしものも、
 管に平等の權理を回復することを得ざりしのみならず、甚しきは奴隸を以て遇視せら
 るゝに至れり。翻りてスパルタの内情を見れば、ライカーガス時代の嚴格なる氣風は漸く消
 失し、加之外國戰爭に於て數多の金銀國內に流入し、人民をして識らず知らず奢侈懦弱
 に陥らしめたり。

彼斯この戰爭

自由を渴望せる希臘人の氣象として久しくスパルタの壓制に甘する
 能はず。スパーテス、コリンス、アゴス等の諸國、アスキネスと同盟し、スパルタの強威を挫き自由
 を回復せんと欲せり。是より先、彼斯王アタクサーキシズ二世の弟サイラス小亞細亞にあ
 りて自立を謀り、有名なる一萬兵士(Ten Thousand)と稱する希臘軍(史家ゼノフォン Xenophon
 の率ゆる所なり)の援助を得て東伐せしか、クナクサ(Cunaxa)バビロンの近傍)の戦に於
 てサイラス戦死し希臘の軍退引せり(紀元前四百年)小亞細亞太守テ、サファーニズは希臘
 人のサイラスを援けしを怒り、再小亞細亞にある希臘の都府を羈轡せんとし、しかば、スバ
 ーテ王エジシレアス(Agesilais)報を得て小亞細亞に入り、屢彼斯の兵と戦ひて之は勝ち、
 進んで其内部に侵入せんとす。彼斯王大に懼れ、陰に貨財船艦をスパーテス、コリンス等に

贈り、之に勸めてスパルタに叛せしむ。スパルタの大將リサンダー之を伐ち、同盟軍とピオーシア
 と戦ひ敗れて死せり。是に於てエジシレアス俄に軍を收めて本國に歸れり。(紀元前三百
 九十四年)

スパルタ覇權の衰兆

エジシレアスは同盟軍とコロニア(Corona)に戦ひ之を破りしと
 雖、スパーテスの兵亦勇敢にして善く戦へり。此役やアスキネスのコーノン(Canon)は希臘及彼
 スの艦隊を率ゐてスパルタの海軍と戦ひ其船艦を破碎せり。是に於てスパルタは彼斯と和
 親を講じ、不名譽の「アンタルシダス」(Antalchida)條約を締結し、小亞細亞にある希臘の
 都府を盡く彼斯に與へ、且希臘の列國をもて獨立せしむ。(紀元前三百八十七年)然れど
 もスパルタ人は猶侵略の念を息めず、常に機を見て乘せんとす。偶マセドニアにある希臘の
 都府オリンス(Orinus)首として其近鄰の諸都府と聯合せしかば、スパルタ人之を攻め、
 三年間(紀元前三百八十三年より三百八十年まで)にして降せり。又同時スパーテスの貴族
 黨はスパルタの將に依り共和政治を倒して寡人政治を創建し、スパルタ鎮臺の力に憑り暴
 戻を姿にせしかば、共和黨の主なるものは多くアスキネスに奔り、恢復を謀れり。是に於て
 かスパルタとスパーテスとの戰爭起り、リニクトラ(Lenchro)の一敗其主權を喪ふに至る。

スパータスの恢復及覇　スパータの勢力猶盛なるの時、當りて、隱然強敵の其下、顯出せるあり。是より先、スパータ共和黨の首領、ペロピダス(Pelopidas)は其黨與と俱に陰にアスキスより還り、スパータの鎮將を逐ひ寡人黨の首領を殺し、而して共和政治を恢復せり。紀元前二百七十九年、是に於て有志の士群起し、久しくスパータと交戦せしか、紀元前三百七十一年、エパミノンダス(Epaminondas)はスパータ王トリークトラに激戦し、大に之を破る。エパミノンダスは深沈にして大度あり、將略に長ず。富貴にして俊邁なるペロピダスと莫逆の友たり。其後エパミノンダスは屢ペロポンネーサスに侵入し、スパータを奄壓し、嘗てスパータ人より征服せられたるメッシニアの獨立を回復し、又アーカーディア(Arcadia)の同盟及獨立を確定せり。是に於てスパータの勢威地は墜ち、スパータ獨り希臘國の主權を握るに至れり。

覇權の衰微　スパータスの隆盛に赴くや、希臘の諸國之を妬み、アスキスの如きも初スパータに與せしが、嫉妬の餘遂にスパータと同盟せり。紀元前二百六十二年、エパミノンダス復ペロポンネーサスに侵入し、マンティニアに於てスパータ及アスキスの兵と戦ひ捷利を得しといへども、亦重創を蒙り命を殞せむ。其後之に代るべき英傑なく、スパータ遂に衰ふ。

希臘の衰微　爾後希臘國は復一英傑の能く其國をして盟主たらしむるに足る者なし。且ペロポンネーサス及スパータ、スパータの戦争に由て國力漸く疲弊し、其餘力幾くもなきの時、當り、北疆に於てマセドニア軍國勃興し、將は希臘全土を併呑せんといせり。

第三期　マセドニア時代 (Macedonian era)

第一節　フィリップ王

マセドニア　マセドニアは希臘の北方に在りて、其王家は希臘人の子孫なりと云ふといへども、人種は純然たる希臘人にあらず。希臘の盛時に當りては、慥悍粗野、未文化の何物たるを知らず。歴代の諸王曾て希臘の事に關與せしことなかりしり。時を経るに従ひ、其制度軍制等を取り稍張大を致し、スパータのエパミノンダスの死後二年を経、一の英主出でて王位に登れり。其名をフィリップ(Philip)と云ふ、アミヌス(Aminias)王の子なり。

フィリップ王の心事　フィリップ王は天資聰明英達、幼にしてスパータに質となり、(紀元前三百六十八年)希臘の治體文藝に通習し、又エパミノンダスの軍略を學べり。即位の後(三百六十五年まで)「テラックス(Thalax)」と稱する勇敢の軍隊を編成し、マセドニアの海岸にある希臘の植

民地を侵略し其疆土を擴めたり。蓋王の素志始より希臘を征服し其版圖に歸せしめんとせしに非ず、唯希臘列國の一に加はり其内事に干涉せんとしよに過ぎざりしか如し。

ホーシス戦争(第一神聖戦争)　フイリッポ王の渴望は一の機會に遭ひて果されたり。初スパーアズ人は「アムフクシオーニク」會議を利用し、ホーシス人を己の治下に屬せしめんとせしか、ホーシス人之に従はざりしのみならず、デルフイの殿堂を擄掠し、ススサリに侵入し勢甚猖獗なり。フイリッポはスパーアズ人の請を應じ奮ひて報復の任に當り、ホーシス人を破り、其連合國ススサリを戡定し、然る後スパーモヒリを踏え希臘に入らんとし、アスニズの艦隊其險を阨すと聞き、退きてカルシデアス (Carthage) 半島にあるオリンスを攻む。アスニズ人之を援ひしか其効なく、遂にフイリッポの爲に略奪せらる。(紀元前三百四十三年) 其後フイリッポはスパーアズと連合しスパーモヒリを踏え、ホーシス人を伐ちて大に其罪を糺せり。其功によりフイリッポはホーシスに代りて「アムフクシオーニク」會議員となり、且其管理を掌ることを得たり。是よりしてフイリッポの志益大となり、遂に希臘を并吞せんとするに至れり。

希臘の滅亡　フイリッポのオリンスを攻むるや、アスニズの大辯説家デモス・ニーズ

フイリッポの志小ならざるを看破し、有名なる「フリビクス」(Philippic) と稱する演説に於て熱心にアスニズ人を警醒せり。又デモス・ニーズに反對せるマセドニア黨あり。國論紛然決する所なかりしか、フイリッポの「アムフクシオーニク」會議の命を以て、ロケリア人を滅し、第二神聖戦争緊要なる都府エラテア (Elatea) ホーシスに在り) を占領するに及びて、アスニズ人大に驚き、デモス・ニーズの力に由りスパーアズ人と聯合せしと雖、亦既に晩かりき。紀元前二百三十八年、フイリッポはアスニズ人及スパーアズ人とケロニア (Cheronea) に戦ひ大に兩國の軍を破り、又進んでペロホニニサスに入り、スパルタの大半を侵略し、之をメスシーニア、アーゴス及アーケーディアに分與せり。是に於てか希臘の自由全く滅亡せり。フイリッポはコリンスに大會を開き、希臘諸國をしてマセドニア主權の下に立たしめ、而して諸國の兵を統へ彼斯を伐ち、以て希臘人の爲に往年の役に報せんとせしか。紀元前三百三十六年臣下の爲に弑せられたり。

第二節　アレキサンダー大王の雄圖

アレキサンダー大王　フイリ、フ粗して其子アレキサンダー大王位を繼ぐ、アレキサンダーは豪邁卓落にして、其才能遙に父王の右に出つ、幼にして哲學の大家アリストートルに薰陶せられ希臘の教育を受く、紀元前三百三十六年二十歳にして位に即く、希臘の列國其弱冠なるを侮り、スイーフス主として之に叛きしか、忽にして王の爲に討滅せらる、是より希臘全土翕然として王の命に従はざるものなし。

彼斯遠征　紀元前三百三十四年春アレキサンダー歩兵二萬騎兵五千を以て彼斯遠征の途に上り、ヘルレスホントの海峡を越え、小亞細亞なるクラナイカス(Cranicus)河に於て彼斯の軍を破り小亞細亞を従へ、次年イササス(Issus)の大戦又大勝を得てシリアを征服せり、此役や彼斯王タライアス二世軍にありしか遁れて本國に歸り、王母王妃及王子皆虜となれり、アレキサンダーは彼斯王を逐ひ國內に侵入せず、反て道を轉して地中海岸に沿ひ、彼斯の屬國バレストアイン、フィニシア等を征服せり、獨りタイル市其富彊を恃みて降らざりしか、七月の後終に平けられたり、是に於て王は直に埃及に入り之を従へ、アレキサンドリアの大阜頭を建て以て三大洲商業交易の中心となせり、是其遠謀の存する所なり、アレキサンダー遂に其鋒を東に轉してユーフレイテ、イス及タイグリス河を渡り、紀元前三百二十一年アスシ

リアのギーガム(Chaganeh)に於て彼斯百萬の大軍と戦ひ之を破る、彼斯王僅よ身を以て免れ東北境に奔り遂にバクトリアの大守ベササス(Bessus)の殺す所となる、アレキサンダーは進んでバビロン、シーサ及パーセポリス(Persopolis)を征略し數多の寶物を得たり、王時よ年二十五歳なり、而して西亞細亞の君主となり、光榮富貴極めざる所なかりしも、滿胸の功名心は鬱勃として逸樂は安んずる能はず、又進んで裏海の南東なるヒルケーニア(Hyracania)バクトリア、ソグディアナ(Sogdiana)等を服し、アレキサンドリア府を創建し、陸地商業の中心となし以て希臘の開化を東方諸國に施せり。

印度遠征　アレキサンダーは是より方向を轉して、殷富の稱ある印度を征せんとし、インダス河を下りて北印度なるヒタスピス(Hitaspis)河に於て印度王ホーラス(Porus)と戦ひ之を破り、進んでヒフシス(Hyphesus)河に達せり、(紀元前三百二十六)是に至りて將士多く東に進むことを肯んせず、王已を得ずして軍を班へし、分ちて二隊となし、其將ニアカス(Nearchus)をして艦隊を率ゐ、インダス河を下り海に浮んでユーフレイテ、ズ河に回航せしめ、王自陸軍を率ゐる種々の艱難は遇ひ彼斯は歸れり。

大王の終焉　アレキサンダーのシーサは達するや、タライアス三世の女を娶り、希臘の將士

をして彼斯の婦女と婚せしむ。蓋王の意は彼斯及希臘を合して一大帝國を創建せんとししにありしなり。而るに紀元前三百二十三年王熱病に罹りバビロンに於て逝けり。年三十三。王壯にして殂し、復遺志を續くものなく、雄圖長く没すといへども、其事業の大なる歐洲諸帝王中空前絶後比類を見ず。獨り其事業の大なるのみならず、其遺績は長く後世に傳へて滅びざる者あり。蓋アレキサンダーの四方を征服するや、速に之を得て速に之を失ひしと雖、一時所謂世界國を創建し大に世界の形勢を一變せり。王の過ぐる所多く都府を建設し之に移すに希臘又はマセドニアの人民を以てし、歐洲の開化を東洋に輸入せしを以て、希臘種族にあらざる諸國民中にも、亦希臘語行はれて政治及文學上の通語となれり。是故に希臘は一方に於て漸く政治の自由を失ひしといへども、他方に於ては大に智識上の勝利を得しものと云ふべし。

第三節 アレキサンダー帝國の分裂

アレキサンダーの繼續者 アレキサンダーの殂するや、王族中其位を繼ぐに足るべき人物なく、王の死後、妃ロキサナ(Loxane)の生めるアレキサンダー二世幼冲なるを以て、アレキ

サンダーの將ハルテウカス(Harticus)其後を在りて政令を執行し、他の諸將を各州の大守に任せり。然れども諸將各權勢を争ひ久しく戦争せしが、紀元前三百一年小亞細亞のイフサス(Iussus)に於ける大決戦以後、アレキサンダーの帝國は數州に分裂せり。而して其主なるもの三あり。即セリ、一カス(Solonus)のシリア及東國、トレミー(Phalerny)の埃及、カスサンダー(Cassander)のマセドニア及希臘是なり。

シリア王國 アレキサンダーの繼續者中セリ、一カス及トレミー最著る。セリユーカスは多年戦争の後、西はヘルレスポントより東はインダス河に至るまで、盡く之を掩有し、セリユーカス王國を建立せり。首府アンテオカイア(Antiochia)はセリユーサイア(Solonia)と共に繁盛の都會として、希臘の開化を移植し東方開化の中點となれり。然れども其子孫に至り叛亂相繼ぎ、廣大なる版圖も漸次縮小し、僅にシリア一國を有つに至り、紀元前六十四年羅馬人の爲に滅さる。

埃及王國 アレキサンダーの死するやトレミー、ラチ(Pholomy Tasi)埃及を領せり。王賢明にして豪邁なり。大に海陸軍を盛にし、西はシリーネ(Cyrene)北はバレスタイン、フニシア及シリアの南部を包括せり。其政治は務めて埃及の舊慣に従ひ、宗教は希臘埃及の元素を混用せ

り、王は又大に文學を奨励し、其創建せる圖書館、博物館の如きは當時世界に著しく、藏書數十萬卷、以て四方の學者文人を招致せり。トレミーフィラデルフス(Ptolemy Philadelphus)トレミーユーアチデース(Ptolemy Evergetes)二王相承け、能く父祖の業を繼ぎ、又大に商業技藝を勧め、アレキサンドリアは世界商業の中心となり、希臘文學技藝の燒點となれり。其後國勢陵夷し、女王クレオパトラ(Cleopatra)の代に至り羅馬の版圖に歸せり。(紀元前三十年)

マセドニア及希臘　アレキサンダーの訃音希臘に達するやアスキニズのデモスネニス、ヒペリデース(Hyperides)はアスキニズ人民を煽動し、首として獨立を唱へ、イトーリア(Hellia)アゴス等の諸國と聯合し、マセドニアの太守アンティパター(Antipater)をスサリーのラミア(Lamia)城に圍みしが、克蘭ノン(Cranon)の戰(紀元前三百二十二年)に於て希臘人大に破れ、アスキニズ人降を乞ひ、ヒペリデースは殺され、デモスネニスは自毒を仰きて死せり。爾後希臘の形勢大に變し、其強國と稱すべきはマセドニア、アキア(Achaia)イトーリア及スパルタとす。是より先、カスサンダーのマセドニアを得しより争亂常は絶へず、紀元前二百七十八年アンテ、ゴナス・ゴナタス(Antigonus Gonatus)遂に王位に登り、其子孫紀元前百六十八年に至

るまでマセドニアを統御せり。ゴナタス王以後希臘に於て勢力あるものをエキア同盟とし、イトーリア同盟とす。エキア同盟はコリンス灣南側の十小都の連合より成りて、其目的は諸都の自由を恢復せんとするにあり。紀元前二百四十年頃シシオン(Sicion)の加盟せしより其勢力益擴張し、コリンスを以て首都となせり。イトーリア同盟はコリンス灣の北岸に起り、其品格威望はエキア同盟の下に在り。エキアの同盟能く其目的を達せしを以て、スパルタ人の嫉む所となり、遂に兵を構ふるに至る。此時スパルタは獨立を保ち、エチス(Achaia)四世及クレオメニース(Cleomenes)三世相繼ぎ、ライカーガスの憲法を興復し、大に國力を養成し、エキア同盟を攻略せり。エキア人はマセドニア王アンテ、ゴナス、ドーソン(Antigonus Doson)の援を乞ひ、スパルタ王クレオメニースをセルレーシア(Sellisia)に擊破せり。是に於てクレオメニースは埃及に遁れ、スパルタはマセドニアの治下に屬せり。而して之が爲にエキア同盟も亦權力自由を殺滅せられたり。其後イトーリア同盟の勢亦盛となり、エキア同盟と戦ひしかば、エキア人は復マセドニア王フィリップ二世(ドーソンの子)の援を得て之を破れり。

羅馬人の勝利　此頃羅馬人は漸々其版圖を擴張してカスキスと戦ひ、更に其鋒を東方に轉じ希臘に侵入し、イトーリアと同盟しエキアを攻む。紀元前百九十七年フィリップは

羅馬人とシノスセフ、リー (Cynosephalae) に戦ひ大に破れて和を講じ希臘の獨立を許せり。パーセアス (Perses) 繼ぎ立つに及びて又羅馬人とピトナ (Pythone) に戦ひ生擒せられてマセドニア國終に亡ぶ (紀元前百六十八年) 其後希臘は暫時獨立せりと雖、紀元前百四十六年に至り羅馬の郡縣となれり。

第四章 希臘の開化

總説 希臘史は其關する所、輿地の一小部分に過ぎず、又其盛時の記事は僅々百数十年間 (希臘文明時代は紀元前五百年彼斯戰爭より二百三十八年マセドニア王フィリップの戦勝に至る) に過ぎずといへども、凡歴史として有する所のものは、希臘史中盡く之を具備せざるはなく、真正の文明、真正の自由の何物たるを世に教へたるは實に此人民なり。且政治法律より百般の學術技藝に至るまで、獨立以て之を創造し、範を後世に貽し、幾千年後の今日、各國をして其遺澤に浴せしむること果して幾何なるを知らず。吾人は是より希臘の文明を略叙し、以て其自て來る所を知らしめんとす。

第一節 政治の發達

概説 前章に於て既に政治の大體を記述したれば、茲には只其變遷の自る所を略叙して止まんとす。抑希臘の土地は自然に山岳河海によりて區劃せられたるを以て、之を統一せる中央王國あるなし。是故に各種族一方に割據し、各種の政體を建て、殊に前述せるが如くドーリアン族民とアイオーニアン族民とは其資性を異にし、一は寡人政治を貴み、一は共和政治を愛し、其作爲せし所甚殊れりといへども、要するに希臘の純然たる共和政治 (スパルタ同族民の都府を除く) に達するの間、種々の政體を経歴せるを見る。

君主政治 希臘の太古に當りては、各種族中より秀拔せるもの出て、之が首長となり指揮者となれり。是に於てか君主政治起る。トロイ戰爭時代に於て既に世襲王者あり。此等の王は戦時よ於ては大なる權力を有し、平時に在りては民會を召集し議案を交付す。又至大の土地を領し其収入によりて生活せり。然れとも王權は甚制限せられ、臆力、識見、經驗、財産等に於て他者より超越せるに非ずんば、大に權力を振ふことを得ざりしなり。ヘルレニース人民の大移住其局を終り希臘の開化始めて其端を發するに及びて王侯の獨裁政治 (假令制限せられたるにせよ) は以て人民の心を満足せしむるに足らざる。

是に於て新政體(共和政體)の將に起るあらんとす。紀元前七百年比に至りては希臘全土王政を廢し、之を存するは唯スパルタの有名無實の王位と、希臘北方の未開國とあるのみ。

寡人政治 然れども政權は直に一般の人民に歸せずして少數貴族の手に歸せり、之を貴族政治(Aristocracy)又は寡人政治(Oligarchy)と云ふ。政權を掌握するものは大抵其種族中の富貴にして知識あるものなり。而して國政を處理するには會議を開き多數によりて之を決せり。然れども貴族中に在りて傑出せるものは、時として古代王者の權力を行ひしことあり。

豪族政治 往時王政の衰へたるか如く、貴族政治も亦衰へて中等社會の富貴なるもの政權を握るに至れり。之を豪族政治(Timocracy)と云ふ。此制は財産の多少を以て參政の權を定むるなり。豪族政治の未鞏固ならざるに、又新に破壊的政治出來り。其政體從來の王政に類せり。之を僭主政治と云ふ。

僭主政治 貴族平民政權を争ふの際、衆望あるもの其間に出で、兩者の權を奪ひ自君主となる。之を僭主(Tyrant)と稱す。僭主といへる語は、從來君主の設立せられさりし都市に突然出て、王權を握りしもの、稱にして、必しも暴政を行ふもの、謂にあらず。然れども僭主は多く虐政を施せしを以て、後遂に轉じて暴君の稱となれり。僭主にて有名なるはアスキンのパイシストラタス(Pisistratus)コリンスのペリアンター(Periander)サモスのキリク

ラテ、リーズ(Polycrates)等なり。此制は幾年をらすして破滅せり。

共和政治 君主政治と寡人政治との争は、恰寡人政治の共和政治(Democracy)に赴く争の前驅を爲したるが如し。蓋所謂寡人政治の中にも自共和の元素を含有せざるものなし。夫の至る所として民會の設立ありて立法行政の事に參與するが如き以て見るべし。アスキンの如きは純然たる共和政治に達せしより人民皆參政の權を有し、平等の地位を得、思想、言語自由ならざるはなく、國勢駸々として日に進み、政事文學技藝皆榮然として人目を驚すに至れり。

第二節 宗教

概説 希臘太古の宗教はフィニシア人の媒介によりて、東洋諸國自然教の思想を移植せしもの、如し。然れども自然神教は希臘に入りてより特殊の發達を爲し、漸々化して

道義的勢力を有するに至れり。夫ホーマー、ヘシオッド (Hesiod) の詩により開發せられたる神教によれば、萬有は凡て神の命によりて制裁せられ、一事一象皆神靈の寓するにあらざるものなし。此等の諸神の生活は人類と同一にして、人類の有する資性感情は盡く之を具有せり。但其人間より卓越せる所は、自在の行爲、至大の權力を有するにあり。要するに希臘人の所謂神は具足圓滿の人に外ならず。故に太古の英雄ヘラクリース (Hercules) の如きも半人半神として尊敬せられたり。蓋希臘神の功德はホーマー、ヘシオッドの詩筆によりて頌揚せられ、其容貌はフィディアス (Phidias) ポリクリータス (Polycletus) の彫刀によりて美妙にせられたり。而して此等の諸神は人間に運命を賦與し、且雷電、飛鳥、夢幻等によりて人間に交通せり。此等諸神の中最著るもの十二神となす。

十二神 十二神は人界と同じくオリムパス (Olympus) の靈域に於て神政府を組織し、會議を開きて神人の事を議すと云ふ。

一、ジュース (Jove 一名 ジビター) 天神なり神人の父主にして風雷雨電を驅使し、又時月を定めたり。

二、ヒーラ (Hera 一名 ジュノー) ジュースの妃にして夫婦の神なり。

三、ポサイドン (Posidon 一名 ネプテューン) ジュースの弟にして海神なり。

四、アスィーナ (Athena 一名 ミナーヴァ) ジュースの頭より生れ、藝術智識の神にしてアタイカの鎮守たり。

五、アポロン (Apollo 一名 アポロー) ジュースの子、日神にして詩歌音樂藝術及豫言の事を掌る。

六、アールテミス (Artemis 一名 ディアナ) アポロンの妹にして月及田獵の神なり。

七、アールス (Ares 一名 マース) ジュースの子にして軍神なり。

八、アフロダイタ (Aphrodite 一名 ヴィーナス) 海水の泡沫より生れ、美及愛の女神なり。

九、ヘファイスタス (Hephaestus 一名 ヴァルカン) ジュースの子にして火及彫刻鑄の神なり。

十、ヘステイア (Hestia 一名 ヴェスタ) ジュースの妹にして竈及幸福の神なり。

十一、ハーミーズ (Hermes 一名 マーキュリー) ジュースの子にして能辨・權略・商業の神にして又神使なり。

十二、デミーター (Demeter 一名 シトリーズ) ジュースの妹にして稼穡の神なり。

デミーターの女はパーセフネ (Persephone)にしてジュースの弟ヘーダイーズ (Hades 一名 プルトーン)に嫁し、共に地下の神となれり。又デミーターと共に酒神ダイオニオサス (Dionysus)合祭せらる。

神託及祭儀 希臘人は皆信ず、神は種々の徴表によりて人間に未來を告知し、且高尚なる託宣によりて人民の行爲を決定せしむ。此神託は僧侶の掌る所なり、而して神託を發する所は處々にあり、就中ドドーナ (Dodona) の「ジニス」神及デルファイの「アホルロン」神の託宣最著る、又諸種の國祭ありて希臘諸國及植民地の人民皆參集す、其著名なるもの四あり、一をオリムピアに於けるオリムピア祭(「ジニス」を祭る)とし、二をデルファイに於けるピティアン (Pythian) 祭(「アホルロン」を祭る)とし、三をコリンスに於けるイスマミアン (Isthmian) 祭(「ホサイドン」を祭る)とし、四をニミア (Nemea) に於けるニミアン祭(「ジニス」を祭る)とす、而してオリムピア祭最盛なり、オリムピア祭は四年毎に舉行せられ、競走競馬、角觥、擊劍等の競戯あり、此競技に勝を獲たるものは褒賞を受け、大に衆人の喝采を得るなり、後世に至りては此等の祭儀は際し、詩人、歴史家より樂工、畫師、彫刻家に至るまで皆來集り、各其能を衒ひ其技に誇り、天下の名聲を博せんことを勉めたり、是故に此等の國祭は唯一ヘルラス國の民情を結合せしむるのみならず、亦文學技藝商工等に裨益を與へしこと甚大なりと云ふべし。

第三節 文學

概説 希臘文學の善美高尚なることは、常に古代諸國の上に超駕せるのみならず、近代の文明國といへども企及し易からざるものあり、其詩歌、歴史及能辨學の如きは、皆後世の瞻仰模式する所なり、蓋希臘人の雋爽明快なる性情は大に文學に渙發し、其光輝は希臘文明の大要部分を占領せり。

叙事詩

希臘文學に於て初めて興りしものを詩歌 (Poem) とす、或は諸神の能力を

賛美し、或は英雄の事蹟を詠歌し、以て聽くものをして高尚の思想、美麗の感情を發起せしむ、而して詩歌の先驅を爲せしものは叙事詩 (Epic Poem) なり、ホーマー、ヘシオ

トの如き皆此詩體を用ひたり、ホーマーの「イリアド」及「オディッシー」二大篇の如きは、簡潔

よして高古、精緻にして典麗、實に叙事詩の儀表にして絶世の傑作たり、而して風土の美麗なる小亞細亞の植民地 (アイオーニアン族) に興り、ホーマーは紀元前九百五

十年頃小亞細亞の植民地に住せしと云ふ、然れども夫一篇の如きは、近世に至りホーマー一詩人の手に成るにあらずして、アイオーニアン族 (小亞細亞植民地) 詩家の補綴に成るを疑ふものあり、要するに此一篇は數百年來人口に傳誦せしか、アスキュス僭主

ハイストラタスの時に至り、始めて之を書に筆せられたり。紀元前八百五十年頃ヘシオドといへる詩人ピオシアに出づ、其著多くは神人の事を教訓するを以て目的となせり。而して其詩に於て王政より民政に移るの階段を表はせり。其名篇中「ス・オ・ニイ」(Theogony)は世界の開闢及神の成立を叙し、神人時代の事に屬すと雖、「ウ・イクス、エンド、デイス」(Works and Days)は全く民政の性質を有し、稼穡の事を記せり。

叙情詩 紀元前七世紀の中葉に至り叙情詩(Lyric poem)と稱する新詩體起る。叙情詩は重に音楽に和するものにして神祭舞踏に用ふ。アーキロカス(Archilochus)ターテ、ニアス(Mylreus)先興る。ターテ、ニアスはスパルタ及メスシーニアの戦に當り、軍歌を作り大にスパルタ軍の勇氣を鼓舞せりと云ふ。之に次ぎて出でしものをアルシアス(Melampus)及女史サフォー(Sappho)とす。最後に出でしものをアナクレオン(Anacreon)シモニデーニス(Simonides)ピンドー(Pindar) 紀元前五百十八年より紀元前四百四十一年までとす。ピンドーの詩は最宏壯にして時人の稱する所たり。**戯曲** 戯曲(Drama)は紀元前第五世紀ヘリクリーズの時代に於て完善美妙の域に達せり。戯曲は酒神「ダイオニサス」の祭禮に用ひしより起る。戯曲に二種あり。悲體、喜體と曰ふ。イスキラス(Ischylus) 紀元前五百二十五年より四百五十六年までソフ、クリーズ(Sophocles) 紀元前四百九十五年より四百〇六年まで及ユーリピデ

アイズ(Euripides) 紀元前四百八十年より四百十六年までの三氏出づるに及びて悲曲(Tragedy)大に發達せり。三氏の生時は皆サラミス戦争に關し、イスキラスは當時四十五年、ソフ、クリーズは十五年にして軍に臨み、ユーリピデーニスは同日に生れたり。イスキラスの悲曲今に傳はれるもの七篇、謹嚴雅正にして宗教の觀念に富めり。ソフ、クリーズの遺曲亦七篇あり。意思和醇結構清麗なり。ユーリピデーニスはアナキサゴラスの哲學に歸向し、平易の語調を以て深遠の理想を吐出し、人心を感動せしむること甚深し。遺曲の今に存するもの十九篇、皆後世の模範となる。希臘人の戯曲を演ずる時に當り、雄篇大作の小時間まで演了すべからざるものは、或齣までを口演し、其餘を所作に演ずるが如き風習は、ユーリピデーニスの創めし所なり。悲曲の盛時に當り、喜曲(Comedy)も亦勃興し、ペロポネーサス戦争後に至り完美大集せり。其最名あるものをアスキナス人アリストフ、ニーズ(Aristophanes) 紀元前四百五十二年より二百八十八年までとす。アリストフ、ニーズの喜曲は婉轉靈活、好謔百出、以て當時の弊風を諷刺し、顯官要人を筆端に弄せり。遺曲十一篇就中「雲」(Clouds)「蜂」(Wasps)「鳥」(Birds)及「蛙」(Frogs)最著也。アリストフ、ニーズの後數十年を経て、新喜曲と稱するもの起る。古喜曲(Old Comedy)アリストフ、ニーズの喜曲を云ふは重に政治の諷議、個人の刺笑を目的とせしか、新喜曲は之を反し、其材料

を社會上の状態に取り、其眼目とする所は風儀品行の上よりあり、新喜曲の傑出せる者を
メナントー (Menander) 紀元前三百四十二年より二百九十年までとす。羅馬喜曲詩の模範となれり。

歴史 眼を轉して散文を見るに又非常の進歩をなせり、而して散文は主として歴史の
 記述に用ひられたり、歴史記述の最早きは紀元前五百四十年乃至五百年にありて、**カド
 モス** (Cadmos) **タイオニシアス** (Dionysius) 及**ヘカテアス** (Hecataeus) の三氏に始る。**ヘロドタス**
(紀元前四百八十四年より四百〇八年まで) 出づるに及ひて歴史の體裁完具せり、故に人呼んぞ歴史の祖と稱す。
ヘロドタスは小亞細亞なる**ドーリアン**族の都府**ハリカーナサス** (Halicarnassus) に生れ、埃及、**シ
 リア**、**バビロニア**、**彼斯**及希臘本土を漫遊し、其風氣文物を精察し、口碑傳説を拾集し、**彼斯**
 戦争史の大著を成せり、史中記する所、唯此戦争の事のみならず、古代諸國一般の事態
 を叙述し、恰一部の古代東洋諸國及希臘史の觀あり、其文辭は流暢明快、談活の句調を
 用ひ、而して東西洋勝敗の決を以て、其政治道德の齊不齊にありとし、其極世界歴史を
 以て世界審判者と傲せるが如し、**ヘロドタス**の後**アスキュス**人**シーシデ、テューズ** (Thucydides
紀元前四百七十年より四百二年まで) 出づ、**シーシデ、テューズ**は嘗て**ペロポネーサス**戦争に關し、「**ペロポネーサス**
 戦史」を著せり、其書議論高尚、思慮深遠にして、專識者の爲に著せしものゝ如し。

ヘロドタスは叙事詩的にして事實の廣博なるを以て勝り、**シーシデ、テューズ**は戲曲的の活
 動を以て有名なり、其後**アスキュス**人**ゼノフォン** (Xenophon
紀元前四百四十六年より三百五十六年まで) 出づ、**ゼノフォン**
 は**ソクラテ、テューズ** (Socrates) の弟子にして、嘗て希臘一万の兵を率ひ**彼斯**に侵入し、自著「**ア
 ナバシス**」 (Anabasis) に於て其遠征の状態を詳述せり、其の他著書甚多し、「**サイロヘデイ
 ア**」 (Cyropedia)「**サイラス**」王子の傳、「**ヘルレニカ**」 (Hellenica) 希臘史等最名あり、**ゼノフォン**の歴
 史の平易婉麗なるは、**シーシデ、テューズ**に勝れりといへとも、論斷、事實の點に至りて
 は、遙に其後に瞠若たるを覺ふ、其他後世に至り**テシアス** (Thucydides) **フィリスタス** (Phylarchus)
ス・オホムバス (Theopompus) **エフ・ラス** (Ephorus) 等の史家出づ、希臘既に亡ひ羅馬の郡縣と
 なるに及ひて、**ポリビウス** (Polybius) **デオドラス、シキラス** (Diodorus Siculus) 等の史家あり、
 前者は「**羅馬征戰記**」を著し、後者は「**世界史**」を著せり。

能辯術 共和政體の國に於ては、辯論は政治家の關くべからざる一要具たり、己の
 意思を吐露し他の議論を説破し、以て衆庶の聲望を得んには、之によらざれば能はされ
 はなり、是故に**ス・ミストクリス**、**ペリクリス**の如き大政治家も、皆此術に長せざるはなし、
 然れども**ソクラテ**の能辯は多く天稟に出でしが、一般衆民の政權を獲るに及ひて、益辯論の

必要を感じ、遂に一の學術として講習するに至れり、能辯の大家は多くア・テ・カに出で、其十大能辯家の中イソクラテ・ーズ(Isocrates)紀元前四三二六年生、デモス・ニーズ(紀元前三百八十五年生)イスキニーズ(Ischines)紀元前三百八十九年生、最著者、デモス・ニーズはイソクラテ・ーズの門人にして、天性辯論に拙なりしが、刻苦勉勵、遂に空前絶後の能辯家となり、雄壯なる演説を以てア・ス・ンズ人の愛國心を鼓舞し、マセドニア王フィリッポに反対せり、デモス・ニーズに次くものをイスキニーズとす、マセドニア王に與し其黨派を回護し、展デモス・ニーズと抗論し、所謂「冠の演説」(Upon the crown)に於て、大にデモス・ニーズの爲に説破せられ、ア・ス・ンズを放逐せられたり、

第四節 哲學及科學

概説 希臘古代の哲學は自然哲學にして、有形界の事物に就き唯一無窮の原理を發見せんことを勉めたり、而して其先に起れるものを「アイオーニク」學派となし、次きて起れるものを伊太利學派となす、然れともソクラテ・ーズ、プレト、アリストートルの三傑出づるに及びて、希臘の哲學始めて大集し、後世に至るまで此學の範疇となれり、

アイオーニク學派 「アイオーニク」學派は紀元前六百四十年頃テ・リ・ーズ(Thales)の創むる所なり、テ・リ・ーズは小亞細亞なるアイオーニアン族の都府ミ・リ・ータスに生る、七賢の一にして政治に長じ天文に老けたり、テ・リ・ーズの萬物は水より成立し、又水に復歸すとの説を唱出せしより、アナキシマンダー(Arximander)紀元前六百十年生、アナキシメ・ニーズ(Arximander)紀元前五百七十年生、ヘラクライタス(Heraclitus)紀元前五百年生、アナキサゴラス(Arximander)紀元前五百年生、デモクリタス(Democritus)紀元前四百六十年生、相繼ぎて起る、アナキシマンダーは地理天文に通じ、始めて日計を用ひ、アナキシメ・ニーズは空氣を以て世界の心、生命の原となし、ヘラクライタスは火を以て萬物の根源となし、且萬物轉化の理を説けり、アナキサゴラスは元素説を離れ而して靈智を以て生命、運動、秩序、權力、自由、智識の大源となし、希臘哲學の一新面目を開けり、嘗てア・ス・ンズにありて教授し、仇者の讒に遭ひ刑に處せられんとせしが、其友ヘリク・リ・ーズに援けられ、ア・ス・ンズを放逐せられたり、デモクリタスは原子論を創説し、世界の萬物は原子の分離及結合により成立すとせしめり、

ピソ・ゴラス學派 伊太利學派は分れて二となる、一を「ピソ・ゴラス」派と云ひ、一を「イリアテ・ク」(Iliatic)派と云ふ、「ピソ・ゴラス」派は「ピソ・ピラス」(Pythagoras)の創むる所

なり。ヒス、ゴラスは紀元前五百八十年サモス嶋に生る。身體魁梧、精神活潑にして算數學、幾何學、及音樂に達せり。壯年希臘本土、伊太利及埃及に遊ひ。大に得る所あり。後下伊太利なる希臘植民地に移り、大に其政教に關し、弟子交友甚多く、ヒス、ゴラスを敬畏すること恰鬼神の如し。ヒス、ゴラスは數を以て萬物の原儀となし、靈魂の輪廻(埃及人より得る所)天體の運行を説けり。

イリアテ、ク學派　イリアテ、ク派はゼノフ、ニース(Xenophanes 紀元前五百七十二年生)の唱道せし所なり。伊太利のイリア(III)に興る。故に此名あり。其説に曰く、神と世界は一體にして、宇宙は始かく終なく動なく止なく、無窮不變、恰環の端なきが如しと。パーメニデ、ニース(Parmenides 紀元前五百四十年生)　ツ、ノー(Zeno 紀元前四百六十年生)　エムヘドクリーズ(Empedocles 紀元前四百九十二年生)等之を祖述せり。エムヘドクリーズはヘラクライタスの轉化説を折衷し別に一派をなせり。

詭辯家　ペロポンニ、ニース戦争以來人心漸く腐敗し、詭辯家(Sophist)起り、郷愿偽徳好んで詭辯を弄し、以て世道人心を誘惑せり。ゴルチアス(Gorgias)　プロタギラス(Protagoras)　コ、ヒアス等其尤なり。

ソクラテ、ニース　ソクラテ、ニース(Socrates)は希臘の道德敗壞し詭辯家天下に跋扈せるの時、アス、ニズ彫刻師の家に生る(紀元前四百六十八年)ソクラテ、ニース以前の哲學は皆萬有の事理を解釋せんことを務めしがソクラテ、ニースは之に反し、人間處世の要道を教示するを以て任となし、稠人廣衆の前に於て其道を談論し、諄々として倦まぬ。其詭辯家に對するに及びては、辯證式を用ひ、縱説横論餘力を遺さず、自其非を覺らしめて止む。要するにソクラテ、ニースの哲學は倫理學に根し、專人生の要道を以て其學徒を陶冶し、常に戒めて曰く、「吾身を省察せよ」と。而して躬、正義道德を實行し、廉潔謹儉を以て人を導けり。又一神説、靈魂不滅論を説けり。然れどもソクラテ、ニースは自信に篤く肯て苟屈下せざるが爲に、其仇敵益多く、終に邪説國を亂るを彈劾せられ、敢て少しも分疏せず。毒を飲むの刑に處せられたり(紀元前三百九十九年)其將に死せんとするに臨みて、猶朋友弟子に諭くるに靈魂不死の理を以てし、從容嚴肅、神色少しも變せざりしと云ふ。ソクラテ、ニースの哲學は問答體として著書の後に傳はるなしといへども、後來高弟フレト、ニースに因りて大に其旨を發揮せられたり。

フレト、ニース　フレト、ニース(Plato)は紀元前四百二十九年アス、ニズの右族の家に生る。希臘人の

思想行爲の最發達せし時にして、諸般の教育を受け、殊に詩術に長せり。ソクラテースの死後メガラ(Megara)に行き、ユークリッド(Euclid)と交り、埃及に遊ひ東洋賢哲の説を聞き、下伊太利に渡りピソゴラス學派のものと其議論を上下し大に得る所あり。道德の範圍を超えて博く智識の根元を究めんとし、アスキネスに歸り、アカデミー(Academy)の園林に於て徒弟を集めて講授せり。此よりて「アカデミック」學派の名を得たり。プレートの哲學はソクラテースより出で、他學派の説を折衷し、極高の理想を以て概念論を創爲せり。其説によれば人間の靈魂は宇宙に於ける純然たる理想即概念なり。而して此理想は定存不動のものにして、世界は轉化變遷の現象なり。世界と理想とは、譬へは猶影の形に於けるが如く、偽の眞に於けるが如し。此定存轉化の總因は神即最高の理想なり。然れども神の理想は人智の曉知し得べきにあらず、其模形即眞、善及美の理想に則すべきなり。此を以て身を修め國を治むれば、則福祉圓滿なるべしと、享年八十一なり。其遺書は問答體にして何れの篇も於てもソクラテースを以て談主となせり。

アリストートル アリストートル(Aristotle)は紀元前三百八十四年マセドニアのスタテラ(Stagira)に生る(紀元前三百二十二年歿す)。父はマセドニア王の侍醫たり。十七歳アスキネスに來

りプレートの從ひ、二十年間其薰陶を受け、俊秀の名あり。後マセドニアに聘せられ王子アレキサンダーを教育し、再アスキネスに還り、公園の樹蔭に逍遙し哲理を講せしを以て、人之を稱して「逍遙」(Peripatetic)學派と云ふ。プレートの哲學は内觀を主とせしが、アリストートルは之より異り外觀を先きよせり。即萬有の現象より普遍の眞理を發見することをして主旨となせり。プレートの所謂理想即概念は其考究の結果終點たるなり。アリストートルは學力深達、識見精微、苟智識道德の範圍に屬するものは悉く之を窮めざるなく、希臘哲學史上更に一新路を開拓し、其流風餘音施きて二千有餘年の今日に及へり。著書甚多く、論理、博物、倫理、政治等の書最著る。其語法の體裁及美麗は、プレートの問答篇の風韻あるに及はずといへども、系統の整齊、説明の明瞭なるは遠く其右に出づ。

他の諸學派 ソクラテースの一人ひ徳を以て幸福の基となしよより、門弟子等各性の近き所を得、分離乖隔、諸種の説を立てたり。アリステウス(Aristeus)は紀元前三百八十年頃、は心身の快樂を以て最上の善となら、以て人生の目的となせり。而して「シリチ」(Cynic)學派の祖となれり。「シリチ」(Cynic)學派の祖たるアンテステス(Antisthenes)は紀元前四百二十二年生)は之に反し、素朴儉節を以て人生の目的となし、而して心裏の愉快を

を以て外慕の念を絶たんことを務め、痛く富貴逸豫を戒めたり。其門人テオチニーズ(Dioscorus)に至り益其主旨を擴張し、人生の便利快樂は凡て之を絶拒し、粗衣破靴市中を彷徨せり。人呼んで犬儒と云ふ。蓋其素行の累々然として犬に似たるを以てなり。シリチ學派は「エピキ・ーリアン」(Epicurians)學派の父となり「シニク」學派は「ストイック」(Stoic)學派の母となり「エピキ・ーリアン」學派はエピキ・ーラス(Epicurus紀元前三百四十二年生)の創むる所にして、其説によれば人間存在の目的は幸福にあり、即精神上の幸福を得て自足を知るにあり。而して徳と賢とを以て幸福を得るの道となせり。而るに其門弟子に至りては物質的即情欲的の幸福を充たすを以て目的となせり。「ストイック」學派はツィーノー(紀元前三百三十年頃)の創むる所にして前説に反せり。曰く人生の幸福は神性に近くにあり。其目的を達するには徳に由り自然に則り、五官七情の欲を窒かざるべからずと。此際又懷疑學派(Skeptics)と稱するものあり。ピルロー(Pyrrho)の創むる所なり。其説に曰く、世界の事理は人間の智力の能く知悉し得る所にあらずと。而して疑を以て最高の原則となせり。而後復大家の起るものなく、希臘哲學は陵夷して振はず。

科學 科學は文學哲學等に比して其進歩甚遅々たりき。ペロホンニース戦争時代に當り、

近世醫學の鼻祖たるヒポクラテース(Hippocrates 紀元前四百六十年より三百七十二年まで)出て、大に實驗上及學術上の光明を發てり。アリストートルも亦科學的に博物學を記述せり。然れども科學はマセドニア時代殊にアレキサンドリアに於て大に發達せり。博物學、天文學及數學の如きは其進歩最著し、既に希臘の盛時に當りて其の平常の必要よりして數學殊に天文學は多少發達せしが、バビロニア及埃及と交通するに及びて益精密に趣けり。紀元前二百九十年頃ユークリッドアレキサンドリアに於て幾何學及星學を開き、數學の基礎として今日に至るまで尙其効力を存せり。ユークリッドに次ぎ天文學、數學の大家輩出せり。エラトススニース(Eratosthenes紀元前二百七十六年生、シリチの人)はアレキサンドリア博物館長にして、初めて地理學を學術的に講究せり。アーキミデース(Archimedes 紀元前三世紀の頃シ、リー島のシラキースに於て)は數學、物理學に長し、秤量學及機械學の開祖たり。アリストアーカス(Archimedes 紀元前三世紀の頃)は近世に於ける太陽系統の原則を開説し、地球の運動、晝夜の變更を説明せり。ヒ・パーカス(Hipparchus 紀元前二世世紀の頃)は古代天文學者の泰斗にして初めて日月の蝕を推算せり。

第五節 技藝

概説　ペリクリーズ時代よりアレキサンダー大王の死に至るの間は、希臘技藝の最發達せる時代にして史上空前絶後の光輝を發つて、蓋美の情感は一般希臘人の賦性に根じ、宗教道德より公共の事業に至るまで、皆此情感の寓する所にあらざるなく、發しては壯嚴なる堂宇となり、美妙なる神像となり、逼真なる繪畫となり、公館劇場より道路遊園に至るまで、一として美術を以て飾装せざるはなし。然れども私人の住屋に至りては法律の制裁ありて甚質素なり。

建築術　希臘建築術の長所は、建築物の各部均齊調和して一の完善なる全體を構成するにあり。而して其建築に三種の様式あり、ドーリアン(Dorian)アイオーニアン(Ionian)「コリンシアン」(Corinthian)と曰ふ。蓋建築の要部たる圓柱の形狀異なるに由る。ドーリアン風は細長高尙にして柱頭の裝飾頗精緻なり。コリンシアン風はアイオーニアン風に近くして、其柱頭は華麗美綉を極めたり。ドーリアン風の本埃及より模倣せしものにして、彼斯戦争以前には一般に行はれ、ペリクリーズ時代に至り完善の域に達せり。其建築の最著る

しきものをアス・インズの「パース・ノン」(Parthenon)神殿及オリムピアに於ける「ジ・イス」の神殿とす。「パース・ノン」神殿はアクロポリス(Acropolis)の丘上にあり。女神「アス・ナ」を祭る。純白なる大理石を以て構造し美觀人目を眩すと云ふ。オリムピアの神殿はアルフ・リアス(Alphons)の岸上にあり、其基礎亦大理石を以て造り、神像の彫刻は「パース・ノン」神殿と同じく有名な彫刻家フィデ・アス(Pheidias)の手で成れり。アイオーニアン風殿堂の著名なるものはエフ・サス(Ephesus)に於ける「アーテミス」の神殿(古世界七奇の一)にして、祝融の災に遭ふこと三回、毎に之を再建し其舊觀を失はず。「コリンシアン」風はアレキサンダー以後に至りて始めて大に行はるゝに至れり。

彫刻術　彫刻術も亦ペリクリーズ時代に至りて完美の域に達し、殊に人像彫刻の術に至りては精緻巧妙、後世能く其規矩を踰ゆるなし。是蓋希臘體操術の結果、能く體軀の強堅を致し以て大に彫刻者の資益となりしに由れるなり。希臘古代の彫刻術は未東洋模倣の風を脱せず。而して彫刻の物質は木石等なりしなり。彼斯戦争後に至りて金屬象牙の彫刻術開けたり。希臘彫刻者の泰斗をフィデ・アス(紀元前四百八十八年より四百三十二年まで)とす。其作る所のオリムピアなる「ジ・イス」の神像及アクロポリスなる「アス・ナ」の神像の如きは、最高尙典雅を極

ひと云ふ、ポリクリート (Polyclētus) 紀元前四百二十年頃) とす。
アゴスに於ける「ヒラ」の神像を以て名あり。又同時に ミロン (Myron) あり、精緻を以て著る。其後名あるものを スコパス (Scopas) プラキステリース (Praxiteles) 紀元前三百二十年頃) リシパス (Lysippos) とす。此時代の彫刻は美麗を以て勝れり。スコパスは「ダイオニサス」の像を以て著れ、プラキステリースの「ナイダス (Nidias)」に於ける「アフロダイト」の神像は美の模範として其名世に高し。リシパスは銅像に長し「ジュース」神及「ヘラクリース」の巨像最著る。希臘の作像術此に至りて其盛美を極む。門弟「カリニス (Carion)」又「ローダス」日神の巨像を作り、古世界七奇の一に數へらる。

繪畫 繪畫の術は建築術、彫刻術より後に開け、其進歩も甚遅緩にして彼斯戰爭以來始めて獨立の技術となれり。其最初に起りしものを「ポリグノータス (Polygnotus)」とす。ペリクリニスと同時にして美姬を畫くに長し、其「アスニズ」公館に畫ける「彼斯戰爭」及「デルフイの殿壁に畫ける」トロイ戰爭の圖の如きも甚有名なり。「ジーキニス (Zeuxis)」及「パルシニアス (Parrhasius)」出て其技益進めり。「ジーキニス」嘗て葡萄を描きし時、鳥來りて之を啄まんとせしと云ふ。「パルシニアス」の畫も亦眞に逼り人其畫なるを疑ふに至れり。「アペルリース (Apelles)」

亦名あり。アペルリースの畫は精密嚴正にして彩色の美を以て著れ。其畫く所の「アフロダイト」女神の海より昇るの圖最有名なり。其後「ニシ阿斯 (Nicias)」パルシニアス (Parrhasius) 等の畫家出てたり。

第六節 社會の狀態

概説 吾人は是より希臘社會の狀態を記せん。然れども希臘人の生活は多く公事に連關し、純然たる社會内部の狀態に至りては、其外部即政治・文學・技藝等の壯麗なるに似す、甚不可なるものあり。希臘各國民相愛の情乏しが如き、(他國民には公共の官職に就くを許さず、又其名を以て職業を營むを禁じたる如き) 家族生活の卑下なるが如き、奴隸公行の如き是なり。

アスニズ及スパルタの社會 アテカの住民は古來四族 (ペニ) に分れたり (クリスス、ニーズの時に至るまで)。「テロンテリース (Terontes)」即貴族、「ホフリテリース (Hoplites)」即武士、「アガテリース (Argives)」即農夫、「イチコリス (Egicoris)」即牧者、是なり。各族は又三「フラトリ」(Phratry) 即義兄弟の義) に、一「フラトリ」は又二十「チンテリース (Centas)」即同

族の義)に、一「チンテリス」は又多少の「ハース」(Hearth 即家族の義)に分れたり。四族は「アホルロン」の共同祭儀に於て結合せられ、其他は各祖先の祭祀に於て一致せり。而して土地所有主は他の勞役者に對して往々族長の關係を有せり。是に於て「ユーパトリッド」(Eupatrid 即地主の族)即、貴族と平民との別を生ぜり。スパータ人即ラコニア人は三階級より成り、第一は「スパルテ、アテ、アテ」(Spartiate)と稱し、公民にして純然たるドーリアン族に屬し、ラコニアの大半を割有せり。第二は「ペリシイ」(Perioeci)と稱し嘗てスパータ人に制服せられたるエキアン族民にして政權を有せず、少許の土地を分與せられて軍務に服せり。第三は「ヘロト」(Hilot)と稱し久しき抵抗の後、服従せるエキアン族民にして、公民の奴隸となり其土地を耕せり。

教育 アス、ンスに於ては男兒七歳に達すれば直に學校(多くは私塾なり)に入り、文典、音樂體操を修む。而して心思を優雅にし體力を強壯ならしむるは教育の主旨なり。是を以てホーマ、ヘシオ、ドの詩篇を暗誦し、或は琴瑟を彈し、又十六歳より十八歳に至るまでは多く體操に従事せり。而して他日公會饗宴の奏樂及國祭の競技に出づるの準備をなせり。希臘諸邦の教育法概之に準ず。但スパータは大に其趣を異にせり。此は既に前章

に於て記せし所なり。スパータ教育法の彼が如く異なる所以のものは、其外圍の状態の然らしむる所なり。蓋スパータの奴隸の數は公民に十倍し、動もすれば反亂を企て其束縛を脱せんとするを以て、スパータの壯年は平常武術を訓練し身體を強健にし、以て之に備へざるを得ざりしなり。

家族の状態 希臘に於ては父權甚大にして、幼兒の運命は一に其父の手にあり。彼幼弱者を路傍に委棄するが如きは、ス、ア、スを除くの外希臘全國の公認せし所にして、プレ、ト、ト及ア、リ、ス、ト、ルの如きも視て以て常となせり。而して女兒は殊に此處待に遭へり。幼兒、若、人の救ふ所となれば成長の後其奴隸となるなり。又婦人の地位はホーマ以後一層下れるが如し。婦人は唯衣を縫ひ食を調するの外更になす所なく、常に閨奥に蟄して其夫と俱に社會に出づることを得ず。其狀猶奴隸の如く一の特權あるなし。妾を畜ふるが如きも當時にありては公衆の怪む所たらざりしなり。但スパータ及ドーリアン族の諸邦に於てハ婦女の地位稍高く、烈女勇婦の出で、男子を援けしこと史上往々見る所なり。

演劇及談宴 演劇は亦希臘人の公共事務に屬し、神祭に際して之を舉行す。演藝は朝より暮に至り貴賤老若皆之を觀る。卓越なる俳優は衆人の尊重する所にして、當時の俳

優は概戯曲の作者なり。悲哀戯曲に於ては專、神徳及英雄の功績を演し以て信仰及敬慕の念を起さしむ。又時々滑稽戯曲を演することあり。又「シムホシウム」(Symposium) 即談宴と稱する饗宴あり。音樂の起ると共に默然たりし衆人俄に快活となり、或は談笑し或は吟誦し、歡娛の中、夜を徹することありと云ふ。

産業 希臘人全體の營爲する所は、重に公共の事件に關せざるはなし。民會に參集し體操を演し演劇を觀、狩獵を爲す等、常其職業の如くなれり。是を以て日常の産業は概之を奴隸に委して顧みず。アリストートルも「農業を營むものは最良の人民なり」といへり。然れども希臘諸邦の公民は直接に農業に従事するものなし。工業商業の如きは多少注意せられ、殊に商業の如きはアスキアスに於て重要な地位を有せりといへども、スパルタ人の生活は全く軍事に關し、商工業を輕蔑して之をヘリシ人ヘリシ人に委せり。

奴隸 希臘文明の大汚點は奴隸制の公行したること是なり。希臘人は奴隸を以て世界の要具と見做せり。希臘全土に於る奴隸の數は良民に凡六倍せり。アテカアテカに於ても一時二萬一千の良民に對し、一萬の被保者(政府の保護を受けて生活するもの)と四十萬の奴隸ありしと云ふ。而して奴隸は皆其姓名服裝等に因り識別し易からしむ。アリストー

トルをして「幾分の人民は奴隸の爲に生れたり」と公言せらるるも、深く怪むは足らざるなり。然れどもアスキアスアスキアスに於ては奴隸を遇すること他の都府より寛大にして之を鞭打することを禁じたり。スパルタに於ては之に反し其待遇殘忍を極む。スパルタの奴隸は「ヘロットヘロット」及「メスシーニア人メスシーニア人」にして、メスシーニア人の虐待せらるること「ヘロットヘロット」より甚しと云ふ。

第五章 羅馬 (Romae)

總論

概説 羅馬は古世界と新世界とを連結せる所の關鍵なり。蓋古世界の文化は盡く羅馬帝國に湊合し、而して更に羅馬系統の下に融化變形せられて、再近世歐羅巴諸國民に撒布せられたり。今試し希臘史と羅馬史とを比較せば、大に其觀を異にせるを見るへし。彼は數多の小國に分裂し、其勢力甚振はざりしが、此は則統一せる一大帝國を建立し、結合亦密にして勢力甚熾なり。彼は思想上に於て勝を制し、自由の何物たるを示せしが、此は則強盛なる兵力、明嚴なる法律、普通なる宗教によりて諸國民を風靡結合せしめたり。而して彼の滅亡するや、其歴史及技術家、政治家の事業の外、一も遺物なかりしか。此

の滅亡するや、西歐の大國民は其破片零碎より勃興し、而して其等の國民の法律、習慣、文學、宗教等皆羅馬の胎内より發生せしに非ざるものなし。其事業の雄偉にして後來に惠施する果して如何なるや。

土地 伊太利の國たる地中海三大半島の中央にありて、北はアルプス(Alps)山より限劃せられ、東西南の三面は繞らす海を以てし、而して上中下の三部に分れたり。上部はベータス(Padus 即ホーポ)河の流域に沿へる一大平原にして、中部以南は其形長舌の如く、アペンナイン(Apenines)山脈、北より南に亘り脊骨の狀を爲し地を東西に區分せり。然れども海岸は凸凹少なく港灣乏しきを以て、伊太利人は自然航海の術に短なりき。上伊太利は北アルプス山より南アプニン山の間の地にして、シーサー(Casert)以前は未伊太利に算入せられざりき。域内に三州あり二リグリア(Liguria)ニガルリア・シスアルバイナ(Gallia Cisalpina)アルプス山南の此方なるゴールの義にしてホー河貫流せり。三ヴェネチア(Venetia)東北極隅の州なり是なり。

中伊太利は北はルビコン(Rubicon)河及マクラ(Maro)河より南はシルアラス(Silars)河及フレントー(Frento)河に至るの地にして、西方には(一)エトルーリア(Etruria)ニラテ・アム(Latium Tiber)河の南よして其南岸に羅馬府あり(二)カムパニア(Campania)の三州あり、東方には(四)アムフリア(Umbria)五ビシニウム(Picenum)

(三)サムニウム(Samnum)の三州あり

下伊太利は又大希臘國といふ其海岸に數多の希臘植民地あるを以てなり。西方には(一)リケーニア(Lucania) (二)ブラティアム(Brutium)の二州あり、東方には(三)アピリア(Apulia) (四)カレフリア(Calabria)の二州あり。

其他島嶼の大なるものにはシ・リー、サーディニア、コーシカ諸島あり

人民 伊太利には言語風俗を異せる數多の人種あり。然れども之を大別すれば左の如し(一)エトラスカン(Etruscan)或はタスカン(Tuscan)と云ふ。太古はアルプス山よりタイバー河の間を蔓布せしが、ゴール(Gauls 即セルト(Celt)人の侵入せしより上伊太利を驅逐せられ、終にエトルーリアの地に占居するに至れり。エトラスカン人は言語、風俗、他の諸人種と異りて(或は云ふアリアン人種に分派せるものと)羅馬の未興らざる前より大に開化し、十二の獨立せる都府の聯合を爲せり。此人民は建築技藝に長じ、農工及商業に於ても夙に進歩し、又深く豫言を信じ鬼神を信仰せりと云ふ。(二)ゴール人は紀元前五世紀の終今日の佛蘭西國よりアルプス山南に侵入し上伊太利を占領せり。(三)伊太利人は純粹なるアリアン族民にして、希臘人と密接の關係を有せり。中伊太利は殆ど此人民の占居する所

よして數多の種族に分れ、サベルリアン(Sabellian)人及羅甸(Latin)人最著る。(甲)サベルリアン人は中部アフェンナイン山の山地より大希臘の北方アドリアテ・ク(Adriatic)海岸に住せり。サビン(Sabin)人、アムフリアン(Umbrian)人、サムナイト(Samnite)人等之は屬し、カムパニア人、ケ・ニア人、フラ・テ・ア人等又サムナイト人より分派せり。(乙)羅甸人は西海岸の平地なるラテ・アムに住し、サベルリアン人と同じく耕作牧畜を營み、特は自由を尊重し、三十の獨立せる聯合都府を建てたり。初アルパロンガ(Alphounga)府其首位は立ちしか、羅馬に城くに及びて其勢益熾となり、遂に伊太利の諸人種を結合し羅馬帝國を創建するに至れり。

史期の區分 羅馬の歴史は之を分ちて二期となす。

第一期 王政時代(紀元前七百五十三年より同五百九年まで)

第二期 共和時代(紀元前五百九年より同二十七年まで)

第三期 帝政時代(紀元前二十七年より紀元四百七十六年まで)

第一期 王政時代 (紀元前七百五十三年より同五百九年まで)

第一節 羅馬府の創建

古來の傳説 羅馬府の創建に就きては古來の傳説、後世の考究區々にして枚擧に遑あらず。羅馬人の信する所に據れば、羅馬はトロイ滅亡の後伊太利に遁逃せる勇者イニース(Inias)の子孫ロム・ラス(Romulus)の建つる所なりと云ふ。而して創建の年代は通常ウ・ロー(Varro)の算する所に從ひ紀元前七百五十三年となせり。

創建の略史 羅馬府創建の歴史は荒唐信すべからざるもの多しと雖、要するに羅馬は本、エトラスカン人及サビン人と接境せるタイバー河の右岸にある羅甸人の一小區として、パライン(Palatin)と稱する小丘の巔にある一小村落なりしことは信するに足るが如し。此村民は羅甸種族中のラムニース(Ramnes)即羅馬人と稱する部族に屬し、後近傍のテ・テニス(Titens)族、クイリナル(Quirinal)丘上にあるサビン人の部落及リユーセリース(Luceres)族(シリアン(Caelian)丘上のエトラスカン人の植民)と聯合し以て漸々強大の勢を致し、終に伊太利を統治し更に進んで一大帝國を建立するに至れり。

第二節 王政

七王 羅馬は當初王ありて之を統治せり。口碑の傳ふる所によれば七王ありて相繼ぎ

位に登れり。然れども此間の事蹟は荒漠信するに足らざるもの多し。

最古の憲法

羅馬國家は羅馬王家の統御する所にして、統治の權力は一切眷族の首長たる國王に屬す。而して國王は從屬して之を補佐する所の眷屬を「パトリシアン」(Patricii)

羅馬

(三)即貴族と稱す。ラムニース、テチニス及びクィンティウスクィンティウスの三族是なり。此三族は又各十

「クィンティア」(Quintii)即族に分れ、各「クィンティア」は又十「クィンティウス」(Quintus)即、姓)に別る。國

王は此貴族の中より撰舉せられ、終身政權を執る。王は緊要なる事件を議する爲に、各

「クィンティア」より十人の「セネイト」(Senatus)元老院議員)を撰任し、又貴族の家長全體より組

織せられたる「コンシリア」(Comitia Curia)と稱する會議を召集して法律を規定し

宣戰講和を議決せしむ。而して王は此會議により撰舉せらる。貴族即府民の外は「プレビヤ

ン」(Plebeian)と稱する平民の階級あり。此階級はあるものは率ね他國の人民にして羅馬

馬

の支配に屬し、自由の人民なり。雖、政權を有せず。又平民の一部「クライエント」(Client)と

稱し貴族に隸屬する所の階級あり。

サーウィアスの憲法

第六王サーウィアス、タルリアス(Servius Tullius)の時に至り最始の憲法を皇張せり。蓋當時平民の數次第に増殖せるを以て、サーウィアスは平民を同一の府民と

王

見做し、以て貴族と同じく參政の權を與ふるに至れり。而して貴族平民の兩族を混合し、

其財産の多寡に應じ五等の階級に區分し、以て租税及兵役の義務を課せり。此他尙第六

の階級は「プロレタリアン」(Proletarian)と稱する無産の人民あり、政權を有せずして正規

の兵役を免除せらる。五等の階級に屬するものは凡て百九十二の「センテナリー」(Century)即

百人組)に分れ、其中八十組は上級(財産上)に屬せり。(之に騎士の十八組屬す、故に騎士及上級合、

此組合の議會を「コンシリア、センテナリーエータ」(Comitia Centuriata)と稱し、嘗て貴族の專有せ

し議政の權を有し、未悉く其意の如くならずと雖、而も一般の平民をして參政の權を

得しは、羅馬政治上の一大進歩と云はざるべからず。サーウィアスは又七個の小丘上を踏れ

る羅馬府を圍繞するに輪廓を以てし、遂に羅馬をして羅匈同盟の首位に立たしめたり。

王政の廢絶

第七王タークイニアス、シニバーバス(Tarquinius Superbus)の時に至り屢戰爭をなし、終にラチナム全州の主權を掌握せり。然れども王は無限政治を施し元老官の權

力を殺滅し、人民に重税を課せしを以て、王の一族は遂に放逐せられ、羅馬は民政となれ

り。實に紀元前五百九年とす。

政

第二期 共和時代 (紀元前五百九年より
同 二十七年まで)

第一節 貴族平民の争

コンサル ターケイニウス王放逐の後には王國全く廢絶し、共和の政治は一に元老議員の掌握する所となり、「コミシア、センチリエータ」は唯之に參議するに過ぎず。而して二人の「コンサル」(Consul)と稱する執政官ありて、毎年撰舉せられ、平時に於ては司法、行政の事務を指揮し、戰時にありては軍隊の都督となる。最初「コンサル」の職に就きしものをフルタス(Frutius)及コルラタイナス(Collatinus)とす。此時に當て幼稚なる羅馬共和國は屢外國の危難を受け、國內騷然たりしが事小説に類するを以て之を略す。

貴族の壓制及トリビューン 羅馬國は共和政治となりしといへども、官職は總て貴族の私有する所たりしを以て、平民の貴族と同等の權利を得んことを望み、軋轢の久しき百数十年よ及へり。兩族争鬪の原は其由て來る所遠しと雖、貴族の負債法を以て平民を強壓せしこと潰裂の近因なり。王政廢後貴族等往々不正の制度を建て、敵國より略奪せる地は盡く其所有となし、平民に貸し租税を納めしめ、又平民をして自干戈を作り

甲冑を備へ兵役に出でしめ、而して一も其報酬を與ふることなし。平民は外は軍役に應れ内は饑餓に迫られ、遂に富裕の貴族に負債をなすに至れり。而して其利子や高く其償却法や嚴にして、若其期を誤る時は債主は法律に隨ひ之を捉へて奴隸となし其財産を沒收し、且其孥を外國に賣與す。平民は斯の如き極壓の治下に呻吟すと雖、之を救ふの法律なく、百計此に盡きしを以て終に羅馬を距る三哩許なる聖山に移住し以て新府を建てんとす(紀元前四百九十四年)。是に於て貴族大に懼れメニシアス・アグリ・パ(Menenius Agrippa)を使はし之に説き歸府せしめ、負債の未償はざるものを免し、且奴隸となりたるものを解放せり。而して又平民保護の爲に「トリビューン」(Tribune)と稱する高官を平民中より撰舉せり。此官は初一人なりしか後五人となり又十人となれり。其在職の年限は神聖犯すべからざるものとす。元老院の決議及「コンサル」の命令にして若平民の妨害となることあれば「トリビューン」は之に抗論し且之を禁止するの權を有せり。之を禁止權(Veto)と云ふ。平民議會 是より先、羅馬には「コミシア、センチリエータ」及「コミシア、センチリエータ」の二會ありて、前者は專貴族より成り、後者は財産の多寡により組織せられ、未純然たる平民の議會あらざりしが、是に至り「コミシア、トリビュータ」(Comitia Tributa)と稱する新議會起り、都

府及地方を數多の行政區劃(Comitia)に分ち、(初は二十「トライブ」なりしが紀元前二百四)此等の區劃よりして「コミシアトリビ」を組織し、而して此議會より「トリビ」を推選し、又二人の「イータイル(Aedile)」と稱する官を撰出し、以て「トリビ」を助け、市場、道路及公會遊戲の監察を掌らしむ。

カスシアスの法律 「トリビ」の政府に立ちしより平民の勢力日々駸々として増進せり、是は於て平民は又土地分配法を制定せんことを望むに至れり。從來羅馬の田園は公共の土地なるに、貴族擅に之を占有し、其從者奴隸等をして之を耕さしむ。是を以て平民は共有土地の分配を望むこと久し、然れども此願望は常に貴族の爲に阻碍せられて達すること能はざりき。紀元前四百八十六年スピリアス、カスシアス(Spirius Cassius)といへるもの出て、公共地の平民に分與せざるべからざるを論じ、土地分配法案を提出せしか貴族の爲に殺されたり。

デセムヴー 當時羅馬の法律は全く貴族の手にありて、貴族は唯習慣によりて判決をなすのみなるを以て、其意に隨ひて法律を曲くるの弊甚多し、是を以て平民は成文の法律を制定せんことを政府に要求し、「トリビ」テレンテ、リアス、アルサ(Terentius Ar-

の發議)數回論争の後、貴族遂に之を許せり、是に於て使節を希臘に遣はし、其成文法を調査せしむ。使節歸國の後「コンサル」トリビ、等の諸官を廢し「デセムヴー」(Decemviri)と稱する十大官を置き、貴族を以て之に任じ新法典を記定せしむ(紀元前四百五十年)。所謂十二銅表(法文を銅板に刻し公場に建つ、其數十二箇あり)にして羅馬法律の源泉となれり。

ミリタリー、トリビ、 最初の十大官は能く其職に副ひしか、新任の十大官に至りて任期満ちて猶職を退かず、其權力を恃み平民を抑壓せしかは、平民又一致して聖山に移住を企てたり、是に於て貴族は「デセムヴー」を廢し、「コンサル」「トリビ」を復置することをも約して平和を締へり、是よりして平民の權利益伸暢し從來は法律上にて貴族平民間の結婚を禁せられしが(十二銅表にも猶之を禁せり)、紀元前四百四十五年「カニ」リアス(Caninius)

の法律により)に至り其禁令を解かれ、平民は益進んで「コンサル」に參せんとするの勢あり、貴族全力を盡して之を拒みたり、是に於て平民は軍役の徵募を應ぜずして貴族を

苦めたりしかは、紀元前四百四十四年貴族已むを得ず「コンサル」を廢し、毎年兩者より三人の「ミリタリー、トリビ、」(Military Tribune)を撰出するの制を定む、此官は「コンサル」の權を以て軍事を指揮する國家の最高官たり、初は三人なりしが後増して八人とをせ

り、貴族は其權力の減損を補はんとして新に「センソル」(Censor)と稱する官を置けり。此官は二人ありて貴族より之を撰ひ、市民の戸籍を檢し、財産の階級を立て、且其徳義を査し、又官吏の得失を視察する等、重要なる職務を掌る。是を以て其名は平民貴族共に國政を執ると雖、其實權に至りては依然貴族の掌中にあるを免れざるなり。

エトラスカン人との戦争 貴族平民の國內に閱くの間、又外國との戦争常に絶えず。エトラスカン人の一市なるツィヤイ(Tuscani)との戦争は最久しく、十年攻圍の後、紀元前二百九十六年羅馬の大將カミルラス(Camillus)之を略奪せり。

ゴール人の侵寇 此間ゴール人は大將ブレンナス(Brennus)に従ひ、北方よりアルプス山を越え、伊太利に侵入して上部を略し、進んでアフェンナイン山を越えエトルーリアに入寇せり。羅馬人はエトルーリア人と共に之を防ぎ、紀元前二百九十年七月十八日アルリア(Allia)河に戦ひ羅馬の軍大に敗る。ゴール人終に羅馬を取り、カピトル(Capitol)羅馬の大寺を除くの外、殆全都を燒盡せり。カピトルは要害の地にしてマールカス・マンリアス(Marcus Manlius)羅馬第二の創建者(羅馬第二の創建者)と稱せらる。羅馬の勇士を率ゐて死守せり。故にゴール人俄に之を抜く能はず。攻圍七閱月にして遂に償金を取り和を講じて退けり。

リシニアスの法律

ゴール人既に退き羅馬は全市荒廢し慘狀云ふべからず。然れども羅馬人は勇氣を鼓して漸く街市を再建せしが、舊記古録盡く灰燼に委し、古史の材料蕩然たり。而して貴族は往時の特權を回復し、殊に嚴酷なる負債法を實行して災餘の平民を抑壓すること甚しく、國家の衰運其極に達せしか、幸にして二人の俊傑出で、此厄運を挽回せり。紀元前二百七十七年剛勇にして才能に富める二人の「トリビーン」

リシニアス、ストロー(Licinius Stolo)及リ・ルシニアス、セクスティアス(Lucius Sextius)出て、弊政を革

除せんことを謀り、有名なる「リシニアン法律案」を提出せり、其一條に曰く、己に拂ひたる利子は之を負債元金より除却し、其餘を三々年賦とすべし、其二條に曰く、公共の田圃は何人と雖、五百「ジゲラ」(Jugera)より多く占領すべからず。其三條に曰く、

「トリタリー、トリビーン」を廢し、再「コンサル」を置くべし。而して其一人は必平民中より

撰舉せざるべからずと、貴族は此議案に對し十年の間力を極めて抗争せしが、二人の「トリビーン」熱心に之を主張し、且官吏の撰舉、兵士の募集を阻害せしかば、貴族遂に之を抗拒する能はず。紀元前二百六十七年に至りて一個の法律となれり。然れども貴族は猶司法の職權を「コンサル」より分割し、貴族より撰任せる二人の「フリートル」(Praetor)に

委し、以て平民と衝を争ひしか、平民の權利は愈伸暢し、爾後數十年の間にして、平民の「ディクテートル」(Dictator)「フリートル」(Fretor)「センソル」等の高官に昇るもの甚多く、其權利一も貴族と異なる所なきに至り、王政廢滅後二百年間に亘れる兩者の軋轢も全く其跡を絶ち、羅馬は純然たる共和政治となれり。

紀元前三百六十六年トリビーン・セキスティアス始めて平民の「コンサル」に就けり、同三百年に至り平民は凡ての高官に就くことを得、終に祭司長にも登ることを得たり、當時の重要な官職は左の如し。

(一)二人の「コンサル」此官は元老院を召集し、其首席を占め、又軍隊を指揮す(「ミリタリトリビーン」) (二)「フリートル」(前出) (三)「センソル」(前出) (四)「イータイム」(前出) (五)「クイーストル」(Quintor)は國家及軍隊の度支を掌る(六)「トリビーン」(前出)以上の官職は凡て一年を以て任期とす、但「センソル」は初五年なりしが後一年中となれり。

最名譽ある官職は「ディクテートル」なり、此官は國家非常の際に於て「コンサル」より出で六ヶ月に更替し、在官の間は最高無限の權力を有せり。

第二節 伊太利統一

概説 貴族平民の輯睦せし以來羅馬の國勢は次第に隆盛に趣けり、蓋羅馬は本一小國にして其領地はタイバー河畔の數都市に過ぎず、其成丁の人口も紀元前第五世紀の末に至るまで僅々三十万の下にあり、而して國內騷擾常に絶えざりしを以て、從來は附近の數小國との戦争に於て自國の獨立を維持するに止りしが、今や國內既に靜謐に歸せしを以て、其勢力を他國に擴張するに至り、凡七十年間の戦争に於て、伊太利全土(中部及下部)を經略せり、其間「ゴール人」(Gauls)、「エトラスカン人」(Etruscans)、「サムナイト人」(Samnites)及「希臘人」(Greeks)との戦争ありしと雖、通常之を羅匈戦争サムナイト戦争及ヒルラス戦争の名を以て包括せり、其時代は所謂羅馬の勇者時代にして人民の才幹氣力の大に發達せし時となす。

ゴール戦争 今や羅馬は大に勢力を増加し、上伊太利に於ける強敵「ゴール人」に抗するの地位に達せり、而して數次戦争の後遂に羅馬の大勝に歸せり(紀元前三百六十七年)羅馬人は又「エトラスカン人」との戦争(紀元前三百五十八年)に於て南「エトルリア」を全く征服せり。

第一サムナイト戦争(紀元前三百四十二年)サムナイト人は中央伊太利の「アプエンティン山」中に住める族民にして、羅馬人の隣邦征服に於て最困難を感ぜし所なり、此強族との戦争は時に間斷ありしと雖、前後殆五十年に亘れり、抑此戦争の近因は「カピニア」(Capua)人

(サムナイト人の嘗て殖民せしカムパニアの一市)サムナイト人の侵寇を蒙り援を羅馬人に乞ひしに在り。羅馬人乃其請を許しサムナイトを伐ち數度の勝利を得たれども、未決戦に至らずして羅匈同盟と戦端を開きサムナイトと和を講せり。

羅匈戦争 (紀元前三百四十年より三百三十八年まで)

羅匈人は已に羅馬を同盟の長と仰くことを欲せず。羅馬

の公務上對等の權

(ラテ・アムより一人の、コンサル及元老議員の半数を撰舉せんことを主張す)

を得んことを望めり。カムパニア人亦

之と同盟す。是に於て羅匈の戦端始めて開く、**ヴェスヴィアス** (Vesuvius) の戦に於て羅馬の

將**デーシアス** (Decius) 奮戦して大に利を得、次で**トライファニウム** (Tifanum) の戦に於て羅馬

の將**マンリアス** (Manlius) 大勝を得て羅匈人遂に征服せられたり。是より同盟全く破れ、市

府の大半は羅馬の版圖に屬せり。

第二サムナイト戦争 (紀元前三百二十六年より三百四年まで)

羅馬人の隆盛はサムナイト人の嫉む所となり。又殖民地疆界の争よりして**第二サムナイト戦争**起り、延きて二十二年の永きに亘れり。

戦争の決する所は正に伊太利國主權の決する所なり。而るに羅馬人は初輕進して利を失ひ(紀元前三百二十一年)遂に和を講するの已むを得ざるに至れり。然れども元老院之を承認せずして再兵馬を動せり。爾後羅馬人連戦勝を得、サムナイト人をカムパニアより

驅逐せり(紀元前三百二十二年)此時又**エトラスカン**の諸市府サムナイトと連合して羅馬に敵す。羅馬の兵勇氣益振ひ奮撃大に其軍を破る。是に於て紀元前三百四年サムナイト人復和を乞ひ戦局を結へり。此戦争中羅馬人の殖民地は諸方に増殖し道路を開通し、以て兵馬の進退に便ならしめたり。

第三サムナイト戦争 (紀元前二百九十八年より二百九十年まで)

然れども平和は暫時にして破裂し、サムナイ

ト人復兵を舉げて決戦せんとす。**エトラスカン人**、**アンブリアン人**、及**ゴール人**相共に之を援け

伊太利全國之に靡けり。然れども紀元前二百九十五年**セリタニウム** (Serthium) の激戦に於

て羅馬の將**デーシアス・ミニス** (Decius Mius) 身を殺して敵を衝き、遂に同盟軍を破れり。其

後幾くもなくしてサムナイトの驍將**ポンテ・アス** (Pontius) 捉へらる。サムナイト人終に敵すべ

からざるを知り、紀元前二百九十年羅馬人に降れり。是に於て羅馬人はサムニウム、**アピ**

リアリ、**ケーニア**地方の境なる**ヴェニシヤ** (Vulturna) に城砦を築き、二萬の植民を置き以

て之を鎮せり。

ピルラス戦争 (紀元前二百八十一年より二百七十五年まで)

羅馬人は既に中伊太利を征服し、全州残す所は唯、

下伊太利の希臘植民地あるのみ。始めサムナイト戦争の間希臘植民地なる**タレントウム** (Tarentum)

言(三)人羅馬の船舶を毀ち且其使節を辱めたるを以て、羅馬人は又タレントム人と戦端を開けり、タレントム人其敵すべからざるを知り、援をエハイラス王ピルラス(Pylissus)に乞ふ。ピルラスはアレキサンター大王の遠親にして輕快卓越なる武人なり。是に於て大兵を率ゐ來り援く。紀元前二百八十年希臘人、羅馬人始めてヘラクリア(Heraclea)に會戦す。王勇敢善く戦ひ、又戦象を放ちて羅馬の軍を破りしが、後五年にしてベネツェンタム(Beneventum)の戦に於て大に羅馬人の破る所となり本國に歸れり。既にしてタレントム亦降る(紀元前二百七十二年)。是よりして希臘の植民地相繼ぎて降り、紀元前二百六十六年に至りては、羅馬の版圖北、ルビコン河及マクラ河より南シ、リール海峽に達し、伊太利半島皆其屬國となれり。

羅馬領民の區別　羅馬に附屬せる伊太利諸國の人民は之を三等に區別す。即羅馬人、羅甸人及伊太利是なり。蓋羅馬の版圖は實に一市府を以て幾多の市府を統綜せるものなり。而して羅馬人は漸々諸市府の人民に與ふるに市民權を以てすと雖、而も羅馬の市民權、即公民權を有するものにあらずれば全國の政事に關與し法律を議定するの權なし。又諸市の人民中には未羅馬の公民權を有せすと雖、亦所謂羅甸の特權を有するもの

あり。此特權は初羅甸の征服せられしとき羅馬人よりラティウムラティウムの諸市府に與へたるものにして、完全なる羅馬の公民權に及はずと雖、既に此權を得れば進んで公民權を得ること甚難からざるなり、之を要するは伊太利諸市の人民は、各自獨立の制度を立て、其市の政治法律に關與することを得ると雖、宣戰講和の權、外國使節應接の權及貨幣鑄造の權に至りては總て羅馬人の掌握する所たり。是羅馬政略の希臘に超越し、一方に於ては各市の自由を發達せしめ、一方に於ては其結合を鞏固ならしめたる所以にして、他日大業を成就せしむ亦此制度に基きしなり。

第三節 外國征服

概説　羅馬は既に伊太利全土の主宰となり、境域を開拓するの念は勃々として興り、國家は日又一日多事ならんとす。是所謂外國征服の時代にして、紀元前二百六十六年に起り百三十三年に涉る。而して其戦争の大なるものをピニク(Punic)征服とし、マセドニア及希臘の征服とす。

カースニチの形勢　此時に當り其近傍に在りて能く羅馬と頡頏せるものは亞非利

加北岸なるフィニシア植民地のカース・イチ（羅馬人は之を呼ひてビニニク人と云ふ）と爲す。カース・イチは紀元前凡八百五十年の頃フィニシア人の植民せし地にして、今日のテニス（Tunis）の地を占領し、夙に貿易を以て地中海に往來し、南西班牙、サデーニア、コーシカの諸島よりシリ島の大半に至るまで皆之を占領し、當時の世界に在りては最富盛なる國なり。政體は貴族政治にして百人の評議官ありて百般の政務を指揮し、國家緊要の時には民會を招集す、而して艦隊の勢力は他國に超越せしといへども、兵士は多く傭兵なるを以て、自一致結合の力に乏し、今や羅馬及カース・イチ兩國の耽々として境土を拓くに際して衝突を來すは數の免れざる所なり。

第一ビニニク戦争の近因 今茲に羅馬とカース・イチと戦端を開きし近因を繹ぬるに、初カムパニア傭兵の一隊なるマメルタイン（Mamertine）人シリ島のメスセナ（Messana）市を略奪せしかば、シラキース（希臘人の植民地）のヒーロ（Hero）王及カース・イチ人の爲に攻られて援を羅馬に求む。羅馬人之を諾し、海を渡りてカース・イチ人をメスセナより驅逐せり。之を第一ビニニク戦争の始とす。

第一ビニニク戦争 第一ビニニク戦争は紀元前二百六十四年に起り二百四十一

年に終る、初ヒーロ王はカース・イチに與せしが後之に背き羅馬と合せり。是より先、羅馬人は未船艦を作るの術に精しからず、且水軍に熟せざりしが、紀元前二百六十年に至り大に水軍を備へ、ミリー（Mylae）に於てカース・イチの軍艦を撃破せり。其後大將アテリアス、レギラス（Regulus）船艦を率ゐて亞非利加に上陸し、カース・イチを撃て之を破りしが、スパータの將サン（Xanthippus）希臘の兵を以て來援し、羅馬の軍を鏖殺してレギラスを虜にせり。是より以後の戦争は多くシリ附近に在りて、カース・イチの軍はパノーマス（Panormus）（シリ島）及イゲティアン（Igea）島（紀元前二百四十一年）に於て大に羅馬人のために破られ海上の主權を失ひ、遂にシリ島及凡四百萬圓の償金を羅馬に與へ和議を講ずるに至る。是よりシリ島はヒーロ王に屬せるシラキースを除くの外、悉く羅馬の郡縣（Province）となれり。羅馬の伊太利境外に郡縣を置く、此を以て權輿となす。其後羅馬人は又カース・イチ傭兵の内亂あるに乗じ、サデーニア及コーシカ島を取り之を郡縣となせり。

「プロツィンス」とい伊太利外に在る羅馬の郡縣を云ふ、此等の郡縣は羅馬より派遣せる鎮將の治下に立ち、實賦を輸し軍役を助くるを以て、其地位伊太利同盟國の下に在り。

イルリ、カム及シスアルバインゴール征戰 第一ビニーニク戦争の後凡十年を経て、羅馬人はアドリアテ、ク海及アイオーニアン海の沿岸及諸島を剽掠する所のイルリ、カム (Illyria 希臘大陸の北方) 人と戦端を開き、其屬島コーサイラ及一二の市府を得たり (紀元前二百一十九年) 上伊太利のシスアルバインゴール人は羅馬人の北伐の意あるを知り、トランスアルバインゴール (Transalpine Gaul アルプス山外) 人の援を得てエトルリアに侵入せり。羅馬人逆撃して大に之を破り、進んでホー河を越え、三年にして全く上伊太利を征服せり。是に於て羅馬の版圖はアルプス山に達し、プラセンチア (Placentia) 及クレモナ (Cremona) の二所に軍事植民を置き、又二大路を開き羅馬首府と連結せり (紀元前二百二十二年)。

第二ビニーニク戦争の起因 第一ビニーニク戦争後二十二年を経て第二戦争 (紀元前二

より二百〇) 起る。是より先、カースニチ人は羅馬の爲に蒙りたる損害を償はんと欲し、英雄

ハミルカー、パーカス (Hamilcar Barca) をして銀鑛に富める西班牙を征略せしむ。ハミルカー連

戦利を得、南方及東方の地を略定せり。義子ハスドルバル (Hasdrubal) 其後を承け、益地を拓き

新カースニチに城を以て根據となせり。羅馬人之を畏れハスドルバルと約しイフロ (Ebro) 河以

北を侵略するを無らしめ、而して其南方に在る希臘の都府サグンタム (Saguntum) を引きて

其保護の下に立たしめたり (紀元前二百二十六年)。然れどもハスドルバルの刺殺せらるゝに及びて、ハミルカーの子ハンニバル (Hannibal 年甫めて九歳、羅馬は不俱敵天の仇敵たることを誓へりと云ふ) 代りてカースニチ軍の總督となれり。時に年二十八 (紀元前二百二十年)、ハンニバル謀略に富み兵を用ふること神の如し、直にサグンタムを攻め八閏月にして之を陥る。是に於て羅馬はカースニチに對して開戦を布告せり。

第二ビニーニク戦争 紀元前二百十八年ハンニバルは歩兵九萬騎兵一萬二千戰象三十

七頭を以て陸路よりピレニース (Pyrenees) 山及アルプス山の險を越え (十五日を費し兵士の半を失へり) 上伊太

利に侵入し、テ、シーナス (Ticinus) 及トリビア (Trebia) に於て大に羅馬の兵を破り、アフィンナイ

ン山を踰えエトルリアに入りトラシミーナス (Tusimone) 湖畔に戦ひ又大に利を得たり。然れ

ども直に羅馬に向はず、轉じてアドリアテ、ク海岸に沿ひ下伊太利を略し、以て羅馬の手

足を断たんとす。此間、テ、クテートル、フ、ピアス、マキシマス (Publius Maximus) は勉めて其鋒を

避け其退に乗し、以てハンニバルの進路を防遏せしか、羅馬人は其緩漫なる軍略を喜ばず

「コンサル、ポールラス (Paulus) 及ヴァーロー (Varro) を擧て之に代らしめ、紀元前二百十六年ハン

ニバルとカンニエー (Cannae) の平野に戦ひ、羅馬の軍全く敗績し屍野を蔽ふに至る。是に於て

下伊太利サムニアム及カムバニアの諸市府ハンニバルの風を望んで下る者多く、羅馬大に震動せり。然れども羅馬人は愛國の精神を鼓舞し、千挫屈せず防禦に盡瘁し、紀元前二百十三年カピア(カムバニアの要市)を復してより漸く國力を挽回せり。ハンニバルの軍勢も亦少しく挫折し、援兵の到るを待ちて羅馬を圍まんとす。此間羅馬人は又兵を西班牙に出し伊太利との通路を塞ぎ、以てハンニバルの應援を絶たんとし軍屢敗る。ヒー、コーネリアス、シビオ(P. Cornelius Scipio)弱冠にして英氣あり、次て西班牙を伐ち新カース・ーチを取り之を略定せり。是より先、西班牙に在るハンニバルの弟ハストルバルは兄の軍を援けんと欲む、アルプス山を踰え伊太利に進入せしが、羅馬人の爲に要撃せられ軍敗れて死せり。ハンニバル其計に接し大に驚き軍氣頓に沮喪せり。シビオ既に西班牙を平定し(紀元前二百五年)歸りて「コンサル」に登り、シ、リーより亞非利加に渡り進んでカース・ーチを衝き屢其軍を破る。ハンニバル本國の急報を得、蒼皇伊太利を棄て、還る。紀元前二百二年シビオハンニバルをツマ(Zama)の平野に邀撃して大に之を破る。カース・ーチ力竭きて和を乞ひ條約を締結せり(紀元前二百一年)曰く悉く亞非利加外の領地を棄つべし。曰く總て軍艦(十艘を除き)及戰象を交付すべし。曰く償金として五十年間に一萬、タレント(凡二百萬、ポンド)を納むべ

し。曰く羅馬の許可を得ずして猥に兵を動すべからずと。是に於てシビオは未曾有の盛儀を以て羅馬に凱旋せり。是よりシビオは「アフリカナス」(Africanus)の綽號を得たり。

東方征略(マセドニアの征戰) 羅馬の國勢は日に駸々として進み、恰旭日の中天に昇るが如く、既に西方の主權を握り、又將に東方の主權者たらんとす。是より先、ハンニバルの伊太利に在るや、マセドニア王フィリ、フ三世竊に之を應援せんとせしを以て、紀元前二百十四年羅馬人は軍を遣しマセドニアを攻む。希臘の諸國或はマセドニアに應じ或は羅馬に與し、勝敗未決せざりしが(以上第一戰爭、紀元前二百十四年、紀元前二百七年まで)「コンサル」デー、クムクテ、アス、フニミニナス(T. Quinctius Flaminius)フィリ、フ三世とス、スサリーのシノスセフ、リー(Cynoscephalus)に戦ひ大に之を破る。フィリ、フ懼れて和を乞ひ羅馬配下の同盟國となり、償金を納れ船艦を交付し、且外國の侵地を拋棄せり(以上第二戰爭、紀元前二百百九十七年まで)是に於て羅馬人はイスマリアンの祭儀に於て希臘をして獨立國たらむことを宣言せり。

(小亞細亞征服) シリアのアンティ、オカス(Antiochus)三世は四隣を征服し大に其境土を擴

張し、カース・ーチ亡命の將ハンニバルを容れ、屢希臘人に誘はれ羅馬人と戦へり。紀元前百

九十年エル、コーネリアス、シビオ(其弟シビオ、アフリカナス之に副たり)アンテ、オカスとリディアのマグネシア(Magnesia)に戦ひ大に之を破り、トラス(Truus)山以西の小亞細亞の地と巨萬の償金とを取りて和を講せり。

ハンニバルは後ピス、ニア(Phthya)のフルシアス(Prusias)王の廷に隠れしが、事の爲すべからざるを知り、遂に毒を仰ひて死せり(紀元前百八十二年)。此年其好敵手たるシビオ、アフリカナスも亦死せり。

(マセドニア及希臘の征服) マセドニア王フィリップの子パーセアスの世に至りて大に軍備を修め、又羅馬と戦端を開く。即第三戦争にして紀元前百七十一年より百六十八年に至る。羅馬の軍初利あらざりしが紀元前百六十八年「コンサル」イーミリアス、ホールラス(Aemilius Paullus)大にマセドニアの軍をピドナ(Pydna)に撃破しパーセアスを虜にし羅馬に送る。是よりマセドニアは委靡して振はず、終に羅馬の郡縣となれり(紀元前百四十六年)。希臘國はマセドニア衰頹後一時獨立の虚名を有せしか、紀元前百四十六年エキア同盟軍の羅馬人に破らるゝに及びて、羅馬の將エル、マムミアス(L. Mummius)は當時最繁盛なる「コリンス」を破壊し同盟軍を解散せしむ。是に於て希臘はマセドニア太守の管領する所となり、遂にエキアの名稱を以て羅馬の郡縣となれり。

第三ピニク戦争の起因

ピニク第三の戦争は第二戦争の後殆、五十年にあり。

蓋此戦争は全く羅馬人の「センソル」ポルシアス、ケト(Perkins Cato)ケト、カース、チを仇視する演説を爲すにも其局を結ぶに當り必、カース、チの爲に煽動せられ、而してカース、チの以前の繁榮に復し、國力日に旺盛なるを妬み、機を待ち之を勦殄せんと希望せしより起る。故に其名とする所は當時カース、チは羅馬の許可を得ずして其隣國ヌミディア(Numidia)王マシニスサ(Masinissa)と争闘せりと云ふに在れども、其實は羅馬人暗にヌミディア王を懲懲として争端を開かしめたるなり。

第三ピニク戦争

紀元前百四十九年羅馬人大軍を擧げて亞非利加に向へり。カース、チ人大に懼れ、幼童二百(貴族の種)を質とし兵器船舶を致し、且内政を擧げて之

を羅馬に附せんと請へども羅馬人之を許さず。命するに都府を破壊し海岸を距る二哩以上の地に移住すべきを以てす。此に於てカース、チ人大に愛國の精神を激發し、寧ろ國を枕にして死するも、此の如き殘酷なる命令に従ふ能はずと決心し、防守の備を爲せり。是時に當てカース、チは一連邦の共に力を合するものなく、一兵器の能く敵に當るに足るものなし。然れども貴賤力を戮せ心を一にして日夜武器を製造し、婦人の如きは

平常最愛重する所の長髪を断ち、弓絃を作るの用に供せり。今やカース・イチ人は失望の念と愛國の情と相合し、往時の怯懦は一變して勇敢となれり。是を以て羅馬人は豫期の如く疾く其志を達する能はず。攻圍四圍年にして大將シビオ、イミリエーナス(小アフリカナス)終にカース・イチを陥る(紀元前百四十六年)。羅馬の兵侵掠を極め火を街市に放つ、煙燄天に漲り滅せざること十有七日。是に於てか數百年來繁盛を極め、七十萬の人口を有せる海上の雄國、一炬にして焦土と變し羅馬の郡縣となれり。羅馬人はユーティカ(Utica)に官廳を置き之と管治せり。

西班牙の平定 カース・イチ人の西班牙より驅逐せられし以來、西班牙は羅馬の所屬となりしが叛服常なく、且其地險にして又其人民慄悍なるを以て之を平定する甚困難なりき。第三ピニク戦争の後再シビオ、イミリエーナスを擧げて都督となし、紀元前百二十三年ヌマンティア(Numantia)を抜き遂に西班牙を戴定し、土民の據る所の北部山間を除くの外盡く羅馬の郡縣となれり。

此時代の終りに至りては羅馬は左の九郡縣を有せり(一)シ、リア(二)サーデーニア及コーシカ(三)(四)西班牙に於ける二郡縣(五)シスアルパインゴール(六)マセドニア(七)希臘(エキア) (八)亞細亞(九)亞非利加

結果ト版圖 此時代の初に當りては羅馬は唯カース・イチマセドニア、シリア王國と同列に立つを得しのみなりしが、其終に至りては地中海岸の諸嶋は勿論、亞非利加の北部より東は小亞細亞に達し西は大西洋に至り、南方歐羅巴の全部を包括して宇内の一大國となれり。

文化 羅馬の版圖は此の如く擴張せしと共に内部の形勢大に其觀を異にせり。即、下伊太利及シ、リ、島の略奪、殊に希臘の征服よりして數多の技藝品を羅馬に輸入し、且希臘の學者詩人多く羅馬に移住せしを以て、羅馬人は自然に希臘開化の刺衝を受け、學術及技藝の趣味を會得するに至れり。

弊害 然れども國內の制度破壊して終に自由を失ふに至りしは、亦實に外國征服の結果と云はざるべからず。蓋羅馬の版圖は羅馬本部の人民之が君主となり、律令を撰定し高官を撰舉し、而して鎮臺を置き郡縣を治む。郡縣の人民は勿論同盟國人と雖、羅馬全體の事件に關しては一も發言權を有せず。唯羅馬官吏の爲す所に任すのみ。又各郡縣には羅馬の市民收稅官となりて租稅を徵收す。其狀猶主人の奴隸を叱咤するが如し。是によりて同盟諸國及郡縣の人民は羅馬市民權を得んことを渴望し、終に國家の騷擾を致せ

しも怪むに足らざるなり。之に加ふるに羅馬の版圖は此の如く大なりしを以て、其版圖内より流入する所の富、擧げて計るべからず。羅馬人は一時百萬の富を得たるを以て、俄に驕傲の心を生じ、世俗一般に奢侈を尙ひ、之を公にしては道路を築造し市街を修飾し橋梁を架設し公館を建設し、之を私にしては家屋、庭園、池沼、臺榭より衣服、飲食に至るまで一に美を盡し善を極めざるなく、一飲一食の價數萬金に上り、一饗一宴、絃歌湧き銀琬玉盃四隅に粲然たり。傲奢の風此に至て極り、羅馬の景此に至て盡くと云ふべし。此淫逸の世に處して挺然其身を潔くし世人を矯正せんとせしものは、獨り一のケトーありしのみ。然れども大廈の傾く一木の支ふべきにあらず。ケトーの忠言亦徒勞に屬し、世は内訌時代となり、共和政治遂に轉覆するに至れり。

第四節 内訌

概説 既に前節に於て述べたるが如く、羅馬人は俄に大版圖を有し、屬國の富を蒐集したるを以て、世俗一般驕奢に流れ、古代羅馬人の質朴嚴正の風は地を拂ふに至れり。當時人民財産の懸隔實に甚しく、富者は其財力を恃んで益兼并を逞くし、貧者は愈々貧困

に陥り、富者の爲に其權利を侵漁せられて、共和政治は將に變して富者の寡人政治とならんとす。之を要するは古來の貴族平民の争、今は變して富者(オプティマート Optimato と稱す)の管理に於て莫大の富を致せり(ホビラー Popular と稱し極貧に)の争となり、爾後一世紀間は國內擾々として寧歲なし。

内 兩クラカス 紀元前百二十三年、トリビーン、テ、ピリアス、クラカス (Tiberius Gracchus シビオ、アフリカナスの孫) 出て、人民貧富の度を均一ならしめんと欲し、リシニアン法律(本章第二期第一節を見よ)を興復し、公共田園の所有を一人五百ジセラ以内の限り、其餘地及ハーガモン (Pergamon) 王アタラス (Attalus) の羅馬に奉せる國土を貧民に分與せんとし、遂に其法案を可決せしむ。而してテ、ピリアスは任期满ちたるを以て、人民は明年再之を撰舉せんとせしかば、貴族黨のもの之を妨げんと欲し、流言を構へ遂に攻めて其徒三百人と共に之を殺害せり。其後十年を経て紀元前百二十三年に至りテ、ピリアスの弟ケイアス、クラカス (Caius Gracchus) 撰はれて、トリビーンとなれり。ケイアス性仁慈兒の遺志を紹き更に田野法を提出し、又穀物法を設け公倉より賤價を以て毎月貧民に穀物を配與せり。又貧民一時の急を救はんが爲に公共の工事に使役し、或はカースチ等の郡縣へ移住せし

め、且當時の制度を改革し、元老官及富者の權力を減殺せんことを謀る。是を以て貴族の恨怒を招くこと最深く、在職二年にして其官を失へり。貴族黨は猶以て足れりとせせ、之を襲ふて其黨三千人を殺す。ケイアスはタイバー河岸の森林中に逃れしが、其終に免る能はざるを慮り従者の手に罹りて死せり。

メリアス及サルラ　クラカス兄弟の死後は、豪族と平民と羅馬人と伊太利人との罅隙日に甚しく、平民黨の巨魁はメリアス(Marius)にして嘗てニミテア王ジ・ガース(Jugurtha)を討伐し、又シムフリ(Othini)人及テ・イトン人を撃退して功名日に盛となり、羅馬第一流の人物となれり。豪族黨の首領はサルラ(Sulla)にして、サルラも亦屢軍功あり、威望漸く盛なり。是兩雄軋轢の原因にして羅馬史上内亂の始なり。此間の戦亂を擧ぐれば左の如し。

馬

ジ・ガースの戦争(紀元前百十二年より百六年まで)

ヌミテア王ミシンプサ(Micipsa マニスサの子)は其領

地を二子及兒子ジ・ガースに分與せり。而るにジ・ガースは領土を專有せんと欲し、長子アドハーバル(Adherbal)を殺せり。是に於て羅馬人はジ・ガースに對して戦争を布告せり。然れどもジ・ガースは羅馬の將帥に賂ひ其進撃を緩ふせしが、メリアスの將となるに及ひ

シルタ(Cilla)の一戦に大敗して擒となれり。

シムフリ及テ・イトン人の入寇(紀元前百十三年より百〇一年まで)

ジ・ガースとの戦争の未起らざる

前に當り、強武なる日耳曼人種シムフリ及テ・イトン人北方より入寇し、ダニール(Danubio)河上に出現し屢羅馬の兵を破りゴールに集り、將に大擧して伊太利に侵入せんとす。コンサルメリアス之を邀へ大にテ・イトン人をエークス(Etze)に撃破せり(紀元前百〇二年)。シムフリ人テ・イトン人の敗れしことを知らず、進んで伊太利に入りしが、メリアス又ヴァーセルリ(Vercelli)の平野に撃て之を鑿にせり(紀元前百〇一年)。是に於てメリアスは羅馬の第二創建者となり名聲籍甚なり。

伊太利同盟戦争(紀元前九十一年より八十八年まで)

是より先元老官リツィアス、トルーサス(Livius Titius)

羅馬公民權を伊太利人に與へんことを主張せしが、豪族の反對するもの多く遂に刺殺せられたり。是に於て伊太利の諸市府は同盟して羅馬より分離し、コルフ、ニアム(Corfinium)をイタリアと改稱し、伊太利同盟の首府と爲り、羅馬と同じく元老院(聯合議會)を設け、二人の「コンサル」を置き大に兵を擧げ羅馬に向へり。羅馬の將サルラ同盟軍と激戦し屢之を破りしが、羅馬人は遂に同盟國(小部分を除き)に公民權を許して戦局を結べり。

内

内

江

羅

第一ミスリデーテ、イス戦争(紀元前八十八年より八十二年まで) 同盟戦争中小亞細亞なるポンタス(Pontus)王ミスリデーテ、イス(Mithridates)は勇敢にして才略に富み、亞細亞ノ保護者を以て自任し羅馬の束縛を脱せしめんとし、小亞細亞の都府に住せる八萬の羅馬人及伊太利人を盡殺し(紀元前八十八年)小亞細亞全土を従へ、兵を希臘に遣しアスキンス、ピオーシア等を侵略せり。初此報の羅馬に達するや、メリアス及サルラ共に總督たらんことを望みしが、サルラ遂に「コンサル」に撰はれ元老官の命を以てミスリデーテ、イス征討の任を受けて希臘に向へり。而るにメリアスは之を妬み人民黨の同意を得てサルラの官を奪ひ自ら總督の任に膺れり。サルラ之を聞き軍を返へして羅馬に歸り、メリアスを亞非利加に追ひ再進發せり(紀元前八十六年)。

馬

メリアスの殺戮　メリスはサルラの在らざるに乘じ親友「コンサル」シナナ(Cinna)と謀を通じ、伊太利に上陸して羅馬に闖入し、サルラの徒黨及豪族を殺戮すること算なく、而して自第七回の「コンサル」となり幾日からずして死し(紀元前八十六年)シナナ其後を襲きしが亦其下の爲に殺さる。然れども其黨は依然權勢を有せり。

サルラの殘暴及制度　サルラはミスリデーテ、イスと會戦し大勝を得、希臘及小亞細亞の

内

都府を恢復し、紀元前八十三年に至りミスリデーテ、イスと和し、侵地及戰艦を交付せしめ羅馬に歸る。而して殘暴狼藉を極むることメリアスの上に出で、平民黨の「コンサル」及メリアスの黨與は盡く之を斬殺し、又其黨人の名簿を製し漸次逮捕して門前に斬る。驚懼叫號の聲全市に響き、腥血流れて川をなす。サルラ是に於て意滿ち志得、自終身の「ディクテートル」となり「ゴルネリアス」法律を制し、「トリビーン」の職權を制限し平民黨の勢力を滅殺し、元老院の權力を増大にし議員を増して五百人となし、而して立法行政の大權を掌握せしむ。翌年サルラは突然「ディクテートル」の職を去り莊園に歸り、紀元前七十九年に至りて死せり。メリアス及サルラの内亂に於て羅馬人の死せしもの凡十五萬人、中元老議員二百人ありしと云ふ。

証

政黨の分裂　サルラの死後羅馬共和國は黨派の爭益甚しく、國內紛々擾々として將に無政の域に沈淪せんとす。是時に當りて羅馬に四政黨あり。一を寡人黨と曰ひ、少數の者より成れりといへども、能く元老院を左右し、又共和政治を主宰するの權を有せり。ホムベイ(Tompey)實に之か首領たり。二を貴族黨と曰ひ、元老院議員の多數より成り、二三の同僚の爲に奪はれたる權力を回收せんことを勉む。クラサス(Cicero)之か首領た

羅

り、三をメリアス黨と曰ひ嘗てサルラの爲に虐殺せられたるメリアスの餘黨にして、相合して再權勢を獲んとす。ジリアス、シーサー(Julius Caesar)之が首領たり。四を軍人黨と曰ひ、嘗てサルラの旗下に屬せし將校の群にして、變亂に乗じて富貴を博せんことを望めり。カティリン(Catiline)之が首領たり。

馬

ホムベイ 初ホムベイはサルラの將校なりしが、屢軍功を立て其名大に著る。紀元前七十五年より七十二年の間メリアスの殘黨平民黨の首領サトリアス(Sothris)を戴き、西班牙に蜂起し一獨立國を建てんとす。ホムベイ伐て之を平定せり。其間數萬の劍客及奴隸の群伊太利の各所に蜂起し、剛勇なるスパータカス(Spartacus)を將とし其勢甚猖獗なりしが、コンサルクラサスの爲に討たれ其全衆ゴル地方に奔れり。會ホムベイ西班牙より還り其黨を伐ちて悉く之を平く(紀元前七十一年)。是よりホムベイの威名日に熾となり、コンサルに撰はれてクラサスと共に國事を經營せり。

海賊の勦滅

其後ホムベイは一時職を退きしが、再推舉せられ東方に於て大に其武名を輝かせり。即地中海の海賊を平け、ミスリデーテイス戰爭を完結せしこと是なり。當時南方小亞細亞の海岸に住せる浮浪の人民地中海に出没して、海岸を侵略し、或は船舶

内

を搶奪せり。ホムベイ征討の命を受け海岸及海上の全權を委任せられ、僅々三月を以て其根據を勦滅し、捕虜をシ、リー島に移せり(紀元前六十七年)。

第二第三ミスリデーテイス戰爭

是より先、ボンタス王ミスリデーテイスは一旦羅馬と

和せしと雖、其後好機を見て屢羅馬の領地を侵し、紀元前七十五年ピス、ニア(Bithynia)を

略奪せり(第二戰爭)。是に於て第三戰爭(紀元前七十四年より六十三年まで)起る。羅馬の大將リカルラス(Lucius

III)之を征し一時大勝を得しが、ミスリデーテイスは其義子アーメニア王テ、グレニス(Lucius

III)と合し、勝敗久しく決せず。是に於て羅馬人はホムベイを擧げて之に代らしむ。紀元

前六十六年ホムベイミスリデーテイスとユーフレテイス河邊に戦ひ大に之を破る。ミスリデー

テ、イス逃遁し遂に自殺せり。是よりホムベイはボンタス及シリアを従へバレスティン朝貢せ

しめ、紀元前六十二年羅馬に還り盛大なる凱旋式を以て祝せられたり。

シセロー及カティリンの亂

ホムベイの親友タルリアス、シセロー(Tullius Cicero)もその

ものあり。貴族にあらずと雖、才幹を以て諸官に歴任し、終に「コンサル」に登れり。シセローは愛國の精神に富み、希臘に於て能辯術及哲學を研究し、政治家辯論家としてデモス、ニースに比せらるゝに至れり。ホムベイの亞細亞にあるの間、サルラの余黨カティリン貧困の

証

羅

餘、竊に羅馬の無賴人を集め、時の「コンサル」シセローを殺害し羅馬府を焼き現制度を破壊し、以て自「ディクテートル」とならんことを圖りしが、シセロー其陰謀を看破し、元老院に於て其反逆の罪を鳴しよかは、カテリン遂に身を置くに處なく、エトルリアに奔り官兵と戦ひ軍破れて死し其黨與悉く殺さる（紀元前六十二年）其後「トリビーン」クローディアス（Clodius）シセローを彈劾するにカテリン事件を處するに法律に背きたるを以てして之を放逐せり。

馬

シーサー サルラの死するや其威權幸福の盛なりしを見、武舞を爲さんと欲するもの多し、ポンペイの出づるに及ひて恰王者の如き威望を有し、其幸福驕りなく其名聲天下を壓せしが、隠然其下に強大なる競争者の起るあり、其人は誰ぞ、ジュリアス、シーサー（紀元前百年生）是なり、シーサーは智勇兼備の英傑にして、辯論家とし學者とし大將とし皆其任に適せざるなし、殊に政治の才に於て最卓越せり、其家本、貴族なれどもメリアス及シンナと姻戚たり、且竊に大望を抱けるを以て、故らに平民黨に入りて其首領となれり。

第一三雄同盟 ホムペイは初寡人黨に與せしが、漸く不和を生じ、且元老院の其亞細亞遠征中の舉措を非とせしを忿り、翻りて平民黨に入りシーサーと親善なり、シーサー之に妻

内

すに其愛女を以てし、又クラ、サスを援き三人提挈して國事を圖議し、以て元老院黨を抑壓して全權を掌握せんと欲す、是羅馬史上に有名なる第一三雄同盟（Triumvirate）なり（紀元前六十年）紀元前五十九年シーサー、コンサルに撰舉せられ、期滿ちてゴールの大守となり、五年の任期滿ちて又五年の再任を乞へり、是蓋しシーサーの大望の存する所なり、ホムペイ、クラ、サスの二人は紀元前五十五年共に「コンサル」となり、期滿ちてホムペイは五年間西班牙及亞非利加の大守となれり、然れども代官を遣して之を治めしめ躬羅馬に居る、クラ、サスも亦同時に五年間シリアの太守に任せられたり、而るにクラ、サスはパース、ア（Parthia）當時彼斯はパース、ア人の爲に滅されたり」と戦ひメリホタミアに死せり（紀元前五十二年）是に於て三雄同盟一人を闕けり。

註

ゴールに於けるシーサー シーサーのゴールに在るや凡八年、（紀元前五十八年）曾てゴールに侵入したりしヘルツ、アイ（Hervii）を撃て之を退け、又日耳曼人の將アリオツ、スタス（Ariovistus）をライン河外に驅退せしが、ゴール人密にシーサーの威力盛なるを懼れ、ゴール人中慄悍の名あるベルチー（Berchta）人を煽動して兵を擧ぐ、シーサー之を平定し再日耳曼人と戦ひライン河を渡り、次て又フリテン島に上陸せり（紀元前五十五年）其第一二遠征に於てはティム

ス河に達したりしが、紀元前五十二年ゴール人一時に蜂起し、勇將ウールシングトリックス(Oringetorix)之を督し勢甚猖獗なり。シーサー奮戦して之を破り、遂に全くゴールを征服してライン河よりヒレニースに至る。紀元前五十年アルプス山を下りシスアルバインゴールの地に居住せり。是に於てシーサーの威名日に熾となり、ゴール地方の人民帖然として畏服し、皆其用を爲すを樂むに至れり。抑ゴール征服の結果たる、萬國史上に一大關係を有し、羅馬の文明を、他日史上に有名となれるゴール、ゼルマンフリテン等の諸國民に撤布せるものなり。

第二内亂 顧みて羅馬を觀ればホムヘイの威權甚盛にして、往時の共和黨及元老議員皆之に附從せり。ホムヘイは其妻(シーサーの女)を失ひしよりシーサーとの交情日に疎となり、且シーサーのゴールにありて其勢威將に己の右に出せんとするを妬み、又轉じて貴族黨を助け、シーサーを排撃せんとする。蓋シーサーの任期は紀元前四十九年を以て盡く、故にシーサーにして翌年「コンサル」に撰はれずんば下て一私人とならざるへからず。是を以て外に在りても常に其名を撰舉簿に登録せられんことを乞ひしが、元老院はホムヘイの威を畏れ、終に左の命令を下せり。曰くシーサーは紀元前五十年十一月十三日を以て太守の

任を去り其衆を解散すべし、然らざれば國敵を以て處すべしと。「トリビーンキ・ーリオ(Trinius)及エム、アントニー(Mintony) 二人之を争ひ、ホムヘイをして亦其權を去らしめんとせしも其效なく、終にシーサーの陣に奔れり。シーサーは是に於て意を決し、忠勇の兵士を率る紀元前四十九年一月本營ラヴンナ(Lavenna)を發し、ルビコン河(ゴールと伊太利とを限れる小河)に至り、沈吟少時遂に決然河を渡り羅馬に逼る。羅馬大に震動す。ホムヘイは其自シーサーに敵すべからざるを知り、其衆及元老議員と共に希臘に走り再舉を謀らんとす。シーサー一兵に岨らす二月にして羅馬に入り、直に西班牙に進みホムヘイの黨與を伐ち其枝葉を斷ち、再羅馬に還り「ディクテートル」に任せられ、次年(紀元前四十八年)又「コンサル」に撰はれたり。

東方戰爭 是に於てシーサーはアドリアティック海を横さり希臘に渡りホムヘイを撃つ。是より先、ホムヘイは「ス・スサリ」に於て大に兵を集めしが、是に至りてシーサーと「ファッセラス(Pharsalus)」の地に決戦し、二倍の衆を有せしも遂にシーサーの精兵に破られ、(紀元前四十八年八月)殘兵を率ゐ小亞細亞を越えて埃及に奔れり。埃及王トレミー、シーサーの意を邀へ其下をしてホムヘイの上陸を待ちて之を殺さしむ。シーサーホムヘイを追躡して埃及に入

り、ホムヘイの首を視、深く其末路を歎し、禮を厚くして之を葬れり。當時埃及にてはトレミー及其姉クレオパトラの間に王位繼承の争起れり。シーサー クレオパトラの色に惑ひ其言を納れ、之を援けて王位に即かしむ。是に於てトレミーは國民と共にシーサーを攻めしが、却てシーサーの爲に討滅せられたり。是紀元前四十七年にして有名なるアレキサンドリアの圖書館も此時兵燹に罹り藏書の燒亡せしもの幾萬卷なるを知らずと云ふ。埃及王位繼承の亂了るや、シーサーは直に小亞細亞に渡り、ポンタス王 フィナシス (Pharnaces) ミスリデーテ (Mithridates)の子)を撃ち暫時にして之を征服せり。シーサーの書簡(我來れり、我見たり、我勝てり)に據りて以て其迅速なりしを知るべし。

シーサーの全勝 其後シーサーは羅馬に歸り暫時滞在せしが、又亞非利加に入りホムヘイの殘黨及共和黨を征しスプサス (Thapsus)の激戰に於てシーサー大勝を得、敵兵の死する者甚多く、共和黨の願望全く絶えたり。是に於て首領シヒオ及ケト事の爲すべからざるを知り共に自殺せり(紀元前四十六年)シーサーの亞非利加より還るや、羅馬人は盛儀を具へて其凱旋を祝したりしが、幾何もなくして又羅馬を去り西班牙に入り、ムンダ (Munda)の一戰に於て悉くホムヘイの殘黨を討滅せり(紀元前四十五年)。

シーサーの獨裁政治

今や羅馬は共和政治迹を絶ち君主政治の國となれり。蓋しシーサーは未君主の名を有せずと雖、其實君主の權を掌握せり。シーサーの埃及より凱旋するや(紀元前四十六年)實に君主政治の發端にして此時羅馬人はシーサーを推擧して終身「デウス」クティトルとなし、又「イムペレートル」(Imperator)大總督の義の稱號を加ふ。「イムペレートル」は從來大將の偉勳あるものに加ふるの尊稱なりしが、今は其意義擴張し後世の「エムペロル」(Imperator 皇帝)の義を含有するに至れり。「エムペロル」の稱は「イムペレートル」を節約して用ひしものなり。シーサーの大才は能く黨派分裂國事紊亂の羅馬國を整理し、而して羅馬をして統一せる國情、即同一の權利、言語、開化を有せる世界國たらしめんとせり。故に其作爲せし所の事業甚多く、郡縣の政治を改善し、ゴール、スペインの人民に公民權を與へ、元老院議員の數を増して九百人と爲し、以て國家最高の顧問府となし、植民の擴張、商工の奨励、曆法の改正より行政、司法、財政の修理に至るまで、僅々數年の日月を以て之を成就せり。豈不世出の英傑と云はざるべけんや。

シーサーの末路

シーサーの威權其極に達すると共にシーサーは單に實權のみを以て満足せず、併せて獨裁君主の名目及外部の尊敬を得んとするに意あるを疑ふものあるに

至る。是に於て平素シーサーの威名を忌むもの此機に乗じ自由を恢復するを以て名とし、徒黨を糾合してシーサーを殺害せんことを圖る。其首領をマールカス・ジュニアス・フルタス (Marcus Junius Brutus シーサーの寵人) 及ケーアス・カスシアス (Caius Cassius) とす。元老議員六十餘名之に黨す。紀元前四十四年三月十五日シーサーは警戒ありしをも顧みず元老院に赴き、其席に座するや否や、兇徒は起ちて之を圍繞し、各短劍を抜きシーサーを刺せり。シーサー始之を防禦せしが、フルタスの劍を持するを見て敢て復抗せず。フルタス爾も亦かの一叫を遣し身二十三創を蒙り、前日の競争者たりしホムベイの像下に斃る。時に年五十六。羅馬人の感情 シーサーの死するや、自由共和の精神は尙有識者の腦中に存すと雖、一般の人民に至りては毫も之なきものゝ如し。蓋「コンサル」エム・アントニー (M. Antony) の「シーサー」を葬る時に於て、悲壯なる演説をなし其功績を頌揚せしが如き、又其遺言に依りて貧者に惠施せしが如きは、皆大に人民をして感激せしめたり。是に於て人民シーサーの殺害者を惡むの情甚強く、隊伍をなして市中を横行し、殺害者を索めて之を殺戮せり。フルタスカスシアス等の徒は蒼皇羅馬を遁逃せり。

第二三雄同盟 是より先、シーサーはケーアス・オクテューアス (Caius Octavius シーサーの姪の子) を

馬

内

養ひて嗣となせり。シーサーの死後アントニーは其威力を擅にし共和政治を破壊せんとす。るの兆ありしを以て、雄辯家シセローは大に之を論難せり。是に於て元老院はアントニーを目的に國敵を以てし、オクテューアスを「フリートル」に任じ、二人の「コンサル」と共に之を撃たしむ。アントニー「ゴール」に奔り太守レピダス (Lepidus) に倚る。レピダスアントニーと共に軍を率ゐて伊太利に進む。オクテューアス却て二人と和し、相共に連合して共和黨を滅せんとす。是に於て紀元前四十二年第二三雄同盟起る。三雄同盟は其權勢を維持せんとし、反對黨及共和黨の元老議員及貴族を殺すこと甚多く、又富家の財産を鹵掠すること勝て數ふへからず。其慘毒メリアス及サルラの時よりも甚し。シセローの如きも嘗てアントニーを撃攻せし故を以て逃走の途中追兵の爲に殺さる。

江

フィリッピの決戦 三雄同盟は既に羅馬に於て仇讐を復せしを以て、進んでフルタス及カスシアスを撃たんとす。是より先、フルタス及カスシアスはマセドニアに走り共和黨及ホムベイの餘黨を集め兵勢頗盛なり。紀元前四十二年フィリッピ (Philippi) の平野に於て兩回の激戦あり、フルタスはオクテューアスを撃退せしと雖、カスシアスはアントニーの爲に破られて自盡せり。フルタスも亦幾くならず軍破れて自殺せり。

三雄分治 爾後羅馬國の大權は盡く三雄の手に歸し、羅馬の領地を分割して之を管治せり。オクテュー・アスは西方を取り、アントニーは東方を取り、レヒタスは亞非利加を取れり。然れどもレヒタスは後オクテュー・アスの爲に併合せらる。アントニーは埃及女王クレオパトラの容色に惑ひ、アレキサンドリアに在りて安閑遊宴を事とし。遂に其妻オクテュー・ア(オクテュー・アスの妹)を去りクレオパトラと婚し、而して羅馬の郡縣を割きクレオパトラ及其子に分與せり。

オクテュー・アスの戦勝 是より先、オクテュー・アスは羅馬の人心を收攬し且兵士を訓練せしが、是に至りて元老院をしてアントニーの官職を褫き、クレオパトラを國敵として開戦を宣告せしむ。是に於てアントニーはクレオパトラと共に船艦を率ゐ、希臘西海なるアクティウム(Achium)岬に於て羅馬の軍と會戦せり。戦未半ならざるにクレオパトラ六十艘の軍艦を率ゐて遁逃せり。アントニーはクレオパトラの逃るを見、亦軍を棄て其後に從ひ奔れり。殘兵善く戦ふと雖、主將の脱出して還らざるを以て、皆オクテュー・アスに降り。是紀元前三十一年なり。オクテュー・アスは直に埃及に進入しアレキサンドリアを圍む。府兵戈を倒にして敢て抗するものなし。アントニー終に劍に伏して死す。クレオパトラ又オクテュー・アス

を盡惑せんとして成らず。オクテュー・アスの己を以て凱旋の飾具となさんとするを聞き、自毒蛇に觸れて死せりと云ふ(紀元前三十年)。オクテュー・アスは埃及を羅馬の郡縣となし、夥多の財寶を收めて羅馬に凱旋せり。

共和の末期 是に於て元老議員及人民はオクテュー・アスに加ふるに、オーガスタス(Octavianus)神聖の意の尊號を以てす。實に紀元前二十七年にして是時を以て羅馬帝國の始となす。羅馬府の創建を去る七百二十六年、國王の放逐を去る四百八十三年なり。

第三期 帝政時代 (紀元前二十七年より紀元四百七十六年まで)

第一節 シーザー、オクテュー・ヴィアス、オーガスタスの時代

帝政 オーガスタスの治世は紀元前二十七年より紀元十四年に至る四十一年の間なり。而して其治世間は依然共和の形體を存すといへども、其實は純然たる君主政治なり。蓋しオーガスタスは義父シーザーの覆轍に鑑み、帝王の名稱を僭して羅馬人の怨望を招くが如きことを爲さず。唯「シーサー」(即後世のカイゼル)の稱號を有するのみ。然れども羅馬の高官重職は漸々其一身に集り、「インペレーター」としては軍隊の總督及宣戰講和の權を掌握

し、プリンセプス (Principes 即公) としては元老院の主宰となり立法司法の事を指揮し、コンサル としては行政の大權を掌り、センソル としては元老議員を撰定し官吏の行操を觀察するの權を有し、其他官吏の撰擧、訴訟の聽斷、文教、風俗の事に至るまで一に其掌握に歸せり而して オーガスタス は溫和著實之を執行せしを以て、其目的を達するには甚鞏固なりき。

黄金時代 オーガスタス の時代にハ羅馬は安寧靜謐にして外は大に國威を輝し内は開化の高度に達し、所謂文學技藝の黄金時代にして、基督も此時を以て ジ・ディア に生れたり、又廣濶なる軍道は蛛網の如く羅馬首府と二十七の郡縣とを連絡せり、首府は廣大美麗なる殿堂、劇場、公園、遊戯場、公會堂を以て飾られ、壯大なる水道溝渠を以て便にせられたり。

帝國の版圖 當時羅馬の版圖は三大洲に跨り、西は大西洋より東を ユーフレート、エウ に至り、北は タニ、ーフ、ライン の兩河及黑海より南は亞非利加の沙漠に達せり、東西の長は凡三千哩、南北の幅は一千哩以上なり。

羅馬の版圖は近世の葡萄牙、西班牙、佛蘭西、比耳西亞、西部荷蘭、ライン 河岸の普魯西亞、バーテン 及 ウルテム

ベルグ の一部、バツ、アリア の大半、瑞西、伊太利、テ、ロル、埃太利本部、西部匈牙利、クローテ、ア、スラツ、ニア、セルツ、ア、歐羅巴土耳其、小亞細亞、シリア、パレスティン、イデ、ミニア、埃及、シレチイカ、トリボリ、テ、ニス、アルチ、リア 及 モロ、コ の大半を掩有し、其人口ハ凡一億二千万あり、奴隸の數之に半し、政權を有せる市民は數千万に過ぎず、而して羅馬府は凡二百五十万の人口を有せり。

開化の種別 羅馬の版圖は自分れて三部となり三種の開化を有せり、羅甸、希臘 及 東方 是かり、羅甸 の開化は 伊太利 の半島より ゴール、西班牙 及 亞非利加 の カース、チ 地方に及ぶ、此地方は大抵羅馬の風に化し、羅馬の風俗と 羅甸 語とは益其根基を固くせり、希臘の開化は希臘本土より其植民地及希臘の言語風俗を移植したる諸國に行はる、此諸國は政事上より見れば羅馬風に變せしが如きも、其風習、言語及智識上の事に至りては猶依然たる希臘人なり、東方 の開化は トラス 山外の諸國及 シリア、埃及 に擴張せり、此等の諸國は嘗て アレキサンダー 大王の治下に屬せしことありと雖、其本國の言語、宗教及一般の思想は未曾て消失せず、是故に羅馬の版圖に歸せし以來も、其表面は假令羅馬人なりと雖、而も 羅甸 の風習言語を採用せしこと鮮し。

日耳曼人民との戦争 オーガスタス 帝は人民の兵革を厭ふを知り、他國を侵略するこ

とを欲せざりしが、國境を固むる爲に日耳曼人民と戦端を開けり。帝はライン河外の日耳曼人を征服せんと欲し、女婿ドルーサス(Drusus)を遣し大軍を率ゐてライン河を渡りエルベ(Elbe)河邊に達せしことあれども之を征服すること能はざりき。テ、ビリアス(Tiberius)其後を承け、戦延きて數年に涉れり。而して紀元九年に至り日耳曼の雄將アーミニアス(Arnimius)テ、ートアルグ(Teutoburg)の森林に於て羅馬の守將ウーラス(Varus)の率ゆる三隊の兵を盡殺せり。是に於てライン河外の日耳曼は終に羅馬の羈絆を脱せり。

第二節 オーガスタス以後の諸帝

概説 オーガスタス死してより西羅馬帝國の滅ふるに至るまで七十有餘帝ありしと雖、其歴史は主に王家の興廢を叙するに過ぎざれば、茲には唯其重要な關係を有するもののみを記せんとす。

ジュリアン家の諸帝 オーガスタスの死するや、其婿ティベリアス位を繼ぐ。蓋羅馬の政體は法律上に規定したる君主政治にあらざるを以て、先帝の遺言によりて主權を左右することを得ず。然れどもオーガスタスはティベリアスを養ひて子となし、法律上之を承認

したるを以て、是に至りて嗣立することを得、元老院も亦オーガスタスの官位を以て之に與へたり。ジュリアン家は五世を傳へ、最後の帝をニロー(Nero) 紀元五十四年より六十八年までと云ふ。一時は精を勵し治を圖りしと雖、後殘暴酷虐なりしを以て、西班牙の鎮臺先鋒起し羅馬に迫るに及びてニロー遂に自殺せり。是より以後羅馬帝位に登りし者は、復ジュリアン家に屬せずと雖、其帝權を掌握せしを以て、通してシーサー或はオーガスタスの尊號を稱せり。

フレウ、アン家の諸帝 ニローの死後國內大に亂れ、各處の鎮臺兵皆其將を擁して帝となさんとす。而して帝位に登るを得たるもの數人あり。紀元六十九年に至りフレウ、アス、ウ、スベシーエナス(Flavius Vespasianus)シリア鎮臺より出て、帝位に登る (紀元六十九年より七十九年まで)。帝善良勤儉一時亂れたる國內の秩序を恢復し、又其將アグリコラ(Agricola)をしてブリテンの大半を平定せしむ。其子タイタス(Titus)位を嗣ぐ。タイタスは紀元七十年ゼルサレムを陥れし人にして、又溫良君子の風あり。帝の時ツ、スツ、アス(Tiberius)山破裂してボムベ、ハーカレ、ニムム(Nimma)(Herculaneum)の兩市を埋没せり(紀元七十九年)。後一世を経て、フレウ、アン家滅ぶ。

善良の五帝 紀元九十六年より百八十年に至るの間、ナーウ (Nerva) トラス (Trajan) アドリアン (Hadrian) アントニヌス (Antoninus Pius) 及 エム、オーレリアス (M. Aurelius) の五帝相繼ぎて位に登る。此諸帝は養子相繼ぎて位に即き、皆性の善良を以て著る。此中 トラス は西班牙に生る。伊太利國外の人にして始めて帝位に登りしものなり。而して帝は大に武を輝し、羅馬帝國の版圖は此時に至りて最大となれり。

軍將政治 是より以後羅馬國は所謂軍將政治にして、諸帝更立ち、其在位の年限甚短し。是時に當りては親衛兵 (Praetorian guards) 帝王廢立の權を握り、元老院は只兵士の立つる所を認許するのみ。是を以て各地方の兵士等各其將を立てんとし、一時數處に帝王の立つを見るに至れり。紀元百八十年 コムモダス (Commodus) 帝 (エム、オーレリアスの子) 立つ。帝性殘暴荒淫、無辜を殺戮すること其數を知らず。是より以後は風俗敗壞し、内亂外患相繼ぎて起り、羅馬の國勢衰頽し、帝王の死然を得しもの甚少く、多くは刺客の手に斃れたり。

公民權の擴布 既に述べしが如く羅馬帝國は伊太利と郡縣とに分れ、郡縣の人民は羅馬の公權を有するを得ざりしが二三の郡縣を除く。其後羅馬府民の郡縣に移住し、郡

縣の人民羅馬の市民權を得、交互錯綜するに至りて從來の區別相混同せり。紀元三世紀の初 カラカルラ (Caracalla) 紀元二百十年より二百十七年まで 帝の時に至り兩者の區別を全廢せり。是よりして羅馬の國語、風俗及思想は西方諸郡縣に波及し、嘗て野蠻人として蔑視せられし所の人民も全く羅馬人となり、數多の英主を出すに至る。是に於て羅馬府は漸く帝國の中心たるの勢力を失ひ、帝王も亦必しも一都府に定居せず、軍事の便を追ひて轉々移住するに至れり。

帝權の分割 紀元二百六十八年 クローディアス (Claudius) 二世帝位に即く。是より先、ゴス (Goth) 人日耳曼人及彼斯人 當時バース、アは既に亡び又彼斯の世となれり 入寇し已まず。又國內一時僭して帝と稱するもの三十人の多きに至れり。帝大に ゴス 人を破りしを以て邊境稍無事なるを得たり。次きて オーレリアン、フロバス (Probus) ダイオクリシアン (Diocletian) の諸帝位に即き、外蠻を掃ひ僭者を滅ぼし、羅馬の國勢復盛なり。ダイオクリシアン帝は イルリ、カム より出て、紀元二百八十四年羅馬帝位に登る。ダイオクリシアンは從來の制限君主政治を廢し、專政獨裁の治を斷行し、羅馬府既に大帝國を支配し四圍の蠻族を防禁するに足らざるを見、マキ アウリクス (Maximian) を擧げて帝となし、東西相並んで政を行ふ。之を オーガスタス と稱し、又

二人の副帝を置き「シーサー」と號し、帝國を四分して之を治む、伊太利、亞非利加及其近傍の郡縣は「オーガスタスマキシム」之を治め、ミラン(Milan)に住し、ゴール、西班牙、フリテンは「シーサー」コンスタンテ・アス(Constantinus)之を治め、マセドニア、希臘、小亞細亞、埃及はダイオクリシアン、自之を治め、小亞細亞のニコメデア(Nicomedia)に居り大帝と稱し、全般の權力を總攬せり。イルリリカムは「シーサー」ガリリアス(Galarius)之を治む、タイ・クリシアン帝の末年屢々命を下して耶蘇教徒を虐待せしが、耶蘇教は却て益、世上に傳播するに至れり。

帝國の統一 西方の「シーサー」コンスタンテ・アスの子コンスタンタイン(Constantine 紀元三百六十七年)其位を繼ぎ、他の「シーサー」及「オーガスタス」と争ひ、紀元三百二十四年遂に再羅馬帝國を統一し、都をボスホラス(Bosporus)海峽のビツ・ンテ・アム(Byzantium)に移し、其規模を擴張して新羅馬と名く、後世の所謂コンスタンテ・ノブル(Constantinople)「ハスタンタイン帝都」是なり。蓋コンスタンタイン帝以前居を移せしもの數帝ありしと雖、未都を擧げて之を遷せしものあるを聞かず、帝の都を遷す正に以て羅馬の衰頽に赴きしを證するに足る。又大帝は深く耶蘇教を信奉せしを以て、是時より多神教の羅馬國は一變して耶蘇教の羅馬國となれり。コンスタンタインの死後其三子帝國を分領せしが、一たひ一統して又東西に分れ

たり。

帝國の兩分 羅馬全帝國を統治せし最後の帝を東帝ス・オドーシアス(Theodosius)第一世とす。紀元三百九十五年ス・オドーシアス死し、羅馬帝國を東西に分ち、其子ホノリアス(Honorius)をして西部を、アーケーデ・アス(Arcadius)をして東部を領せしむ。是より羅馬史は分れて東羅馬帝國史(希臘帝國史即ビツ・ンテ・アム帝國史)西羅馬帝國史(羅匈帝國史)となる。東羅馬帝國史は中古史に涉れるものなれば、此編即古代史に於ては重に西羅馬帝國の滅亡(紀元四百七十六年)に至るまでの事を記載せんばとす。

第三節 民族の大移動及西羅馬帝國の滅亡

大移動の發端 吾人は是より既往に遡りて歐洲國民に非常の變動を與へたる民族大移動の起りを説かんばとす。蓋一部の人民の他に移住を企つるは大抵他族の人民より壓迫せらるゝに起る、日耳曼(German)或はTeuton等諸種族の羅馬帝國內に移住するに至りしも、亦ハン(Hun)匈奴族民の侵寇を蒙りしに因れり。

ハン人 ハン人は支那西北邊に游牧せる蒙古韃靼種(匈奴人は秦漢を歴て唐に至るまで屬支那に侵寇せり)にして終に

支那國民の爲に驅逐せられ、其方向を轉じて歐羅巴に侵入せり。此人種は慄悍殘暴過くる所殺戮を恣にせざるはなく、中央亞細亞よりヴォルガ(Volga)河を渡りアラン(Alan)人を降し、勢破竹の如く紀元二百七十五年東ゴス(Ostrogoth)に侵寇せり。

ゴス人 當時日耳曼人種は四大民族の連合あり、アレマンニ(Alamanni)、フランク(Frank)、サクリ(Saxoni)及ゴス是なり。而してゴス人最著る。ゴス人は紀元三世紀の頃既にバルテック(Baltic)海より黒海の濱に蔓延し、一大王國を建て、東ゴス西ゴス(Visigoth)の兩部に分れ、宗教は多神教基督教共に行はれたり。(ウルフ、ラス(Ras)に於て、ゴス語に翻譯してより一般に「アリ」派基督教行はるゝに至れり、此譯書はテートン文書の最古なものなり)東ゴス王ヘルマンリク(Hermannric)百十歳、ハン人を禦き戰破れて國遂に亡ぶ。ハン人は更に進んで西ゴスを攻む。西ゴス人或は降るものあれども、其大半は羅馬帝ツェーレンス(Zerens)に依りダニエー河を渡り帝國内に移住し永く其國境を守らんことを誓へり、然れども羅馬の有司之を遇すること甚殘酷なりしかば、ゴス人大に怒り兵を擧げて之に叛く。紀元二百七十八年ツェーレンス帝アドリアノ(Adrianople)に於てゴス人と戦ひ軍敗れて殂し、將帥の死するもの甚多し。是に於てゴス人は首府コンスタンテノープルを攻めんとす。此時オドーシアス一世(大帝)位に即き、之と和を講しスレースの地を與へ羅馬帝に從屬せ

しむ。是よりテートン人種は羅馬の文明と練兵の術とを學ぶことを得、基督教に改宗せしもの多し。ス、オドーシアス大帝殂して羅馬帝國の東西に分るゝや、ゴス人猖獗を極むること益甚し。東羅馬帝アルケイテ、アス西ゴス人を煽して西羅馬帝國を攻めしむ。是に於て各種族相合して有名のアラリク(Alaric)を推して大酋長となし、希臘諸州を侵略し進んで伊太利に入る。西羅馬の相ツェンタル(Vandal)人ステリク(Sithicho)の拒む所となりしが、其宛後に至り終に紀元四百十年羅馬を陥れ侵暴鹵掠を極め、進んで下伊太利を蹂躪し、次でシシリ嶋に渡り亞非利加を征せんとししが病に罹りて死せり。アトールフ(Athaulf)之に繼ぎて大將となり、西羅馬帝ホノリウスと和し、伊太利を去りゴール、西班牙の地方を平定し、其嗣ワルリア(Vulturn)と共に西ゴス王國を建立せり。

日耳曼人種の割據 當時西羅馬帝國は四分五裂して大抵日耳曼種族に屬する人民之に割據せり。ツェンタル人はスイーヴ(Suevi)人と共にライン河を渡りゴール地方を越へ西班牙に移住し、其後(紀元四百二十九年)チンセリク(Genserik)王の時亞非利加に渡りカース、チ王國を建てたり。バーガンデア(Burgundia)人は上ライン河に沿ひ東南ゴールに移住し、フランク人は北ゴールに蟠居し數多の酋長之を管治せり。同時にフリテンも日耳曼人民より

移住せられたり。

ハン王国 ハン人は東ゴス人を壓倒し數多のテートン民族を従へ、其版圖はヴルガ河よりライン河に達し、アドリアテイク海より黒海裏海に至る。其王アテラ(Metla) 天神の腹と稱せらる又西方の王者とならんと欲し、五十萬の蠻兵を率ゐ、日耳曼を越えライン河を渡りてゴールに侵入せり。羅馬人(大將エイティアスAetius)西ゴス人バーガンディア人フランク(Frank)人等相連合し、紀元四百五十一年シャローン(Chalon)の野に於て大にアテラの軍を破る。是に於てアテラ軍をライン河内に退け、次年又アルプス山を越え、上伊太利を暴掠し羅馬に迫りしが、終に和を約して(法王レオ一世アテラに)タニ、イフ地方に退く、後病に罹りて死し、其大版圖直に瓦解せり。

ヴンタル人の侵掠 西羅馬帝國は猶伊太利の地を保つと雖、日に月に滅亡の域に進めり。羅馬國最後の救済者なるエイティアスは帝ヴレメンテ、ニアン(Valentinian)の忌む所となりて殺さる。帝も亦マキシマス(Maximus)の爲に弑せらる。皇后復讐を圖り、亞非利加なるヴンタル王チンセリクに援を請ふチンセリク軍艦を率ゐタイパー河口に上陸せり。而して十四日の間羅馬府を幽掠し、有名の建築物等を破壊し、終に無數の金銀捕虜を以て去

れり(紀元四百五十五年)。

西帝國の滅亡 當時西羅馬帝は徒に空名を存するのみにして、政治の實權は一に蠻人の手に在り。羅馬の元老議員等議して東帝ツァーノ(Vand)をして全帝國を支配せしむ。ツァーノは同時に日耳曼傭兵の指揮官オドーアサー(Odoacer)の稱號を與へ、伊太利の政治を委任せり。オドーアサーは西羅馬最終の帝ロミラス、オーガステラス(Honulus Augustulus)の位を廢し自伊太利國王と稱す。是に於て西羅馬帝國終に日耳曼人の手に歸せり。實に紀元四百七十六年にして、羅馬創建の年を去る一千二百二十九年なり。

第四節 基督教の弘布

概説 歴史上に記載せられたる事實其數多しと雖、未、基督教の如く歐洲の人心に至大の變動を與へし者あらず。故に吾人は茲に基督教の成立及弘布の状態を略説せんとす。基督教の興起 オーガステス帝の時は羅馬帝國實に廣大の版圖を有し、而して其中に包含せる諸國民の宗教は區々なりと雖、要するに皆多神教にあらざるはなし。而るに此際帝國の一隅なるシチリア國に於て一派の新教起れり。其開祖は基督と稱し紀元前四年

に生る。唯一神教を以て世界を風化し、古來國民の迷霧を破覺せんとせり。羅馬人は初基督教を以て意に介するに足らざるものゝ如く思惟せしが、何を圖らん羅馬帝國の大版圖は、適以て基督教の廣布を助くるに足り、數多の多神教は祇に以て唯一神教の靈力を示すの砥石となり、他日全世界の人心を一新するに至らんとは。

今日用ふる紀元は後世に至りて眞實の基督紀元に比すれば、四年と六日の差違あることを發見せしが、既久しく費用し來りしを以て、僧俗の便宜上依然誤謬のまゝ之を用ふることゝなれり。

使徒 **ポール** 基督は **テ・ピリアス** 治世の十九年に異端國を亂るとなし磔刑に處せられたり。然れども門人能く基督の遺志を繼ぎ、道を四方に弘む。之を使徒 (Apostle) と云ふ。使徒中最著るもの **セント・ポール** (St. Paul) とす、**ポール** は **シリア** の **アンテ・オカイア** (Antiochia) 當時既に基督教に化し基督教徒の名に始めて起れり。より小亞細亞・マセドニア及希臘を遍歴し、行、其教を説き數多の信者を招集せり。此時暴君 **ニロー** 位に在り基督教徒を遇すること残酷なり。ポールも亦羅馬に致され斬に處せらる。又 **ニロー** は羅馬府火せしとき其罪を基督教徒に歸し盡く之を殺せり。然れども爾後基督教に歸依するもの益多く、其虐刑に遭ふもの亦愈多きに至れり。

基督教禁壓の理由 羅馬諸帝は數多の宗教を包容して之に干渉することなし。然れ

ども基督教に至りては羅馬從來の諸神のみならず、其他の諸神に至るまで皆之を斥けて邪神となすを以て、其教旨に歸するものは皆從來の教門を脱せざるべからず。且其教徒の集會は常に夜にあるを以て政府の疑ふ所となる。此等は基督教の國家に妨害ありと認められたる所以にして、其禁制は宗教上よりも寧ろ政略に基きて起りしものなり。是を以て羅馬の舊法故俗を維持せんとする所の諸帝は、皆汲々として此新教を撲滅せんことを勉めたり。故に **トレジアン** 及 **エム・オーレリアス** の如き賢君の出づる毎に基督教徒は毎に嚴刑に處せらる。又 **デ・シーシアス** (Decius) 帝、**リリアン** (Valerian) 帝の如きも基督教を以て國を危くするものとなし屢々虐刑を施せり。然れども基督教徒は愈々壓せられて益々伸ひ、愈々虐せられて益々奮ひ、其志操の鞏固なる、鼎鑊前に在るも少しも屈せず。是に於て其教旨次第に擴布し、將に世界に波及せんとす。

新舊兩教の大衝突 基督教の勢力日に駁々として増進せるを以て、新舊兩教の間に激争の起るは早晚免るべからざるの數なり。紀元四世紀の初に當り **ダイオクリシアン** の時其婿 **ガリリアス** は深く基督教を疾み、帝に勸めて教會を破壊し聖經を焚き基督教徒の

官爵を褫奪せしめ、而して基督教徒を斬に處し或は奴隸となせり。其後マキシミアン、ガリリアス相繼ぎて位に即き、虐刑を施すこと息まず。殊にガリリアスの如きは八年間種々の刑罰を以て基督教徒を苦めしが、教徒の勢力少しも衰へざりしかば、終に紀元三百十一年に至りて基督教の信仰を許せり。

基督教の勝利 紀元三百二十四年コンスタンティン帝羅馬帝國を統一するに及びて、基督教を以て國教となせり。初コンスタンティンの父コンスタンティアスは基督教を信せしを以てコンスタンティンも亦其薰陶を受しが、其父の死するに及び軍卒の推す所となり、數多の帝位競争者と戦ひて之に捷ちしより、遂に深く基督教を信奉するに至れり。傳説に據れば此戰にコンスタンティンは十字形の示現に依りて勝を制せしを以て、斷然射基督教徒となるに至れりと。而してコンスタンティン帝は僧侶に種々の特權を與へ大に教會の制度を改革せり。紀元三百六十一年ジリアン(Julian)帝位に登り多神教を恢復せんとせしが、當時多神教は已に頹頹し、基督教徒國內に充塞せるを以て、其功遂に遂げざりき。スエオドシアス帝位に即くに及びて多神教を奉するものを嚴刑に處せり。是に於て多神教全く跡を羅馬帝國內に絶ち、基督教の神學者續々輩出し、希臘語及羅匈語を以て宗教上の書を

著し種々の學派を生ずるに至れり。

第六章 羅馬の開化

總說 羅馬人はジニテア人の宗教を以て著れ、希臘人の智力を以て著れたるが如く、亦強大なる征略人民として古代歴史上に著れたり。蓋羅馬人の其國家を強大富盛に致さんとその精神に富めることは、他の古代人民の企て及ふ所にあらず。是を以て羅馬人は獨能く蕞爾たる一小國より起り、次第に世界統轄の基礎を開き、立法、行政及司法の道をして完全の域に達せしめたり。然れども高尚なる精神上の發達は甚遅々なりき。是羅馬人の日常近易の事を重んじたと、其教育の重に貴族に止り一般人民に行はれざりしとによるなり。降りて下伊太利及希臘の征服と共に希臘の詩人學士等踵を接して羅馬に移住するに及びて、羅馬の技藝及學術漸く其端を開き、オーガスタス帝の世に至りて隆盛を極めたり。然れども羅馬の技藝は實用上に於て勝を制し、高尚美麗の點に至りては到底希臘の後に瞠若たるを免れざりき。

第一節 宗教

概説 羅馬人は希臘人の如く自然力を神として崇拜せり。然れども希臘人の神と稱せし所のものは愛憎等の情を具して、其性甚人間に近きものなりしが、羅馬人の神として禮拜せし所のものは嚴乎たる無形體にして冥々の裡にありて人事を支配するものなり。而して之に祈禱し誓願し犠牲を供して以て應護を得且罪障を消滅せんことを求む。若之を怠るときは神罰立。に至るとなせり。故に羅馬人の神に對する觀念は全く恐怖に傾き希臘人の如き愛情を有せず。而して其宗教は他邦より移傳せしもの多し。始偶像崇拜教をエトラスカン人より取り、次で多神教を希臘より移せしが如きは是なり。而して其教儀も亦往々東洋諸國より移せしものあり。然れども上流社會に於ては、學術殊に哲學の進歩と共に稍高尚の觀念を有するに至りしが如し。

僧官 羅馬人は公私の事件苟神慮に協はされば之を行はず。故に數多の神官即國家の僧侶ありて神慮を伺察することを掌る。而して其最高の地位にあるものと「ポンティフ(Pontif)官となす。國家の宗教を監督し又年曆を制定す。オーギル(Augur)官は卜占の事を掌り、或は天象の光景を察し、或は小鳥の鳴聲飛揚を考へ、以て神慮を窺知して吉凶禍

福を判定す。故に其權力甚重し。又「パラスピス(Haruspice)と稱する神あり。オーギル官と共に自然の現象を觀察し、或は犠牲の内臟を視察し以て吉凶を卜することを掌る。フテ・エール(Fortis)官は外國人民に對する國教の保護者にして、宣戰講和の式を行ふことを掌る。フレイメン(Flamen)は普通の僧侶にして諸神禮拜の事務を掌り。

諸神 羅馬人の信仰する諸神は大抵希臘と同じ。唯其名を異にせるのみ。ジビター(Jupiter、希臘のジュー)は人民守護の神にして國家の首神なり。女神「ジノー(Juno、希臘のヒラ)之

に配す。「アポロー(Apollo)は卜占及技藝の神なり。「ダイアナ(Diana)は狩獵及射術の神

なり。「マールス(Mars)男神)及「ベルローナ(Bellona)女神)は戰爭守護の神なり。「ジュナス(Janus)

は萬物元始の神にして、平時は常に其堂門を閉ち變亂の時之を開く。而して羅馬人の殊に尊崇せし所のものを女神「ヴェスタ(Vesta)と稱す。火神にして上下一般之を祭れり。

「ヴェスタ」の神殿は終年火を燃して絶ゆることなし。火を守るものを「ヴェスタル(Vestal)と稱し、妙齡の女子六人を撰て之に充つ。「レリーズ(Laræ)及「ペネテューズ(Penates)は家族の保護神にして各戸之を祭る。其他諸神の數甚多しといへども、大抵希臘と相似たるものなり。

祭儀 羅馬に於ても亦希臘の如く宗教に随伴せる競技あり。重なる諸神は皆一定の期日ありて祭祀を執行す。其中殊に有名なるを「サターナリア」(Saturnalia)の神祭とす。此時に當りては國人舉て之に與り、學校は閉鎖せられ、議會は延引せられ、戦争は中止せられ、奴隸も猶通常人と共に娛樂することを得。然れども羅馬にありては希臘の如き體操及音樂の競技を見ず。演劇の如きも甚之を喜ばず。其最愛好せし所のものは格闘及闘獸是なり。是蓋羅馬人尙武の餘に出で、以て神明の意を慰せんとせしものなりしが、其殘酷非道なるは全く宗教上の主意に戻れり(後節社會の狀態を見よ)。

第二節 軍制

概説 前章に於て既に政治の大體を略叙したれば、茲には當時の世界を震動せし羅馬の軍制を略叙せん。兵役は羅馬人の最緊要且名譽とする所にして、其勇敢義俠スパルタ人と相似たり。然れども羅馬人の位置は遙に之に超越せり。蓋スパルタ人は軍事を以て專一の職業となし、農業の如きは一に之を奴隸の手に放任せしが、羅馬人は之に反し出では勇敢なる兵士となり、入りては順良なる農民たりしなり。

隊伍の編成 羅馬府民は十七歳より四十六歳に至るまで服役の義務を有し、而して少くとも十回の軍役を経し者にあらざれば公官に就くことを得ず。後世常備軍を置くに及びても、其兵士の暇あるときは溝渠道路等を修築せしめ、敢て時間を徒費することなからしむ。羅馬軍隊の組織は數多の聯隊(Legion)より成り、一聯隊は三千人乃至六千人より成立す。而して一聯隊は「コホルト」(Cohort)「コムパニー」(Companie)及「センチ・リー」(Centurie)に小別せられたり。史家ギボン(Gibbon)の算する所に據れば、ヘドアン帝の時陸軍は凡三十七萬五千人ありて、海軍を合せ凡四十五萬人以上の兵士ありしと云ふ。羅馬古代に於ては民兵は皆無給にして其費用は自辨たり。是兵役は國民普通の義務となせはなり。而して敵地を侵略したる時は其配與を得て以て賠償に充つ。紀元前四百六年以來始めて兵士に僅少の賃金を支給せりと云ふ。

交戦法及兵器 羅馬の歩兵は戦時に當りて通常四種の隊列あり(一)「ヴェリテ・イス」

(Velites)或は輕裝隊と云ひ軍の先驅をなし(二)「ハスタテ」(Hastati)と云ひ戦陣の第一列をなし(三)「プリンシピス」(Principes)と云ひ第二列をなし(四)「トライエーリアイ」(Triarii)と云ひ第三列をなす。羅馬人固有の兵器は「ピラム」(Pilum)と稱し重き尖鐵より成れる鎗にして、

長 六呎、重十「ホンド」或は十一「ホンド」あり、其戦を開くに當りては此鎗を十歩乃至十五歩の距離より抛ち、而して後歩兵は急進して其堅銳なる短劍を以て打撃するなり、「ヴェリテイス」は先其投鎗を以て戦を始め、而して後軍の列後に退き、「ハスタテイ」「プリンシビーズ」及「トライエーリアイ」更進撃す、若戦敗るゝときは他の軍列の後に退き新に隊伍を編制す、羅馬人は最攻城の術に長し、其用ふる所の重なる武器は大弩、投石車、衝壁車及可動塔なり、可動塔は敵の城壁に押進して之を俯攻するに供す。

第三節 文學

概説 羅馬人は本、實際的人民なるを以て、文學の如きは甚粗野なりしが、希臘植民地征服より漸く希臘開化の刺激を受け、希臘大陸征服の後に至りて、始めて文化の域に入れり、蓋羅馬人は武力を以て希臘人を征服し、希臘人は智力を以て羅馬人を服従せしものと云ふべし、故に羅馬の文學は希臘の文學に超乘する能はずと雖、亦全く之と頡頏するものなきにあらざるなり。

詩歌 羅馬の文學に於て始めて興りしものを戯曲となす、リウ、アス、アンドロニカス(Livius

Andronicus)「ヒールス、ニール、ルク」(Gnaeus Naevius)及クインタス、クニリアス(Quintus Ennius)最著

る、アンドロニカス(紀元前二百八十年頃生れ、二百二十年頃死す)は希臘人にして其市府タレント、アムの略奪せられしと

さ虜となりて羅馬に入れり、ホーマーの「オデ、スシー」を羅句語に翻譯し、長く教科に用ひら

る、又希臘の悲劇詩及喜劇詩を翻譯し或は摸作して自之を演せり、ニール、アス(紀元前二百六十四年より二

百年の間)も亦希臘人にしてカムパニアに生れ後羅馬の市民となれり、第一「ビーニク」戦争の時

軍歌を作り、又好んで喜劇を作り、希臘體に模倣し而して羅馬の音調を以て之を出し、

貴紳の弊風敗徳を諷刺せしを以て遂に放逐せられたり、エンニウス(紀元前二百三十九年生れ、百六十九年死す)も亦

カムパニア人なり、語學教師として羅馬に入り、老シビオの保護を受け市民となれり、エンニ

ウスは其有名なる叙事詩「アンナルス」(Annales)に於て始めて六脚韻法を用ひ羅句詩體を一

新せり、此詩は當時に至る迄の羅馬歴史を詩體に記述せしものにして、長く時人に諷誦

せらる、エンニウス又戯曲に名あり、ユーリピテ、アイズの悲劇を羅句語に翻譯せり、エンニウスの

時代に當りて伊太利人マールカス、フロータス(M. Plautus)喜劇を以て著る、フロータス(紀元前二百五十四年生

れ、百八十は羅馬戯曲の祖にして其作甚多し、希臘後世の戯曲を變通し、勉めて羅馬の言語

戯法に適合せしめたり、パフリウス、テレンス(Publius Terence)(紀元前百八十五年生れ、百五十九年死す)はカース、イーチ

に生れ喜曲に長ず。深く希臘のメナントーを學び、措字簡潔、結構巧妙を以て名あり。テレンスに次ぎケイアスリ・シリウス(K. Lucretius 紀元前百四十八年生れ百〇三年死す)あり。廣博なる學殖、銳利なる識力を以て當時の弊風を叙述し痛く之を嘲笑せり。其後共和政治の末年に至るまで凡百年の間は詩風衰へたりと雖、亦リ・ークリテ・アス(Lucretius 紀元前九十五年生る)ヴァーロー(Varro 紀元前百十年生る)カタルラス(Catullus 紀元前八十一年生る)等の作家出づ。リ・ークリテ・アスはエビキ・ラスの哲學よりして「萬物本性論」と稱する大詩篇を作れり。ヴァーローは謹嚴にして潔清なり。カタルラスは叙情詩を以て著る。降りてオーガスタス帝の時代に至りては名匠多く輩出せり。蓋當時の諸家の發生は多く共和時代に屬すと雖、而もオーガスタス帝は厚く文學を保護獎勵せしを以て、文運此の如く一時大に勃興せしなり。其最著るものものをヴァーギル(Virgil 紀元前七十年生れ同十九年死す)及ホレース(Horace 紀元前六十五年生れ八年死す)とす。兩者共に希臘文學を基礎となせり。ヴァーギルの詩は字句婉麗、結構完美し、「イナイド」(Aeneid)篇の如きは尤傑作と稱す。「イナイド」はトロイ落城の後勇者イニースの伊太利に流寓せる狀を叙す。ホマーの「イリアッド」に摸せる叙事詩なり。「チ・オルチックス」(Georgics)亦著る。「チ・オルチックス」はヘシオッドの「ウークス・エンド・デース」に擬し農夫の狀態を寫せり。ホレースの詩は結構の複雑、用語の麗正を以て著る。其希臘の

叙情詩に擬せる「オード」(Odes)篇の如きは最有名なり。ホレースは又諷嘲の詩體に長せり。オーヴェ・ッド(紀元前四十三年生れ元十七年死す)は次に次ぎ、當時の三大詩家と稱せらる。オーヴェ・ッドはアレキサンドリアの詩風に擬し、其神學上の談話を叙せる「メタモルフィシス」(Metamorphoses)の如きは有名の大作なり。其他後世に至り尙三四の詩家ありといへども、其詩風下ること數等なり。

散文(歴史)

歴史の述作は詩歌の後に次ぎ、其最早く歴史を記述せしものはポルシアス、

ケトー(Portius Cato

紀元前二百三十四年生れ百四十九年死す)なり。ケトーは政治法律に長じ、其著書中羅馬太古史最

有名なり。又農業論及數多の論文を作れり。ケトーに次ぎポリビウス(Polybius

紀元前二百四年生れ百二十二年死す)

あり。希臘滅亡の時羅馬の捕虜となり、其後各地を周遊し世界史四十卷を著せり。詩家ヴァーローは博學の士にして、神學、哲學、歴史及農學上の著書甚多し。又圖書館及彫像館を建て羅馬人を文化に誘引せんとせり。紀元前一世紀よりオーガスタス帝の治世に跨り、散文の大家多く出でたり。シセロー(紀元前百〇六年生れ四十三年死す)は羅甸散文體の本鐸者にして、其哲學及修辭(演説)の著作は希臘人に摸倣せりといへども、亦能く一機軸を出し、羅馬の言語風習に適合せしめ、演説書牘の類後世に至るまで大に尊重せらる。殊にカテリニに對する

四回の演説の如きはデモス・ニーズの「フィリビク」に比して差る色なし。夫英傑シーサーの如きも亦「ゴール戦記」及「内亂記」を著し以て己の事業を正確に記述せり。其文平易明瞭、談話の體を用ひたり。サルラスト(紀元前八十六年生、紀元三十五年死す)の「リブイー」(紀元前五十九年生、紀元十七年死す)出づるに及びて、羅馬の史筆大に光耀を發てり。サルラストはシーサーの一友にして其大著「内亂時代記」は既に亡逸し「カテリン反逆記」及「ジガス戦争記」の二篇を存せり。議論勁拔、叙事活動、人之をシーシテ、デイスに比す。リブイーはオーガスタス帝の世に出ぞ羅馬史百四十二卷を著せり。今に存するもの僅に三十五卷のみ。文章又流暢にして趣味に富めり。其意蓋羅馬人を以て往古の美風を追憶し、道德敗壞の現社會に興起せしめんとするにあるなり。當時希臘の史家テ・オドラス、タイオニシアス(Dionysius)ありと雖、終に羅馬史家の後に瞠若たるを免れず。ロストレホ(Strabo)ありて古代の地理、人種、歴史を記述し、吾人をして希臘人思索力の餘光を仰ぐしむるに足るものあり。オーガスタス帝以後に至りて、散文に名あるものをセチカ(Seneca)、兩フリニー(Pliny)及「タシタス」(Tacitus)とす。セチカはニーロー帝の師にして哲學、道德、博物及書牘の著甚多く、又諷嘲詩を能くせり。老フリニーは博物史二十七卷を著し、文章甚變化に富めり。少フリニーは書牘文に長せり。「タシタス」(紀元五十四年頃生、紀元百十七年死す)は歴史の

大家にして「羅馬史」、「日耳曼記」、「年代記」及「アグリコラ傳」(Agricola)はフリテンの「征服者」の傳を著せり。「日耳曼記」に於ては日耳曼人種の性質風習を叙し、「アグリコラ傳」に於ては筆を極めて衰世の一題人たることを寫せり。筆力飛動、餘音鏗鏘、後世史家の儀表たり。此頃又クインクテリアン(Quintilian)あり、脩辭學の大家にして「能辯指針」十二卷を著し、以て脩辭學の智識及勢力を論せり。

能辯術 共和政體の發達と共に能辯術も亦進歩し「センソルケト」の如きもの出でしが、希臘文學の傳來するに及びて其術益進み、共和の末年に至りては、政治家學者の雄辯を以て鳴るもの甚多し。就中ホーテンシウス(Horatius)(紀元前1世紀の初)「シセロー」最著る。ホーテンシウスは能辯の大家なりしが、シセローの盛なるに及びて其壓倒する所となれり。シセローは深く希臘の能辯術に得る所あり。其深遠の學識と愛國の熱心とにより、遂に羅馬絶倫の雄辯家となれり。

第四節 哲學及法學

哲學 哲學上の思辯は羅馬人の短なる所なり。紀元前二世紀の頃、エピキ、リアン(Epicurus, Lucretius)派の哲

學者一時羅馬より放逐せられ、ストイック派の哲學廣く有識者の間に行はるゝに至れり。蓋此學派は羅馬人の性情に最能く適合せるを以てなり。シセローは羅馬哲學者中最勢力あり。然れども自一家の説を立てず。希臘諸家の説を參酌し、之を折くに「ストイック派の哲學を以てし、而して之を國家及個人の上に運用せんとせり。哲學上の著書甚多し。其後セネカあり神學上の哲學を説けり。之に反して一種の自然哲學起り、自然を以て世界を管理する所の勢力となせり。老フリニーは「エピキリアン」學派を尊信し、亦自然哲學者の一人なりと雖、萬物一體説を唱へ、神は萬物の創造者にして亦萬物と一體なりと説けり。」
法學　羅馬の學術は一新機軸を出すものなく。他國民の發見創説を融化混用するに過ぎずといへども、特り法學に至りては數百年の間當代の開化人民を風靡せしのみならず、今日に至りても尙法學者の金科玉條として尊重する所たり。抑羅馬法律の淵源は其由て來る甚久しく、十二銅表の制作ありてより法典漸々完具せり。爾來學者多年の間數多の法規命令に基き正理公道に參して、終に普遍の系統を組織し、法律は一科の學術となれり。オーガスタス帝の時代に當り、一個の法律學派あり。一を「サビニアン」(Sabinian)派(或は「カシアン」Cassian派と云ふ)と云ひ、其首領はカピト (Capito)にして門人サピナス (Sabinus)及カシニアス (Cassius)より其名を得たり。一を「プロキウリアン」(Proculian)派と云ふ。プロキウス (Proculus)其首領たり。甲派は歴史的及實際的法律ヲ確守し、乙派は合理的にして成文律よりは寧ろ法律の精神を主とせり。帝政時代の一二世紀に至り、法學は非常の發達をなし、學者の研究日に益精密に赴けり。殊にヘートリアン帝よりアレキサンダー、セプティマス帝に至る百年間は法學の最隆盛する時代となす。「羅馬法」(Pandect)の大部分は此時代に成就せり。ケイアス、パピニアン (Papinian)ウルピアン (Ulpian)及ポラス (Paulus)は最有名なる法學者にして至大の影響を羅馬法學の上に及せり。紀元六世紀ジュステニア (Justinian)帝の世に至り、數多の學者を集め羅馬法典を大集して後世に貽せり。

第五節 技藝

概説　希臘の技藝は其人民内部の性情より起り、羅馬の技藝は之に反し奢侈或は必要より起る。故に羅馬の技藝には精微幽妙のもの少く、宏壯華麗のもの多し。而して技藝中に在りて羅馬人の最長したりしものを建築術となす。

建築術

羅馬の建築術はエトラスカン人より學び、而して其器械的の智識と希臘美妙の觀念とを調和せり。即穹形建築は之をエトラスカンに取り、圓柱の構造は希臘に取りしをり。蓋羅馬建築術の長所は穹形の構造に在りて、宮殿、公館、劇場、橋梁、水道皆之を以て構造し、其規模の宏壯なる自羅馬人の氣風を表暴せり。宏大なる宮殿は多くオーガスチス帝以後の建築に係り、「パンセノン」神殿ニローの宮殿の如きは宏壯華麗を極む。又夫「サーカス、マキニマス」(Circus Maximus) 競技場の如きは、羅馬府中建築の壯大なるものにして、三十八萬餘人を容るゝに足る。又「コロッセウム」(Colosseum) 圓劇場はフレヴ、アン帝の建る所にして、構造堅密八萬乃至十萬の觀客を容るべし。遺趾今に存す。一見羅馬帝政の盛時を回想せしむるに足る。其他軍道、橋梁、溝渠及港灣等の實際的建築は大に羅馬人の天才を發揚せり。希臘人は道路を修築すること少かりしが、羅馬人は數多の軍道を開通し、首府を中心となし四方の郡縣を聯絡し、山僻海陬達せざる所なし。其之を開拓するを、山に隧し河に橋し谷を埋め沼を平にし、全力を盡して完成せされは已まず。而して主なる軍道の傍には堂塔、凱旋門及紀念碑等を設立せり。羅馬の橋梁は古代の建築中最有名にして、各地方の大河に架するに廣大なる穹形の石橋を以てせしが如きは、希臘人

羅馬の開化

技

の夢想する能はざる所なり。此等は今尙舊羅馬帝國の各所に存在せり。就中最珍奇なるはポンス、イーリアス(Pons Aelius 今は之をセント・アンチ シ(St. Angelo)橋と稱す) となす。タイバー河に架する所にして、ヘドリアン帝の建築に係る。溝渠の構造は更に奇異にして、數里の外より竈を以て清水を導き之を府内に傳達す。而して其竈を支持する所の穹形、低地に在りては或は一百尺の高きに及ぶものあり。羅馬人は又港灣の築造に力を用ひ、天然の障礙を除去せんことを勉む。灣頭の陥落せる所は堤壁を築き之を補ひ、風浪の激しき處は嶋嶼を築きて之を保障せり。其他凱旋門、浴場等の建築亦盛なり。凱旋門は都府の入口若くは軍道橋梁に横はりて建立し、帝王大將の戰勝或は非常なる事件の紀念と爲せり。浴場は構造頗る廣大にして華美を極め、カールカラ(Caracalla) 浴場は千六百の室を有し、高貴の大理石を以て裝飾し、而して繪畫彫刻を以て粉飾せる圖書館、博物場等を設けたり。

其他の技藝

繪畫、彫刻及其他の工藝は初エトラスカン人より學び、次に希臘人より傳習せり。然れども羅馬人の製作に在りては別に觀るべきものなし。其羅馬府を飾る所のものは多く諸外國殊に希臘より掠奪せしものなり。

第六節 社會の狀態

概説 羅馬の政治上及社會上の組織は酷希臘に似たる所あり。而して其社會内部の狀態も、亦希臘の如く外部の發達せるに似す頗瑕玷を存せり。蓋羅馬人の實際的精神は常に多數の利益を計らんとするにあれども國民平等の思想は甚進歩せず。彼社會上に種々の階級區別を建てしが如きは其最甚しきものなり。其他奴隸の待遇、格闘の狀態の如きに至りては、殘酷云ふに忍びざるものあり。羅馬人の所謂「野蠻(Barbarus)」といへる語は移して以て羅馬人を評するを得べし。

社會の組織 羅馬社會の組織に就きては、前章既に記述せし所なれども、今便宜の爲に其關係及變遷の大體を略叙すべし。古代羅馬にありては「パトリシアン」と「プレツアン」の二大階級あり。政治の大權は常に「パトリシアン」の手に掌握せしが、終に二百年間争闘の後純然たる共和政治となり、兩者の區別は融化混一せり。是に於てか一轉して羅馬市民と伊太利同盟市民との間に畛域を生じ、再轉して伊太利と郡縣との間に一大溝澁を生ぜり。而して郡縣の中又西洋(ゴール、西班牙)と東洋(希臘、小亞細亞、シリア、ジチア、埃及等遞次差等あり)との懸隔あり。此等社會制度の變遷は共和時代より帝政時代に涉り、而

て帝政時代の中葉に至りては諸種の區別全く消滅に歸せり。然れども尙羅馬人と外國人との間に陰然區別ありて、「外國人」といへる語は即「仇敵」と同義に用ひられ、而して希臘人を除くの外は悉く野蠻人を以て遇視せられ、兩間の婚姻を禁せられたり。

家族生活の狀態 羅馬に於ては希臘と同しく一夫一妻主義行はれ、妻の地位は稍高しと雖、百般の權力は夫の手に在り。夫は其意に従ひ擅に妻を去ることを得るといへども、婦の自離婚し得るは甚稀なり。父權は甚重く、子に屬する財産といへども恣に之を剝奪することを得るのみならず、子の生殺賣買は一に其權内にあり。而して母たるものは毫も之に關與することを得ず。然れども幼兒の教育は固より母の責任に屬せり。此習慣は世の開くるに従ひ、漸く改善に趣きしと雖、而も尙俄に去り難く、遂に嚴酷なる法律を以て之を禁するに至れり。

教育 紀元前五世紀の頃夙に小學校の設立あり。兒女は此に入りて讀書、算術、習字、音樂を學び、且國法の學亦注意せられ、常に十二銅表を反覆誦記せり。後希臘語の一般に流行するに及びて高等學校設立せられ、希臘及羅甸文學の講究盛に起り、修辭能辯の術大に研究せらる。是に於て十二三歳の兒童にして公開演説を爲すものあるに至れり。而し

て兒童は十七歳に至れば成丁の資格を具へ、羅馬公民の籍に入れり。

奴隸制 羅馬に於ても亦希臘と同じく奴隸制あり。自由民と奴隸とは亦羅馬社會の大區別にして、其文明を汚辱せしこと幾何なるを知らず。社會の制度は屢改善せられしも、奴隸は一も此恩恵に浴するを得ず。法律は奴隸を以て國家の物件或は財産と見做し、生殺與奪一に主人の手に在り。而して奴隸虐待の禁令は今日歐洲諸國に於ける牛馬虐使の禁令よりも猶劣りたるが如し。奴隸を畜ふには富の度によりて多少の差等ありといへども、亦故らに一萬乃至二萬の奴隸を畜ひ其豪奢を衒ふことあり。而して奴隸は盡く賤役を執るものよみにあらずして、書記、彫刻者、工匠等の如きもあり。市府に於ける奴隸は稍寛待を得るものありて、自金錢を貯蓄して自由を買ひ、或は恩典として之を授與せらるゝことあり。然れども農家に使役せらるゝ奴隸は殘忍酷虐の待遇を受け、晝は腰間に鐵鎖を繋かれ、夜は地倉に幽閉せられ、恰も極惡の大罪囚たるの觀あり。帝政の末に至りては、其待遇の狀稍寛となりしが如し。

遊戯 本章第一節に於て述へし如く、羅馬には宗教の祭儀と共に諸種の遊戯あり。然れども後世に至り其遊戯は變して殘忍暴戾となり、全く宗教上の性質を失へり、彼格闘

獸の如きは其最甚しきものなり。蓋共和の末政に當りて政權を獨占せんとする英雄等は、羅馬人の嗜好に投し、之を以て民心を籠絡せんとせり。故に帝政時代に至りても亦人民の自由を憶ふの念を轉せしめんとし、金錢及性命をも惜まらずして益之を擴張することを勉めたり。此等の遊戯と穀物分配の制とは、帝王の其位を鞏むる第一手段たりしなり。此遊戯は貴賤一般に歡娛する所にして、史家タシタスは此惡事を以て羅馬人が母の胎内より傳受し來れるものと云ふに至れり。遊戯は朝より暮に至り、一年間百數十日を費すことあり。「サーカス」闘戯場に於ては競車、競馬等あり。顯要の政治家黨を分ちて之を行ふ「アムフ、ス、アトル」(Amphitheatre)に於ては格闘闘獸あり。格闘は多く罪人、捕虜、奴隸等より成り。又無頼の壯年之に加はることあり。劍を把りて相撃ち、一方のもの傷を負ひ戦ふ能はざるに至りて止む。闘獸は遠國より數多の猛獸を輸入し人をして之と闘はしむ。シーサーの時四百の獅子と四十の象とを集めしことあり。又タイタス帝の時九千の野獸を殺せしことありと云ふ。其殘酷なりしこと亦以て想見すべし。此等の争闘を爲すには、皆豫め學校を設けて平常其技を練習せしむ。其他又水上の格闘と稱するものあり。此等は羅馬人の狂奔熱中する所なれども、演劇に至りては之を顧みるもの少く、間、喜曲演劇

の一榮を博するあるのみ。

産業 農業は羅馬人の最重せし所にして、諸外國を征服し數多の穀種を得、之を**コール**西班牙及**ライン**地方にまで播種せり。然れども後世に至りては、略奪せる諸郡縣より數多の穀物を輸入せしを以て、伊太利の農業は漸々衰頽に趣き、耕作は全く奴隸の手に歸するに至れり。工業は太古よりして一般に輕蔑せられ、此業を執るものは何れの官職にも就くことを得ず。其日常缺くべからざるものは奴隸或は奴隸の自由を得たるものをして製造せしむ。商業も亦工業と同しく輕蔑せられたりしが、**アントナイアス**帝以後數世は大に貿易を奨勵し、西印度地方と交通せり。又**アントナイアス**は支那(後漢の桓帝の時なりしと云ふ)に使節を送り交通を求めしことあり。

第二編 中世史

總論

概説 中世史は西羅馬帝國の滅亡(紀元四百七十六年)より**コンスタンティノープル**の略

奪(紀元千四百五十二年)に至るまで殆一千年間に亘れり。此間の重要なる紀事は北方蠻夷の移住、**サラセン**人の興起、**フランク**帝國の建立、近世國民の興起、十字軍、百年戦争及亞細亞人民の勃興となす。而して此世紀を組成する所の要因三あり。曰く野蠻人の元素、曰く羅馬人の元素(政治法律及上古の技藝文學の遺存者として)曰く基督教徒の元素是なり。而して文學技藝の衰頽、封建制度即貴族政治の興隆及羅馬法王權の振張は、此世紀に於ける一般の特徴として見るべきものなり。之を要するに中世史の前六世紀は所謂暗黒時代にして、羅馬文明の赫灼たる白日に繼くに長夜の暗光を以てせり。後の四世紀は雲霧模糊の間既に近世史の曙光を含むを見る。此時に當りては漂泊の民族も己に定住の國民となり、制度文物漸く其舊觀に復せんとせり。而して上古文明の歴史は當時最權勢ある一大國民の歴史に過ぎざりしが、自今而後は文明の中心單一處に限らずして、

廣く各處に散在するに至れり。

東洋諸國の新人種 古代東洋諸國民は一時隆盛を極めし後、閑として久しく聞く所なかりしが、中世紀に至りて亞刺比亞人大に勃興し、歐洲の文化に裨益を與へたり。又蒙古人及土耳其人の興隆するに及びて一時全世界を震動せしめたり。是東洋人種の中世紀の世界史上に及ぼせる一大活劇なりしなり。

歐洲の新人種 歐羅巴の古代史は唯希臘人及羅甸人の歴史に止りしが、中世紀の前後より其同族なるセルトテ、イートン及スラツ、イニアン(Chuvonian)の三新人種出顯せり。此等の人種の亞細亞より歐羅巴に移住せしは歴史以前に在りて、今日より其移住の前後を詳かにすることを待た。セルト人種は初歐羅巴の中部に住居せしが、後テ・イートン人種の爲に驅られ、終に西部歐羅巴に移住し、而してテ・イートン人種は中部及東部歐羅巴を占有せり。後スラツ、イニアン人種の歐羅巴に現はるゝに及びて、中部より北西歐羅巴に移り、スラツ、イニアン人種代りて東部の大原を掩有せり。此三人種中最先に羅馬人に接せしものはセルト人なり。シスアルバイン、ゴール人、トランスアルバイン、ゴール人、セルト、アイビリアン(Celtic-Therian)人(西班牙の)は皆セルト人種にしてフリテン諸嶋も亦セルト人の移住せし所なり。ゴール及西班牙

牙のセルト人は西羅馬帝國滅亡以前既に羅馬の風俗に化せり。スラツ、イニアン人の歴史上に重要な運動を爲せるは、中世紀の中葉以後にあり。波蘭(Poland)人露西亞(Russia)人其最主なる人民となす、而して中世史に最重要の關係を有せるものはテ・イートン人種即日耳曼人種にして其始て史壇に現はれたるは西羅馬帝國滅亡の前後にあり。

日耳曼人種 日耳曼人種中重要のものはゴス人、フランク(Fränk)人、ヴァンダル人、バーガント人、ロムバート(Lombard)人、アングル(Anglo)人、サクソン(Saxon)人及スカンディ、ネーヴ、ア(Scandinavian)人なり。此等の人民中西羅馬帝國の滅亡に關する記事は既に上世史に掲げたり。其以後に係る建國の状態は之を後節に譲り、此に其人種の性質風俗等の一般を略説せん。

其風俗習慣 古代日耳曼人は粗野なりしと雖、身心共に強健快潤なり。體軀は長大にして眼色綠碧人を射る。其特性として見るべきは獨立の精神、自由の意思、家族の愛情、婦女の尊敬、朋友の信義辨説の爽快、漂泊略奪の嗜好、飲酒遊戲の耽樂等なり。其住屋、衣服、食物は甚質素にして、最武器を愛好し、佃獵及戰爭を以て主要の職業となし、而して土地の耕耘及家内の處務は一切之を婦女に委せり。人民は自由と奴隸の二階級に分れ、自

由民の中に高貴(貴族)の者あり。往時の軍功によりて久しく人民の指揮者となれり。然れども何等の特權をも有せず。奴隸の人民は多く戦争に於て虜となりたるもの及其子孫にして、主人の使役に供し一の權力をも有せず。自由民と奴隸との間に「リテイ」(Lites)と稱する中間の階級ありて自由民の土地を耕せり。而して接近せる數多の家族相集りて一村を成し、數十の村落相集りて一郡區を成せり。公共の事件は公議を経て之を執行す。一村落には酋長あり一郡區には伯(Count)ありて之を治む。伯は最威望あり且最經驗ある者を撰ひて之に任す。戦時には伯の最勇敢なるものを撰ひて大將即公(Duke)と爲す。東方にある少數の種族は既に王ありしが、其他の種族に於ては後世に至り始めて之を撰舉せり。王は其種族中の最卓越せる家族に屬す。大將(公)の撰はれて王となるときは(王となすには權に載するの習慣あり)公及伯の權力を兼有し、萬般の事務を執行することを得るなり。

日耳曼人種移住の結果 日耳曼人即テートン人の伊太利、ゴール及西班牙等に移住するや、漸次羅馬人と混合し、日耳曼羅馬兩語の混合より一種の羅甸語を生ぜり。是所謂「ローマンス」語(Romance Tongues)にして伊太利語、西班牙語、佛蘭西語は之より進化せしものなり。然れども羅甸語は猶數世紀間學者の間に行れたり。且日耳曼人は羅馬の法律文

物を採用し、漸次「カトリック」(Catholic)教を信奉するに至りしが、舊來の僧侶は尙其位置を失はずして勢力益加はれり。之に反して「アングロサクソン」人は日耳曼に在りし時より羅馬人と親密の關係を有せざりしを以て、其「フリテン」を征服せし後も「ローマンス」語及其宗教を採用せしことなし。又純粹のテートン人の新國民即日耳曼及スカンディネーヴィアに起れる國民は全く羅甸語の影響を蒙らずして、純然たる「テートン」語を用ひたり。日耳曼、荷蘭(Holland)、瑞典(Sweden)、那威(Norway)、丁抹(Denmark)等の諸語是なり。「スラヴ・ニーアン」人種は固有の「スラヴ・ニーック」語を使用せり。

第一章 シャーレンメーン帝以前の諸國

第一節 テートン人種の新建國

新王國 テートン人種の羅馬滅亡に關せる記事は既に上世史に於て之を記述したれば、是より其新建國の状態を説かんとす。伊太利に建つるものをオストロゴス人、ロムバート人となし、伊太利外に建つるものをヴィシゴス人、ヴァンダル人、バーガンディヤ人、フランク人、アングル人及サクソン人となす。

オストロゴス王國 ヴィシゴスの酋長オドリアサーは紀元四百七十六年(以下紀元の二字を略す)西羅馬帝國を滅してより十二年間伊太利に君臨せしが、オストロゴス王ス・オドリーク(Theodoric)東羅馬帝ツ・イーノの命を受け、二十萬の大軍を率ゐる婦幼家財を携へて伊太利に侵入し(四百八十九年)三回戦争の後終にオドリアサーを降し後之を殺せり(四百九十三年)。是に於てス・オドリークは東帝より伊太利王を是認せらる。ス・オドリーク英明にして能く國を治め、漸々疆土を開拓して、北はタニエーフ河より南はシシリ島の南端に達し、東はイルリカムより西はゴールの東南部を包有し、ヴァンダル人及バーガンディア人と平和を訂盟せり。ス・オドリーク在位三十三年の間羅馬の法律制度を循行し、羅馬土民の農工商を奨励し、又能く學藝宗教を保護せるを以て、國內の繁榮寧謐なること近代其比を見ざる所なり。ス・オドリークの死後(五百二十六年)幾何ならず、東羅馬帝ジ・ステ・ニアン(Justinian)ペリサリアス(Belisarius)及ナイセス(Narses)の兩將を遣ひ伊太利に入る。二十一年間戦争の後オストロゴス終に亡ひ(五百五十五年)伊太利は復東羅馬の管治に歸せり。

ロムバード王國 オストロゴス王國滅亡の後、羅馬の太守ナイセスは十三年間伊太利を管治せしが、ジ・ステ・ニアンの後嗣と隙を生じ、五百六十八年ロムバード人を招き伊太利に入ら

しむ、ロムバード人は猛烈なる日耳曼人種にして、是より先チ・ビテイー(Gepidae)人を滅じ、パノニア(Pannonia)を占領し益其境土を拓けり。酋長アルボイン(Alboin)の時ナイセスの招きに應じ伊太利に入り、今日のロムバードイー(Lombardy)に居り、遂に伊太利の大半を征服し、而して王國を建てパツ・イー(Pavia)を以て首府となす。其後ロムバード人は基督教を奉じ伊太利の文明を學び野蠻の陋習を脱せり。七百七十四年ヂ・メルリス(Desiderius)の時、ハ・レメーン(Charlemagne)大帝の爲に并有せらる。

ヴィシゴス王國 ヴィシゴス人は上世史に於て記載したるか如くスイウイ人及ヴァンダル人を破り、ヴィシゴス國を西班牙に建てたり(四百十五年)。其後ヴィシゴス人は漸々其版圖を擴め西班牙の全部よりゴールの南東を占領せり。サラセン(Saracen)人の興隆するに及びて、亞非利加よりチアラタルの海峡を越えヴィシゴスに侵入せり。ヴィシゴス王ローテリク(Roderic)は之とヘレス、デ、ラ、フロハネーラ(Xeres de le Frontier)に戦ひて敗北し(七百十一年)西班牙の全部殆之が爲に略奪せられ、ヴィシゴスは一小部分のみ獨立を維持するに至れり。

ヴァンダル王國 四百二十九年ヂ・ンセリク(Genseric)の亞非利加北岸にヴァンダル國を建設し、而して羅馬に侵入せしことは既に記せし所なり。其後ヴァンダル人の近海の諸嶋嶼を攻略

し久しく暴威を地中海上に振ひしが、チリマー (Germer) 王の時東羅馬の將ベリサリアスの爲に征服せらる(五百三十四年)。

バーガンディア王國 バーガンディア人は五世紀の初に於てゴールの東南部に一王國を建てしが、漸々領土を擴め其世紀の終に至りては上ライン地方より地中海に達せり。後フランク王國の起るに及びて其并有する所となれり(紀元五百三十四年)。

フランク王國 フランク人は初下ライン河邊に住居せしが、西羅馬帝國の未造天下騷亂の時際し其境土を擴張し、酋長クロウイス (Clouis) 四百八十一年より五百十一年までに至りフランク各族を統

一し、終にフランク王國の基礎を確立せり。是近世佛蘭西 (France) の濫觴にしてクロウイスはメロウ、ンチアン (Merovingian) 家の始王なり。四百八十六年クロウイス、セイン (Seine) 及ルアー (Loire) 兩河邊にある羅馬の地を略し太守シアグリアス (Sagris) を殺し、リアソン (Roissons) を以て首府となし後之をパリ (Paris) に定む(五百六年)又ライン兩河邊のアレマンニ人を滅し其地を并せ基督教徒となれり。次でバーガンディア人を征しヴィシゴス人を驅逐せり。フランクの勢力はゴールの占領と共に益々擴張し、東羅馬帝はクロウイスに送るに「コンサル」官を以てするに至れり。クロウイス歿して其國を別ち四子に與へたり。其後フランクの領地は益々大となりし

が、内亂繼き起り版圖潰裂し、六百十三年に至りクローテア (Clotaire) 二世一時之を統一することを得たり。然れども當時王權は甚微弱となり虚器を擁するに過ぎず。其家宰 (マヨルドームス (Major domus) 即 (Mayor of the Palace) と稱す王室及宮中の事務を司る) の權力益々強盛とかり、遂に軍國の大權を掌握するに至れり。七百年頃ヘリスタル (Heristal) のピピン (Pippin) 全國の「マヨルドームス」となり、而して自フランク公と稱せり。其子チャーレスマーテル (Charles Martel) 位を繼ぎ、七百三十二年亞刺比亞人 (即サラセン人) をツール (Tours) 及ポアチエ (Poitiers) の間に破り、將に回々教の配下に屬せんとする基督教國の危急を救へり。其子小ピピンに至り終に羅馬法王及フランク人民の贊助を得て、虚器を擁せるシルデリク (Childeric) 二世を廢して自王位に登れり。是に於てメロウ、ンチアン家亡ぶ。小ピピン (七百五十一年より七百六十八年まで) はカーロウ、ンチアン (Carolingian) 家の始王にして羅馬法王ステファン (Stephen) 二世を援けロムバード人を伐ちラヴ、ンナ (Ravenna) 附近の地を取りて之を法王に與へたり。是他日法王統御即教會國の基礎となれり。ピピン死して子シ、ーレメーン位を繼ぐ。

英吉利王國 五世紀の初に當り羅馬の鎮兵フリテンを去りしかば、土民 (セルト人種) は北方のカレドニア (Caledonia) に於けるピクト (Pict) 及スコット (Scott) と稱する慍悍人民の侵

寇を蒙り、援を低地エルベ (Elbe) の日耳曼人に乞へり。是に於てサクソン人アングル人ジューツ (Jutes) 人等之に應じて海を渡りフリテンに入りカレドニア人を征服し、終に亦フリテン人を滅し其地をイングラント (England) と稱せり。此等の人種は蒙昧にして當時發達せる羅馬風の開化法律及言語を破壊し、戰爭佃獵牧畜等を職業となせり。而して土民は多く殺され或は奴隷となり、其餘はゴールに奔れり。只ウェールス (Wales) 及コーンウォール (Cornwall) のセルト人は十三世紀に至るまで其獨立を維持せり。是其今日尙言語及國情を異にせる所以なり。而して其他のイングラントは久しき戰爭の後アングロサクソン人の占有する所となり七箇の小王國起れり。ヘプターキー (Heptarchy) と稱するもの即是なり。而して其最早く起りしものをケント (Kent) 王國となす。此等の王國は第九世紀に至るまで互に相攻伐せしが、ウセックスのエグバート (Egbert) 王に至り、他の六ヶ國を并吞し、而してイングラント王となれり。アングロサクソン人は已に七世紀頃より羅馬法王グレゴリー (Gregory) 一世の送りしオーガスタイン (Augustine 後カンターベリー (Canterbury) の僧正となれり。) の風化を蒙り基督教の信者となれり。

第二節 東羅馬帝國 (Eastern empire)

概説 西羅馬帝國は既に衆多の野蠻人種の割據する所となりたり。東羅馬帝國は黨派の争闘、風俗の敗壞によりて國力疲弊せりと雖、而も能く外敵の侵寇に耐へ東羅馬帝國 (希臘帝國或はビザンティウム帝國) の名稱を以て尙一千年の間其國命を保續せしが、歐羅巴の文明漸く其度を高むるに従ひ、勢力日に益衰へ、終に土耳其人の爲に滅さるゝに至れり。

ジステニアン一世 東羅馬帝國は東西分裂の後數十年間懦弱なる君主の治下に在りしがジステニアン (Justinian 五百二十七年より五百六十五年まで) 一世の時に至り、東羅馬帝國は一時光輝を發揚せり。帝は英將ベリサリアスを用ゐ、北方蠻族の侵入を防禦し、又彼斯王コスルース (Chaspeus) の侵寇を退け、次でカース・ーチを侵掠し、亞非利加に於けるヴァンダル人の權力を勦滅せり (五百三十四年)。ベリサリアス又オストロゴス王國の内亂に乗じ、伊太利を征して其大半を經略せしが、帝の召還する所となり、ナーセス之に代り終に東ゴス王國を滅せり (五百五十五年)。是に於て東西羅馬帝國復合一せり。帝は又土木を以て著れ、コンスタンティノープルのツァリア (Theodosius) 大會堂を建築せり。然れども帝の事業は尙此より大なるものあり。即羅馬法律を編纂し秩然たる法典 (Corpus Juris) となし、にあり。從來羅馬法律の書は數千卷に

上り、政府の布告と法庭の判決と往々齟齬して人民其適歸する所を知らざりしを以て、帝は法律學の大家トリボニアン(Tribonian)及其他の學士に命じ法典を編成せしむ。全部四編より成り、過去及現行の法律より法律の原理學者の説明に至るまで擧げて遺す所なし。現今歐洲諸國(英吉利を除き)の法律は皆則を此に取りたるなり。

ジャステ、ニアン後の形勢

東羅馬帝國の光輝もジャステ、ニアンの死と共に消滅し、朝

廷には暴君相繼ぎ、フ、िकास(Phocas)

六百三年より六百十年まで及ジ、ステ、ニアン二世(六百八十五年より六百九十五年まで)

五年より七年

重位(六百十年まで)の如きは其暴虐ニロードミシアン(Domitian)兩帝に過き、コンスタンヌス帝(六百

一年より六百

六十八年まで)の如きは寶什重器を破壊せることアラリ、クチ、ンセリ、クに勝れり。其間外は

蠻民の入寇を蒙り、内は賦歛の騷擾已むときなしヘラクリアス(Heraclius)

六百十年より六百四十年まで

世に當り斯彼王コスルース二世に勝ち、一時國力を恢復せり。然れども其後混亂相繼ぎ、八

世紀の頃より基督肖像破壊黨(Iconoclast)起り黨派分裂し論争延さて百餘年に及べり、

而してバルゲリア(Bulgaria)人スラツ、ニアン人は北西より、彼斯人は東方より、亞刺比亞

人は南方より入寇し、古代文明の靈域方に野蠻の重圍に陥り、國力日に削減せらる。

第三節・サラセン帝國 (Saracen empire)

亞刺比亞の概説

基督教の西方日耳曼諸國に於て其領域を擴張せる時に當り、東洋

の一隅に新教國起り、中世史上に一大活劇を演せんとする「マホメ、ト」(Mahomet or Moham-

ム)教の亞刺比亞國に起れること是なり。亞刺比亞の地たる北方には廣漠なる沙漠連亘

せりと雖、西南は土地肥沃にして産物に富めるを以て、古代より盛に陸上及海上の貿易

を營めり。亞刺比亞人はセミテ、ク種族にして頗想像力に富めり。國內は數多の小國に分

れ争亂常に止む時をなし。其宗教は多神教にして古代は星辰を禮拜せり、而して亞刺比亞

人の一般に尊敬せる所はメ、カ(Mecca)府に於けるカーバ(Kaaba)の靈場(黒石を祀る)なり。

然れどもジ、デア教基督教の漸々亞刺比亞に傳はるに及ひて其教儀を混用し、終に宗

教改革を圖るもの出るに至れり。マホメ、トは實に其首領たり。

マホメ、ト マホメ、トはレ、イシ、(Korish)の支族に屬し、五百七十一年メ、カに生る。幼に

して孤なり其叔父の爲に養はる。長するに及ひて四方に行商し、ジ、デア人及基督教徒

と交り其教儀を學べり。其後マホメ、トは富裕の寡婦カ、ヂ、(Khadija)と婚し自由の身と

なり四方を周遊せり。歸國の後亞刺比亞人を救濟せんとの大願を起し、四十歳の時突然

讒言して曰く、世界には唯一の神「アルラー」(Allah)あるのみ、而してマホメトは其豫言者なりと、然れども其妻、其義父アフ、ベカー(Abu Bakr)従弟アリー(Ali)及其他二三の親戚朋友を除くの外は國人之を信するものなし、而して舊教の信徒はマホメトを害とし、其徒黨を國外に驅逐す。マホメトも亦メカよりメデーナ(Medina)に走れり、蓋メデーナ人は是より先既にマホメトの新教に歸依したるを以てなり、マホメトのメカを遁れしは六百二十二年七月十六日なり、之を「ヘチラ」(Hijra)と稱し、マホメト教國の紀元となす。マホメトはメデーナにありて寺院を創建し、益信徒を得たり、是よりしてマホメトは武力を以て教義を擴布せんと欲し、先メカを攻め六百二十年に至り之に勝て盡く偶像を廢滅せり、其後幾何ならずして亞刺比亞半島盡く「アルラー」を信奉するに至れり、是に於てマホメトは更に進んで國外に教義を傳播せんと欲せしが、六百三十二年熱病に罹りメデーナに死せり、マホメトの教義を「イスラム」(Islam)救済の義と稱し、信徒を「モスレム」(Moslem)信者の義と稱し、而して經典を「コーラン」(Koran)と稱す、蓋「ジデーア」教及基督教より脱胎せるものなりといへども、能く合理的の宗教を創め、而して能く散亂せる民族を統一せり、マホメト亦一個の人傑たるや疑なし。

カリフ及東方正略　マホメトの死するや繼嗣未定らず、其婿アリー立ちて「カリフ」(Caliph)

とをらんことを求む、衆アフ、ベカー(マホメトの義父)を推して「カリフ」とす、「カリフ」とは繼嗣者の義にして政教の全權を掌握するものを云ふ、是より兩者黨争の端起り、延きて後年に至る、「カリフ」はマホメトの遺志を承け諸國を侵略し、大に版圖を擴張せり、マホメト「教從の他國に侵入するや、毎に三事を以て土民に命し而して其一を擇はしむ、曰く「コーラン」を奉ずるか、貢賦を致すか、將劍戟を受くるかと、此手段能く其功を奏し、東方の諸國を蕭捲して歐洲に及べり、今其概要を説かん、東方に於てはアフ、ベカー(六百三十二年より六百三十四年)及第二の「カリフ」オーマー(六百三十四年より六百四十四年)相次きパレスティン、シリアを征略し、基督教の都府シ、ルサレム、アンテ、オク、及ダマスカス(Damascus)を併呑し、カデシア(Cadix)の戰、六百三十六年)に於て彼斯國を滅し、マホメト教はオクサス、ジャクサー、テイスの兩河よりインダス河の間に流布し、キ、イーフ、(Kufa)及バグダド(Bagdad)等の新都は他日學術商業の中心となれり、又當時宗教上の黨争によりて分裂せる埃及を征し、アレキサンドリアを陥れ、ムムフィスを破壊せり、是時有名なるアレキサンドリアの圖書館も灰燼に歸せりと云ふ(六百四十年より六百四十二年)、是に於て東羅馬帝國は盡く東方の領地を失へり、後オーマーは刺客の手に斃れ、オスマン

(Othman 六百四十四年より) 繼ぎて「カリフ」となる。オスマン又刺殺せられアリー代り立つに及びて、オムミアド (Omniad) 家のムーウ、ヤー (Muawiyah) 起り、數年戦争の後、六百六十一年アリーを殺して「カリフ」となり、而して都をダマスカスに遷せり。

西方征略 ムーウ、ヤーは國內の争亂をも顧みず、屢海陸の軍を起し東羅馬帝國を攻め、コンスタンティノープルを圍むこと八年(六百六十八年より六百七十五年まで)終に抜く能はず、其後サラセン人は北亞非利加の海岸を攻めシリートトリポリ (Tripoli) カース、ーチ等を征服せり、七百十一年亞刺比亞の大將タリク (Tariq) は亞非利加よりチアラタル (Chalatal) の海峡を越え西班牙に侵入せり、當時西班牙はウシゴス人の占領する所たり(本章第一節を參看せよ)タリクはウシゴス王とヘレス、デ、ラ、フロンテアに戦ひ大に之を破り、殆、西班牙の全部を略定せり、其後サラセン人は又進んでピレニース山を踰え南部ゴールに侵入せり、七百三十二年フランクのチ、イレ、ス、マールとツール及ポアテエーの間に會戦して大に敗れ、復手を歐羅巴に伸ぶること能はざるに至れり、然れども尙西班牙を占領して中世紀の末に及べり。

帝國の分裂及東方カリフ廳 サラセン人のゴールに敗れてより未幾何ならずして、其帝國は東西に分裂し、各「カリフ」ありて之を管治せり、七百五十年ダマスカスに於けるオム

ミアド家はア、バシッド (Abbasid) 家のアフル、ア、バス (Abur Abbas) の爲に顛覆せられ、アフターマン (Abderrahman) は西班牙に逃れ、コルドヴァ (Cordova) に於て獨立の「カリフ」廳を建てたり、ア、バシッド家は其後都をタイグリス河畔のバグダッドに遷せり、ア、バシッド家「カリフ」の中最有名ものをハルーン、アル、ラシッド (Haroun al Raschid 七百八十六年より八百九年まで) とす、ハルーン、アル、ラシッドはシ、ーレメン帝と同時代にして、其事跡は神史「アラビアンナイト」(Arabian Nights) に於て久しく人口に騰れり、ハルーン、アル、ラシッドは其子アルマニーン (Almanun) と俱に大に學術技藝を奨勵し、又商業工業を保護し、バグダッドは殷富繁華の都府となれり、然れども其權力は漸々之より衰へ、後世の「カリフ」は其旗下土耳其軍卒の翻弄する所となり、領土分裂して獨立するもの多し、十一世紀の頃其政權は遂にセルジ、キアン (Seljukian) 土耳其軍將トグルル、ベー (Toghrul Bey) の手に歸し、「カリフ」は只宗教上の主宰たるに至れり、バグダッドより分離せるもの、中最有名なるを亞非利加に於けるフ、テ、マイト (Fatimites) 「カリフ」廳となす、カイロアン (Cairoan) を以て首府となし、コーシカサーデー、ニア及シシリイを占領し、十世紀の初埃及と合しカイロー (Cairo) に首府を定め、其領土を擴張してシリアに至れり、「カリフ」の最名あるものをハケム (Hakem) とす、亞非利加「カリフ」廳は十二世紀の末サラデ

西班牙のカリフ廳 アフターラーマン は七百五十五年 コドツツ に カリフ 廳を建てしより アフターラーマン 二世(九百十二年より九百六十二年まで) に至り國勢最盛となり、學術技藝より農工商業に至るまで大に發達せり。然れども其後軍卒跋扈し内亂繼ぎ起り、一千〇三十二年 オムミヤド 家終に亡び、西班牙は ムーア (Moors) 亞刺比亞人と亞非利加人の混合種族なり 人の管治する所となり、數多の小國に分裂し、互に相攻伐して國勢日に衰頹に趣き、遂に千二百四十八年以後基督國民の征服する所となる。

第二章 シャーレメーン帝國

第一節 シャーレメーン帝(七百六十八年より八百十四年まで)

シャーレメーン シャーレメーン は小ビビンの子なり。小ビビンの羅馬法王及國民の贊助を得て、メロツ、インチアン 家最後の王を廢し カローツ、インチアン 家の王業を創めしことは既に記せし所なり。ビビン死して二子 チャーレス 及 カローマン (Carloman) 俱に政を執る。幾何ならずして カローマン 死し チャーレス 即 シャーレメーン 獨 フランク 國王(當時のフランク國王は現時の佛蘭西及日耳曼を包括せるものなり) とな

れり。當時東羅馬帝國は委靡して振はず。伊太利は大抵 ロムバード 人の有に歸し。西班牙は サラセン 人の治下に在り。 インクランド は數多の小國に分裂し。其他の人民は皆未、蒙昧野蠻の域を脱せず。 シャーレメーン 不世出の天資を抱きて此際に崩起し。已に敗壞せる西羅馬帝國を再興し、其偉勳は赫々として暗夜を照すの光明となれり。史上大帝の稱を得る亦以あるなり。而して シャーレメーン は其目的を達せんか爲に當時文明の諸元素殊に テ、オート 人の政治思想と基督教會の團結力とを最能く利用せり。此故に シャーレメーン は勉めて國民の尊崇せる日耳曼舊制度を維持し、且熱心に羅馬法王及教會を保護せり。

征戰 シャーレメーン は在位四十六年の間東征南伐熄む時なし。其第一に起れるものを サクソン 人の征戰となす。帝は其境土を防禦し、且同時に基督教を廣布せんとの目的を以て、七百七十二年より三十一年の久しき サクソン 人(是より先 フリテーン を征服せる サクソ の同族より出でたり) の同盟と戦へり。此同盟は ウ、エーセル (Weser) 及 エルベ 兩河邊の多神教徒より成る。 シャーレメーン 屢 サクソン 人を攻めて之を服従せり。然れども反服常をかりしが七百八十二年に至り、 サクソン 公 ウ、テ、キンド (Witkind) と決戦し大に之を破り、基督教及 フランク の制度を採用せしめ、八百四年に至り全く サクソン との戰爭を終結せり。 サクソン 人との戰爭始るや、伊太

利に於けるロムバード人は事に因りて羅馬法王を窘迫せり。法王ヘードリアン一世援をシャールレメーンに乞ひしを以て、シャールレメーンは軍を率ゐてアルプス山を越えロムバード人を破りバツリアを略奪し、デジデリウス王を寺院に幽囚し、而して自ロムバード王の鐵冠を戴き、上伊太利をフランク王國に并合し、其父ビピンの嘗て法王を與へたりし領地を確認せり(七百七十四年)。サクソンとの戰爭中西班牙のサラセン人侵入せしを以て、シャールレメーンは西班牙を征し(七百七十八年) パムペロナ (Pampelona) 及 サラゴサ (Saragosa) を略奪し エープロ河を以て領域となせり。其退軍に當り一將 ローランド (Roland) の軍 ロンセスバル (Roncesvalles) の低地に於て大に サラセン人の破る所となり、フランクの勇士死するもの甚多し。然れども少も シャールレメーンの大功を害せざりき。サクソン人との戰爭未終らざる時に當りて バツリア (Bavaria) 公 タシロ (Thassilo) は東方の アツ (Avar) ハン族民(人)の援を得て、フランク國の羈軛を脱せんことを計り、シャールレメーンの爲に討平せられ、タシロは寺院に幽閉せられ バツリア公の位を褫れたり(七百八十八年)。シャールレメーンは更に進んで アツ人を征服し、タイス (Thesis) 河に至り以て東方邊陲 (Mark 今日の奧太利) を設立せり。又北の方 デー (Dane) 人を破り北海に至り、東の方 スレーヴ (Slaves) の一部分を取り以て フランク王國の東境を

開拓せり。是に於て シャールレメーンの版圖、南は エープロ河及 タイパー河に及び、東は エルベ河及 タイス河に達し、北は北海に濱せり。シャールレメーンの威風遠く バグタッドに達し、有名なる カリフ ハルーン、アル、ラシッド (前節を) (見よ) は修好の爲に象猿及珍奇の時計を遣れりと云ふ。

『シャールレメーン』の即位

羅馬法王 レオ (Leo) 三世敵黨の爲に逐れしを以て、シャールレメーン

は之を援けんとし八百年盛儀を具へて伊太利に入り、基督生誕の祭日從者と共に聖ピーター (St. Peter) 會堂に入り禮拜せんとす。時に法王 レオ 三世突然皇帝の冠を其頭上に加へ、祝して西羅馬皇帝とかし、且 シャールレメーン第一世「シーサー」「オーガスタス」の尊號を附せり。

是に於て二百有餘年間廢絶せる西羅馬の帝位復其人を得て東帝國と對峙するに至れり。是よりして歐羅巴基督教國は教會及政治の結合體となり、法王擅權の端を開けり。

制度

シャールレメーン帝の國內の政務を整理せし文功は決して征戰の勳烈に譲らず。帝

は其大版圖を劃一政令の下に立たしめんと欲し、躬政治の大權を總攬し、舊來の公位を廢し、國內を數多の行政大區に分ち、伯に命じて之を分治せしめ司法及軍務を司らしむ。邊陲には邊陲方伯 (Margrave or Margrav) を置きて之を治めしむ。又巡察使を置き方伯の治否を監視せしむ。而して法律は高官僧正方伯公民より組織せる毎年二回の國會 (一は春

ける大會にして、マイフルド (Meinhold) に提出して之を議定せしむ。
稱し、一は秋期に於ける準備の小會なり。

教育及學事 シヤレーメーノ帝は大に人民の教育に注意し、數多の寺院學校を建設し、基督教の僧侶をして之を管理せしめ、古代羅馬の文學書を騰寫し、且古代日耳曼の軍歌を編纂せしめ、以て大に寺院の音樂を改善せり。シヤレーメーノは又厚く學術及學者を保護し四方より學識ある僧侶を宮中に集め、躬俱に文學を談論し、好んで文法、修辭、音樂、論理、天文、博物等の學を研究し、又刻苦して書法を習へり。又帝は宗室及宮内官吏の爲に宮中學校を建立して教育を勸課せり。其他帝は農業工業商業等を獎勵し、建築術の如きも當時頗發達せしが如し。

第二節 シヤレーメーノ帝國の分裂

概説 シヤレーメーノ帝國の版圖は言語風俗を異にせる人民の集合體なるを以て、シヤレーメーノ帝の如き英傑にして始めて能く之を制馭し得べきなり。一旦其人死して之に繼ぐの英傑なくんば、土崩瓦解猶彼アレキサンダーの死後に於けるが如くなるべし。況んや后嗣庭弱にして其器にあらず、又内相鬪ぐに於てをや、其分裂期して待つべきなり。

帝國の分裂 八百十二年シヤレーメーノ帝年七十二にして殂す。幼子ルイ (Louis) 位を繼

けり。其二兄チーレス及ビビンの早世せしを以てなり。ルイ(八百十四年より八百四十年まで)人となり庭弱に

して勇敢なる國民廣大なる版圖を統轄するの才にあらず。其早く帝國を三子ローサー (Lothar)、ビビン及ルイに分與せしが如きは、既に亂階を兆せり。後后ジテス (Theut) の幼子

チーレスを生むに及びて、帝又之に一地を與へんとし、かば、三子は父に叛き迫りて之を寺院に幽し而して其位を奪へり。然れどもルイ帝は後ルイの爲に其囚を解かる。當時第

二子ビビン既に死せしを以て帝は新に國を他の三子に分與せり。帝の死するや、兄弟直に戈を取りて爭鬪を開き、ルイ及チーレスはローサーとフントネー (Fontenay) に戦ひ大に之を

破り、終に八百十二年ツェルタン (Verdun) の條約に於て帝國を三分して其一を有せり。ローサーは伊太利及中部フランク(後ローサーよりしてローサリチア (Lotharing) の稱を得たり)を得兼て帝位に登れ

り。ルイは東部フランク (ライン河東) を得、チーレスは西部フランク (即佛蘭西の地) を得たり。此時よりして東部の人民は漸々結合して一國民となり、其言語は獨乙語即日耳曼語とし

て西部及南部に於ける「ローマンス」語人民との區別を生じ、各其發達の進路を異にするに至れり。故にツェルタンの條約は日耳曼及佛蘭西人民の由りて分るゝ所にしてフランク帝

國の統一復望むべからず、ローサー¹殂して(八百五十五年)長子ルイ二世帝位を嗣ぎ伊太利を領し、第二子チ・イレス(八百六十三年死す)はバーガントニアを有し、第三子ローサー二世(八百六十九年死す)はロ・サーリンチを有せり。ローサー二世の死後ルイ二世の伊太利を除くの外は東フランク(日耳曼)王ルイ及西フランク(佛蘭西)王チ・イレスの分割する所となれり。此時に當りてスレーフ人は東よりサラセン人は南よりノースメン(Northman)人は北及西より來寇し四境常に多事なり。又内は諸侯跋扈するあり。而してフランク國の諸王率庸主にして之を制する能はず。東フランク王ルイ死し(八百七十六年)其國を三子に分與せしが二兄早世し、終に第三子チ・イレス、ゼ、フト(Charlemagne the Fat 八百七十六年より八百八十七年まで)獨東フランク國を領せり。是より先、西フランク國王チ・イレスはルイ二世の殂せし後(八百七十五年)フランク帝位に登り二年にして殂せり。其子ルイ繼ぎ立つ。ルイの後二子早世し第三子チ・イレス、ゼ、シムフル(Charles the simple)尙幼なるを以て、貴族は東フランク國王チ・イレス、ゼ、フトを推して王位に即かしむ。又當時ローサーの後嗣全く絶え伊太利主なきを以てチ・イレス、ゼ、フトはフランク帝位に登り、一時シ・イレメインの帝國を統御せり。然れどもチ・イレスは懦弱にして到底此大版圖を統御も得るの人にあらず。ノースメン人と戦ひて大に敗れ甚恥つべき和議を講せり。是に於て

日耳曼の貴族はチ・イレスを廢し(八百八十七年)而して其姪アーナルフ(Arnulf)を立つ。西フランク國も亦オト(Ordo)を立て、王と爲せり。

日耳曼王國(東フランク王國)

アーナルフ(八百八十七年より八百九十九年まで)は日耳曼及伊太利の王とな

り後帝位に登れり。アーナルフ勇敢にしてノースメン人を破り、又伊太利の諸公を征服せり。

アーナルフ殂し其子ルイ、ゼ、チ・イルド(Louis the Child 八百九十九年より九百十一年まで)位を繼ぐ。當時匈牙利

人(Hungarian)即モチアー人(Magyar)はダニ・ーフ河の沃地に住し、屢日耳曼に侵入せり。サク

ソン公フランコニア(Franconia)公ローレーン公スウ・ーピア(Swedia)公バツ・リア(Bavaria)公は匈

牙利人及其他の外敵を防ぎ功ありしを以て權力甚盛なり。ルイ殂して嗣なく、日耳曼に

於けるカローヴ・ンチアン統全く絶ゆるに及びて、フランコニア公コンラ・ド(Conrad)撰はれて王

となる。是に於て日耳曼は撰舉王國とされり。コンラ・ドは諸公の權力を殺滅せんことを

計りしが、其反抗する所となりて成らず。又外は匈牙利人屢入寇して國事日に紊亂せり。

コンラ・ド大に之を慨し、其敵たりしサクソン公ヘンリー(Henry)一世の克く外敵を防ぐに足

るを知り、之を擧げて王位に即かしめたり。

佛蘭西王國(西フランク國)

チ・イレス、ゼ、フトの帝位を廢せらるゝを、佛蘭西の諸

候はバリ(Paris)伯(フランシアFrancis公)オドー、ノースメン人を防ぎ功ありしを以て撰んで王となせり。オドーの死後カロウインチアン王家のチ、イレス、ゼ、シムフル(八百九十八年より九百二十九年まで)位に登る。此時諸侯の權勢甚強く恣に土地を私有し、國王の廢置一に其手にあり。フランシア公ヒュー(Hugh)オドーの姪)最權勢あり。チ、イレスを廢して之を幽囚せり。チ、イレスの時ノースメン人の酋長ロロロ(Rollo)は一地を與へ佛蘭西王に隸屬せしむ。ノーマンデー(Normandy)と稱する地是なり。チ、イレスの後カロウインチアン王家は二世を傳へルイ五世に至り嗣なし。諸侯相謀りてヒューの子ヒュー、カペー(Hugh Capet 九百八十七年より九百九十六年まで)を立てて王となせり。ルイの伯父チ、イレス日耳曼の兵を借り王位を争ひしが、遂にヒューの爲に破られ、終身幽囚せらる。此に於てカロウインチアン王家絶え佛蘭西王國起る。

伊太利 チ、イレス、ゼ、フ、トの帝國破壊してより伊太利には一定の帝王なく、國情實に錯亂を極めたり。伊太利人は日耳曼人に抗するの感情頗強く、國人を以て王となさんとししが協和せざる所ありて一はベレンガー(Berengar)を擁し、一はギドロー(Guido)を推して激烈なる争鬪を開けり。日耳曼王アーナルフ再來りて争亂を鎮撫し、立ちて帝となれり。幾何ならずして國內復亂れ、二十年間にして代りて帝となるもの五人あり。既にしてベレ

ンガー一世法王John(John)十世に倚りて帝位に即く。バーガンデー(Bartholomaeus)王ルードルフ(Rudolph)と位を争ひベレンガー敗死す。其孫イツリー(Irve)伯ベレンガー二世位に即かんと欲し、プロヴンス(Provence)伯ヒューの争ふ所となり日耳曼に遁る。ヒュー位に即く。其後の重要な記事は之を第四章に記せん。

第三章 ノースメン人 (Northmen)

概説 スカンデナヴィア(Scandinavia)半島の住民は一にノースメン(北人)と稱し、日耳曼人種に屬し同一の性情言語、宗教を有し、漸々丁抹、那威、瑞典の三國を成せり。而して數多の種族に分れ好て諸方に航し、土地貨財を略奪す。シャレメーン帝國の滅亡をして速ならしめしものは實に此人民なり。ノースメン人は輕舟に乗じ北海の濱を横行し、數多の物貨を掠奪するを以て「ヴァイキング(Viking 海岸の 海賊の)の稱あり。デーナ(Dane)東人の義人は屢英國に寇し、ノーウー(Noway)人はアイスランド(Iceland)を發見し、此に植民して本國の宗教言語及制度を移し、繁盛なる部落を起せり(八百七十四年)。アイスランドに次きて又グリーンランド(Greenland)を發見し且植民せり。ヴァーレンチアン(Varangi)人は酋長ルーリ

ク(Rurik)に従ひフ、フィンランド(Finland)海を越え露西亞に入りノヴゴロド(Novgorod)に居り而して其一族は十六世紀の末に至るまで露西亞の地方を領せり。然れども其風俗言語は嘗て變易せしことなし。此他尙ノースメン人は夙にスコットランド(Scotland)アイランド(Ireland)に移住し又亞米利加大陸をも發見せりと云ふ。此等の人民は皆個獵戦争等を好み又深く詩歌を愛し軍歌神詩等の編集あり。九世紀の頃ハムブルグ(Hamburg)の僧正アンスガ1(Anselm)はスカンデネヴィアに入り、熱心に基督教を傳播せしを以て漸々化して基督教徒となれり。

佛蘭西に於けるノースメン人 ノースメン人は屢佛國の海岸に寇し、ルーオン(Rouen)ナンツ(Nantes)ボードー(Bordeaux)を侵し、次でツリア、オーレアン(Orleans)を陥れ、パリの寺院を焼けり(八百五十七年)。其入寇常に已ますしてチャーレス、ゼシムブルの世に至る。チャーレス遂に一地を割きて之と和を講ず。ノースメン人の酋長ロルフ(或はロルフ(Holl)云ふ)之を諾して來り居る。他日ノーマンディーと稱する地是なり。ロルフは基督教徒となり公爵を受けチャーレス帝に隸屬し、幾ならずして佛蘭西の言語風俗に習熟し、開化富有の人民となれり。彼フランシス公國の獨立しヒ、カペーの王位に登りしが如きは、ノーマン人(Normans)ノースメン人のノーマンディーに占居せ

るもの、)の力與りて大なりとす。
稱なり

英國に於けるデーン人 イングランドはエグバード王の後屢デーン人の爲に苦しめられ、海岸及河口の都府寺院を破壊せられたり。アルフレド(Alfred)大王(八百七十一年より)の如きは一時王位を退くに至りしが、終に其勇敢謀略によりて位に復し、デーン人の侵入を防遏せり。然れどもデーン人の基督教に歸したるものはノースムバールランド(Northumberland)に植民することを許し、爾後専力を内部の開発に用ひたり。而して其國を數多の行政大區に分ち、伯及貴族を以て司法の事務を管理せしめ、「ウイテンゲモート」(Witenagemote)と稱する國會を創め、貴族を以て之を組織し、以て國家重要な事件を議定せしむ。又教會及學校(オクスフォード(Oxford)を建て、且アングロサクソンの軍歌を編纂せり。其後嗣エドガー(Edgar)九百五十九年より)大學(此時に起る)の九百七十五年まで)の時國勢昌盛を極めしが、エス、ルレド(Aethelred)二世(九百七十八年より)に至りノースムバールランドに於けるデーン人アングロサクソンの爲に虐殺せられしを以て、丁抹及那威王スウーゲン(Svein)大舉入寇し英國を征服す。エス、ルレドはノーマンディーに奔れり。スウーゲンの子カニート(Canute)大王(千〇十六年より)王位に登るに及びて、エス、ルレドの子エドマンド(Edmund)之と争ひしが幾何ならずして死し、カニート英國を統治し兼

て丁抹及那威に君臨せり。カニート善く其國を治め大陸の諸國と修好し、日耳曼王コンラド二世と通商條約を締結し羅馬法王を尊敬せり。カニート及其子の死後國人はエスルレドの子ノーマンディーに在りしものを立て、王となす。之をエドワード (Edward) とす (千〇四十二年)。

ノーマン人の英國征服 エドワード (千四十二年より千六十六年まで) はノーマンディーの風を愛し、又其國

人に官位を濫授せるを以て英人其政に服せず。エドワード歿し嗣なし。ノーマンディー公ウィリアム (William) は其後嗣たるべきの約あるを主張し、英國の王位に即かんことを要求せ

しが、國人西サクソン候ゴドウィン (Godwin) の子ハラルド (Harold) を立て、王となせり。是

に於てノーマンディー人大に怒り、兵を擧げて英國に侵入し、サセックスに上陸し、ヘースティン

クス (Hastings) を占領せり (此役や副僧正ヒルデフランド法王アレキサンダー三世を助めウィリアムを援けしむ) 一千〇六十六年十月十四

日の決戦に於て英の貴族死するもの甚多し。ハラルドも亦矢を被りて死せり。是よりウィリアムは「コンク

ェロル」(Conqueror 戦捷者) の名を得、英國の王位に登り數年にして全國を平定

せり。之をウィリアム一世 (千六十六年より千八十七年まで) とす。ウィリアムは佛蘭西及ノーマンディーの封建制

度を施行し以て其國を鞏固にし、從來の土地を沒收して之をノーマンディーの騎士に與へ

たり。是に於てノーマンディーの法律は舊來の法律に代り、佛蘭西の言語は法廷及宮中の

言語となり、ウィリアムの侵入を助けし佛蘭西の僧侶は富有なる教會の職に就けり。此改

革を喜はざる英國の勇士は往々國を去りコンスタンティノブルに趨き親衛軍に入れり。此

の如くにして英國の状態は一新し、種々の言語、風習、法律を有せる人民も次第に混和し

て有爲活潑なる一國民となるに至れり。

伊太利及シシリーのノーマン王國 ノーマンディーの騎士は十一世紀の初に於て下伊

太利に漂泊し、數多の小國を援けて希臘人及サラセン人と戦へり。一千〇二十七年に於て

ノーブルス候より豊沃なる土地を得て都府アサーソーサ (Asasora) を建つ。本國のノーマン人之を

聞き年々勇壯なる騎士の伊太利に入るもの甚多く、希臘の太守を援けシシリー島のサラセ

ン人を伐てり。然れども其功を賞せられざりしを以て、反て太守を攻めメルフィ (Melfi) 府

を取りて根據となし、漸々アプリア (Apulia) を征服せり。ロバートネスカード (Robert Guiscard)

千〇五十六年より千〇八十五年まで) に至り遂に全く下伊太利を占領し、アプリア及カラブリア (Calabria) 公と稱し、

羅馬法王の許可を得て諸侯に列せり。ロバートは其後弟ローチアー (Roger) と力を競せて

サラセン人を伐ちシシリー島を取り、又オトランド (Otranto) 及バリ (Bari) を取り、遂に進んで

人

人

人

人

人

東羅馬帝國を征服せんとし其子ベーマンド (Boemund) をしてス・サリー及ニバイラスを攻めしむ。然れどもロバートの死するに及び、其企圖忽熄めり。ローチアーの子ローチアー二世(千百三十四年まで)下伊太利とシシリイとを合併し、羅馬法王より王位を受けてテールルス及シシリイ王國を創建せり。ローチアー二世は佛蘭西の封建制度及司法制度を採用し、其他善良なる憲法を制定し、法學醫學、博物學等の學校を興し、且農商工業を奨励せしを以てテールルス王國は非常の繁榮を致せり。然れどもノーマン人は南方温暖の風氣に慣れ、サラセン人の感化を蒙り、其固有の道德勇氣を失ひ、五十又六年にして遂に日耳曼のホーヘンスタウフン (Hohenstaufen) 家の爲に滅さる。

第四章 神聖羅馬帝國

第一節 サクソン王家

(九百十九年より一
千〇二十四年まで)

ヘンリー一世 サクソン公ヘンリー(九百十九年より
九百三十六年まで)の推されて日耳曼王位に即きしことは既に記せし所なり。ヘンリーは中古史上の一英傑にして内は日耳曼國民を統一し、外はスラヴ・ニーアン人、匈牙利人及デーン人を防ぎて其疆域を固定せり。即位の初ローレーンを併

せ、次でネザラント (Netherland) を征服せり。既にして匈牙利人來襲す、勢甚猖獗なり。ヘンリーは歳貢を納れ九、十年間の休戦を約し、其間軍制を改革し、城壁を築き、騎士を訓練し、兵盛に氣勇む。是に於て敢て復貢を納れず。匈牙利人怒りて復來寇す。ヘンリー之とメルゼブルグ (Merseburg) に戦ひて勝利を得たり(九百二十三年)。爾後漸くにして外患なく、國富み兵強く、四隣敵するものなし。ヘンリーは唯一軍人たるのみならず、亦銳意商工業を奨励せり。

オットー一世 ヘンリー殂して其子オットー (Otto) (九百三十六年より
九百七十二年まで)位に即く。オットーは父王

の志を紹き、孜孜として王國の統一を維持せんとし、バウアリア、フランコニア及ローレーン等の諸侯の叛を平け、其宗族を立て、諸侯となせり。是よりしてオットーはデーン人を破り、其王をして日耳曼王に隸屬せしめ又スラヴ・ニーアン人を伐ちオデル (Oder) 河に到り基督敎を傳播し、又ボヘミア (Bohemia) 波蘭 (Poland) をして朝貢せしめたり。九百五十五年匈牙利人とアウクスブルグ (Augsburg) に戦ひ大に之を破り、爾後復入寇する能はさらしむ。然れともオットーの伊太利に於ける戦争は更に重要なりとす。伊太利は帝アーナルフ殂してより争亂相繼ぎ、凡六十餘年にしてヒ(九百二十六年より
九百四十五年まで)王位に即けり(第二章第一節)
を參看せよ。其

子ローサー繼ぎ立つ、其死するや、イヴリー伯ベレンガー日耳曼より還り王位に登り、前王ローサーの妃アデルハイド(Adelheid)の婉麗なるを見て強ひて己の子に娶さんとす。其可かきりしを以て怒て之を捕ふ、妃竊に遁れて援を日耳曼大王オトーに乞ふ、オトー兵を率ゐて伊太利に入り、アデルハイドを立て、后となし、ベレンガーを伐ち之に勝ちロムバート王の鐵冠を戴き伊太利國王となれり。次て羅馬に入り法王ジョン十二世より帝冠を受く(九百六十二年)是より羅馬帝位は常に日耳曼王の有する所となり、日耳曼國民の神聖羅馬帝國と稱す。是中世紀に於ける政治上の一大制度にして、日耳曼王は政教の兩權を掌握し、日耳曼及伊太利を合一せしなり。既にして法王は意を變じベレンガーと通じ、希臘人匈牙利人を煽動してオトーに抗せしむ。オトー來りて羅馬を陥れ、法王ジョンを廢しレオ(Lio)八世を立つ。オトー去りてレオ放逐せられ、ジョン又位に返り幾何ならずして死じ、ベチデクト(Benedict)立てり。オトー復伊太利に入りベチデクトを廢しレオを復せり。オトーは下伊太利に權勢を有せん欲し、希臘帝の女ス。オフ、ノ(Theophano)を娶り其子オトーの妃となせり。

オトー二世及オトー三世　オトー二世(九百七十三年より九百八十三年まで)は父王在世の時年尙幼を

りしか既に日耳曼王に撰はれ、後羅馬に於て帝位に即けり。在位十年の間戦争常に絶えず。バツ、リア公ヘンリーの叛を平け、又西フランク王ローサーのローレーンを略奪せんとせしを以て、之を追ふてパリに及べり。オトーは下伊太利を以て其妃の贈遺となして之を占領せんと欲し、希臘人及サラセン人を征し、九百八十二年カラリアの海岸に敗績し、僅に身を以て免れ、再日耳曼に還らすして羅馬に死せり。年廿八。其子オトー三世(九百八十三年より千〇〇二年まで)年甫めて三歳、母ス。オフ、ノ政を攝し、高名の佛人ゲルバート(Garduit 後法王シルヴ、スター)之を保育す。オトー少にして英發、神童の稱あり。年十六にして帝位に即く。帝屢伊太利に入り、羅馬を以て首府となし、以て世界を統御せんとし、其企圖は帝の夭折と共に去れり。當時「二千年の終に至れば世界は破滅す」との説流行し、其時限は眼前に迫りたれば人心恟々として土地財寶を寺院に寄捨するもの多し。然れども一千年は既に過ぎ世界は尙存在せしかば、猖獗なる人心も和氣霽然として國王諸侯は競ふて壯麗なる城壁を築造せり。

ヘンリー二世　オトー三世歿して嗣なく(三世は未配 偶を有せず)オトーの正統此に絶ゆ。ヘンリー一世の曾孫バツ、リアのヘンリー(千〇〇二年より千〇二十四年まで)位に即けり。ヘンリー二世は唯に日耳曼國

を保持せしのみならず、又大に領土を擴張せり。而して基督教に力を致せしを以て聖王の稱を得たり。ヘンリー二世は諸侯の不穩を鎮定し、又波蘭王ポーレスラフ(Poloslav)と戦ふこと十四年、遂にボヘミア、マイセン(Meißen)を取れり。千七年にバムヘルグ(Bamberg)の「ビショップ」(Bishopric) (基督僧正の管轄地)を置き教會を保護せり。ヘンリー又伊太利に入ることに三回、イヴリー伯を降し伊太利の王となり、既にして帝位に即きノーマン人の援を得て下伊太利の希臘人と戦ひ、カムパニアの一地をノーマン人に貸與せり。ヘンリー二世殂してサクソン王統絶ゆ。

第二節 フランコニア王家 (一千〇二十四年より一千百二十五年まで)

コンラド二世 ライン河畔のオペンハイム(Oppenheim)に於ける諸侯の大會議(メインツの發)に於てフランコニアの貴族推されて王となる。之をコンラド二世(一千〇二十四年より一千〇三十九年まで)となす。コンラド既に羅馬帝位に登り、丁抹王カニート(Canit)の女を娶り、其子ヘンリーの配となし、北方の疆土を擴め、又バーガンデー王ルドルフ二世の死後其遺言によりバーガンデー王國を并合せり(一千〇三十二年)。晩年波蘭人入寇せしが軍敗れ、其將ミースロー(Mestro)嘗て日耳曼より得たりしリセーシア(Lusatia)の地を返して退けり。コンラドは銳意帝權を振興

することを努め、而して其目的を達する爲に三方法を取れり。大諸侯の權力を漸次削減すること、教會の職務を宗族中に籠有すること、及小諸侯世襲の法を定むること是なり。又同時に諸侯の帝に對する賦役を定めたり。

ヘンリー三世 帝(一千〇三十九年より一千〇五十六年まで)は資性豪邁にして能く父王の遺業を紹き、當時帝權は強盛を極め、版圖は非常に擴張せり。國內の大諸侯或は抑制せられ或は并吞せられ、其盛時に當りては伊太利バーガンデー、ア匈牙利の三王國、國內の七公國及スラヴァニア二公國(波蘭、ボヘミア)を包有せり。又教會の上にも至大の權勢を有し、法王の廢置一に其掌中に在り。一千〇四十六年伊太利に入り三人の法王を廢し、バムヘルグの僧正を立て、法王となす。クレメント(Clement)二世是なり。其後法王の位は殆日耳曼僧正の占有する所となれり。ヘンリーは又神意に従ひて休戦日を定め、木曜日の夕より月曜日の旦に至るまで戰爭を止め、且私闘を禁せり。是を以て國家靜謐、小弱者の庇蔭を蒙ること甚大なるものあり。

ヘンリー四世、法王との争 ヘンリー四世 (一千〇五十六年より一千〇六六年まで)は父帝ヘンリー三世の殂せし時、年甫めて六歳にして位に即く、太后政を聽き、コロロン (Cologne)の大僧正ヘンノー(Hanno)

之に傳たり、後又フレンケン (Fremken) の僧正 アダルバート (Adalbert) の陶冶を受く。ハンノーは性峻酷、アダルバート は寛大かり、然れども其行爲は皆帝の幼弱を利とし專横を極む。ハンノー人となり剛復驕慢なり、アダルバート 其意を迎へ帝をして慈情を恣にせしめ、遂に諸侯と乖離するを致せり、貴族等は テリン (Turing) 伯の女 バーサ (Bertha) と婚せしむ、帝喜はず、之を遇すること甚冷なり、且帝は サクソン人 (Saxons) (サクソン人は常に帝位の フランコニア を仇視し之を家に移りたるを以て不満を抱けばなり) を抑壓せしを以て、サクソン人 は オートー 伯を推して叛旗を擧げ (一千〇七十四年) 勢甚猖獗なり、帝一時出奔するに至りしが、ライン 及上日耳曼地方の諸侯の爲に援けられ一千〇七十五年 サクソン人 を破り更に之を抑壓せり、是に於て サクソン人 援を法王に乞ふに至る、法王 グレゴリー七世 (ヒルデブランド) は當時教會の弊風を一洗し、法王權を擴張し僧職任命の權を帝王より回取することに汲々たり、是に於て サクソン人 の援を求むるを機とし、ハンノー 四世を羅馬に召して其罪を糾さんとす、ハンノー は日耳曼の僧正を ウーームス (Worms) に會し法王を廢することを議決し、之を法王に通告せり、書辭傲慢なり、法王怒りて之を破門し、基督教人民をして ハンノー 四世に服従するの義務を免れしむ、是に於て ハンノー 四世の行爲に對して不満を抱ける日耳曼諸侯は千〇七十六年 トリフル (Tribur) に會し ハン

リー 四世は一年を経過して破門の罪解けさるときは國王の資格なしと議決せり、ハンノー 如何ともする能はず、遂に節を屈し、王妃及一人の從者を伴ひ、嚴寒 アルプス 山を超え伊太利に入り、法王 に カノサ (Canossa) 城に謁して哀を乞ふ、徒跣單衣法王の庭に立つこと三日、終に嚴重なる約束を結び、僅に破門の罪を赦さる、時に千〇七十七年一月二十八日なり、ハンノー 國に歸り憤懣措く能はず、遂に又法王と隙を構ふ、是時日耳曼の諸侯は概法王を援け、スウー ピア 公 ルドルフ を王となし、以て ハンノー に對せり、然れども ハンノー は其才幹と忠實なる市民の援により、千〇八十年 ルドルフ を破る、ルドルフ 創を病みて死せり、此間法王は再 ハンノー を破門せり、ハンノー は會議を開き ラッ ンナ の大僧正 ギーバート (Ghibert) を立て法王となす、クレメント 二世是なり、是に於て ハンノー 軍を率ゐて伊太利に入り羅馬を攻むること二年遂に之を陥れ クレメント 三世より帝位を受く (一千〇八十四年)、グレゴリー 羅馬 を出奔し、ノーマン 公 ロバート ギスカード に援けられ終に サラ リーノ (Salerno) 於て死せり、ハンノー の晩年に至りて長子 コンラド 兵を擧げて反す、コンラド 死して少子 ハンノー 又叛き、ハンノー 四世虜となる、後 リッ テック (Lutich) に遁れ幾何ならずして歿せり。

ヘンリー五世（ヘンリー五世（一千百〇六年より一千百二十五年まで）の王位に即くや、僧職任命の權を得んと欲し、又法王パスカル（Paschal）二世と爭端を開き、兵を率ゐて伊太利に入り、法王に迫りて帝冠を得、且僧職任命の權を奪へり（一千百十一年）、ヘンリー日耳曼に還るの後法王約に背きて帝を破門せり。是に於て争亂又起りしが、終に一千百二十二年ウーラムスの會議に於て和約成り、僧職任命の時は皇帝は笏を授け、法王は鈴及杖を與ふることとなせり。ヘンリー諸侯を遇すること苛酷なりしを以て其死するに及び、諸侯はフランコニア家の近親なるホーヘンスタウフン家のフレデリック（Frederick）を立つるを肯せず、メンツ（Mentz）の會議に於てサクソニーのローサーを撰んで王となせり。ローサー（一千百二十五年より一千百三十七年まで）は盡く法王の請を容れて帝位を得たり。ホーヘンスタウフン家はローサーに服せざりしを以てローサーは其女婿バツリア公ヘンリーの援助を得て之を平定せり。

第五章 法王權の振起

概説　羅馬人は世界を統御すること前後二回なり。始は古代羅馬人の武力に因り、終は羅馬法王の權勢に籍れり。其間相距る數百年なりといへども、第一の統御は實に第二の

啓行となり、新羅馬は舊羅馬の死灰中より勃興して、其勢力以前に倍蓰せり。是他なし、其勢力を人民の精神上に及ぼしたればなり。法王の權力は基督教最始時代に在りては未存在せざりしが、西羅馬帝國滅亡後に至り漸く盛となり、基督教徒全體の上に位し且有力なる王侯と結托し以て羅馬帝の命令に抗するに至れり。其勢の盛なるに當りては、政治上にも權力を有し、帝王の廢立を擅にし、從ひて僧正の如きも往々國家の高官を帯び廣大なる領地を有し、諸侯と肩を比するに至る。僧正及其他の僧職は、始は其地方の君主の任命する所なりしが、後法王の全權に歸し、且任命裁判等の爲に夥多の財寶羅馬に流入せるを以て法王は嚴然として世界無限君主の觀あり。以上法王權の大體を觀察したれば是よりして其振起の狀況を説かん。

教會の組織　法王權振起の狀況を説かんとするには、過去に遡りて羅馬教會の勢力を得し所以を討究するを要す。基督教會の組織は凡四回の變遷を経たるか如し。最始の時代に於ては基督教會は自由の一小結合體に過ぎざりき。之を使徒（Apostle）時代と稱し、使徒之を監督し、而して自由撰舉によりて長老（Elder）執行（Deacon）を任し、教會の重要な事務を處理せしむ。第二世紀頃に至りては各州首府の僧正其州内の宗務を監

督せり、之を首府制 (Metropolitan System) 時代と云ふ、其後大都府即羅馬アレキサンドリアアンテ、オック、コンスタンティノブル等の僧正漸く權勢を得、一地方の宗務を監督し、教會の根基數所に分るゝに至れり、之を「パトリアーカル」制 (Patriarchal System) 時代と云ふ、而して第三世紀の中葉以後は羅馬の僧正獨最高の地位を占めたり、蓋羅馬のビクター及ホーイルと歴史上の關係を有したるが爲なり、其後次第に勢力を加へ、彼羅馬帝國を顛覆せしテ、イートン蠻族の甘じて羅馬僧正管理の下に立ちしが如きは大に其威嚴を増せり、又羅馬教會の熱心に傳道師を派遣せしが如きも、其勢力を進むるの一要因となり、遂に羅馬の僧正は神の外一の判官を有せず」と誇稱し「ポープ (Pope) 即法王の尊稱を受け歐洲基督教會の全權を掌握するに至れり、

法王權の興起 八世紀に至りて東羅馬帝レオは基督教徒の肖像を禮拜することを禁せしより、肖像禮拜黨と肖像破壊黨との爭論起り、羅馬法王は遂に東羅馬帝國より分離するに至れり、此際羅馬法王は初ロムバード人を引きて援となせしが却て其劫す所となり、後カロウインチアン家のフランク王と結托し、法王はフランク王より領地を得、フランク王の子孫は法王より帝位を受け、而して其間法王の權勢は次第に擴張するに至れり、チャーレ

メイン帝の死するや、後嗣尪弱にして爭亂已まず、帝權は萎靡し社會は紊亂せり、此機に乗じ法王は益其權力を擴張して政治上に及ぼし、皇帝と法王との衝突常に絶ゆるが、オットー大王の神聖羅馬帝國を創建せしより、僧職任命の權は全く帝王の手に歸し、法王權將に萎蕪せんとするの際、彼有名なる法王グレゴリー七世出で、其權力を恢復せり、

グレゴリー七世 グレゴリー七世 (一千〇七三年より一千〇八十五年まで) は教會の制度を改革し法王權を振起

せし一英傑にして、千〇十八年タスカニー (Tuscany) の一小市ソアノ (Soano) の匠家に生れ、ヒルデブランド (Hildebrand) と稱す、其未、法王の位に登らざる時より數多の法王を輔け、教會内部の弊害を匡正せり、又常に主張して曰く、法王の撰擧は羅馬人民及皇帝の干渉を脱し、專僧正の手に歸せざるべからずと、其位に即くや教會をして政治の權力を離れ、法王の權力をして帝王の上に立たしめんことに勉勵せり (其意に曰く法王は世界の君主の上に位僧地人なりと) 是に於てか皇帝と法王との衝突起り、延きて一百年に及べり、グレゴリーは此目的

を達するが爲に三箇の條規を實行せんとす、曰く僧職の賣買を禁すること、曰く國君の僧職任命の權を廢すること、曰く僧侶は操行嚴正にして妻帯すべからざること是なり、

日耳曼帝ヘンリー四世は唯其命に従はざりしのみならず、反て法王を廢せんとす。法王大に怒りヘンリーを破門せしを以てヘンリー遂に伊太利に來り哀を法王に乞ふに至る。是既に前章に於て記述せし所なり。是に於て中世紀人民の歴史上に一新時期を開き、法王の位は宗教上及政治上に於ける萬般の權力の源泉となれり。

諸法王の政策　グレゴリー七世に繼ぎて法王となりしものは皆グレゴリーの政策を固守せり。故を以て其權勢日に加はり、英吉利、葡萄牙等の國王は皆其臣下と稱するに至る。日耳曼帝ヘンリー五世の如きも膝を屈してウームスの和約を結び、僧職任命權を法王に分與するに至れり。千百九十八年インノーセント(Innocent)三世立ちて法王となるに及び、法王權は益々擴張し、諸國の王は皆其下風に立ち歳貢を納るゝものあるに至る。(グレゴリーの歿後百餘年)爾後法王は皇帝黜陟の權を握り、皇帝となるものは必法王の批准を要せり。インノーセントよりボニーファース(Boniface)八世に至るの間、即十三世紀の終に至るまでは法王權隆盛の時期なり。然れども其衰頽も亦此時に兆せり。

寺院制　寺院制は初東洋より起る。三世紀の終埃及人アントニー其富財を捨て徒弟を集め幽居道を修めたりしが、其制次第に歐洲に傳はり、第六世紀に至りて伊太利人ベネ

ディクト始めて下伊太利のカシノ(Casino)山に寺院を建て、衣服、飲食及修行を衆徒と偕にし、其徒たるものは獨身、清貧及従順の三戒を恪守せり。既にして「ベネディクト」制は四方に傳はり、寺院の創建盛に起る。此制は全く弊害なきにあらざれども、暗黒の時代に處して人類の福祉を補ひしこと亦鮮少ならず。蓋此等の道士は或は深林叢澤を開きて美田となし、或は窮迫依る所なきものを保庇し、或は學校を設け幼年の心思を開拓せり。故に古代文學技藝の縷々として僅に存せしは一に其功に因れり。

第六章　十字軍

第一節　東洋の形勢及十字軍の起因

東羅馬帝國及土耳其人　今や十字軍の興起を叙せんとするに臨み、先當時に於ける東洋の形勢を略述すべし。基督教、同々教の興隆するに當り東西其壤を接するの處、爭亂常に絶えず。當時希臘帝國は兩教徒の間に介在し、内は宗教爭論の爲に分裂し、外は亞刺比亞人、魯西亞人、バルゲリア人等の侵寇を蒙り國勢振はず。ペーシル(Persia)九百七十六年(二世)一時能く之を掃蕩したりと雖、セルジク土耳其人(Seljukian Turke)の興るに及び

て又常に其困むる所となれり。千〇五十八年土耳其人はバグダッドの**アバシッド**統カリフ廳を滅し一大國を建て「サルタン」(Sultan 土耳其會長の稱) **アルプ、アースラン**(Alp Arslan)の時希臘帝ローマナス(Romanus)四世を擒にし**アーメニア**を略奪せり(一千〇七十一年)。其子**マレク、シヤー**(Muluk Shah)に至りシリア、パレスタイン、**ジールサレム**を略し進んで埃及に及び、**マレク、シヤー**の死後國內分裂し其一部屬なる**ソリマン**(Soliman)は希臘帝國と戦ひ小亞細亞を攻略し、**アイコニアム**(Iconium)王國を建て以て十字軍の時に至る。

十字軍の起因 紀元第一世紀の頃より既に**ジールサレム**に於ける基督の墳墓に詣るの風行はれ**コンスタンティン**大帝の太后**ヘレナ**(Helena)會堂を**ジールサレム**に設くるに及び巡拜者益多く、亞刺比亞人の**パレスタイン**を占領するに及びても、尙其利を圖りて巡拜者を優遇せしが、一千〇七十六年**セルジク**土耳其人の有に歸するに至り、其地の基督教徒及巡拜者を見るに蛇蝎の如く、殺戮劫掠を恣にせり。西方基督教徒之を聞き大に激昂し、聖堂を回復せんとするの情轉熾なり、**會ビーター、ゼ、ハーマント**(Peter the Hermit 「ハーマント」は隱士の義なり)の**ジールサレム**より還るに及びて、**法王ウルバン**(Urban)二世の贊助を得、而して諸國を遍歴し熱心に其虐待の狀を遊説し、聖堂の回復を勧誘せり。**ビーター**着面爛眼にして弊衣を着け

雄辨懸河の如く、大に人民の感情を動かせり。是に於て**法王**は一千〇九十五年大に僧侶諸侯平民を南佛蘭西の**クライモント**(Clermont)に會し、慷慨悲憤、聖堂を恢復するは神の意なることを演説せしかば、衆皆拜跪し、奮つて神軍に加はらんことを乞へり。而して赤色布片の十字架を右肩に附し、以て從軍の標となす、十字軍の名此に起る。
十字軍の先驅 法王の演説深く人心を動し、男女老少其業次を捨て、狂奔鳥集し、軍備未整はず食糧未具はらざるをも顧みず、**ビーター**及佛國の騎士**ウ、ルター、ゼ、ヘンニレ、ス**(Walter the Penniless 「ヘンニレ、ス」は貧窮の義なり)を將とし、日耳曼匈牙利を経て**コンスタンティ、ノーブル**に進發す。衆二十萬と號す。然れども中途にして土蠻の襲撃飢渴の困難に遇ひ、能く**コンスタンテ、ノーブル**に達せしもの僅に七千人のみ。其進んで小亞細亞に入るに及びて土耳其人の爲に要撃せられ、**ニシア**(Nicaea)の平原は屍を以て蔽ふに至る。之を不規律軍隊と云ふ。第一十字軍の先驅を爲せしものなり。

第二節 第一、二、三、十字軍

第一十字軍(一千〇九十六年より一千〇九十九年まで) 第一十字軍の本部は軍備能く整頓し、佛蘭西及伊太利

の諸侯騎士多く其中にあり、下ローレン公ゴットフリー(Gottfrey)其弟バルドウィン(Baldwin) ヴァーマンディア(Vernandors)伯ゴットフリーノーマンデー公ロバート、ツールース(Toulouse)伯レーモント(Henry mond) ロバートホスカードの子ボヘモンド其甥タンクレド(Thancred)等之に將とし、道を分ちて進む(一は匈牙利よりし一は伊太利及)タルマテア(Dulmatia)よりす、兵凡五十萬と稱す、十字軍の希臘に達するや、皇帝アレキシアス(Alexius)狐疑し之を待すること薄し、因て啗はしむるに利を以てし、進んで小亞細亞に入り、ニシアを取りて之に酬ふ、爾後東南に進み、大に土耳其人をドリーリアム(Doryneum)に破る(一千〇九十七年)、然れども土耳其人は田野を清めて軍を退けしを以て、十字軍糧食給せず、之に加ふるに諸將の不和と炎熱の苦とを以てし、兵士の本國に歸り或は道路に横死するもの甚多し、十字軍は少しも屈せず勇氣を鼓舞して進み、アンテオクを圍み九閱月にして漸く之を陥る、忽にして復土耳其の大軍に圍まれ、城中食盡き徒に死を待つに至る、偶、軍中神槍を發見せりと稱し軍氣大に振ひ、一撃して土耳其人を破りジールサレムに進む、既にして一高丘に達し、遂にジールサレムを望む、衆皆拜跪感泣せり、當時ジールサレムは復埃及の「カリフ」の領する所となり、十字軍の來襲すと聞き、壁を堅くし野を清め、且毒物を河流に投せり、十字軍大に困難せしが、苦戦三十餘日にして遂に

ジールサレムを陥る、實に千〇九十九年七月十五日なり、歡喜の情と共に復讐の念強く、サラセン人の老少男女殺戮せらるゝもの一萬人、是に於て將士皆武器を投じ、脱帽徒跣、聖堂に謁し成功を感謝し、而して後ゴットフリーを推してジールサレムの王たらしめんとす、ゴットフリー之を辭し、單に聖堂の保護者を以て任じ、歐洲の封建制度を施行せり、後又埃及及土耳其の軍を破り千百年に至りて死す、弟バルドウィン代りてジールサレム王と稱せり、第二十十字軍(一千百四十七年より一千百四十九年まで) 千百四十六年土耳其人基督教徒の都府エデッサ(Edessa)を破壊し且ジールサレム王國に侵寇せしかはジールサレムに在るもの援を歐洲諸國に求む、是に於てか第二十十字軍起る、第二十十字軍の首唱者はセントバーナード(Saint Bernard)にして其清淨なる行操、熱心なる雄辨は、忽人心を奮起せしめ、佛蘭西王ルイ七世日耳曼王コンラド三世之を賛し兵凡二十萬人に將とし、千百四十七年匈牙利を経てコンスタンティノープルに進む、日耳曼王獨先してボスボラス海峡を渡り小亞細亞に入る、時に東羅馬帝マニエル(Manuel)日耳曼王と隙あり、竊に土耳其人を導きコンラドの軍をミンダー(Mender)河畔に襲撃せしむ、軍死するもの大半、コンラド殘兵を收め、退きて佛王ルイと軍を合せ、又進撃して數多の兵士を失ひ遂にジールサレムに達す(一千百四十八年)、次でダマスカスを圍み利

あらず。將率勢を失ひ本國に還るもの多し。第二十字軍の效果實に漠然たり。此時に當りて土耳其の英傑「サルタン」サラディン(Saladin)は埃及のフ、テ、マイト「カリフ」廳を滅し、暫時にしてカイロー(Cairo)よりアレ、ホー(Aleppo)に至るまで盡く之を征服し、ジ、ルサレム王國に侵入せり。千八百八十七年タイベリアス(Tiberias)の戰に於て基督教徒大に敗れ、王及數多の貴族虜となり、ジ、ルサレムも亦略奪せらる。然れどもサラディンは性廣濶にして基督教徒を遇すること甚寛なりき。

第三十字軍(一千八百八十九年より一千八百九十二年まで) ジ、ルサレム略奪の報一たひ歐洲に達するや、人心大に震動し、第三十字軍を起せり。伊太利の南端よりスカンデ、チ、ウ、アの山地に至るまで兵を援て起たさるものなし。其本國に止まるものは十字軍税(サラディン税)を課せらる。日耳曼帝フレデリク一世佛蘭西王フリ、ク二世英吉利王リチ、ード(Richard)一世之に將たり。日耳曼王先發して小亞細亞に入り、アイコニアムの戰に於て大に勝利を得しが、シリシア(Cilicia)のカリカドナス(Calycadnus)河を渡らんとし溺れて殞し、其兵本國に還るもの多し。殘兵はフレデリクの第二子フレデリクに従ひ、シリアの基督教徒と共にアクル(Acre)を圍めり。(フレデリク此役に死せり)佛英二王は海路より小亞細亞に入り、日耳曼の殘兵と合し、遂に

アクルを陥る(一千八百九十一年)。時に英王功を負んて專横なり。佛王及奧太利公レオホルド(Leopold)之と和せず。俱に軍を引きて國に還る。英王獨り止り奮戦し、ジ、ルサレムを圍み抜く能はず。遂にサラディンと和し、聖壘巡拜者を保護せしむることを約して還る。奧太利公レオホルド日耳曼帝ヘンリー六世の命を承けリチ、ードを途に要し、之を擒にして日耳曼に送る。リチ、ード捕はるゝこと十二月、償金を出し且臣屬たることを誓ひ、漸く赦されて國に歸ることを得たり。蓋アクルの役日耳曼の國旗を汚したるによるなり。

第三節 第四以下の十字軍及十字軍の結果

第四以下の十字軍 第三十字軍の後、十字軍の起ること四回。及幼年十字軍匈牙利王の十字軍等ありしと雖、皆其目的を達する能はず。第四十字軍(一千二百〇四年まで)は法王インノーセント二世の首唱せし所にして、大抵佛蘭西の諸侯騎士より成る。海路コンスタンティノールに達するや、希臘人と爭端を開き、希臘の地を略しラテン(Latin)帝國を建て、フランドー(Flander)伯バルドゥ、ンを以て帝となす。後爭亂已ます。千二百六十一年ニシア帝ミカエル、ハリオロガス(Michael Palaeologus)の爲に滅さる。要するに此軍は宗教の熱心よ

りは寧ろ功名心の爲に起りたりしものなれば、其結果此に至る亦怪しむに足らず。幼童十字軍(千二百十二年)は日耳曼佛蘭西の幼童數千人より成り、一はマルセイユ(Marseille)より、一は伊太利の諸港よりし海路ジールサレムに向ふ。途にして或は斃れ或は奴隸に賣られ生還するものなし。第五十字軍(千二百二十八、二十九、三十年)は日耳曼帝フレデリク二世の率ゆる所なり。帝勇敢善く戦ひ、遂にジールサレムに入る。然れども其軍を班せし後、十數年にして復回々教徒の手に歸せり。第六十字軍(千二百四十八年)は佛蘭西王ルイ九世の起せし所に於て、王は先埃及に航しダミータ(Damietta)を略せしが、翌年軍敗れて虜となり、巨萬の償金を出し己及兵士を償ひ本國に還れり。第七十字軍(千二百七十年)も亦ルイ九世の起せし所なり。王はサラセン人を伐たんと欲しテニスに至る。會疫癘軍中に流行し、士卒死するもの大半。王亦之に殞る。英國の太子エドワード亦軍中に在り。パレスタインに進軍し、暫時基督教王國を維持せしが、其歸國の後アンテ・オク及アクルも同々教徒の爲に掠奪せられ(千二百九十一年)、亞細亞に於ける基督教徒の根據全く亡ひ。十字軍此に終りを告ぐ。

結果 歐洲中世紀人民の宗教及功名の熱情は發して十字軍となり、遠征殆二百年に垂

んとし、其間生靈を失ふこと万を以て數ふ。而して遂に成功を見ずして畢れり。然れども其間接に歐洲の開明に與へたる影響は實に莫大なりとす。第一、十字軍は回々教徒戦勝の勢を挫きしを以て歐洲人をしてサラセン人の侵略を免れしめたり。第二、封建制度は之が爲に其勢力を殺滅せられたり。即從軍諸侯は多く其領地を賣却して軍資に充て、或は軍に死して嗣なきものは國王の沒收する所となりしを以て統一政治の傾向を生せしめ、且市府及市民權の發達を促すに至れり。第三、騎士の氣風を高尙にし、且其勢力を擴張せしめたり。蓋懸軍異域に在り、艱苦を同くせるを以て同情相憐み緩急相救ふの義氣を作興し、種々の結社起るに至れり。第四、大に智識を増進せり。蓋十字軍の起るや歐洲人は東洋の文明と接し、其學術技藝を知得し、從來の狹隘固陋の見を脱し、廣く世界の事物を見聞せしを以て其思想宏遠となれり。第五、産業の進歩を促せり。十字軍以來歐洲の製造技術は大に進歩し、殊に近代商業の發達は實に此時に起れり。蓋十字軍の間は地中海の航通頻繁にして從ひて商業も亦大に進み、東洋の奢侈品は陸續歐洲に輸入せられ、海岸の諸府は日に繁榮に趣けり。

第七章 中世紀に於ける歐羅巴及東洋諸國

第一節 日耳曼 (German)

中世に於ける東洋諸國

ホーヘンスタウフン家 皇帝ヘンリー五世歿してフランコニア家の系統絶え、サクソン公ローサー帝位に登り(第四章第二節を見よ)十二年にして歿す。諸侯はホーヘンスタウフン家のスウーピア公コンラッド三世(千百三十八年より千百五十二年まで)を撰んで王とあせり。是をホーヘンスタウフン家の祖となす。ウ・ルフ (Welf) 家のパツリア及サクソン公ヘンリー・ゼ、ブラウド (Henry the Proud) は己帝統の繼續者を主張し、コンラッドに服従せず。コンラッド乃其二公國を没收せり。是に於て戦亂復起り、數年の後コンラッド終に勝利を得たり。是よりしてウ・ルフ黨 (ウ・イフリング黨 (Welfings) 即ホーヘンスタウフン黨) 兩立し、伊太利に於ては「グ・ルフ黨 (Guelphs) 法王黨」ギヘルリン黨 (Ghibellines) 皇帝黨) の稱を得たり。コンラッドは勇敢にして第二十字軍を起せり。

フレデリック一世 フレデリック(千百五十二年より千百九十年まで)は「バーバロッサ」(Barbarossa) 赤髯の義) と稱せられコンラッド三世の姪なり。年三十一にして帝位に登る。帝能く力を政治に用ひ、兼て文學技術を好み、サクソン及フランコニア王朝時代の權力を挽回せんと欲し、專王權の

日 耳 曼

伸張を計れり。此時に當りて北部伊太利のロムバート諸府獨立を唱へ、市府諸侯同盟して帝に抗を。帝之を征せんとして伊太利に入ること前後六回。ミラン及其他の小市府を征服せしが反服常なく、遂に法王アレキサンダー二世とコンスタンス (Constantine) の平和條約を結ひて、市府の自治を許せり。千百八十三年。此間日耳曼に於てはウ・ルフ家のヘンリー・ゼライオン (Henry the Lion) 獅王) 自家の權力を恢復せんと欲し、其領土を擴張せしが、フレデリック伊太利より還り之と戦ひ、遂に三年間英國に放逐せり。然れども其故領フランスウイク (Brunswick) 及リ・ーネブルグ (Lüneburg) を有することを許せり。是に於て國勢次第に平和に趣き、遂に第三十字軍を率ゐてシリシアに死せり。

ヘンリー六世、オットー四世、フリッポ フレデリック一世歿し、嗣子ヘンリー六世(千百九十年より千百九十七年)立つ。帝勇敢殘暴諸侯の心を失へり。嘗てシシリイ及ノーブルス王國(當時シシリイ及ノーブルスは皇后コンスタンスの領)を征服し、又ヘンリー・ゼ、ライオン(此時英國より還れり)と戦端を開きしが、婚事を以て和を講せり。又タスカニーに關して老法王シーレステン (Cualatin) 二世と事を争ふの間、帝俄然として逝けり。嗣子フレデリック二世猶幼なり。オットー四世 (ヘンリー・ゼ、ライオン) の第二子(千百九十八年より千二百十五年まで)ウ・ルフ黨より推され、フリッポ (ヘンリー六世) の弟(千百九十八年より千二百〇八年まで)は「ウ・イ

フリント黨より推されて共に位に即けり。フリードリッヒ暗殺に遭ふの後、法王インノーセント第三世オトトーを援け己の權威に服従せしむ。後オトトーはインノーセントの意に忤ひ其逐ふ所となれり。

フレデリク二世 インノーセントはシシリー王フレデリク(千二百十五年より千二百五十年まで)を擁し、立て、帝となせり。帝英才あり數國の語に通じ、又シシリーにありてサラセン人と交通し、大に學術の智識を得たり。帝位に登りてより國政日に進歩せしが、在位の間概ロムバード市府并に法王グレゴリー九世と争へり。帝の時蒙古人は成吉思汗(Genghis Khan)を將とし亞細亞より露西亞及匈牙利を征服し、シレシア(Silesia)に襲來しリグニッツ(Liegnitz)を略し(一千二百四十一年)後匈牙利に退けり。

關位時代 フレデリク二世の後日耳曼は一定の主なく、國狀紛々として麻の如し。是所謂關位時代(Interregnum)にして凡二十有餘年に涉る。コンラド四世(千二百五十年より千二百五十四年まで)繼き立つに及び、法王黨はテューリンチアのヘンリー、ラスベ(Henry Raspe)を立て、王となす。ヘンリー、コンラドと戦ひ敗る。次きて荷蘭(Holland)のウリアム又法王黨の爲に撰れ王となる。然れども威望なし。コンラドはチーブルス王國を鎮定せんとし伊太利に入り幾

何ならずして殂せり。コンラドの子コンラディン(Conradin)猶幼なり。アキタニー(Anjou)のチーレス(佛王ルイ九世の弟)法王ウルバン四世の招に應じてチーブルス及シ、リーを領せり。コンラディン年長じ其故領を回復せんとし、伊太利に戦ひ虜となりて死せり。ホーヘンスタウフン家此に至りて絶ゆ(千二百六十八年)。是より國內の諸侯或はリチヤード(英王ヘンリー三世の弟)を立て、或はアルフ、ンソー(Alfonso フレデリクの曾孫)を擁せり。然れど皆徒に虚名を有するのみ。諸侯は各其欲を逞ふして相侵略し、甚しきは武士を驅りて商賈を鹵掠せしむ。是に於てか彼ライン同盟即ハンサ(Hansa 七十有餘の市府より成る)の如きもの起り、各地の市府獨立するに至れり。

ハフスフルグ家及其他の王家 千二百七十三年ハフスフルグ(Hapsburg)伯ルードルフ撰はれて王となり、擾亂其局を畢る。ルードルフ(千三百七十二年より千三百九十一年まで)は伊太利の國事に干與せず、教會に従順し以て日耳曼の壞亂を救済せんことを勉め、賊徒の要塞を毀ち、暴横の騎士を刑せり。時にボヘミア王オトトカー(Ottochar)は奥太利ステリア(Styria)カーニオラ(Carinthia)カリンシア(Carinthia)を合せ、勢甚強盛にしてルードルフに従ふを肯せず。ルードルフ之を撃つこと再次、終にオトトカーを殺し、其領土を取り而して之を子アルバート(Albort)及ルードルフに與へたり。是他日ハフスフルグ家の強盛となりて日耳曼史上に一要地を有す

るに至りし原因なり。ルードルフの後ナ、ソウ(Nazari)のアドルフ、ス(Adolphus)千二百九十二年より千二百九十八年まで撰はれて王となりしか、英王エドワード一世の援を得てルードルフの子奥太利公アルバートよりテ、リーリチアを買ひ、自家の権力を張らんとし、以て、撰舉侯の爲に廢せられ、アルバート一世(千二百九十八年より千三百零八年まで)王位に登る。是時瑞西同盟起り獨立を謀る。アルバート之を鎮定せんとし、途にして其姪ジンの殺す所となりリ。キゼムフルク(Luxemburg)伯ヘンリー七世(千三百八年より千三百十三年まで)王位に登る。ヘンリーはボヘミアを合せ、リ、キゼムフルク家の基礎を立て、然後伊太利に入り羅馬皇帝となれり。既にして位を争ふもの大に起り、遂に法王クレメント五世の爲に破門せられ、後暴に殂す。是に於て奥太利のフレデリク(アルバート一世の子千三百十四年より千三百三十年まで)及バウリアのルイ(千三百十四年より千三百四十七年まで)共に撰はれて王となり、相争ふこと數年、フレデリク敗れて虜となれり。然れとも奥太利黨の諸侯は猶兵を戡めず。ルイ平和を希ひてフレデリクを放ち共に並んで王となれり。ルイ又法王ジョン二十二世と惡し、自伊太利に入り其黨の僧を撰んで法王となし以て帝位に即けり。其後法王ジョン二十二世の繼續者とルイとの調和成らざるに及んで、日耳曼の撰舉侯(Electoral Princes)帝王撰舉の權を有する諸侯はレンス(Rense)に會し、日耳曼撰舉侯の多數に由り撰舉せられたる王(帝)は法王の干與を要

せざることを議決せり(千三百二十八年)。ルイ亦自家の權勢を張らんとし、以て數多の撰舉侯はボヘミア王ジョンの子チ、イレス四世を立て帝となせり。

リ、キゼムフルク家　チ、イレス四世(千三百四十七年より千三百七十八年まで)は日耳曼帝中最學識ありて五國

の語に通せり。帝亦大に其領土を擴め自家の權勢を進め伊太利に入りロムバデー、一王及羅馬帝位に登れり。帝はプラーグ(Praha)大學(日耳曼大)を起し、又「ゴールデンブル」(Golden Bull)

と稱する憲章を發布せり(千三百五十六年)。此憲章に據れば日耳曼帝王撰舉の權は七撰舉侯の手に歸し、中三人は大僧正にして、其他は王及諸侯なり。撰舉權は之を世襲し

他に讓與するを得ず。撰舉はフランクフ、ート(Frankfurt)に於てし、即位式はアーヘン(Aachen)即(Aix-la-Chapelle)に於てす。而して撰舉侯は至大の特權を有し獨立の治を爲せり。チ、

レスの子ウ、ンツ、ル立て殘虐なり。諸侯之を廢しルーバート(Rupert)を立つ。ルーバート十年にして殂し、其弟シギスマンド(Sigmund)千四百十年より千四百三十七年まで立つ。帝の時教會分裂し、一時三

法王を見るに至る。是に於てコンスタンス大會(中世紀に於ける教會の大會議なり)千四百十八年まで)を開き新一法王に撰舉して局を結べり。是より先プラーグ大學の教授ジョンハ

ス(John Hus)ボヘミア人といへるものオ、クスフ、ルド大學の教授ウ、クリ、フ(Wycliffe)英

エドワード三世の時教會の改革を唱し且「バイブル」を英語に翻譯せり(この説に同じ、教會の弊風を改革せんことを唱へ焚刑に處せられたり、是に至りて其餘黨亂を爲し勢甚猖獗なりしが、後黨派分裂して勢力微弱となり遂に討平せらる、シギスマンドの後義子アルバート二世(千四百三十八年より千四百三十九年まで)位を繼ぐ、奥太利家の帝統茲に始る、奥太利家は千八百〇六年ナポレオン日耳曼帝國を解散せしめしときに至るまで羅馬帝位を持續せり、アルバートの後フレデリク三世(千四百四十年より千四百九十三年まで)位に即く、フレデリクは日耳曼帝中最長く位に在り、然れども其治世は帝權振はず、ポヘミア及匈牙利の如きは獨立して王を撰立せり、次きて立つものをマキシミアン一世(千四百九十三年より千四百九十九年まで)となす、マキシミアンはバーガンデー王チーレスの女メリーと婚しチーレスの死するに及びて子サーランド及其他の領地を得たり(此時佛國はバーガンデー一公國を占領せり)、千四百九十五年ウーームスに國會を開き、イムペリアルチヤムバー(Imperial Chamber)と稱する法院を置き、以て諸國の平和を制せんとし、又帝國を十大區に別ち、郵便法を設けて通信を便にせり、帝は又伊太利の主權を争ひて屢、佛蘭西及西班牙と戦争せしが、後其子フリードリッヒの爲に西班牙王フリーデリッヒの女を娶り、又ポヘミア及匈牙利王殂して嗣なきを以て之を併合し、帝國の權力復旺盛となれり。

瑞西國 (Switzerland)

瑞西の起原 瑞西はリーセルン(Lucerne)湖近傍のウリ(Uri)・シュヴァイツ(Schwyz)及ウンテルウ・ルデン(Unterswalden)三州の同盟より起る、此等の諸州は本日耳曼帝國の版圖に屬し、防衛の爲同盟をなし、ルートルフ一世の時ハプスブルグ家に服従せり、然れども其子奥太利公アルバート皇帝となりし時瑞西人を虐待せしを以て瑞西人遂に奮然立ちて獨立を企つるに至れり。

モーガートン及セムパクの戦争 日耳曼帝アルバート瑞西の叛を鎮めんとし軍を率ゐて進み、遂にして暗殺に遇ふ、其嗣レオホルド(奥太利公)兵凡一萬五千を率ゐる瑞西に入る、瑞西人兵一千三百人を以てモーガートン(Morgarten)に邀撃し大に之を破る、レオホルド僅に身を以て免る(千三百十五年)、其後七十年を経てレオホルド(前レオホルドの姪)又瑞西に入りセムパク(Sempach)湖の近傍に於て激戦す、瑞西の兵將に破れんとす、時にアーノルド、フンケルリート挺進して斃る、餘兵奮戦復大に克つ(千三百八十六年)、其後二年を経て又子フルス(Näfels)の勝利あり、是よりして瑞西同盟に加はるもの益多し。

同盟の發達 瑞西同盟の勢力は駁々として進み、チーレス、セポールト(Charles the Bold)

「カンタリー公」と戦ひ之に勝ちしより、同盟人の勇名諸國に轟き、後には傭兵となりて他國に戦ふものあるに至れり。十五世紀の末日耳曼皇帝マキシミリアン一世瑞西に權を振はんとして成らず、遂に平和條約を結び其獨立を承認せり。

第二節 佛蘭西 (France)

カペー家 カローウ・インチアン王家の斷絶するやバリ伯ヒュー、カペー王位に登る(第二章第二節を見よ)。カペー王家此に起りバリを以て首府となす。然れども王權は微々として振はず。唯セー (Normandy) 及ルリア (Britany) 河畔の小地を統御するのみにして諸侯の跋扈を制する能はず。是を以てカペー家數代の始王は銳意王權の伸張を謀れり。

英佛の軋轢 カペー家の第三王ヘンリー一世の時ノーマンディー公ウリアム英國に侵入して遂に其王位に登れり(第三章を見よ)。爾來英國に於けるノーマン統の王は、佛國に在りてはノーマンディー公たるを以て漸々兩國の間に軋轢を生ぜり。英王ヘンリー二世の後は佛王ルイ七世の寡婦なりしを以て、英王は其領土アク・チー (Aquitaine) 州を并有せり。是に於て英王の佛國に有せる領地は佛王より却て大なるに至れり。是より兩國の軋轢愈甚しく、佛

國の中世史は殆其爭亂を以て貫穿せり。

フィリップ (オーガスタス) 二世 フィリップ 二世 (千八百八十年より千二百二十三年まで) はシャーレメー 帝以後佛蘭西王中最英名の名あり。偶英王ジョンと争を生じ、ノーマンディー アンジュー メーヌ (Maine) 其他の諸州を略奪し、市府には若干の特權を與へたり。市民は之が爲に自市長を撰ふことを得、且王家を助くるに至れり。千二百十四年ブーヴィネ (Bouvines) に於て日耳曼英吉利の軍を破りしより、王權大に揚る。ルイ九世 フィリップ 四世の相繼きて位に登るに及びて、國勢益強固となれり。

ルイ九世 ルイ九世 (千二百二十六年より千二百七十年まで) は善良なる心を以て萬民に臨めり。王は大に法制を改善し、王國法庭を以て最高權の存する所となし、且諸侯貴族の私闘を判決せり。此間佛國は長足の進歩をなし、當時の歐洲入民中最上位を占むるに至れり。パリの大學の如きも此時盛大に趣きたりと云ふ。

フィリップ 四世 フィリップ 四世 (千二百八十五年より千三百十四年まで) は容顏の美なるを以て名あり。然れども其性は殘暴なりき。王は市民に自由を與へ以て王家の援となし貴族の侵略を防げり。又僧侶課税の事に關し永く法王ボニーファス 八世と争ひ、千三百〇二年貴族僧侶及平民

の代議士を招集し以て自家の權勢をトせり。是佛國人の議政權を得たる嚆矢なり(此議會は毎年兩度パリに招集せらる)。其後法王を廢し佛國の僧クレメント五世を法王となし、南部佛蘭西のアヴィニオン(Avignon)に居らしむ。是より法王の權衰へて復振はず。王又法律に於て大に勉むる所あり。法科大學をオーレアンに設立せり。フィリップの三子相繼ぎ王となるの後、佛國の王位はヴァルア家に移れり。

ヴァルア家 カペー家最後の主チ、イレス四世千三百二十二年歿して嗣なし。是に於てか

王位相續の論紛々として起り、ヴァルア(Valois)伯チ、イレス(フィリップの四世の姪)遂に王權を握る。フ

リ、フ六世(千三百二十八年以上より千三百五十年まで)是なり。此繼承の件英王エドワード三世(フィリップの四世の女の子)の争

ふ所となり百年戦争起れり。

百年戦争 英王エドワード三世はフィリップ四世の孫として佛國の王位に即かんことを

要む。佛人サリク(Salic)法律(五世紀の頃佛人サリアンの立てたる法律にして之に據れば女系は王位相續の權なし)によりて之を拒む。是に

於て英王自王位に登らんとし海陸の兵を起して佛國に侵入せり。時に千三百三十七年

をり。始スロイス(Sluis)の海上に於て英兵勝利を得、次でクレシー(Creay)の戦に於て英兵

又大に勝ち、佛國の騎士死するもの多く、フィリップ僅に身を以て遁る(千三百四十六年)。

クレシーの役後十年を経、佛王ジョン六萬の騎士を以てウールズ親王の寡兵とフアテエー(Poitiers)に戦ふ。佛人輕進して利を失ひ、ジョン虜となり英國に送らる。其後佛國に於て貴族平民の争起り、亂平さて英國とブレタニー(Bretigny)の和約を締びジョン王國に還るを得、英王は佛國の王位繼承の要求を絶てり(千三百六十年)。然れども英王は二百萬クラオンの償金を得、猶依然アクーティーン、カーレー(Calais)の地を領せり。チ、イレス五世に至り此條約に背き大に英國の侵地を回復せり。其子チ、イレス六世の時内亂復起る。是に於てか英王ヘンリー五世兵を起して佛國に迫り、エチハート(Azinour)の戦(千四百十五年)に於て英兵大に勝利を得、進でパリに迫る。此時内亂益甚しく、遂に復英王とトルアー(Henry)の條約を結び、チ、イレス六世の死後英王ヘンリー五世及其子孫佛國の王位に登るべきことを約す(千四百二十年)。既にしてチ、イレス及ヘンリー共に逝けり。然れども佛人英王の入るを拒んでチ、イレス七世を立つ。是に於て英人又兵を起してヘドワード(Edward)公を將として佛國に侵入し、連戦利を得たる所の都府皆陷る。遂に軍を驅つて南佛蘭西に入りオーレアン府を圍む(千四百二十九年)。佛國の危機實に旦夕に迫れり。時は一少女ジャンヌ(Jeanne Darc)と云へるものあり。自神勅を受け佛國の危急を救ふと稱し、王に謁し

て其兵を指揮せり。是に於て軍氣大に奮ひオーレアン（Orlean）の圍を解き、次で英軍を佛國より驅逐するに至る（千四百五十三年）。是より先シアンターク（Sankt）は既にパーガンデア（Pagan）。百年戦争此に全く終を告ぐ。此時英領にして佛國に存するものは唯カレレー（Calais）の一地あるのみ。

ルイ十一世　ルイ十一世（千四百六十二年より千四百八十二年まで）立つに及びて、封建的風習を破壊し中央集權の實を擧げ、貴族平民皆一般に王朝の臣たるに至れり。又王は大に疆土を拓き、道路溝渠の開鑿に力を用ひ、殖産教育を奨励し、佛國の權勢歐羅巴王國中に冠たるに至れり。

第三節 英吉利

ノーマン家　ウリアム二世の英國を征服して王位に登りしことは既に之を説けり（第三章）。是をノーマン家王朝の祖となす。次で王位に登れる者二人あり。ウリアム二世、ヘンリー一世及ステファン（Stephen）。是なり。ステファン殂して（千四百五十四年）ヘンリー二世王位に即く。是をプランタチネット（Plantagenet）家の祖とす。

プランタチネット家　ヘンリー二世（千四百五十四年より千四百八十九年まで）はヘンリー一世の女アンジ、伯チ、オ、

フリー、プランタチネット（Geoffrey Plantagenet）に再嫁（初日耳曼帝ヘンリー五世に嫁せり）して生める所なり。王は夙に司法の制度を改革し、又軍事を整備し、専横なる貴族の城砦を破壊し以て大に諸候の勢力を削れり。王の時愛爾蘭（Ireland）及佛國の西部地方は全く英國の領に歸せり。ヘンリー二世の後リチ、ード及ジョン（千四百九十九年より千二百十六年まで）兄弟繼ぎ立つ。ジョン暗愚にして佛國に於ける領地を失へり。又法王インノーセント三世より破門せられ、英吉利及愛爾蘭を法王に與へ、而して自借地として之を領するに至れり。

大憲章　ジョン王は既に此の如き不名譽の措置をなし、且重稅苛斂を以て人民を苦めしかば、貴族人民等群起し王に迫りて大憲章（Magna Charta）を承認せしめ（千二百十五年）。一時王の爲に摧破せられたる舊法善習を確定せり。是實に英國自由制度の基礎となれり。

議會　ジョンの子ヘンリー三世位に即く又無道なり。貴族復一時に起る。サイモン、ド、モントフォート（Simon de montfort）は民權の伸張を熱望せる貴族にして之が首領となり。王とレウニス（Leves）に戦ひ之を擒にせり。是に於てサイモン國會を招集し、舊來の貴族僧侶に加ふるに騎士市民（一侯國より騎士二人、一市府より市民二人）を以てし上下兩院を組織せり。是實に英國議會の濫觴

にして自由擴張の一大進歩なり(千二百六十四年)。

ウールス及蘇格蘭征戰　ヘンリー二世の子エドワード一世(千二百七十二年より千三百〇七年まで)は古來獨立せるウールスを征服し英國の制度を施行せり(千二百八十三年)。又蘇格蘭王位繼承の争に乗じて之を征す、ウリアム、ウレイス(William Wallace)兵を擧げ之に抗せしが、軍敗れ虜となりて死し、蘇格蘭殆征服せらる(千二百九十六年)。然れども蘇格蘭人猶服せず。ロバートブルース(Robert Bruce)立つて王となり又英兵に抗せり、エドワード之を伐たんとし途にして歿す、嗣王エドワード二世(千三百〇七年より千三百二十七年まで)薄弱にして蘇格蘭遂に獨立するに至れり。

百年戰の結果　百年戰の概略は既に佛國の條下に於て記せしが如し、抑此戰爭はエドワード三世(千三百二十七年より千三百七十七年まで)の時其端を發し、ランカスター(Lancaster)家の王ヘンリー六世(千四百六十二年より千四百六十二年まで)の時に至り内亂(薔薇戰爭)の爲に和議を講せずして終りしと雖、其結果は大に英國人民の國民的思想を強固ならしめたり。是より先、ノーマン人とサクソン人は久しく相協合せざりしが、是に至りて其感情全く消失して唯一英國國民たるの精神を有するに至れり。

ランカスター家　千三百九十九年リチ、ード二世國會の廢する所となる。是に於てフランタチ(Plantagenet)家の王統絶え、ランカスター家(千三百九十九年より千四百六十二年まで)之に代りヘンリー四世王位に即く、次で立つものをヘンリー五世及ヘンリー六世となす。元來ランカスター家はエドワード三世の第四子の後にして、其第三子の後はヨーク(York)家なり、ヘンリー六世の時ヨーク家起て位を争ふ、是に於てか有名なる薔薇戰爭起る。

薔薇戰爭及ヨーク家　薔薇戰爭は實に千四百五十五年より千四百八十五年に至るまで三十年間に亘れり。而してランカスター家の黨は紅、ヨーク家の黨は白薔薇を以て其記號となししより此名あり。交戦六年にしてヨーク家勝利を得てエドワード、ード四世位に即く、ヨーク家(千四百六十五年より千四百八十五年まで)より出て王位に登りしものをエドワード、ード四世エドワード、ード五世及びリチ、ード三世とす。三代二十有四年の間争亂常に絶えず、遂に千四百八十五年ランカスター家のヘンリー、テ、ードル(Henry Tudor)薔薇戰爭の初に當り亂を避けて佛國に奔れり、佛國より還り、ボスウ、ールス(Bosworth)の戰に於てリチ、ード三世を殺して王位に登りヘンリー七世と稱す。是をテ、ードル家の祖となす。ヘンリー、エドワード、ード四世の王女と婚し薔薇戰爭其局を畢る。此戰爭よりして王權は益強大となれり。

第四節 伊太利 (Italy)

概説 オートー大王神聖羅馬帝國を創建するに當りて伊太利亦其範圍に入れり(第四章第一節を見よ)其後皇帝と法王との争は益甚しく、國內亦「ギベルリン黨(皇帝黨)」「グールフ黨(法王黨)」分立し、騷擾已む時なし。要するに兩黨の争は貴族政治及自由政治の争たるなり。ホーヘンスタウフン家滅亡の後、伊太利は數多の小國(市府)に分裂せり。

フレデリク一世ミ伊太利市府 十字軍の起りしより伊太利の市府大に繁榮し、獨立の状態を現せり。フレデリク一世の伊太利に帝權を振はんと欲するや、上部伊太利の市府はミランを首としてロムバード同盟を組織して帝に抗せり。フレデリク屢之を伐ちて大勝を得、市府一時歸服の色あり。既にして法王アレキサンダー三世の援を得、數多の市府一大同盟を起して復反す。千百七十六年同盟軍レグナノ(Legnano)の戦に於て大に帝の軍を破り、遂にコンスタンスの平和條約を定めて市府の自治を承認せられたり(千百八十二年)。

伊太利の諸國 伊太利の各市府は既に自治の權を得たりといへども、外は互に相争

闘し強大のものは小弱のものを壓し、内は貴族權力を專にし、黨派分争して干戈常に絶えず。ホーヘンスタウフン家滅亡後の主要なる諸國(市府)をヴェニス(Venice)ミラン、ジェノヴァ(Genova)(以上上伊太利に在り)羅馬、フロレンス(Florence)(以上中伊太利に在り)及チーブルス(下伊太利)とす。

ヴェニス ヴェニスは本アッテラ(五世紀)の伊太利に侵入せしとき害を此地に避けたる人民の創立せし所なり。其後次第に隆盛に趣き、十字軍の時に至つて富強となれり。蓋其地航海商業に便なるを以てなり。又漸々其近海の嶋嶼を侵略し、十四世紀後に至りてはロムバード、の諸市府ダルマツシア(Dalmatia)及サイプラス嶋を征服し益強大を致せり。ヴェニスの會堂宮殿、水道は壯麗にして當時世界の驚嘆する所たり。其國憲は初自由撰擧公國にして「ドージェ(Doge公爵官)」を撰擧し、元老院議員と共に政務を執行せしむ。千三百十一年に至り政權遂に十人議會の手に歸し、自由の制度變して貴族世襲政治となれり。然れども十四世紀の頃はヴェニスの最隆盛を極めし時なりしが、フランセスコ・フスカリ(Francesco Foscarini 千四百二十三年)「ドージェ」となり、伊太利の事件に關係するに及びて他の歐洲諸國民の嫉む所となり、一千五百〇八年日耳曼帝マキシミリアン一世佛蘭西王ルイ十二世

アラゴン(Aragon)王フェルディナンド(Ferdinand)及法王ジリアス二世カムブレー(Cambrai)同盟

を結びヴェニスに抗し、ヴェニスの勢力日に蹙れり。

ミラン ミランは豪族ヴェスコネチ家日耳曼帝ヘンリー七世よりミランの太守に任ぜられ、権力益張る、其子孫に至り公爵を受け専制政治を起し、而して盛に、傭兵を増置し、**ロムバード**の大半を征服せり、十五世紀の中葉に至り傭兵の將フランセスコ・スフォーザ(Francesco Sforza)遂に國柄を借取せり。

チノア チノアはヴェニスと同じく商業の地なるを以て富財大に集り銀行を設立せり、東洋の貿易に關して常々ヴェニスと競争し、屢激烈なる海戦をなし始は多く勝利を得しが、遂にキオキア(Chios)の戦に大敗して國力疲弊し、十四世紀の中頃より他國の管治を受くるに至れり。

羅馬 法王のアウグーティン(南部佛蘭西に在り)に在るや(千三百〇九年より千三百七十七年まで)、羅馬は黨争紛亂の場となり、**リエンチ**(Rienzi)といふものあり、古代羅馬の制度を復興せんことを企て、人民の贊助を得て新羅馬共和國を立て、而して「トリビーン」となれり(千三百四十七年)然れども人民を抑壓せしを以て幾何ならずして放逐せられ、再羅馬に歸るに及びて殺さる、其後羅馬は復法王の領となり、法王シリ阿斯二世の時大に其領土を擴張せり。

フロレンス フロレンスは本日耳曼兵士の植民地なりしが、遂に伊太利の一要市と

なり、亦商業製造を以て著れ銀行鑄貨の業起れり、然れども其始は永く封建制度の爲に害せられたりしが、共和政勝利の後愈繁榮するに至れり、是時フロレンス市の富家メディチー(Medici)大に衆望あり、遂に政權を握り**コスモ**、**メディチー**(Cosimo de Medici)千四百一十八年)に至り善く其國を治めしを以て、國父の稱を得たり、**ローレンツ**(Lorenzo)千四百七十二年)出て、政務を執るに及び、大に文學、哲學、技藝を奨励し、大學を設け、又圖書館を建て、公衆の便に供せしを以て、學者文人技藝家彬々として輩出せり。

チーブルス **ホーヘンスタウフェン**家滅亡の後チーブルスは**アンジ**、**伯チ**、**イレス**(千二百八十五年)の領する所となる(第七章第一節を見よ)、**チ**、**イレス**の後チ、**イレス**二世**ロバート**相繼きて位に登

る、皆**グアルフ**黨の領袖にして、商業を盛にし大に其國を富ませり、**ロバート**の孫女王**アン**(Joan)一世暴虐なり、**チ**、**イレス**、**ツラ**、**ツラ**(Charles Durazzo)之を殺し王位に登る、其後女王**アン**二世(千四百十四年)位に在り嗣なし、初**アラゴン**の**アルフ**、**ンソ**五世を養ひ、後又**アン**、**ンソ**の**ルイ**三世を養へり、此に於て**アラゴン**及佛蘭西黨派の競争起り、多年戦争の後**アルフ**、**ンソ**遂に**チーブルス**王となれり。

第五節 西班牙及葡萄牙 (Spain and Portugal)

西班牙 八世紀の始サラセン人西班牙に侵入し、基督教國は概其侵略する所となれり(第一章第三節を見よ)。然れども漸々其勢を恢復し、オムミアド王國(サラセン人)の分裂(第十一世紀)せる時に當りて、レオン(Leon)カステール(Castile)アラゴン(Aragon)ナヴァーリ(Navarre)等の基督教王國あり。爾來一盛一衰、十三世紀に至りてはアラゴン・カステール・葡萄牙及ナヴァーリ(十五世紀に至り)アラゴンに合すの四國となれり。アラゴンは地を東方に拓き海岸のカタローニア(Catalonia)ヴァレンシア(Valencia)ムルシア(Murcia)を取り、又近海の嶋嶼を合せ、ビーター三世(千二百七十六年)の時シ、リー及サデーニアを服し下伊太利に威を振ひ、アルフォンソ一世(千四百十六年)に至り遂にレオン王國を并吞せり。カステールは之に反して南方に進入し、フーデ・ナンド二世(千二百十七年)ムーア人を伐ちコルドヴァ、セヴイル(Seville)及カーデーイス(Cadix)を取れり。其子アルフォンソ十世(千二百五十二年)大に學術を奨励し、サラマンカ(Salamanca)大學を擴張し、國語の發達を督催し、法典歴史を編纂せり。然れども羅馬帝位を得んとし重税厚賦を課せしを以て國力疲弊せり。アルフォンソ十一世(千三百十二年)立つに及び

て貴族を制御し、又ムーア人と戦ひアルチシラ(Algecira)を取れり。其後内亂繼き起り、女王イサベラ(Isabella 千四百七十四年)の代に至りアラゴン王フーデー・ナンドと婚するに及び、兩國遂に合し西班牙國の基をなせり。イサベラは千四百九十二年グラナダ王國を滅し西班牙に於ける亞刺比亞人の根據を掃蕩せり。是より先アラゴン及カステールに於ては自由の精神漸々人民の中に興り、遂に「コーツ」(Cortes)と稱する議會を開くに至れり。アラゴンの議會は唯に立法及課税の議定權を有するのみならず、國王の顧問官も又議會の賛同を得されは任命することを得す。且王と議員との争は至高裁判官(Justiciary)の判決を要すとなせり。

葡萄牙 第一十字軍の始バーガデー・伯ヘンリー、ムーア人の地を略し葡萄牙王國の基礎を作せり。初カステールの一諸侯なりしが其子アルフォンソ一世に至り、千百三十九年大にムーア人を破り遂に王位に登りカステールの管轄を脱し、善良なる憲法を發布せり。其後リスボン(Lisbon)を取り定めて首府となす。嗣サンチー一世(Sanchio 千百八十五年)又屢ムーア人を破り、農業を奨励し、村落及市場を設立せり。ダイオニシアス二世(Dionysius 千二百七十九年)の時に至りては、殖産工業及通商の業大に開け、リスボンの大學も亦此時

に起れり。要するに十五世紀に至るまでの葡萄牙の歴史は、内は國王と貴族との闘、ムリア人及カステール人との戦、法王と僧侶との争を以て充たされ、外は北亞非利加海岸のシータ(Ceuta)タンチール(Tangier)の征略及マデラ(Madeira)島の發見に過ぎず。

第六節 スカンディナヴィア (Scandinavia)

概説 歐洲に在りてシ、イレマン帝國及東羅馬帝國の範圍に入らざりしもの三地方あり。一を西班牙とし、二を英吉利とし、三をスカンディナヴィア半島とす。即丁抹、瑞典、那威是なり。スカンディナヴィア人は大に遠征に従事し數多の植民地を設けたりといへとも其本國にありては自特殊の發達をなし、十世紀の頃より漸次三王國の興起を見るに至れり。

丁抹 ウルデマー一世 (Waldemar 千百五十七年) 及其子カニート六世 (千百八十二年) に至り丁抹の領地は日に擴張し、ウルデマー二世 (千二百〇二年) 位に即くに及びて其版圖益大となれり。王は丁抹王中有名の征略者にしてバルテック海の南岸及東岸のスラヴ、ニア人等を征しホルスタイン (Holslein) よりエスソニア (Esthonia) に至るまで盡く之を服し、

丁抹及スレーヴ王と稱せり。王のエスソニアより歸るや、シウリハ (Schweini) 伯ヘンリーの爲に捕へられ、太子と共に幽せらるること二年にして釋さる。ウルデマー二世 (千二百四十年) 立つに及びて王權を恢復せり。ウルデマーの第二女マーガレット (Margaret) 那威王ハーロン (Hakon) 八世に嫁す。ハーロン歿し其子オーラフ (Olaf) 尙幼なるを以てマーガレット政を攝す。オーラフ長して丁抹王に撰はれ而して天す。是に於てマーガレット兩國の政を攝し、又兼て瑞典の王位に登れり。

瑞典 瑞典に於ては王權微弱にして内は貴族權勢を恣にし外はゴス人の侵入を被りしか、十三世紀の中葉ウルデマー一世王位に登り國內一時平和を得たり。マグナス (Magnus) 一世 (千二百七十五年) 出て、大に司法制度を改善せり。此王家の最後の王をマグナス二世 (千二百九十九年) と云ふ。時に那威の王位闕けしを以て以てマグナス其王位に登り其子ハーロンをして位を繼かしむ。瑞典の貴族はマグナスを廢しメックレンブルク (Mecklenburg) 公アルバードを立て、王となせり。 (千三百六十二年) 其後貴族又アルバードを廢し丁抹及那威王マーガレットを迎へ位に即かしむ。

那威 十世紀の頃ハラルド、フーアヘーア (Harald Fairhair) 那威を一統せり。然れども王權

は丁抹及瑞典より微弱なり。マグナス三世(千〇九十五年)立ちてアイスランドを伐ち軍中には子シガード(Sigurd)位を嗣けり。シガードは十字軍に従ひバレストインに戦ひ勇名あり。王殂してより王位繼承の亂起り、黨派の軋轢甚し。マグナス六世(千二百六十二年)に至りて國內平穩に歸し殖産貿易の業を盛にし海陸の軍備を擴張せり。其子エリク(Eric)千二百八十年)立ち僧侶貴族を抑壓し王權を擴張し、又ハンサ同盟の市府と戦へり。エリクの弟ハーコン七世殂して嗣なし。瑞典のマグナス二世(エリクの外孫)位に即く、其子ハーコン八世(王妃はマーガレット)の殂せし後カルマー(Calmar)の同盟成り三國合して一となれり(千三百九十七年)。

カルマー同盟後の國情　マーガレット殂しボヘミアのエリク十三世立ちて三國の王となる。シ・レスウ・ヒ(Schleswig)及ホルスタイン反し、バザリアのクリストフ(Christopher)千四百四十八年殂す)入りて王位に即く。其殂するや瑞典は同盟を離れて自チャーレス八世を立つ。然れども丁抹那威は猶依然たり。オルデンブルク(Oldenburg)のクリステアーン一世位に即くに及びてシ・レスウ・ヒ及ホルスタイン復歸服せり。

第七節　波蘭及露西亞 (Poland and Russia)

波蘭　匈牙利人歐洲に植民せしよりスレーヴ人分れて南北の二部となり、南部はタニユー河邊に居り、而して北西に住するものは境を西羅馬帝國に接しボヘミア波蘭此中に起る。又其東に住するものは露西亞となれり。傳へ云ふピラスト(Piast)始めて波蘭に公たりと。而して其朝相承け千三百七十年に至る。後ミーシラス一世(Mieszko)九百六十六年)ボヘミアの王女を娶り俱に基督教徒となり。オトー一世に臣屬し後、帝フレデリック二世の時全く獨立せり。ボレスラフ一世(Bolslav)九百九十二年)立つに及びて王冠を得たり。カシマー三世(Casimir)千三百三十三年より千三百七十年まで)位に即き露西亞を征し國境遠くニーパー(Dnieper)河畔に達す。王大學をクラコー(Cracow)に起し、法典を發布し商工業を奨励せり。王殂して貴族は其姪匈牙利王ルイを迎へて位に即かむ。是に於て波蘭は撰擧王國となれり。ルイ殂して嗣なし。貴族リスニア(Lithuania)公シ・ゲロン(Jagellon)を立つ。ウラデスラフ二世(Wladislaw)千三百八十六年)と稱す。而して其朝相繼ぎ千五百七十二年に至れり。カシマー四世(千四百四十七年)の時、テートニコナイト(日耳曼騎士の組合)を破り東部露西亞を取り平和を約せり。當時貴族の權甚強く、王位は世襲の名ありと雖、其廢立一に貴族の手に在り。

位の時は先貴族に特權を與へ且租税を免し以て其歡心を買はざるべからず。國會は全く貴族の組織する所にして、立法行政より徵稅軍事に至るまで、貴族の贊同を得るにあらざれば國王は一も之を執行することを得ず。而して農民は常に重税の下に呻吟せり。露西亞 ノースマン人の一種ヴェーレンチアン人の酋長ルーリク露西亞に入りノヴゴロッド府を開きしことは既に記せし所なり(第三章を見よ)爾後ノースマン人は益進んで南方を畧し、ニール河畔キーヴを以て首府となし、露西亞人と合してウラディマー一世 (Vladimir 九百八十年) の時希臘教徒となれり。アイアロスラフ一世 (Iaroslav 千〇十九年) に至つて國力强盛となり、地を分ちて諸子に與へ遂に内亂を致せり。此機に乗じて蒙古人大舉來寇す。露西亞人其征服する所となり。而して二百年間ゴールデンホード (Golden Horde) (蒙古人のヴールガール河邊に創立したる國なり) の管下に立てり。蒙古人侵入の初に當りてはノヴゴロッド府露國の中心なりしが、十三世紀の終に至りてはモスコイ (Moscow) 府之に代れり。十四世紀の頃リスニア人、波蘭人侵寇せしを以てアイヴァン一世 (Ivan) 都をモスコイに移せり (千三百二十八年)。是實に方今露西亞國の起原にして、諸侯皆之に臣事せり。デメトリアス一世 (Demetrius) に至りて大に蒙古人を破る(千三百七十八年及千三百八十年の兩度)。然れども千三百八十二年復來寇してモスコイを焼き、二万四千の住

民を屠殺せり。後アイヴァン二世 (モスコイ大公千四百六十二年より千五百五年まで) の代に至りゴールデンホード國內亂の爲に疲弊せしを以て、遂に蒙古人の羈絆を脱するを得たり。

第八節 匈牙利 (Hungary)

アーバド朝 八百八十九年項ハン人の一族モチー人酋長アーバド (Arpad) を戴き、カーパス・アン (Chaputian) 山を越えて匈牙利及トランスシルヴァニア (Transylvania) を略し益其兵を進む。歐洲爲に震動せり。然れども帝ヘンリー一世及オト大帝の爲に破られ退て居を匈牙利に占む。ステファン (一千年) 始めて法王シルヴ・スタール二世より王冠を得たり。而して王國を數州に分ち、教會を設け學校を立て、且貴族僧侶武士を招集して國會を開けり。ラディ・スラウス一世 (Ladislaus 千七十七年) に至り、諸方を攻略して國境大に廣る。アンドリア二世 (Andrew 千二百五年より千二百三十五年まで) の時貴族の要求を容れて、憲章 (ゴールデンフル) を發布せり。是マクナカルタの英國に於けるが如く、匈牙利自由制度の基礎となれり。後四王を経てアーバド朝止む。其間蒙古人の侵入を蒙り國大に蹂躪せらる(後節を參看せよ)。

撰舉王朝 アーバド朝最後の王アンドリア三世千三百〇一年に殂し、王位相續に關

して黨派分裂せり。法王ホーニーフ、ス八世チーブルスに於けるアンジュー家のチャーレスロバ
 ー(千三百〇八年)を援けて王位に即かしむ。是に於て匈牙利は撰擧王國となれり。チャー
 レスの子ルイ大王(千三百四十二年より千三百八十二年まで)に至りて波蘭王を兼ね、其疆土を拓きて下
 タニーフに及び、國勢強大となれり。ルイ歿して王女マリア(Maria)ボヘミア王シギスマンド(後日耳曼帝位に登る)に配
 して共に匈牙利を治む。此時に當りて土耳其人始めて入寇せり。シギスマンドの子アルバー
 ト二世歿して波蘭王ウラデ、スラウス王位に即き、千四百四十四年土耳其人を防ぎヴァー
 (Varna)の大戦に敗死す。其後ジーン、ハンヤデー(John Hunyady)アルバートの子ラデー、スラウス
 を輔けて政を攝し、土耳其人と戦ひ之を破れり。既にしてラデー、スラウス歿す。是に於て匈
 牙利人はハンヤデーの子マ、テ、アスコヴ、ナス(Matthias Corvinus)千四百五十八年より千四百九十年まで)を立て
 王となせり。マ、テ、アス外は土耳其の勢力を挫き、地を埃太利及日耳曼に拓き、内は大
 學を設け圖書館を置き、又學者技藝家を四方より招き、大に其人民の文化を誘導せり。
 然れとも十六世紀に至り匈牙利は又土耳其人の侵略する所となる。

第九節 蒙古及土耳其 (Mongolia and Turkey)

成吉思汗 蒙古人は支那西比利亞(Siberia)間の高原に住せる遊牧人種にして、十三世
 紀の頃に至り、成吉思汗(Genghis Khan) 名は銀木真と云ふ支那南宋の寧宗朝(二年帝位に即く元の太祖是なり)といへるもの起り
 て近隣の諸族を従へ、其勢益盛となり屢、金(當時金は支那の北部を攻署して之に據れり)を伐ち、又其鋒を轉して
 中央亞細亞を征し、ボカラ(Bokhara)サマルカンド(Samarcandy)等の繁榮の市府を焼き印度に
 及へり。
 東方侵略 成吉思汗の後第三子窩濶台位(オゴタイ)を繼ぐ。是を太宗となす。太宗父の志を紹き
 宋と約し金を攻めて之を滅し、定宗憲宗を歴て世祖忽必烈(クビライ)に至り終に宋を滅し國を元
 と號す。而して阿答海范文虎等に命じ大軍を率ゐて日本に寇せしが、颶風大に起り船艦
 盡く覆る。我兵之に乗じて奮戦し元兵生還するもの纔に三人のみ。爾後世祖復手を日本
 に出たさゞりき。

西方侵略 是より先、成吉思汗の將中央亞細亞よりカウカサスの地峽を過ぎ露西亞に侵

入し、モスコ、キーヴ、クラコーを陥れ、遂に軍を驅りて波蘭匈牙利に入寇す。下シレシア公ヘン
 リー之とリーグニッツに戦ひ敗績す(千二百四十一年)。蒙古人性殘忍、敵に勝て之を賊るの
 風習あり。リーグニッツの戦耳を袋に盛ること九箇に及へりと云ふ。既にして歐洲を退き

東南に向ひバグダードを取り、更にシリアに入りアレキサンドリア及タマスカスを陥れ、基督教國及同々教國の開化を破壊せり。是に於て蒙古帝國の版圖は東、支那海より西、地中海に達し、北、モスコより南、埃及の國境に至る、其廣大なること前古未有らざる所なり。而して其版圖は四部に分れたり。支那、カフチヤ、カク(Kaptschak)露西亞の地方(サガタイ(Nagatai)南東亞細亞(Iran)エニ彼斯地方)是なり。此四國は世祖の死後に至り血族漸く疎となり互に相攻伐し其版圖幾何ならずして瓦解せり。然れどもウルガの東に於けるゴールドンホード國は尙二百年間露西亞を管領し、千四百年代に至り帖木兒起りて蒙古帝國を再興せり。

オスマン土耳其人、ムラド一世 十三世紀の終に當りてオスマン土耳其人(Osman Turks)は蒙古人の攻撃を避け、裏海の東方より動き小亞細亞(當時セルジューク土耳其人の餘種之に據れり)を侵略し益其兵を進む。希臘帝力微にして之を拒く能はず。ニコメディア(Nicomedia)ニア等の地を奪はる。ムラド一世(Murad)千三百六十一年(ジヤニツ、リズ(Janizaries)と稱する軍隊を組織し、向ふ所皆靡く、既にしてムラド、アドリアノブル(Adrianople)を取りて首府となす。スレス并に希臘羅馬の市府皆之が爲に破壊せらる。サーツ、アン(Servian)人バルゲ

リアン人力を協せて防戦し、コソツ、(Kosovo)の戦に於てムラドを獲たりと雖、其軍亦大に破れたり。

バジヤツニト、ムラド死して子バジヤツニト(Bajazet)千三百八十九年之に代る。バジツニト戦略父に勝り、マセドニアス、サリ、希臘(ヘロポニ、ニサスの南端)を侵掠す。日耳曼帝シギスマンドパーガンデーのジ、ンと共に十萬の兵を以て之を禦き、下タニーブのニコポリス(Nicopolis)に戦ひ大に敗れ、佛蘭西及日耳曼の貴族虜となるもの甚多くシギスマンド僅に免る。千三百九十六年、是に於てボスニア(Bosnia)亦手中に落ち、コンスタンティノブルは將に土耳其人の呑噬に遇はんとするの際、突然強敵起りてバジツニトを破れり。成吉思汗の後裔帖木兒是なり。

帖木兒(Timurlano)は一旦崩解したる蒙古帝國を再興せんとし、其首府サマルカンドを發し、印度彼斯を征服し、バグダード、タマスカスを破壊し、而してシリアを侵略し、其領地東は長城より西は地中海に達し、ゴールドンホード國も亦其滅す所となる。帖木兒の過ぐる所鹵掠殺戮至らざるなく、イスバハン(Isfahan)に於ては七萬の人民を屠殺し、バグダードに於ては九萬の首級を以て一高塔を築きたりと云ふ。帖木兒の英鋒今や將に土耳其

其に向はんとす。希臘皇帝及セルジウスの諸王皆其風を望んで降る。バジツト兵四十萬を以て蒙古の兵八十萬とアンシラ(Angora)に會戰す。時に千四百〇二年なり。バジツト遂に破れて捕へられ、幾何ならずして死す。帖木兒又支那を伐んとし、果さずして死せり(千四百〇五年)。

コンスタンティノープルの滅亡 帖木兒の死するやバジツトの孫ムラド二世(千四百二十一年)其舊地を恢復して勢又盛なり。コンスタンティノープルは掌大の地を有して土耳其の國中に立てり。希臘皇帝ジーン七世希臘羅馬兩教の一致を圖り、以て西歐諸國の力を借らんとし、が事終に成らず。羅馬法王獨基督教國王を勵して土耳其人に當らしむ。ムラド二世死して後慄悍なるマホメト二世(千四百五十二年より千四百八十一年まで)立ち、コンスタンティノープルを取り首府となさんとし之を攻むること甚急なり。此時に當りコンスタンティノープルの城中兵僅に七千人勇敢善く拒さしが、五十有三日にして城遂に陥り、皇帝自奮戰して死せり。時に千四百五十二年五月二十九日なり。是に於て千有余年の舊都は「サルタン」の居城と變じ、聖ソフィアの會堂は回々教院と化し、新月旗の翻々として塔上に舞ふを見るに至れり。土耳其人既にコンスタンティノープルを陥れ、進んで希臘及モリア(Morea)即ハロホニヒ

サス)を平定しタニエ地方を征服せり。

第八章 中世紀の開化

總説 羅馬の晩年文教漸く微に、社會將に壞敗せんとするの際、北方蠻族の侵入に遭ひ、至大の版圖條土崩し赫灼たる文明遂に光を失ひ、世は中世紀となれり。爾來六百年間(十一世紀の末まで)歐洲の世界は所謂暗黒の時代となり、封建君主專横を逞ふし、人民は壓制の下に呻吟し、文物は地に委し、産業は全く衰頽せり。之に反して東羅馬帝國及亞刺比亞は古代希臘の餘光を承け、文物猶盛なり。殊に亞刺比亞の如きは開化の高度に達し、歐洲文化の復興を促すの要因となれり。十一世紀の終より歐洲の天も陰雲漸く解けて、天日微光を漏し、市府の發達と共に人文稍興り、遂に近世紀の初に至りて、世は又文明の旭輝を見るに至れり。

第一節 封建制度

封建制度の起原及概況

中古時代の特象と稱すべきものは實に封建制度(Feudal-

system)なり。封建制度は中世紀の政治及社會上の混雜せる状態を包括せるものなり。此状態は實に日耳曼及羅馬制度の混合より起る。初フランク人のゴールを侵略せしとき、酋長即君主は自其地の大部分を占領し、其餘を割きて有功の士に與へたり。之を「アローデ・アム」(Allodium、即私領或は世襲財産)と稱す。是より以後君主は皆其臣下を養ふに領地を以てし、其家事或は軍務に忠實なることを誓はしむるの風習行はれたり。之を「フィーフ」(Fief、即食邑)と云ふ。其性質全く「アローデ・アム」と異りて、其人にして若誓約に違ふことあれば、君主は忽之を沒收す。此等の方法は「シャールメーン」帝國滅亡後西歐羅巴に流布し、遂に儼然たる封建の體面をなすに至れり。是に於て「シャールメーン」帝國は大小諸侯の碁峙する所となり、王の下に諸侯あり、諸侯の下にも亦臣下あり、各領地を有し、層々相聯關し以て一國の全體を組成せり。此時に當りては「ノーマン」人「サラセン」人「匈牙利」人等屢、侵寇せしを以て、土地人民保護の必要より封建世襲の主義は益堅牢となれり。然れども其危難の際には、弱小者は強大者の保護を受くるより、私領も變じて食邑となることあり。其後亂離相繼ぐに及びて、諸侯豪族は城砦を構へて之に住し、一般の人民は郊外に村落をなし、借地を耕し或は賃勞をなせり。要するに封建制度は武人政治の社會組織に外ならざるなり。

君主の臣屬 君主(Lord, Suzerain)の臣屬(Vassal, Liegeman)とは相互の義務を以て結合せり。蓋臣屬は君主の軍役に服すべく、或は祝典に參賀すべく、或は君主の捕虜となるときは償金を課して之を救ふの義務あり。君主も亦之に對して臣屬を保護し、且救恤するの義務あり。而して臣屬の下に又臣屬あり、君主の上に又君主あり。猶英王ウリアムコンク・ロルノーマンデ、一公の資格を以て佛王の臣下たるが如し。然れども概するに帝王は最上位に在りて、諸侯之に次ぎ、騎士又其下に在り。

私圖 臣屬亦其同列の臣屬に向ひ端戰を開くことを得、或は直に君主に訴へて其裁決を乞ふことを得。然れども君主は各其臣屬に荷擔して不正の判決を與ふること多きを以て、中世紀に於ては私闘の流行を見るに至れり。

僧侶の封建制 僧正は往々侯伯の位置を有して帝王の臣下となり、而して教會管轄區内諸貴族の君主として立つことあり。市府も亦間、僧正を君主として戴くことあり。加之僧正は莫大なる領地を有し、之を騎士に割與して臣下となし以て自衛り、且國王の徵發に應じて軍兵を出せり。中世紀に於ける僧侶の領地は、英佛に於ては其國五分の一、日耳曼に於ては其三分の一の廣土を占有せり。

地役民 十一世紀に於ける歐羅巴は實に小君主の集合體にして、其下に屬するものは衆民なり。而して其大半は地役民(*serf*)なり。此等は大抵土地所有の自由民にあらず。君主の田野を耕し或は其役に従ひ、其土地と俱に終始す。故に君主即地主の變するときは亦隨ふて之に移るを例とす。然れども奴隸と異りて賣買せらるゝことなし。

封建制度の利弊 封建制度は人民の自由を抑壓して大に其發達の途を妨害せり。此時代の人民の休戚は繫けて君主の一心に在り。君主にして善良ければ下民其福を受くべしといへども、而も其要義たる唯君命に是從ふに在れば、君主如何に兇惡なるも之を訴ふるに路なし。是を以て此時代に在りては萬般の事物皆萎靡して振興の望なきなり。然れども中古時代亂離の世に在りて、外は蠻敵の侵入を防ぎ、内は上下の聯關を基け、而して忠節義俠の氣象を社會に播種せし功は、亦埋没すべからざるものあり。

封度制の衰微 封建制度の衰頹を促したる要因は、王權、市府及僧侶の三者なり。王權の強盛とかりしより中央權盛大となり、諸侯は漸々其勢力を減損せり。且國王の心中漸く國家てふ思想を惹起し、大に下民の權利を保護し、諸侯に不利なる法律を發布して顧みざるに至れり。市府の興起してより王侯亦之に與して其勢力を増さんとし、多少

の特權を之に與へたり。市民の市長撰擧の權を得たるに至りて其勢力漸く封建制度を壓し、竟に自由の政區を開拓するに至れり。僧侶は其教權を擴張せんとし往々國王と結託し諸侯に抗することあり。加之其領地の廣大なると其主義の博愛なるとは皆以て諸侯の專橫を制するに足りき。其他十字軍、火藥の發明、智識の増進等は封建制度の廢絶に與りて亦大に力ありしなり。

第二節 騎士の制

騎士の興起 騎士は封建制度と共に起り、十四世紀に至りて其盛況を極めたり。蓋騎士の制(*Chivalry*)は昔時日耳曼人武事尊崇の念と、婦女敬愛の情とより萌芽を發し而して宗教の熱情之を助け、十字軍に至りて始めて全成せり。封建制度の漸々整備してより諸侯皆食邑を與へて武勇の士を養ひ、且教習所を設けて臣下の子弟に武事禮式を學ばしめ、以て篤實勇敢の武士を作ること勉めたるを以て、騎士一時大に美風を發揚するに至れり。

騎士の教育 七歳より十四歳に至るまでの兒童は之を侍童(*Page*)と云ひ、皆城中に

在りて貴嬪に倍侍し、且音楽宗教武事を學ひ、淑女勇士の薰陶を受け、温良にして勇猛の美德を養成せり。十四歳よりして侍士(Squire)となり城中の職に任せられ又高貴の士婦に奉仕す。此時よりして體育、德育及武藝の練習益精嚴となり。操槍、越壁、跳壕等の技を學べり。而して或は君主の馬を率ゐて戰場若しくは競武會に臨み、或は君主に戰陣に従ひ、其危急に際しては身命を棄て、之を救ふの義務あり。此の如くして二十一歳に至り、始めて一個の騎士となるなり。

騎士となるの儀式 騎士となるの式に出づるに當りては、其前夕より齋戒沐浴し、事皆先覺の指揮に隨ひ、隠者の如き白色の粗服を着け、謹慎靜座一夜を會堂に徹す、既にして夜明くれは先僧侶の前に於て己の罪障を懺悔し、而して後君主は之に善良方正篤實、勇敢の騎士となり、寺院を保護し且嫠寡孤獨を憐恤すべき誓約を爲さしめ、劍を拿りて其肩を打ち以て儀を了へり。

競武會 中世紀にありて最著明なる遊戯は競武會(Tournament)なり。帝王の即位の祝典、王家の婚禮等に於て之を舉行す。競武は大抵木片を付したる槍を以て敵を突きて馬より墜すを目的となす。競武場の兩端には高臺或は棧敷を設けて帝王、貴族、貴嬪

の座を備へ、傳令守護の官は場の内外にあり、樂隊は又場の四隅に列し、整々肅々たるの間、傳令官一號令を下せば盛裝せる騎士は東西より馬を躍らせ場の中央に出て、相突撃す。而して勝者は嘯唳たる音楽と共に衆人の喝采を得て貴嬪より種々の賞與を受く。是騎士の最光榮となす所なり。然れども競武會を行ふ毎に必多少の死傷あるを免れざりき。

騎士の美德 騎士の本色は篤實寛厚にして勇猛果敢なるにあれば、其社會に及ぼせる美果も亦必少小にあらず。蓋し(一)王室に對し忠にして、國難に臨んで命を致すこと、(二)寛恕にして敵人をも憐恤すると、(三)優雅にして能く婦女子を擁護すること、(四)勇敢にして能く功績を著はすこと、(五)百事專名譽を重んずること等は、騎士の體認實踐すべき所なれば、其世道人心を高尙にしたるや疑なきなり。

騎士の衰微 騎士の末路に至りては往時の善習美德敗壞し、且火薬の發明ありて兵制を一變せしを以て、騎士其武を用ふるに處なく、漸々衰微せり。佛國に於ては英佛百年戰爭の時に當り、精銳の騎士を以て編成せる軍隊英國土民軍に破らるゝに及び、騎士の名譽地に墜ち終に千五百二十四年有名なる騎士ベーヤード(Bayard)の死を以て騎士跡を

絶てり。英國に於てはエリツ・ヘス(Elizabeth)時代に至るまで之を繼續し、西班牙の騎士も亦英國と同時に衰へたり。彼サーウ・テス(Cervantes)の「ドンキホーテ」(Don Quixote)と稱する有名の小説を著はして、騎士の敗徳を嘲りしは此時代にあり。騎士既に全く消滅したりといへども、而も其流風餘徳の存して社會を益せしもの亦鮮からざるなり。

第三節 市府の發達

市府の興起 文明進歩の第一現象は市府の發達に於て之を見る。蓋市府は常に文明の中心となればなり。抑封建制度の下にある一大階級即貴族僧侶と地役民とは九世紀に於て現はれたる社會の状態なりしが、十世紀に至りては又一種の現象の萌芽を生ぜり。即市府の新に興隆せしことは是なり。羅馬時代の市府亂離の間にありて其形狀を維持し來りしもの少からざれども、而も十字軍時代に至りて新に興起せし市府亦甚多し。此等の市府は數世紀を経て益繁榮に趣き、市民の權力は日に伸暢せり。

自由市府 市民の自由漸く伸暢して、遂に自治制の市府成立せり。是羅馬遺風の復興なりと云ふといへども、亦日耳曼人種特有の一產物として見るべきなり。十世紀以來市

府の商工業は進歩の途に上りしと雖、而も市民は常に封建制度の下に在りて重税苛飲に困められ、遂に相團結し兵器を以て自衛するに至り、時には帝王と結んで諸侯に抗し、時には諸侯に合して帝王に當り、以て熱心に自由を得るに努力せり。而して王侯は己の利害を顧み、遂に種々の特權を與ふるに至れり。是に於て市府益繁榮し、伊太利日耳曼最盛なり。是よりして自治の政體成りて市長を公撰し、政法の庶務を綜へしむるに至れり。

ハンサ同盟及ロムバード同盟 十三世紀の中葉北方日耳曼の諸市府は海陸の賊徒を防ぎ、且其自由及權利を擴張せんとの目的を以て、**ハンサ同盟** (當時ハンサ(Hansa)府最勢力あり故に名) を組織せり(千二百四十一年頃)。十四世紀に至りては八十の市府之に加入し、リ・ーベック(Libec)

を以て中心となせり。ハムブルグ、ブレメン、コーロン、フランクフルク等の諸市又盛なり。伊太利の市府は日耳曼に先ち既に繁榮を極めたり。殊に北部伊太利即ロムバード、其最たり。千六百六十七年ロムバード同盟を組織し日耳曼帝に抗し千八百八十三年コンスタンスの和約を以て市府の獨立を承認せられし以來ヴ・ニスチ、ノアヒサ(Verona)等の諸府益富強に趣けり。其他佛蘭西、英吉利、西班牙、葡萄牙の諸府も亦大に發達せり。

第四節 東羅馬帝國及サラセン帝國の開化

東羅馬帝國 歐洲の世界は黯澹たりといへども、東羅馬帝國は猶文明の餘光を保ち、古文學盛に起る。然れども東羅馬帝國の文學は多く希臘古文學の編輯或は注疏に止り、新に一機軸を出したるものなし。ジ・ングランマテ・カス (John Grammaticus 七世紀の初) は博學にしてアリストートルの説を解説し、文法及哲學上の著書甚多し。ダマスカスのジン (八世紀) は系統神學の創說者にして、フ・イーテ・アス (Phoebus 九世紀) は宗教文學及古文學の泰斗たり。詩歌も亦古代希臘の稗史を編纂或は改竄せしもの多し。歴史に於けるも亦然り。大抵年代記、傳記或は記録等を蒐集羅列せしに過ぎず。ツ・シマス (Nesime 四百五十年頃) は東帝国有名なる史家の一人にして、該博なる見識を以て羅馬帝國衰微の状態を説述し、原因結果の理法を討究せり。プロコピウス (Procopius 五百四十年頃) はバレストアインの人にして古典及法學に精通し、嘗て軍に従ひ彼斯・ウ・ンタルス及ゴス・ク戦争紀八卷を著し、ヘロドタスに模倣せり。數學及天文學、建築術器械學は亞刺比亞及西歐諸國の師となり、殊に美術品の製作は其最長したる所にして多く國外に輸出せり。

サラセン帝國 此時に當りて獨文化の美を以て世界に雄視したものはサラセン人なり。サラセン人の開化は特に當代に秀てたるのみならず、其餘光遠く歐洲近世の文化を裨益せり。蓋サラセン人の開化は古代希臘の開化より胚胎せりといへども、而も其有爲の腦力と勉勵とは遂に出藍の効果を收むるに至れり。而して其端はオムミア・ドの朝希臘と交渉せしより起る。此時よりして希臘の學者、技藝家は多くサラセン國に入り、古代希臘の著書は多く亞刺比亞語、シリア語及彼斯語に翻譯せられたり。バダダ・ド・タマスカス、ク・イーフ・ボカラ、サマルカンド、カイロー、コドツ、グラナダ等の市府は中世紀文化の淵藪となり、數多の高等學校、天文臺、圖書館等の設立ありて文學、神學、法學、地學、文法學、數學、天文學、化學、博物學、醫學、建築學、音樂大に發達せり。アウ・センナ (Avicenna 九百七十八年) はボカラに生れアリストートル以後の哲學大家にして又醫學に通せり。其著「カノン」(Canon) は羅句語に譯し、十五六世紀に至るまで醫學の原則として用ひられ、論理學及性理學は亞細亞文學の精粹として重んぜられたり。コトツ、のアウ・ローエス (Averroes) は十三世紀に於ける學者の泰斗にして、亦哲學、醫學に達しアリストートルを信奉せり。然れども其論據はアウ・センナと異れり。詩人にはアンタラ (Antara 七世紀) ハリーリー (Hariri 十二三世紀間の人) あり。皆

亞刺比亞人なり。彼斯人にして有名なるはフ、アードシー (Ardosia) 十一二世紀間の人、サーデ (Sardis) 十三世紀) たり。其詩歐洲各國の語に翻譯せられたり。其他醫學の生理解剖(禁制あるに) (禁制あるに) に於ける、數學の代數幾何に於ける、化學の胞合分離に於ける、建築術の亞刺比亞風に於ける、天文學の天體運動の觀察に於けるが如きは、皆中世紀の儀表とされり。又絹布武器、馬具の製造に精しく、大に基督教國の嘆賞する所とされり。

第五節 哲學科學文學技藝及產業

暗黒時代 テートン人移住後羅甸語は轉訛して「ローマンス」語となり、伊太利語、佛蘭西語及西班牙語となり、當時純然たる羅甸語を解するものは、少數の僧侶學士に過ぎず。是を以て智識の源泉は全く壅塞せられ、一般の人民は蒙昧の中に徬徨し、偶其固有の國語を以て記述せるものあるも觀るに足るべきもの鮮し。是故に俗人は勿論、僧侶僧正といへども、時としては己の姓名をも書すること能はざるものあり。學術宗教に於ては奇怪の妄想行はれ、技藝は全く沈淪し、伊太利の如きも初羅馬の遺風を繼さしか、幾何ならずして衰微し、第十世紀に至るまで一の著名なる建築物を有せぬ。夫アーヘン (即エークスラ、シ

ヘルの宮殿を建築せしときの如きも、圓柱彫刻物をラツェンナ (西羅馬の帝居)の宮殿より移したりと云ふ。農業は衰頹し、工業は起らず、商業は交通の不便と剽掠(騎士等の)の危害とによりて發達する能はず。社會の無學無識と共に道德は非常に敗壞し、人類は一般に下位に淪落せり。然れども其間亦二三の人物なきにあらず。英國のビード (Beard) アルキ・イン (Alcuin)の如きは共に博學の士にして、アルキ・インはシールメン大帝の師友たり。愛爾蘭のジョンスコラス (John Scotus) 九世紀の人、法王シルツ・スター (十世紀の人)の如きは共に原造の才に富める考察家なり。日耳曼の僧ゴットシールク (Gotschalk) 九世紀)も亦一家言を立てたり。

復興時代、哲學及學科 歐洲中世紀前半の文化は全く地に墜ち、智識は纔に僧徒の手に依りて維持せられしが、十一世紀の頃よりして漸く文學の萌芽を生ぜり。是畢竟サラセン開化の影響に外ならず。此頃より大學は諸國に興起し、パリ (最古の大學) オックス フートボローニヤ (Bologna) 伊太利等最盛にして、哲學神學等の講究勃然として起れり。此時に當りて先起りたるものを煩瑣哲學 (Scholastic Philosophy) とす。此學は宗教の學說を論據ととし、アリストートルの論法を以て多方之を辯證せんとするにあり。而して其論

する所空漠些細取るに足らざるもの多し(例へば神使は如何なる語を語せしや、一針頭に幾何の、然れども此に由りて智力を鋭敏にし、且思想を練磨し近世實學の地を爲せし功亦多し。第十三世に至りアルバート、マグナス(Albertus Magnus 日耳曼)トーマス、アクナス(Thomas Aquinas 伊太利人)ダンス、スコータス(Duns Scotus 愛爾蘭人)出つるに及びて此學大に完備し、トーマス派(Thomist)スコータス派(Scotist)分立し相辯難するに至れり。煩瑣哲學の枯燥無味なるを厭ひ、新に神秘學派(Mystic)起り、想像的感情的によりて宗教を解説せんといふ。此學派の重なるものはヘルナート(Bernard 十一世紀)ボナヴェンテラ(Bonaventura 十三世紀)なり。此際に當り又サラセン人及希臘人の感化を受け、理學及數學の學者出てたり。一をアルバート、マグナス(前出)と云ひ、一を英國の僧ローチ、ベーコン(Roger Bacon 十三世紀)と云ふ。アルバートはアリストートルの理學を修め大に得る所あり、廣く博物界の研究をなせり。ベーコンは才力アルバートの上に出て、萬般の智識を研究し、實驗學上の一新路を開き、光學及器械學に於て最其技倆を著せり。二人共に當時の怪む所となり、魔術家を以て目せられ刑に處せらるゝに至れり。其他此時代に於て化學(亞刺比亞人の傳ふる所)の鍊金術(Alchemy)は一般學者の勉むる所たりしなり。

文學 僧侶學者の高尙なる學理を講究するの際、歐洲各國の風氣も漸次進化し、自國の語を以て記述したる文學の起るを見るに至れり。而して大抵十字軍及其以後に在り。此時代の詩歌は重に騎士の勳功を詠じ、其戦闘、冒險、愛情等を以て骨子となせり。叙情詩の佛蘭西に起れるものをトルーバドール(Troubadour プロヴェンス方言)と云ひ、日耳曼に起れるものをミンネンガー(Minnesinger)と云ふ。皆一時大に流行せり。又日耳曼の叙事詩「ニベルンゲンリート(Nibelungen Lied)の如き西班牙の「シッド(Cid)篇の如きは當時の名作なり。然れども此等の詩篇は他日真正なる詩體の前驅をなしに過ぎず。十三四世紀に至りて二大詩家出てたり。一を伊太利人ダンテ(Dante 千二百六十五年生れ)となす。フロレンス市に生る。其叙事詩「ディヴィナ・コメディア(Divina Commedia)は全世界有数の傑作にして、伊太利詩語の典範となれり。一を英吉利人チーサー(Chaucer 千三百二十八年生れ)となす。英國五大詩家の一に居り、其名世に喧し。ダンテの後、詩人にはペトラーカ(Petrarca 千三百四年生る)あり、散文家にはボッカチー(Boccaccio 千三百十三年生る)あり、皆有名なり。此時代に當りて羅旬語を以て記述せる史家の重なるものは佛蘭西にはウリアムあり、日耳曼にはオットーあり、英國にはマシュー・パリ(Matthew Paris)あり、而して此間國語を以て

記せる歴史家諸國に出でたり。殊に佛人フルアサー(Froggart 千三百二十六年生る)及コミ
 ーノ(Comines 千四百四十五年生る)の如きは最有名なり。コミーンは近世史體創立者の
 一人なり。

技藝 中世紀に於ける技藝は全く宗教と關聯し、專宗教の思想を發揮することを勉め
 たり而して其最著はるもの建築術となす。他の美術は皆之に附屬せり。建築術には
 新舊の兩式あり。舊式は「ビツァンティアン」風即羅馬圓穹形にして、新式は「ゴスチック」(Gothic)
 風即尖穹形なり。「ゴスチック」風は初北部佛蘭西に起り、既にして全歐洲に流行し、第十三
 四世紀に至りて完美の域に達せり。「ゴスチック」風會堂の基礎は十字形をなし、内面は高
 大にして神威の尊嚴を示し、塔頭は高く聳へて十字の花形天を指し、以て信仰と希望の
 念を表し、窓間は尖穹にして彩色玻璃を張り、其他の各部は彫刻繪畫を以て裝飾し、美
 麗堅牢を極む。高大なる建築には往々數百年を費せしものありと云ふ。又繪畫彫刻の術
 も漸々進歩し、特に繪畫は「チ・ト」(Giotto 千二百七十六年生る)出づるに及びて實物
 の描寫を勉め、此術の一新面目を開けり。

産業 十字軍の起りしより歐洲の商業工業大に進歩し、市府の繁盛を致せしことは既

に之を説けり。爾來東洋の探見を企つるもの出てツ・ニス(Marco Polo 千
 三百二十四年死す)の如きは、其父及叔父と共に支那(元の時代)に入り、二十六年の後
 歸りて旅行記を著せり。又英人ジョン・マンデウ(John Mandeville)は東洋を遍歴し亦旅
 行記を著せり。(エドワード二世の時)然れども中世紀の商業は北海及バルティック海岸
 の地方と地中海濱の諸國とに止る。十世紀及十一世紀に於ては亞非利加海岸の諸市大
 1 榮え、西班牙に於ける亞刺比亞人も亦殖産を務めて富裕なり。十一世紀以後即十字軍
 以後殷盛となりし市府は、南方に於てはアール(Arles)マルセーユ(Marseille)チ・ノア、フロレ
 ンス、アマルフ、(Anagni)ツ・ニス等にして中部以北に於てはストラスフルク(Strasbourg)アウクス
 フルク(Augsburg)ウルム(Ulm)ラテ、スボン(Rastibon)ヴェンナ(Vienna)ニールンフルク(Nuremberg)
 等殊に繁盛し、南北の物貨を文通せり。此間又歐洲に輸入したる新工業甚多く、伊太利に
 於ては絹絲の製造大に開け、幾何ならずして南部佛蘭西及西班牙地方に廣布せり。英吉
 利に於ては十一世紀の中葉より十三世紀の中葉に至るまで、羊毛の輸出大に行はれ、エド
 ウ・ート三世(商業の父)の時華麗なる毛布の製造起り、國益富盛に赴けり。此の如く商工
 業の盛大に赴くに從ひ金融の事業起り、遂に中世紀の終に至りて伊太利の市府に銀行

の設立を見るに至れり。

滋賀縣立図書館
蔵書印

第三編 近世史

總論

中世史と近世史との境界

吾人は既に中世史を經過し、將に近世史の域に入らんとす。中世史と近世史との間には、彼上世史と中世史との間に横れるか如き大段落あるなく、其限界甚漠然たり。然れども連綿たる時流の中、必事物の興廢大勢の變遷ありて、之が畛域をなすなくんばならず。故に讀者は近世史を讀みて當に中世史と大に其觀を異はせるを見るべし。而して其差違の由て起りたるは實に十五世紀の後半にあり。蓋此時代は諸種の發明發見及學術の復興等ありて近世紀人文發達の大原動力となり、以て近世史の前驅を爲したれなり。而して其原動力の起點は十五世紀の中葉にあれば、吾人は假りにコンスタンティノープルの滅落(千四百五十三年)を以て兩世史間の境界となせり。然れども是唯便宜上時勢變遷の目標となしよに過ぎず。敢て兩世史の境界を以てコンスタンティノープルの滅落に存すとすにあらざるなり。

近世史の大勢

中世史の末より封建の制漸々破壊し、集權の大王國續々其間に起り、

小國は次第に大國に結合するの傾向あり、而して近世紀に至り、政治上の大動力となりて史上を聯貫する所のものは、實に國力の均衡なり。是蓋各國相對峙して其勢力を擴張するの時に當りては必然起るべきの數なればなり。而して各國相互の關係は夫支那戰國の時代に於けるが如く、或は連衡し或は合縱し、以て強を抑へ弱を扶け、己を持し他を妨ぐることに汲々たり。近世各國の爭亂皆職として之に基因せしんはあらず。然り而して近世紀に至りては國家的思想漸く發達して人民結合の力強盛となり。政教の分離と共に政治の基礎亦堅固に趨き、實業の精神大に振起し。學術技藝は駁々として日に進歩し、以て今日の昌盛殷富を致せり。翻りて一方を見れば、通商貿易の進歩するに従ひ、從來歐洲人に知られざりし東洋開化國との交通も開け、東西洋の人民相合して一團となり、茲に始めて眞誠世界史の興起を促すに至れり。

第一期 (コンスタンティノープルの滅亡よりウエストフ
アリアの條約に至る)

第一章 近世史の前驅

第一節 發明及發見

火藥 十四世紀并に十五世紀に至りては、諸種の發明ありて中世紀の状態を一變し、近世紀開明の啓行をなしたるもの甚多し。就中重要なるものを火藥、羅針盤及印刷術の發明となす。火藥はアレキサンダー大王の時既に支那印度及亞刺比亞人中に使用せるものあるを見れば、フライブルグ (Freiburg) の僧シ・ワルツ (Schwartz) の發明にあらざるや知るべし。然れども其實地砲火に應用するに至りしは、十四世紀の中葉にありしこと疑なし。此發明は軍制に大變動を起せり。即兵士の力均一となり、匹夫の強勇施すに所なく、敗徳の騎士は其顔色を失ひ、熟練の常備兵之に代り、従ふて封建制度の顛覆を見るに至れり。

羅針盤 羅針盤は十四世紀の初に當りて、伊太利アマルフ、地方のフレゲ、オチ、イヤ (Ugo di Giouin) の發明せし所なりといふといへども、其時より二百年以前既に歐洲にありて粗糲なる羅針を用ひたり。又支那に於ても既に上古其製作ありしか如し。然れども之を航海の實用に供せしはチ、イヤなり。是よりして航海の術大に進歩し、從來の如き地中海の小區域を越え、遂に大洋に出て數多の遠征發見をなすに至れり。

印刷術 印刷は初木版を用ひしか其術次第に進歩し、遂に鑄物を以て鑄造せる活字を發明するに至れり、其發明者はメンツに生れ、而して永くストラスアルグに住せしグーテンベルグ(Gutenberg)なり、グーテンベルグはフウスト(Fust)の助力を得又敏捷なる技手シニョフル(Schoeffer)と結び、遂に千四百五十六年に至り完全なる羅匈聖書を出版せり、これより書籍は復富裕者の専有ならずして、廉價を以て多數の讀者に配布することを得、人智日に開進せり。

發見 十五世紀前半紀の世界として知られたるは歐羅巴と西南亞細亞并に北方亞非利加の一部分のみにして、東洋の豊富なる産物は僅にアレキサンドリア及ヴニスを歴て西洋に入るのみなりき、彼亞非利加西海岸のケーフノン(Cape Non 不能岬)の如きは、當時是より以往進行すべからざるを信じて此稱を與へしなり、然れども羅針盤の發明と共に航海の術進歩せしより、大に新世界を發見し、商業上地理上及一般人智の上に大影響を及ぼすに至れり、而して其遠航に従事せしものは葡萄牙人西班牙人を最となす。

葡萄牙人の航海 葡萄牙の王子ヘンリー航海の業を奨励しセーグレス(Segres)港に觀象臺を起し、四方より天文航海の學士を招致し、大に其道を講究せり、蓋ヘンリーの素志は

亞非利加を廻航し、直に東印度と貿易を開かんしに在り、此時葡萄牙人は始めてノンの岬を過ぎ、ボジンドー(Boujador)港を廻り遂に熱帶地方に入り、亞非利加西海岸諸嶋を發見せり、千四百六十三年ヘンリー死するに及び、此業一時稍廢弛に歸せしが後ジニ二世(千四百八十一年)位に即き、又大に之を奨励せしを以て葡萄牙人再起て航海に従事し、益南進してグニア(Guinea)に至り、海岸に植民地を設けて貿易を開けり、是に於て又印度に到るの難からざるを知り、又復南に進んで千四百八十六年葡萄牙人バース・ロミータイアス(Baltholomeu Diaz)遂に亞非利加の南端カボ・トメントソ(Cabo Tormentoso)岬に達せり、王ジニ此岬を名つけて喜望岬(Cape of Good Hope)とし、其後エマニエル(Manuel)大王の時バスコ・タガマ(Basco da Gama)がスへるもの遂に亞非利加の東岸より印度洋を横絶し、マラバール(Malabar)のカリカト(Calicut)港に入り(千四百九十八年)印度の産物を載せて歸れり、是に於て葡萄牙人マラバールに植民し直に船路を歐洲に取りて、東洋の産物を貿易せり、是よりヴニス衰へリスボン繁榮に趣けり。

コルムフス、亞米利加發見 葡萄牙人の銳意して航海發見に従事せるの間、チノアの人クリストフ・コルムフス(Christopher Columbus)も亦大西洋を横絶して印度に至るの新航

路を發見せんとの大願を起せり。コルムブスは千四百五十六年伊太利バツィア大學に入り、
 數學天文學を研究し後リスボンに住居し、航海者となりて諸方に航せり。葡萄牙人の亞非
 利加を廻航して印度に至るの航路を求むるに當りて、コルムブスは地球圓體の理を應用
 し、直に西方に航して以て印度に達せんとし、(既に第二編第八章第五節に於て記載したるが如く、
 伊太利人マリーコー、ホロー支那より還り旅行記を著し、支那の東方に日本國ありて、金銀財寶に富めることを記述せしを以て、大に航海者の熱情を動し、コルムブスの如きも日本に至らんことを希望したりと云ふ、)補助を葡萄牙王ジエン二
 世及英吉利王ヘンリー七世に求む。皆成らず。遂にカステイルの女王イサベラ(即西班牙王
 后)の援くる所となり、大西洋水師提督、新發見國副王の位を得て、千四百九十二年八月
 三日船三艘を率ゐてパロス(Palos)港を發し、印度に達せしめて却て亞米利加を發見する
 に至れり。然れどもコルムブスは新世界を以て亞細亞の一部分なりと固信せりと云ふ。其
 後第四回航海の後千五百〇六年に死せり。

其他の諸發見　コルムブス一たび亞米利加を發見してより新地發見の企業心、西班牙
 葡萄牙の人民中に勃興し、ザニス人 ジョン・カボット (John Cabot) は英國の國旗を船頭に掲
 げ亞米利加の東岸を探見し、ラフラドル (Labrador) の海岸に達し凡九百哩南下せしこと
 あり(千四百九十七年)。其後幾年ならずしてフローレンス人 アメリゴ・ヴェスプチ (Amerigo Vesputci) 南

亞米利加の海岸を探見し紀行を著せり。是より新大陸は始めて亞米利加(America)の稱
 を得たり。葡萄牙人カブラル (Cabral) は印度航行の途中ブラジル (Brazil) の海岸に漂着し、之
 を取りて葡萄牙の領地となせり(千五百一三年)。西班牙人バルボア (Balboa) 始めて
パナマ (Panama) の地頭(地頭)に達し、高所より太平洋を望みしと云ふ。千五百二十年葡萄牙人マチ
 ラン (Magellan) 亞米利加の南端(即マチランの海峡)より太平洋(マチランの名くる所なり)を横絶し、印
 度を経てフィリピン (Philippine) 群嶋に達し、土人の爲に殺されしか、其船遂に地球を一周
 して還れり。其後西班牙人は墨西哥(Mexico)を取り、次でペルー (Peru)を取りて其屬國とな
 せり。

墨西哥西及ペルーの征服　千五百十九年西班牙人ハーナンド・コルテス (Hernando Cortes)
 墨西哥を發見せり。當時墨西哥は既に開化して一國民を爲し、王ありて之を治む。王モン
 テズマ (Montezuma) 西班牙人を拒む。コルテス勇卒七百人を以て之と戦ひ、遂に其王國を滅し
 西班牙の屬地と爲し、又カリフォルニア (California) 半嶋を發見せり。其後ピツォーロ (Pizarro) 及
アルマグロ (Almagro) の二人又黄金に富めるペルーを發見し、其内亂に乗じて之を征服せり。
 是より西班牙は墨西哥及ペルーの二國を領し、國富歐洲に冠たるに至れり。

第二節 學藝の復興

學術 發明及海上發見の時代は、又學術復興の時代なり。而して學術復興の中心は伊太利にありて、次第に西部歐羅巴に波及せり。初は羅甸の言語及文學を採用せしのみなりしが、コンスタンティノープルの滅落するや、學識ある希臘人希臘古典の書を抱き、遁れて伊太利に入るもの多く、爾來學者は希臘の貴重なる記録を講究することを得るに至れり。而して伊太利諸侯は皆競ふて學術を奨励し、フローレンス市のメディチの如きは圖書館并に「プラトニク」學舎を設立し、マーシリアス、フ、シナス (Marcilius Ficinus) はプラトの全書を翻譯し、又數多の辭書文典編纂せられ、古典の學益、平易に趣けり。而して此等は印刷術の媒介により、忽諸國に普及するに至れり。是に於てか新學風の教養諸國に勃興し、殊に日耳曼の如きは新學派大に起りて、舊來の教育基礎を神學に置きたる道義派と相争へり。新學派を「ヒューマニスト」 (Humanist) とし、舊學派を「オフスキ」「ランテ」「スト」 (Obscurantist) と稱す。「ヒューマニスト」の著名なるものをジン、ロイクリ、ハ John (Reuchlin 千四百五十五年生れ、千五百二十二年歿す) ウ ルリ、ヒ、フ、ン、フ、テ、ハ (Ulrich von Hutten 千五百二十一年歿す) デ、ン、テ、リ、ア、ス、エ、ラ、ス、マ、ス (Desiderius Erasmus

千四百五十七年生れ、千五百三十六年歿す) となす。是より學術は宗教の束縛を脱し自由の發達をなすに至れり。技藝の復興 此時代は又技藝の始めて旭光を放てる新時期なり。建築繪畫は宗教的縛束を脱し、殊に繪畫は其發達頗較著なりき。有名なるミカエル、アンヂ、ロ (Michael Angelo) 及 ラフ、エル (Raphael) の如きも亦此時に出で、大に技藝上の面目を一新せり。

第二章 宗教改革時代

第一節 宗教改革及チヤール五世

概説 近世史の前驅をなしたる發明、發見及學術の復興は一般人民の思想上に大變動を起したり。而して吾人は先、宗教改革に於て之を見る。抑十六世紀の初に當りては西歐羅巴諸國皆同一教會の下にありて、法王之か首長たり。而るに教法漸く悖亂に趨き、僧正の如きは外儀表を飾りて内義務を盡さず、蠢々たる多數の僧侶は皆無學にして怠惰なり。然れども其弊源は由て來る所遠し。夫、アルビチ、ン、セ、ス 派 (Albigensar 十二世紀に佛國の南部に起りし一宗派にして法王の權及教會の儀式を不法と認めたるものなり) 起り又 ウ、イ、ク、リ、フ (十四世紀、英吉利人) 出で、ハ、ツ、ス (十五世紀、日耳曼人) 出で、大に改革論を唱導せしを見て、亦以て中世紀後半期以後宗教上の不平時々勃發せしを證するに足

るべし。而して十六世紀に入るや宗教論又大に激發し、一方に於ては羅馬法王の政治上に干涉するの非なるを論じ、他方に於ては教會の教理式禮皆聖書の旨趣に悖畔せることを議し、遂に宗教の改革を促すに至れり。

發端 此時に當りてレオ十世法王の位に登り、教會府庫の空乏を補はんと欲し、百方正の手段を以て財貨を日耳曼に徴して、之を羅馬に納れ、猶足らずして遂に贖罪狀と稱するものを發して賣買に附し、ドミニカン(Dominican)派の僧侶ツェル(Tetzl)をして之を執行せしむ。事甚非理なり。是に於てか改革論始めて日耳曼に起る。ウイッテンベルグ(Wittenberg)大學の教授マルティン・ルーテル(Martin Luther)實に之か首唱者なり。

マルティン・ルーテル ルーテルは礦夫の子にして千四百八十三年アイスレーベン(Eisleben)に生る。長じてオーガステ・ニアン派の僧となりサクソニーの撰舉侯フレデリック(賢王)の爲に聘せられ、ウイッテンベルグ大學神學の教授となり、且說教師となれり。時にツェルの贖罪狀を賣るを見、蹶起之に抗し、遂に千五百十七年贖罪狀を賣るの大に非理なるを論じて、意見九十五條を擧げ、ウイッテンベルグなる教會の門戸に帖し、廣く之を公衆及學士に訴へたり。此書忽四方に傳播して學者間の一大問題となれり。而して日耳曼の諸侯中には

ルーテルの説に賛するもの尠からず。是蓋自國の財寶を羅馬に吸收せらるゝを恐れてなり。其初に當りては法王ルーテル等の抗論を以て毫も意となさず、以爲く是唯オーガステ・ニアン派とドミニカン派との爭論のみと。而るにルーテルはライフシク(Luther)の公會議論に於て明に法王背反の理を決論せり。是に於て法王はルーテルの主旨を以て異端邪説となし之を破門せり。ルーテル破門の證を援りて公然之を燒棄し、益、法王に抗せり(千五百二十年)時にルーテルに與するもの益、多く、就中ウイッテンベルグ大學希臘語の教授たるフィリップ・メランクトン(Philip Melancthon)の如きは大にルーテルを援けたり。今や兩派の爭其極に達し、諸侯と僧正との争となれり。帝マキシミアン嘗てサクソニー侯フレデリックに謂て曰く善くウイッテンベルグの僧(ルーテル)を護せよ、他日必須つことあらんと、既にして帝は又次第に法王に傾くに至れり。

チーレス五世の即位 マキシミアン歿して(千五百十九年)二人の帝位競争者出てたり。佛王フランシス(Francis)一世及西班牙王チーレス(マキシミアンの孫)是なり。チーレス遂に撰はれ西班牙王ドン・カロス(Don Carlos)一世の稱を改め、帝チーレス五世と稱す(千五百二十年)是に於てチーレスの領地非常に廣大となり、奧太利、チーランド、カステール、アラゴン、ナヴァール、

イブス、シ、リー及亞米利加の西班牙領皆其手中に歸し、神聖羅馬帝國の總督となれり。帝
 チャーレス智略あり、然れども西班牙の教育を受けて成長せしを以て深く羅馬教に執着
 し、其帝たるの職として教會を保護せんことを誓へり、又帝は政治を以て最上の事業と
 なし、中心を伊太利に置きて、以て佛王フランシス一世と争へり。
ウオームスの大會 新教の勢日に熾なるを以て、法王甚之を憂へ、チャーレス五世の位に
 即くに及びて、帝に乞ふて之を處理せんとす。是に於てチャーレス始めて日耳曼に至り、ウ
 オームスに大會を開き(千五百二
 十一年)ルーテルを召し僧正朝官の前に於て、命するに其持説を讖す
 を以てす。ルーテル固く持して命を奉せず、然れども帝は猶力を盡して異端者を撲滅せん
 とを誓ひしがフランシス一世と事を生ずるに及び、數年の間之に關與するを得ざりき。
チャーレスとフランシス一世 帝既に廣大の版圖を管轄して勢甚大なりしが、佛王フラ
 ンシス一世ありて之と抗争せり。フランシス始帝位を望んで成らざりしを以て、常にチャーレ
 スを妨げんとす。是に於てか兩國の勢氷炭相容れず、以て歐洲の平原に血を雨らすに至
 る。抑佛王がチャーレスと相争ふに當りて、其常に疾呼せし所の旨趣は、國力の權衡を保た
 んとするにありたりき。

マドリッド條約 千五百十五年佛人ミランを占領せしが、既にして日耳曼兵の破る所と
 なり、アルプス山を越えて軍を退く、是に於て北部伊太利チャーレスの手中に落つ(千五百二
 十二年)。
 日耳曼の兵進んで南部佛蘭西に侵入せしが、勇敢なる市民の防禦に遭ひて退けり、千五
 百二十四年冬フランシス一世自精兵を率る伊太利に入り再ミランを取る。然れどもバツ、
 アの戦に於て佛軍遂に大敗してフランシス虜となり(千五百二
 十五年)マドリッド(Madrid)に在ること
 一年、終にマドリッドの條約を結び佛王はミランの要求を廢し、バーガンティトを放棄し、且二
 子を質とすることを約して事平ぐを得たり。

改革の進歩 ルーテルサクソニー侯フレデリックの保護を受け、暫時争亂をウルトアルク(Ulrich
 burg)の城砦に避けて聖書の翻譯に従事したりしが、改革の事業大に進歩し、國內有力の
 諸侯ルーテルの説を奉するもの頗多し、ルーテル又僧侶の結婚を許し、自尼僧キス、リン、フ
 ンボル(Chalharine von Bora)と婚せり、是時ライン、スウェービア地方の農民、トーマス、ミンツル
 (Thomas Munzer)の挑撥する所となり、宗教上の自由を誤解し且地主の抑壓を脱せんと欲
 して大に蜂起し、數多の寺院城砦を破壊焚燒し、勢一時猖獗なりしが、遂に鎮壓せられた
 り(千五百二
 十五年)。然れども新教は忽にして其版圖を擴張し、北方日耳曼、佛蘭西、瑞西、英蘭、蘇

格蘭丁抹、那威、瑞典等に蔓延せり。要するにテ・ートニク人種は概新教義を奉じ、羅匈人種は熱心に舊來の信仰を持續せり。

プロテスタント及オクスフルクの國會 新教の勢力は日に駸々として盛なるを以て、千五百二十九年反對派の諸侯僧正はスバイアス(の二三)に會議を開き、宗教の改革及新教の傳播を禁せり。而るに新教を奉ずる日耳曼の諸侯及市府は皆大に之に抗論せり。是よりして改革派は「プロテスタント」(Protestant)の稱を得たり。蓋抗論者の意なり。其翌年春チャーレス帝オクスフルクに盛大なる國會を開く。時に「プロテスタント」派はメランクトンの編纂せる信仰書(日耳曼及羅匈の兩語を以て記述せり)を呈出せり。然れども國會は新教禁制の決議をなせしを以て、新教派の諸侯、市府はスマルカルヂ、ク(Smalcaldic)同盟を組織し以て相救援せり。佛蘭西丁抹は共に新教徒を援く。時に土耳其人侵入して將にヴィンナに迫らんとす。是に於てかチ、ーレス遂にニ、ーレムベルク(Nuremberg)の平和を結び(千五百三十二年)。宗教の事一に各人の自由に任せ、兩派相合して基督教國の敵に當れり。

カムフレ一の條約 フランシスマドリドの條約を爲せしも、固より之に従はんどの意にあらざりしを以て、其國に還るや又法王、英王ヘンリー八世及二三の伊太利諸侯と聯合し

て、以て伊太利の自主を謀る。是に於て戰端復開く(千五百二十七年より千五百二十九年まで)。日耳曼の兵フルボム(Bourbon)の兵と合し、伊太利に入り羅馬を陥れ鹵掠を恣にせり。此間佛軍は上伊太利を略し進んでチーフルスに入り之を略奪せんとす。然れども疾疫の爲に軍勢大に衰へ、遂にカムフレ一(Cambrai)の和を講じ、佛國は伊太利の要求を廢し、且二百萬「クラオン」を出し其二子を購ひ、而してバーガンディを領することを得たり。其翌年(千五百三十二年)チャーレスは法王より帝冠を受く。是を法王授冠の最終とす。

土耳其人との戦争 是時土耳其の「サルタン」ソリマン(Solyman)二世ローデス島を占領し、埃及を征服し、匈牙利を過ぎ、ヴィンナ(Vienna)に迫れり(千五百二十年)。チャーレスは新教徒と和む之を防ぎて國外に驅逐せり。而して帝は土耳其人の勢力を殺かんと欲し、地中海を渡り亞非利加の北岸テニスに上陸し、「サルタン」の將バーバロサを破り、バーバロサの爲に虜にせられたる基督教徒一萬人を放釋せり(千五百三十五年)。其後チャーレスは再艦隊を遣り、亞非利加に航しアルギールス(Algiers)の海賊を勦滅せんとし、が暴風雨の爲めに船艦を破壊せられて其効なかりき(千五百四十一年)。

クレスピ一の條約 カムフレ一の條約後未幾年ならず、フランシスは復ミランを得んことを

要求し、土耳其人と同盟せり。是に於てチ、ーレス亞非利加を征せり。佛國との戦争は三年（千五百三十五年より千五百三十八年まで）に涉り、法王の中裁によりて十年間の平和を約せり。然れども帝の亞非利加第二征戦の効なきに及び、フランシス復ミランを要求し、土耳其人と連合せり（千五百四十二年）。土耳其人匈牙利に侵入し、西班牙伊太利の沿岸を抄掠す。フランシスは帝とセリーレス（Cesars）に戦ひ之に勝ちしといへども、帝は英王ヘンリーと結ひて佛國に侵入せしを以て、フランシス遂に和を乞ひ、以來フランシスは伊太利を、チ、ーレスはバーガンデーを抛棄することを約せり。之をウレスビー（Orsay）の條約と云ふ。實に千五百四十四年なり。此に於て凡二十五間に涉れる兩雄の争亂全く其局を結び、後二年を経て佛王英王相繼きて歿せり。スマルカルドの戦争 帝チ、ーレスフランシスとウレスビーの平和條約を結ひしより、復新教徒を壓服せんとし、千五百四十五年トレント（Trent）に宗教會議を開きしが、新教徒は一人の之に參するものなかりき。是に於て帝はスマルカルデ、ク同盟の首領たるサクソニーの撰舉侯ジョン・フレデリック及ヘ、セ（Hesse）伯フィリップに放逐の命を下せり。是に於て内亂復破裂せり（千五百四十六年）。ルーテルは戦端の未發せざるに先ち、千五百四十六年二月十八日を以て没せり。然るに此時サクソニー公モーリス（Maurice）新教徒の同盟を脱して帝と相結托せしを

以て、新教同盟終に瓦解せり。帝チ、ーレス勢に乗じ南方日耳曼に於ける新教徒の市府を從へ、モーリスと共にフレデリックを攻め、千五百四十七年ミールベルグ（Mülhausen）の戦に勝て之を虜にせり。次てフリッポも亦降れり。是に於て帝全く勝利を得、フランシスの劍ルーテルの筆、唯地下に鳴るあるも、帝心驕り殘忍至らざるなし。舊教徒も亦帝を惡むに至る。
新教徒の勝利 モーリスは帝を援けて大功ありしを以て、撰舉侯の位とフレデリックの故領とを得たり。然れども心中新教に歸向せるを以て漸く帝の心事に服せず。遂に佛王ヘンリー二世（フランシスの子）と結んで帝に反す。帝出奔し遂にパッソー（Passau）の條約を結んで新教徒の自由を許し、繫囚せる諸侯を解放せり（千五百五十二年）。後又二年を経て千五百五十五年に至り、オーグスブルグの會議に於て新教徒は信仰の自由を得、且舊教徒と共に政治上同等の權利を得るに至れり。

チ、ーレスの晩年 帝の好敵手フランシスは既に歿せりと雖、其子ヘンリー二世猶父の志を繼ぎてチ、ーレスに抗せり。法王も亦帝のオーグスブルグの會議に於て信仰の自由を許せしを憤りて、奧太利家を敵視し、佛王と密に結托するに至る。是に於て帝は決然帝冠を去り、位を弟フ、ーデー、ナンドに與へ（千五百五十六年）西班牙及シ、リー王國及子サーランドを其子フ、ー

フニ世に與へ、而して自、西西班牙のサン、ユースター(San Yuste)の寺院に退居して餘生を送り、千五百五十八年に至りて歿せり。

第二節 瑞西、丁抹及瑞典に於ける宗教改革

瑞西 瑞西に於ける新教の首唱者はウルリッヒ・ツウ・ングリー(Ulrich Zwingli)なり。千四百八十四年に生れ、ツインナ及パーセル(Emmen)に於て、「ヒーマニスト」の學を修め、希臘語の聖書を讀めり。チーリッヒ(Nurich)に於て始めて牧師となり、千五百十八年大に贖罪狀賣買の非理なることを論せり。ツウ・ングリーは資性慧篤にして學識高く、雄辨能く人をして奮起せしむ。ツウ・ングリー、瑞西人の備兵として諸外國に出づるもの多きを憂ひ、宗教と共に政治上の改革を爲さんと欲し、千五百二十四年斷然新教徒となれり。チーリッヒ、ベルン(Bern)、アサエル(Basel)の諸州皆之に化せり。ツウ・ングリーの目的は數小州を聯合して、共和政を施行せんとするにあり、然れども五箇の山州は權力の己に歸せざるを惡みて舊教に荷擔し、遂に市府と山州との間に争亂を醸し、山州は奧太利のフリーデ、ナンドと同盟し、市府は日耳曼諸侯の援を得んとす。千五百二十九年一時和成りしが、幾何ならずして破裂し、千五百

三十一年カ、ヘル(Cappel)の役、新教徒の軍破れてツウ・ングリー之に死す、同年同月和議復成り、以後兩々相對峙せり。

丁抹 丁抹はオルデンブルクのクリステ、アン一世(千四百四十八年より千四百八十八年まで)位に登り、ホルスタイン及シ、レスウ、ヒの二公國を合せたり、其孫クリステ、アン二世(千五百十五年より千五百二十三年まで)立つに及びて、フレデリック一世兩公國を管轄せり(フレデリック一世は後クリステ、アン二世に次て王位に登る)、クリステ、アン二世

貴族の權力を殺かんと欲し、先政略上新教を容れ、而して瑞典を臣屬せしめ、次で丁抹の貴族を壓せんとす、瑞典にありては貴族政治の實權を握り政機はステューアス(Sture)の手中にあり、ステューアスは他の貴族僧侶と好らずして人民と好し、クリステ、アン之を機とし、日耳曼、佛蘭西の援を得てストックホルム(Stockholm)を取らんと欲し、殘暴(所謂ストックホルムの殺戮)を爲したるを以て、大に瑞典人の反動を來せり、丁抹の貴族も其殘酷なる手中に落ちんことを恐れ、革命の争亂を起せり、クリステ、アン王位を退き、千五百二十三年シ、レスウ、ヒ公フレデリック位を繼ぐ、フレデリックは敢て新教に荷擔せず、又舊教をも排斥せず、然れども

熱心なるルーテル派なりしを以て、新教忽國內に蔓延せり、千五百二十七年オーテンス(Ottens)に國會を開き、自由を新教徒に許したり、千五百三十三年フレデリック歿し、クリステ、アン

三世代り立ち、千五百二十六年コペンハーゲン(Copenhagen)の國會に於て、新教の教理に従ひ教會僧官の組織を整備せり。

瑞典 ストクホルムの殺戮後、瑞典人は丁抹人を憎むこと益甚し。是よりして國內に政治宗教の革命起り、其動變の骨子たるものは貴族ガスタヴ・ス・ウ・サ(Gustavus Vasa)にして、瑞典の真正なる王政の創立者たり(千五百二十三年)。王は沈勇にして智辨あり、心を「ルーテル派」に傾けしといへども、而も宗教上の混亂に干與することを欲せざりき。然れども其政事に於ては專、貴族僧侶を壓して強盛なる王政を建設せんことを勉め、遂に全く之を服従せしめ、又商業を盛にせり。當時ルーテルの教義は殆ど全國に蔓延するに至れり。以上説述せし所は「テニートニ」ク族の諸國に於ける新教擴布の概略なり。若夫英國に於ける状態は、後節英吉利の條下に記せん。

第三節　　子ズアーランドの獨立戰爭

フィリップ二世 日耳曼帝チャールス五世位を退き、西班牙及ネーブルス王國を以て其子フィリップ二世(千五百五十六年より千五百九十八年まで)に與ふ。子ザーランド亦其中にあり(子ザーランドとは低國の謂にして現今の荷蘭及ベルチ

アム地方の) フィリップは父に比して一層純然たる西班牙人にして、亦舊教を信仰し殆ど狂するに至る。然れども性深沈にして思慮あり、且能く事に耐ゆ。新教の漸く子ザーランドに蔓延するに及び、遂に西班牙と分離するに至らんことを恐れ、頻に之を撲滅せんことを謀れり。

子ザーランドの状態 子ザーランド人民は勤勉能く業を勵み、有爲の精神に富み、又大に自由を愛す。十七州皆各憲法を設け、北部諸州に於ては殊に共和政に傾けり(フランダースアラバント(Braabant)に於ては貴族的臭味あり)。人口三百萬を有し、アントウールフ(Antwerp)の如きは人口十萬の一小市に過ぎずといへども、其商業の盛なること歐洲中他に比を見ざる所なり。故を以てフィリップの時代に至りては、子ザーランドは實に西班牙領中最豊富の地たり。是より先、宗教改革の起るや子ザーランド人皆奮ひて新教を奉ず。是を以てチャールス五世は多數の子ザーランド人を殘殺したりしが、遂にオーグスタルクの大會以後之か信仰の自由を許したりき。爭亂の破裂 フィリップは敢て子ザーランド貴族會議の意見に従はず。專斷の政を行はんと決心し、千五百五十九年其義妹バーマのマーガレット(Margaret)を以て子ザーランドの大守となし、大僧正グランヴェル(Grinvello)をして之を佐けしめ、西班牙の鎮兵を置きて之を守る。

而して宗教檢按法を設けグラヴツルを以て檢按長となし、以て新教を撲滅せんことを、是に於て子ズ、アイルランド人大に激昂し、オレンチャー侯ナ、ソーのウリアム、エグモント(Egmont)伯及ホールン(Horn)等の貴族主として宗教檢按法に反對し、且古來の制度を恢復せんことを主張せり、而して亂民は偶像撲滅と稱し、四日間にして四百有餘の會堂を破壊し、狼籍を極めたりき、フリップ大に怒り千五百六十七年猛將アルヴ、(Alva)公を遣し、マーガレットに代り兵力を以て之を鎮壓せしむ。

アルヴの暴政 アルヴ勇敢にして殘忍暴斂殺戮を姿にし、一議會を設けて流血議會(Council of Blood)と稱し、六年間にして子ザイランド人を殺すこと八萬人、全國民に死刑の宣告を與へたり、エグモントホールン亦之に死す、ウリアムは日耳曼に遁れて兵力を集む、是に於てか四十年の爭亂起る。

戰亂の期 アルヴの政殘虐を極めしを以て和蘭及チーランド(Zeeland)先鋒起し、ウリアムを推して盟主となし、フリエル(Briel)府を略奪し其勢甚猖獗なり、アルヴ遂に之を鎮壓すること能はず、本國に召還せらる(千五百七十二年)、レク、センス(Regens)アルヴの後を受け、來りてライデン(Leyden)府を圍む(千五百七十四年)、ウリアム最後の 一策を案じ、堤防を決して海水を

導き、以て西班牙人を破れり(後之が紀念としてライデンに大學を設く)、西班牙人は一時其勇氣を失ひしといへども、子ズ、アイルランド人の力未以て之と對峙するを得ず、是を以て國を捧げて英吉利女王エリツベスの援を請ふ、然れども成らず、偶ウ、センス叛者の爲に殺さる(千五百七十六年)、是に於てか子ズ、アイルランド諸州の人民ゲント(Ghent)同盟を組織し、ウリアムを以て盟主となせり、千五百七十八年、バーマのアレキサンダー(マーガレットの子)子ズ、アイルランドの太守となり、南方子ズ、アイルランドを征服し、カトリック教を信奉せしむ、然れども千五百七十九年北部七州はウトレヒト(Utrecht)同盟を組織し、ウリアムを推して盟主となす、是和蘭共和國の起原なり、是に於てフリップ大にウリアムを惡み、賞金を懸けて其首を購ふ、ウリアム遂に害せらる(千五百八十四年)、荷蘭人其報に接し、童幼に至るまで皆爲に涙を揮ふ、ウリアム死して第二子モーリス其後を承く、年僅に十七、異才あり、曾て西班牙人と南部諸州に戦ひ大に勇名を著はせり、時に西班牙の將バーマ公アントウルフ府を陥る、然れども英王エリツベスの援兵を得て國力又盛となれり。

荷蘭の獨立 其後十數年の間爭亂猶已まざりしが、荷蘭人少も屈するの色なし、是に於て西班牙は荷蘭の獨立を許さざるを得ざるに至り、英佛兩國又其間に斡旋する所あ

り遂に千六百〇九年に至り十年の休戦を約し、後千六百四十八年ウエストファリア(Westphalia)の條約に於て公然荷蘭共和國の獨立を許可せり(南部諸州即ベルギーアム地 方は猶西班牙の領土たり)是より荷蘭は國勢衰々として進み、航海並に商業を以て世界に雄飛するに至る。

第四節 佛國政教上の争亂

チャールス八世及ルイ十二世 佛國政教上の争亂を叙するに先ち、中世紀後の關係を明にせんか爲にチャールス八世以下の諸王を記せん。ルイ十一世の後を承けてチャールス八世(千四百八十三年より千四百九十八年まで)位に即く、チャールスはアレキサンダー、シ、レメーンを夢みてチーブルス王國に對して己の要求を果さんと欲す。ミラン、フローレンス羅馬の諸市皆風を望んで降り、王遂にチーブルスに入る。是に於て近世史上最初の同盟成る。ミラン市、ヴェニス市並に法王、日耳曼帝マキシミアン、西班牙王フ、デー、ナンド相合してチャールスを逐はんとす。チャールス大に畏れ兵を退け本國に歸る。後ルイ十二世(千四百九十八年より千五百十五年まで)立ち又チャールスの志を繼ぎ、再アルプス山を越え伊太利に入る。ミラン市忽其手中に落たり。是に於て西班牙王フ、デー、ナンドと共にチーブルスを分奪せんことを約せしが、事破れて西班牙の將コンサルヴ

オー(Consalvo)に破られて歸る。

三大同盟

ルイ後カムフレール同盟(フ、デー、ナンド、マキシミアン、及法王チャールス二世)に加

入してヴェニス市に敵す。ヴェニス將に落滅せんとするの時に當り、同盟間に猜忌の心を生じ、法王チャールス不意に神聖同盟(マキシミアン帝、フ、デー、ナンド王、ヴェニス市、瑞西)を組織して佛人を伊太利より逐はんとす。然れどもルイ、ヴェニスと同盟して再ミランに當る。是に於て、又マリチス(Malinco)同盟(フ、デー、ナンド、マキシミアン、英王ヘンリー八世及法王レオ十世)成り、ヘンリー八世佛國に侵入す。ルイ四方より攻撃せられて平和を冀ふに至れり。フランシス一世 フランシス(千五百十五年より千五百四十七年まで)又伊太利征服の念を起し、軍を率ゐてアルプスの嶮を越え、俄に瑞西を襲ひマリグナ(Maligna)の戰に於て大勝を得、ミラン及び岨らすし而降る。瑞西は遂に佛國と永久平和の條約を結べり。千五百十九年日耳曼帝マキシミアンの殂するや、フランシス其後を繼かんと欲して、西班牙王チャールスと競へり。西班牙王遂に勝利を得て帝チャールス五世となり、日耳曼西班牙の諸邦即神聖羅馬帝國の範圍を有して勢甚強大なり。フランシス國力の權衡を維持せんことを唱へ、屢、チャールス五世と戰へり。

(チャールス五世の條下を參看せよ)然れども遂に志を得ずして歿し、子ヘンリー二世立つ。

カルツ、ン教 新教唱導者の中に在りてルーテルに次きて有名なるはジ、ン・カルツ、ン(Jo. Calvin)なり。カルツ、ンは千五百〇九年佛國に生る。カルツ、ン人と爲り嚴正にして傳才あり。初バりに在りて僧侶の教育を受けしが、父之を法官となさんとするに當りて、又法學を研究せり。年猶弱冠にして「基督の教理」と題する一書を著はし、精密に新教を解釋せり。然れども其新教を篤信せるが爲に、パリに容れられずして伊太利に遁れ、チ、ネヅヅに棲息せり。カルツ、ンの教理は舊教と相違せること「ルーテル教より一層大なるものあり」フランシス一世の時始めて世に知られ、貴族にしてカルツ、ンの教理を信するもの甚多し。之を「ヒ、ーグ、ノ、ト」(Huguenot)教徒と稱す。佛國に於てはフランシス一世より以下ヘンリー二世及フランシス二世相繼きて之を虐待せり。(フランシス一世の日耳曼新教徒を援けしは、チ、ーレス五世に對する一時の政略に出でしなり)是より佛國は新舊兩教黨を分けて相争ひ、凡三十餘年間の内亂となれり。

舊教黨及新教黨 千五百五十九年ヘンリー二世殂す。皇后カスリン、ド、メヂ、シー(Catherine de Medici)機智に富み非望を抱き、己自政機を專にせんとす。其子フランシス二世(千五百五十九年より千五百六十年まで)の立つや、年僅に十六歳。グアイス(Guise)家のローレン侯及牧師チ、ーレス、王の侍従たり。其妹蘇蘭王ジ、ームス(James)五世に嫁し、メリ、ステ、ア、ート(Mary Stuart)を生む。之を

フランシスに配す。フランシス身心共に弱く事皆后及チ、ーレスの手に決す。チ、ーレス又カス、リンと結び政を專にし新教徒を抑壓せり。ルイ九世の正統たるフルボン家のナツ、ール(Navarre)王アントニー其弟コンデ(Condé)公及貴族中錚々の名あるモントモンニス(Montmorencis)水師提督コリニ、ル(Colligni)等グアイス黨の專權を惡み、貴族同盟の團體を組織してカルツ、ン教を奉じ、且政事上の事を畫策せり。是に於て佛蘭西に於ける新教徒は又政事的一團體となれり。

アムボアスの謀叛 是時に當り新教徒にして貴族なるラ、レナウテ、ー(Ra. Renaudie)といへるものあり。其弟嘗て罪科に處せられしを怨み、グアイス黨を壓せんとし、アムボアス(Amboise)に叛を企つ。事顯はれて残忍なる屠殺に遭ふ。而して事に干與せずして刑に處せられしもの甚た多し。是に於て政府は議會をオーレアンに招集し、以て國內の異端者を滅絶せんとす。コンデ公も亦大逆を以て目せられて獄に囚はる(千五百六十年より六十年)。

セントチ、ーメンの上諭 フランシス二世殂し、チ、ーレス九世(千五百六十年より千五百七十四年まで)立つ。年甫めて十歳。政權全くカス、リンに歸し、新舊教兩黨對立せり。千五百六十一年ホア、シー(Ho. St. Barthelemy)の宗教大會に於て、セオドルベツ、(Theodore Beza)と稱するもの博識雄辯を以て新教の教

理を辯析せり。是に於て翌年 セントチャーメン の上諭を發し四十餘年來の政略を棄て、新教に自由を與へたり。新教徒は是よりして將に盛大ならんとせしが、カスリン は法王及西班牙王 フィリップ二世 と和を破らざらんことを切望せり。

戰亂 氷炭相容れざる兩黨の勢、破裂なくして終に已むべからず。千五百六十二年舊教徒の首領 グアイス公 (牧師 チャーレス の兄 ブッシュ (Bussie) 村の會堂を襲ひて大に新教徒を殺戮せり。是より内亂紛々として起り、所々の戰爭互に勝敗あり。グアイス公 コンテ公 等之に死す。千五百七十年に至り、セントチャーメン の平和條約を以て新教徒自由を得、戰亂一時其局を畢る。而して此和約を確定せんが爲に チャーレス の妹 マーガレット を以て ナヴァール王 ヘンリー に配す。ヘンリー 時に新教徒の首領たり。國民之を聞きて皆喜色あり。新舊兩黨の重なる人々は皆 パリ に招れて祝賀に參集す。時に千五百七十二年八月十八日なり。

セントバーソロミュー の殺戮 チャーレス 九世長ずるに及びても、政權は依然として太后 カスリン の手にあり。セントチャーメン の和約以來王深く水師提督 コリニー を親信せり。カスリン 及 グアイス 家は自家の權勢を奪はれんことを恐れ、窃に人をして コリニー を狙撃せしめしが、其目的を達する能はざりき。然れども新教徒は此によりて大に昂激し報復

を謀る。是に於て カスリン 黨與を會し以て新教徒を鑿殺せんとし、自令書を作りて王の印璽を乞ひ、告ぐるに新教徒の叛を以てし、強て之に鈴せしむ。是に於てか八月二十四日 (セントバーソロミュー (St. Bartholomew) の祭日) の味爽、一點の警鐘と共に カスリン 黨のもの、は各徽章を附し俄に起りて新教徒を殺戮すること三日に渉る。コリニー 以下死するもの數千人に上り、パリ の全市流血積屍を以て充さる。ヘンリー 及 コンテ (コンテ公 の子) は舊教教會に順和することを約して僅に免る。王又更に勅令を發して諸州の新教徒を刑すること二萬五千人に上れりと云ふ。

ヴァロア 家の絶滅 セントバーソロミュー の殺戮以後、新教徒は益憤激し、其勢復前日の比にあらず。既にして チャーレス 殂し、弟 ヘンリー三世 (千五百七十四年より千五百八十九年まで) 立てり。王亦懦弱なり。其位に即くや、新教徒に舊教徒と同一信仰の自由及政治上の權利を與へしを以て、舊教徒大に激昂し、グアイス の ヘンリー 主となり、西班牙の フィリップ二世 と神聖同盟を組織し、以て舊教徒の權力を恢復せんとす (千五百七十六年)。

王亦讎りて舊教徒に與せり。然れども ヘンリー の王位を覬覦するに及びて パリ を出奔し、遂に人をして ヘンリー を殺し、其黨與の重なるものを捕へしむ。是に於て争亂益、其度を高め、法王は王を破門せり。今や王は ナヴァール

のヘンリー及新教徒を聯合せしが、遂に「ドミニカン」派僧侶の爲に弑せらる。實に千五百八十九年八月なり。是に於てツ・ロア家の正統絶え、ナツ・ールのヘンリー繼ぎて位に登る。是をヘンリー四世(千五百八十九年より千六百十年まで)となす。

ヘンリー四世　ヘンリー三世の生前既にナツ・ールのヘンリー王位繼承の權あるを承認したりしが、其殂するに及びて舊教同盟はヘンリーの即位を拒む。是に於てか戰亂復起り、アーク(Arques or Ark)及イツリー(Ivry)の兩戰に於てヘンリー大勝を得たり。而してヘンリーは佛國の平和を恢復せんが爲に、自舊教に歸し、遂に千五百九十四年を以て王位に登る。是をフルボン家(フルボン家は千五百八十九年より千八百三十年まで永續せり)の祖とす。ヘンリー位に即くに及び、疲弊の極に陥りたる國情を恢復せんとし、專内治に力を用ゐたり。而して其外交の政略は西班牙とハ、プスフルク家の勢を挫くに在りき。千五百九十八年ナント(Nantes)の上諭を發し、新教徒に信仰の自由を許し、參政の權利を與へ、且數多の城砦(總ての軍器之に屬す)を與へて其用に供せしめたり。王は又賢相サリーの(Ey)を用ひ、善政を施行し農工商業を獎勵せり。是に至りて數十年の紛亂其跡を絶ち、國勢殷富となり、人民王を敬慕して大王或は「國民の父」と稱せり。惜かな千六百十年王は途上刺客ラウ・ルヤ・ク(Ravallac)の手に罹りて殂せり。

第五節　テュードル家の英吉利

ヘンリー七世　テュードル家の諸王は十六世紀の英國を管轄して壓政を施せしと雖、亦其時代に於ては商業文學並に新教の發達著るしきを以て知らる。初ヘンリー七世ボスウ・イスの戰に於て王位を得しより、薔薇戰爭終を告げたり。是よりして貴族衰へ王權獨盛となり漸く專横の志を生じ、嘗て佛國侵略を約して資を議會に仰ぎ、又義捐の名を以て富者の財を集め、其佛國に入るを復財を得之と和を約して國に歸り、國人並に敵國の財を以て自家を富ませり。然れどもヘンリーは亦下民を安んじ商業を獎勵せり。彼カボットの如きは王の保護を得て亞米利加の海岸を探見することを得たり。王又女マーガレットを以て蘇蘭王ジームス四世に配し、後日ステewart王家に至り兩國合一の基を開けり。

ヘンリー八世　ヘンリー七世殂し、ヘンリー八世(千五百九年より千五百四十七年まで)年十八にして位に登る。容貌雅麗、才氣ありて學術に老ふ。英國史上長く衆望を集めたる王なり。王初法王並に日曼耳帝とマリネスの同盟に加入して佛國に侵入するを、蘇蘭王ジームス四世佛國と通じて英國に寇す。千五百十三年フロ・テン(Flooding)の野に於てジームス軍破れて死せり。後幾

何もなく、チャールズ五世(日耳曼帝)とフランシス一世(佛蘭西王)と相争ふや、英國は其中間に立ちて兩國の權衡を保持せんことを謀り、王は常に其弱者を援けたりき。時にトーマス・ウルソー(Thomas Worsley)と稱するものあり。初卑賤より起り、ヨークの大僧正となり、又大法官となり、遂に大宰相に昇れり。王大に之を寵し、外交内治皆其指畫に依れり。

カスプリンの離婚

王即位の後幾何もなく、アラゴンのカスプリン(チャールズ五世の叔母にして其兄アーサーの寡婦なり)

と婚してより二十年、其間に病身の一女子メリーを挙げしのみ。是を以て熟、其後嗣の事を思ひ、且カスプリンの嘗て其家兄の室たりしを以て之と配するの不當なるを公言せり。時にカスプリンの侍女アーン・フリン(Anne Boleyn)と云へるもの頗る姿色あり、ヘンリー之に戀し、遂に離婚の許可を法王クレメント七世に乞ふ。法王ヘンリーの意を拒むを好まず、又之を許して、チャールズ五世の怨を買ふを欲せず。心大に惑ひ、躊躇年を歴たり、ヘンリー遂に私にアン・フリンと婚す。時にカンターバレーの大僧正トーマス・克蘭マー(Thomas Cranmer)王の結婚不法なることを宣言す(千五百三十二年)。後二年にしてカスプリン死せり。初ウルジーは法王の許可を得ずして離婚を發表するに躊躇せしかば、王怒りて之を黜く、ウルジー憂鬱して死せり。英國羅馬を背離す ヘンリーは「ヒューマニスト」の教育を受けしを以て、常に其神學上の

智識に誇れり。ルーテルの宗教改革を唱ふるに當り、王自一書を著はして之を駁す。是に於て法王、王に教理保護者の稱號を與へたり。而してルーテルの之に答へし所の一篇は、王をして益新教を惡ましめたり。其後トーマス・クロムウール(Thomas Cromwell)のウルジーに代り宰相となるに及び、大に羅馬を惡み、王に勸めて法王の束縛を脱せしむ。王之に従ふ。是に於て法王ヘンリーを破門す。英國議會は王とアン・フリンの婚禮を公認し、且王を以て英國教會の總管と認めたり。之を認めざるものは皆重罪を以て刑せらる。有名なる舊敎家トーマス・モア(Thomas More)以下殺戮せられたるもの甚多し。モアは當時博學雄辯を以て其名籍甚なりき。

教會の改革

王二たび羅馬教會と絶ちてより英國の寺院は獨立の狀をなし、ティンダル

(Tyndall)聖書を翻譯し、コヴェンテール(Coverdale)之を校閲して各教會に配布し、且六條目といへるものを教會に施行せり。然れども王の信仰篤實ならざるより、二様の書を發して新舊兩徒に與へたり。又王は寺院庵室を破壊する者甚多く、且數、其説を變し終には王の新舊兩敎の何れに傾けるやを測知し得ざるに至れり。故を以て新敎徒もヘンリーの敎旨に背き、舊敎徒は又其總管たるを嫌惡するに至れり。

ヘンリー數、后を代ふ。ヘンリー、アンフリンと婚してより三年、アンフリン大に衆望を失し、遂に死刑に處せらる(千五百三十二年)。次でジーン、セイモア(Jane Seymour)を娶る。翌年死す。更に日耳曼の女公クレフス(Clèves)のアン(Anne)を迎ふ。客姿意に適せず。國會の議決を以て之を離婚す。次で又カス、リン、ホウ、ード(Catherine Howard)と婚む。其品行正しからざるを見て、復之を死刑に處す。後遂にロード、ラテ、マー(Lord Latimer)の寡婦カス、リン、パー(Catherine Parr)を娶り、以て世を終るに至る。王は斯く殘忍なる行爲をなすこと少からず。と雖、亦能く下民を保護し、租税を減じ、在位の間は英國常に隆盛なりき。

エドウ、ード六世　ヘンリー八世歿し、エドウ、ード六世(千五百四十七年より千五百五十八年まで)十歳にして位に即く。ソマーセ、ト(Somerset)公政を攝す。此時に當りて新教徒勢漸く盛なり。克蘭マー、リ、ド(Ridley)ラテ、マー主として英國教會の改革に従事せり。其後ノーサムバーランド公ソマーセ、トを退けて一時英國の政を攝し、王に説きメリー並にエリツ、ベスを斥け、議會の決議に反して己の子の婦ジー、ングレー(Jane Grey)(ヘンリー八世の妹の後)に位を譲らしめんとす。其後久しからずしてエドウ、ード六世歿せり。

女王メリー　ノーサムバーランド公の奸策行はれず、メリー(千五百五十三年より千五百五十八年まで)遂に位に即き、

重罪を以てノーサムバーランド公を刑せり。メリー元來舊教に篤し、西班牙王フィリップ二世と結んで專舊教の隆盛を計り、妻帯の僧侶(エドウ、ード六世の僧侶の妻帯を許す)を放逐し、猶自家の權勢を張らんと欲し、フィリップ二世と婚し新教徒を抑壓せり。克蘭マー、リ、ド、ラテ、マーの如き卓識名望あるものは、多く異教者として刑せらる。是を以て國人皆メリーを呼んで「**フラッドメリー**(**流血メリー**)」と稱し、新教徒は多く大陸に遁逃せり。而してメリーはフィリップを援けて佛國と戦ひ、英國の多年佛國に有せしカレの地を失へり(千五百五十八年)。英國人民は女王の西班牙と連合せるを喜ばず。従ひて益、羅馬法王と背馳するに至れり。メリー之を鎮制する能はず、病んで歿せり。

女王エリツ、ベス　メリー既に歿して舊教徒はエリツ、ベス(ヘンリー八世とア、ンフリンとの子)の生誕に關して、王位繼承の權なしとし其即位を拒み、而して蘇蘭女王メリーを迎へ立てんとす。然れども成らず。エリツ、ベス遂に位に登る(千五百五十八年より千五百六十年まで)。英國盛強の時代其下に來れり。エリツ、ベス人と爲り果敢剛執、華侈を好む。然れども聰明にして善く人を用ひ、人民の愛慕する所となれり。賢相ウ、リアム、セシル(William Cecil)及フランシス、ワルシンハム(Francis Walsingham)の如きは女王を輔佐して大に力ありき。女王夙に新教の恢復、教會の改革を計り、

第一議會に於て主權並に統一の二令を發布し、一はエリツ、ベスを以て英國教會の總管たることを誓はしめ、一は國教(新教)外の宗派に入ること禁せり、是に於て舊教派の之を拒んで刑に處せらるもの尠からず。又新教の一派なる「ピューリタン」(Puritan)派の如きも之に服せし、嚴刑を以て處せられ新世界に奔るもの甚多し。

「ピューリタン派」は當時英國に行はるる所の新教より一層自由の意見を抱き、彼主權及統一の二令發布に抗し、女王を以て教會の總管となすことを肯せず。自進んで教會の組織を改革せんとす。蓋し「ピューリタン」派は新教徒と、固より其教理を同くせりと雖、教會の儀式及禮拜の方法を異にし、純潔儼正を以て其名を得たり。

蘇蘭女王メリー　メリーは初佛王フランシス二世に嫁せしが、其殂するや復蘇蘭に歸り王位に即けり。メリー容姿艶麗にして舊教を固信せり。時に蘇蘭に於てジョン・ノックス(John Knox)と云へるものあり。新教を弘め勢甚盛なり。メリー大に新教徒を抑壓して人心を失へり。後其從弟ダーンリー(Darrel)公と婚し、幾何ならずして又伊太利の音樂師リ、チオ(Elizabeth)を嬖せり。ダーンリー之を知りリ、チオを殺す。而してダーンリー亦刺客の手に斃る。メリー又ボスウール(Bothwell)の首謀者なり。伯と婚し、大に衆民の憤怒を招き、遂に其子ジェームス六

世(後英吉利王となる)に位を譲り、遁れて英國に入りエリツ、ベスの保護に依れり。エリツ、ベス之を幽囚するに十八年餘、其間或はエリツ、ベスを退けてメリーを王位に即けんことを企つるものあり。エリツ、ベス令を發して此等の徒を嚴壓せんとす。既にしてババントン(Babington)と稱するもの黨衆を集めてメリーの爲に叛を謀る。事露はれ刑せらるるに及びてメリーも亦死刑に處せられたり(千五百八十七年)。

西班牙との戦争　千五百八十五年エリツ、ベス一將を遣りアイス、ランドを援けしめ、又海上には西班牙の商船を捕へて其財寶を奪ひ、且其植民地を侵略せり。時に英將ドレーク(Drake)とペルー(Peru)チリ(Chili)等の西班牙領を掠め、數多の金銀を奪ひ、西班牙王フィリッ、フ英國に入寇せんとするを聞き、カディス港に航し西班牙の船舶武庫を破壊せり(千五百八十七年)。フィリッは英國を征服せんとし、有名なる不滅(Uinvincible)艦隊を組織し、帆船海を蔽ふて英國海峽に迫る。今や英國は危急の秋に際し、新舊兩教徒皆心を合せ力を一にして防戦す。

ロード、ホワード(Road Howard)英艦三十艘を率ゐ、西班牙の艦隊百五十艘を邀撃し、會戦すること七日(中三日激戦あり)、西艦遂に支ふること能はず、カレイ港(佛國)に入り、蘇蘭の北を廻航して本國に還らんとせしが、船艦颶風の爲に破壊せられ、其能く歸國せしもの三分の一

に過ぎず(千五百八十一年七月)。此捷利は獨一英國の捷利に非ずして、實に歐洲新教徒の勝利たり。是よりして英國は海上に雄威を振ひ、荷蘭の獨立は鞏固となり、西班牙の勢力は一折振はざるに至れり。

愛蘭征服 愛蘭は數世紀以來既に英國に屬せしが、土民の大半は依然舊來の信仰を奉せしを以て、エリツ、ベスは政治上及宗教上に於て愛蘭を英國に結合せしめんと欲す。而るに土侯テ、ローン(Tyrono)伯は西班牙及法王の援助を得て兵を擧げ之に抗す。是に於てエリツ、ベスは寵臣エ、セクス(Essex)伯を將として之を伐たしむ。エ、セクス、テ、ローンと不利なる和を約して歸る。ロード、モントジ、イ(Lord Montjoy)之に次ぎて愛蘭を征し、エリツ、ベスの末年に至りて終に全く之を征服せり。

エリツ、ベスの晩年 エリツ、ベス眞に國王たるの技倆を具へたりと雖、亦女流の失を免れず。多情にして嬌慢なり。盛年の頃曾てレーセスター(Leicester)伯ロバート、ダ、ドレー(Robert Dudley)を寵じ、晩年又エ、セクス伯を寵して分に過ぎ、エ、セクス遂に叛をロンドン(London)に企て、事顯れて誅せらるゝに至る。後二年を経て女王始めてエ、セクスの死を聞き、常に鬱々として遂に歿せり(千五百九十三年)。テ、ードル家の王統此に絶ゆ。

國勢の進歩 エリツ、ベスの治世間は英國の政治及商業大に進歩し、歐洲第一等國の地位を占むるに至れり。從來英國輸出入の貨物はハンサ同盟市府の船舶によりて運送せられしが、今や英國の船舶之に代りて諸外國に航行するもの多し。加之ドレークは世界を一週しホーキンス(Hawkins)はグ、ニア(Guinea)の海岸を探り、サー、ウ、ルター、ラ、ラー(Sir Walter Raleigh)はヴァ、ー、ジ、ニア(Virginia)の植民を企て、商業植民共に繁盛を極む。而して當時國民の智力も亦大に發揚し、雄偉富贍の文學を現出せり。

第六節 三十年戦争

戦争の性質 三十年戦争は十七世紀の前半に於て、歐洲大陸に起りし政事上の一大事件にして、千六百十八年ホヘミアの叛に起り、千六百四十八年ウ、スト、フ、リアの條約に終る。始は日耳曼帝國に於ける新舊兩教徒の争闘に過ぎざりしが、遂に政治上の變亂となり、歐洲諸國大抵之に關與するに至れり。

戦争の起因 千五百五十五年オ、タ、ス、アル、グの宗教條約を以て一時外部の靜穩を得しといへども、内部の黨争に至ては曾て已むべきなし。帝子、イレ、ス、五世歿して弟フ、ル、ディ、ナ

「**レオポルド一世**（千五百五十六年より千五百六十四年まで）位を継ぎ、**ボヘミア**及**匈牙利**最終の王妹と婚し、此二國を奥太利に合併せり。**マキシミリアン二世**（千五百六十四年より千五百七十六年まで）次き立ち、寛和の手段を以て新舊兩教徒の和合を謀りしが、其子**ルドルフ二世**（千五百七十六年より千六百一十二年まで）位に即くに及びて、專占星及鍊金の術に耽り、「**ジエスウ・ト**」派教徒を任用し、新教撲滅を事とし、を以て、國內復分裂し、千六百八年新教諸侯は**パラティネート**（Palatinate）の撰舉侯**フレデリック四世**を推して新教同盟を組織し、舊教徒も亦其翌年**バヴアリア**公**マキシミリアン**を戴き同盟を結ひて相對抗せり。帝は千六百〇九年憲章を發して**ボヘミア**の新教徒に自由を與へたりしが、其弟**マッティアス**（千六百一十二年より千六百一十九年まで）の位に即くに及び、**ボヘミア**を以て其従弟**フルディナント**に與ふ。而るに**フルディナント****ボヘミア**新教徒の自由を束縛し、其教會寺院を破毀せり。是に於て三十年戦争起る。

第一期戦争（千六百一十八年より千六百二十四年まで）第一期の戦争は**ボヘミア**及**パラティネート**の戦争に係る。**フルディナント**は元來西班牙の教育に人と爲り、固く舊教を信奉せるを以て、**ボヘミア**の新教徒を虐待すること甚し。是に於て新教徒は千六百一十八年**フレイク**に叛し勢甚盛なり。其翌年帝**マッティアス**歿し**フルディナント二世**（千六百一十九年より千六百廿七年まで）代り立つ。**ボヘミア**人は**フルディ**

ナントを廢し、新教徒の首領**パラティネート**の撰舉侯**フレデリック五世**（英王ジームス一世の義子）を迎へて王位に即かしめ、以て英王の聲援を得んとす。然れども舊教徒の首領**バヴアリア**公**マキシミリアン**は西班牙人と共に帝を援け、**ボヘミア**に入り**ウイセンベルク**（Wiesenberg）に戦ひ、大に**フレデリック**の軍を破り、**フレデリック**を放逐し、新教自由の憲章を廢し舊教を再興せり。（千六百二十年）是に於て新教同盟解散せり。**ボヘミア**征服の後帝の將**テリール**（Tilly）進んで二三の新教諸侯と戦ひ、遂に**パラティネート**を征定せり。**マキシミリアン**は其賞として**上部パラティネート**の撰舉侯位及**上部パラティネート**の地を得たり。

第二期戦争（千六百二十四年より千六百一十九年まで）第二期は丁抹王**クリステリアン四世**との戦争なり。當時**クリステリアン四世**は**ホルスタイン**（Holstein）を領し、日耳曼の一諸侯たり。新教徒を援けんとし兵を率ゐて**ウーゼル**（Wesel）河に至る。舊教同盟の將**テリール**援を帝に乞ふ。時に**ボヘミア**の一貴族**ワルレンスタイン**（Wallenstein）兵を起して帝に應じ、千六百二十六年**マンズフェールド**（Mansfield）伯を破り、之を匈牙利に逐へり。同年**テリール**も亦**クリステリアン四世**を**ル・テル**（Luttrell）に撃破せり。而して**ワルレンスタイン**は**メクレンブルク**（Mecklenburg）公を驅逐し、其地を帝より受け、次きて**ホルスタイン**、**シレスウ・ヒ**及**ジ・トランド**（Jutland）を占領し、**ポメラニア**（Pom-

Orania) 及フランドンアルダを従へり。唯ストラルズント(Stalsund)のみ久しく下らざりき。是に於てワルレンスタインは丁抹王とリューベック(Lubeck)の平和を約し、クリステリアンは其故領を回復するを得、而して以後日耳曼の國事に干渉せざることとなれり。フェルデナンド帝は此新勝の威に乗じ、千六百二十九年回收令(Edict of Restitution)を發し、バウ條約以來新教徒に與へたる寺領を盡く回收せり。ワルレンスタイン功名日に高く、漸く諸侯の嫉む所となり、遂に帝の名を以て其總督の任を解かる(千六百三十年)。

第二期戦争 (千六百三十年より千六百三十五年まで) 第二期の戦争は瑞典王ガストゥス、アドルフス(Custavus Adolphus)との戦争なり。初瑞典王ガストゥス、ウサ國を四子に分與して、國勢漸く離る。エリク十四世立ちて猜疑の念深く、悖亂の行多し。千五百六十九年廢せられ弟ジョン及チャールレス共に政を執る。ジョンは羅馬教を奉じ、チャールレスは固くルーテル教を信じ、常に相闘けり。ジョン王位に登り之を其子シギスマンドに傳ふ。シギスマンドは當時波蘭の王たり。チャールレス其黨與と戦ひ之に勝ちて瑞典の王位に登る(千六百四年)。チャールレス在位七年にして殞じ、其子ガストゥス、アドルフス(千六百十一年より千六百三十二年まで)位を繼ぐ。ガストゥス時に年十七、性寛仁にして文武の材幹あり、心を新教に歸せり。即位の後バルティック海の主權を握らんと欲し、

凡十八年間丁抹波蘭魯西亞の間に戦へり。日耳曼新教徒の難を聞き、慨然として之を救はんとし、千六百三十年英佛と結び兵一萬三千人を率ゐるポメラニアに上陸し、フランドンアルダに進む。フランドンアルダ及サクソニーの撰舉侯は初遲疑して之に應せざりしが、千六百三十一年日耳曼の將テ、リーのマールグデアルダを破壊するに及び、終にガストゥスと同盟せり。ガストゥスはサクソニーの撰舉侯と兵を合せ、テ、リーとライプシッツのフライデンフェルト(Breitendorf)に戦ひ大に之を破る(千六百三十二年)。ガストゥス頻りに兵を進め、ダニエルフ河を渡り、バツリアに入る。翌年レヒ(Collin)の戦に於てテ、リー重創を被りて死せり。此間サクソニーの撰舉侯はポヘミアを占領せり。是に於て日耳曼帝は復ワルレンスタインを起し總督となし、大權を以て之に委任せり。ワルレンスタインはポヘミアよりサクソン人を驅逐し、然る後バツリア公マキシミリアンと兵を合せ、ガストゥスとニールンベルグ(Nürnberg)に對峙すると數週日、ガストゥス兵を引ききてダニエルフ河に進み、以て敵を誘致せんとす。而るにワルレンスタインは反てサクソニーに進む。サクソニーの撰舉侯援をガストゥスに求む。ガストゥス之に赴き、遂に千六百三十二年一月十六日ワルレンスタインとリューツェン(Lützen)に激戦し大に其軍を破る。日耳曼騎兵の將バウハイム(Pappenheim)重創を被りて死し、ワルレンスタイン敗軍を收

めてホヘミアに退く、然れども此役ガスタツクスも亦戦死せり。瑞典の宰相アクセル、オクセンステールン(Axel Oxenstiern)幼王女クリステーナを輔けて王位を繼かじめ、ワイマル(Wemar)侯ベルナードをして日耳曼の戦争を繼續せしむ。而るにワルレンスタインは驕傲の心を生じ、敢て活潑の運動を爲さず。密に瑞典、佛蘭西及新教徒と結びてホヘミアの王たらんとす。帝遂に其總督の任を奪ひ、後人をして之を刺殺せしむ(千六百三十四年)。帝の長子フルティナント代りて軍を督し、ノルドリンゲン(Nordlingen)に於てベルナードの軍を破る。サクソニーの撰舉侯は遂に帝とブレীগの平和條約を締結し、新教徒は復嘗て奪はれたる寺領を有するを得たり(千六百三十五年)。

第四期戦争(千六百三十五年より千六百四十八年まで)

第四期の戦争は佛蘭西及瑞典との戦争なり。此戦争は従前の戦争と全く其性質を異にし、新舊兩教徒の争にあらすして佛國と埃太利西班牙との政治上の戦争なり。當時佛國はルイ十三世位に在りて一般の政務は凡て宰相「カーディナルリシリー」(Cardinal Richelieu)の手に歸せり。リシリーの外交政略はハプスブルク家の埃太利及西班牙の勢力を殺かんとするに在り。故に初は密に瑞典王を援けたりしが、後遂に公然埃太利家に對して戦端を開くに至る。此時瑞典の將バチル(Baner)は北日耳曼

にベルナードはライン地方に戦ひ、屢利を得たり。既にして日耳曼帝フルティナント二世殂し、フルティナント二世(千六百三十七年より千六百五十七年まで)位に即くベルナード、バチルの兩將亦相繼ぎて死し、トルステンソン(Torstenson)之に代り帝の軍をライプシークに破り(千六百四十二年)埃太利の中心に進み、又北方に轉じてジトランドを攻めしが、偶疾を得ウランゲル(Wrangell)之に代り、佛將テーリン(Turenne)と共にバツリアに侵入し、又ブレীগの一部分を略奪せり。時にウエストフリア(Westphalia)の條約成り三十年戦争其局を結べり。

ウエストフリアの條約 是より先リシリー及ルイ十三世共に死し、ルイ十四世立つに及び、宰相マツラン(Mazarin)猶リシリーの政策を繼續せしが、遂に五年間の商議を経て千六百四十八年十月ミンステル(Munster)及オスナフリアク(Osnabruk)に於て和約を締結せり。所謂ウエストフリアの條約にして歐洲史上に於て最緊要なる條約の一たり。此條約によりて「甲」佛國は上下アルサス(Alsace)メツツ(Metz)ツール(Toul)及ツールタンを取り、「乙」瑞典は前ホメラニア、リューゲン(Rügen)島後ホメラニアの一部ステットン(Stettin)ウスマー(Wismar)府及ブレメン(Bremen)ツールタンの僧正領と償金五百萬弗とを得、而して日耳曼諸侯會議の一員となれり。「丙」フランケンブルグは後ホメラニアの東部、マールゲテブルグの大僧正領ハルベルスタット

ト(Halberstadt)・ミンデン(Minden)等の僧正領を得、フレデリク五世の子は復バラテ、ネーデルライン地方の一と撰擧侯位を得、バツ・リアは上バラテ、ネーデルと撰擧侯位を得、サクソニー其他の諸侯は或は其疆域を増し、或は故領を復するを得たり。丁、宗教の信仰は自由となり、新教の寺院は其舊領を復することを得、カトリック教、ルーテル教及カルツ・ン教の三派は皆同一の權利を享有するに至れり。戊、瑞西及荷蘭共和國は其獨立を承認せられたり。此條約の結果は日耳曼帝國は有名無實となり、聯邦各獨立の觀をなし、瑞典は歐洲に雄視するの勢を顯し、佛國は其境土を擴張し、ハプスブルグ家に代りて一時歐洲の覇權を握り、西班牙、奧太利は共に微々として振はざるに至れり。

三十年戦争の結果 三十年戦争の結果は日耳曼最慘憺を極む。日耳曼人民は多年戦争に苦み、土地荒蕪し、城市村落兵燹に罹りて人口甚減少し、アウグスブルグ(Augsburg)府の如きは、八萬の人口減じて一萬八千となり、ウルテンベルグ(Würtemberg)府は曾て四十萬の人口を有せしが、千六百四十一年には僅に四萬八千となれり。而して商工業は萎靡し、文學技藝は衰頹し、日耳曼帝國の聯絡は全く瓦解し、幾多の小獨立國となり、國民の精神蕩然として地を掃ふに至る。此創痍は近世に至るまで猶癒えざりしと云ふ。

第七節 宗教改革時代の開化

概説 學藝の再興は大に人智の發達を促し、大學は所在に興起し、文學技藝等大に獎勵せられ、古學の研究と共に新思想勃興し、數多の學者文人輩出するに至れり。

文學(伊太利) 十五世及十六世紀間は、伊太利學藝の黄金時代にして、殊に詩歌及歴史を以て著はる。散文家マキアツ・リ(Machiavelli) (千五百二十七年歿す) のフロレンス史、君主論の如きは、

其名世に高し。其他グ・チアーデ、ニー(Guicciardini) (千四百七十四年生れ)、ダヴ・ラ(Davila) 及バオロー、サービー(Paolo Sarpi)等の如き歴史を以て名あり。詩人にはアリオストー(Ariosto) (千五百三十三年歿す)、タ・ソー

(Tasso) (千五百九十五年歿す) の如きあり。タ・ソーの、ジ・ルサレム救助詩篇は第一十字軍を詠せしものにして、聲律の艶麗を以て稱せらる。十七世紀に至りては、西班牙の壓制を蒙り、一旦繁茂せる詞藻も爲に萎爾せり。

(西班牙及葡萄牙) 十六世紀は西班牙及葡萄牙の文學最隆盛を極めし時代なり。而して小説及戯曲最著名なり。サーヴ・ンテス(Cervantes) (千五百四十七年生れ) の諷刺小説、ドンクイホー

テ(Don Quixote)の如きは千古の絶作なり。ローフ・デ・ウ・ガ(Lope de Vega) (千五百六十二年生れ)

及其弟子カルデロン(Calderon) 千六百年生れ 千六百八十一年歿す 出づるに及びて、西班牙の戯曲詩完善の域に達せり。葡萄牙に於ける詩人の有名なるものを、カモエンス(Camoes) 千五百二十四年生れ 千五百八十年歿す となす、其大作「リ・イシアード」(Lusiad)は印度發見の盛時を頌揚せり。

(英吉利) 英國に於てはチーサー以來詞藻一時沈滞せしが、女王エリツベスの時代に至り、復蔚勃として興起し、詩人戯曲家濟々として輩出せり。而してウ・ルリアム、シークスピア(William Shakspeare) 千五百六十四年生れ 千六百十六年歿す を最となす。シークスピア出て、英國の戯曲、盡善盡美の域に達し、他の作家をして復顔色なからしめたり。蓋其想像の贍にして、新創の才に富めることは、曠古絶今と稱すへきなり。妙作數十、多く人口に膾炙せり。其他ホーモント(Beaumont)フレ・ネ・ヤー(Fletcher) マ・ジョン・ベン・ジョンソン(Ben Johnson) マ・マ・ガール(Masinger) 等亦名あり。戯曲作家に非ずして、名聲籍甚なるものをスペンサー(Spenser) 千五百九十三年生れ 千五百九十九年歿す とす。其著「フ・リー・クイーン」(Fairie Queene)は後世の模範たり。最後にミルトン(Milton) 千六百八十年生れ 千六百七十四年歿す 出づ。ミルトンは「ビ・リータン」派の詩人にして其詩「タンテ」と并馳す。有名なる詩篇「バラダイスロスト」(Paradise Lost) 及「バラダイスレゲインド」(Paradise Regained) は晩年失明後の作に係ると云ふ。

(佛蘭西) 佛國に於ては十六世紀に至り、古典文學盛に行はれ、中古よりの小説的詩歌其跡を違けたり。ラベレー(Rabelais) 千四百八十三年生れ 千五百五十三年歿す は有名なる諷刺家にして、希臘のアリストフ、ニーズの喜曲に倣ひ、人生生活の曲折を叙すること微密且明晰なり。ロンサード(Ronsard) 千五百二十四年生れ 千五百八十五年歿す 亦當時の詩伯と稱せられ、其詩古雅高尚なり。然れども多く古代の模倣に過ぎず。十七世紀前半の佛國文學は、時流に拘泥し、端嚴の氣風に乏しかりき。

(日耳曼) 日耳曼に於ては、文學の發達甚遅く、獨ル・テールの基督教典翻譯と、宗教上の詩歌ありて、日耳曼散文及教會詩の儀表となりしのみなり。

哲學 十六世紀に在りては、アリストートルの哲學大に勢力を有せしが、英人フランシス・ベーコン(Francis Bacon) 千五百六十一年生れ 千六百二十六年歿す の出づるに及び、學術研究上に一新機軸を出せり。蓋アリストートルは演繹論法を主とせしが、ベーコンに至り歸納論法を創説し、以て事物の眞理を考察せり。其後世の學術を裨益せし功實に大なりとす。ホ・フス(Hobbes) 千五百八十八年生れ 千六百七十九年歿す 亦英人にして、ベーコンを祖述し、經驗哲學を創め政治學に長し。帝王權の無上なるを説けり。デカール(Descartes) 千五百九十六年生れ 千六百五十年歿す の佛國に起るに及びて、自由思辨の一新系統を創説せり。デカールは幼にして兵事教育を受けしが、後荷蘭に退居し、哲學の研究に従事

し、瑞典女王クリスティーナの侍講となれり。氏の哲學の第一要義は「我は思考す故に我は存在す」と云ふに在りて、世間數多の學者の謬見を排除し、一意眞理を考究せんことを勉めたり。デカートの觀念論よりして一層の進歩を爲せるものを、ジューデア人（荷蘭に生る）スピノツ（千六百三十二年生れ）となす。スピノツは近世の一大哲學者にして萬有神説の祖なり。氏は宇宙の萬象を以て人間に非ざる一實體（神）の發現となせり。

科學 科學は十六世紀に至りて大に進歩し、殊に天文學に於て其最著しきを見る。而して其指導者たるべきものは、實に日耳曼人 コペルニカス（Copernicus 千四百七十三年生れ）なり。

コペルニカスは千五百年以來世人の忘信せる「トレミー」説（地球を以て天體の中心となせる説）を排撃し太陽を

以て惑星系の中心となせり。是實に天文學上の一大改革なりしなり。丁抹の天文學者 ティコ・ブラー（Tycho Brahe 千五百四十六年生れ）は コペルニカスと反對の意見を有せしが、其天文學上の

功益は甚大なるものあり。十七世紀の初、大思想家 ケプレル（Kepler 千五百七十一年生れ）出づ。

ケプレルは日耳曼人にして詩人預言者の性格を具へ、又數理に明なり。惑星の運動に關する大原則を發見せり。「ケプレル」法と稱するもの是なり。同時に伊太利人 ガリレオ（Galileo 千五百六十四年生れ）あり。器械學及物理學に精しく、始めて望遠鏡を發明し、之を天體の觀察

に用ひ、木星の衛星土星の帶環等を發見せり。然れども コペルニカスの説を祖述せしを以て、屢官衙に召喚せられ、遂に異端を以て逐はれたり。天文學の外法理學及政治學の講究亦盛に起り、佛蘭西の法學者 キーゼーミアス（Cujacius 千五百九十二年生れ）羅馬法教科書を修正し系統的法理學の基礎を置き、ボイテン（Boetius 千五百三十年生れ）亦佛人にして國家論を著し、無限中央權力を説けり。荷蘭人 ヒューゴ・ド・グロテ（Hugo De Grotius 千五百八十五年生れ）は和戰法律論を著し、普通法理を以て各國間の秩序を維持する根源となし、國際法上に一新面目を開けり。三十年戦争の後日耳曼人 プッフ・ンドルフ（Puffendorf 千六百二十二年生れ）出づ。自然法及國際法を集大成せり。氏亦歴史に通し著書多し。醫學も亦當時頗

進歩し、日耳曼人 ハラセルサス（Harveius 千五百四十二年生れ）は實驗上の考察により、化學其他の學科を補助として醫學を講究せり。チャーレス五世の侍醫 ウァリアス（Wesalius）始めて人體を解剖し、解剖學の基礎を開けり。千六百二十八年英人 ハーウー（Haver）始めて血液循環の理を明にせり。

技藝 十六世紀に於ては、伊太利の美術非常の發達をなせり。爾來美術は宗教の關係を離れて獨立の進歩をなし、殊に繪畫は、伊太利に於て高尚美麗の域に達し、フロレンス派

はミカエル・アンチロ(千四百七十四年生れ、千五百六十三年歿す)に至り、羅馬派はラファエル(千四百八十三年生れ、千五百二十年歿す)に至り、
 完美を極む。其他ウ・ニス派には、ティ・ティ・アム(Titian、千四百七十七年生れ、千五百七十六年歿す)、ティ・ントレト(Tintoretto、千五百九十四年生れ、千六百六十四年歿す)あり、ロムバード派には、レオナード・ダ・ウ・ンチ(Leonard da Vinci、千四百五十二年生れ、千五百十九年歿す)、コル
 レ・チオ(Correggio、千四百九十四年生れ、千五百三十四年歿す)あり、ボロンヤ派には、グ・ド・レニー(Guido Reni、千五百七十二年歿す)、サルツ・トール・ローザ(Salvator Rosa、千六百十五年生れ、千六百七十三年歿す)あり、又音楽も、パレストリアス
(千五百二十四年生れ、千五百九十四年歿す)、出づるに及びて、大に進歩せり。チヌ・アランド(Tinctoris、千五百九十四年生れ、千六百九十四年歿す)に於ては、ウ・ン・アイク
(Van Eyck)兄弟(兄は千四百二十六年歿す、弟は千四百四十年歿す)、出て、一派の書法を創め、其一人ジョン・油繪の鼻祖と
 なれり。レム・アランド(Rembrandt、千六百七年生れ、千六百六十九年歿す)、亦才思あり、一派を創立し、優に大家の
 域に入れり。日耳曼に於ては、一種の書法起り、ハンス・ホルバイン(Hans Holbein、千五百四十年歿す)及
 アルベルト・デーレル(Albert Durer、千四百七十一年生れ、千五百二十八年歿す)之が代表者たり。西班牙には、ムリロー
(Murillo、千六百十七年生れ、千六百八十二年歿す)、ウ・ラスク・ツ(Velasquez、千五百九十九年生れ、千六百六十年歿す)あり、佛國の繪畫は皆伊
 太利畫の模倣にして、クロード・ローレーン(Claude Lorraine、千六百年生れ、千六百八十二年歿す)、景色畫を以て著は
 る。英國は十八世紀に至るまで、一著名の畫家を出せしことなし。

第二期 (ウエストファリアの條約より佛國革命に至る)

第一章 ルイ十四世時代

第一節 ルイ十四世の治世

ルイ十三世及リシ・リユー、ルイ十四世の紀事に入るに先ち、ルイ十三世及リシ・リユーの舉動を記述し、以て前期よりの關係を明にすべし。ヘンリー四世刺客の手に斃れしとき、嗣ルイ十三世(千六百十年より千六百四十三年まで)猶幼なりしを以て、太后メリー政を攝し、サリイ之が補佐たり。太后サリイの諫言を用ひず。嬖臣に任じ、奢侈を極め、ヘンリー四世の經營せる殷富の佛國も忽衰頹の兆を顯はせり。王長するに及び、親政を執りしと雖も、懦弱にして父王に肖ず。貴族は權勢を擅にして租税を課徴し、貨幣を鑄造し、又「ヒ・トク・ノ・ト」教徒は國中に一獨立國を建て、城砦を構へ兵士を集め、内政紊亂の極に達せり。此時に當り一英傑の出て、國難を救濟せるものあり。カーデ・ナル・リシ・リユー(Cardinal Richelieu)是なり。リシ・リユーはルイ(Louis、千六百二十二年)「カーデ・ナル(君王の)」に擧げられ、千六百二十四年以後は全く佛國の政柄を掌握せり。リシ・リユーの執る所の政略は、内貴族を壓服

し、ビークノット教徒を撲滅し、外墺太利家を制して佛國の威勢を張らんとするに在りき。是を以て、ビークノット教徒は大に抑壓を被り、ロッシュェル(Rochelle)市に據りて抗せしが、リシリー遂に之を降し、而して禮拜の自由を與へたり。次きて封建の遺物なる諸州の城砦を毀ち、貴族の抵抗するものあれば嚴刑に處して毫も假貸する所なし。是に於て王權獨り盛となり、中央集權の實全く舉れり。而してリシリーは西班牙及墺太利のハプスブルグ家の勢力を削減せんと欲し、三十年戦争に加擔し、瑞典人を援け、殆其目的を達せんとして逝けり(千六百四十二年)。ルイ亦五月を経て殂せり。リシリーは内王權を張り學術を保護し、外國權を發揚し他日佛國をして歐洲第一等國たらしむるの基を開けり。

ルイ十四世及マツラン。ルイ十三世殂し、其嗣五歳にして立つ。之をルイ十四世(千六百四十三年より千七百十五年まで)となす。太后墺太利のアーン政を攝し、マツラン(Mazarin)を擧げて相となす。此時三十年戦争猶未戢まず、佛軍の將コンデ(Condé) デ・アレン等連りに日耳曼の軍を破り、遂にウエストフリアの條約を承認せしむるに至る。然れども此間内治又大に亂れ、フロンド(Fronde)と稱する黨與リシリー以來の束縛を脱せんとして兵を擧ぐ(千六百四十八年より千六百五十二年)。重税に困める人民起ちて之に應じ、マツランを斥けんとして成ならず。ロンティ(Co-

nti) カーデナル、ド・ラツ(Cardinal de Retz)及ロンテ等の首領國外に出奔せり。是より王室に抗するもの全く其跡を絶てり。此時三十年戦争の餘波なる西班牙との戦争猶繼續せしが、遂にピレニースの條約を以て和を講じ、佛王は西班牙王女マリアテレサ(Maria Theresa) フーリ(世の)と婚し。且佛國はデズ・アランドの要地を得たり(千六百五十九年)。其後二年を経てマツラン死して王萬機を親裁す。

ルイの親政。王年二十三にして親政を執り、其治世間は所謂「國家は即朕なり」(L'Etat cest moi)として無限專制政治を執行せり。然れども人を識るの明あり。コルベル(Colbert) ルーヴァ(Louvois)の如き賢才を任用せり。コルベル能く國家の經濟を處理し、兼て教育、生産、商業を奨励せり。ルーヴァは軍務を整備し、百艘の船艦はトゥロン(Toulon) プレスト(Brest) 及 ハーツル(Havre)の諸港に横はり、十數萬の軍兵は良將テ・アレン、コンデ及リ・キゼン ブルグ ラン カブール等の下に在りて、佛國の權勢は實に未曾有の盛況を呈せり。而してルイは此盛況を利用して國威を世界に輝さんと欲し、四回の外戦を爲せり。

第一回、デズ・アランド戦争(千六百六十七年より千六百六十八年まで) 千六百六十五年西班牙王フィリッポ四世殂す。ルイ后マリアテレサの故を以て、西班牙王の領地を繼承せんことを要求し、軍を率ゐて

子スアイランドに入り、忽にしてフランター(Franche Comte)及フランシ・コムテ(Franche Comte)を征略せり。時に荷蘭共和國は禍の己に及ばんことを恐れ、英吉利瑞典の兩國と三雄同盟(Triple Alliance)を組織し、佛王と戦ひ之を破り、遂に千六百六十八年五月エイクス、ラ、シ、ヘルの條約を結び、佛國はフランシ・コムテを西班牙に返附し、佛境に接近せるフランターの地を取り、多く堅砦を築造せり。(有名なる築城家ウーバン)

第二回 荷蘭戦争(千六百七十二年より千六百七十八年まで)

ルイは子スアイランド侵略の際、荷蘭の主として之を妨害せしを憤り、之が怨を報せんと欲し、先瑞典英吉利及日耳曼諸王に啗はしむるに利を以てし、引きて與國となし、千六百七十二年軍備を整へコンデテ、レーンウ、ーバン等の名將を統べ、ライン河を渡りて連りに荷蘭の諸州を陥れ、首府アムステルダム(Amsterdam)に迫り、是より先、荷蘭に兩黨あり、一は共和黨にして國務長官ジョン、ド、ウ、ト(John de Witt)之が首領たり、一は王黨にしてオレンヂ公を推して首領となせり、佛軍の首府に迫るや、ド、ウ、ト使をして和を乞はしむ、成らず、府民之を聞き、怒りてウ、ト及其弟コルチリアス(Cornelis)を街頭に殺せり、是に於てオレンヂ公ウ、リアム二世(後英國の王、位に登る)兵權を握り、荷蘭人を勵して佛軍に抗す、フランデンフルグ大撰擧侯フレデリク、ウ、リアム荷蘭を援け、

日耳曼帝レオホルド一世又翻りて之を援く、英國國會も亦チャールズ二世に逼り和蘭と和せしめ、西班牙も亦荷蘭に與し、一大同盟を組織して佛軍に當る、是に於て戦線大に蔓の子スアイランド、ライン地方、英國海峡及地中海等に於て戦争あり、サスバハ(Sasbach)の戦、佛將テ、ーレン戦死し、佛軍ライン河を渡りて退けり、瑞典は佛王に應じフランデンフルグに侵入し、フニールベルリン(Fehrbellin)の戦(千六百七十五年)に於てフレデリク、ウ、リアムの爲に撃破せられて退く、遂に千六百七十八年ニムウ、ーゲン(Nimwegen)の條約を以て戦局を結び、荷蘭は全領地を恢復し、佛國はフランシ・コムテ、アルサスの一部及フライフルグ(Freiburg)府を得たり、

佛國の隆盛及衰兆、荷蘭の戦争よりして、ルイは其軍隊の強健なると同盟を組織し或は離間するこの容易なるを見、益進んで歐洲各國の牛耳を執らんと欲望を起し、遂に十七世紀の末年に至るまで、佛國の強盛は歐洲中比肩するものなきに至れり、而して植民事業も大に發達しセント、ドミンゴ、カヤンヌ(Cayenne)マダガスカー(Madagascar)に植民し、カナダ(Canada)は日に繁榮に趣けり、ルイ益驕傲の念を長じ、土地を擴張せんとし、メ、ツ、フレサ、ハ等に於て、レニオン(Renion)と稱する官廳を置き、ウ、スト、フ、リア條約

及ニムウ、ーゲンの條約以來佛國に屬したる領地の限界を判明せしめ、愈、地を略してライン

左岸に及び、千六百八十一年には遂に日耳曼よりストラスブルグを割き、新教を禁じ「カトリック教を奉せしむ。當時日耳曼帝は土耳其の危難ありしを以て其侵略を拒む能はざりき。ルイ又伊太利のミラン及チーノアをして其威權に服従せしむ。是に於て奥太利西班牙及日耳曼は反て佛國とレーゲンスブルグ (Regensburg) に於て二十年間の休戦を約せり (千六百十四年) 眼を轉じて佛國內部の状態を見れば、ルイの權勢極めて盛にして貴族は皆其威を失ひ、一般の人民は徒に側目するのみ。而して王宮城郭の建築は壯麗にして朝廷の儀典祭然として備り、又學校圖書館、學士會院、天文臺等を設立し、學者美術家を保護し、文藻一時蔚然として大王國の光耀を發揚し、縉紳公子日夜管絃舞蹈を事とし、佛國の言語風俗は歐洲各國を風靡するに至れり。佛國の黄金時代と稱するも亦全く逸美にあらず。然れども其眩耀の裡、隱然衰微の徵を含み、人民は懦弱に流れ、道德は敗壞せり。加之夫ヒューゲノト教徒の虐待と共に佛國の實力大に減損せり。初ルイはルーヴア等の言を容れ、千六百八十五年先にヘンリー四世の發布せる「ナント」の教令を廢し、新教徒の教會寺院を毀ち、牧師を放逐し、市民の之を奉ずるものは死罪或は禁錮に處せり。是に於て勤勉の良民無慮五拾萬、英吉利、荷蘭、フランケンブルグ等に奔れり。之か爲に佛國の蒙れる損害は實に莫

大にして、戦争にあれ生産にあれ、其外國の資益となりしもの甚多し。特に有形的の損害のみならず、此時より國民の思想大に沮喪し、佛國文學の泉源將に涸れんとするの状況を呈せり。

第三回、バラテ、チート戦争 (千六百八十八年より千六百九十七年まで)

佛王の權勢日に熾となり、又歐洲の一

大同盟を敵として戦端を開くに至る。是より先バラテ、チートの撰擧侯チャーレス死し、男系の嗣なく、其妹は佛王の弟オーレアン公の妻たり。是を以てルイ又其相續を要求す。是に於て千六百八十六年瑞典、西班牙バヴリア、サクソニー及バラテ、チートの諸國日耳曼帝を擁じてオーグスブルグの同盟を結び佛王に抗す。佛將メラック (Molac) 兵を率ゐてバラテ、チートに入り、繁榮の都府村邑及寺院等を焚掠破壊せり。千六百八十九年英吉利 (千六百八十八年英國の革命に際しオレンヂ公ウイリアム英王の位に登れり) 及荷蘭又オーグスブルグ同盟に加はり、更に大同盟 (Grand Alliance) を組織して佛國に當る。佛軍はチート、日耳曼、伊太利及西班牙に於て常に捷利を得しといへども、千六百九十二年のラ、ホーグ (La Hogue) の海戦に於て大に英荷兩國の艦隊は破られたり。爾後勝敗未決せざりしが、佛國は軍資欠乏を告げしを以て、遂に千六百九十七年リスウ、ク (Ryswick) の和約を以て、ルイはウイリアムの英王たることを承認し、且其侵略せし所

の地は盡く之を交還し、特リストラスブルグ(Strasbourg)のみ佛國の有に歸せり。

第四回、西班牙王位繼承戰爭(千七百〇一年より千七百十四年まで) 千七百年西班牙王チャールレス二世

(フィリップ) 殂して嗣なし、チャールレス初バヴリアのジヨセフ、フェルディナンドを嗣となし、

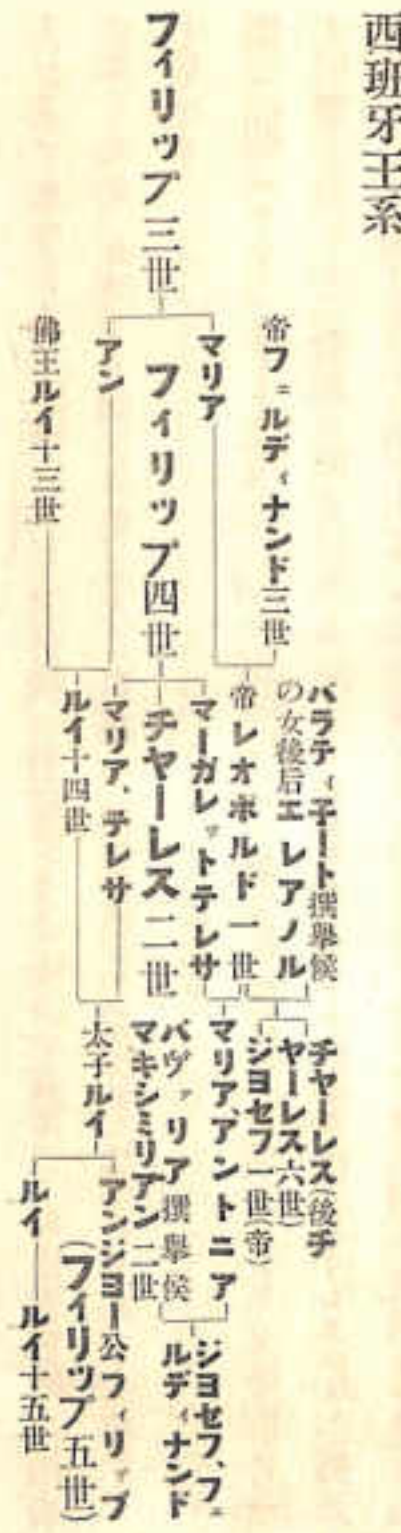
其早世せしを以てルイ十四世の孫アンジューのフィリップに位を譲ることを遺言せり、故に

チャールレスの殂するや、フィリップ西班牙王位に登り、フィリップ五世と稱す、而るに日耳曼帝

レオホルド一世(千六百五十七年より千七百〇五年まで) は其次子大公チャールレスをして西班牙の王位を繼かしめ

んとす、(初リスウイックの條約に因り西班牙王國(西班牙本部、ベルチアム、ネーブルス、シシリイ及亞米利加の領地を總稱す)は佛國或は埃國と合併するを得ず且日耳曼帝レオホルドの次子チャールレスを以て西班牙王國を統治すべしと約定せり)

西班牙王系



アールボン家の下に佛蘭西及西班牙の合一するは、唯に條約に違背せるのみならず、各國權力の鈞衡を失ふの恐れあり、是に於て英吉利、荷蘭、フランデン、アルグ、ハノーヴー、(Hanover) 及西班牙の一部、日耳曼帝と第二の大同盟を組織し、佛國に對して戰端を開けり、而して佛國に與せるものは唯バヴリア及コロンの二撰擧公國ありしのみ、既に於て英王ウイリアム二世、二名將之に代りサヴイ(Gavoy)公ユーゲン(Eugen)は日耳曼軍を、マールボロー(Marborough)公ジョン、チャーチル(John Churchill)は英軍を都督し、伊太利、日耳曼、西班牙及ネーデルラントに戰へり、千七百四年マールボロー公ユーゲンと合し、アレンハイム(Alenheim)に於て大に佛國及バヴリアの軍を破り、バヴリアを侵略せり、其翌年日耳曼帝レオホルド一世殂し、ジヨセフ一世位を嗣ぐ、當時同盟軍の勢甚熾にして、ランリリス(Ramillies)オーテナード(Oudenarde)の戰佛軍又大に敗る、ルイ連戰連敗し、又國力耗竭せしを以て、氣頗沮喪し、平和を冀へり、然れども同盟軍聽かず、是に於てルイ大に奮激せしが、マルブラク、(Malplaque)の血戰に於て佛軍又敗る(千七百九年)、而るに此時英國に於て、ホイッグ(Wig)黨の内閣交迭し、マールボロー公の反對黨政權を握り、佛國と平和を講せんとす、會日耳曼帝ジヨセフ一世殂し(千七百十年)、弟チャールレス六世(千七百十一年より千七百四十年まで)位を嗣ぐ、同盟諸國はチャールレスの日耳曼及西班牙を合一

し、歐洲に大勢力を有するを欲せず、是に於てか千七百十二年ウトレクト(Utrecht)の條約成り、ブリ、ブ五世の西班牙及亞米利加屬地の王たることを承認せり。然れども西佛二國の王位を合一すべからざることを約せり。而して英國は西班牙より、チアラタル及ミノルカ(Minorca)嶋を、佛蘭西より、ニューフ、ウントランド(Newfoundland)ノツ、ヌスコチア(Nova Scotia)及ハドソン(Hudson)灣地方を得、フランデンブルグの撰舉公は普魯西王號を公認せられ、サウイ公はシシリイを得たり(七年の後サウイ、ニアと交換せられサウイ、ニア王と稱せり)。次て其翌年日耳曼帝も佛王とラスタト(Rastadt)及バーデン(Baden)の條約を結び、日耳曼は西班牙領子ツ、ーランド、ネーブルス、ミラン及サウイ、ニアを得、ペヴ、リア及コロンの撰舉公は其領國を還附せられ、十三年間の戦亂是に至りて其局を結べり。

ルイ十四世の晩年　西班牙王位繼承の戦争終るの翌年ルイ歿せり。王晩年にして多く子孫を喪ひ、其殂するや佛國は國債山積し、金庫空竭し、政府の信用全く地に墜ち、海軍の勢力は衰頹し、陸上は貧困と荒蕪とを以て充され、滿地凄凉として國勢甚傾廢せり。

第二節　ステュアート家の英吉利及革命

ジェームス一世　ステュアート家はエリツ、ベスを以て終り、ジェームス一世(千六百〇三年より千六百二十五年まで)立ちてステ、アート家の祖となれり。而して獨尊の權を固執せる王と、人民の權力を伸振せんとする議會との衝突は、十七世紀中ステ、アート家の下に於ける英國の形勢なり。ジェームスは本、蘇蘭王ジェームス六世と稱し、メリーとダンレーとの間に生れ、英吉利に入るに及びてジェームス一世と改稱せり。是に於て英蘇合して一となれり。王性頑愚懦弱、容貌野卑、天下を通覽するの眼識なく、固く王權の神聖にして臣民の毫も之を毀損すべからざることを信し、又常に其學識に誇り、數冊の書を著はし以て自修飾せり。此の如くなるを以て、王と人民との爭論常に絶ゆるがごとし。

火藥の陰謀　王又舊教徒を虐待すること甚し、教徒大に之に苦み、常に其籍束を脱せんとして能はせ、失望の極遂に千六百五年カイ、フ、ークス(City Bawkes)を主として叛逆を企て、王の國會に臨みて開會の典を擧るの日を期し、議事堂の下に三拾六函の火藥を埋め、一時に之を破壊せんことを圖る。然れども王の覺知する所となりて事果さず、却て峻酷なる法律によりて一層の苦慮を受るに至れり。

ジェームスと國會　王は國王神權説を固執し、壓制を施せしを以て常に國會と和せず。

然れども財務に關しては國會の協賛を経ざるを得ず、而して議會の王の請求を容れざる時に當りては、王は屢議會を解散し、遂に議會は國務に參與するの權なしと斷言し、或は獻金を徵求し、或は貴族の稱を賣買するに至れり。議會は立法徵稅其他議會に屬せる權利は生れながらにして英國人民の享有するものなることを固執し、言論の自由、身體の安全を主張し、王と抗爭せり。王の晩年に至りては議會大に其權力を伸張せり。

ジームスの外交政略 エリツ、ベスの世は英國の國威大に外に輝きしが、ジームスは懦弱にして外交政略に於て衆望を失へり。彼三十年戦争の如き、人民舉て之に加入することを勧めしも、王は西班牙の歡心を得んとし、終に其義子バラチチ、ート撰擧公フレデリクを援くること能はざりき。是を以て英國は王に至りて歐洲新教國の盟主たる位置を失墜せり。

チャールレス一世 （千六百二十五年より千六百四十九年まで） は父王に比して勇氣と政務の熟達とを具備したりしが、其王權を以て尊嚴に托せしことも、亦父王に一層の重きを加へたり。而して其后ヘンリー、タマリヤ(Henrietta Maria)は佛王ヘンリー四世の女にして舊教徒たり。大にピューリタン教徒を惡めり。又チャールレスはバッキンハム(Buckingham)公を寵し、其言一

として聽かざるをなし。此兩者王を導きて益横徑に入らしめたり。

チャールレスと國會 是より先、ジームス一世在位の時、既に西班牙と戦端を開けり。チャールレス一世位に即くに及びて遠征軍をカデ、ズ(Cadix)に出す。功なくして歸る。是に於て議會はバッキンハム公の罪を責め、之を彈劾す。事未行はれずして國會は解散せらる。其後王又佛國と兵を構へ、第三議會を招集す（千六百一十八年）。國會即「權利の請願」(Petition of Right)と稱するものを呈出し、王の猥りに税を課し人民を禁錮する等の非行を抑止せり。然れども王は猶「トンネーチ」(Tonnage)「ハウンデーチ」(Poundage)と稱する租税を課し、放恣前日に異ならず。是に於て議會はジモン、エリオット(John Elliot)を首として批難の聲益激し、王復議會を解散し、エリオット及外二名の議員を獄に下せり（千六百一十九年）。以後王は議會を招集せざることを十一年、其間ストラ、フルド(Stratford)侯ウ、ントウ、ース(Wentworth) （當時北都の地方に於て非常の勢力を有せり）及ロンドン（ロンドン）の僧正にしてカンターバリーの大僧正たるウ、リアム、ラウド(William Laud)「ピューリタン教に従はしめ」の二人用ゐられて政を輔け、高等委員(High Commission)及「スターチ、ムバー」(Star Chamber)と稱する二個の法院を起して、虐政を行ふの機關となし、以て愛國の徒不辜の輩を刑せり。シモン、バムプティン(John Hampden)も亦獄に繋かる。

長期國會　チャールス一世は蘇蘭人をして英國の教法に従はしめんと欲し、千六百三十七年強て英國々教を布かんとせり。蘇蘭人之に服せず、プレズビテリアン(Presbyterian)と稱する一團體を結びて、王に抗す。千六百四十年蘇人來り侵す。王軍資の供給より已を得ず。して國會を招集す。所謂長期國會是なり。(此國會は國會の期十三年の長歲月に亘る故に此名あり)王遂に時勢の奈何ともすべからざるを觀て、三年毎に一回の國會を開くことを約し、ストラッフォード及ラウドを死刑に處し、前の二法院を廢毀す。國會は又議員の同意なくして解散し、若くは延期することを得ざることを議決せり。王大に怒り、千六百四十二年甲兵を提けて國會に至り、ジョン・ハムフデン、ジョン・ピム(John Pym)等五人の議員を捕へんとす。市民大に起りて議員を護衛す。王遂にヨークに奔り意を戰爭に決せり。

内亂　千六百四十二年七月議會は公安の維持を名として兵を招集す。チャールス亦王旗をノッティンガム(Nottingham)に樹つ。内亂此に始る。此亂に於て國內自兩黨に分れ、其王黨に屬するものは「カヴァリアーズ」(Cavaliers)と稱し、貴族僧侶等より成り、議院黨に屬するものは「ラウンドヘッド」(Roundhead)と呼ばれ、商人職工及貴族の少部分より成る。議院黨の首將エドワード・ヒル(Edgewill)に激戦し勝敗決せず。王黨の將ルーバルト(Rup-

port)はジェームス一世の孫なり。剛勇にして善く戦ふ。議院黨の軍之が爲に大に苦しむ。王は自黨の聲援を得んと欲し、愛蘭の叛民と和し、國會は蘇蘭と同盟せり。

ピ・ーリタン宗徒の分裂　初ピ・ーリタン宗徒分れて二派となる。一を「プレズビテリアン」黨といひ、一を獨立黨(Independents)と稱す。「プレズビテリアン」黨は寺領を有する二百有餘の僧侶より成り、其信徒には國會議員の多數を有し、而して王權を制限せんとし、獨立黨は軍人多く而して王政を廢せんとなす。オリヴァー・クロムウェル(Oliver Cromwell)之が首領たり。クロムウェルはハンチントン、シャイアー(Huntingdon Shire)の紳士にして、千六百二十九年始めて撰はれて國會議員となれり。

オリヴァー・クロムウェル　クロムウェルの反對者及當代以後の數多の記者はクロムウェルを以て偽善の徒となし、外宗教に歸依して内功名の念饒々たるものとなせり。然れどもジョン・ミルトン(John Milton)の如きは盛に之を賞揚して、正直信心にして天才勇氣兼ね備はるとなせり。クロムウェル「ピ・ーリタン」教徒を精練して鐵壁軍(Ironside)と稱する一隊を組織す。鋭鋒當るべからず。王黨軍之が爲に屢利を失ふ。其後クロムウェル撰はれて陸軍中將となり、又議院黨の兵を總督す。千六百四十四年六月ナイズビー(Naseby)の戦には王黨大に敗

れてチャールズ蘇蘭に奔れり。

チャールズ弑せらる。チャールズの蘇蘭に走るや、蘇人王を捕へて國會に送致す。當時「プレスビテリアン」黨と獨立黨との間に隙を生じ、而して兵權は獨立黨の手にあり。千六百四十七年六月軍隊王を國會より取りて之を幽囚す。王各黨と商議する所ありしも、皆信せられず。乃密に蘇人と約するに「プレスビテリアン」恢復の事を以てし、以て其救援を求む。ハミルトン(Hamilton)公即蘇兵を率ゐて英國に入る。時に國內王を援けんとするもの亦多し。クロムウール悉く之を平け、又ハミルトンの兵をプレストン、パンス(Preston Pains)に破る。クロムウール國會の多數が亦王を救はんとするを憂ひ、大佐フライド(Fryd)をして兵を率ゐて國會に入らしめ、下院議員の反對者百餘名を追ふ。世に「フライドの洗制」と稱するもの是なり。是に於て下院は上院を閉鎖し、新に高等法院を建て、王の罪を糾す。王は法官の王を裁判するの權なきことを論せしが、法院は之を大罪と認め、死刑に處する旨を宣告し、遂にチャールズ王をホワイト、ホール(White Hall)宮前の斷頭臺上に弑す。時に千六百四十九年一月三十日なり。王二子あり、長をチャールズといひ、少をジェームズといふ。

共和政治

今や英國は王政を廢して共和政體(千六百四十九年より千六百六十年まで)を建設し、「ラムフ」(Ruf)

三黨の國會之を統治し、國務院に於て政を行ふ。然れども其實權は悉くクロムウールの掌握する所にして、クロムウールは強大なる兵力を以て己に反對するものを鎮壓せり。此時オルモンド(Ormond)侯バトラー(Butler)先王の遺子チャールズを奉じて旗を愛蘭に翻へす。クロムウール九月にして之を征定せり。チャールズ逃れて蘇蘭に入り(千六百五十年)王位を求めてチャールズ二世と稱す。クロムウール蘇人とダンバー(Dunbar)に戦ふて大に之を破り、又チャールズ及其兵をウイスター(Worcester)に撃ちて之を破る。チャールズ遁れてノーマンディー(Norman-
dy)に上陸す。尋て英國は荷蘭と海上の主權を争ひ戦争を開く。英國終に荷蘭に勝ちて條約を締結す(千六百五十四年)。

クロムウールの權勢 「ラムフ」黨の國會は無爲にして統治の任に堪へず、國會と軍隊との間に争を生せり。クロムウール乃武力を以て之を解散し(千六百五十二年)。自新に國會を招集す。而して其實權はクロムウールの掌中にあり。世之を稱して「プレス、ゴード、ペアーボーン」(Preston, God Barbone)の國會と云ふ(議員の中よりロンドン(議院)の革工にして、ペアーボーン(議院)と稱するものあり故に名づく)。議會はクロムウールに奉るに共和政守護主の尊號を以てし、二十五名の國務評議員をして之を助けしむ。クロムウールは議院の舊制に復し、上下兩院を建て以て立憲的政治を施さんとしたれども、議會は異

議を唱へしかば、クロムウール復之を解散し、武斷的壓制を以て政治を行へり。是に於てクロムウールの權勢益盛にして、自王號を稱せされども其實毫も國王と異なる所なく、英國の威名亦大に歐洲諸國に揚り、其隆盛再エリツ。ヘス時代の前日に復せり。パーバリー(Babar)の海賊を懲し又タスカニー公を罰し以て其英國貿易を侵害したるに報せり。千六百五十五年ジ・マイカ(Jamaica)を西班牙より奪ひ、尋て西班牙の貨船をサンタクルツ(Santa Cruz)港に焚けり。クロムウールは又熱心なる新教の保護者にして心竊に英國をして歐洲新教國の盟主たらしめんと期せり。

クロムウールの晩年　クロムウールの威權は其死に至るまで曾て減せざ。然れども英國民は既に漸く「ピリタン」教の嚴格なる儀式に倦み、武斷政治に厭き、且最共和政治に勞れ、陰然叛亂を企つるものあるに至り。終には王黨共和黨共にクロムウールに抗するの色を形せり。是を以てクロムウール常に暗殺せられんことを恐れ、毎夜室を更へて寢に就けり。會其愛する所の一女を失ひ大に憂鬱し、其後幾何もなくして「我業既に成れり」の一語を遺して死せり。

王政恢復　クロムウール死して其子リチャード・クロムウール繼ぎて大統領となる。リチャード

優柔にして其任に堪へず。幾月ならずして職を退く。後議會と武官との間に紛擾を生ぜしか、將軍モンク(Monk)之を鎮撫し、新に國會を開き、遂に先王の子チャールズ二世を迎へて王位に即かしむ。

チャールズ二世　人民既に亂離を厭ひ、王政の恢復を希ひ、相共に歡娛してチャールズ二世(千六百六十年より千六百八十五年まで)を迎へたり。チャールズ性温良なれども放肆懶惰なり。而して社會も亦往年の反動を受けて、優遊娛樂に耽り、道德全く地を掃ふに至る。王即位の始、大赦令を發し叛亂に與せしもの罪を赦せり。然れどもクロムウール等の如き弒逆者の墳墓を發し其遺骸を斬れり。王又專斷を以て法令を出し、公正なる法官を黜け、又宗教統一令を出し「プレスビテリアン」宗徒を嚴罰に處せり。

チャールズ衆望を失ふ　千六百六十五年惡疫ロンドン市に流行し、其明年市中又大火あり、火三日熄まず。而るに王宮中に宴晏し人民の疾苦を顧みず。此時に當り商業上の争に關し、荷蘭と事を生じ、敵艦ティムス(Timms)河に遡りしことあり。佛王ルイ十四世の荷蘭を攻めんとしし時に當り、英國々會は王に勸めて三國同盟に加入し、オレンチー公ウリアムを援けしめんとせしも、當時カバル(Cabal)内閣事を用ひ、佛國とドーヴーイ(Dover)の密約を

結び、舊教を英國に再興し、且佛國の賤賂を受けて荷蘭に抗することを許せり。是に於て國會は大に騷擾し、王弟ヨーク公の舊教徒なるを以て、其王位繼承の權を褫かんとし、**ダンビー**(Dunby)伯を擧げて首相たらしむ。千六百七十九年人身保護律(Habeas Corpus Act)を議決し、猥に人民を禁錮することを防遏せり。此時國會に王黨(Wigs)及民黨(Wings)の區別を生じ、後世の保守黨及自由黨の起原となれり。民黨は王の專權を憤り、王及ヨーク公を暗殺せんとし、事露れて刑せられしもの多し。

ジームス二世 ヨーク公位に即きジームス二世(千六百八十五年より千六百八十八年まで)と稱す。王亦專制を行ひ、力を舊教の恢復に竭し、一時其目的を達せしといへども、壓制を極めしを以て王黨及民黨俱に廢立を謀るに至れり。初ジームス二女を擧ぐ、長を**メリー**と云ひ、**オレンヂー公**ウイリアムに嫁す。メリー新教を奉しジームスの位を嗣くべき權あるを以て、人民皆望を屬せしが、偶ジームス太子を擧ぐ、是に於て人民益不平なり。相共に謀りて**オレンヂー公**を迎ふ。ウイリアム即軍を率ゐて**トルヘー**(Torhay)に上陸す。王危難の逼りしを知らず。是に至り遽に憲法に服従せんことを乞ひしも、復其功なく、遂に佛國に遁れたり。

革命、ジームス二世の佛國に遁るゝや、國會はウイリアム及メリーを立て、國王及女王

となし、前王政に戒心する所あり、**權利條規**(Bill of Rights)を承認せしめ、國會の承諾を経ずして、租税を徵集し、常備兵を置くことを禁し、且國會の討議を自由になす等、凡て人民の權利及自由を鞏固にせり。

ウイリアム三世 ウイリアム三世(千六百八十九年より千七百二年まで) 及**メリー**即位の始、廢王ジームス、ルイ十四世の援を得て愛蘭に來寇す。ウイリアム之を**ボイン**(Boync)河に破る。ジームス又佛國に去れり。(千六百九十年)ウイリアム能く政治を勵み、且軍事に熱達せりといへども、性質寡欲冷淡なり。常に佛王ルイ十四世の勢威を挫かんことを欲せしが、ルイのジームスを援くるに及ひ、遂に佛國と戰端を開き、荷蘭及日耳曼諸國と結び、佛國の艦隊を苦めしこと尠からず。千六百九十七年の**ライスウイク**の條約を結び、佛王をしてウイリアムの英王たることを承認せしめ、一日戰局を畢へり。然れども西班牙王位繼承戰爭起るに及び、ウイリアム又佛國に抗せんとし準備の半にして歿せり。

女王アン ウイリアム歿して嗣なし。メリー(千六百九十一年歿せり)の妹**アン**(千七百二年より千七百十四年まで)位に即く、女王小心にして靜淑なり。其治世中重要なる事件は千七百七年英蘭及蘇蘭合して大英國(Great Britain)となりしこと是なり。是より先ジームス一世兩國を統一せしといへど

も、各自國會を開設して相反目するの状ありしか、是に至り兩國の政事一堂に會議せらるゝに至れり、女王又西班牙王位繼承戦争に關し、名將マールボロー侯大に英國の威名を輝せり、當時王黨民黨の軋轢甚しく、前者は平和を主とし、後者は戦争を唱へ、後者遂に勝を制して内閣を組織し、ウトレクトの平和條約を結へり、當時英國は文學の隆盛を以て著はれたり、千七百十四年アンヌとして嗣なく、ステアート王統絶ゆ、ハノーヴァーの撰擧侯チーリ一世(ジームス二世の曾孫)王位繼承令により入りて英王の位に即けり。

第三節 露西亞の興起及北方戦争

ピーター以前の諸帝 露西亞はアイヴン大王(千五百〇五年殂す)蒙古人の羈束を脱し、其疆土を擴めしより國勢次第に隆盛となり、アイヴアン四世(千五百三十三年より千五百八十四年まで)に至り、ツァー(Czar)皇帝の義の稱を用ひ、親衛軍を置き以て常備軍の基礎を作り、カツン(Kasim)及アストラカ(Astrakhan)を征じ、コーカサス山に達せり、又コサック(Cossack)人をして始めて西比利亞(Siberia)を侵略せしむ、其子フオドル(Fedor)に至り、ルーリク家の王統絶え、内は王位繼承の争起り、外は敵國の侵寇を蒙り、國勢振はざりしが、千六百十三年ロマノフ(Romanoff)家

のミカエル(Michael)撰はれて王となれり、是を現今露西亞皇室の祖となす、ミカエルの子アレキシス(Alexis)(千六百四十五年より千六百七十六年まで)に至り、波蘭人を破り、コサック人を服従せしめ、又支那、彼斯と通商せり、長子フオドル(千六百七十六年より千六百八十二年まで)立て無限帝政の基礎を創む、フオドルの後アレキシスの幼子ピーター大王(Peter the Great)(千六百八十二年より千七百二十五年まで)位に即くに及びて、露國始めて大に開明に赴き、歐洲史上に勢力を有するに至れり。

ピーター大帝 ピーターは初異母兄アイヴンと共に位に登る、アイヴン愚かり、ピーターの異母姉ソフィア陰に國事を執る、時にピーター羅典語、日耳曼語を研究して大に學識を積めり、ソフィア密にピーターを除かんと欲す、ピーター之を寺院に幽閉し、而して獨り政權を執れり、時に年十七(千六百八十九年)、ピーター歐洲諸國の文明を輸入し、以て露國の文化を開進し、其境土をバルチック海より黒海に擴め、以て海軍の勢力を盛にせんことを企圖し、外國より數多の技術家、水夫、士官等を招き、兵式を改善し、造船術を奨励し、其他政治上の改革を施し、こと頗多し、露國は從來船艦の碇泊に充つへき一良港を有せざりしを以て、千六百九十六年ドナ(Don)河を下り黒海の要地なるアゾフ(Azof)港(當時土耳其人の領する所)を取れり、是よりして帝は自造船術を研究し、且其企圖に必要な知識を得んと欲し、國政を一二の貴族に委

ね、千六百九十七年本國を發し日耳曼を經、荷蘭に入りツァーランド(Zaandam)造船所の職工となり、孜々として其職務に勉勵し、兼て他の諸藝を研究せり。去りて又英國に渡りウリアム三世の優遇を受け、深く其海軍の技術を習得し、再荷蘭に歸り、塙都ヴェーナを経て、伊太利のヴェニスに到らんとししとき、本國の内亂を聞き俄に國に歸へり。是より先露國貴族のピーターの改革を喜ばず、且外國人に對して惡感情を抱けるもの、ピーターの虚に乘し親衛軍を懲懲し遂に内亂を起し、なり(千六百九十八年)ピーターモスコに還り、直に叛徒を平け、之を嚴罰に處せり。是に於て大に社會上の改革を行ひ鬚髯を薙らしめ、歐洲文明國の服裝を着けしめ、婦女の位置を高め、宗教信仰の自由を許せり。又學校を起し、活版所を設け、軍隊を組織し、軍艦を製造せり。内治既に其緒に就きしを以て、丁抹、波蘭と約して瑞典を略し、以てバルチック海に勢力を張らんとす。

波蘭及瑞典の形勢 波蘭はジャゲロン家最後の二王に至り、其疆土東海より黒海の濱に達せり。千五百七十二年ジャゲロン家の王統絶えしより、波蘭は純然たる撰舉王國となり、貴族權勢を擅にし國土日に削られ、勇散なるジョン・ソビースキー(John Sobieski)王と雖も復其勢を恢復する能はず。サクソン公オーガスタス二世(千六百九十七年より千七百三十三年まで)の選はれて王と

なるに及びて、嘗て瑞典より奪はれたる境土を回復せんと欲し、露西亞と聯合するに至れり。瑞典は三十年戦争以來北方の最強國となり、ガスタヴスアドルフスの後其女クリスタイン王位に登る。クリスタイン位を去りて其姪チーレス十世(千六百五十四年より千六百六十年まで)位に即き、波蘭及丁抹を伐ち大に其境土を擴む。其子チーレス十一世を經、其孫チーレス十二世(千六百九十八年まで)十六歳にして位に即けり。チーレス年少氣鋭アレキサンダー大王の偉業を慕ひ、軍事の遊戯を好み、其舉動は一時北方を震動せり。

北方戦争(千七百年より千七百廿一年まで) 瑞典王チーレスの幼なるを侮り、露西亞帝ピーター波蘭王オーガスタス二世及丁抹王フレデリック四世同盟して瑞典を伐たんとす。是に於て有名なる北方大戦争起る。丁抹王はシレスウイ、ヒを襲ひ、波蘭王はリヴィニア(Livonia)に進み、リガ(Riga)を劫し、露帝はエストニア(Estonia)に侵入し、ナウヰ(Narva)を圍めり。チーレス精兵を率ゐ急に丁抹に進入し、コーペンハーゲン(Copenhagen)に迫り丁抹王をして和を講せしめ、直に轉して露軍に向ひ僅々八千の兵を以てナウヰを圍める十倍の敵兵を撃ち大に之を破り、更に其鋒を轉して波蘭に入り連戦連勝數年にして全國を征略し、スタニスラウス、レスクツ、ンスキ(Stanislaus Tasczynsky)を立て、王となし(千七百〇四年)サクソニーに進み、オーガスタスに

迫りアルトランスタット(Almstadt)の和約を締結せしめ、波蘭の王位を退き露國との同盟を解かしむ(千七百六年)。此間ピーター帝は敗軍を糾合しバルテック海の濱に於ける瑞典の領地を侵略し、シユリュセルフルク(Schleselburg)及クロンスタット(Kronstadt)城を築き、又チウ(Narva)河口にセントピータースフルク(Sv. Peterburg)府を創め、モスコイ及其他の都府より貴族商人工匠を移住せしむ(千七百三年)。チーレスは又ピーターの位を廢せんとし千七百八年軍を驅りて露國に侵入し、直にモスコイを衝かんとす。途上一の敵兵を見ず恰無人の地を行くか如し。チーレスコサックの酋長マツパ(Maxuppa) 當時チーレスの力を假り露帝の羈絆を脱せんことを謀るの爲に道を誤られ、ユーケレーン(Ukraine)に進めり。此地方は深林荒野にして瑞典の軍飢寒交至り大に困難せしが、遂に進んでフルトウ(Pultowa)府を圍めり。ピーター大軍を以て來援しチーレスと激戦し瑞典の軍全く撃破せられチーレス三百人を以て遁れて土耳其に奔れり(千七百九年)。是に於てオーガスタス二世は再波蘭を得、丁抹王は日耳曼に於ける瑞典の領地を略しピーターはフィンランドに侵入せり。チーレス土耳其人の厚遇を受け留まること五年、其間土耳其人を煽動し露西亞と戦ひ、遂に千七百十一年露軍をフルート(Pultu)に窘迫せり。ピーター皇后カスリンの謀を用ひ厚く土耳其に賂ひ其嘗て侵略せしアソフを返付し以て和議を講せり。千

七百十四年チーレス俄に本國に歸る時に瑞典大に疲弊しハノーヴァー及普魯西又同盟してチーレスに抗す。チーレス國情をも願みず丁抹より那威を略奪せんとし進軍二回、遂にフリードリヒスハル(Friedrichshall)城を圍み彈丸に中りて死せり(千七百十八年)。此戦争の結果は瑞典は多く地を削られ、ハノーヴァーはアレメン及ウーデンを取り、普魯西はホメラニアの大半を得、露西亞はニスタット(Nystat)の約條(千七百二十一年)に於てリヴニアエストニアインゲルマンランド(Ingermanland)を得たり。

露國の進歩 今や露國は瑞典に代りて北方の雄國となれり。ピーターはセント、ピータースフルクに政府を置き、溝渠道路及港灣を作り商業航海製造及工業を盛まし、學校を建て教育を奨勵し、礦山を開て國財を富ましめ、政府の組織を革新して王室を尊くし、又晩年彼斯人と戦ひ裏海海岸の地を得て國境益廣大となれり。ピーターの風儀及政治は未野蠻の陋習を脱せざるものありといへども、而も其國を開明強盛に導きし功は實は莫大なりとす。國民尊號を奉りて大帝と稱する亦以あるなり。

第二章 フレデリック大王時代

第一節 フレデリック大王

普魯西の興起 日耳曼帝國の勢衰ふるに際し、普魯西王國新に勃興せり。普魯西王國は撰舉候國フランケンブルグ及公國普魯西の合一より成る。普魯西は初シウルトフリートル(Schweriner)の「オルダー」(騎士の組合)の爲に征服せられ、千二百二十七年以來テートニクオルダーの領地に歸し、基督教及日耳曼の開化を移植し其境域益大となりしが、千四百六十六年西普魯西は波蘭の爲に略奪せられ、東普魯西は其附庸となり、千五百二十五年フランケンブルグのアルバート波蘭より東普魯西を得て世襲公國となり、義子フランケンブルグの撰舉候ジョン・シギスマント(千六百十八年)に至り、東西普魯西を合一せり。是に於て普魯西王國の基礎成る。フレデリック、ウイリアム(大撰舉侯)位に即くに及びてウストフリアの條約に於て數多の土地を得、又瑞典王チ、イレズ十世を援けて波蘭を伐ち、普魯西の獨立を確定せり(千六百六十年)。フレデリック、ウイリアムは常備軍を設け、商工業を奨励し、又數多の佛人及荷蘭人を移住せしめ以て國內の文化經濟を發達せしめ、國勢富強當時の日耳曼諸侯其右に出づるものなし。フレデリック三世嗣き立ち西班牙王位繼求戦争の時日耳曼帝を助けし功

フ レ デ リ ッ ク 大 王 時 代

を以て千七百〇一年ケーニグスベルグ(Koenigsberg)に於て王位に登り、フレデリック一世(千七百一年より千七百十三年まで)と稱す。是に於てフランケンブルグ撰舉候國は普魯西王國となり。フレデリック、ウイリアム一世(千七百十三年より千七百四十年まで)繼きて位に即く。王性剛健文事を喜ばず、專意を軍制に注ぎ大に兵數を増加せり。然れども舉措法に合ひ勤儉用を節せしを以て、其殂するに及び國富み兵強く、將に歐洲に雄飛せんとするの勢を顯せり。王に次きて位に即きしものは有名なるフレデリック大王なり。

フ レ デ リ ッ ク 大 王

フレデリック二世大王の即位 フレデリック(千七百四十年より千七百八十六年まで)は七歳に至るまで、佛蘭西婦人の教育を受け、長して佛蘭西文學の書を好み、又詩歌管絃を嗜み其性行漸々父王と背馳するに至る。偶、英吉利王ジョージ二世の王女と婚するを拒み父王の譴怒に遭はんことを畏れ、逃亡を謀り、事露はれ囚へられて死刑の宣告を受く。父王の怒り釋くるに及びフランスウーリック(Brunswick)侯の女と婚し、ラインスベルグ(Rheinsberg)に於て學業に身を委ね、數多の學者と應酬せり。嘗て佛譯の古文書を讀み古代希臘羅馬の英將を追慕し慨然たりしと云ふ。千七百三十四年波蘭王位繼承戦争の時始めて軍に出で大に其將才を著し、父王の殂するに及びて王位に登る。フレデリックは父王の經營せし秩然たる國

家に君臨し、巨万の財富と精銳の兵士とを享有し、雄心勃々將に大に其力を武事に用ひんとせり。

奥太利王位繼承戰爭(千七百四十年より千七百四十八年まで) 日耳曼帝チーレス六世殂し(千七百四十年) 皇女マリ

アテレサプラグマテ、クサンクシオン (Pragmatic Sanction) (チヤーレス六世の定むる所にして奥太利王國は男統無きときは女子の即位を得る)

と稱する法律に由り位に登り奥太利王國(匈牙利、ポヘミア及)を領有せり。是に於て國內の諸侯難を構ふるもの多く、フレデリックも亦シレシア(Prussia)を以てフランデンフルダ家の舊領

なりと稱し、兵を率ゐてシレシアに入る。是を第一シレシア戰爭(千七百四十年より千七百四十二年まで)と稱し、モ

ルウ・ツ(Molwitz)の戰に於て上下シレシアの大部を征服せり。時にバヴーリアの撰擧侯チヤ

ーレス、アルバートも亦奥太利王位繼承の權あることを主張し佛國の援助を得、ポヘミア及

奥太利を侵略してポヘミア王となり、尋て日耳曼帝位に即きチヤーレス七世と稱す(千七百四十二年より千七百四十五年まで)

是に於てマリア、テレサ身を匈牙利に投じ其熱心なる救援を得、バヴーリア軍及佛

軍を奥太利より驅逐し、バヴーリアを侵略せり。千七百四十二年フレスロー(Breslau)の條約に

於て、女王はフレデリックにシレシアの地を與へたり。是其抗敵の勢を殺かん爲なりしなり。

既にしてポヘミアも亦殆ど女王の手に歸せり。千七百四十三年女王英王チョーチ二世と結托

し、デツテックゲン(Dettlingen)に於て大に佛軍を破る。サーディニア、サクソニーも亦此同盟に加

り事端將に大ならんとす。佛國は直に英國及奥太利に對して開戦を布告せり。フレデリ

ック二世はシレシアの領地を確定せんとし、又チーレス七世と結び女王に對し第二シレシア

戰爭(千七百四十四年より千七百四十五年まで)を開き大軍を率ゐるポヘミアに侵入せり。此に由りてチヤーレス七世

は復バヴーリアを定むることを得たり。チーレス殂して其子マキシミリアン・ジョセフ(千七百四十五年)

十五年女王と和し奥太利王位繼承の權を拋棄し、其夫を推撰して帝位に即かしむ。是を

フランシス一世(千七百四十五年より千七百六十五年まで)と稱す。此間フレデリックはサクソニー人と戦つて大に之を

破り首府ドレスデン(Dresden)に入りマリア、テレサと條約を結び、復シレシアを得。フランシス一世

の帝たることを是認せり(千七百四十五年)。其後猶チスアールランド及伊太利に於て戰爭熾まざりし

が、終に千七百四十八年アーヘンの條約に於て各國其侵地を還付し、フレデリックはシレシア

を得、マリア、テレサは、プラグマテック、クサンクシオンに因り奥太利王國を領し、伊太利に於ける二

三州をサーディニア及西班牙に割與し、以て奥太利王位繼承戰爭の局を結べり。

七年戰爭(千七百五十六年より千七百六十六年まで) フレデリック大王シレシアを取りてより八年の間專國力の増

進を計り、以て大に爲すあらんとす。マリア、テレサも亦常にシレシアを恢復せんと欲し遂に

王 大 タ ッ ヲ デ レ フ

代 時 王 大 タ ッ リ デ レ フ

第三編 近世史

三九七

大同盟を組織し、露西亞(女帝エリサベス)佛蘭西(ルイ十五世)サクソニー(オーガスタス二世)と力を戮せ以て普魯西を厭せんとす。是時に當りてフレデリックを援くるものは唯英王ジョージ二世とヘッス、フランシウ、クの二國あるのみ。今やフレデリックは全力を振つて各國同盟に當らんと決心し、先サクソニーに進入して之を征服せり。千七百五十七年に至り瑞典も亦奥太利同盟に加り、其數凡五十萬に達す。フレデリックは二十萬の同盟軍を以て之に當さるへからず。サクソニー征服の後ポヘミアに入り、ブラウグの戦に於て大勝を得しか、**コリン(Kollin)**に於て奥軍の爲に破らる。是時佛軍は西境を壓し露軍は東境に迫り、フレデリックは實に困難の地に立てり。然れどもフレデリックはロスバハ(Rosbach)に於て三倍の奥佛聯合軍を破り、又ロイテン(Liegnitz)の大勝利に由り一旦失ひたるシレシアの地を回復せり(以上二大戦は千七百五十七年に在り)。是に於てフレデリックの英名遠近に轟き、英國國會は之に巨萬の軍資を贈らんことを議決せり。千七百五十八年フランスウイグダ公フールディナンド英兵の援を得、佛軍をライン河外に驅逐せり。フレデリックはツェルンドルフ(Zorn-dorf)に於て大に露軍を破りしが、ホホキルヒ(Hochkirch)の戦大に奥軍に破られたり。千七百五十九年はフレデリックの最不幸を極めし年にしてクニルズドルフ(Kunersdorf)に於て奥露連合軍の爲に撃破せら

れ、ドレスデンを奪はれ、大將フランク(Mark)は一万二千の兵を以て奥軍に降るに至れり。當時フレデリックは實に絶望の極に達し其宰相フンケンスタイン(Finkenstein)に贈れる書(萬事乞ふ王族を救済せよ此に永訣す)の如きは以て其窘窮の狀を想見すさべなり。千七百六十年リーグニツ(Liegnitz)の戦に於てシレシアを復せしといへども奥露の軍はベルリン(Berlin)を圍み普魯西を蹂躪せり。然れども**トールガウ(Torgau)**の戦に於て再サクソニーを得以て少しく其勢を回復せしが、千七百六十一年英王ジョージ二世の殂せし以來英國はフレデリックの援軍を止め、又西班牙の新に奥太利同盟に加はるあり、フレデリックは大敵を四方に受け嚴乎たる決心を裝ふといへども、内心は實に失望の域に沈淪せり。然るに天未其運を絶たず、フレデリックは偶然の好機に遭遇せり。千七百六十二年露國の女帝エリサベス殂してピーター三世の位に即けること是なり。ピーター素とフレデリックと好きを以て直に和を講し且之を援く、ピーター幾何もなく貴族の爲に害せられしが、皇后カスアリン位を繼ぎフレデリックを援け、瑞典も亦普魯西に與せしを以てフレデリックの軍復大に振ふ。是時奥太利同盟の諸國國力疲弊の爲に平和を望むもの多く、遂に千七百六十三年二月**フリーベルトスフルク(Freiburg)**の條約を結び、戦亂の局を終へ、フレデリックは依然シレシアを領し歐洲五大強國の一

に列するに至れり。此年英佛も亦ハリの條約を以て平和を締結せり。

フレデリック大王の晩年 七年戦争は各國の民命を失ひ土地を荒蕪せしこと甚しく、普魯西は其弊を受くること殊に大なり。是故にフレデリックは孜孜として其瘡痍を療癒せんと欲し、若干年の間各種の租税を免し、植民を入れて荒廢の地を開墾せしめ、或は牧蓄鑛業を奨励し、或は商業を保護し、其他軍備を擴張し法律を改善し、戦死者の孤兒寡婦を救恤せし等至らざる所なし。又波蘭の第一分割以來其疆域益大となり、晩年に及ひては國庫充實し、人口増殖し國勢昌盛に赴けり。大王又音楽詩歌を嗜み、好んで學者と交通し、佛語を以て數多の書を著はせり。當時數多の學者詩人輩出し日耳曼文學の光輝を發揚せり。大王歿して姪フレデリック、ウイリアム二世位を嗣けり。

第二節 露國女帝カスアリン二世及波蘭の分割

カスアリン二世 露國はピーター大帝の後數世を経て女帝エリサベス(大帝の女)位に即き、歿して姪ピーター二世繼ぎ立つ幾ならずして弑せられ、其后カスアリン(千七百六十二年より千七百九十六年まで)位に即き大女帝と稱す。カスアリンは大帝以後の英主にして大に其疆土を開拓せんと欲し、

寵將ポテムキン(Potemkin)を遣し土耳其を伐ち、クリミア(Crimea)を略し、鞏韌人の所領を掃蕩し、且自由に黒海に達するの路を開けり(千七百八十二年)。其後第二土耳其戦争を起し又大に其所領を擴張せり(千七百九十二年)。然れども露國の勢力は波蘭の分割によりて愈大となれり。

波蘭の第一分割 波蘭はオーガスタス二世歿してより王位繼承の亂起り、遂にサクソニーのオーガスタス二世(オーガスタス二世の子)撰はれて王となれり。オーガスタス三世の死後露國女帝の寵人スタニスラウス、ホニアトースキイ(Stanislaus Poniatowski)波蘭王に撰舉せらる(千七百九十四年)。王文弱にして氣力に乏し、故に露國の使臣ワルソー(Warsaw)に在りて政務を指揮せり。是に於て波蘭の貴族は兵を擧げて露國に抗するに至る。女帝普魯西のフレデリック大王の發議を賛し普國及奧太利女帝マリア、テレサと約して波蘭を分割せんとし同盟軍を起せり。波蘭は多方之を抗拒せしといへども力敵せずして遂に三國の爲に多くの地を分割せらる。此を第一分割とす(千七百九十二年)。

第二分割 露國と土耳其との戦争の間波蘭は露國の壓制を脱せんとし、新憲法を制定し王位はサクソン家の世襲に歸すべきことを布告せり。然れども新舊兩黨の争起り遂に又外敵の侵入を誘起するに至り、露國は軍を進めて波蘭に入る。愛國黨の首領コスシア

スコー(Kosinski)兵を擧げて之に抗せしも其効なく、遂に第二分割(千七百九十三年)となり、露普は第一分割の殘餘の地を分有し、波蘭は僅に昔時の三分の一の領地を有するに至れり。

波蘭の滅亡 露普は鎮臺を置きて其領土を守れり。是より於て波蘭人民は悲憤激昂、**コスシアスコ**を戴き各所に蜂起せしが、敗餘の小國固より大國の強勢は敵するを得ず。波軍一時猖獗を極めしも忽にして露、普、奥三國同盟軍の爲め挫折せられ、**コスシアスコ**は「波蘭亡びたり」との一絶叫を遣して虜となり、**ホニアトスキ**は王位を廢せられ波蘭は全く三國の分割する所となりて滅亡せり。實に千七百九十五年なり。露國は波蘭の分割に由りて直接に歐洲諸國に通ずる道を開けり。嗚呼無名の甚しき波蘭分割の如きものあるか。滅亡の悲酸なる波蘭末路の如きものあるか。強者の權を恃み國際公法を蹂躪すること一は何を此極に至れるや。

第三節 ハノーヴァー家の英國

ハノーヴァー家 女王アン殂して嗣なし、**ステアート**家の王統此に絶え、ハノーヴァーの撰

舉侯**ジョージ一世**(千七百十四年より千七百二十七年まで)迎へられて王位に即ぐ。ジームス一世の曾孫なり。之を

ハノーヴァー家の祖となす。現時に至るまで英國を統御せる王家是なり。王毫も英語を解せず。性質冷淡にして且暗愚不徳なり。英國よりも深くハノーヴァーを愛せり。王本、民黨

に依て迎立せられしを以て其大臣は皆民黨より取り王黨を敵視せり。王黨は**ジームス、エドワード**(**ジャコバス三世、ジョージ**)を推して王位に即かしめんとし、**ハイランド**及**ノースランド**地

方より起る(千七百十五年)之を**チャコバイト**(**Jacobites**)黨と稱す。然れども忽ちして王の爲に討平せ

らる。此時英國民は蘇蘭人**ロー(Loch)**に欺かれ、南海商社を組織し以て南亞米利加の商權を掌握せんとし、始は盛況を呈したりしが遂に大に失敗して其害を蒙りしもの甚多し。下院大に力を盡し漸く其損失を恢復することを得たり。所謂南海の泡沫是なり。此時**ロバート、ワルホール**(**Robert Walpole**)宰相たり。才略なく長く職にあり(ジョージ一世及二世に歴任す)。然れども常に平和自由の政略を施ししを以て國內昌盛なりき。

ジョージ二世 **ジョージ王**(千七百二十七年より千七百六十年まで)年四十五にして位に登る。王節儉にして戰を好む。然れども其性質に至りては父王に似たり。王亦其郷里を愛するの念厚く、動もすれば大陸の事に關與す。奥太利王位繼承戰爭の時奥國を援けて親しく戰に臨めり。千

七百四十五年チ、イレズエドウ・ードステ・アード (ジョージムスエドウ・アードの子) 英國に寇し、プレストン、バンス (Prston Pans) に於て英軍を破りしが、千七百四十六年 カルローデン (Calloden) の戦に於て ステ・アード 大に敗れ、ジョ・コバイト 黨罪せらるゝ者多し。王又七年戦争に與りて佛蘭西と戦へり。戦地は亞米利加及印度地方なり。彼 ロバート・クライヴ (Robert Olive) が ブラ・シー (Bra-
マシー 印度に在り) に於て大勝利を得て (千七百五十七年) 佛軍の勢力を撲滅し、英國が東洋に於ける主權を握るに至りしも、亦此時に在り、ウイリアム・ピト (ウイリアム・ピト) ロードチ・サム 出で、國政を執るに及ひ、偉才卓識能く國務を處理し、剛毅なる政略の下に英國をして二大國を得せしめたり。北亞米利加及印度に於けるものは是なり。

チーチ三世 チーチ三世 (千七百六十年より千八百二十年まで) は ハノーヴー ー 王統中英人にして始めて位に登りしものなり。王品行正直英名の名ありしと雖、見聞狹隘度量人を容るゝに足らず。終に狂疾を發するに至る。王の治世に至り ハリの條約 (千七百六十三年) を以て亞米利加に於ける佛蘭西との戦争其局を結び、英國は カナダ (Canada) 及數多の西印度諸島を得たり。又東印度に於ては クライヴ に次ぎ ウアーレン・ヘースティングス (Warren Hastings) 出でて漸々印度の諸王を征服し、其領域遂に北は ヒマレヤ山 より南は 錫蘭 に及び、西は インダス河 より東

は イラウチ に及び二億萬の人民を包有するに至れり。然れども クレンウール (Crenville) ノース (North) の如き無識の士相繼ぎ宰相となるに及び其施政宜しきを失ひ、亞米利加獨立戦争破裂し、英國は其植民地を失ふに至れり。 チョーチ 王又晩年に至り大に佛國革命に關せり。此時 フォクス (Fox) 及び ピット (老ピットの子) の兩政治家出づ。前者は民黨の首領にして後者は王黨の總理たり。ピット年二十四にして相となり、十八年間 (千七百八十三年より千八百一年まで) 政權を握れり。

第四節 北米合衆國の獨立

英國植民地 亞米利加發見以來佛蘭西人、西班牙人及荷蘭人等、盛に植民事業を起ししが、英國も亦十六世紀の末年よりして漸く此に注目するに至り、千五百八十三年 ハムフレイ・チルハート (Humphrey Gilbert) ニューファンドランド (Newfoundland) を取り、翌年 ウオーター・ラレー (Walter Raleigh) ヴァージニア (Virginia) を取る。後千六百二十年頃に至りては ニューイングランド (New England) 地方を開拓し、ピリタン 宗派の僧侶英國政府の爲に追放せられたるもの、始めて プライマウス (Plymouth) に植民し。次で又 マサチューセット (Massachusetts) に

移住せるピ、リタン宗徒あり、兩者相合して植民地漸く盛大ならんとするに當り、英國政治の混亂甚たしきを以て移住民益多く、十年間にして二萬餘人を増加し其相踵きて來る者はメリーランド (Maryland) ハムプシャー (Hampshire) 等に植民地を開き其勢益盛となり、千六百六十四年に至ては荷蘭人と植民事業の争闘を生じコネチケット (Connecticut) より之を驅逐し、其市府ニー、アムステルダム (New Amsterdam) を奪ひニーヨーク (New York) 改稱せり。

英佛植民戦争 カナタ以南の英國植民地既に十三所ありて其勢日に旺盛なり、佛國植民地も亦カナタ地方よりして益其境域を擴張し英國植民地と相對して盛況を競へり、故を以て英國と佛國との戦端起る毎に亞米利加植民地に於ても亦必争闘あり、而して佛人は土民と親しかりしを以て之が爲めに大に援助を得たり、然れども英人の勢力遙に佛人の上に出てたるを以て佛人常に之が勢力を殺かんと欲す、千六百八十九年佛人印度人と共に英國植民地スケネケッタデー (Schenectady) を襲ひ戦端を開けり、爾後戦亂相續さ彼千七百四十四年より殆二十年間に涉れる七年戦争の間は、亞米利加に在りても亦英佛大に戦へり(千七百五十六年より千七百六十三年まで)、之を「オールドフレンチ」(Old French) 戦争と稱す、ワシントン

(Washington) 亦軍中にあり、佛軍の將モントカラム (Montcalm) 屢英軍を破る、時に英將ウルフ夜に乗じて佛人の堅砦ク、ベク (Quebec) 亞米利加チアラタルーの名あり を襲ひ之を抜く、然れどもモントカラム、ウルフ共に軍中に死せり、後バリの條約に於てモントリアル (Montreal) 及カナタ皆共に英領に歸し、英國植民地は益昌盛に趣けり。

獨立以前の形勢 佛人との戦争に勝利を得しより十三州の人民殆二百萬に上れり、其政府の情態は各州相異れりと雖、自由を慕ふの情に至りては一なり、國勢は駭々として日に開明に趣き、農業の如きは其進歩最著るしく、米、麥、烟草、綿等盛に諸州より産出せり、普通教育は大に起り、ハーヴァード (Harvard) 大學(千六百三十六年)、ウイリアムズ大学(千六百三十九年)、エール (Yale) 大學(千七百) 等設立せられ、千七百四年に至りては米國最初の新聞「ボストン・ニュースレター」(Boston News Letter) 發刊せらる、宗教は概新教を信奉せり、人口三十萬を有せるフィラデルフィア (Philadelphia) は當時の最大市府なりき。

植民地の壓制 亞米利加植民地の益盛なるに隨ひ、本國政府は永く之を屬國となさんとするの精神強く、大に其干涉を繁くし漸く壓制の政略を取り、法律を制定して植民地の通商は專之を本國に限り、加之生産物の上にも重税を課せんとす、千七百六十五年

英國國會は本國戰亂の餘弊を醫せんとし印紙條例を發布し、以て植民地の膏血を絞らんとせり。是に於て植民地諸州皆激昂し、ヴァージニア及マサチーセツト之が首唱となり、遂に同年ニニューヨークに九州の大會を開き植民地課税の不正なることを論斥し、書を裁して之を英王及國民に訴へたり。本國に於てもウルリアム・ヒト、フックス等植民地人民の言を賛し、筆に口以て之を争ひしかば、印紙條例は遂に廢止せられしと雖、翌年復茶、硝子、紙等に課税し一層人民を抑壓せり。植民地人民相團結して共に課税品を用ゐざることを決し、ボストンの壯士數名印度人に粉裝し、ボストン港に泊せる英國商船を襲ひ、三艘に積載せる茶を悉く海中に投せり(千七百七十三年)。此報の英國に達するや、國會はボストン港條例と稱するものを議決し、食品外の貨物をボストン港より輸出入することを禁せり。而して將官ゲーチ(Gates)を以てマサチーセツトの知事となし、軍威を以て之を壓服せんとす。是に於て植民諸州の代議士は大にフレデリックに會し、力を極めて本國の措置に抵抗し、且兵備を増さんことを議決し、同時に書を作り英王國民及カナダ人民に與ふ。書中亞米利加人は英王及國會の專横に依り其固有の權利を棄つる能はざることを痛論せり(千七百七十四年)。

戰爭の發端

千七百七十五年四月英將ゲーチ植民地人民の武器をコンコルド(Concord)ボストンに集むるを聞き、兵を遣はして武庫を略奪せんとして、路レキシントン(Lexington)ノ近傍を過ぎ土民軍の合集せるを見て數人を銃殺す。是れ獨立戰爭の發端にしてコンコルドに於ても兩軍多少の死傷あり。是よりして諸州人民一時に蹶起し、第二聯合大會をフィラデルフィアに開きヴァージニア人ジーチ、ワシントンを撰み軍務の總督となし、六月英軍とバンカー・ヒル(Bunker Hill)に激戦し、米軍敗れしといへども英軍亦死傷多く、遂にボストンを棄つるに至れり。

獨立の布告

千七百七十六年七月四日十三州議員大會の決議を以て亞米利加植民地の獨立を布告せり。此告文はトーマス・ジェファーソン(Thomas Jefferson)の起草せる所にして、此に由りて米人の權利を明確にし、大に歐羅巴諸國民の援助を得るに至れり。是より先有名なる理學者フランクリン(Franklin)使節となり、佛國に至りて援助を乞ひ、大に佛人の主義に合ひ、ラファエト(La Fayette)其他同主義の貴族の如きは海を越えて赴援し、又日耳曼人カルフ(Karl)男ストイベン(Steuven)波蘭人コスシアスコの如きも數多の兵を率ゐて來援せり。然れども英國も亦日耳曼の諸侯と約しヘッス、ハノーヴァー、フランスウ、グ等の兵を備

ひ新世界に向はしめたり。

獨立戰爭 **ワシントン**軍務を總督し能く其任に堪えたりといへども、武器備はらず兵士未練熟せざりしが爲め、數々英將の破る所となる。**ワシントン**、**トレント** (**Trenton**) に於てヘースの軍を破り、**プリンストン** (**Princeton**) に於て英軍を破りしといへども (千七百七十一年一月)、**ブランドイ**、**ウイン** (**Brandy wine**) 河に於て英將 **コーンウ**、**リス** (**Cornwallis**) の破る所となり、**フレデル**、**ア**を陥らる (同年八月) 然れども **サラトガ** (**Saratoga**) の戰米軍大に英軍を破り、英將 **バーゴイン** (**Burgoyne**) 六千人を以て米將 **ゲイツ** (**Gates**) に降る (同年十月十七日)。此捷利は大に外國人民の心を動し、翌年佛國は公然合衆國の獨立を承認して之と同盟を結ぶに至り、其翌年西班牙も亦此同盟に加はれり。是に於て兩軍の形勢全く一變し合衆國同盟軍常に勝利を得、遂に千七百八十一年十月 **ワシントン** 及 **ひラフ**、**エト** は米佛の同盟軍を以て **コーンウ**、**リス** を **ヨークタウン** (**Yorktown**) に圍む。 **コーンウ**、**リス** 拒く能はず、遂に其全軍七千人を以て降る。是に於て勝敗の機全く決し、英國前内閣は辭職し **少ビト**、**フ**、**クス**、**バーク** (**Burke**) 等之に代り、千七百八十三年 (一月及九月) **パリ** 及 **ヴェルセル** (**Verailles**) の平和條約に於て亞米利加合衆國の獨立を承認せり。

新憲法

合衆國は建國日淺く各州通有の法律なく従ふて政務の亂雜を免れざるを以て確固たる中央共和政府を建てんとし、千七百八十七年各州の議員 **フレデル**、**ア** に大會を開き、新憲法を議定せり。是主として **ハミルトン** (**Hamilton**) の力に因る。此憲法によれば共和政府の大權は大統領と國會とに存し、大統領は四年毎に之を撰舉し行政權を握り陸海軍を都督す。國會は立法の權を握りて上下兩院より成る。上院即元老院は各州より二名の議員を撰舉して之を組織し、下院は各州より其人口に應じて撰舉せる議員より組織せらる。司法權は合衆國高等法院及地方裁判所の手に在り、而して地方の政務は各州人民の自治に任せり。千七百八十九年三月四日第一國會を **ニ**、**ヨーク** に開き四月三十日 **ワシントン** 撰れて大統領となり **ジョン**、**アダムス** (**John Adams**) 之が副となれり。

第三章 第二期の開化

第一節 文學及哲學

佛蘭西 ルイ十四世の時代より佛國の國語大に完備し、文學殊に戯曲の如きは至大の進歩を爲せり。 **コルネール** (**Cornelle**) 千六百六十六年生れ (千六百八十四年歿) は佛國戯曲の祖にして悲曲に長し宏

壯横逸を以て名あり、**ラシーン** (Racine) 千六百三十九年生れ) 之に次ぎ優麗精緻を以て著る。佛國の悲曲之に至りて完備の域に達せり。當時**モリール** (Moliere) 千六百二十二年生れ) あり。喜曲の大家にして又音楽に長し演戯に巧妙なり。其他**ラ、フォンテーヌ** (La Fontaine) 千六百二十五年歿す) 小説を以て名を得。**フアロー** (Folien) 千六百三十六年生れ) は作詩の法則を指示し、佛國の**ホレリス**と稱せられたり。散文を以て著るものをも**ボシエ** (Bossuet) 千六百二十七年生れ) とす。**ボシエ**は有名なる説教師にして兼て歴史家たり。**フ子ロン** (Fenelon) 千六百五十一年生れ) は**カムフレイ**の大僧正にして宗教及教育に關する著書甚多し。就中**テレマ、クス** (Télémaque) 最著れ各國の語に翻譯せられたり。十八世紀に至りては學者大に宗教の信仰を疑ひ、政治上に新奇の思想を起し、過去の制度及定論に疑念を容るに至れり。其最著名なるものを**モンテスキュー** (Montesquieu) **ヴ、ルテール** (Voltaire) 及**ジ、アンジ、クー、ルーソー** (Jean Jacques Rousseau) とす。**モンテスキュー** (千六百八十九年生れ) は嚴格なる記者にして、其著「**ヘルシアン、レタース** (Persian Letters) に於て教會の信仰及過去諸般の定説、政體を批難し、羅馬興亡論」に於ては愛國心の國を盛んに、專制政治の國を滅しよことを詳論せり。「法律精神論」に於ては歴史及政治上の根元的觀察を爲し、議論確實、慈愛の念に富み、近世政治學創説

者の一人となれり。**ヴ、ルテール** (千六百九十四年生れ) は同時代の記者中に在りて聲望最高し。氏は一身にして戯曲家、詩人、歴史家、批評家及巧妙なる談論家を兼ね、同時代の批評及懷疑の精神を代表し、且同時代の機智と浮躁との最上適例たり。其著す所の叙事詩「**ヘンリアード** (Henriade) 及**ルイ十四世の時代**」**チャールス十二世史**最稱せらる。**ルーソー** (千七百十二年歿す) 亦多く書を著し、熱心に舊狀態に反對し、其時代の思想を變革せしめたるの力甚多し。其宗教上の意見は**ヴ、ルテール**の如く、自然神教にして、天啓の説を排撃せり。又有名なる「**社會契約論**」に於て萬民の平等自由なることを説き、大に政府を攻撃し、遂に佛國を去らざるを得ざるに至れり。又當時「**エンサイクロペデ、スト** (Encyclopedists) と稱する學派あり。改革上の意見を持すること**ヴ、ルテール**より激甚なり。**コンデラク** (Condillac) 千七百十五年生れ) は唯覺論者にして五管の知覺を以て眞理となし、自愛心を以て行爲の最上原則となし、以て宗教思想の薄弱なることを辨析せり。

日耳曼 日耳曼に於ける有名の哲學者は**ライフニツ** (Leibniz) 千六百四十六年生れ) にして數學及理學に於ては**ニ、ートン**に伯仲し、性理學、神學及法學の大家にして其才能**アリスト**トトルに比肩し、日耳曼哲學折衷派の鼻祖たり。弟子**ウ、ルフ** (Wolff) 千六百七十九年生れ) 其哲學

上の意見を整理編修せり。十八世紀の中葉クロフスト、ク (Klopfach) 及レ、シング (Lessing) の出づるま及び、日耳曼文學隆盛となれり。クロフスト、ク (千七百二十四年生れ、千八百三年歿す) は古典學を應用して新機軸を出し、當時の詩人に超駕せり。其傑作「メ、シア (Messiah)」はミルトンの「バラリス、ロスト」に類し、辭句の莊嚴を以て稱せらる。レ、シング (千七百二十九年生れ、千七百八十一年歿す) 出で、日耳曼文學及批評上に一新紀元を開く。世其文學上の功績を以てルーテルの宗教上に於ける影響に比せり。氏は殊に戯曲に老け他の學術上の著書に於ても氣力と鋭敏とを以て卓越せり。レ、シングと同時代にクライム (Claim) クライスト (Kleist) 及ラムレル (Ramler) 等の詩家ありき。

英吉利 英國革命時代に當りて有名なる詩人ミルトン (Milton) (千六百八十年生れ、千六百七十四年歿す) 出づ。ミルトンは「ヒーリタン派」の詩人として其詩「ダンテ」と並馳す。其傑作「バラリス、ロスト」(Paradise Lost) 及「バラリス、レケーン」(Paradise Regained) は晩年失明後の作に係ると云ふ。バンヤン (Bunyan) (千五百二十八年生れ、千六百八十八年歿す) 亦同時に出で、其著「ピルグリムス、プログレス」(Pilgrims Progress) は大に同時代の賞讃と得たり。王政復興後に於ける道德敗壞の寫影として見るべきはバトラー (Butler) の著「ヒーデー、フラス」(Hudibras) にして、「ヒーリタン」教徒を諷刺せし卑俗の詩なり。

ジョン、ドライデン (John Dryden) (千六百三十一年生れ、千七百年歿す) 亦女王アン以前に於ける詩の大家にして著作甚多し。アンアンの時代に至りては「ホーフ」(Pope) (千六百八十八年生れ、千七百四十四年歿す) あり。詩想雄健、活動の勢あり。當時リチ、ードソン (Richardson) フールディング (Fielding) あり。小説を以て著る。論文記者の最名あるものを「アディソン」(Addison) (千六百七十二年生れ、千七百十九年歿す) 及「ステール」(Steele) (千六百七十六年生れ、千七百十九年歿す) とす。其他「デー、フォー」(DeFoe) (千六百六十一年生れ、千七百三十二年歿す) の小説「ロビンソン、クルソー」及「スウィフト」(Swift) (千六百六十七年生れ、千七百七十四年歿す) の散文諸作は英語の富饒と勢力とを表せり。十八世紀に於る文學の大家は「サミ、エル、ジョン」(Samuel Johnson) (千七百九年生れ、千七百八十四年歿す) として、氏は英辭典、詩人傳、ラセラス (Masselas) 傳、ラムフラー (Rambler) 等を著し、嚴肅なる羅旬風文體を傳播せり。ジョンソンに反對せるものを「ゴールド、スミス」(Goldsmith) (千七百二十八年生れ、千七百七十四年歿す) の諸作となす。其他詩人には「グレイ」(Gray)、「コリンズ」(Collins) 等あり。十八世紀間の英國史家の三傑を「ヒーム」(Hume) (千七百一年生れ、千七百七十一年歿す)、「ギ、ボン」(Gibbon) (千七百三十七年生れ、千七百九十二年歿す) 及「ロバートソン」(Robertson) (千七百九年生れ、千七百九十一年歿す) とす。「ヒーム」は懷疑哲學者に屬し、其所見奇僻なり。著書の有名なるものを英國史となす。ギ、ボンは天賦の大才と廣博なる考索とを以て、羅馬帝國衰亡論を著せり。然れども其文辭修飾に過ぎ、自然に背ける處多し。必竟二氏の學術は佛國風に傾きしを以て、宗教信仰の點に

於て批難せらるることを免れざりき。ロバートソンは之に反して慈仁高尚の神學者にして、「蘇蘭史」「帝チーレス五世史」「亞米利加發見史」等を著せり。然れども其文辭は枯燥澹泊なりき。

翻りて哲學の進歩を見れば又甚大なるものあり。ジン、ロク(John Locke 千六百三十二年生れ 千七百四年歿す)

は清廉の士にして自由を愛し、「理會力論」最著れ、其他政治學及神學に關する著書多し。

バーケレー(Bakeley 千六百八十四年生れ 千七百五十四年歿す)は物質を理想上より論定し、信神教を回護せり。ライド

(Rid 千七百十年生れ 千七百九十六年歿す)は常識説を主張し、ヒームの懷疑哲學に對し蘇蘭性理學派の祖

となれり。其他「ドクトルサミエ、エル、クラーク」(Clerk 千六百七十九年生れ 千七百二十九年歿す)僧正ジ、セフ、パ、トラ

アイサク、ニートン(Newton 千六百四十二年生れ 千七百二十七年歿す)は引力法の發見者にして其著「プリンシ

ア」(Principia)は大に物理學の進歩を助けたり。性理學及政治學の著者たるアダム、スミス

(Adam Smith)は千七百七十六年「民富論」を出版せり。是實に完全なる財政學書の權輿た

り。

伊太利 伊太利文學は十八世紀に至りて再興し、ヴィコー(Vico 千六百六十八年生れ 千七百四十四年歿す)は科學

的に歴史及神學を論述するの基礎を開き、ベ、カリア(Becaria 千七百三十八年生れ 千七百九十四年歿す)は刑法學

に慈愛の意見を交へ、ヴォルタ(Volta 千七百四十五年生れ 千八百二十七年歿す)は電氣學に精通し、ヴォルテイ、ク電

堆を發明し、メタスタシオ(Metastasio 千六百九十八年生れ 千七百八十二年歿す)は戯曲の諸作によりて伊國の歌舞

伎を奨励せり。其他喜曲はゴルドニー(Goldoni 千七百七年生れ 千七百九十六年歿す)に至り、悲曲はアルフ、ーリ

(Alfieri 千七百四十九年生れ 千八百三年歿す)に至りて完備せり。

亞米利加 獨立戰爭以前に於ける亞米利加の有名なる記者はジ、ナス、ン、エドウ、ーツ

(Jonathan Edwards 千七百三年生れ 千七百五十八年歿す)及ヘンジ、ミン、フランクリン(千七百六年生れ 千七百九十年歿す)とす。エドウ、ー

ツは性理學上の大才を有し、一神學派の祖となれり。フランクリンは倫理及理財に關する諸

書を著せり。革命亂後ハミルトンマディソン(Madison ジー(Madison 千七百五十九年生れ 千七百九十年歿す)等政治上に關する著書あり。意見及文章俱に大に聲譽を博せり。

第二節 自然科學(發明及發見)

自然科學は現期に至りて蔚勃として興起せり。歸納論法、即ベーコンの觀察實驗法は漸く學者の採る所となり、ニートンは大引力の法則を始とし、力學及光學に關する數多の發

見を爲し、以て大に斯學の進歩を圖れり。ライフニッツはニュートンと同時に微積分を創見し、瑞西の數學大家オイレル Euler (千七百七年生れ、千七百八十三年歿す) は専力を力學に盡し、子ピアア (Zachariae) は對數を創始して計數の便を謀り、荷蘭のホイヘンス (Huygens) (千六百二十九年生れ、千六百九十五年歿す) は振り子時器を發明し、グレゴリー (千六百二十三年生れ、千六百七十五年歿す) は反射望遠鏡を發明し、英國の天文學士ハルレー (Halley) (千六百五十六年生れ、千七百四十二年歿す) は一彗星の運轉を豫測して之に自己の名を附せり、日耳曼人グーリケ (Guericke) (千六百〇二年生れ、千六百八十六年歿す) は排氣鐘を發明し、ボイル (Boyle) (千六百二十九年生れ、千六百九十二年歿す) に至りて完備せり。ボイルは英國學士會院の創設に盡力したる人なり。電氣學はツルタの電堆、フランクリンの避雷術の發明等によりて一段の進歩を顯し、動物學は佛人ビ・ーホン (Buffon) (千七百〇七年生れ、千七百八十八年歿す) の動物分布説、ラマーク (Lamarck) (千七百二十八年生れ、千七百九十九年歿す) の進化論に世人の注意を惹き、化學はフラクの炭酸發見、カウテンデ・シ (Cavendish) の水素發見、フリーストリー (Priestly) シーレ (Schleier) の酸素發見あり、殊にラウ・シェー (Lavoisier) (千七百四十三年生れ、千七百九十四年歿す) の方によりて其基礎を確立せり。瑞典人リンニウス (Linnaeus) (千七百〇七年生れ、千七百七十八年歿す) は植物學の整頓によりて其名著しく、其他ラクレンチ (Lacraence) ラプラス (Laplace) サイ・ウイリアム、ハインル (Herschel) 等の天文學に於ける皆共に現時學者の宗とする所なり。

十八世紀に於ては科學實用上偉大なる効果を顯せり。蒸氣機關及紡績機械の發明の如きは是なり。蒸氣機關はニコーメン (Newcomen) (千七百五十五年英國に於て始めて發明せるところなり、蘇蘭人ジームス、ワト (James Watt) (千七百三十六年生れ、千八百十九年歿す) の千七百六十五年之に大改良を加ふるに及んで、博く工藝製造より其他社會交通の形勢を一變せしむるに至れり。紡績機械はリチャード、アークライト (Richard Arkwright) (千七百三十二年生れ、千七百九十二年歿す) の發明せる所なり。現世紀以前に於ては紡糸の法、頗不完全なりしが現期に至りてアークライト始めて紡車を發明し水力を以て紡績の業を營むるに至れり。是より英國に於ける綿糸業は絶大の進歩をなせり。

第三節 宗教及神學

英國自然神教 第十七世紀に於ける宗教上の論争戰闘は十八世紀に至りて翻りて無頓着不信仰となれり。人民は宗派の鬭争に疲れ、宗制の規約を厭ひ、其極途に自然神教の教理をも排斥するに至り、佛國殊に甚し。英國に於ては自然神教論者の一派起り、ロードハーバート (Herbert) (千五百八十一年生れ、千六百四十八年歿す) 先之を唱導し、尋てティンダル (Tindal) モルガン (Morgan) ボリ

ングアローク(Palinghokeja) フツバリー(Shafesbury) コリンス(Collins)等起りて其教旨を奉せり。然るに一方に於てはバトラー(Butler) ライドナー(Lardner 千六百八十四年生れ 千七百六十八年歿す) 及英國古學者兼批評家として有名なるベントレー(Bentley 千六百六十二年生れ 千七百四十二年歿す) 並にペーレー(Paley 千七百四十三年生れ 千八百〇五年歿す) 等起りて理論上及歴史上より基督教原理の神聖なることを辨護せり。此等諸氏の所説中バトラーは最深遠に、ライドナー及ベントレーは最該博に、ペーレーは最明瞭なり。

クーカー教派 此時に當り英國に於て同朋教會(Society of Friends)即クーカー(Qunker)派と稱するもの起れり。チーチ、福克斯(George Fox 千六百二十四年生れ 千六百九十一年歿す)の主唱せしところにして、氏は千六百四十七年に當り自神託を受けたりと稱し、諸國を遍歴して傳道に従事したりしか、氏及其徒弟は英米兩國に於て屢殘酷なる壓迫を蒙れり。此教徒は戰爭を排斥し従順主義を執守し、結誓及有給牧師を擯け、辨論服裝共に非常の質樸を尙べり。而して時としては過度に布教に熱心したるか爲に、公衆の禮拜を妨げ、或は粗衣を纏ひ甚しきは裸體にて市中を彷徨するに至れり。ウリアム、ベン及大神學者ロバート、パークレー(Robert Barclay 千六百四十八年生れ 千六百九十年歿す)の如き諸名士も亦其感化を蒙れり。此教徒は其信仰及行爲の異常なるより非難を受けたりしが、其基督教的の堪忍、廉潔の行爲、博愛の精神等より

よりて漸次他教徒の敬愛を得るに至れり。

メソヂイスト教 新教國に於ける宗教的動作の最注意すべきはメソヂイスト教(Methodism)

なり。初はオクスフォード學生の一小團結に基き、シン、ウズレー(John Wesley 千七百〇三年生れ 千七百九十年歿す)

弟チ、イレズ及チ、イチ、ホウ、イトフィールド(Winfield)の主導せし所なり。ウズレーは智識及

教育に富み加ふるに宗教的熱心と卓越なる材能とを以てし、ホウ、イトフィールドは流暢なる辨士にして當時其匹を見ず。氏はウズレーと説を異にしてより相分離するに至れり。

ウズレー一派のものはオクスフォード大學に於ける生活容儀の嚴肅謹直なりしを以て「メソヂイスト」(守法教徒)の綽名を得たり。而して不屈の精神を以て英國人民に説き、下等の職工、鑛夫といへども敢て擯斥せざりしを以て、其効果實に顯然として信徒の多き、遂に一團體を結び主義規律を設定するに至れり。此教派は頗英國教會の反對を受けしか、終に牧師を米國に派し英國教會と分離し、英米兩國に通して夥多の信徒を得るに至れり。

モラヴィアン教派 モラヴィアの基督教徒は久しく壓迫せられしが、千七百二十二年に至り其一體はチンチ、ンドルフ伯(Count Zinzendorf 千六百七十年生れ 千七百四十年歿す)の救ふ所となりホヘミアの州内なる伯の領地に入れり。而してヘルンハ、ト(Herrnhut)と稱する一都を建て、伯を以て其

僧正となせり。此一派は敬神に餘念なきと布教に熱心なるとにより其名著し。其教義はルーテル教に反對せざりしも亦自一派を形成せり。教徒の一部は米國に移住せるものあり。要するに「モラヴ、アン」教徒は甚夥多なるに至らざりしといへども、其精神的宗教と教育とを進歩せしめたること并に異教徒に基督教を傳播したる効果は、遠く他の諸大教派の及はざる所なり。而して此教徒はフレデリック大王の治世に當り佛國不信仰派の上流社會に行はれたるに拘らず、日耳曼に於ては毫も犯さるゝところなかりき。

ハイエテ、スト教派　チンチ　ンドルフの先、スヘーテル(Spenner 千六百三十五年生れ 千七百〇五年歿す)といへるも

の祇虔教派(Pietismus)を開基せり。スヘーテルは熱心なる信神家にして、此教徒は時流の教旨より一層熱心なる宗教的修練の功を積めるを以て此名を得しなり。

ジ・スイト組合　初新教の蔓延するや、羅馬教反動の勢を起し、西班牙人及伊太利人最力を極めて之か妨害を試みたり。ホーレル四世、ハイアス四世相次きて法王となり、新教の撲滅に盡力したりしか、此際又「ジ・スイト組合」(Jesuit Order)起りて大に法王の企圖を助けたり。ジ・スイト組合は西班牙の貴族イグナテ・アスローラ(Ignatius Loyola)の創設せる所なり(千五百四十年)。「ロヨラ」は剛毅不撓の熱心家にして「ジ・サス」(Jesus)と稱する一新會

社を設け自之か社長となれり。其社員は三條の沙門盟約を守り法王に默従することを誓へり。然れども「ジ・スイト組合」の憲法は「ロヨラ」の繼嗣者ライネツ(Lainez)に至りて整備せり。此憲法によれば軍隊組織にして各州首長ありて社長即大將之を統率せり。而して其目的は新教を壓服し宗教改革より起りたる自由の精神を撲滅せんとしに在り。又傳道師を我邦、支那、亞非利加、西印度、アラナル及西班牙の領地等に派遣せり。而るに上段述へしか如く十八世紀に至りては諸種の新教派其勢力を逞くせしを以て、舊教國に於ける法王權は失墜し革新の精神一般に流布せり。當時の事態の著明なるものにして世の傾向を知るに足るべきものは、葡萄牙及佛西兩國のフルーボン朝か「ジ・スイト組合」を排斥したることなり。是より先「ジ・スイト組合」は西、葡兩國の條約によりて葡國の領に歸したる南米バラケ(Barrage)に於て密に自治の一邦を建て行政訴訟に干與せしかは、千七百五十七年葡國は遂に其領内に於て其教派を禁制したり。幾何もなくして佛、西二國及伊太利諸國亦之を禁遏せり。千七百七十三年に至り法王クレメント十四世正式上之を廢滅せしか後千八百十四年復法王權によりて興復せらる。

第三期 佛國革命より最近時に至る

第一章 佛國革命

第一節 革命の原因

王室の敗徳 佛國革命の原因一にして足らずと雖王室の敗徳亦與りて大に力あり。ルイ十四世殂してルイ十五世(千七百十五年より千七百七十四年まで)立つ。王年五才にして位に即きオルレアン(Orléans)公政を攝す。公固より一定の主義なく又名望なし。王長して放肆なり。二人の嬖妃マダムデホンパツール(Madam Desjournadour)及コムテ・ステー・パリー(Comtesse du Barre)政を執り其寵臣權を擅にし驕奢淫佚を極め、人民の腦中復王室敬愛の念を存せざるに至れり。財政の紊亂 王室の驕奢懦息と共に國家の財政も非常の困厄に陥れり。蓋佛國はルイ十四世屢々戰爭を起し驕奢を事とし以て國庫漸く竭乏を告るに至り、ルイ十五世立つに至つて、又壞太利王位繼承戰爭に關し屢々無用の軍を起ししを以て巨額の國債を生ぜり。是より於て政府は諸種の重税を課して平民を培克すること甚しく、適國會の之を拒むことあるも國王は獨斷之を執行せしむ。此の如く下民は政府に對して重税を負ふの

みならず、地主僧侶に對しても亦租税を徵求せられ、今や其一身を措くに所なく慘憺たる状態に淪胥せり。是其革命を促せし最要因なり。

貴族僧侶の專横 平民は此の如く不幸の極に沈淪せるも、貴族僧侶は之に反し揚々として威福を恣にせり。蓋貴族僧侶は種々の特權を有し租税を免れ其領地は全國の三分の二に跨り、又政府の高官重爵を買取し、唯平民即第三種族を抑壓することを勉め饗養飽くことを知らず。威望德義全く地を掃ひて衆民の怨府となれり。

其他の原因 佛國の事態既に此の如し、禍亂の起る識者を待たずして知るべきなり。加之十八世紀にける學術の進歩は人民の思想に大變動を來し諸事改革の方向に傾き、モンテスキュー(Montesquies)ヴォルテール(Voltaire)ルーソー(Rousseau)の徒出て、新説を唱へ宗教及政治上の思想を一變せしめし如き、又彼亞米利加獨立の先例か佛人をして其理想上の共和政體を設立せんとするの念を熾ならしめしが如きは、亦革命を激發せしめたる一原因なりしなり。

第二節 ルイ十六世及國民議會

ルイ十六世　ルイ(千七百七十四年より千七百九十三年まで)年二十にして位に即く。性温順良好なれども意志薄弱にして活氣なく、國歩の難險を匡正するの器にあらず。千七百七十年、奧太利女王マリ・ア・テレサの子マリ・アントイネット(Marie Antoinette)と婚す。マリ・ア容色美なり。然れども大に華奢に耽り亦衆望を失せり。王政を執ると雖莫大の公債を如何ともする能はず。卓識の經濟家テ・ルゴ(Turgot)を擧げて之を治せしむ。テ・ルゴ心膽を碎きて財務を整理し、貴族の權を削ぎ人民の苦を救はんとして、行政軍務に至るまで孜々として改革を施ししか。貴族僧侶大に之に反抗せしを以て王遂に其職を罷めき。テ・ルゴ去りて財務又如何ともしがたく、又チ・ネツ(Necker)の銀行家子・ケル(Necker)を擧げて整理の職に任す。子・ケル令聞あり、職に居ること五年(千七百七十六年より千七百八十一年まで)、財政漸く其緒に就かんとし、時、佛國財政一覽表を公にし又貴族僧侶の反對する所となり其職を退く。カロン(Calonne)其後を繼ぎしか學識共に劣り、公債は反て次第に増加し復之を處理するの道を知らず。遂に千七百八十七年「ノータール」(Notable)と稱する會議を開き輿論に問ふに至る。「ノータール」會議は貴族僧侶政府の高官及市府の代議士を以て組織せり。カロンは一般の租稅徵收法を發議せしか。貴族等の拒む所となり、一の爲す所なくして解散せり。是に於て再子・ケルを擧げて職に

任す(千七百八十八年)。子・ケルは千六百十四年以來久しく開會せざりし國會を招集して財務を議するに決せり。

平民の勝利　子・ケルの建議に依りて招集せられたる國會は貴族僧侶及平民の三階級を以て組織し、千七百八十九年五月五日ヴルセーユの王宮に會す。僧侶貴族各三百員、第三級の人民即平民は六百員を有せり。開會の始に當りて貴族僧侶は平民と分離せんことを欲し、平民は一堂に會せんことを主張し、議容易に決せず。是に於て人民はミラボー(Mirabeau)等の指揮に従ひ別に一會を組織し、自國民議會(National Assembly)と稱す。パリの天文學者ベリー(Berthollet)議長たり。貴族僧侶大に之を怒ると雖奈何ともする能はず。王は兵力を以て議員の内に入るを拒みしかは議員は王宮の舞踏室に入り新憲法を制定せざる間は決て解散せざることを誓へり。是に於て王の貴族僧侶に勸告して共に國民議會に臨ましむ。是即人民第一の勝利たり(千七百八十九年六月)。堂中會するものには愛國心に富めるラフ・エト(Lafayette)(米國獨立戰を擧げたる貴族)あり。雄辯家ミラボー(Mirabeau)貴族あり。彼峻烈畏るへきロベスピール(Robespierre)あり。正に是議會の三傑士たり。

革命亂の破裂　平民の勝利を得しよりルイは其護衛兵のみにては安全なる能はざる

を恐れ、日耳曼瑞典等の兵士を傭ひヴルセーユの宮城を護衛せしめ、而して子ケルを退けたり。是より先パリ市に於ては新聞紙演説檄書等を以て自由民権を唱へ所在沸騰し、人々宛狂するか如く、遂に自由市政を組織し、ペーリーを以て首領となし、又護國兵を設けラフ・エトを以て之を管せしめたり。是に至りて市民一時に蜂起し三色旗を翻し、銃砲を擁し市中を奔走す。暴民遂に進んでバステール(Bastille)の獄を襲ひ戍兵を殺し、火を放て之を焼く。護國兵も之を遏むる能はず、反て之と力を合はすに至れり。是即革命の第一破裂なり(千七百八十一年七月)。其結果は國民主權を握り子ケル其職に復し、ラフ・エトは護國兵の都督となり、ペーリーはパリの知事となり、而して王又パリに来る。これよりして佛國の各地方に農民の一揆起り、貴族等大に恐れ諸外國に移住するもの多し。王はヴルセーユの宮中よりありて唯惘然たるのみなりき。

新憲法 千七百八十九年八月四日國民議會はラフ・エトの發議に由り遂に民權の宣告を決議せり。貴族子爵ノエイ(Nois)建議して貴族從來の權利と特權とを放棄し、人民をして負擔を免れしめ、僧侶は其十分一税を廢し、官職の賣買を止め、租税を平等をならしめたり。是に於て佛國は精神上既に共和國となれり。

ヴルセーユの騷亂 此時に當りて朝臣物議の囂然たるを恐れ、王に勸め兵士を引き以て自護らしむ。一日新來の士官を襲す。王及王后相伴ひて宴に臨む。將士感激起て萬歳を祝し、民黨の記標たる三色の帽章を破碎す。此報パリに達するや、暴民一時に決起し、數百の狂女其先驅を爲してヴルセーユの宮殿に向ふ。王及國會は厚く之に慰諭せしも遂に宮中に亂入せり。ラフ・エト護國兵を率ゐて來援し事漸く鎮撫せしが、王は又暴民擁せられてパリに入り、國會も亦此に移れるを以てパリの權勢日一日より盛なり。

革命の進歩 其後貴族僧侶の領地は漸々沒收せられしのみならず、貴族は其爵位を削られ、僧侶は人民より撰舉して政府之に報酬を與へ、行政上佛國を八十三州に區分し、知事は人民より直接或は間接に推撰せらるることとなり。國民皆平等の權を得、度量衡及貨幣の制皆一に歸し、國會は一院となり普通撰舉を行ふに至る。是時に當りて政談盛に起り俱樂部を組織して互に相攻撃せり。千七百九十年七月十四日には一大盟約の執行ありて王は憲法を奉戴すべきを誓ひ、皇后も亦幼君を輔育して後日此誓約に従はしむべきを誓ふ。此時正に和氣霽然たるもの如し。

王の逃遁 然れども王前約を履行せず、安靜の希望は復一睡の夢と化せり。時にミラポ

一病に罹りて逝く(千七百九十一年四月)蓋一時に横溢せんとし革命の狂瀾を支へたるものは實にミラポールの力なりしなり。今やハリの政黨大に過激を加へルイは其抑壓に堪ふる能はず。遂に其一族とハリを遁れて(同年六月)ヴ・レンニユ(Varennes)に至り追兵の爲に捕へられ、ハリに還さる。是に於てか王又衆民の怒を激し、亂民王國を覆さんと計るに至る。ラフ・エト漸く之を鎮撫せり。此時新憲法は既に完成し佛國は立憲王政となり。王の宣誓署名する所となれり。然れども其權力は全く停止せられたり。是に於て國民議會は解散し立法議會起りて之に代れり(千七百九十一年九月十四日)。

第三節 立法議會及王政の廢滅

立法議會 千七百九十一年十月一日七百四十五名の議員を以て立法會議(Tegislative Assembly)組織せらる。概壯年の士なり。議場の右にあるものを王黨及「フ・イラン」(Feuilant)黨(立憲黨)と稱し、「フ・イラン」黨は立憲王政を固守せり。左にあるものを「チロ・ンデ・スト」(Girondins)黨(溫和共和黨)と云ひ亞米利加合衆國の政體に摸擬せんことを望み、其首領はローランド(Roland)デ・ムーリエー(Dumouriez)等なり。而して其一段高所にある

ものを山岳黨といふ。即急激黨にして廢王主義を執れり。ロ・ベスピール、マラー(Marret)タン・トヤ(Danton)の如き皆此中にあり。此兩左黨は「ジャコブ」(Jacobin)黨より成り、其勢力強大にして議會の大多數を占領せり。

普魯西、奧太利との戦争 佛國革命は大に諸外國を震動せしめ、其共和的思想の國內に蔓延せんとするを恐れ、佛國革命の暴民を鎮壓するその必要を感じ先兵を擧たるものは普魯西及奧太利なり。是より先、難を日耳曼に遁れたる貴族相集りて「コンテ」(Conde)公を推して兵を擧げしが、佛國に入りて民黨と相争ふの氣力なかりき。普魯西及奧太利の軍興るに及びて之と連合せり。然れども普壤の此舉は却て王國の破滅を速ならしめたり。普壤の軍佛國に入るや、ハリの暴民忽狂奔し王を以て敵國の同盟なりとし、共和黨は王に迫りて普壤との開戦書に王璽を鈐せしめ(千七百九十一年四月)デ・ムーリエーを將とし數萬の義勇兵を驅り連合軍と戦て之を退く。

王政の末路 外國との戦争の間一方に於ては廢王の論大に起り暴民遂に「テ・レリ」(Tuilleries)の宮殿を襲ふ(千七百九十一年八月十日)瑞西の兵三百之を拒き皆奮闘して死す。王は立法議會に遁れ捕へられて塔獄に幽せらる。是に於て王政及舊憲法は全く廢滅せり。是よりし

て「シャコピン」黨無上の政權を握り己に反するものは盡く之を逮捕し、囚人獄舎に填充し、又彼残忍なる九月の殺戮と稱するもの起りて血を流すこと三日已ます。是皆「ダントンの處置」に出でしなり。

ルイ弑せらる。千七百九十二年九月二十一日立法議會一年の任期既に滿ち國民集會(National Convention)之に代る。此時「フーイラン」黨は既に滅び溫和黨は議會の多數を占むるといへども、暴民等の後援なきを以て彼「ダントン、マラー、ロベスピール」等の急激黨と相對峙するの權力なし。國民集會は第一着に佛國共和政の宣告をなし次て王を審問に附せり。其彈劾の要旨は王の革命に反對せる陰謀及其敵國と通せる書類に據り國敵として之を處せんとするに在り。是實に「ロベスピール、ダントン、マラー」等の煽動より起りしかり。千七百九十六年十一月王三回訟庭に出つ。神色自若として動かす。一辨護人を求む。應ずるものなし。嘗て王の相たりし「マルセルア(Marshall)」と云ふものあり。舊恩を思ひ自進んで王を辯護し議論容易に決せず。急激黨は此際一切の人情を擲棄せざるへからすと論じ、溫和黨は之に反して大に王の爲に辨護する所ありしか。遂に投票に由り王の罪科を決するに至り、七百二十一票中二十六票の多數を以て王は死刑の宣告を受けて残酷なる

「ギロチン」(ギルロチン(Guillotine)の露と消えさ。實に千七百九十三年一月二十一日の發明せし迅速なる斬頭機)の露と消えさ。實に千七百九十三年一月二十一日なり。噫。

第四節 恐怖政期 (千七百九十三年六月より千七百九十四年七月に至る)

第一各國同盟 ルイ弑せられしより急激共和黨獨權力を逞ふして殘虐酷烈至らざる所なし。世此時代を稱して恐怖政期といふ是に於て諸外國皆共に佛人の暴虐を惡み、英國其中心となりて一大同盟(千七百九十三年より千七百九十七年まで)を組織し以て佛國を壓せんとし、日耳曼西班牙瑞典露西亞荷蘭一時に兵を擧げて佛國に入る。新共和政府は三十萬の大軍を發し「デ・ムーリー」をして之を總督せしめ以て同盟軍に當る。「デ・ムーリー」屢同盟軍を破る。然れども大に急激黨の殘虐を惡みて遂に敵軍と合す。是に於て又將を代へて國疆を拒かしむ。佛軍能く戦ひ敵を退く。是を以て共和政府の勢益張り隨ふて其害毒を流すこと愈甚し。

公安委員 眼を轉して内部の事狀を觀れば國家の權力は「ジ、コピン」黨より選出せる九名の公安委員の手に在り。「ロベスピール、マラー、ダントン」等之が首領となり、恐怖を以て憲法となし、黨派の爭鬪常に絶ゆることなし。溫和黨は遂に急激黨の倒す所となる。「マラー

佛 國 革 命

は「シャロート・コルデー」(Charlotte Corday)と稱する一少婦の劍に斃れしといへども、殘暴の氣焰は益熾となり、皇后アントイネト以下溫和黨の殺さるゝもの甚多く、而して政府と意見を異ませるもの二十万人を捕へて之を獄に下し、日々斷頭機に上すもの七八十人、下らざりしと云ふ。又新曆(千七百九十二年九月二十一日)を制し基督教の信仰を廢し、所謂道理の禮拜を尙ひ、盡く舊來の善習美德を破壊せり。ダントンは少しく顧みる所あり、漸く溫和主義を取りて亂離を恢復せんとなす。ロベスピール之を見て已獨り權力を恣にせんと欲し、遂にダントンを捕へ斷頭場に致し國民集會の全權を掌握せり(千七百九十四年六月十日より七月十七日に至るの間斷頭場に送られたるもの千三百人を以て數ふるに至る。人心漸くロベスピールの殘虐を惡み、議會は遂に之を捕へて死刑に處せり(千七百九十四年七月二十八日)斷頭機を以て幾多の良士民を殺戮し佛國民心を畏縮せしめたるロベスピールも今や亦自斷頭機上の鬼と化し、恐怖政期此に終を告ぐ。是より溫和共和黨勢を得、監督政府を組織するに至る。

第五節 監督政治(千七百九十五年より千七百九十九年まで)

反動の現象 恐怖政期畢りて溫和共和黨議會の勢力を占め、獄舎を開きて冤罪の士を放ち、革命徵收の諸税を廢し、ジャコビン黨の俱樂部を閉鎖し信教の自由を許せり。ジャコビン黨亦多少の人情を現はし前年流行の華奢なる衣裝は再現出し、パリ市民又舞踏に祭祀に喜樂するに至れり。

外國との戦争 此時に當りて佛軍同盟軍と戦ひ、屢之に勝ち荷蘭を破り英軍をブリタニーの海岸に破る。是に於て同盟軍崩解せり。蓋普魯西のバーゼル(Basel)の條約に於てライン左岸の地を割きて佛國に與へしより同盟軍遂に瓦解するに至りしなり。尋て西班牙亦佛國と和す。時に千七百九十五年なり。此間佛國は英國の爲にコーシカ嶋及東西印度に於ける植民地を侵畧せられたり。

監督政府 千七百九十五年議會は新憲法を制定し政府を組織せり。即七百五十人の立法員を擧げ之を分ちて二團となす。一を元老院と稱し、一を五百人會と稱し、行政權は擧て五人の監督官(Directors)に委任し、監督官は二院之を撰擧し順次三ヶ月を以て交替し、以て議長の任に當る。此の如く保守的及「ジャコビ」的要素を含有せる改革は大に人民の波動を靜かならしめたり。然れども反動現象中の一物たる王黨大に之に反抗し、兵

を擧げて議會と戦ふ。議會は數千の常備兵を以て自守り、バライ (Baras) 之に將たり。バライ 年少の一砲兵士官 ナホレオン、ボナパルト (Napoleon Bonaparte) を擧て副となし、其力に頼りて遂に全く王黨を鎮壓し、政府の基礎確立するに至れり。

ナホレオン 千七百六十九年八月十五日 コーシカ嶋 へ生る。ブリエンヌ (Brienne) の兵學校に入り(千七百七十九年) 次て パリの士官學校 に移る。數學に長し歴史及地理に詳し。蓋革命の機運は正に ナホレオン をして其不世出の英略を歐洲中原に試みしむるものに似たり。千七百八十三年 ツーロン の人民勤王の兵を起す。勢甚猖獗なり、共和黨の將 バライ 之を攻めて抜く能はさりしか、ナホレオン の軍略を用ひ功を奏せり。是より ナホレオン 斬然頭角を顯し、千七百八十五年砲兵少尉補に任せられ後中佐に進み、バライ を輔けて王黨征服の功あり。益其名を著すに至る。

伊太利征服 普魯西及西班牙は既に和せしといへども、埃英 の如きは猶佛國に抗せしを以て、千七百九十六年佛國政府は兵を三方に出して以て同盟軍を伐つ。ジールタン (Journan) 及 モーロー (Moreau) 各一軍を將として日耳曼に入り、一軍は バライ の推薦により ナホレオン 之に將として伊太利に入る。ナホレオン 時に年二十六(千七百九十六年) ジールタ

ン、モーロー 道を分ち日耳曼に入り 埃將大公 チーレス の爲に撃破せられしが ナホレオン は之に反して直に伊太利に入りて 埃兵 を破り サツ・イ 及 ニース (Nice) を取り、五月又 ローデ、トール 橋の激戦に大勝を得 ミラン を陥れ ロムバデー を拂ひて マンテニア (Mantua) に達し、法王 及 バイマ、モデナ、ネーブルス 等を服し其寶珍器を収め之を本國に送付せり。次て復 埃國 の大軍を アルコラ (Arcola) 及 リヴリ (Livelli) に破り(千七百九十六年及千七百九十七年) アルプス山 を踰え ウンナ に進む。時に ジールタン 及 モーロー の軍 チーレス の爲に全く撃退せられ、チーレス 兵を ティール に集む。ナホレオン 稍戒むる所あり進撃を止む。偶 埃太利王 日耳曼帝 和を乞ふ。是に於て カムホ、フォーミオ (Campo Formio) の條約を結び 埃國 は ベルチアム 地方を佛國に與へ、ナホレオン の設立せる シスアルピン 共和國 (伊太利の北部) を公認し、ナホレオン は ライン 左岸の 日耳曼 地方を 埃國 に與ふことを密約し、且 ヴニス を 埃太利 に返付せり(千七百九十七年)。ナホレオン 又 法王 に迫りて ローマ グナ (Romagna) ボログナ (Bologna) 及 フィララ (Ferrara) を佛國に與へしむ。是に於て ナホレオン の名聲四隣に轟き、其 パリ に還るや歡迎の聲市中に震へり。

埃及遠征 ナホレオン の外國征服に従事するの間本國にては監督官の勢力毫も行はれず民心離叛の狀あり。政府は爲に兵力を以て己の權勢を張らんと欲し、五百人會并し元

老院の議員數名を捕ふ、王黨の諸方に騷亂を構ふに當りてもナポレオン常に外國より兵を送りて之を鎮定し其同遂に共和黨の勝利に歸せしと雖、これ皆ナポレオンの功なるを以て衆望益之に歸す。是に於て監督官はナポレオンの權勢己の上に出づるを恐れ、機を以て之を斥けんとす。ナポレオン之を知りて自籠居せり。既にして埃及を伐ち以て東洋に於ける英國の勢力を殺かんことを建言す。政府其遠く去るを喜ひ直に之を許す。ナポレオン即兵を率ゐてツエロンを發し(千七百九十八年)途にしてマルターを略し、進んで埃及に上陸し、ピラミッド地方に於てマメリーク(Memphis)人と劇戦し大に之を破り、カイロー府を略し殆全國を征服せり。然れどもナイル河口アブキール(Aboukir)の戦に於て佛國艦隊英將子ルソン(Nelson)の爲に殲され、其歸路を絶たれたり。ナポレオン少しも屈せず、スエズの地峽を過ぎシリアを征す。復英兵の妨ぐる所となり志を得ずして埃及に歸り、土耳其人とアブキールに戦ひ大に之を破る。時に佛國の形勢は日に益困難に陥り、内は政治潰亂して民心恟々、外は連合軍の國疆に迫るあり。能く此難局を調理するものは獨り一のナポレオンあるのみ。ナポレオン本國の急報を得、軍を其將クレバー(Kleber)に托し單身佛國に還れり(千七百九十一年十月)。

第二各國同盟 是より先、露西亞帝ホール一世(カスリン二世の長子)及英國の宰相ピット

力を戮せて佛國に敵せしか、埃及地方に於ける子ルソンの勝利は忽ちして第二各國同盟國を促し、土耳其、奧太利及チーブルス之に合し共に佛國に迫る(千七百九十八年)。佛國政府爲す所を知らず。ジールタンは塊將チーレスの爲に破られて退き、奧太利及露西亞の軍はアルプス山南の地方を奪ひ(千七百九十九年)。モロー及マクドナルド(Maclonald)は同盟軍の爲にトレビア(Trevia)に破られ、次て佛軍ノーズーイー(Nosis)に破れ、伊太利全く恢復せられ、佛人の建立せる共和國は盡く解散せられたり。

監督政府の顛覆 是より於て監督政府益衆望を失し、急激共和黨の如きは政府を攻撃して已ます。此時に當りてナポレオン埃及より還るや人民歡娛譬ふるに物なく、直に政權を擧て之に委ねんとす。ナポレオン此機に棄じ一躍政權を握らんと欲し、先元老院に入て議員を畏服せしめ、又兵力を以て五百員會を壓倒し遂に全く監督政府を顛覆し、執政政府(Consulate)を組織し、自其全權を掌握せり。佛國革命は監督政府の破滅を以て全く其局を畢り、ナポレオンの軍事的統治之に代れり。

第二章 ナポレオンの統治

第一節 執政政治 (千七百九十九年より千八百〇四年まで)

新政府 新政府の組織に従へば三人の執政官を置き、十年を以て任期となし政務を總攬す。一人を正官となし二人を副官となす。ナポレオンは即正官なり、二人の副官は其謀議に參するに過ぎず。其他元院院立法議會等の組織ありといへども、是唯共和政府の面目を裝ふのみにして、國家の大權は一にナポレオンの手歸し、宛然佛國の君主たるの觀あり。是よりしてナポレオンは權勢を振ひ、嚴に新聞紙を限束し政治上の集會を禁せり。然れども一方には銀行を起し商業を自由にし以て財政の發達を計れり。

第二伊太利の征服

ナポレオンの權勢を得るや、英吉利、奥太利及歐洲の諸國はナポレオン

を以て佛國の篡立者と認め之に抗敵せり。時にモロー日耳曼に在りて功績多し。ナポレオン獨功名を專にせんと欲し遂に大軍を率る伊太利に入る (千八百〇一年) 其軍備未整はさるに乘し奥軍之を邀撃す。マランゴ (Marengo) の大戦是なり (同年六月十四日) ナポレオン勝を得、戰聞歐洲諸國を震動せり。此年十一月モローライン河を渡り奥太利の將大公ジョンとホーヘンリンデ (Hohenlinden) に會戰して大に之を破り、奥國に侵入しウインナを脅せり。是に於て千八

百一年二月ルーネヴェル (Lunéville) の條約成り、佛國復ベルチアム及ライン河西の地を得、羅馬法王及ネーデルス王國は其領土を確定し、上部伊太利の諸共和國は公認せられたり。

アミエンの條約

ナポレオンの奥太利軍を破るや、各國多く好を佛國に通す。ナポレオン此

機に乗して露西亞、瑞典、丁抹、普魯西等を籠絡して一同盟を組織し以て英國の海上に於る權力を挫かんとす。時に英國海軍の將子ルソ一戰にして丁抹の海軍を破り、且佛軍の埃及にあるものを逐ふ。是より先クレバーは土耳其人の爲に刺殺せられたり。又露帝ホール貴族の爲に弑せられ、アレキサンダー一世位に即さしを以てナポレオンの同盟忽崩解せり。然れども英國にありては主戰論者なるピット内閣を退き、アディンガム (Addington) 代て宰相たるに及び非戰論勢を得、遂に佛國とアミエン (Amiens) の條約を結ひ (千八百〇二年三月) 佛國の大陸に於て征略せる地を掌握することを承認し、英國は諸外國に於ける占領地の二三を除く外盡く佛國及其同盟國に還付せり。

内部の改革

今やナポレオン力を内治の改革に用ゐ、博學卓識の士を集めて之と謀議

し、政治上及社會上の秩序を齊理し、革命の際廢絶せし良法美習を再興し、裁判法を構成し、ナポレオン法典を編纂せり。ナポレオン法典は歐洲諸國法律編纂の模範となり、又宗教に

最大の自由を與へ、殊に教育に力を用ひ諸種の學術を奨勵し、兵士を訓練し、其他商工業に至るまで其面目を一新し、テ・レリ宮の如き大に之を修飾し往時の美觀に復せり。ナポレオンの改革は法律上四民平等の權を得たりと雖其方針は全く王政に傾き、レチヨン、オフ、オーノア (Legion of Honor) と稱する爵位を設けて新貴族を擧ぐるの基を開き、他日己の親族を以て之か上位に置けり、此等は皆ナポレオンが大に爲すあらんとするの秘策なりしなり。

英國との戰端再開く 千八百〇三年英國との戰端再破裂せり。蓋ナポレオンは佛國に於けるか如く全歐洲の主權を握らんとし、或はビードモント (Biedmont) を取り、或は日耳曼聯邦に關涉し、或は普魯西を援けて奥太利を侵略せしむ。是時ナポレオンの專權を悪んで佛國を去りたる亡命の徒多く英國に集り大に佛國を批難せり。英國又アミエンの條約に反してマルタ島を開放せず、且英國諸港に泊せる佛國の船舶を封し以て戰を挑む。是に於てナポレオン先英領ハノーヴァーを掠奪し、英國の貨物を佛國に輸入するを禁し、且大軍をブローン (Boulogne) に集め海峽を渡りて英國に侵入せんとす。此戰爭の破裂はナポレオンの陰に計畫せる希望をして疾く成就せしむるの機會を與へたり。

第二節 ナポレオン一世

ナポレオンの即位 ナポレオン千八百〇二年終身執政官となり、其權勢の益盛なるは從ひ之に反對するもの漸く衆し。ヒシニグル (Hibernia) モローの如き其主謀たり。而して前者は殺され後者は亞米利加に遁れたり。アールボン家の支族エンギエン (Engliem) 公も亦嫌疑を以て殺さる。今や英國と戰端を開かんとするに際し此の如き事情の發生せしを以て、ナポレオン陰に謀を運らし元老院に諷し帝位を奉らしむ。是に於てか人民の投票によりて其可否を決す。否とするもの四千名のみ。ナポレオン乃シ・レメンの故事に擬しノートルダム (Notre Dame) に於て、法王バイアス七世より帝冠を受く。時に千八百四年十二月二日なり。其翌年五月伊太利に入り伊太利王位に登りロムバデー國の鐵冠を戴けり。これよりナポレオン常に帝王の儀典を用ひ其親族は擧げられて親王或は内親王となり、新に十數名の貴族を作り以て自尊ふせり。新王黨此に起る。

第三各國同盟 千八百〇五年ヒト復英國の内閣に入り奥太利、露西亞及瑞典と一大同盟を結び以て歐洲に於ける國力の權衡を維持せんとす。此時に當りてナポレオンは伊

太利の共和政を改革し以て佛國の屬王國となし且義子ユーゲン、ボーハチー(Eugene Beauharnais)を以てネーブルスの副王となせり。露帝アレキサンダー一世ナホレオンと善からざるを以て英國と連合せり。時に普魯西はフレデリク、ウイリアム三世ハノーヴァーを得んと欲し局外に中立せり。

大陸の戦争 塙露同盟の大軍ライン河畔に至りて相合せんとするや、ナホレオン其未及ばざるに乗じて一舉之を撃破せんと欲し、直にアローンの兵十六萬を率ゐてウルム(Worms)に進み、塙將マク(Mack)を破り三萬人を降せり(千八百〇五年十月二十日)。既にして報あり、曰く、佛國の艦隊トラフ、ルガー(Trafalgar)に於て英將ネルソンの爲に殲滅せられたりと。然れどもナホレオン敢て屈せず、直に進でウインナに入り之を陥る。時に露帝アレキサンダーの精兵至り塙兵と合しナホレオンとアウステルリッツ(Austerlitz)に戦ふ。ナホレオン復大に之を破る(千八百〇五年十二月二日)。是に於て塙太利帝フランシス二世、ナホレオンの軍營に來て和を乞ひブレ、スバルグ(Breath-Surgut)の平和條約を締結し、ヴ、ニス⁽¹⁾を伊太利王國に與へ、バツ、リア及ウウルテンベルグ(Wienna)は王國となり、普魯西はハノーヴァーを得たり。其翌年に至り、ナホレオンはネーブルス王の魯西亞及英國の海軍を上陸せしめたるを責め其フルボン家の王位を廢し之を弟ジョセフ

に與へ、又荷蘭共和國(バタヴィア)共和國を廢して王國となし、弟ルイをして王位に即かしめたり。

トラフ、ルガーの戦 初ナホレオン既に英國侵入の策を決しアローンに於て佛國艦隊の來るを待てり。當時佛國の艦隊は英國水師提督ネルソンの爲に驅逐せられ西班牙のカデ、イス港に入る。ネルソン其近海に徘徊して之を港外に誘出しトラフ、ルガー岬に於て激戦し、大に佛蘭西及西班牙の艦隊を破る。佛國水師提督ヴ、ルニ、ーヴ(Villeneuve)自殺し艦隊三分の二を奪はる。ネルソンも亦丸に當つて死す。時に千八百〇五年十月二十一日なり。以後ナホレオン復英國と海上に權力を較するの念を斷てり。

神聖羅馬帝國の瓦解 ナホレオンは海上に於て權力を失ひしといへども其陸上に得たる結果は日耳曼帝國に大變動を與へたり。蓋此戦争以來バグ、リア、ウウルテンベルグを始とし十六國の日耳曼諸侯はライン同盟を組織し、ナホレオンを保護者として奉戴するに至れり(千八百〇六年七月)。是に於て連綿たる神聖羅馬帝國全く瓦解しフランシス二世は日耳曼帝位を退き、單に塙太利帝と稱せり(同年八月六日)。

普魯西戦争 普魯西は戦争の間中立を守りしがナホレオンがハノーヴァーを英國と與へ

んとし、且一片の通告をもなさずして佛軍の國中を通過せるを怒り、千八百〇六年十月佛國に對し開戦を宣告せしかば、ナポレオン直に兵を發して普魯西に入る。此時普國と同盟せるものは唯一露西亞あるのみ。フランスウ、ク公普軍に將たり。然れどもエナ(Ena)及アヴェルスタ(Verstadt)の兩戰に於て大に破れ(十月十四日)ナポレオン長驅してベルリンに入る。王族逃遁せり。爾後普軍連りに敗北し遂に露軍と合す。露普連合軍佛軍とアイラウ(Eylau)に戦ひ、又フリードリランド(Friedland)に戦ひ、露軍大敗し死傷甚多し。露帝ナポレオンとテールシトの條約を結び(千八百〇七年七月)普魯西は其國土の半を失ひ、英國との通商を禁せられ、常備軍の數を制限せられ、ナポレオンの第二弟シエローム、ボナパルト(Jerome Bonapart)新王國ウ、ストフ、リア王となり、又其弟ルイスボナパルト波蘭王となれり。露帝アレキサンター是よりナポレオンと同盟せり。

大陸制 佛國は以上の戰爭に於て非常の勢力を得しといへどもトラフ、ルガー一敗の後海上の權力は萎蕩して振はず。英相ピトの死するに及びナポレオンはハノーヴ、ーを英國に與へ之と和せんとす。然れども英國は佛國に對して戰爭を繼續せしを以てナポレオンはベルリン滞在中(千八百〇六年十一月二十一日)大陸制(Continental System)と稱するものを發し、大陸の諸港を

閉ぢ英國と交通し或は貿易することを禁し以て英國を壓倒せんとせり。千八百十年に至るまで葡萄牙及土耳其を除くの外歐洲諸國は大抵此制に協同せり。

葡萄牙西班牙及奧太利戰爭

葡萄牙は大陸制に従はざりしを以てナポレオン一軍を遣はしリスボンに入り、フラガンツ(Braganza)王家を葡萄牙より逐ふ。王族は海に航してフラ

ジルに奔れり。又アールボン家の王チ、イレス四世を廢し西班牙王位を其弟ジョセフに與へ、ジョセフの舊領チーフルス王國をベルグの大公マリ(Alibi)に與へたり。西班牙人大に怒り蜂起してナポレオンに抗す。時に又英將ウ、ルリントン(Wellington)葡萄牙に上陸し國人を援けて佛人を逐ふ。ジョセフも亦マドリ、ドより追はる。ナポレオン自軍を率ゐて西班牙を伐ち一時之を平定せしといへども反服常なかりき。此時奧太利又兵を擧げナポレオンに敵す。ナポレオン西班牙を棄てよ之を征す。奧將チ、イレス大軍を督して善く戦ふ。然れどもウ、グラム(Wagram)の決戦に於て奧軍全く敗れウ、ンナ條約を結びて地を割き和を乞ふ(千八百〇九年十月)此年法王バイアス七世大陸制に従はざりしを以てナポレオンは法王の領地を合せ之を捕へて佛國に幽せり。其翌年荷蘭王ルイも亦ナポレオンの制令に堪えずして位を退き、荷蘭は佛國に合せらる。

ナポレオンの極盛 千八百十年より十二年に至るまではナポレオンの極盛の時代なり。ナポレオンは其王位を鞏固にせんと欲し、ジョセフィンの子なきを以て遂に之を去りて奥太利帝フランシス一世の女マリア、ルイサ(Maria Louise)を娶り(千八百十年)一子を擧ぐ、之に羅馬王の稱を與へて以て其後となせり。他日ライヒスタット(Reichstadt)公と稱するもの是なり。當時佛國の領地は百三十州に跨り、北は丁抹の境より南はチーフルスに至る一帯の地方を掩有しビレニース半嶋も亦其領内に吸収し、他の歐洲諸國は間接に屬國たるの觀あり。蓋ナポレオンはシャールメーン大帝の繼續者を以て自任せるものゝ如し。然れども此極盛の裏既に衰頽の萌芽を含み、内にしては壓制の政治、人民の自由を滅し、外よしては大陸制の爲に諸國民の激昂を招き、西班牙の如きは勃然起てナポレオンに抗し、英將ウ・ルリントンは葡萄牙に在りて頻に佛軍を破る、普魯西は賢相スタイン(Stein)の力により敗餘の財政を整理して國力を養成し、新日耳曼國の勢は駸々として進めり。此際ナポレオンの勢力を挫折する所の一機會發生せり。

露西亞征戰 初露國は佛國と同盟して英國を伐たんことを約せしが、彼大陸制の爲に通商を禁せられ、困苦の餘密に英吉利貨物を輸入せり。ナポレオン之を聞き大に怒り露

國を伐んと欲し、千八百十二年六月五十萬の大軍を率ゐて露國に入る。ニーメン(Neman)河を渡り始めて露軍とボロヂノ(Barodino)に會戦し殺傷相當る。露軍隊を整へて退く。佛軍之を躡してモスコウ府に入る。九月十四日府民既に遁逃して隻影なし。是に於て兵士四出鹵掠す。既にして市中火起り四日にして全市灰燼に歸す。是魯將の佛軍を飢寒に困めんと策に出でしなり。ナポレオン大に窮し和を乞ふ。聽かれず。遂に軍を退く。途兵士凍餓に迫り。且魯人及コサク人の追撃に遭ひ、全軍殆死し。僅にしてスモルゴニー(Smolensk)に達し殘兵をムラーに托し、單身遁れてパリに還れり。

ライプシクの戰 今や日耳曼の勃如として起りフレデリク、ウイリアム三世自人民を獎勵し以て露國と結ぶ。瑞典又英國と同盟して之を援く。是に於てナポレオン復兵を起し先露普の同盟軍をリッペン(Lutzen)に破り(千八百十三年五月)次て又之をパウツェン(Bautzen)に破る。此時奧太利諸國の間に立ちて調和を謀らんとす。ナポレオン聽かず。時に英將ウ・ルリントン西班牙に於て大に佛將ジョールダンを破る。バヴリア及奧國之を聞き同盟に加る。是に於てナポレオン其兵をライプシクの平野に集む(兵十八萬)同盟軍兵三十萬を合せ決戰三日(千八百十三年十月十六七八日)佛軍遂に大敗して退く。ウ・ルリントンビレニース地方より佛國の南部に侵入

せり。

パリ陥る。ナポレオンライフシ、ケル破れてより、同盟の大軍佛國の四疆に迫る。ナポレオンは畢生の智謀を振ひ之に當りしといへとも、事遂に齟齬し同盟軍直に進んでパリを衝き之を陥る(千八百十四年三月三十一日)元老院はナポレオンに迫りて位を退かしむ、同盟諸國遂に之をエルバ(Elba)嶋に流し、ルイ十六世の弟ルイ十八世を立て、王となす。是に於てフルボン家又王位に復せり。其後パリの條約を以て佛國は千七百九十二年の版圖を保持することを得たり。

ヴィンナの大會

千八百十四年九月歐洲列國の帝王諸侯使臣等ヴィンナに會し(千八百十五年六月まで)嘗てナポレオンの爲に蹂躪せられたりし各國版圖の疆界を議定せんとす。實にコンスタンス宗教大會以來の盛會なり。カスルリー(Castiglione)ウーリントンは英國を代表し、タレーランド(Talleyrand)は佛國を代表せり。各國の論議沸騰し殊に露西亞の波蘭に於ける、普魯西の日耳曼に於ける要求の如きは各國間の破裂を見んとするに至る。時に報ありナポレオン復佛國に現れたり。是に於てナポレオンを破法者と宣告し、一致してナポレオンに當らんとす。

ヴィンナの大會の結果に據れば(一)奧太利はヴニス、ミラン、イリリア(Milium)地方及ティロル(Tyrol)を取り、(二)普魯西はサクソニーの大宇、ツルソー(ポーセン)公國の一部及ライン地方を取り、(三)舊日耳曼帝國廢して日耳曼聯邦之に代り、三十九國及四個の自治市府より成る、(四)荷蘭、ベルジアムは合してネザールランドの一王國となり、(五)露西亞は波蘭王國の名稱の下にウ、ルソー公國の大部分を取り、(六)瑞典那威は合して二王國となり、(七)丁抹はラウエンブルク(Luxemburg)を得、(八)英國はマルタ、佛蘭西及荷蘭の殖民地、ハノーヴァー王國を得、且アイオーニア諸島七共和國の保護主となり、(九)露西は舊聯邦に三州を加へ、二十二州となり、(十)西班牙、ポルトガル、サードニア等の諸王國皆恢復し、(十一)伊太利に於けるバルマはナポレオンの寡婦マリアルイナの領に歸せり。

ナポレオンの上陸

ルイ十八世民心を失ふの時に當り、ナポレオン俄然カンヌ(Cannes)に上陸す(千八百十五年三月一日)政府兵を遣はして之を捕へしむ、其兵却てナポレオンに合す。ナポレオン麾下の驍將たりしチイ(Chapoy)も亦進んでナポレオンを援く。ルイパリを出走しエルバの流人復テ、レリーの宮殿に入れり(三月二十日)。ナポレオン先自由の憲法を國內に布き、次て又諸外國と平和を約せんことを求む。成らず。即兵十三萬を徴し、先普英の兵を伐たんとしベルチアムに進む。

ウータールーの戦　ヘルチアムにある普軍の將はフリ　ヘル(Bliucher)にして英軍の將はウエルリントンなりナポレオン其兩軍の相合せざる間にフリ　ヘルをリグニー(Ligny)に伐ち之を退く、ナポレオン以爲らく敗軍の普將未遽にウ　ルリントンを援くる能はざるへしと、然れども猶グルシー(Grouchy)をして之に備へしめ、自一軍を以てウ　ータールー(Waterloo)に英軍を撃つ(千八百十五年六月十八日)戦未決せず、ウ　ルリントン戦甚努む、日暮普軍不意に來りて佛軍の右翼を襲ひしを以てナポレオン大敗して退く、

ナポレオンの末路　千八百十五年六月二十二日ナポレオン復位を黜けらる、七月七日フリ　ヘル及ウ　ルリントンバりに入りルイ十八世を王位に復す、ナポレオン遁れて米國に入らんとし、遂に自英國軍艦に投して英人の保護を求む、英人ナポレオンを視ること素より虎狼の如く、同盟國の協賛を以て太平洋中のセントヘレナ(Saint Helena)島に流す、尋て十一月第二バリ條約に於て佛國の領地を千七百九十年の版圖に限れり、ナポレオン生を孤島に送ること六年、千八百二十一年五月五日享年五十又二にして歿す、古來英傑の末路未此の如く悲哀なるものあらず、後世ナポレオンを論するもの其見る所各異なりといへども、其軍略治才に於ては、古今無雙の一英傑たるや疑を容れざるなり、

神聖同盟　ナポレオンの事畢るや露西亞、奧太利及普魯西は一同盟を組織し、神聖同盟(Holy Alliance)と稱し、聖經の正理に由り以て國家を治め、一旦事あれば互に相應援することを約せり、英國、法王及土耳其を除くの外、歐洲の君主皆之に加入するに至る、此同盟たるや宗教上の名目を藉るといへども、其實各國連合の勢力を以て、佛國革命以來民間に發生せし自由思想の破裂を鎮壓せんとするに在りしなり、

第三章 最近世史

第一節 ナポレオン一世以後の佛國及其革命

チ　ーレス十世　ナポレオン敗滅し、ルイ十八世(千八百十四年より千八百廿四年まで)立つに當りて、佛國の内情大に疲弊し、人民は唯偷安を事とせり、王ルイ卓識あるにあらざれども、常に平安の政を執り、立憲政體に倣はんとし、が弟アルトア(Artois)伯を主として王の侍臣、再專制政治を回復せんとするもの多かりき、ルイの歿するや、弟アルトア伯立つ、之をチ　ーレス十世(千八百二十四年より千八百三十年まで)となす、王凡庸にしてホリニ　ク(Polignac)侯を用ひ專制政治を施さんとす、民權黨の首領ギゾー(Gизо)チ　ヘル(Thier)ヤン　マン、ボンスタヤ(Benjamin Constant)等三

論文章を以て大に政府に反対せり。千八百二十年政府は「サン、クルード」(St. Cloud)の敕令を發布して出版物を制限し、議員の撰擧法を變更し、議會開會前に之を解散すべきことを命ぜり。是に於て七月の革命と稱する騒亂起れり。

七月革命 「サン、クルード」の勅令の發布せられたるは七月廿六日なり。其夕亂民蜂起し宰相ホリニ、クの家に寇し、皆武器を取りて敕令を廢棄せんことを求む。パリ市中騷擾すること三日。王遂に敕令の廢棄を宣告せしと雖、人民既に市府を領して假政府を組織し、オルレアン公ルイ、フィリップを迎へて位に即かしむ。チャーレス遂に奥國に遁れ、後六年よして歿す。

革命の影響 此革命は施ひて歐洲各國の政治上に變動を及ぼし神聖同盟は全く壞裂せり。其直接の影響を受けて蜂起せしものはベルチアム及波蘭なり。波蘭は之を露西亞の條下に譲り、左にベルチアムの獨立を記せん。

ベルリチムの分離 初ベルチアムはヴィンナ大會に於て荷蘭の太守ウ、ルリアム、フレデリックの管下に歸し、ネザラント共和國の一部となりしが、ベルチアムは舊教國なりしを以て新教の荷蘭と協はす。千八百二十年の佛國革命に刺激せられ、荷蘭と分離せんとし、**ブラセル**

(Brussels)先蜂起し地方政府を組織し以てベルチアムの獨立を宣告せり(千八百三十一年十月五日)。サキセ、コアルグ(Caxe Coburg)のレオホルド一世撰はれて王となり、佛人の援助を得、數年間荷蘭と戦ひ、遂に千八百二十九年に至りて其獨立を承認せらる。爾後ベルチアムは着々として進歩し、商業大に發達し、鐵道亦盛に起り、自由制度行はれて、荷蘭と競進せり。

ルイ、フィリップ (千八百三十年より千八百四十八年まで) 王位に登りてより、先法令を改革し諸宗教を優待し、印刷の自由を與へ、自王權を制限せり。初王英國合衆國及瑞西等より漂浪して具に辛酸を嘗め、以てナポレオンの滅亡に至る。其位に即きしとき年五十七。是を以て、人民王を呼びて市民王(Citizen King)と稱して之を欽慕せり。當時政黨の軋轢甚しく「**アールボン**」黨は先王チャーレスの孫を推して位に即かしめんとし、「**ボナパルト**」黨は猶ナポレオンの勳切を追慕して、現時の政體を喜ばず、「**オルレアン**」黨はフィリップ王を保護して立憲王政を主張し、其他共和を唱ふる共和黨あり、社會主義に傾ける赤共和黨即過激共和黨ありて混亂を極む。王亦政治の方針を誤り、漸く衆望を失ひ、後出版の自由を廢し、且人民を虐待し益人民の惡評を招き、復革命の破裂を見るに至れり。

二月の革命 政府の腐敗は日を逐ふて甚しきを加へ、政論國內に喧しく、時に不平の

士改革宴會(Reform Banquet)と稱するものを開くこと四方に流行したりしが、千八百四十八年二月二十二日ウ・シントンの誕生日を期し、無産の職工等シャムフ、エリシー(Champagne)に於て大宴會を開かんとす。宰相ギゾー之を解散せしむ。是に於てか不平一時に破裂し、争亂大に起る。王騒擾を鎮壓する能はず。遂に位を退き家族と共に英國に遁れ、二年にして歿す。

共和政 ルイ、フリッ、フ既に英國に遁れし後、社會黨即赤共和黨亂を作せしか護國兵の爲に一旦鎮壓せられ、國會は共和政を議決し、普通選舉により國民議會を招集せり。然れども社會黨は猶大に不満を抱き、日々幾多の職工に與ふるに平等の工事を以てせんことを政府に要求して已ませ、政府之を容れざりしを以て争亂復破裂し、勢甚猛烈なりしが、將官カヅ、ニーニ、ク(Cavaignac)之を鎮撫せり。國民議會は十一月を以て畢り、大統領を公撰し、四年を以て任期となし、行政の首に立たしむ。ルイ、ナポレオン撰はれて大統領となる。

ルイ、ナポレオン ルイ、ナポレオンはナポレオン一世の姪(實て荷蘭王と云りしルイ、ナポレオンの位を黜けらるゝ母と共に瑞西に遁れ、又伊太利に入り專學術を研究し、後千八百三十

六年佛國に入り叛を謀り、成らずして亞米利加に遁れ、後又英國に移る。千八百四十一年ナポレオンの遺骨をセントヘレナより佛國に迎へ、之が祭祀を營むの際に當て復佛國に入り叛を謀り捕へられ、六年の長日月を獄舎に送り、職工の服を着け、逃れてロンドンに奔り、二月の革命を機とし佛國に歸り、撰はれて國會議員となり、是に至りて大統領に撰はる。革命の影響 革命の報各國に達するや、各國の人民亦大に蜂起し、伊太利、日耳曼、奧太利、普魯西等に於て、叛亂騒擾相踵き、自由の政治を求めんとす。然れども其詳細は便利の爲に、之を各國條下に説くべし。

ナポレオン三世の帝政 ルイ、ナポレオン大統領に撰はれてより、常に權力を專にせんと欲し議會と協はず。千八百四十九年兵を羅馬に送りし時の如きは反論最喧しく、テ、エール、フログリー(Broussin)、モレー(Morès)及他の「フルボン」黨或は「オーレアン」黨のものはナポレオンを難すること殊に甚し。然れどもナポレオン能く僧侶及地方人民の心を得、窃に佛國の帝權を握らんと欲するの念熾なりしかば、兵力を以て抗論者を壓せんとし、カヅ、ニグニ、クテ、エール、ヴ、クトル、ユーゴ(Victor Hugo)等の諸名士を逮捕し之を遠地に送れり(千八百五十年)是に於てナポレオン人民より任期十年大統領に任せられ、千八百五十二年に至り凡七

百五十萬の投票を得て帝位に登れり。奥太利、普魯西、露西亞の諸國之を聞き、一時大に驚きしがナポレオン、帝國は平和を主とす」と宣告せしを以て諸國皆英國に倣ひ、之に承認を與へたり。

ナポレオンの戦争及敗滅 ナポレオン位に登れる時、露西亞と土耳其との争あり、クリミア戦争と稱し、佛國は英國と結托して土耳其と同盟し、以て露國に當り大に佛人の名聲を博したり。後千八百五十九年に至りて伊太利と奥太利との間に事を生ず。ナポレオン伊太利に自由を與ふと稱し、自軍を率るサデーニヤ王、ウクトル、エンマニユエル (Victor Emmanuel) と共に奥軍を破り、奥國とヴルラフランカ (Vilhelms) の條約を結び、伊太利よりニース及サヴォイの地を得たり。ナポレオン最後に普魯西と戦ひて敗れ (千八百七一年) 遂に王位を黜けられ英國に入り二年にして殂せり。是即有名なる普佛戦争なり。其戦況の如きは普魯西の記に就きて見るべし。ナポレオンの治才は大に其伯父に似たる所あり。其治世中は佛國の隆盛其極に達し、能く陸海の軍備を擴張し、教育を奨励し、鐵道及鑛業を盛にし、又ハリの市街を改修して、壯麗人目を驚かすに至る。

共和政 千八百七十一年一月二十八日を以てパリ遂に普魯西に降り二月二十六日之

と平和を結び五十億フランクの償金を出しアルサス、ローレーンの二州を割き之に與ふ。此時テ、エル撰はれて政務を督せり。然れども其間又諸政黨の争擾甚しくテ、ローレーの宮殿及其他王族の邸宅焚毀せらるゝもの多かりしが遂に壓服せらる。テ、エル大に衆望あり。在職の期三年を延ばし大統領の稱を得、マクマホン (Michele Mahon) と共に能く國事を整理せり。千八百七十三年に至りマクマホン之に代り職にあること七年。保守的政略を用ひ、千八百七十五年に新憲法を制定し、共和黨と相善らざる諸黨及僧侶皆之を援く。然れども共和黨遂に勢力を得、グレヴ、イ (Grevy) 出て、大統領となる (千八百七十九年) フレンネー (Fouquieres) ガムベタ (Gambetta) テ、イクレア (Duroselle) フ、リー (Ferry) 相繼ぎて内閣宰相となる。此時フ、リーの議を用ひ教育を宗教より分離せしめたり。グレヴ、イに次ぎて大統領となりしものをカルノー (Carnot) と名せ (千八百八十七年)。

東洋との關係 是より先、佛人漸く力を東洋に延ばし、クリミア戦争終局 (千八百五十六年) の翌年、ナポレオン三世英國と連合して支那を伐ち、太平洋上に自由なる貿易の通路を開けり。次て又支那と交渉を生じ、戦ふこと四年 (千八百五十八年より千八百六十二年まで) して、交趾の地を取り。千八百七十四年安南王をして佛國保護の下に立たしむ。支那之を拒み佛國と戦ふ。安南又支

那と相結んで佛人に當る。千八百八十五年に至り、佛國は遂に東京を取り安南を以て其保護國となし、尋てマダガスカル(Madagascar)島を保護國となせり。

第二節 西班牙及葡萄牙の内亂

西班牙 先に西班牙はナポレオンの爲に征服せられ、ジョセフ國王となりしが國民之に服せず。遂に英國の援を得て佛人を放逐せり。時に西班牙王フアン七世、ナポレオンに捕はれてパリにあり、其間人民はカデズに大會を開き、教法檢察令及種々の舊法を廢して自由組織の憲法を制定せり(千八百十二年)ナポレオン破れてフアン、ナンド本國に歸るに及び、舊法を復して專制王政を行ひ、之に抗せしもの五萬餘人を罪せり。西班牙人佛國に遁るもの多し、是より先、南亞米利加なる西班牙の領地獨立して共和政を組織す。西班牙之を征服せんと欲して國力疲弊せり。千八百二十年に至り軍人の叛首府マドリッドに起り、王に迫り千八百十二年の憲法を承認せんことを求む。王已むを得ずして之を許し、國家一時安定に歸せしか、幾何もなく憲法解釋の異同より再爭亂を生じ、革命黨は主中以上の人民より成り、勢甚猖獗なり。是に於てか神聖同盟諸國は、伊太利ツ・ロナ(Venonia)

に會して(千八百一十二年)西班牙王救助の議を決す。佛王ルイ十八世先兵を發して之を援けしかは、王黨の勢忽盛となり、革命黨遂に大敗して捕はるもの甚多く、王權復依然として確立せり。其後西班牙國は暫く平和を保ちしか、千八百三十三年に至り、王位繼承に關して復激烈なる内亂破烈せり。初フアン、ナンド嗣なきを以て若男子の生るものなくんば、位を其弟ドンカールに譲らんことを約せしか、後王后殂するに及び、王再ネーブルス王の女クリステイナを納れて王后となし、一女を生む。是に於て王前約を變じ、王女を立て、嗣となす。既にして王殂し(千八百一十三年)、王女イサベラ三歳なり。太后政を攝す。ドンカール望を失ひ、遂に兵を舉げて位を爭ふに至る。女王先民心を收攬せんとし、千八百十二年の憲法を確認し、自由黨及中和黨の援を得たり。英佛又陰に之を援けしを以て、千八百三十九年に至りドンカール破れて佛國に遁れ、國內靜穩に歸せり。後太后中和黨の首領エスパーテロ(Espartero)を擧げて宰相となす。エスパーテロ能く國益を増進せしと雖、千八百四十四年に至りて、反對黨の亂に因り、國外に放逐せられ、保守黨の領袖中將ナウゲ・エスコンジエス代りて内閣總理となる。後六年にして國を去れり。是より先イサベラ年既に長したるを以て、王位に登る(千八百四十四年)女王イサベラ二世是なり。後其妹マリア・ルイサ、佛王ルイ・フィリップの子

モンテンパニール(Montpensier)公と婚す(千八百四十六年)英國主として之を拒みき。蓋他日佛蘭西及西班牙二大國の一手に歸せんことを恐れてなり。女王施政宜を失ひ、國內常に亂れて治らず。千八百六十八年に至りて軍人叛亂を作し、女王を國外に逐ふ。其後西班牙は暫時共和政治なりしが、千八百七十年に至りて、伊太利王子アマデアス(Amades)を迎へて王位に即かじめしも、國內政黨の争甚しく、千八百七十三年遂に王位を退く。其後争亂相繼ぎ、ドン、カールロス黨勢復盛なり。千八百七十四年イサヘラの子アルフ、ソリー十二世立ちて王となるに及び、ドン、カールロス黨全く撲滅せらる。アルフ、ソリー善く國を治め、殂して其子アルフ、ソリー十三世位に即く(千八百八十六年)西班牙は連年混亂の際に南亞米利加の領地及墨西哥等を失へり。事は亞米利加の條下に之を説かん。

葡萄牙 ナホレオンの威を大陸に振ひしどきに當りて、葡萄牙は中立を保ちしと雖、亦之か爲に制せられ、常に軍資をナホレオンに納れたり。千八百七十年に至り、大陸制の強行せらるゝと、葡萄牙の太子ジョン之は從はざりしを以て、ナホレオン兵を遣はして葡萄牙を征す。王族英艦に援けられて、南亞米利加なるブラジルに奔る。千八百十年に至り、太子ジョン葡萄牙の王位に即きジョン六世と稱し、千八百二十一年葡萄牙に歸れり。其間人民自由制の

典章を編し、王の承認を得たり。而るに王の第二子ドム、ミグエル(Dom Miguel)父王の承認せし憲法を撲滅せんとして國內を亂し、遂に放逐せらる。是より先ジョン歸國の翌年フラチルは獨立帝國となり、ドムペドロ(Dom Pedro)一世(ジョン六世の長子)帝位に登れり。千八百二十六年ジョン六世殂し、ドムペドロ迎へられて葡萄牙の王位に即く。幾何もなく位を幼少の王女マリアに譲りてフラチルに退き、ドムミグエルを國に復して女王の政を攝せしむ。是に於てかミグエル自王位を奪はんと欲し、千八百二十九年國會を招集して己の登祚を宣告せり。フラチル帝ペドロ之を聞き、兵を率ゐて葡萄牙に入り、英佛の援を得、ミグエルを伐ち、戦争二年の後、千八百三十四年之を國外に放逐し、マリアを位に復せり。後其子ペトロ五世立ち(千八百五十三年)、次で其弟ルイ一世位に登る(千八百六十年)。

第三節 希臘の獨立

希臘人の蜂起 希臘は土耳其人の版圖に歸してより永く、其壓制に苦みしか。十九世紀に至りて土耳其の勢力漸く衰るに乘じ、アレキサンター、イブシランテイ(Metaxas, Trilantzi)首唱者となり、獨立の一秘密團體を組織して兵を擧しか、忽土耳其人の爲に破られ、イブシ

ランティ、埃太利に奔れり(千八百二二年)。然れども其翌年希臘全土皆兵を取て蜂起し、國民大會を開き、希臘の新憲法を議せり。希臘國民の熱心大に歐洲各國國民の注意する所となりしか、ヴ・ロナの大會に於て埃國大政治家メ・テルニ・ヒ(Meternich)の發議に因り、諸國は希臘を救援せざるを決議せり。是を以て希臘人遂に土耳其の爲に破られ、殺戮せられたる者二萬人、奴隸として捕へられたる者之に倍せり。千八百二十四年に至ては、各國の人民中古騎士の遺風を慕ひ、來り援くる者甚多く、英人「ロイド」(Lord Byron)の如きも亦其中にあり。然れども幾月をらすして死せり。次て露帝ニコラス(Nicholas)自希臘教徒の首領として大に希臘人を援く。千八百二十六年に至て土耳其は露國に地を與へ、之と和せり。

獨立 埃及に在る「パシヤ」(Pasia) (副王の義) メヘメト、アーリ(Mehemet Ali)土耳其帝マームード(Mahmoud)の位を繼かんことを願ひ、其子イブラヒム(Ibrahim)を將とし土耳其人を援け、希臘人をナツ、リノ(Navarino)に破り(千八百二二年)。次年又ミ・ソロンギ(Missolonghi)を陥る。希臘の勢力今や全く摧折せられんとするに際し、千八百二十七年七月六日英佛露の諸國「ロン」條約を結び、以て希臘の獨立を承認し、且皆艦隊を派して土耳其及埃及の軍をナツ、リノに破りて之を殲せり(同年)。土耳其も亦遂に希臘の獨立を承認するに至れり(千八百二十九年)。

(年九) 是に於て希臘はカホー(Chio)を以て大統領となす。其殺さるゝに及びて、歐洲諸強國は「ロンドン」に會し、希臘を立憲王國となさんとし、パウ、リアのルイの子オ、トーを立て、希臘王となせり(千八百三十二年)。千八百六十三年軍人蜂起してオ、トーを放逐し、丁抹王の第二子撰はれて王となり、チ、ーチ一世と稱す。

第四節 露西亞及土耳其

クリミア戰爭以前の露西亞 ナポレオンの敗滅するや、ウ、ンナの大會に於て魯國はウ、ルソの地を得て勢力益張り、帝アレキサンダー一世國事を勵みしが、千八百二十五年に至りて殂し、弟ニコラス一世(千八百二十五年より千八百五十五年まで)位を嗣ぎ、幾何ならずして波斯を侵略して大に境土を廣め、次で希臘の獨立を企るゝ當り帝之を援け、以て土耳其を侵略せんと欲し、千八百二十八年露軍タニ、ーフ河を渡りてウ、ーナを陥れ、翌年シリストリア(Silistria)を取り、アドリアノーブル(Adrinople)を降し、コンスタンテ、ノールに逼れり。土耳其人大に恐れ、千八百二十九年九月アドリアノーブルの條約を以て露國は再地を増し、且自由に土耳其の領海を航通するの權を得たり。

波蘭人の亂 千八百三十年十一月佛國の革命に激せられて、波蘭の志士亦獨立を計る。其初に當りては兵學校の生徒之が首唱なりしか、騷亂漸次全國に擴り、魯國の太守コンスタンティンを逐ひ、地方政府を組織しクロビキ（Chlopicki）軍務を總督せり。志士大に奮ひ露軍と戦ふと雖衆寡敵せず、露將デービテ（Diebitsch）ハスキーツ（Paskiewitsch）等連戦波蘭を破る。波蘭人力竭きて、復壓服せられ（千八百三十一年二月）憲法及國會は蹂躪せられ、羅馬舊教徒は非常の殘虐に遭ひ、一年間にして波蘭人の西比利亞に送られたるもの八萬人に上れりと云ふ。

クリミア戦争以前の土耳其 土耳其は十九世紀の初に至りて、國勢頓に振はず。外は屢露國の爲に侵略せられ、且埃及の「バシア」メヘメト、アラー殆獨立の狀を爲し、内は「ジニツリー」親衛軍跋扈して帝王の廢立を擅にするあり。マムード二世漸く之を制せしと雖、又希臘人民の叛あり、之を征服せんとして力及ばず。遂にアドリアノールの條約を結び、希臘の獨立を承認し、且露國に「ダニール」河口の地を與へり。千八百三十一年メヘメト、アラーの子イブラヒムシリアを侵略し、小亞細亞に寇せんとす。土耳其の軍之と戦ひ大に敗績せり。千八百三十九年に至り土軍復大に破らる。是より於て歐洲の諸大國（佛蘭西を除く）「ロンドン條約

を結び（千八百四十年）土耳其を援けんとし、英澳の軍先進んで小亞細亞に入り、イブラヒムを逐へり。是より土耳其及埃及の間に和約成り、土耳其漸く舊領を復せしと雖國力之が爲に大に凋弊せり（千八百四十年）。

千八百四十一年の和約以來、メヘメト、アラーの埃及の世襲太守となり、其後嗣サイド（Said）の時に至り、佛人「レセブ」(Raschid)に露西の地頭を開墾することを許し、千八百六十九年に至り、地中海と紅海と始めて連通せり。

クリミア戦争 露帝ニコラス土耳其の日に衰頹せるを見大に爲す所あらんとし、暗に英國に牒するに病夫（土耳其を指す）の容狀を以てし、共に土耳其を分奪せんとす。時に英國の宰相「アーサー・バーク」(Arthur Balfour)遽に之に應せず。露帝遂に土耳其帝に要求して曰く、土耳其國中の希臘教徒は凡て之を管轄することを得んと、土耳其帝之を拒む。露帝之を機として開戦を布告す（千八百五十三年十月）英佛之を聞き、歐洲國力の平衡を失はんとを恐れ、同盟して土耳其を助け、露西亞に當る普壤中立を守れり。土耳其の軍、始は勝利を得たりしか、シノーフ(Sinop)の戦土耳其の艦隊大に破れ、露軍の勢甚猖獗なり。千八百五十四年英佛の同盟艦隊、黒海に現る。今や黒海の海岸は戦鬪の主要地となれり。九月英佛の軍先クリミアに上陸

しつアルマ(Alma)の戦大に露軍を破る。バラクラワ(Kalaklava)及インケルマン(Inkermann)の戦露軍復破れ、同盟軍は海陸よりセバストホル(Sebastopol)の堅砦を圍めり、守將ト、ドレーベン(Pollleben)善拒く、同盟軍は冬期の間、飢寒悪疫の苦むる所となり、將士の死するもの甚多し、而るに十二月末塙國も亦同盟に加はり、兵を國疆より出し、次てサーデーニア王も兵を送りて來援せしむ。是に至り軍氣大に振ふ。同盟軍凡て十七萬五千人。佛將ヘリ、シエー(Pellissier)英將シムフソン(Simsion)之を督し攻撃甚急なり。遂に千八百五十五年九月八日に至りセバストホル要害の胸壁、佛英兩軍の手に落ち、有名なるセバストホルの攻圍も十二閱月にして其終を告げたり。然れども露軍の總督コルデアコフ(Corsakoff)猶東方に軍して退かさざりしが、當時ニコラス帝既に歿し、アレキサンター二世位に在りて平和を望みしを以て、翌年三月バリの條約成り、露西亞はタニール河口の地を返し、且黒海に備ふる船艦の數を限り、其海岸に城砦を増築せず。黒海を開き各國民の商業を自由ならしめ、又土耳其に對する希臘教徒保護の要求を撤去し、土耳其も亦希臘教徒を回々教徒と同一の待遇を爲すべきことを約せり。又此條約によりてウ、ラシア(Wallachia)及モルダウ、ア(Moldavia)は露國の保護を脱し、自治制を施行し、千八百六十一年相合してルーマニア(Roumania)の一

候國となり、後又王國となれり(千八百八十一年)。

波蘭人復叛す 千八百六十三年一月波蘭人再叛す。露軍之を征して一旦鎮定せしか如くなりしが、壯年の士陰に起りて大に露軍を伐つ。既にして全國皆蜂起し電信線を斷ち、鐵道を毀ち、以て露軍の進退を阻害す。英佛亦之に關して露國と議する所ありしか。事終に諧はず。戰亂夏に至りて猶已まず。然れども孤立遂に支ふる能はず。九月に至り再其壓制に屈伏せり。是に於て露國は波蘭の國語を箝制し宗教を撲滅し、以て其國性を滅絶するの手段を實行せり。

アレキサンター二世及其東方征略、クリミア戰爭に當りて塙太利は露國を援けさりしを以て、塙國と普國と戰端を開くに及びても、露國は局外中立を守れり。其後普佛戰爭終局し、露帝は普帝及塙帝と三帝同盟を作り、銳意内治の改良を謀り、歐洲文明國と比肩せんとす。而して又手を東洋に延はし、千八百七十三年中央亞細亞の一地を取り、千八百七十五年に至り、又土耳其と事を生ぜり。千八百七十五年七月土耳其の領地なるハーツ、コツ、ナ(Herzegovina)及ボスニア(Bosnia)の基督教徒其束縛を脱せんとして叛し、モンテネグロ(Montenegro)及サーウ、ア(Serbia)之を援く勢甚猖獗なり。土耳其之を鎮壓する能はず。加之

露國復スラウニク人種及希臘教徒保護の名目を以て叛國を援く。日耳曼及奥太利亦露國に與せり。當時斷然露國に反抗せるものは一の英國あるのみ。千八百七十七年四月露西亞と土耳其との戦端破裂し、露軍タニーフ河を渡りバルカン(Balkan)山を踰え、コンスタンティノブルを衝かんとししが、土耳其人亦善く戦ふ。然れども軍遂に破れてアドリアノブル陥らる(千八百七十一年一月)。是に於て英國は艦隊をダータネルズ(Dardanelles)海峡に送り、以て土耳其の聲援を爲す。同年三月露國俄に土耳其とサン、ステファノ(Gran Stefano)の條約を結ひしが、六月に至り又英國及他の各國とベルリン大會を開き、サン、ステファノの條約を再議し、終に戦局を結べり。此條約に因りセルヴ、アルメニア及モンテネグロは獨立し、露國はカース(Caesa)の地を取る。是より土耳其益衰微せり。千八百八十一年三月アレキサンダー二世虛無黨の爲に弑せられ、皇子アレキサンダー三世位に即けり。

第五節 伊太利の内亂及其統一

ウィenna大會後の伊太利 ナポレオン一朝廢滅せしより、諸國の帝王使臣ウィennaに會して、各國の範圍を確定するの時に當りて、奥國は伊太利に於てロムバールド、ヴェニス王

國を建てタスカニー(Tuscany)モデナ(Modena)パルマ(Parma)等の公國は皆奥太利家の一族の手に歸し、サデーニア、ネーポリス等の王國ありといへども、要するに伊太利の全權は奥國に歸し、常に壓制を施せり。是を以て伊太利の人民皆自由を唱へて專制王權の束縛を脱せんとす。然れども毎に奥太利軍の爲に壓伏せられたり。ネーポリス及シシリイの人民は自治の念殊に盛にして遂に秘密團體を組織し、西班牙内亂の好機に乗じて、ネーポリスの人民一時に蜂起し自由の憲法を制定して、王フリーデリヒナンドに迫り之を承認せしむ(千八百二十年)。時にシシリイの人民亦蜂起し、ネーポリス改革政府の下に合せり。然れども奥太利、普魯西及露西亞同盟してレーバーク(Laybark)の大會を開き(千八百二十一年)、奥太利の軍六萬人、伊太利に入り革命黨を撲滅せり。是に於てフリーデリヒナンド再專制政府を組織して、民黨を放逐し或は禁錮せり。此時ピエドモント(Piedmont)にありても革命の騷亂起り王ザクトルエンマニエル位を退き、其弟チャールス、フィリクス(Charles Felix)代り立ち、奥太利の兵力を假り壓制の政を行ふ。伊太利に於ける改革の争亂は長く延きて、千八百二十一年の破裂を見るに至る。

千八百二十一年の叛亂 千八百二十年の佛蘭西革命は將に破裂せんとする伊太利人は一機會を與へ、千八百二十一年に至りモデナ及ボログナ(Bologna)に自治政府起り、パルマ

王マリア、ルイサは國外に放逐せられたり。此時法王領内にも亦蜂起あり。然れども革命黨は暫時にして復墮太利軍の爲に鎮壓せらる。志士マ・ツ・ニー(Mazzini)と稱するものあり。「壯年伊太利」と稱する一團體を組織し、蹶起して自由共和を唱ふ。ビードモント及サーデーニア王チャールス、アルバートは素より墮太利の干渉を惡み、人民に良政の澤を與へんとせしも、亦「壯年伊太利」團體と擧を與にするを好まず。然れども溫和黨は深く望をサーデーニア王に屬し、以て國政を改善せんことを謀れり。

千八百四十八年の叛亂 千八百四十八年二月の佛國革命は激せられ、ミラン及ヴニスの人民先鋒起し、墮太利の鎮兵を驅逐し、地方政府を組織し、既にしてロムバード全土亦獨立の旗を擧ぐるに至れり(千八百四十一年三月)。サーデーニア王チャールス、アルバート之を援け、墮太利に對して開戦を布告し、伊太利人民を糾合し、ロムバードに入れり。然れども軍隊一致の力に乏しく、且精練を缺けるを以て、カストツァ(Castelzza)及ノーツラ(Novara)の兩戦に於て墮將ラデツキー(Radetzky)の爲に大に破られ、アルバートは位を其子ウクトル、エムマニエル(Victor Emmanuel)二世に譲り、葡萄牙に逃る。エムマニエルは墮太利と不利なる平和を締結せり。然れども爾來サーデーニア政府は自由主義を執り、内部の情態益進歩せり。此時

に當りて羅馬に於ても亦騷亂起り、共和黨全權を得、法王バイアス九世遁れてゲータ(Geeta)に奔れり。是に於て羅馬は一時共和政府となり(千八百四十一年二月)。壯年伊太利黨の首領マ・デーニ及有名なるガリバルデー(Garibaldi)之を指揮せり。既にして法王は佛蘭西軍の援を得て羅馬に歸り、共和黨と激戦し、復羅馬を取れり(同年七月)。是より佛軍は羅馬に屯在せり。ヴニスにダニエル・マニッ(Daniel Manin)の指揮に従ひ、尙墮軍に抗せしか、内外の困難を蒙り、遂に其征服する所となり(同年八月)。伊太利は叛亂以前の狀態に復せり。

ウクトル、エムマニエル 自由を渴望せる伊太利の民心、今や一にサーデーニア王ウクトル、エムマニエルに歸し、依りて以て墮太利の羈絆を脱せんとす。王は常に本國の利益及國民の名譽を謀るを以て心となし、賢相カウール(Cavour)ありて之を輔佐せり。カウール亦伊太利の獨立及統一を以て志となし、大に全州の爲に盡す所あり、彼クリミア戦争の起るや、カウールはサーデーニア王を勤め、英佛と同盟し、兵を出して之を援けしむ。是蓋二強國の歡心を得て他日の援助と爲さんとしむなり。其翌年(千八百五十六年)ハリの平和會議に於てカウールは伊太利諸州の政治宜を得ざるを訴へたり。カウール又深くナホレオン三世と交り、以て墮太利人を以太利より逐はんとし、ナホレオン親王(ナホレオン三世の叔父)、ウクトル、エムマニエル

の女と結婚せしめ、遂に相結んで埃太利と戦端を開けり(千八百五十一年四月)。是に於てナポレオンはアルプス山よりアドリアテ、ケ海に至るの地に自由を與へんと宣言し、自兵を率ゐて伊太利入り、マチチンタ(Mantua)、ソルフェ、リノ(Solferino)の戦(共に千八百五十九年六月)に於て大に埃軍を破れり。而るにナポレオンは日耳曼諸國の將に埃太利を援けんとするの形跡あるを見、事の困難に陥らんことを恐れ、埃帝フランスシヨセフとウ、ラフランカ(Villfrance)の和約を結べり(同年七月)。此に因りてサーデーニアは埃國よりロムバデーを取り埃國は依然ヴェニスを領し、而して佛國は其報酬としてサーデーニアよりサツ、イ及ニースの地を得たり。

伊太利王國 ウ、ラフランカの條約未成らざるに當り、既にタスカニー、バーマ及モデナは其君主を逐ひサーデーニアに合せり、ネーブルス及シシリに於ては王フリーデー、ナント二世の死後フランス二世(千八百五十九年)代り立ち亦壓制の政治を行ふ。時にガリバルデー政府の許可を得ず、一千の兵を率ゐてシシリに上陸し、ヴェクトル、エムマニエルの名を以て之を略し(千八百六十年)。次て又下伊太利に渡りネーブルスを定む。是に於てネーブルス及シシリ共にサーデーニア王國に合して伊太利中ウ、ニス及羅馬を除くの外悉くエムマニエルの手中に歸し、エムマニエルは千八百六十一年二月十八日始めて伊太利各國の代議士をテ、ーリン(Turin)に會し、三月十

七日伊太利王位に登れり。

伊太利の統一 今や伊太利王國はウ、クトル、エムマニエルの軍略、カウールの賢才、ガリバルデーの愛國心とにより創建せられたり。然れども伊太利の統一は未成功せず、カウール伯溢然として逝けり、リカソリー(Risoli)、ラタ、ツ、ー(Rattazzi)相繼ぎ相となり、カウールの貽範を遵行せしが、ガリバルデー黨は奮ひて外國人を伊太利より逐はんとす。ガリバルデー先自由兵を募り羅馬を取らんとして進む。然れどもエムマニエルは佛蘭西との關係上之を鎮壓せざるを得ざるを以て、兵を遣してガリバルデーを破り之を虜にせり(千八百六十二年)。時に歐洲の自由黨は大にナポレオンの措置を批難せしを以て、ナポレオンは千八百六十四年九月(所謂九月の會盟) 伊太利と條約を結ひ、伊太利は首府をテ、ーリンよりフローレンスに移し、佛蘭西は漸々羅馬より其兵を撤去するに至れり。千八百六十六年普埃兩國の戦端を開くや、伊太利王は普國と同盟し埃國に開戦を布告し、ウ、ニスに侵入せり。然れども其軍屢敗れしが、同年十月普埃の和約成るに及びて伊太利はウ、ニスを得たり。是に於て伊太利王國の版圖に入らざるものは唯一の羅馬あるのみ。初佛軍の羅馬を去るや、ガリバルデー又羅馬を略せんとす(千八百六十七年)。佛國復之に干渉せしを以てエムマニエル亦ガリバルデーの運動に反

對し、佛國は再守兵を羅馬に置きけり。然るに千八百七十年普佛戰爭の起りしとき佛帝は羅馬の鎮兵を撤回せしを以て、ヴクトル、エムマニエルは其機に乗じ兵を羅馬に出して之を占領せり(千八百七十年九月二十日)。是に於て千百年以來の宗教國は伊太利王國に併吞せられ、唯一尊高の地として舊教徒の腦中に存立せるのみ。伊太利全土既に統一せられ、伊太利政府は千八百七十一年七月を以て羅馬に遷れり。千八百七十八年ヴクトル、エムマニエル歿し、王子フムベルト位を繼ぐ、幾何ならずして法王バイアス九世も亦逝けり。

第六節 英吉利

チヨーチ四世 チヨーチ二世晩年發狂して躬政を視る能はず太子政を攝す。王殂するに及びて位に登る。チヨーチ四世(千八百二十年より千八百三十年まで)是なり。王不徳にして衆望なし。千八百十五年ヴンチの大會以來英國の内治は漸々改良し就きしか、宰相カスルレー(Canning)の政略宜を得ず、大に反對黨の不滿を招けり。カスルレー死するに及び大政事家カンニング(Canning)出て外務の衝に當り、自由政略を取り彼他國の國務に干涉せんとする神聖同盟に反對せり。千八百二十三年ハスキ、ソン(Disraeli)財務大臣となりカンニングを輔けて一

層自由の政略を執れり。然れども舊教徒は猶未官職に上り兩院議員となるの資格を得ず。自由黨之を拒みしか王黨多數の爲に壓せられたり。愛蘭に於ては之が爲に大に激昂し雄辯家タニエル、オーコンチル(Daniel O'Connell)を首領として舊教協會を組織し、以て其不當を訴ふ。時にウ、ルリントン公王黨内閣の首相たりしか漸くにして民黨の論議を容れ、遂に舊教徒自由律を發布し、且舊教徒の議員就職の權を與へたり(千八百二十九年)。

ウ、ルリアム四世 王(千八百三十年より千八百三十七年まで)のチヨーチ四世の弟なり。即位の時議院法改革

の議あり。ウ、ルリントンの内閣退きてグレイ(Grey)伯之に代りて内閣を組織せり。是に至りて改革案遂に議會に現はる。當時英國は舊來の撰舉區劃を墨守して微々たる小市より多數の議員を撰出し、繁華の大市バーミンガム(Birmingham)、マンチ、スター(Manchester)の如き一人の代議士をも出さざる所ありて撰舉法甚偏せり。然れども改革議案は王黨(此頃より黨と呼はる)の爲に痛く反對せられしが、翌年に至り遂に上下兩院を通過せり(千八百三十二年)。是よりして撰舉の權多く中等社會に歸し一年十磅以上の収入ある財産を有するものは皆撰

舉の權を有するに至れり。千八百三十二年に至りてはウィルバーク、ウィルフォード(Wilberforce)及バクストン(Buxton)等の首唱により植民地に於ける奴隸を解放せり。同年又東印度會社の獨占

權を廢して大に通商の自由を開けり。此の如く英國の憲法は着々として改革せられしと雖、貧民猶不滿を抱き釋々として已まず。

女王ヴィクトリア ウィリアム四世歿し、女王ヴィクトリア位に即く(千八百三十七年)王はウィリアム四世の弟ケント公の女なり。千八百四十年サクセコバーク(Saxe-Coburg)兼ゴータ(Gotha)侯アルバートを迎へて婚となす。千八百四十六年に至り自由貿易論者は千八百十五年以來の穀物條例(外國より輸入する穀類に重税を課するの法令)廢止の議に於て勝利を得たり。リチャード・コフデン(Richard Cobden)之が首唱者にしてジョン・フライト(John Bright)大に之を援く。同時に又特許黨(Chartists)と稱するもの起り、憲法中六箇條の變更を請願せり。第一普通選舉權、第二無記名投票選舉、第三毎歲國會開會、第四財産を以て議員の資格を論せざること、第五議員の俸給第六平等の撰舉區是なり。特許黨一時靜定せしか、千八百四十八年大陸諸國の革命に刺激せられ、二萬餘の特許黨一時に勃興し直に請願書を下院に呈せんとす。政府之を聞き大に驚き、ロンドン市民に告諭する所あり、市民二十餘萬起て之を抑壓し、事遂に鎮靜せり。千八百五十四年に至りてクリミア戰爭破裂せり。蓋露西亞をして土耳其を侵略せしむるときは國力の權衝に大影響を及すを以て、英國は佛國と同盟し土耳其を援けて露軍

を破り、千八百五十六年に至り和議を媾せり。

印度に於ける英國 英國は年々地を略して境土益廣く、遂に北方ヒマレヤ山に達せんとするに至る。而して土民を遇すること苛酷なりしを以て千八百五十七年に至り、土兵叛を計りデルハイ(Delhi)カウンホーア(Sawnpore)に於ける英人虐殺せられたるもの甚多し。是に於て英國はハヴ・ロ・ク(Havelock)將軍を遣はして之を援けしむ。時に英人ラ・クナウ(Lake)に據り危機旦夕に迫りしが、此に至りて其勢を恢復することを得たり。千八百五十八年サー・コリン・カムベル(Sir Colin Campbell)全く印度人を征服し、其結果として東印度會社の握れる政權は直接に英王の手に歸し、千八百七十六年に至り女王ヴィクトリアは印度女帝と稱せり。

其他の外侵政治 英國は印度征略の間露國の漸々中央亞細亞を侵略し印度に及ばんことを恐れ、亞弗汗斯坦を以て印度の北障となさんと欲し、千八百三十八年始めて亞弗汗戰爭を起し、延きて千八百八十年に至り英人常に捷を得、大に其勢力を輝せり。此間英人密に支那に鴉片を輸入し其官吏の爲に燒棄せられしかば、又支那と戰端を開き、千八百四十二年南京條約を締ひ、巨萬の償金を取り五港を開かしめ、且香港を占領せり。其

後再次(千八百五十七年及千八百六十年)佛國と連合して支那を攻め、新に揚子江を開かじめ、且歐洲諸國の公使を北京に滞在せしむることゝなれり。其他英國は緬甸を略し埃及の内政に干與し、又亞米利加及南洋諸島の植民地を増殖せり。此等の進取政略は主として首相デ・スレーリ(Disraeli)の力多きに居れり。

愛蘭と英國政府 英國政府に對する愛蘭人の不平は絶えず萬般の事物に破裂し、舊教徒は久しく自由律を請求して遂に其許可を得しと雖、愛蘭人の壓制を蒙ること實に甚しく、千八百三十八年に至り愛蘭に建設せられたる新教教會費を徴收せらるゝに及ひて人民又大に激昂せしが、千八百六十九年に至りグラ・ドストーンの説を以て愛蘭に於ける新教教會を廢せるを以て愛蘭人一時愁眉を開けり。然れども愛蘭は常に英蘭と同一法令の下に立たんことを冀ひ、オーコンネル及其黨與は熱心に之を企圖し、人民亦自治の政を得んことに熱中せり。加之愛蘭の地は英國少數豪族の占領する所となり、人民は常に其抑壓の下に呻吟せるを以て、千八百七十年グラ・ドストーン地籍法を發布して以て之を慰撫せり。然れども良好の結果を見ること能はざりしを以て、千八百八十年グラ・ドストーン又内閣を組織するに及び之が爲に法令を追加せり。是より先千八百七十年アイ

ザク、バト Isaac Butt)を首領として愛蘭自治黨成り、愛蘭國會を設け愛蘭の國務を處理せんことを主唱す。時にパーチル(Parrill)始めて政治上に英名を博し、英國議會に於ける愛蘭自治黨の領袖として大に壓制政治の改革を主張す。然るに千八百八十五年グラ・ドストーン内閣を退き、サリスベリー保守黨内閣を組織し暫時にして更迭せしが、又終に永續して近年に至れり。

第七節 北米合衆國

一二政黨 ウ・シントンの大統領となるや、ハミルトン(Hamilton)大藏大臣となり、トーマス、ジョーソン(Thomas Jefferson)内務大臣たり。既にして二政黨の分立するあり。一をフ・デラリスト(Federalist)と云ひ、ウ・シントン及ジョン・アダムス之に屬し、ハミルトン其領袖たり。一を「アンティフ・デラリスト(Antifederalist)」と云ひ、レパブリカン(Republican)或は「デモクラト(Democrat)」と稱せらる。ジョーソン其首領たり。前者は中央集權の制を確立せしめんとし、後者は各州分權の制を主張せり。彼佛國革命の歐洲諸國を風靡するの時、當り、「アンティフ・デラリスト」黨は往時の厚誼を追想して佛人を援けんとす。然れども「フ・デラリスト」黨は固

く執りて不可となし、ウ・シントン遂に局外中立を宣告す。兩黨此より相惡し。

新州の増加及ウ・シントンの卒去 千七百九十年の調査に據れば合衆國の人口は四百萬(此中殆五分の一は土人なり)に満たざりき。其翌年ウ・モント(Vermont)始めて同盟に加入し、爾後大西洋海岸より西方に移住するもの多く、又千七百九十二年以後ケンタ・キー(Kentucky)及テンネシー(Tennessee)の加盟あり。合衆國の版圖益廣大となれり。千七百九十七年ウ・シントン職を退き、二年にして卒す。國民皆悼惜せり。

ルイジアナの買取 ウ・シントン職を退きジョン・アダムス選はれて大統領となる。時に佛國は米國を以て局外中立法に背きたりとし、兩國將に交戦せんとししが、ナポレオン(一世)の政權を掌握するに及びて事終に平けり(千八百八年)。アダムスの政治は衆望を失へるもの多し。此年ジ・フーリン大統領に撰はる。ジ・フーリンの在職中最重要な事件は、佛國よりルイジアナを購買せしこと是なり。蓋しナポレオンは英人と相對して永くルイジアナを保持することを得ざるを恐れ、千五百萬弗を以て之を米國に賣與せしなり。是に至りて合衆國の面積は殆舊に倍す。千八百三年に至りオハイオ(Ohio)又同盟に加れり。

英國との戦争 千八百九年ジームスマデソン(James Madison)大統領となる。是より先

英國政府は水兵搜索の權(英國水夫の逃れて米國の船舶に在るものを搜索するの權)を固執して廢せざるを以て、遂に兩國の間に戦争を開けり(千八百十二年)。戦争二年、海陸互に勝敗ありしか千八百十四年に至り和を講せり。是より米國の地位益鞏固となり、國運次第に隆盛に赴けり。

フ・デラリストの衰滅及新政黨 英國との戦争其局を結ふと同時に「フ・デラル」黨遂に衰滅せり。然れども其反對黨即「レバフリカン」黨も亦大に重きを中央集權に置くに至れり。ジームス・モンロー(James Monroe)大統領在職の間(千八百十七年より千八百二十五年まで)は政黨の軋轢甚稀なりき。千八百十九年西班牙より五百萬を以てフロリダを購入せり。千八百二十年ミ・スリー(Missouri)合衆國に加入するに當り奴隸公許の可否に就き國會に於て一大爭論の破裂を來せり。元來北部諸州には奴隸の數少く南部諸州は之に反して多く農業を營み、從ひて奴隸を使役する事甚盛なりしを以て南北兩部の議員互に相辨難し、激昂其極に達せしか、ヘンリー・クレイ(Henry Clay)の調停によりて事漸く治まる。ジョン・クインシー・アダムス(John Quincy Adams)繼ぎて大統領となるに及び一二政黨現出せり。一は國民共和黨(National Republican)と云ひ、後日民黨(Whigs)と稱するものにして、ヘンリー・クレイ之が首領たり。一は合衆黨(Democrats)と稱し「アンドリュー・ジャクソン」(Andrew Jackson)之に屬す。千八百二十

九年ジ・クリン撰はれて大統領となる。ジ・クリン悉く反對黨の官吏を黜け、自黨を擧げて之に任す。前年發布せられたる保護税則は此時に至りて一問題となり、議論大に沸騰し、千八百三十年には元老院に於て非常の激論ありき。税則廢棄主論者はロバート・ワイ、ヘーン (Robert Y. Hayne) にして維持論者はタニエル・ウ・フスター (Daniel Webster) なり。千八百二十三年に至りヘンリー・クレイ漸次減額の議案を提出し擾亂漸く定れり。

テキサスの加盟及墨西哥戦争 千八百三十五年テキサス (Texas) 人墨西哥に叛し、墨西哥の將サンタ・アナ (Santa Ana) を破り、遂に獨立せしか英國に併吞せられんことを恐れ、千八百四十五年に至り合衆國に加盟せり (大統領タイラー) 是に於て合衆國 (大統領ポーク) は墨西哥と戦端を開きパロ・アルト (Palo Alto) モンテレー (Monterey) 及ブエナ・ビスタ (Buena Vista) 等に於て連りに墨西哥の軍を破り、千八百四十七年九月遂に其首府を陥る。千八百四十八年墨西哥政府グタルフ・ビタルゴ (Guadalupe Hidalgo) の條約を締ひ、テキサスに關する要求を棄て、且上部カリフォルニア (California) 及ニューメキシコ (New Mexico) を合衆國に割與せり。

南北戦争 其後大統領フルモール (Fillmore) の時 (千八百五十二年) 水師提督ペリ (Perry) を我日本

に遣し修交を求めき。ピールス (Pierce) フカナン (Buchanan) 相次ぎて大統領となる。其間奴隸問題の爭論常に絶えず。「レバフリカン」黨は廢止論を主張し、「デモクラト」黨は存置論を固執せり。千八百六十年の撰擧は於て「レバフリカン」黨のアブラハム・リンコルン (Abraham Lincoln) 撰はれて大統領となる。リンコルンは熱心なる奴隸解放論者なるを以て南部諸州の人民は大に激昂して合衆國の同盟より分離せんとす。千八百六十年十二月南カロリナ (Carolina) 首として分離し、其翌年ミスシシッピー、フロリダ、アラバマ (Alabama) チーチャ (Georgia) ルイジアナ及テキサス等の諸州亦分離し、諸州の委員アラバマのモントゴメリー (Montgomery) に會し新に一政府を設け亞米利加同盟國と稱し、ジ・フーソン・デ・ヴィス (Jefferson Davis) を以て大統領となし、リッチモンド (Richmond) を以て首府となす。次でヴァージニア、アルカンサス (Arkansas) テネシー及北部カロリナの諸州同盟に加はれり。是に於て南北全く分裂せり。千八百六十一年四月南軍先チーレストン (Charleston) のサムター (Sumter) を襲ひ始めて戦端を開く。始北軍は屢南軍の將リー (Lee) ジ・クソン (Jackson) 等の爲に破られ、ウシントン一時震駭せり。千八百六十三年一月大統領リンコルン南部諸州に奴隸解放令を布告し大に黒人の援を得たり。是より北軍漸々其勇氣を恢復し、同年七月ミッド (Metter) は南軍の總督リーをゲティスバーグ

(Gettysburg)に破り、グラント(Grant)はヴィックスバーグ(Vicksburg)を略奪し、尋てチャタヌーガ(Chattanooga)に勝ち大に南軍の勢を挫けり。千八百六十四年グラント北軍の總督となり、シーマン(Sherman)をして東北に進み、チャタヌーガを略せしめ一軍を率ゐりてリートを追ふ。リートーカースバーグ及びリモンドに據る。千八百六十五年四月北軍の將シリダン(Sheridan)大にリートをファイフフォークス(Five Forks)に破る。リートの勢窮り遂に軍を擧げてグラントに降る。(四月九日)是に於て北軍全く勝利を得、南軍の大統領ジフソンデヴス亦虜に就けり。

南北戦争以後の合衆國 南北戦争局を結びて合衆國再統一し、北部諸州歡喜せるの際大統領リンコン刺客の爲に暗殺せられたり。リンコンは方正の君子にして深く民心を得たり。リンコン既卒してジョンソン(Johnson)繼ぎて大統領となる。抑南北戦争は四年の久しきに涉りしを以て合衆國の國債は之が爲に大に増加し、二十七億弗の巨額に上れり。然れども之が爲に奴隸制度は全廢せられ、黒人も白人も同等の權利を享有するに至れり。千八百六十九年ジョンソン職を退きグラント之に代れり。爾後大統領の職に登るものは皆レパブリカン黨なりしが千八百八十五年クリーヴランド(Cleveland)デモクラト黨より出て大統領となれり。

第八節 墨西哥及南亞米利加

墨西哥の獨立 墨西哥は亞米利加發見以來西班牙の領地なりしが、十九世紀の始より屢叛して獨立を圖り、千八百二十一年土人イツールビデ(Turbido)遂に兵を擧げて獨立し、千八百二十二年自帝となり殺害に遭へり。其後墨西哥は共和國となり、千八百二十九年に至りて合衆國の承認を得たり。

合衆國及佛蘭西の戦争 千八百二十五年テキサス州叛し、墨西哥の軍を破りて獨立し、千八百四十五年合衆國に加盟せり。墨西哥政府之を不當となし米國と戦端を開き軍利あらず、千八百四十八年グマダループビタルゴの條約を結び、上カリフォルニア及ニューメキシコを米國に與へて和を講ず。其後國內黨派分裂し、共和黨あり教會黨あり、教會黨は殆ど國土の一半を領せり。ベネト・シ・アレズ(Benio Juarez)撰はれて大統領となり、合衆國の承認を得たり。時に佛蘭西英吉利及西班牙、墨西哥人の爲に損害を蒙りたりと稱し、相共に賠償を政府に要求し、千八百六十一年兵を以て之に迫る。政府は西班牙及英吉利の要求を容れて獨り佛國を顧みず。ナポレオン三世乃シ・アレズの大統領たることを承認せず。密

に之を滅して羅馬人種の一帝國を創立せんとし、埃帝フランシス、シヨセフの弟マキシミリアンを誘ひ、之に兵を授け墨西哥を伐たしむ(千八百六十四年)。然れども佛兵の去るに及びてマキシミリアン墨西哥人の爲に統殺せられ、シ・アレズ職に登り、千八百七十二卒す。是よりして墨西哥國漸く靜謐となり、教育及有形上の事業大に進歩せり。

國勢の進歩　シ・レアス死してレルドテ、デジ・ダ(Lord de Tapata)職を繼ぐ、教會の勢力を壓して共和國憲法を制定せり。千八百七十六年に至り將官ホーフ、リオ、デー・アズ Porfirio Diaz 亂を作し、自大統領となり、次でマニ・エルゴンツ、レス之を承けて職に登り、期滿ちデー・アズ再撰舉せらる(千八百八十四年)。デー・アズの時墨西哥の國勢益進歩し、儼然たる共和國となれり。

フラツ、ル　葡萄牙王シヨンの子ドムヘドローフラツ、ル帝となりしことは、既に葡萄牙紀に於て之を説けり。千八百二十六年ヘドロー葡萄牙の王位に登り、後復フラツ、ルに歸る。帝自由黨と相容れず、千八百三十一年西班牙より趣く、時に國中黨與相争ふあり。千八百四十年太子ヘドロー二世立つ。千八百五十二年ビーノス、エーリース(Buenos Ayres)の執政官ローサス(Rosa)ウルグエー(Urugway)及ハラグエー(Paraguay)の共和政を顛覆せんとししを以てフラツ、ル

之を征服せり。後又ハラグエーの執政官ローベス(Jorge)と事を生じ争亂永く已まざりしが、千八百七十年に至て之を平く、ヘドロー二世の代はフラツ、ル國著しく進歩し、電信鐵道の布設あり、生産商業隆盛に趣けり。

諸國の獨立　合衆國獨立の美を慕ひ、南亞米利加に於ける西班牙領の諸國蜂起して獨立を唱ふ。ボリーナス、エーリス先獨立し、千八百十九年アルチエンタイン(Argentina)共和國を創立せり。千八百二十九年ウルグエー、ボリーナス、エーリスより分れて共和國となり、又北方植民地にありてはサイモン、ボリヴァー(Simon Bolivar)と稱するもの獨立を首唱し、ヴ・ネツ、ーラ(Venezuela)及ニ・ーグラナタの二國を合してコロムビア共和國となせり(千八百十九年)。ペルー又獨立し、上ペルーは後分れてボリヅ、ア(Bolivian)と稱す。コロムビア又分れて二となる。ウ・チヅ、ーラニ・ーグラナタ、エクアドル(Ecuador)是なり(千八百三十一年)。智利の如きも相踵で獨立せり。

智利ペルー、ボリヅ、ア　南亞米利加近年の戦争中智利ペルー、ボリヅ、アの件最吾人の注意を惹く。智利は千八百三十三年合衆國に倣ひ憲法を制定し、以後國勢大に繁榮せり。智利とペルーとの間にアタカマ(Atacama)の厄あり、智利は其南部を要求し、ボリヅ、アは其全部を要求せり。千八百六十六年の條約に據り之を共同地となす。智利及ペルー漸く競争を

生じ、千八百七十三年ヘルム、ボリツ、ア密に條約を締結し、ボリツ、アはアタカマの占領を布告せり、是に於て戦争遂に破裂し(千八百七十九年)、智利連戦利を得、遂にヘルムの首府リーマ(Liema)を陥れ全國を蹂躪せり、合衆國亦之に關し、智利に向ひて其敗國に對する要求を減せんことを求む、智利聽かず、千八百八十三年大にヘルムの境土を削り、以て和を講せんとす、其翌年ヘルム智利の要求を容れて和議成る、同年智利ボリツ、ア亦和せり。

第九節 日耳曼帝國の再興

日耳曼聯邦 ナポレオンの盛なる時に當りて日耳曼帝國の滅亡せしことは既に之を記せり、然るに一朝ナポレオン敗滅し、ウィーナ會議の結果より漠然二十九邦を聯合して日耳曼聯邦と稱し、各邦獨立の狀を爲せり、而して聯邦一般の利害に關する事を議定せんが爲に聯邦會議をフランクフルト(Frankfort)に設け、其議員は各邦の全權使節より成り、奧國の使節常に之が議長たり、又各國人口に應じて兵士を募り以て聯邦軍を組織せり、**奧太利、普魯西、ハヴリア、サクソニー、ハノーヴァー、ウールテンベルク、バーデン**等聯邦中の大なるものをりき。

關稅同盟 聯邦の諸君主は概人民に向ひ自由憲法の施行を約したりしか、其實際は大に之に反して人民爲に望を失へり、然れども此時に當りて聯邦人民の思想漸く發達し、嚴然たる一帝王を戴き以て國威を振張せんとするの感情強盛となり、千八百二十四年より三十四年に至るの間、着々其歩を進め、遂に奧太利を除き、數多の日耳曼聯邦經濟上の聯合より關稅同盟(Nollverein)を組織し、普魯西を以て盟主とす(此時普魯西はフレデリク三世の代なり)、是實に日耳曼聯邦の統一を基ける第一進歩なりしなり。

日耳曼の混亂 千八百四十八年佛國に於ける革命は歐洲人民の心中に一大刺衝を與へ、日耳曼に於ても亦人民大に騷擾し、**バヴリア王ルイ**は位を其子**マキシミアン**に譲りて亂を避け、**ヘッセル**の撰擧侯は人民の要求を容れ、其子をして政府に參議せしむ、普墺の人民亦自由を得んとして所在に擾亂を作し、**ウィーナ**に於ては學生首唱者となりて暴民蜂起し、**帝フルデナンド一世**(フランシス二世の子)遂に國會の招集を諾し、**テイロル**に難を避け、宰相**メテルニヒ**は英國に遁れたり、**ベルリン**に於ては人民と兵士との間に争鬭起り、人民遂に王宮に迫りて兵士を市外に放逐せんことを求む、**王フレデリクウイリアム四世**止むことを得ず、人民の要求を容れ、且國會の招集を承認せり、聯邦此の如き状態なるを以て遂に

兵備を革新せんとし、議會と相争ふこと數年、後遂に之を斷行せり。千八百六十二年、**ビスマルク**(Bismarck)を擧げて宰相となし、外務大臣を兼ねしむ。**ビスマルク**は近世屈指の政治家にして嘗て露佛に公使たり、常に強硬政畧を取り普國を強盛ならしむるを以て心となせり。然れども大に國內の自由黨の反抗する所となる。蓋王を佐け憲法に反して兵備を擴張せしを以てなり。千八百六十二年、**フランシス・ジョセフ** 聯邦の諸君主を**フランクフルト**に會し、日耳曼憲法を制定せんとししが普國之に與らず。**フランクフルト**の會功なくして止む。普國の軋轢此に至りて益甚し。**ビスマルク**が議會に於て鐵血(Blood and Iron)の政略を颯言せしも、到底戰爭の避くべからざりしを以てなり。

シ・レスウ・ヒ・ホルスタイン戰爭 **シ・レスウ・ヒ及ホルスタイン**は永く**丁抹王**の管轄に歸し、**丁抹王**は**ホルスタイン**公として聯邦會議の一員たり。是より先千八百四十八年**シ・レスウ・ヒ人及ホルスタイン人丁抹王フリーデ・ナンド七世**に叛き亂を作す。時に聯邦の兵之を援く、然れども英露の兩國起て**丁抹**を援けたるを以て、千八百五十二年、**ロンドン**に會して條約を締び、**丁抹王**は代々兩公國を占領すへきことを約せり。然れども日耳曼聯邦及兩公國は之に服従せず。千八百六十年の條約を以て此兩公國の日耳曼人は決して分離すべから

ざることを誓へり。然るに千八百六十二年**丁抹王フリーデ・ナンド七世シ・レスウ・ヒ公國**を割き**丁抹**に合するの布告を發せり。是に於て普、**奥兩國**互に其怨を捨て共に**丁抹**を責むるに前約に違背せるを以てし。千八百六十四年二月兵を發して之を伐つ。(時にクリスティアン九世丁抹王位に在)**丁抹**の兵連戰敗北し、遂に同年十月**ウンナ**に會して平和を約し、**丁抹**は二公國及**ラウエンフルク(Lauenburg)**に關する權利を**奥、普兩國**に讓與せり。然れども其分轄に就き兩國の間に爭論を生じ、**ガスタイン(Gastain)**の條約(千八百六十五年八月)に於て**奥太利**は**ホルスタイン**を取り、**普魯西**は**シ・レスウ・ヒ及ラウエンフルク**を得たり。

奥普戰爭 **ガスタイン**の條約に於て**奥普**一時平和なりしといへども、普國の宰相**ビスマルク**の多方紛紜を構へ、遂に**奥國**を聯邦外に驅逐せんとするに至る。是に於て千八百六十六年六月普、**奥**の戰爭遂に破裂し、北部の聯邦及**伊太利**は普魯西と連合して**奥太利**に當る。普軍先**サタリニ、ハノーヴー**一及へ。セに入り之を蹂躪し連に兵を進む。時に**奥將ベネデク(Benedek)****サクリニー**の兵を合せ、大軍を以て**ボヘミア**に在り、普軍三道より之に向ふ。普王**ウイリリアム**總督となり、**モルトケ(Moltke)**參謀たり。(此時普兵は普新發明の旋條銃を帶べり)七月三日**ケーニヒグラツ(Koenigsgratz)**の近傍なる**サドウ(Sadow)**に決戦し、**奥軍**大敗して退く。然れども**伊太利軍**は

最

近

世

史

奥將アルベルト大公の爲にカスト・サ (Castoria) 及びリ・サ (Lissa) に破られたり。八月二十三日普
 奥遂にブレークの和約を結び、奥太利は巨萬の償金を出して日耳曼聯邦より分離し、伊太
 利はヴ・ニスを得、普魯西はシ・レスウ・ヒ、ホルスタイン、ハノーヴ・ー、ヘ・セナ・リー、及フランクフ
 ートを得たり。

北方日耳曼同盟

南方日耳曼諸國は猶局外中立せしむ、北方日耳曼

(リ・キセムアルクを
 除き凡て二十二國)

は既に普魯西を盟主として之は兵馬の全權を委し、所謂北方日耳曼同盟を組織せり。同
 盟諸國の國會をベルリンに設け、千八百六十七年七月始めて開會し、ビスマルク伯を以て聯
 邦の宰相となせり。

奥太利匈牙利帝國

普、奥戦争後奥太利は自由主義に則り、奥太利、匈牙利帝國を組

織せり。匈牙利に於ては千八百四十八年の憲法を再興し、別に内閣を組織し、奥國に於て
 は法律上四民の同一を是認し、出版、集會及信教の自由を許し、帝フランシス・シヨセフ 立ち
 て匈牙利王となれり。爾來奥太利帝國は孜孜として法典兵制を革新し、婚姻教育の制を
 改善せり。

普佛戦争

當時佛國の ナホレオン 三世は普魯西の勢漸く盛なるを見、心窃に之を嫉み、

日 耳 曼 帝 國 の 再 興

又其人民は歴史家及詩人の爲に惑され、ライン河の左岸を以て佛國天然の境界となし常
 に之を占領せんと欲せり。偶西班牙女王イサベラ政を失ひ、千八百六十八年内亂破裂しイ
 サベラ佛蘭西に遁る。千八百七十年西班牙國會は普魯西王ウイリアムの親戚ホーヘンツォル
 ルン (Hohenzollern) 家レオホルドを立て西班牙王位に即かしめんとす。佛帝之を機とし以て
 普魯西の勢力を削らんと欲し、普王は請求するにレオホルドをして西班牙王位を辭せしむ
 べきを以てす。普王之を拒む。然れどもレオホルドは其兩國間事を生せんことを恐れ、自
 其推撰を辭す。ナホレオン猶以て足れりとせず。使者を遣り普王をしてレオホルドの將來決
 して西班牙の王位に即くことなきを證言せしむ。普王又之を却けたり。佛帝此を以て佛
 國を侮辱せるものとなし、千八百七十年七月十九日普國に開戦を宣告す。普國同日之を
 諾せり。初ナホレオンは南方日耳曼諸州の己を援けんことを期せり。而るに破裂の際に至
 り日耳曼人は皆佛國の舉動を以て不正となし、且往時ナホレオン一世の餘毒を回想し、與に
 俱に普魯西に聯合せり。ナホレオン軍を分て二となし、一軍は南部日耳曼に進み、且伊太利
 奥太利を促し聯合せしめんとし、已自中軍を將として北部日耳曼を侵撃し、而して一軍
 を以て丁抹ハノーヴ・ーを襲ひ、之をして同盟せしめんとす。普軍亦軍を三部に分ち、スタイ

ンメ・ツ(Steinmetz)王子フレデリク、チ、ーレス太子フレデリク、ウイリアム各一軍に將とし、老王ウイリアム一世之か元帥となり、フン、モルトケ之か參謀長たり、モルトケ機を見る神速、佛軍の計策を抑遏し行ふことを得さらしむ。八月二日兩軍始めて交戦し、普境なるザールブリケン(Saarbrücken)市佛軍の爲に陥られしか、八月四日普の第二軍(太子の率)佛境に入り、ウイゼンフルク(Wissembourg)に勝ち、同月六日又大に佛將マクマホン(Moltke)をウールト(Woerth)に破り、ランシー(Lancy)に進めり、此間第一及第二軍皆佛國に入り、轉戦皆勝ち、佛軍をメ・ツ(Metz)に蹙せり、是に於てナホレオン其總督の任を解き、上將バツ・ーン(Bazin)をして之に代らしめ、自マクマホンの陣に投ず、パリに於ては人心大に震駭し内閣更迭せり、バツ・ーンメ・ツに在りマクマホンと合せんとし、老王ウイリアムの爲にクラツ・ロト(Cralevotte)に破られ(八月十)退きてメ・ツに入り普兵の圍む所となる、第三軍の將太子フレデリク、ウイリアムはサクソニーの太子アルベルトと兵を合せ、シ・ーロンに在るマクマホンの軍を進撃せり、マクマホンメ・ツの圍を解かんとしシ・ーロンを發せしか、毎に普兵の遮遏する所となり、遂に全軍を集めてセタン(Sedan)に據る、普兵四面より之を攻む、勢甚た急なり、ナホレオン遂に其兵八萬五千を擧げて普王に降る、實に千八百七十年九月一日なり。

パリの降服及平和 セタンの敗報パリに達するや、(九月四日)トロ・シー(Lrochu)ニールフ・

フル(Jul Favre)ガムヘ、タ等帝を廢し共和政治を組織し、普國と和を講せんとす、然れども日耳曼はアルサス及ローレーンの地を要求せしを以て佛人大に激し、更に兵を募りて決戦せんとす、是に於て普王は第三軍と共に進んでパリを圍む(九月十)ガ・ヘ、タ輕氣球に乗してパリを脱し軍をツールに募りパリを救はんとししか、亦日耳曼軍の破る所となる、是より先、普軍はストラスアルクを陥れ、尋てメ・ツを陥れ、バツ・ーンの兵十八萬を降せり(十月二)、今や佛國は日耳曼軍の蹂躪する所となり、パリ重圍を受くること凡百三十日、千八百七十一年一月二十八日遂に出て、降を乞へり、是に於て五月十日フランクフ・ートに於て平和條約を締ひ、日耳曼は佛國よりアルサス及ローレーンの二州と五十億フランの償金を取れり。

新日耳曼帝國 普佛戦争の結果は唯に疆土を開拓せしのみならず、多年日耳曼人の希

望せし統一の事業を成就せり、初パリ攻圍の際に當りて南部日耳曼諸州は北部同盟に合し、新に一日耳曼聯邦となり、普王ウイリアム一世を以て盟主となし、之に日耳曼皇帝の尊號を上れり、是に於て千八百七十一年一月十八日普王佛國のヴルセーユ王宮に於て皇

帝の位に即けり。是神聖羅馬帝國の恢復にあらすして、古代日耳曼王國の再興なりしなり。新帝國の最初の議會は千八百七十一年三月二十一日ベルリンに開け、帝國の憲法を議定せり。此憲法によれば日耳曼帝國は二十五の聯邦より成り、普魯西王之家盟主となり。日耳曼帝位を世襲し、宣戰講和、外國條約及公使の差遣受容より官吏の任命等に至るまで、一切行政の大權を掌握せり。立法の權は聯邦議會及帝國議會に存し、聯邦議會は聯邦の代議者五十八名より成り、帝國宰相を以て議長となす。(千八百七十一年より千八百九十年に、至るまでビスマルク侯之が議長たり)帝國議會は毎年開會し、普通撰舉を以て撰出せる三百九十七名の議員を以て組織せらる。千八百八十八年ウーリリアム一世殂し太子フレデリク三世位を嗣く。幾月ならずして殂し、王子ウーリリアム二世位に登れり。日耳曼帝國の再興してより内は伊國と三國同盟を結び、世界の平和を維持せんとし、外は海外に手を延ばし、亞非利加の西及東岸に植民地を開拓せり。

第四章 第三期の開化

前期 (佛國革命及ナポレオン時代)

第一節 文學及哲學

文學上の新趣 十八世紀の終、十九世紀の始に至りては、ルイ十四世時代に於ける佛國記者より傳播したる古學派(Ancientism)の人爲的法則と偏智的音調とを打破し、天然自由を尙び想像、感情を肆にし、以て文學上に一新時期を開けり。是所謂虛妄派(Idealism)にして、此學派は往々中世紀の精神を過重し、其論說荒唐に流るゝことあるを免れず。

伊太利の記者 伊太利に在りては有名の記者甚少し。モンテ・ー(Monte) (千七百五十四年生れ、千八百二十八年歿す)

は好調雅麗の詩人にしてアルフ・イーリー(Alfieri)の門に出で一機軸を出せり。ユーゴ(Vukobratovic)、ワスコヴィチ(Vukobratovic) (千七百七十八年生れ、千八百二十七年歿す)亦此派に屬し、大に自國の言語を發揮せる愛國の詩人なり。

其他ピンデモンテー(Pindemonte)の詩は温雅にして感情に富み、レオハーター(Leo Saverio) (千七百六十六年生れ、千八百三十七年歿す)の詩は宏壯にして人を動かす。此時代の史家にはボッタ(Botta) (千七百六十六年生れ、千八百三十七年歿す)あり。議論明確、叙事活動せり。著す所「亞米利加革命史」及伊太利の諸史あり。

佛國の記者 佛國に於ては古文學派は三方よりして破壊せられたり。第一は、ルソーの忘想的自然及理性に基づける唯心論により、第二は革命時代の詩歌により、此詩家中有名なる軍歌「マルセーユ」の作家ローゲ、ド、エリスレ(Rouget de Lisle) (千七百六十年生れ、千八百三十五年歿す)及戲

曲家マリージ・セフ・セニール (Marie Joseph Chénier 千七百六十四年生れ 千八百十一年歿す) 最卓越せり。第三即古文學派の最有力なる強敵は新「ローマンテック」派の詩歌にして、子、ケルの女ステエル (Stael 千七百六十六年生れ 千八百十七年歿す) 夫人の訪むる所なり。而してシ、トーフリアン (Chateaubriand 千七百六十八年生れ 千八百四十八年歿す) 及ラマルテン (Lamartine) は宗教上の感情を以て一層之を敷衍し、ツクトル、ユーゴー (Victor Hugo) に至り殊に之を擴大せり。ステエル夫人は獨國の詩人シ、レーゲル (Schlegel) 及其他の「ローマンテック」派詩人と交際し、獨逸文學及其國性を篤信し、「獨逸國論」を著せり。而して其詩歌的小説「デルフィン」(Delphine) 及「コリン」(Corinne) に於て筆を極めて「ローマンテック」派の思想及感情を發揮せり。然れども其性寛仁なりき。シ、トーフリアンは佛國恐怖時代の間、北亞米利加の深林或は沙漠中に於て生活し、宗教上生活の熱心を唱歌し、佛國に還るに及びて「基督教の天質」と題する一書を著し、佛國に於ける教會及宗教思想の恢復を論せり。後復佛國を去り、ジールサレムに詣り、叙事詩「メルチレル」(Mithras) を著せり。然れども往々誇大且黨派的記述を免れず。革命恢復後に至り、シ、トーフリアンは内閣大臣宮廷の詩人等に歴仕せり。哲學にはメーンド、ペーロン (Main de Biran 千七百六十六年生れ 千八百二十四年歿す) ルー・エー・コルラー (Royar Collard 千七百六十三年生れ 千八百四十六年歿す) 及ベン・ミン・ロンスタント (Benjamin Constant)

の諸氏起ちて唯物論派に反對し、信仰的及精神的學派を唱へたり。ド、メイトル (De Meistre 千七百五十五年生れ 千八百五十二年歿す) は舊教會の爲に大に筆を振へり。

英國の韻文及散文記者 今や英國の文學殊に韻文界に在りては嘗てドライデン及ホー

プ等が牛耳を執りし古文學派の羈絆を脱して一新時期を拓けり。即外部の萬有を題目とするも將た人類の性情經驗を歌ふも、畢竟感覺に訴へ、従前の如く意思、理會力を主とせざるに至れり。クーパー (Cowper 千七百三十一年生れ 千八百〇〇年歿す) は自然の眞髓を描き、人類と自然に

於ける、又は日常の生活に於ける關係を説けり。ロバート、バンス (Robert Burns 千七百五十九

年歿す) は身、蘇蘭の一田夫に過ぎざれども、情思婉麗にして詩的想像に富み、文辭の簡潔なるは實に世界の詩人たるに耻ぢず。ウ、ツウ、ウ、ス (Wordsworth 千七百七十年生れ 千八百五十年歿す) は山水田

野の行樂を叙するに憂鬱的思想感情を以てせり。然れども最峻刻なる批評家と雖、其作「逍遙」を評するに猶沙漠中若干の沃土ありと曰へり。若夫「音聲力の歌」幼時の追懷によりて不朽を知るの歌「及」ララダミヤ (Laudamia) 篇等に至りては、實にミルトン以來

之に勝るものなし。「バイロン」(Byron 千七百八十八年生れ 千八百二十四年歿す) は性傲慢にして徳義を卑視せり

と雖、感情と想像とは富み、文辭の美にして趣ある、讀者をして厭くことを知らざらし

む。ウ・ルター・スコット (Walter Scott) 千七百七十一年生れ
千八百三十二年歿す は記傳詩に於て誇張人を惑はすの陋風なくして、能く新學派詩人の精神を發揮せり。コレリチ (Coleridge) 千七百七十二年生れ
千八百三十四年歿す は「クリスタベル」(Christabel) 及「古代航海者」の作者にして考古詩人兼哲學者なり。サウゼー (Southei) 千七百七十四年生れ
千八百四十三年歿す は材コレリチに劣れりと雖、亦散韻兩文界の傑士なり。其他シヨルリー (Shelley) 及キーツ (Keats) は想像頗る高尚にして、カムフベル (Campbell) ローチ・イス (Moore) 及ムーア (Moore) 等其名ウ・イツウ・イス・コレリチ・チ・スコット・バイロンの赫々たるに及はずと雖、亦超凡の文士なり。ウ・ルター・サウ・ージ・ランドル (Walter Savage Landor) 千七百七十五年生れ
千八百六十四年歿す は「想像對話」及其他諸散文の作者にして而も亦詩に巧に、其文辭の純粹にして活勢ある、多く其比を見ざるところなり。小説家にしてウ・ルター・スコットに先ちて名あるものをアウステン (Austen) ホルター・ポーツ (Percy) 及エチウルス (Edgeworth) の三女史とす。スコットの小説中最初に出てたる「ウ・バーレー」(Waverley) は一千八百十四年匿名を以て公にせられたり。千八百一年に當り毎季出版評論雜誌の先鞭として著名なるエヂンボロー評論 (Edinburgh Review) 始めてフランシス・ジ・フレイ (Jeffrey) の手より出版せられ、ブローハム (Brougham) アドニースミス・セームス・マ・キント・シユ (Macintosh) 等之が記者となれり。此雜誌は民黨の機關

なりき。千八百九年に至り、毎季評論 (Quarterly Review) 王黨の機關としてギ・フルド (Gifford) の手より出版せられたり。此時代の論文記者中には詩人にして批評家たるジ・ン・ウルソン (John Wilson) 及好謔家にしてウ・ルツウ・ルスコレリチの友たるチールス・ラム (Charles Lamb) 其名高く、其他ジ・ン・フ・スター (Tosset) 千七百七十年生れ
千八百四十三年歿す は嚴肅なる題目に就て論ずることを主とせり。哲學にてはチーガルド・ステewart (Dugald Stewart) 千七百五十三年生れ
千八百二十八年歿す トーマス・ブラウン (Thomas Brown) 千七百七十八年生れ
千八百二十一年歿す の一人ライド (Reid) の創始せる蘇蘭學派の名譽を持續せり。バルク (Burke) アリソン (Allison) 及ジ・フレイは美及美に對する嗜好を論じ、自由派の政治家マ・キント・シ (Macintosh) は倫理を述べ、コレリチは日耳曼哲學者カント、シリウの流を汲みて英國哲學及宗教上に新思想を注入したり。ゼレミー・ベンサム (Jeremy Bentham) 千七百四十八年生れ
千八百三十二年歿す 亦性理學者として著名なれども、氏は寧ろ立法改革の助力者として著し。

米國著述家

亞米利加に於てはアダムス、ジ・フルソン、ハミルトン、ジ・マテ、ソン、マーシ、ル及エームズ (Ames) の政事的著作は其名世に高く、此等の諸家並にワシントンの簡牘は明晰雄健なる英語を以て綴られたり。 リンドレー、マーレー (Timothy Murray) 千七百四十五年生れ
千八百二十八年歿す は千

七百九十五年當時絶倫の英文典を著せり。神學にては大統領エドワードを始めとしサミエル・ホプキンス (Hopkins) ヌラニー (Belamy) エムモンズ (Emmons) ゼー・エム・メーソン (Mission) 及ドワイト (Davis) の如き思想道徳なる記者あり。就中ドワイトの「神學の組織」は英蘇兩國に播布せり。純文學亦已に其芽を萌發し、トラムバル (Trumbull) 千七百五十年生れ千八百三十一年歿す。ジュール・パロー (Jules Paro) 千七百五十五年生れ千八百十二年歿す。及ドワイト 千七百五十二年生れ千八百十七年歿す。の三氏世々著しく、皆ホープ流の詩人たり。三氏の尊重さるゝ所以は其愛國心に富めるに由ると雖、パロー、トワイトの兩氏は又各稀世の讚美歌を詠せり。

日耳曼記者 クロフスト、ク及レ・シングに次きて有名なるをウーランド (Wieland) 千七百三十三年歿す。とす。氏は所謂ウイマル (Weimar) 派詩家の最高年者にして、詩文俱に平易活動を以て名あり。ウイマル詩派の中、其著作の精巧雄大を以て著はるゝものをヘルデル (Herder) ゲーテ (Goethe) 及シルレル (Schiller) とす。ヘルデル (千七百四十四年生れ千八百〇三年歿す) は想像力及活氣に富み、神學者、批評家哲學者及語學者として其名籍甚なりしが、ウイマルに於て得たる二友の爲に其榮譽の幾分を奪はれたり。二友とは誰ぞ。曰くゲーテ及シルレルの二人是なり。ゲーテ (千七百四十九年生れ千八百三十二年歿す) は批評と創作の兩界に於て等しく卓越せる天才を有し、日

耳曼著述家の隨一と稱せられたり。其戯曲中「タソー」(Tasso) 「エグモント」(Egmont) 及「フウスト」(Faust) の如き、叙事詩中「ヘルマン及ドロテア」(Hermann and Dorothea) の如きは傑作中の傑作と云ふべき者なり。其他の短篇に至りても、流暢婉麗にして精巧を極めたるもの多し。シルレル (千七百五十九年生れ千八百〇五年歿す) は其沈靜なるところ美妙なるところはゲーテに及ばずと雖、其仁愛と熱情とは一般人心を感動せしむること甚深し。ケルネル (Körner) 千七百九十一年歿す。及日耳曼祖國歌の作者なるアルント (Arnt) 千七百六十九年生れ千八百六十年歿す。は最功績ある愛國的叙情詩家なり。ウーランド (Uhland) 千七百八十七年生れ千八百六十二年歿す。は當時絶世の俚謠作者なり。中世文學を慕ふどころの虚妄派はノーフリス (Novalis) テーク (Tieck) シレーゲル (Schlegel) 兄弟 (兄をグスト、ウイヘルムと云ひ弟をフリードリッヒと云ふ) 最名あり。シレーゲル兄弟は詩人よりは寧ろ批評家と稱すべし。此他日耳曼著述家の最絶群なる者の中にはジャン・パウリ・リヒテル (Jean Paul Richter) 千七百六十二年歿す。あり。氏は哲學者兼倫理學者なれども、其文字亦好諠を交へ熱情の發するところ多し。

日耳曼哲學 哲學界に於て時代及功績に於て第一位を占むるものはイムマヌエル・カント (Immanuel Kant) 千七百二十四年生れ千八百〇四年歿す。なり。其著書中「純粹なる理性の批評」(The Critique of

Pure Reason) 最重要なりとす。氏はヒームに反對して曰く、厚因、實質及我等の觀念は想像の結果にあらず、又思考の習慣より出づるものにあらず、萬有其物の中に存し、宇宙に必在して普及なるものなりと。其「實際理性の批評」(Critique of the Practical Reason)に於て吾人の有する道性中に、信神、意志の自由及不朽の眞礎の存することを云へり。氏の議論は熱心にして深刻なり。カントの説を基として、後學の輩は理想派又は萬有神教派の諸派を立てたり。其最有名なるものはフ、ヒテ (Fichte) 千七百六十二年生れ 千八百十四年歿す) シルリング (Schelling) 千七百七十五年生れ 千八百五十四年歿す) 及ヘーゲル (Hegel) 千七百七十年生れ 千八百三十一一年歿す) にして、フ、ヒテは意識以外に萬物なしと唱へ、シルリングは物心本來一源にして森羅萬象は其表象の差別たるに過ぎずと説き、ヘーゲルは宇宙を以て觀念の域内にあるものとし、觀念は自存自長の思想世界なりとなせり。又當時理學界著述家の中に於て卓越せるもの、アレキサンダー、フ、ン、フムボルト (von Humboldt) 及ウ、リヤムフ、ン、フムボルトの兄弟あり。甲は博物學者にして探檢家を以て、乙は政治、批評、言語學を以て著はる。

第二節 美術

繪畫及彫刻

「ローマンテック」學派の美術殊に繪畫の發達に及ぼせる影響は甚大なりとす。是より先、中世紀の基督教的技術を模倣するを以唯一の正路となすものあり、又描畫及形狀共に不完全なる古畫を模範となすものあり。紛々混亂せしが、「ローマンテック」學派此際に起り、兩者の範圍外に於て新材料を取り、理想即内部の感情に重きを置くに至れり。是に於て兩者の特長相待ちて始めて完全の域に達するに至りしまでは、久しく古學派及新學派即「ローマンテック」學派相争闘せり。古學派の有名なるもの、日耳曼に於てはメンクス (Menges) 千七百二十八年生れ 千七百七十九年歿す) 及カルステンズ (Carstens) 千七百五十四年生れ 千七百九十八年歿す) あり。佛國に於てはダヴ、ド (David) 千七百四十八年生れ 千八百二十五年歿す) あり。ダヴ、ドは徒に模倣を勉め想像力及新造の才に於て足らざる所ありしが、其門弟には熟達のもの多く、ホレース、ヅ、ルチー (Horace Vernet) 千七百十九年生れ 千八百十三年歿す) 及ポール、デラローシ (Paul Delacroix) 千七百九十七年生れ 千八百五十六年歿す) は歐洲近代の史乘より其材料を擇べり。日耳曼に於て新學派を創爲せるはオーフ、ルベック (Overbeck) 千七百八十九年生れ 千八百六十九年歿す) コルチリ、ース (Cornelius) 千七百八十三年生れ 千八百六十七年歿す) 及シ、ドウ (Schadow) 千七百八十九年生れ 千八百六十二年歿す) となす。コルチリ、ース及シ、ドウ相次ぎて畫學校を起し、數多の生徒を陶冶せり。ホーガース (Hogarth) に次ぎて英國畫家の大なるものをサー、ジ、シ、ア、レーノルツ (Sir Joshua Reynolds) 千七百二十三年生れ 千七百九十年歿す) となす。

二年)とす。氏の肖像畫は從來其比を見ざる所なり。ゲインズボロー(Gainsborough 千七百二十七年歿す)の名亦伯仲の間に在り、米國のベンジ・ミンツ・スト(Benjamin West)及コプレー(Copley)亦名あり。ローレンス(Lawrence 千七百六十五年生れ 千八百三十年歿す)及ターナー(Turner 千七百七十五年生れ 千八百五十二年歿す)共に英國に生れ、一は歴史肖像畫の名高く、一は山水畫の大家を以て聞ゆ。米人ジン・トラムフル(J. Trumbull 千七百五十六年生れ 千八百四十三年歿す)は雄壯なる戰圖及水彩肖像畫を以て功名を顯はし、ワシントン、アルストン(Washington Allston 千七百八十年生れ 千八百四十三年歿す)は彩色の艶麗なると畫風の清雅なるとによりて賞賛を博せり。ミカエル・アンチ・ロ以後彫刻を以て名あるものは、伊太利のカノーヴ(Canova 千七百五十七年生れ 千八百二十二年歿す)及英國のジン・フラ・クスマン(Maximum 千七百五十五年生れ 千八百二十六年歿す)とす。カノーヴの高弟に丁抹人トールウ・ルドセン(Thorvaldsen 千七百七十年生れ 千八百四十四年歿す)あり。日耳曼のダンチケル(Danneberg 千七百五十八年生れ 千八百四十二年歿す)は肖像の彫刻に妙を得、シ・ドウ(千七百六十四年生れ 千八百五十年歿す)は自然及實際に逼似することを主とし、實際派の祖となれり。ラウフ(Rauch 千七百七十七年生れ 千八百五十年歿す)亦此派に屬し、非常の天才あり。其作る所皆愛國の情及熱心を寓せり。キ・ス(D. Krieger)及リーチ・ル(Krietschal)其高弟たり。

音樂 彫刻術の進歩と共に音樂も亦教會より獨立するに至れり。日耳曼に於ては音樂

の大家輩出せり。ハイドン(Haydn 千七百三十二年生れ 千八百〇九年歿す)モツ・ルト(Mozart 千七百五十六年生れ 千七百九十二年歿す)ベートーベン(Beethoven 千七百七十年生れ 千八百二十七年歿す)とす。又唱歌の作家中に在て牛耳を取りしものはシ・ヘルト(Schubert 千七百九十七年生れ 千八百二十八年歿す)となす。

第三節 自然科學

天文學に關して最新なる發見をなしし者は、佛蘭西の理學者ラ・プレース(Laplace)とす。氏の著「メカニク、セレステ」(Mécanique Céleste)は實に斯學の爲に一紀元を開ける者なり。博士トーマス・ヤング(Thomas Young 千七百七十三年生れ 千八百二十九年歿す)大に潮汐の理を明にし、光線の波動説を確證せり。其他光學に進歩を與へたるものフレズネル(Fresnel 千七百八十八年生れ 千八百二十七年歿す)ピオ・イ・ビオ(Arago)及タッド・フリースター(David Brewster)等あり。ダルトン(Dalton 千七百六十六年生れ 千八百四十四年歿す)は原子説を唱へハムフレイ・デーヴィー(Humphrey Davy)亦斯學の爲に力を盡し、チーチ・ステフ・ンソン(Stephenson)と共に坑中安全燈を工夫せり。瑞典化學者ベルゼリヤス(Berzelius 千七百七十九年生れ 千八百四十八年歿す)及佛人ゲー・ルサケ(Gay-Lussac 千七百七十八年生れ 千八百五十年歿す)亦大家なり。ガルヴニ(Galvani)の動物電氣發見とツ・ルタの電堆發明とは後人を喚發して益、斯道の發達

を圖れり。ラマーク(千七百四十四年生れ、千八百二十九歿す)は進化によりて萬物の種別を生ずることを唱道せり。近代の大博物學者キール(千七百六十九年生れ、千八百三十二年歿す)は比較解剖學に就き頗る緊要なる觀察を下し、地質學と古生學とに關する幾多の定則を考定せり。地質學は日耳曼礦物學者ウーリチル(千七百五十年生れ、千八百十七年歿す)の力に依り一科の學となりしが、當時二派の地質學者あり、一を「チフチニアン」派(Neptunian)又は「ウーリチリアン」派と云ひ、凡ての岩石を以て水力の爲に沈澱せられて形成したる者となすの論者なり。他を「ヴァルカニアン」派(Vulcanian)又は「ハートニスト」と名づく。エディンボローの博士ハートン(Hutton)(千七百二十六年生れ、千七百九十一年歿す)の一派にして、岩石の發生を以て火力に歸する説を述べり。ロンドンの地質學協會は千八百七年より起り、科學實用上夥多の功益を與へたる者の中、英國の醫士ゼンチル(Zenker)(千七百四十九年生れ、千八百二十三年歿す)の種痘術は、其功績最較著なるものなり。

後期 (最近時)

第一節 發見及發明

地學上の發見 新世界發見の大事業成りしより、地球上亦此に匹適する發見の餘地

なきに至れりといへども、十九世紀殊に千八百二十五年以後に在りては重要なる發見の地理上に起りしもの鮮からず。地學協會亦至る所に設立せられ、就中千八百三十年に創立せられたる英國官立地學協會は最有名なるものなり。當時地學の發達は二途に分岐せり。一は未知の土地の發見により、一は國郡の科學的調査、測量、地圖製作による。此兩途の中科學的調査、測量等に關するものは、近來大に其面目を改めたり。露西亞人は進んで北部及中央亞細亞に旅人の通路を拓き、印度及中央亞細亞の大部亦英人の探檢する所となる。支那内地亦旅行者續々絶えず。アビシニア亦探索せられ、ナイル河源に關する疑團はスピーク(Speke)、グラント及ベーカー(Baker)諸氏によりて解明せられたり。クラハートン(Clapperton)は千八百二十二年及千八百二十五年兩度の旅行によりてトリボリよりギニアの海岸に至るの道を索め、千八百二十年リヤード、ジン、ランダー(Lion Landers)の兩氏はナイチ、ー(Niger)河口に關する疑を解き、ハース(Hass)及其他の探檢家は此大河の流域を探れり。マンゴ、パーク(Mungo Park)の其生命を亡ひたるは實に此時なりとす。千八百十六年、カロー(Congo)河はエララ(Yellala)瀑布に至るまで探檢せられ、シ、ワインフルト(Schweinfurth)、リン、ングストン(Livingston)、ハースカメロン(Cameron)及スタンレー

(Zinlar) 諸氏の旅行は亞非利加内地の蒙昧茫冥たるを發き、大に吾人の眼界を擴大にせり。千八百七十九年スタンレーはベルチアム國王レオホルドの命を受け、人烟稠密なるコンゴ河畔の地と交通の路を開き、遂に亞非利加洲の中央にコンゴ自由國を創むるの基を爲せり。此暗黒大陸の開發によりて地理探檢上の最終大問題は終に解明せらるゝに至れり。バレストイン及シナイ半島はロビンソン (Robinson) 其他の旅行者及英米二國のバレストイン探檢會社の科學的調査を經、南亞米利加及西北亞米利加の未知の地方并に濠太利亞の内部亦探索せられたり。北極地方發見に就き探檢の大事業起りて、ロス (Ross) バレー (Parry) フランクリンケン (Kane) マーカム (Markham) マークリントク (Mc Clintock) グリーレー (Greely) 等豪膽なる航海者は陸續北西に向ひて出航し、北海航路を求めんとし、皆全く其業を遂ぐるを得ざりき。マーカムは千八百七十五年従前未人跡の至らざりし北緯八十三度廿一分廿六秒の點に達し、グリーレーは猶進んで八十三度廿四分の處に至れり。フムボルトの旅行及紀事は大に地學に補益を與へ、カールリッテル (Carl Ritter) 及其一派の人は地理學に與ふるに深奥にして而も有益なる學科の地位を以てせり。即地球并に之を圍繞する大氣の自然の性質と人類及其歴史との關係を研究し、此に始めて地文學の一新學

科を生せり。近時に至り學者益其歩を進め、海洋の形勢を論じ、海底の地圖を製し、海風及海流の系統を説くに至れり。加之陸地の高低と海底の深淺とにより動物の配布を研究せり。

四大發明 現世紀に於ける幾多の發明中殊に功績あるもの四あり。而して此發明に係る名譽は他の大發明の如く全然一個人に歸すべきものに非ずして、此榮譽を多少分有するものは皆に數人に止まらざるなり。

- (一) 蒸氣汽機を改良し之を完成したるは、蘇蘭人ジームス・ワットの功なり。
- (二) 汽機を船舶に使用したるもの、即蒸氣船の發明者として此發明者中最名あるものはロバート・フルトン (Robert Fulton) なり。

- (三) 鐵道車は初、馬をして曳かしたるなりしが、千八百十四年英國のジョージ・ステファンソン 汽機車を發明し、後十五年を経て改良を加へ之を乗客運搬の用に供せしは、千八百三十年マンチ・スターリツ・イーブルの間に敷設せし鐵道を以て助となす。電車製作に伴ふて大工事續々として起れり。アルプス山は開鑿せられ、モント、セニス (Mont Cenis) の隧道は千八百七十一年に至り竣功せり。是よりして世界の文明諸國は漸次繩綯の如く鐵道を敷設し、工業製品運搬の法は全く變し、其他旅客の便を圖り商業を鼓舞する等の外、戰爭の方法に至るまで

亦大に面目を一新せり。

(四) 電信の功夫に就きては英人ホイットストーン (Whitstone) 丁抹人エールステッド (Oates) 米人ヘンリーの三人皆與りて力あり。電信機の最簡易にして効力あるもの、モールス (Morse) の考案に出づるものにして、千八百四十四年始めて世に使用せられたり。歐米兩大陸を連絡せる海底電線は千八百五十八年創設せられ、尋て地球上各地に布設を見るに至れり。電信機發明の後、電話機の發明ありて遠近の地に言語を通ずることを得たり。要するに汽機及電機の發明は萬里隔絶の諸國をして恒久に交通することを得せしめ、之に由りて東洋諸國と歐米諸國とは日に密接の關係を有するに至れり。

諸種の工具及機械 工具及機械の發明は近時に至りて大に精巧に赴き、勞力を省き製作品を善美にし、且世道を裨益するの効愈顯著となれり。幾多の器械は水夫の勞を減し、裁縫師の力を省き、農業の道を輕便にし、又印刷術の如きはホー(Hoe)の蒸氣印刷機の發明せられしより非常の進歩をなし、碎岩器の發明、爆發藥の使用等は近時勞力省減工夫中の最重大なるものなり。其他望遠鏡、顯微鏡、三菱鏡(キルヒホフ Kirchhoff 及タンセン Kirchsen の二人此發明を大成せり)寫眞術及醫療諸器械の發明ありて科學及醫術の進歩を助け、諸種の銃砲彈藥の發明は兵學及戰術の基礎を一變せり。米人チャールズグッドイヤー (Charles Goodyear) の護謨に於け

る化學的變化法を發明してより、護謨の要利益大となり、製作品中の大部を占むるに至れり。

第二節 科學

科

學

勢力保存 近代に起れる物理学諸定論中最緊要なるものは蓋勢力保存の原理なり。初化學者は物質の和は千古同一なること説示せり。換言すれば化學的變化起るに當りて、物體は縱令其形狀を變するも其實質は失滅することなきことを説けり。是に至りて又勢力の全量は一定不易なることを證明せられたり。即勢力は一物體に於て失はるゝときは、必他物體に入りて表はれ、此に停止すれば彼に發揚し、而して常々能く定率に戻らざるなり。是を以て一形狀の下に在る勢力は、他の形狀に變せしむるを得へし、熱、光、電氣、磁氣、化學作用は互に相關聯して其一勢力を變し他勢力を生ずるを得へし。此事實を稱して「**理學的勢力の相關**」と云ふ。此發見に關したるは、日耳曼にありてはマイエル (Meyer) 英吉利にありてはグロウ (Grove) ジール (Joule) となす。尋て「サー」ウイリアムトンプソン (Thompson) ヘルムホルツ (Helmholtz) タイト (Tait) マクスウエル (Maxwell) 等之を説明せり。

又ティンダル(Tyndall)は「運動の一法として熱を論ず」に於て、バルフーア、ステウイト(Palmer Stewart)は「勢力保存論」に於て此眞理を説明せり。然れども米人ラムフ、ード(Rumford)伯は數年前已に熱の運動上同勢なることを推測するの論據を供へ、以て此発見の途を開きたり。

地質學及古生物學 千八百二十年ライエル(Lyell)の著、世に出てより、地層の形成は劇甚なる破裂災害によるにあらずして、寧ろ現時猶動作しつゝある勢力の緩漫なる作用によれりとする地質學上の傾向を生じたり。千八百三十一年英國の地質學者セドジック(Sedgwick) マーチソン(Murchison)各自著書を企て、アガシー(Agassiz)は千八百三十七年に「氷海論」を公にせり。是實に後日ティンダル等の研究の前驅をなしたるものなり。米國に在りてはシラン(Silliman)地質學及化學に一大鼓動を與へたり。古生物學に在りて、ハッチャソン(Hatchinson)の化石遺骸の研究によりて、人類時代以前の地球の状態及之に接息したるものに關する吾人の智識を増さしめたる學者は枚舉に遑あらず。人類の發生は何れの時代よりありしやは姑く措き、地球太古の状態は現時一般に認知し得る所となれり。

天文學 佛國の大幾何學者ラグランジ(Lagrange)及ラプラス(Laplace)は天文學上に一新紀元を開けり。爾來此學の知識大に増進し、レヴェリエ(Leverrier)及アダムスの計數法の結果としてガルー(Galle)は海王星を發見し、科學進歩の一確證となれり。其他星辰の發見記述せられしもの幾萬なるを知らず。數理天文學は大に進歩し星雲、氣象の研究及三菱鏡の補助によりて諸天體の構造を查察する等、皆此最舊科學の上に起れる新事業の著大なるものなり。而して此に與りて力ありしものはジョン・ハーシェル(Herschel) ヘーバ ーシ ルマ クスウル ストルー グ (Struve) セ チ (Secchi) ベ セル (Bessel) ボ ハ ド (Bond) ポ ト ス (Peirce) ニ ー ト ン ニ ー ロ ム ブ (Newcomb) ヤ ン グ (Young) ロ キ ー ア (Lockyer) となす。

化學の進歩 珍奇なる化學元素は大概當世紀の發見に係る。千八百十九年に當りて諸元素の原子に屬する熱量は均一なること證明せられたり。同年ミ テ エ ル リ ヒ (Mitscherlich) 法則出づ、即異質同形結晶法 (Law of Isomorphism) にして、此によれば同種元素の諸原子は、一化合物中に於て其結晶形を變せずして互に相交代することを得るなり。多くの化學者は種々の化合物の極微構造に就き分子説をなせり。フ ラ デー (Franckland) 千七百九十一年生れ)は電氣學と化學との關係を明にし、日 耳 曼 の化學士リー ビ グ (Liebig) 千八百六十七年歿す)は電氣學と化學との關係を明にし、日 耳 曼 の化學士リー ビ グ (Liebig) 千

百三年生れ千八)は亦此學の爲に大に盡力せり。

生物學 近時自然科学に於て熱心に考究せられしものは生物學に若くはなし。而して博物學研究上に刺衝を與へたるものゝ中、最著しきものをチャールズ・ダーウ・ンの進化論とす。千八百五十九年「種源論」(The Origin of Species)を著せり。其説に曰く現時世上に生存せる幾多の動物は始より其根原を異にするにあらずして、僅少の原始動物の自然に進化し、徐々に轉化して遂に此く異種の動物を生せしなりと。氏は亦自然淘汰の説を述べ、生存競争に於て弱肉強食適者生存の理を主張せり。ダーウ・ンの名と共に稱すへきはウ・ルラス(Wilhelm)なり。ウ・ルラスはダーウ・ンと同時に期せずして同一説を唱へたればなり。進化概論即種源論はリチャード・オーエン(Owen)等諸學士によりて祖述せられたり。然れども其所説稍異なりき。此進化論反對者中最著しきものは、熱心にして有爲なる大家ルイ・アガ・シ・ツ(千八百七年生れ千八百七十三年歿す)なり。而して最能く進化論を保護せしものはハ・クスレーなり。或學者は此説を無機界に及ぼし、遂に萬有の根元を星雲狀氣體に求むるに至れり。

古物學 地質學は古物學即人類の原始狀態を研究する學術の進歩を裨けて大に功あり。

彼バビロン・アスシリア等古代東洋文明諸國の遺址を發掘し、又碑石に彫刻せる廢絶文字の解釋せられてより、上古史の暗幕は破却せられたるのみならず、歴史以前時代に屬する人類の遺屍の發見は、載籍前の人類生活の狀態を窺知するを得るに至れり。タイロル(Taylor)の著「原始の開化」の如きは頗世に重せらる。

第三節 哲學文學及法政學

佛蘭西の哲學 思想富瞻、辯舌流暢而して又文章の妙を以て名あるウ・クトル・クーサン

(Victor Cousin) 千七百九十三年生れ千八百六十七年歿すは折衷派と稱する一派を開けり。氏は以爲く現今學說繁

多なるが如しと雖、要するに觀念派、感覺派、懷疑派、神物同體派の四種に出せすと、この四種を基とし彼此拆衷して一派を建てたり。其教理は日耳曼學派、蘇蘭學派の中間を採りたるも、間、一方に偏するあり。ジ・ーフルワー(Jouffroy)はクーサンの高弟にして論理の精密にして法式に適するは其師に勝ること一步。審美學道義學等の著書、世に益する所

あり。然れども佛蘭西の哲學は實驗學派の祖なるオーガスタス・コムト(Augustus Comte) 千七百十八年生れ千八百五十七年歿すにより形勢一變せり。氏の説に曰く、吾人は唯現象、即吾人が五官に映す

る所の者を知るのみ、原因、手段、目的等の如きは吾人の知り得べき所にあらず。吾人は類似不類似并に時期の關係、發起の次第に就き、吾人の觀察實驗を以て事實を判定するに過ぎざるなりと。

蘇蘭の哲學

蘇蘭學派の最卓越博識なる者を「サー、ウイリアム、ハミルトン」(Sir William Hamilton) とす。氏は自然實體の説を成して曰く、吾人直接に外物を知覺する

ことを得、吾人が思念の力は二個の不可思議なる物の間に存するものにして、其

一は實存ならざるべからず、故に吾人自由意志(即ち新創始の義)を思念する能はず、また原因の無限なる連續を思念する能はず、然れども道德及び宗教の原理より推すときは、吾

人は自由意志の實在を確認せざるを得ざるなりと。フレイエ(Freier)は

蘇蘭の人にして才學あり、然れども蘇蘭派に反對せり。以上の外多少其趣を異にするも

主としてライド(Reid)ハミルトンの所説を信奉するものフレサー(Fraser)カルダーウード(Calder-

wood)の兩教授及びゼームス、マクゴツジ(James Mc Gosh)あり。

英吉利の哲學

ジョン、ステアート、ミル(John Stuart Mill)の性理學は大

にヒーム及コムトの哲學に類似せり。氏は直覺力を説て曰く、直覺力は同一の經驗の疊

積したる印象にして、畢竟感覺より生ずる所なりと。又原因なる者は衆現象の不易なる聯絡に外ならずして、之に依り不知不識の間に希望なる者を生ずと。此派の主義を執り而して人智の解釋を、感覺によりて得たる材料中に求めし者は蘇蘭の生理學者アレキサンダー、ペイン(Alexander Bain)なり。ハーバート、スペンサー(Herbert Spencer)は進化の理を基礎とし哲學の一般法式を建てたり。氏曰く吾人の智識は外物が吾人の知覺に映する現象に過ぎず。其物の實相に至ては吾人得て知る可らざるなり。此不可思議の本源よりして物心兩界開發し互に相結合一致するなり。而して此勢力や亦不可思議なりと。

日耳曼の哲學

ヘーゲル學派の衰後日耳曼の哲學界は無政府の有様となり、ヘルバルト

を立たり、當時各一個の定説を維持し、一方に雄視したる性理學者數多ありて、其中有

名なるものを少フ、ヒテ(Fichte)ウルリチ(Ullrich)トレンデレンブルク(Trendelenburg)及ヘルマン、

ロツツ(Herman Lotze)等、就中ロツツの著に係る「小宇宙」は巧に人類、自然、宗教の深遠

可樂の境を描けり。日耳曼思想界の特異なる現象は厭世哲學の風潮とす。此學派は主に

所によれば斯世界は徹頭徹尾悪界にして人類の生存は痛苦を受くる爲めのみ、故に此苦惱を免れむには人界を離るゝの他策なしと。その世界を以て無意識勢力より起りたる者となし、感覺の滅亡を以て安樂の境に入るの道となし、諸毒惡を以て萬物の本質中に刺繡せられたる者となすが如きは、全然東洋印度思想の再興といひつ可し。日耳曼に於ては哲學に關する歴史及評論の著書夥しく、リッテル (Litter) エルトマン (Erdmann) ツェレル (Zeller) クノーフツシル (Kuno Fischer) 及ランゲ (Langue) 等の哲學史は最も有益なるものなり

伊太利の哲學

伊太利性理學者の中より就きてはロズミニ (Rosmini)

千七百九十七年生れ千八百五十五年歿す

ギオヘルテ (Gioberti) 千八百〇一年生れ千八百八十二年歿すの二人を以て最著名なりとす。ロズミニは觀念派にして

ギオヘルテの哲學は別に一派を爲せり。ギオヘルテ又政事に練達し、其政界に於ける聲譽は哲學界に於けると相同じ。

亞米利加合衆國の哲學

米國に於ては多數の學者は或は神學と共に或は別に熱心に哲學を講究せり。ジームスマーシ (James Marsh) シーエス・ヘンリー (C.S. Henry) フレナナス

ウー・イラント (Francis Wayland) エル・ビー・ヒコク (L.P. Hickok) エーチ・ビー・スミス (H.B. Smith) 等

は近世有名なる學者なり。

英吉利の散文家

近世文學界に定期雜誌新聞紙の刊行せらるゝもの非常に夥しく、

之が記者若しくは寄書家たるものにして名聲あるもの亦頗る多し。英國有名の著述家は多くは初め、評論雜誌に歴史又は批評に關するものを掲載して名聲を得し者なり。

トーマス・バビングトン・マコーレー (Thomas Babington Macaulay) トーマス・カーライル (Thomas Carlyle)

二人の如き實に此儔なり。この二人は共に歴史家なり。マコーレーは熱心なる民黨にして政事に熟達し文學に通曉し、人其博識なるを驚けり。氏は雄壯華麗の文を以て英國史を著はし、ジームス二世の即位より氏の英雄と仰けるウイリヤム三世の崩御に至るまでの事を叙述せり。カーライルは想像豊富にして感情旺盛し、思想奇と稱すべしと雖、大に獨逸文學殊にリヒテルゲーターの感化を蒙りシルレル傳を著はせり。後佛國革命史を著し、この悲壯的時代の光景を寫すに戲曲的活氣を以して、宛然目之を觀るの感あらしむ。又フレデリック大王紀の著あり。而して氏の文筆の特色を表はせるものは民主政治を罵倒せる「英雄及英雄崇拜論」及び「後世叢書」の二書及博學なる僧シリアス・ヘア (Julius Haro) の著を駁撃するが爲に著したるジョン・スターリング (John Sterling) 傳なりとす。散文家中稍

輕快なる文體を以て有名なるものゝ中に蘇蘭人ジョン・ウルソン(John Wilson 千七百八十五年歿す)あり、數多の叢話批評を作り、又クリストフ・ノース(Christopher North)の名を以て著はしたる滑稽雜誌を著はせり。トーマス・ドクンシー(Thomas De Quincey)はウルソンの如く想像諧謔に富まざるも、詩的散文の一體に長じ「喫阿片者の自白」羅馬帝王論」等を著せり。

英吉利の史家 以上諸家の外英國の史學界に於て有用の著述を爲し、尙太多し。

グロート(Grotes)サールウォール(Thirlwall)の二人は講究研磨の功を積み、各希臘史を著はせり。グロートのアゼンス民政の解釋に關する意見はミトフォード(Mitford)の希臘史と正反せり。チールズメリウォール(Charles Merivale)は精細なる羅馬帝國史其他數多の史を著し、スタンホーフ(Stanhope)は西班牙國王位繼承戰爭紀等有益の書を著し、「サー」ダフリ、エフ、ビー、チービル(Sir W. E. P. Napier)は半嶋戰爭紀を著せり。此紀中ウルリントンが西班牙に於ける戰爭は親ら軍中に馳騁せし者の筆に成れり。英國憲法史はハラム(Hallam)メー(May)スタ、フス(Stubbs)等學識判斷に富める者の論述するところとなれり。スタ、フスはチ・スターの僧正にして英國古代史の研究は功を此人に歸すべきなり。エドワード、エー、フ

リーマン(Edward A. Freeman)亦古代史に超群の功あり。其ノルマン征服史は其史籍に係る著書中最傑出せるものなり。ゼーアール、グリーン(J. R. Green)は英國民の趣味ある紀事を編み、ゼー、エー、フロート(J. A. Froude)は佳妙なる文才を以てエリサベス治世の史を編み、其篇首はヘンリー八世の性行を辯護せり。ハリエト、マルティノー(Harriet Martineau)女は一千八百十六年より一千八百四十四年、至るまでの英國史を著せり。女史は經濟學及其他の學術に關する著述家、コムト哲學の翻譯者として有名なるものなり。蘇蘭のジョン、ヒル、バートン(John Hill Burton)は法律家なりしが活筆を揮て蘇蘭史及アン女王治世史を著はし、レ、キー(Tacky)は流麗の文を以て十八世紀英國史、其他歐洲論理史、オーガスタスよりシ、レーメーンに至るまでの歐洲道德史を著はせり。宗教史にては羅旬基督教史の著者ミルマン(Milman)及副總監スタンレー(Stanley)は鐵中の錚々たるものなり。

英吉利乃小説家 「サー」ウ、ルター、スコト(Sir Walter Scott 千七百七十一年生れ、千八百三十二年歿す)の「ウー、グ、リ」小説」の連篇は無上の聲望を博せり。其文を輕快健勁の調を以て之を貫き、巧に人類の生活風俗を描出し、人をして中世時代及武士の精神に同情を表せしむ。スコトの詩は正格の詩句を聯ねて而も能く閑雅なる風景、武士の格闘、冒險の光景を寫せり。スコ

トの小説は遂に一派を形成し、チー、ビー、アール、ゼームス (C. P. R. James 千八百〇一年生れ) は此流の達人なり、當時またデイ、ケンス (Dickens 千八百十二年生れ) サカレー (Thackeray 千八百十年生れ) サカレー (Thackeray 千八百十年生れ) 等の一新派起れり、兩人共に諧謔家として、社會の狀態生活の有様を記するに長せり、殊にデイ、ケンスに於て然りとす、現時の小説の通常生活の光景事態を叙じ、人類性行の極微を穿ちて、以て人意に適せむとするの傾向あるは、此兩人の指導せしところによるかり、デイ、ケンスはその獨得の滑稽と熱情の紙上に現はるゝものあるとに因りて大に愛讀せられ、サ、カレーは諷刺に長し、爛眼を以て人類の弱點を發けり、本、同情の念強しと雖、嘲笑侮罵の筆を連らし専この情を蔽はんとせり、有文社會の人望、前二者の次に位するものはルイス (Lewis) 女史即ジョージ、エリオット (George Eliot) なり、女史の小説は美術的精神に加ふるに教訓の目的、寓意の傾向を以てす、而して此風や近世小説に於て屢見はるゝところなり、此他英國小説家中最愛讀せらるゝ者はバルワー (Bulwer 千八百〇五年生れ) なり、其初年の作は淫靡の風ありしか、後之を脱せり、チールス、キングスレー (Charles Kingsley 千八百九年生れ) の小説亦喝采を博せり、歴史小説にてはチャールス、リード (Charles Reade) の「寺院と爐」フラ、クモリア (Blackmore) の「ローナ、ツニーチ」(Lorna Doone) ロバート

(Roberts) 嬢の「ノーフレ、ス、オフリゲ」(Nothesse Oblige) 等最名あり。

英吉利の詩人 近時英國詩人の第一位を占むる者はアルフレド、テニン (Alfred Tennyson) なり、その「王妃」紀念の爲「王の歌」等は人口に噴々たるところなり、氏は幼時既に詩に熟達せるの材を顯はし、之に加ふるに新奇なる想像、深遠なる思想及當時學術の疑問と希望とに對する同情を以てせり、殊に其叙情詩に於ては勢力の躍如たるを見る、氏の完全無缺の美文家たることは到底疑を容れざるなり、フラウニング (Browning) の詩は韻律亂雜にして形體整はされども、戯曲の趣あり、然れども其精神の下層に墮落せるを以て、曖昧模糊なりと非難する者多し、近世に於て著名なる英國詩人の中好謔家トマス、フッド (Thomas Hood 千七百九十八年生れ) アーサー、クロー (Arthur Clough 千八百十九年生れ) 頗る聲譽あり、尙近時、降りてはマ、シー、アーノールド (Matthew Arnold) 最世に聞ゆ、以上の詩人と共に此に記すべきは、最能辯にして思考に深き、美術上の著述家ジン、ラスキン (John Ruskin) なり。

亞米利加の文學、詩歌及小説 近時合衆國に於ける文學歴史は一段の進歩を爲ししを見る、先二詩人顯れ出で文名を歐米に轟かせり、一をワシントン、アーヴィング (Washington Irving)

Jon Irving (千七百八十二年生れ) といふ、一千八百十八年「ゼスケチ、フク」と名つくる叢話集を著せり。是より先、ニカーボカー (Knicker Bocker) のニールク史其他滑稽的著作あり。晩年コロンブス傳、モハメド傳、ワシントン傳等を著せり。其文體の美妙なる、ゴールドスミスの淡泊を具へて従前米國文家の華美を銜へるを嘲罵せし歐洲批評家を満足せしめたり。他をゼームス、フニモア、クーバー (James Fenimore Cooper 千七百八十九年生れ、千八百五十一年歿す) といふ。氏の小説の最初に出でたるものを「間諜」とす。一千八百二十一年出版せられて大に世人の注意を喚起したり。後二年を経て「パイオニア」(Pioneer) を著せり。是れ氏の「レザー、スト、キング」(Leather Stocking) と題して印度人の生活風俗を叙したる有名なる續出小説の首篇なり。クーバーは又「海小説」の祖にして英國のマリアット (Maryat 千七百九十二年生れ、千八百四十八年歿す) 之を繼けり。リチード、エーチ、ダナ (Richardt. H. Dana) 及フツグリーン、ハルレク (Miss-Green Hallock) は前世米國詩人の流弊たりし虚浮の缺點を免れたるのみならず、尙進んで他を凌辱するの氣あり。就中ダナは韻文に於てのみならず、散文に於ても天材を顯せり。又後世の詩人にして名を内外に宣揚したるもの少なからず。フライアント (Bryant) の悲哀にして高尚齊整なる、ロンクフ、ロー (Longfellow) の醇美にして圓滑なる、ホイ、テイル (Whittier) の靈

活にして自由慈仁の念に富める、みな然らざるはなし。ローエル (Lowell) は詩歌及批評を以て名あり。其詩は森嚴中諧諧を交ふるところあるを以て著る。其著「ビッグロー、ペーパース」(Biglow Papers) に載せし諧諧の如きは、世之に比すべきものなし。オリヅ、イー、ウ、ンデル、ホルムス (Oliver Wendell Holmes) また散韻兩文に妙にして、所謂社會詩と稱する文牒に於ては當時ホルムスに勝るものなし。エドガー、アルラン、ポー (Edgar Allan Poe) は行狀放恣にして道德上缺けたる所ありと雖、亦詩文に巧にして能く其天才を發揚せり。ラルフ、ワルドー、エマルソン (Ralph Waldo Emerson 千八百〇三年生れ、千八百八十二年歿す) は詩人として賞歎せられたるのみならず、論理よりは寧ろ熟察を重しとする論文家として一層景仰せられたり。氏は宇宙、人類、文學を解明するに、其洞察の稀有なる文辭の巧妙なる、英儒マ、シユ、アーノルドは之を以てマーカス、オーレリアス (Marcus Aurelius) 帝の著「熱慮」に比したり。米國小説家の首位を占むる者はナサニエル、ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) なり。氏は傳奇的小説に於て良心と感覺との動作、殊にその隱微なる作用を解明するの敏活に加ふるに、文體齊整して美麗なり。ハリーエ、ト、ビーチャー、ストーリー (Harriet Beecher Stowe) の小説亦盛に歡迎せられたり。殊に其奴隷に關する事績を叙し黑人の性情を寫出したるものに於て然りとす。此

他アーヴィングと同時の人ゼームス・ケー・ホールディング (James K. Paulding) の植民時代記事、カスリン・エム・セデウツク (Catharine M. Sedgwick) の新英蘭風俗記等皆有名なるものなり。文學に關する歴史及批評に就き善良なる著書、亦亞米利加人の手に成れり。ジヨージ・テクノー (George Ticknor) の「西班牙文學史」の如きは、博識なる學者の多年研鑽の功を積みたるものと謂ふべし。

亞米利加の史家 亞米利加に於て歴史上信憑すべき著書鮮からず。ワシントン、フランクリン等の諸傳、其他有益なる史籍はジレツド・スパークス (Jared Sparks) の手に成り、チーヂ・バンクロフト (George Bancroft) は合衆國史に關し其考究の結果を續々出版し、リチャード・ヒルドレス (Richard Hildreth) 等亦之と同じく國史を研究せり。ジョン・チャー・バルフレイ (John C. Palfrey) は名著「新英蘭史」の著者なり。ウリアム・エーチ・プレスコット (William H. Prescott) は「フルデナンドとイサベラ治世の歴史」「西班牙人の亞米利加征服史」及「西班牙のフリ、フ二世治世紀等を著し名を歐米に轟かし、荷蘭共和國の起原及發達を叙したる」ジョン・ロスロフ・モートロー (John Lothrop Motley) の雷名も亦プレスコットに譲らず。フランシス・パークマン (Francis Parkman) は斬新なる考證に憑り、完全と熟技とを以て、亞米利加に於ける佛蘭西植民

及佛蘭西征服に關する記事を詳説せり。

日耳曼の文學 日耳曼人の文學に於ける各種の著述は頗盛大にして年々數千の冊子を出版するに至れり。此國政事上の状態は多數の人をして文學及科學の攻究に傾念せしめたり。左に名家の數人を挙げむ。想像的文學にては猶太人の苗裔ハインリッヒ・ハイネ (Heinrich Heine) 千七百九十九年生れ
千八百五十六年歿す は諷刺に巧なれども侮蔑に失せり。氏はまた近世有名の歌人なり。グスターフ・フライターグ (Gustav Freytag) は小説の傑作を出し、アウエルバ (Auerbach) 及スピールハーゲン (Spiegelungen) 亦小説界に雄飛せり。詩人にてはレナウ (Lenau) フライリグラート (Freiligrath) 等最名あり。日耳曼人の史述は洽く世界を益したるものなるが、就中シロ・セル (Schlosser) 千七百七十六年生れ
千八百六十一年歿す、ヘーレン (Heeren) 千七百六十年生れ
千八百四十二年歿す、ラウメル (Lau-
muer) 千七百八十一年生れ
千八百七十三年歿す 及ランケ (Lanke) 等の著書は斬新なる考證に基き熟練なる筆鋒を以て書せり。ゲルファヌス (Gerinus) は史學と共に批評に長し、其他フン・シベル (Von Sybel) **ドロイゼン** (Droysen) ツンケル (Duncker) ウーベル (Weber) ゴーゼフ・フント (Giesebrecht) モムゼン (Mommsen) クルチウス (Curlius) ホイセル (Huisser) 等皆有名の史家なり。ニープフル (Niebuhr) 千七百七十六年生れ
千八百三十一年歿す は歴史界に一大刺動を興へたり。日耳曼考證家は古代の各國を穿鑿し

埃及考古學にてはリプシウス (Lipsius) フンゼン (Bausen) フルグシ (Brugsch) 及エヘルス (Ebers) 等其冠たり。ネアンデル (Neander) キーゼナル (Gieseler) パウル (Baur) デルリンゲル (Dellinger) ヘーラー (Haller) 及アルツィグ (Alzog) は宗教歴史家中の錚々たるものなり。日耳曼の旅行者は地球上の各所を探究し、シユリーマン (Schliemann) はトロイの古跡を發見せり。數學、博物學、言語學、批評學、哲學、法律、政治及神學に就き、現世紀間日耳曼學者の忍耐勞苦して施爲せる論究は、世人を裨益する所少なからず。

日耳曼の言語學 古典語學はハイネ (Heyne) ウルフ (Wolf) 二人に因て一科の學とな

り、ゲーヘルマン (G. Hermann) 千七百七十二年生れ 千八百四十八年歿す) フートマン (Buttmann) 千七百六十四年生れ 千八百二十九年歿す) ヤコブス

(Jacobs) カイ、オィ、ムルレル (K. O. Müller) 千七百九十七年生れ 千八百四十年歿す) 等其後を承けたり。此等の諸人に

因りて希臘羅馬の言語は精密に研究せられたるのみならず、古典も充分に査察せられ

たり。比較言語學もホップ (Hopp) 千七百九十一年生れ 千八百六十七年歿す) ラセン (Lassen) 千八百零六年生れ 千八百七十六年歿す) ウーブン

フ、ホルト (W. Von Humboldt) 千七百六十七年生れ 千八百三十五年歿す) ホット (Pott) 千八百一十二年生る) シライヘル (Schleier) 千八

十一年生れ 千八百六十八年歿す) 等の力に因りて完全なる一科を成すに至れり。日耳曼國語及古代文學の

研究はジィ、グリナム (J. Grimm) 千七百八十五年生れ 千八百六十二年歿す) ウィ、グリナム (W. Grimm) 千七百八十六年生れ 千八百五十九年歿す) ラクマン (Lachmann) 千

七百九十二年生れ 千八百五十二年歿す) シムローク (Simrock) 千八百二年生れ 千八百七十八年歿す) 等の力によりて發達の途に就けり。

佛蘭西の文學 佛蘭西の青年活氣の著述家は古典學の摸型を脱して「ローマンチック」派

の自由なる方法に従ひて戯曲を著せり。此輩の則るところはコルネー (Cornelle) よりは寧ろ

シエークスピアに在り。此流の著者には小説兼戯曲家たるアレキサンター、デーイマ (Alexander

Dumas) 詩人兼戯曲家たるヴクトル、ユーゴ (Victor Hugo) あり。デーイマの小説は其數實に

百卷に餘り、其歴史小説に於ては無數の事件及人物、續々篇中に現出すと雖、紛雜混交

を感ずることなく、叙事また活氣あり。スクリア (Scirbe) は滑稽的喜曲に巧みとして、ジュー

ヂ、サンド (George Sand) 夫人 (千七百九十二年生れ 千八百六十七年歿す) は當時小説作者の傑人たり。ユーチン、スー (Eugene Sue)

及バルツ、ク (Balzac) は共に此界に名高し。詩人の卓越せる者は歌人、ペランシー (Heranger)

ラマルテイン (Tannurino) ヴクトル、ユーゴ及アルフレド、ド、ム、セー (Alfred D. Musset) 等なり。

ム、セーは詩人として非凡なるのみならず、亦小説家として著し、ユーゴは文學の各技

に通じ、セオフル、ゴテ、エー (Theophile Gautier) は批評、小説に巧み、且詩人として世に重

んせらる。而して近時佛蘭西の著述社會に於て最聲名を擧げたるものは歴史の一科に

在り、叙事に巧妙なるウルマン (Villemain) の如き、深遠なる考證に加ふるに哲學的思想を以てせるギヅオー (Guzot) の如き、オーガスタン・テ・エリー (Augustine Thierry) が中世史に於てギヅオーと等しく考證思想に意を注さしが如きは、皆歴史界に偉彩を放ちたる者なり。オーガスタンの弟アメデー・テ・エリー (Amédée Thierry) は羅馬帝國滅亡の時に於けるゴール地方の社會の狀況を描き、バラント (Barante) はバーガンデー侯累代の史を記して頗る趣味あり、佛蘭西史を考究したる者の中ギヅオーを除きてはシヌモン・デ (Sismondi) 快活なるミシ・レー (Michelet) 精密にして沈着なるヘンリー・マルティン (Henri Martin) 等は殊に著名なる者なり、テ・エル (Thiers) ミグネー (Mignet) ルイ・ブラン (Louis Blanc) タイン (Taine) は大革命の本末を紀し、快活にして厚情なるラマルティン (Lamartine) は「キロンチスト」黨の事を紀し、ランフレ (Lamfey) は嚴酷なる批評眼を以てナポレオン一世の傳を著せり、經濟政治に關しては「亞米利加民政」の記者なるド・トケウル (De Tocqueville) シウリエ (Chevalier) 及 バステア (Bastiat) 等の著書最名ありて國の内外に播布せらる、批評社會にてはレナン (Renan) ド・セーシー (De Sacy) 等名聲あり、而して最有名なるものをサン・ビーツ (Sainte Beuve) とす、數學物理學に關する無數の著書は其解説明晰として佛人をして歐洲科學の註

解者たるの地位に立たしむるに至れり、秩序の整然たる、文體の明瞭なる、言辭の清楚なるは此二科に止まらずして、他の諸科に及べり、佛人が文藝の先達として自許すところある亦宜なり。

瑞典及露西亞の文學 瑞典著述家にして名を海外に輝かし、者は史家ガイエル (Geijer) 千七百八十三年生れ 及彼「隣人」と題する小説の作者フレデリカ・フレメル (Fredrika Bremer) 千八百四十七年生れ 露西亞小説家の最有名なる者はイヴン・ツルゲネツフ (Ivan Turgeneff) にして其作中露人生活の狀を寫し得て妙なる者あり。

理財學 リカード (Ricardo) 千七百七十二年生れ 千八百二十三年歿す) はアダム・スミスの後を承けたりと雖、其論理の法式は却てスミスに勝るところあり、リカードの著書及マルサス (Malthus) 千七百六十六年生れ 千八百三十四年歿す) の人口論(人口の増加は生存資料の増加に勝るを論述せる者)は學者の重んずる所にし、之に基きて無數の著書出でたり、此時に當り理財學に名あるものはゼームス・ミル (James Mill) ゼー・アイル・マ・クカロツク (J. R. McCulloch) エン・タフリ・イ・セニオル (N. W. Senior) 千七百九十

十年生れ千八百六十四年歿す) アール・トールレンス (H. Thorrens) 千七百八十年生れ千八百六十四年歿す) ハリーエト・マルティノー (Harriet Martineau) 千八百二年生れ千八百七十六年歿す) 有名なる蘇蘭の僧トーマス・カルメルス (Thomas Carmelers) 大僧正

リチード、ホエートリー (Richard Whately) 及びリカードを批評したるリチード、ジ・ネス (Richard Jones) 等の諸家あり。リカードの説を修正注解したる者ジ・エム・ステ・アード、ミル (John Stuart Mill) 千八百〇六年生れ千八百七十二年歿す。フーセト (Fawcett) 等はミルの説を沿襲せし者として、ゼー、イ、ケーアチス (J. E. Cairnes) 千八百二十四年生れ千八百七十五年歿す。は此學界に於ける英國有名の學者なり。佛蘭西に在りてはアダム、スミスの主義盛行はれ、其勢日耳曼に於けるよりも大なり、其最著名なる學者をゼー (Say) 千七百六十七年生れ千八百三十二年歿す。とす。シスモンディー (Sismondi) 千七百七十二年生れ千八百四十二年歿す。は英國の學説に反して一派を建て、政府が富の増殖に干渉すべきことを主張せり。其他デ・ヌアエー (Dunoyer) 千七百八十六年生れ千八百六十二年歿す。自由貿易論者たるバーステア (Bastiat) 千八百〇一年生れ千八百五十年歿す。經濟問題に数理を適用したるクールノー (Cournot) 千八百〇一年生れ千八百七十七年歿す。は最較著たる者なり。亞米利加に於てはフランクリン、ハミルトンの後幾多の學識ある者現出し、リカード、マルサスの意見に反対し、保護貿易を唱へたるエーチ、シー、ケラー (H. C. Carey) 同しく保護論者ボウエン (Bowen) 及エフ、エー、ウ、ルカー (E. A. Walker) バルリー (Perry) 等頗名あり。伊太利に於ても理財の學に關する著書にして卓越せる者少からず。日耳曼の學者は太多く、就中リスト (List) 千七百九十八年生れ千八百四十六年歿す。を以て最盛名ありとす。リストはアダム、スミスの批評家にして絶對

的自由論者にあらず。晚今英國有名の學者はバチ、ツト (Bacchiol) レスリー (Leslie) セボンス (Sevons) 及シ、チウ、ク (Zeilwick) 等なり。抑貿易の自由保護兩説の中、後者を主張するもの學説二途あり。一は保護を以て永久執るべき最良の政略なりとし、一は之を一時の政略なりとし、産業の幼稚なる間は生産を保護するの必用あるも、其漸く進歩して外國物産と競争し得るに至らば之を解く可しと論ず。千八百四十六年英國が穀法條例を排棄せしより、國內に於て自由論盛行はれ、千八百三十九年コムトが社會學を解説せしより、經濟學は社會學の一部なりと認定せらるるの傾向を顯せり。蓋アダム、スミスの諸門弟は政府が人民の産業に干渉せざらんことを主張し生産は富に對する自然の欲望と、富を求めむとする自然の競争とに放任して可なりといへり。社會學派の説は全く之に反し、政府をして各般事業の管理者、土地及労働器具の所有者たらしめむことを主張せり。

亞米利加の法律及政治學者 米國法律學者は甚衆くして其名全世界に洽し、ヘンリー・ホートン (Henry Wheaton) の國際公法に於ける、ウールセー (Woolsey) ローランス (Lawrence) の亦此法に力を盡せるが如き、ゼームス、ケント (James Kent) が「米國法律の解釋」を著して

法學社會に雷名を轟かしたるジ・セフ・ストーリー (Joseph Story) が法學上の智識及著書に於ける、皆然らざるはなし。此他ウ・フスター (Webster) カルブーン (Calhoun) クレイ (Clay) ジョージ・マシー・アダムス (John Quincy Adams) エドワード・エヴレット (Edward Everett) アンダー・サムナー (Sumner) 等の演説著書は政治社會に功益を與へしこと少なからず。日耳曼出生の人フランシス・リーバー (Francis Lieber) の著書、セオドア・ド・ウールセー (Theodore D. Woolsey) の「政治學」亦大に此學の智識を裨益する所あり。

日耳曼の法政學 日耳曼の法學殊に羅馬法の研究はサヴィグニー (Savigny) 千七百七十九年生れ千八百六十年歿す の力に依り新基礎を立てられたり。又ミ・テルマイエル (Mittemaier) 等は日耳曼法學を解釋し頗完全の地に達せり。政治學にてはモール (Mohl) 千七百七十九年生れ千八百七十五年歿す フルンテリイ (Brunschli) 千八百〇八年生れ千八百八十二年歿す スタール (Stahl) 千八百〇二年生れ千八百六十年歿す クナイスト (Gnaist) 千八百十年生れ千八百六十年歿す 等其名聲全世界に高し。

第四節 美術

建築 十九世紀に當りては日耳曼佛蘭西及英吉利に於て、古風の建築復興しミニニヒ

(Munich) の建築、リヴァープール (Liverpool) のセント・ジョージ・ホール (St. George's Hall) の如き其例なり。然れども此風に對して反動起り「ゴシック」風の建築大に流行し、ロンドンの國會議事堂を始とし「ゴシック」風の寺院多く英國に建築せられたり。

彫刻及繪畫 近時彫刻家の最奇巧なるものはシ・ワンターレル (Schwanthaler) 千八百二年生れ千八百四十八年歿す なり。ミニニヒにあるワルハラ (Wallalla) の破風、及バヴリア (Bavaria) にある青銅像は

其彫刻に係る。佛蘭西現時の彫刻は伊太利と徑庭あること無し。英國にてはチ・ントレー (Chantrey) 千七百八十八年生れ千八百四十二年歿す カノーツ (Canova) 及其高弟ジン・ギブソン (John Gibson) 千七百九十一年生れ千八百六十六年歿す 等高位を占む。亞米利加に於ても彫刻の天才を有するもの多く、ハワース (Powers)

クローフォード (Crawford) ストリーワー (Story) ブラウハ (Brown) ワード (Ward) 等其他彫刻界に功益を與へたるもの者少なからず。日耳曼の畫工にてはオーフルベク (Overbeck) 最巧妙にして其風一般に行はれ、コルネリユース (Cornelius) 千七百八十三年生れ千八百六十七年歿す は壁畫法を再興し、ミニニヒ派を作せり。彼の伯林博物館にあるハン人戦争の圖を畫きたるフン・カウルバハ (Von Kaulbach) は此人の門弟なり。ウー・ファン・シドー (W. Von Schadow) はゾ・セルドルフ (Düsseldorf)

派の祖にして、詩人レ・シングの從孫カール・フリードリヒ・レ・シング (Karl Friedrich Lessing) は

シャドーの門弟なりと雖、其伎は隻に師に勝れり。英國に於てはコンステイブル (Constable) 千七百九十六年生れ、頗る意匠を凝して山水を畫き、新に斯道に衝動を與へ、スタンフィールド (Stanfield) 千七百八十八年生れ、は寫實を主として風景の眞を表すを以て名あり。蘇蘭人ウ、ルキー (Wilkie) 千七百八十五年生れ、及米人レスリー (Leslie) 千七百九十四年生れ、はゼンル (Genre) 派中の錚々たる者なり。イーストレーキ (Eastlake) 千七百九十三年生れ、は美術學著者にして又畫家たり。ランドシール (Landseer) 千八百〇二年生れ、は動物畫家として匹敵なく。ウリアム、ハント (William Hunt) 千七百九十年生れ、は水彩畫に巧なり。またラフ、エル (Raphael) を凌駕し、自然の眞相を描くを宣言せるラフ、エル凌駕派にはターナー (Turner)、ハント (Hunt)、ミレース (Millier) の諸工あり。而してラスキン (Ruskin) 類りに之を奨励せり。佛蘭西にてはポール、テラロ、ン (Paul Delacroix) 千七百九十七年生れ、はホーレース、ウルネー (Horace Vernet) 千七百八十九年生れ、の後を承て戰爭畫又は近世歴史畫を畫き、アリー、シ、フル (Ary Scheffer) 千七百九十五年生れ、は荷蘭の産にして基督撫慰の圖及他の聖畫を畫き、閑雅高尚にして能く人を感動せしむ。テラクロア (Delacroix) メーンニエー (Meissonier) シ、ローーム (Gérôme) カバチル (Cabanel) ミ、ロー (Millet) ローサ、ボンノール (Rosa Bonheur) 等の「活佛蘭西畫派」は雄壯の精神に富みたる美術家に

して、動物を畫くに長じ、熟練として完美なるのみならず、筆力活潑にして特殊の氣風を帶べり。此派の山水畫家にはコロ、ド、ビ、ニエー (Daubigny) ルーソー (Roussau) デ、ア (Diaz) の諸名家あり。現世紀繪畫の技にありては伊太利は歐洲中最劣等なる地位に在り。一千八百二十五年の頃に當りトーマス、コール (Thomas Cole) は米國山水畫の一派を創め寓意の畫を畫けり。デ、ーランド (Durand) また山水に巧なり。普通の畫工にはピール (Peale) ウ、ーア (Weir) ハンテ、ハント (Huntington) ペ、ーチ (Page) モース (Morze) インガム (Ingham) の妙手あり。又ギ、フ、ード (Gifford) ケンセ、ト (Kensett) チ、ーチ (Church) ビールスタ、ト (Bierstadt) マ、クエンテ、ー (Mc Intee) の山水畫は近世米國畫中最巧妙にして非凡なるものと稱せらる。

音樂 現世紀音樂に秀つる者は日耳曼なり。シ、ーベルト (Schubert) スポール (Spohr) ウ、ーベ (Weber) マイエル、ゴール (Meyerbeer) 及ワグネル (Wagner) 等の名は全世界に喧しく、メンデル、ソーン (Mendelssohn) 千八百〇九年生れ、及シ、ーマン (Schumann) 千八百十年生れ、の著書あるに至りては實に斯道の極頂點に達したるといふべし。波蘭のシ、ョーパン (Chopin) 千八百十年生れ、(死す) は大琴(ピアノ、フ、ーテ)の新樂を創めたり。此人の父は佛人なり。

第五節 社會制度の進歩

讀者は近世史を検するに當り諸國人民が著しく慈愛の精神に富みたることあるを注意せざる可らず

(一)社會學 社會の弊害及之か救濟法又は社交上の關係より人類を支配する規則等の研究は、近世に至り社會學なる一科を成せり。千八百五十七年フルーハム公(Lord Brougham)が議長となりてロンドンに開きたる會議は社會の改良に熱心なる人士の組成せる者にして之を社會學振興會と名つけたり。此會の研究するところは次の五問題なりき。法津の修正、(此目的を達せむが爲に別にフルーハム公を會長とするところの一會あり)教育、罪惡の防止、公衆の健康、社會の經濟即是なり。又支部を英國の諸都に設けたり。一千八百六十五年北米合衆國に於て之と同一の會起り、一千八百六十二年アラ・セルスに於て之と同一の精神を以て成れる萬國協會の第一次會を開けり。此等諸協會が審査せる所の問題は、其範圍の廣大なるが爲に其目的を不定ならしむるの觀ありしと雖、然れども此運動が社會の進歩を以て特別なる一問題となし、之に對して諸國各派の人士の熟思

を促したるは掩ふべからざる事實なり。

(二)戰爭に因りて起る困苦の減滅、病院 戰爭は現今に至るも尙依然として絶ゆることなしと雖、然れども近世に至りて之によりて生ずる困苦を減殺するの法を開かれたり。攻撃隊が敵地に侵入し、之を奪略するの權利は現世紀にありては稀に實行せらるゝどころなり。近世の戰爭規則に依れば、敵國の兵士に非るよりは之を宥養するを得ず。敵國民の財貨を得んと欲せば相當の代價を酬むざる可らざるなり。然れども將官は時としては軍需品徴收の命令を發するを得べし。ナポレオンは大に此命令を發せしがウ・リントン(W. Rintoul)は之を排斥せり。近世に至りては之を排斥するもの益多し。然れども將官が力の存する限り砲寨を守りて退かざるは罪科とせられざるなり。又疾病及負傷の看護法も大に改正せられ、「アムピ・ランス」法(Ambulance)即戦地に病院を設け、軍兵と進退を共にする便利なる方法は、千七百九十五年ナポレオンの賛同を得て始めて佛國に行はれたり。此「アムピ・ランス」なる語は病傷運搬の用に供する車の名稱にも用ひることあり。此法米國內亂の時に至りて完備し、千八百六十四年同國々會條例を以て之を公示せり。昇床軍隊も亦佛國軍醫の發案に係れり。千八百六十四年ゼ子(Zey)に開きたる歐洲列國開議に於

て傷兵及「アムピ・ランス」の軍吏は俘虜となすを得ざることを議定せり。クリミア戦争の時義勇看護婦長たりし英國の貴女フローレンス・ナイテ・ンゲール (Florence Nightingale) はスクタリ (Scutari) に此種の病院を建設 (千八百五十) してより野戦病院は益完全に赴きたり。最近五十年間病院の建築法、空氣流通の装置、一般取扱法等に關し、熟思改良を施したれば、従前の危険罪惡を排去せること少なからず。

衛生學 衛生學及之の關係せる土木學の興起は現世紀殊に下半年に屬するものとす。排水法は工藝の熟練を以て設計せられたるが、其始の身體の健康を増進するの目的を有せしに非ず。千八百十五年以前英國に於ては小渠に汚水を流出するの禁令を下しが、千八百四十七年の法律に之に反し千八百十五年以前に禁令したる者を却て要求するに至れり、而して此大變化の起りたるは實に千八百三十二年虎列刺病の流行ありしに由る。此流行ありしより世人は其病源を研究査察するに至り、貧民の状態又は之に關する諸問題は此病理研究に新刺衝を與へたり。千八百四十二年より千八百四十八年に至る英國の諸報告は英國及他の諸國に於て衛生學の進歩を促かすの大勢力ありしこと疑ふべからざるなり。

(三) 教育 教育制度は現世紀に當りて各國に普及したり。北米合衆國の一地方には良好なる小學制度あり。又日耳曼殊に普魯西に在りては初等教育を兒童に施すが爲に完備

なる制度を設け、佛蘭西に於ては法律を以て稍大なる郡區には小學校を設けざる可らざる事を規定したるを以て、無學文盲の徒頓に減少し、一千八百八十一年に至り公立小學校の教授は各自の自由に放任せり。英國に於ては初等教育制度を改正し、千八百七十六年の教育令には五歳より十四歳迄の兒童は悉く小學に入らざる可らずとなせり。英國其他諸國に於ては法律を發して多少學校教育を受ざる童兒を備役することを禁したり。伊太利新王國の制に依れば四千人の住民を有する郡區は必ず一の小學校を設置せざる可らずと規定し、其後又法律を以て土地の事情の許す限り強制主義を執るべき事となし、之を以て全國不學の徒著しく減少せり。他の歐洲列國も初等教育強制主義を採り、匈牙利の如きは兒童八歳より十二歳に至るまで學校に出席するは兒童の義務なりとせり。近來諸國政府が普通教育に對し斯の如き方針を執る所以は、一は各人の愚昧及其國家に對する忌むべき結果を防ぐの必要あるに由れること疑ふべからず。然れども此強制主義あると共に慈善の精神發動し、盲、啞、聾、弱の爲に別に學校を設くるもの續々増加するに至れり。

(四) 刑法の改正 仁慈情念の發達は遂に刑法の改正を來たせり。英國に於ては前世紀

の終に當り二百二十三人を死刑に處したるが、其犯罪の主なるものはウ・スト、ミンスター橋を毀損したること、嫩樹を伐採したること、價五、シルリングの物品を窃取したること等なり。此殘酷なる法律を改正せんが爲に熱心反對するもの少なからず、サミ、エル、ロミリー (Samuel Romilly 千七百五十七年生れ、千八百十八年歿す) は以上の如き嚴刑を廢止せんことを主唱し其議漸くにして下院を通過したれども、上院は之を廢棄せり。此改正に有力なる反對をなししものは大法官エルドン (Eldon) なり。大審院長エレンボロー公 (Lord Ellenborough) も成文律の改正を罵て空想と近世哲學の結果なりといひ、若し此修正にして成立せば罪人は一層増加すべしと豫言せり。ゼームス、マキントッシュ (James Mackintosh) はロミリーの意を繼ぎ百方奔走して終に修正を成就せり。千八百三十七年に至りては死罪者僅に七人となれり。犯罪の減少せる以て知るべし。又英國に於ては千八百十六年警察制度を改良せり。是より先、警察官が犯罪者を得て其罪證を發く時は、政府より四十磅の賞金を得たりしが爲に却て罪人を増加したればなり。

(五) 監獄制の改正 近世仁慈的事業の特異する點は監獄制の改正なり。ホーワード (Howard) が此事に着手したる時 (千七百七十三年にあり) は英國の監獄は男女混居し、醜穢にして惡疾蔓

延し尙且憎むべき罪惡の養成所たりしが、後久しからずして嚴正なる改革を施し、また淫行と罪惡の學校たらしめざるに至れり。後又更に改良するの目的を以て懲治監を設立せんと議あり。ゼレニー、ベンサム (Jeremy Bentham) 類りに之に賛同せり。尋て「フレンド」協會 (Society of Friend) の會員は續々監獄改良の法を講じ、會員エリサベス、ガーチー、フライ (Elizabeth Gurney Fry) 夫人 (千七百八十年生れ、千八百四十五年歿す) の如きは思慮深密にして慈愛の精神に富み、嘗て一身の感化力を以てノーゲート (Newgate) 監獄に撃かるゝ女囚の性行を改悛せしめ能く尋常人の爲に能はざる事をなせり。フライ夫人の此改正は延ひて諸國に及び夫人は獨り英國に止まらず、佛蘭西、白耳義、荷蘭等の諸國を歴遊し又は通信に由りて其事業を露西亞伊太利の兩國に擴張せり。而して歐洲諸國皆之に由て良好なる結果を獲たり。又英國監獄改良協會は獄舎の構造及内部の生活に關して大改良を施せり。米國の此改正に關する感化は實に著し。現今監獄の構造と勞役との目的に關する二大事件は犯罪者の改悛と他人の犯罪を防ぐとに在り。從來は年少犯罪者といへども成年にして惡行を數々せしものと同居せしめ、益邪惡に陥らしめしが、近年に至りて年少の拘留、改悛、訓練等に注意し、特別の室を設くることとなせり。英國が囚人を澳斯太刺利亞

に移すは千七百八十七年に始まり、然るに囚徒の數多きを加るに隨ひ殖民地の監視者は殘虐なる處置をなせしむ故に重罪犯者を集治する殖民地には奸悪非行極りなき囚群を生ぜり、是を以て植民地の人民は相謀て流刑に反對し、本國に於ても之に同意するものありて、千八百四十二年に至りてニュー・サウス・ウールズ (New South Wales) に犯人を流送することを停止せり、後ヴァン・デーマンズランド (Van Dieman's Land) も亦假令免後の囚人たりとも、此の如く壓制を以て移住せしむることを拒めり、是を以て英國政府は他の處罰法に依らざる可らざるの場合となり、犯罪の輕重に依りて禁獄の期限を定むるに至れり。

萬國史大尾

上世史 明治廿七年三月廿九日印刷
中世史 同 廿七年四月一日發行
近世史 明治廿七年九月二十日印刷
同 廿七年九月廿八日發行

萬國史合本
定價金壹圓

編者 今井恒郎

發行者 吉川半七

印刷者 野村宗十郎

關大販賣所 松村九兵衛



印刷所 株式會社東京築地活版製造所
東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

師範學校 東洋史教科用及參考用書
中校學

市村環次郎著

支那全史

遊刊

市村環次郎 合著
澁川龜太郎

支那史

洋裝本
合本全二冊
分本全六冊

令本正阿金堂圖書院編 分本自第一至卷四
各一册定價金貳拾五錢 卷五至卷六各一册定價金

支那は東洋の雄國なり其表は邦と稱するは一帯一歩にあらや且其文化は東洋の巨表となり若多ければ確し東洋に居する者は其歴史をばききて清華學堂を知らざる可からずされと説を聞するもこ 四千餘年に過ぎき地の間する所立國亞細の年によきたり故に史記の編ありと雖も 清國に夫し初學の支那の編を究かれず者其に無する所あり曾て本書を著はし政治上の精華を羅となし制度學術教育行政民生風俗の沿革を詳となし更に地理人物言語の考證も多し地圖を加へたれば 歴史の支那歴史とは大に其精華を具す且其文章平易にして 叙事簡明なれば初學者の益も遠く 通譯の間に一六國の精華 總論を著るる常に指すを得べし

市村環次郎著

支那史要

和裝美本
全二冊

上巻 下巻 各定價金參拾五錢 宛

支那史は政治文物の變遷を類別に記述したれど本書は専ら政治上の沿革を主とし制度文學風俗の大勢に關係ある者を簡叙し前後の連帶事實の取捨には最意を注きたるが故に一國一朝の興亡盛衰する所は制度文物の隆替關係する所はは論なし凡て事の原委たり結果たる者一頁餘論の下にあり加ふるに事實の精確にして論議も正當なるは既に言及あり 文章の平易 叙事の簡明も 近世史の許せる所なり「日本人」に曰く市村君の支那歴史に精通せるは固ふ説もなし 清華支那史を著す能する所業を得凡る所凡に精々支那史學に一頭地を出したりしなり 今又此書を著して初學者に便す則ち著者の自由するが如く政治上の變遷を主とし 論議の意見を其前後の關係に用ゆる者にして大綱體なり 支も亦簡明なりと「朝報新聞」に曰く 著者固執專に通ず 清華清國の地を歴遊し 親しく其地を實に観察を致したり 故本書簡明にして支那歴史の大綱を知るを得べし 著者に著せる支那歴史一覽表及び支那歴史參考表 其文章平易 叙事簡明の如きも 著者めて有疑の者なりと 其他の編輯者則ち評語多しこれに概しければ

市村瓊次郎著

支那史要附圖

全二冊

上巻下巻 各定價金銀五錢宛

歴史を修むる者の地圖に類する可らざるは大陸に身を投ずる者の礎石を築するに如し然るに古來地圖に乏しとして歴史を修むるに於て其喪亡盛衰の何の地に起りしやを知らざる者多し是れ一は前代地圖の乏るべき者なきに深す世に李氏歷代輿地圖及び清土歷代輿地圖の類ありと雖も本は歴史地圖として至れる者にあらず要者從て茲に支那史要の附圖を著す地圖にして精確なり統の周俟の封建の歴史歷代群臣對策の形勢漢唐元清の境域擴張の標榜の如きは歴朝として相傳を相傳し凡所繪圖皆歴史と相傳つべき美談の者たり蓋現今世に存在せる前代地圖は此書の右に出づる者なしと云ふも不可なきなり江朝の支那歴史を撰く者此圖を座右に備へなほ何ぞ會然編者の遺石を得たるか如きのみならず

符野良知著

支那教學史略

和裝美本 全二冊 金七拾五錢

此書支那上古より近代清朝に至るまで歷代學問の沿革變遷を叙述し儒佛道教諸子百家の概評及び各代學政學風の盛衰學者の履歷其他西域諸教支那に入ら來由等叙載せざるなし之に加ふるに古今學問得失紛紜の評論を以て予備に附帶の小説と雖も漢土教學の要領を約載し千萬卷の文籍を一掃して簡潔地圖の如く胸臆に遊め易からしむ故に一たび之を讀覽せば簡易淺顯の類を假て支那學問の概観を得るに於ける餘思ひ余に過ぐるものあらん

林 泰輔著

朝鮮史

太古史 上古史 中古史

和裝美本 全五冊 定價金壹圓貳拾錢

朝鮮歴史の今日に必要なるものは僅に漢字を讀むるなり其國の政に於ける儀に一毫諒解を隨て古代よりの關係尤深きのみならず日下東洋問題の益切迫して内外人の目を朝鮮に注くと日一日より甚しき時にありては歴史家政治家は自らに及ばず天下の人士皆其沿革の大勢を知らざる可らず然るに從來朝鮮の歴史は寥寥として觀るに足る者なく又一人の編纂に從事する者なし先生深く之を憂ひ多年研究に力を盡され茲に始めて新編を成したる者なれば年代の分別事實の詳叙等盡く先生の創見に出でたるよな上朝鮮歴史の體を備へたるもの實に新編を以て嗚矣とす

朝鮮史 近世史 近刊
朝鮮史 近刊
印度史 近刊

發行所 吉川半七 (電話千九十五番)

東京市京橋區南傳馬町一丁目

209 萬 243

- 1. 本を大切にしよう
- 2. 返す日を忘れないように
- 3. また貸しはしないように

209 243
1.43
1

滋賀縣立彦根東高等學校

11

